
本庄市

今井川越田遺跡 III

本庄今井工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告

—III—

〈第1分冊〉

1997

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



今井川越田遺跡全景



河川跡全景



第3号溝跡遺物出土状況



第3号溝跡土器集中区



第3号溝跡出土須恵器



河川跡祭祀場出土土器

序

埼玉県は、「豊かな彩の国づくり」計画のもと、県土の均衡ある発展を目的として、地域産業の振興を図っております。特に、首都圏から50km圏以遠の県北地域では、豊かな自然環境との調和を図りながら先端技術産業の導入を軸とした、テクノグリーン構想を推進しております。

本庄今井工業団地の造成は、児玉テクノグリーンエリアの拠点として計画されたもので、産業の発展と雇用機会の拡大を図り、創造的で活気あふれた地域社会づくりをめざす事業であります。

本庄今井工業団地の造成地内には5か所の埋蔵文化財包蔵地が所在しておりました。その取扱いにつきましては、関係諸機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。当事業団では、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、埼玉県企業局の委託を受け、発掘調査を実施いたしました。

本庄市域は児玉郡の中心地であり、古くから中山道の宿場町として栄え、明治以降は繭の一大集散地として発展を遂げてきました。それと同時に、埼玉県でも埋蔵文化財が多い地域としても知られています。

今回報告いたします今井川越田遺跡では、300軒を超える竪穴住居跡が調査され、古墳時代後期の大規模な集落遺跡であることが判明いたしました。県内最古

の道路跡や、川辺の祭祀跡など、貴重な遺構が発見されました。さらに、当時の人々の生活をほうふとさせる、土器などの数々の道具類もたくさん出土しました。県北地域を代表する古墳時代の集落のひとつとして、注目される遺跡と申せましょう。

整理報告事業は、平成7年度から実施されました。その成果は過去2冊にわたって刊行されており、今回がその最後の報告となります。

本書が埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及や教育機関の参考資料として、広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、発掘調査から報告書の作成に至るまで、多大な御指導・御協力をいただきました埼玉県企業局土地開発第2課、同北部土地開発事務所をはじめ、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、本庄市教育委員会、ならびに地元関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成9年9月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 荒 井 桂

例 言

1. 本書は、埼玉県本庄市に所在する今井川越田遺跡の発掘調査報告書の第3分冊である。
2. 遺跡の略号と代表地番および発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

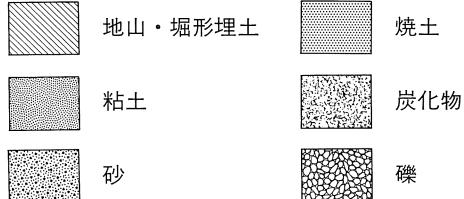
今井川越田遺跡 (IMIKWGKD)
本庄市大字今井字川越田54番地1他
平成5年9月2日付け委保第5の935号
平成5年9月3日付け委保第5の952号
平成6年5月11日付け教文第2-25号
3. 発掘調査は、今井工業団地造成事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県企業局の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第1章の組織により実施した。本事業のうち発掘調査については、平成5年度は磯崎一、石坂俊郎、山本 靖、伴瀬宗一、岩田明広、渡辺清志が担当し、平成6年度は元井 茂(現 白岡町立南中学校)、井上尚明、高崎光司(現 埼玉県立越谷高等学校)、瀧瀬芳之、伴瀬宗一、岩田明広が担当し、平成5年4月1日から平成7年3月31日まで実施した。整理報告書作成事業は瀧瀬が担当し、平成8年4月1日から平成9年9月30日まで実施した。

5. 遺跡の基準点測量、航空写真は中央航業(株)に、遺物の巻頭カラー写真は小川忠博氏に、樹種同定はパリノ・サーヴェイ(株)に各々委託した。
6. 発掘調査における写真撮影は、元井、井上、磯崎、高崎、石坂、瀧瀬、山本、伴瀬、岩田、渡辺が行い、遺物の写真撮影は大屋道則、野中 仁、瀧瀬が行った。
7. 出土品の整理および図版の作成は、瀧瀬が行い、金子直行、黒坂禎二、小林あいの協力を得た。本書の執筆はI-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、VIII-1の一部を金子、IX-1を磯崎、IX-2を井上が行い、それ以外は瀧瀬が行った。また、附編2は埼玉県立自然史博物館の榆井 尊氏によるものである。
8. 本書の編集は、瀧瀬があたった。
9. 本書にかかる資料は平成9年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。
10. 本書の作成にあたり、下記の方々から御教示・御協力を賜った。記して謝意を表します。(敬称略)
長谷川勇 増田一裕 太田博之 鈴木徳雄 恋河内昭彦 太田和夫 榆井 尊 平岩俊哉 井上巖

凡 例

本書における挿図指示は次のとおりである。

1. X、Yによる座標表示は国家標準直角座標第IX系に基づく座標値を示し、方位は全て座標北を表す。
2. グリッドは大グリッド（100×100m方眼）中に小グリッド（5×5 m方眼）を設定した。グリッドの名称は、方眼の北西隅の杭番号である。
3. 遺構の表記記号は次のとおりである。
SJ…住居跡 SK…土壌 SD…溝跡
SB…掘立柱建物跡 SX…円形周溝状遺構
4. 遺構挿図の縮尺は次のとおりである。例外的なものについてはスケールで示した。
遺構全測図 1 / 1,600
住居跡・掘立柱建物跡・土壌 1 / 60
カマド 1 / 30 溝跡 1 / 400 (断面図 1 / 60)
5. 遺構図中のスクリーントーンの指示は以下のとおりである。



6. 遺物挿図の縮尺は次のとおりである。例外的なものはスケールで示した。
土器 1 / 4 土器拓影図 1 / 4
土製品・金属製品 1 / 2 石製品 1 / 2、 1 / 4
木製品 1 / 8 繩文・弥生土器拓影図 1 / 3
石器 1 / 3、 2 / 3
7. 遺物観察表の計測値は、()内は推定値、単位はcmである。

8. 遺物観察表の色調は新版標準土色帳に準じて細別したが、厳密ではなく概ねである。
A…10R 赤、暗赤、赤橙
B…2.5YR 橙、明赤褐、赤褐、赤褐と 5YR 赤褐、橙、明赤褐
C…7.5YR 黄橙、橙、褐、明褐、浅黄橙と 10YR 黄橙、明黄褐、黄褐
D…2.5Y 黄
E…2.5Y と 5Y 淡黄、浅黄、暗灰黄、黄灰
F…5YR と 7.5YR 黒褐色、黒、明褐灰、灰褐
G…5BG と 10BG 明青灰、青灰
H…N 灰白、灰、暗灰
I…7.5Y 灰白、灰
J…5Y 灰白、灰と 2.5Y 灰白
K…5P と 5RP 明紫灰、紫灰
9. 遺物観察表の胎土は、概ね最も多量に含まれる含有物とその粒度の組み合わせで表記した。含有物の種類は次のとおりである。
A…赤色粒状 B…白色乃至無色板状
C…黒色板状 D…白色板状 E…片岩
F…黒色粒状 G…金色板状 H…白色針状
含有物の粒度は直径 2 mm を粗とし、2 mm 以下を細、2 mm 以上を礫とする。組み合わせは次のとおりである。
1…細 2…細+粗 3…粗 4…粗+礫
5…細+粗+礫
10. 遺物観察表の焼成は次のとおりである。
A…良好 B…不良

目 次

図録	9. 円形周溝状遺構	227
序	10. 土壙	228
例言	11. 土器集中区	231
凡例	12. ピット	233
目次	V. 平安時代以降の遺構と遺物	236
遺構別目次	1. 壺穴住居跡	236
	2. 掘立柱建物跡	243
	3. 土壙	246
	4. 井戸跡	246
〈第1分冊〉	〈第2分冊〉	
I. 発掘調査の概要	VII. 溝跡と出土遺物	249
1. 調査に至るまでの経過	VIII. 河川跡と出土遺物	297
2. 発掘調査・報告書作成の経過	VIII. その他の出土遺物	321
3. 発掘調査、整理・報告書刊行の組織	1. 縄文・弥生時代の遺物	321
II. 遺跡の立地と環境	2. グリッド出土・表採遺物	324
III. 遺跡の概要	3. 補遺	326
IV. 古墳時代の遺構と遺物	IX. 調査の成果	327
1. 第18住居跡群	1. 古墳時代の土器編年と集落について	327
2. 第19住居跡群	2. 道路跡について	349
3. 第20住居跡群	3. 河川跡について	355
4. 第21住居跡群	附編	369
5. 第22住居跡群	1. 今井川越田遺跡における古植生と植物利用	369
6. 第23住居跡群	2. 今井川越田遺跡の花粉化石群	377
7. 壺穴状遺構		
8. 道路状遺構		

挿図目次

〈第1分冊〉

第 1 図	埼玉県の地形	5
第 2 図	周辺の遺跡	7・8
第 3 図	今井川越田遺跡全測図	11
第 4 図	住居跡群分割図	12
第 5 図	第18住居跡群	14
第 6 図	第145号住居跡	15
第 7 図	第145号住居跡カマド・出土遺物	16
第 8 図	第146号住居跡	17
第 9 図	第146号住居跡カマド・出土遺物	18
第 10 図	第147号住居跡・出土遺物	19
第 11 図	第148号住居跡・カマド	20
第 12 図	第148号住居跡出土遺物	21
第 13 図	第149号住居跡	22
第 14 図	第149号住居跡カマド	23
第 15 図	第149号住居跡出土遺物	24
第 16 図	第250号住居跡・カマド	25
第 17 図	第250号住居跡出土遺物	26
第 18 図	第252号住居跡	26
第 19 図	第252号住居跡カマド・出土遺物	27
第 20 図	第253号住居跡・カマド	29
第 21 図	第253号住居跡出土遺物	30
第 22 図	第266号住居跡・カマド	31
第 23 図	第266号住居跡出土遺物	32
第 24 図	第270号住居跡・カマド	34
第 25 図	第270号住居跡出土遺物	35
第 26 図	第271号住居跡	36
第 27 図	第271号住居跡カマド・出土遺物	37
第 28 図	第272号住居跡・カマド	38
第 29 図	第273号住居跡・カマド・出土遺物	39
第 30 図	第275号住居跡	40
第 31 図	第275号住居跡カマド	41
第 32 図	第275号住居跡出土遺物	42
第 33 図	第278号住居跡	43
第 34 図	第279号住居跡・カマド	44

第 35 図	第279号住居跡出土遺物	45
第 36 図	第281号住居跡・カマド	46
第 37 図	第283号住居跡	47
第 38 図	第283号住居跡カマド	48
第 39 図	第283号住居跡出土遺物	49
第 40 図	第19住居跡群	50
第 41 図	第137号住居跡	51
第 42 図	第137号住居跡カマド・出土遺物	52
第 43 図	第139号住居跡	53
第 44 図	第140号住居跡	54
第 45 図	第140号住居跡カマド	55
第 46 図	第140号住居跡出土遺物(1)	56
第 47 図	第140号住居跡出土遺物(2)	57
第 48 図	第141号住居跡	58
第 49 図	第141号住居跡カマド	59
第 50 図	第141号住居跡出土遺物	60
第 51 図	第142号住居跡出土遺物	61
第 52 図	第142号住居跡・カマド	62
第 53 図	第143号住居跡	63
第 54 図	第143号住居跡カマド	64
第 55 図	第143号住居跡出土遺物(1)	65
第 56 図	第143号住居跡出土遺物(2)	66
第 57 図	第144号住居跡	67
第 58 図	第144号住居跡カマド・出土遺物	68
第 59 図	第150号住居跡・カマド	69
第 60 図	第150号住居跡出土遺物	70
第 61 図	第254号住居跡	71
第 62 図	第254号住居跡カマド・出土遺物	72
第 63 図	第255号住居跡	73
第 64 図	第255号住居跡カマド	74
第 65 図	第255号住居跡出土遺物	75
第 66 図	第256号住居跡	76
第 67 図	第256号住居跡カマド	77
第 68 図	第256号住居跡出土遺物	78
第 69 図	第257号住居跡(1)	79

第 70 図 第257号住居跡(2)	80	第107図 第124号住居跡	119
第 71 図 第257号住居跡カマド	81	第108図 第124号住居跡カマド	120
第 72 図 第257号住居跡出土遺物(1)	82	第109図 第124号住居跡出土遺物	121
第 73 図 第257号住居跡出土遺物(2)	83	第110図 第125号住居跡・出土遺物	122
第 74 図 第258号住居跡・出土遺物	84	第111図 第126号住居跡	123
第 75 図 第263号住居跡・出土遺物	85	第112図 第126号住居跡カマド・出土遺物	124
第 76 図 第267号住居跡	86	第113図 第127号住居跡・出土遺物	125
第 77 図 第267号住居跡カマド・出土遺物	87	第114図 第128号住居跡・カマド	127
第 78 図 第268号住居跡	89	第115図 第128号住居跡出土遺物	128
第 79 図 第268号住居跡カマド・出土遺物	90	第116図 第129号住居跡・カマド・出土遺物	129
第 80 図 第269号住居跡	91	第117図 第130号住居跡・カマド	130
第 81 図 第269号住居跡出土遺物	92	第118図 第130号住居跡出土遺物	131
第 82 図 第277号住居跡・出土遺物	93	第119図 第131号住居跡・出土遺物	132
第 83 図 第280号住居跡	94	第120図 第132号住居跡・カマド	133
第 84 図 第280号住居跡出土遺物(1)	95	第121図 第132号住居跡出土遺物	134
第 85 図 第280号住居跡出土遺物(2)	96	第122図 第133号住居跡・出土遺物	135
第 86 図 第285号住居跡・カマド・出土遺物	97	第123図 第134号住居跡	136
第 87 図 第286号住居跡	98	第124図 第134号住居跡カマド	137
第 88 図 第286号住居跡カマド	99	第125図 第134号住居跡出土遺物(1)	138
第 89 図 第286号住居跡出土遺物	100	第126図 第134号住居跡出土遺物(2)	139
第 90 図 第287号住居跡・カマド	101	第127図 第135号住居跡・カマド・出土遺物	140
第 91 図 第287号住居跡出土遺物	102	第128図 第136号住居跡	141
第 92 図 第288号住居跡・カマド	103	第129図 第138号住居跡・カマド・出土遺物	142
第 93 図 第288号住居跡出土遺物	104	第130図 第248号住居跡	143
第 94 図 第295号住居跡・カマド・出土遺物	105	第131図 第248号住居跡カマド	144
第 95 図 第299号住居跡	106	第132図 第248号住居跡出土遺物	145
第 96 図 第299号住居跡カマド	107	第133図 第249号住居跡・出土遺物	147
第 97 図 第299号住居跡出土遺物	108	第134図 第251号住居跡・出土遺物	148
第 98 図 第323号住居跡・出土遺物	110	第135図 第259号住居跡・出土遺物	149
第 99 図 第20住居跡群	111	第136図 第260号住居跡・出土遺物	151
第100図 第116号住居跡・カマド	112	第137図 第261号住居跡・カマド・出土遺物	152
第101図 第116号住居跡出土遺物	113	第138図 第262号住居跡	153
第102図 第119号住居跡	114	第139図 第262号住居跡出土遺物	154
第103図 第122号住居跡	115	第140図 第264号住居跡・出土遺物	155
第104図 第122号住居跡出土遺物	116	第141図 第265号住居跡・出土遺物	156
第105図 第123号住居跡	116	第142図 第274号住居跡・出土遺物	157
第106図 第123号住居跡出土遺物	117	第143図 第276号住居跡・出土遺物	158

第144図	第21住居跡群	159	第181図	第302号住居跡カマド・出土遺物	196
第145図	第101号住居跡・カマド	160	第182図	第303号住居跡	197
第146図	第101号住居跡出土遺物	161	第183図	第303号住居跡カマド・出土遺物	198
第147図	第102号住居跡(1)	162	第184図	第304号住居跡・カマド	199
第148図	第102号住居跡(2)・出土遺物	163	第185図	第305号住居跡・出土遺物	200
第149図	第103号住居跡	164	第186図	第306号住居跡・カマド・出土遺物	201
第150図	第103号住居跡カマド・出土遺物	165	第187図	第307号住居跡・カマド	202
第151図	第104号住居跡・出土遺物	166	第188図	第308号住居跡	203
第152図	第105号住居跡	167	第189図	第329号住居跡・カマド	204
第153図	第106号住居跡	167	第190図	第329号住居跡出土遺物	205
第154図	第106号住居跡カマド・出土遺物	168	第191図	第23住居跡群	206
第155図	第107号住居跡(1)	169	第192図	第309号住居跡・カマド	207
第156図	第107号住居跡(2)・カマド	170	第193図	第309号住居跡出土遺物	208
第157図	第107号住居跡出土遺物	171	第194図	第310号住居跡・カマド	209
第158図	第108号住居跡・カマド	172	第195図	第310号住居跡出土遺物	210
第159図	第108号住居跡出土遺物	173	第196図	第311号住居跡	210
第160図	第109号住居跡(1)	174	第197図	第311号住居跡カマド・出土遺物	211
第161図	第109号住居跡(2)・カマド	175	第198図	第312号住居跡	212
第162図	第109号住居跡遺物出土状況(1)	176	第199図	第312号住居跡カマド・出土遺物	213
第163図	第109号住居跡遺物出土状況(2)	177	第200図	第313号住居跡・出土遺物	214
第164図	第109号住居跡出土遺物(1)	178	第201図	第314号住居跡	215
第165図	第109号住居跡出土遺物(2)	179	第202図	第315号住居跡・カマド・出土遺物	216
第166図	第110号住居跡(1)・出土遺物	181	第203図	第316号住居跡	217
第167図	第110号住居跡(2)	182	第204図	第316号住居跡出土遺物	218
第168図	第111号住居跡(1)	183	第205図	第317号住居跡・カマド・出土遺物	219
第169図	第111号住居跡(2)	184	第206図	第318号住居跡	220
第170図	第111号住居跡出土遺物	185	第207図	第319号住居跡・カマド・出土遺物	221
第171図	第114号住居跡・出土遺物	186	第208図	第320・321号住居跡・出土遺物	222
第172図	第115号住居跡・出土遺物	187	第209図	第1号竪穴状遺構	223
第173図	第117号住居跡・出土遺物	188	第210図	第1号竪穴状遺構出土遺物	224
第174図	第120号住居跡	189	第211図	第1号道路跡	225
第175図	第120号住居跡出土遺物	190	第212図	第3・4号円形周溝状遺構	226
第176図	第121号住居跡・出土遺物	191	第213図	第5号円形周溝状遺構	227
第177図	第22住居跡群	192	第214図	土壙群(第5~11号土壙)	228
第178図	第300号住居跡・カマド・出土遺物	193	第215図	第4号土壙~第14号土壙	229
第179図	第301号住居跡・カマド・出土遺物	194	第216図	第4・8号土壙出土遺物	230
第180図	第302号住居跡	195	第217図	土器集中区出土遺物(1)	232

第218図 土器集中区出土遺物(2)	233	第253図 第3号溝跡出土遺物(1)	278
第219図 ピット群	234	第254図 第3号溝跡出土遺物(2)	279
第220図 ピット・出土遺物	235	第255図 第3号溝跡出土遺物(3)	280
第221図 第112号住居跡・カマド	237	第256図 第3号溝跡出土遺物(4)	281
第222図 第112号住居跡出土遺物	238	第257図 第3号溝跡出土遺物(5)	282
第223図 第113号住居跡	239	第258図 第3号溝跡出土遺物(6)	283
第224図 第113号住居跡カマド・出土遺物	240	第259図 第3号溝跡出土遺物(7)	284
第225図 第118号住居跡・カマド・出土遺物	241	第260図 第3号溝跡土器集中区(1)	288
第226図 第282号住居跡・カマド・出土遺物	242	第261図 第3号溝跡土器集中区(2)	289
第227図 第11号掘立柱建物跡(1)	244	第262図 第3号溝跡土器集中区遺物出土状況	290
第228図 第11号掘立柱建物跡(2)	245	第263図 第3号溝跡土器集中区出土遺物(1)	291
第229図 第12号掘立柱建物跡	246	第264図 第3号溝跡土器集中区出土遺物(2)	292
第230図 第15・16号掘立柱建物跡	247	第265図 第3号溝跡土器集中区出土遺物(3)	293
第231図 第1号井戸跡・出土遺物	248	第266図 第3号溝跡土器集中区出土遺物(4)	294
<第2分冊>			
第232図 溝跡(1)	251	第267図 河川跡(1)	298
第233図 溝跡(2)	252	第268図 河川跡(2)	299
第234図 溝跡(3)	253	第269図 河川跡遺物出土状況(1)	300
第235図 第8号溝跡	254	第270図 河川跡遺物出土状況(2)	301
第236図 溝跡(4)	255	第271図 河川跡出土遺物(1)	303
第237図 溝跡(5)	256	第272図 河川跡出土遺物(2)	304
第238図 第20号溝跡	257	第273図 河川跡出土遺物(3)	305
第239図 溝跡(6)	258	第274図 河川跡出土遺物(4)	306
第240図 溝跡(7)	259	第275図 河川跡出土遺物(5)	306
第241図 溝跡(8)	260	第276図 河川跡出土遺物(6)	307
第242図 第1・2号溝跡出土遺物	262	第277図 河川跡出土遺物(7)	308
第243図 第7号溝跡出土遺物(1)	263	第278図 河川跡出土遺物(8)	309
第244図 第7号溝跡出土遺物(2)	264	第279図 河川跡出土遺物(9)	310
第245図 第8・9・10号溝跡出土遺物	265	第280図 河川跡出土遺物(10)	311
第246図 第12・13・15号溝跡出土遺物	266	第281図 河川跡出土遺物(11)	312
第247図 第16号溝跡出土遺物(1)	267	第282図 河川跡出土遺物(12)	313
第248図 第16号溝跡出土遺物(2)	268	第283図 河川跡出土遺物(13)	317
第249図 第19・20・21・29・30・33号溝跡出土遺物	269	第284図 河川跡出土遺物(14)	318
第250図 第34・35・36号溝跡出土遺物	270	第285図 河川跡出土遺物(15)	319
第251図 第3号溝跡(1)	276	第286図 河川跡出土遺物(16)	320
第252図 第3号溝跡(2)	277	第287図 繩文・弥生時代の遺物	322
		第288図 繩文時代の石器	323
		第289図 グリッド・表採遺物	325

第290図 第166・168・169・170・172号住居跡, 第13号掘立柱建物跡出土遺物	326	第303図 向谷遺跡の道路遺構と出土遺物	352
第291図 古墳時代土器変遷図(1)	330	第304図 赤浜天神沢遺跡の道路遺構	352
第292図 古墳時代土器変遷図(2)	331	第305図 樋詰遺跡の階段状遺構と出土遺物	353
第293図 I期の遺構	338	第306図 堀向・藤塚遺跡の河川跡	356
第294図 II期の遺構	339	第307図 川越田遺跡の河川跡	357
第295図 III期の遺構	340	第308図 河川跡祭祀場出土遺物	359
第296図 IV期の遺構	341	第309図 城北遺跡第5号祭祀跡	361
第297図 V期の遺構	342	第310図 神明原・元宮川遺跡 水上7区 SX801	362
第298図 VI期の遺構	343	第311図 具同中山遺跡群 SF6	363
第299図 VII期の遺構	344	附編2 図1 今井川越田遺跡の花粉ダイアグラム (木本)	380
第300図 VIII期の遺構	345	図2 今井川越田遺跡の花粉ダイアグラム (草本)	381
第301図 道路跡の位置	349		
第302図 八日市遺跡(左)と新山遺跡の道路遺構	351		

表目次

第1表 溝跡番号新旧対照表	249	表2 種実・葉の同定結果	374
第2表 古墳時代土器編年表	335	附編2 表1 今井川越田遺跡から産出した花粉化石 の一覧表	379
附編1 表1 樹種同定結果	371・372		

図版目次

- | | |
|------------------|-------------------|
| 図版 1 第101号住居跡 | 図版13 第150号住居跡 |
| 第102号住居跡 | 第248号住居跡 |
| 第103号住居跡 | 第248号住居跡カマド |
| 図版 2 第104号住居跡 | 図版14 第248号住居跡貯蔵穴 |
| 第106号住居跡 | 第249号住居跡 |
| 第107号住居跡 | 第250号住居跡 |
| 図版 3 第109号住居跡 | 図版15 第252号住居跡 |
| 第109号住居跡カマド | 第253号住居跡 |
| 図版 4 第110号住居跡 | 図版16 第254号住居跡 |
| 第111号住居跡 | 第255号住居跡 |
| 第111号住居跡貯蔵穴 | 第255号住居跡カマド |
| 図版 5 第112号住居跡 | 図版17 第256号住居跡 |
| 第114号住居跡 | 第257号住居跡 |
| 第116号住居跡 | 第257号住居跡遺物出土状況 |
| 図版 6 第122号住居跡 | 図版18 第257号住居跡カマド |
| 第124号住居跡 | 第261号住居跡 |
| 第126号住居跡 | 第266号住居跡 |
| 図版 7 第128号住居跡 | 図版19 第267号住居跡 |
| 第132号住居跡 | 第268号住居跡 |
| 第134号住居跡 | 第269号住居跡 |
| 図版 8 第134号住居跡カマド | 図版20 第270・275号住居跡 |
| 第137号住居跡 | 第271号住居跡 |
| 第140号住居跡 | 第272号住居跡 |
| 図版 9 第140号住居跡カマド | 図版21 第273号住居跡 |
| 第141号住居跡 | 第277号住居跡 |
| 第141号住居跡カマド | 第279号住居跡 |
| 図版10 第141号住居跡貯蔵穴 | 図版22 第279号住居跡カマド |
| 第142号住居跡 | 第280号住居跡 |
| 第143号住居跡 | 第281号住居跡 |
| 図版11 第144号住居跡 | 図版23 第282号住居跡 |
| 第145号住居跡 | 第283号住居跡 |
| 第146号住居跡 | 第283号住居跡カマド |
| 図版12 第147号住居跡 | 図版24 第285号住居跡 |
| 第148号住居跡 | 第286号住居跡 |
| 第149号住居跡 | |

第286号住居跡カマド	土師器環
図版25 第287号住居跡	(第101・106・109号住居跡)
第288号住居跡	図版38 土師器環
第295号住居跡	(第109・111・113・116号住居跡)
図版26 第300号住居跡	図版39 土師器環
第301号住居跡	(第121・123・126・128号住居跡)
第302号住居跡	図版40 土師器環
図版27 第303号住居跡	(第130・131・132・133・134号住居跡)
第304号住居跡	図版41 土師器環
第305号住居跡	(第134・135・140・141号住居跡)
図版28 第307号住居跡	図版42 土師器環
第308号住居跡	(第141・142・143号住居跡)
第309号住居跡	図版43 土師器環
図版29 第310号住居跡	(第148・149・248・249号住居跡)
第311・312号住居跡	図版44 土師器環
第312号住居跡カマド	(第252・253・255号住居跡)
図版30 第320号住居跡	図版45 土師器環
第329号住居跡	(第255・256号住居跡)
第12号掘立柱建物跡	図版46 土師器環
図版31 第15・16掘立柱建物跡	(第256・257号住居跡)
第1号道路跡	図版47 土師器環
第1号道路跡遺物出土状況	(第257・264・265・267・269・270・271号住居跡)
図版32 第1号井戸跡	図版48 土師器環
第3号溝跡遺物出土状況	(第275・279・283・287号住居跡)
図版33 第3号溝跡遺物出土状況	図版49 土師器環
第3号溝跡土器集中区	(第302・303・310号住居跡)
第7号溝跡縄文土器出土状況	図版50 土師器環・皿
図版34 第35号溝跡遺物出土状況	(第311・315・316・317・329号住居跡)
河川跡調査風景	図版51 土師器環
河川跡	(第329号住居跡、第1号竪穴状遺構、第1・3号溝跡)
図版35 河川跡遺物出土状況(祭祀場)	図版52 土師器環
河川跡遺物出土状況(土器)	(第3号溝跡、第3号溝跡土器集中区)
河川跡遺物出土状況(弥生土器)	図版53 土師器環
図版36 河川跡遺物出土状況(木製品)	(第3号溝跡土器集中区、第16号溝跡、河川跡)
図版37 須恵器環・蓋 (第113・140・248・269・286・302号住居跡、 河川跡)	

- 図版54 土師器壺
(河川跡)
- 図版55 土師器壺、ミニチュア土器
(第102・106・115・134・251・310・313・316号住居跡・河川跡)
- 図版56 ミニチュア土器、土師器小形甕・高壺・椀
(第109号住居跡、河川跡)
須恵器高台付椀
(第113号住居跡、第2・33号溝跡)
- 図版57 土師器椀・鉢・小形甕
(第109・254・257・302・310・329号住居跡、第3号溝跡)
- 図版58 土師器椀・鉢
(第3号溝跡、第3号溝跡土器集中区、河川跡)
支脚
(第134・第269号住居跡)
- 図版59 須恵器高壺
(第7号溝跡)
- 土師器高壺
(第109・283号住居跡)
- 図版60 土師器高壺・埴・壺
(第109・319号住居跡、第3号溝跡、河川跡)
- 図版61 土師器甕・壺・椀・台付椀
(第109・257号住居跡、河川跡)
須恵器小形壺
(第3号溝跡土器集中区)
- 図版62 土師器椀・小形壺
(第123・141・256・257・266号住居跡)
- 図版63 土師器小形壺
(第3号溝跡、土器集中区、第3号溝跡土器集中区)
- 図版64 土師器小形壺・小形甕
(第257・279号住居跡、第7号溝跡、河川跡)
- 図版65 土師器小形甕・小形甕
(第116・122・127・255・257・279号住居跡)
- 図版66 土師器小形甕・小形甕
- (第280・283号住居跡、第3号溝跡)
- 図版67 土師器小形甕・小形甕・壺・甕
(第109号住居跡、第3・35号溝跡、第3号溝跡土器集中区)
須恵器壺
(第257号住居跡)
- 図版68 土師器甕・壺
(第141・309号住居跡、第3・10号溝跡)
- 図版69 土師器甕・甕
(第109・128・269・283号住居跡、河川跡)
縄文土器
- 図版70 須恵器提瓶・大甕
(第3号溝跡・河川跡)
- 図版71 土師器壺・甕
(第111号住居跡、第3・7号溝跡)
- 図版72 土師器甕
(第124・128・134・140号住居跡)
- 図版73 土師器甕
(第140・141・143号住居跡)
- 図版74 土師器甕
(第253・269・275・279号住居跡)
- 図版75 土師器甕
(第279・280号住居跡)
- 図版76 土師器甕
(第283・286号住居跡)
- 図版77 土師器甕
(第299・317・329号住居跡、第3号溝跡)
- 図版78 土師器甕・甕
(第111号住居跡、第3号溝跡、第3号溝跡土器集中区)
- 図版79 土師器甕
(第123・248・253・280号住居跡)
- 図版80 土師器甕
(第280・329号住居跡、河川跡)
弥生土器
(河川跡)
- 図版81 紡錘車

- (第130・140・257・266・303・316・補172
号住居跡)
- 玉類
(第108・262・288号住居跡、第9号溝跡、ピッ
ト、グリッド、表採、補第13号掘立柱建物跡)
- 図版82 土錐、棒状土製品
(第121・134・140・141・250・251・253・
261・266・268号住居跡、第3号溝跡土器集中
区、第16号溝跡、河川跡、グリッド)
- 金属製品
(第106・111・124・255・256号住居跡、第
1号道路跡、第3号溝跡土器集中区、第7・
12・16号溝跡)
- 図版83 木製品
(河川跡)
- 図版84 木製品
(河川跡)
- 図版85 木製品
(河川跡)
- 図版86 木製品
(河川跡)
- 図版87 木製品
(河川跡)
- 図版88 木製品
(河川跡)
- 図版89 木製品
(河川跡、第1号井戸跡)
- 図版90 附編1図版1
木材(1)
- 図版91 附編1図版2
木材(2)
- 図版92 附編1図版3
木材(3)
- 図版93 附編1図版4
木材(4)
- 図版94 附編1図版5
木材(5)
- 図版95 附編1図版6
植物遺体(1)
- 図版96 附編1図版7
植物遺体(2)

遺構別目次

凡例

- I … 『今井川越田遺跡』第177集
- II … 『今井川越田遺跡II』第178集
- III … 『今井川越田遺跡III』第191集 (本書)

竪穴住居跡 (SJ)

- 第1号住居跡 I. 14
- 第2号住居跡 I. 242
- 第3号住居跡 I. 243
- 第4号住居跡 I. 17
- 第5号住居跡 I. 23
- 第6号住居跡 I. 38
- 第7号住居跡 I. 244
- 第8号住居跡 I. 27
- 第9号住居跡 I. 16
- 第10号住居跡 I. 16
- 第11号住居跡 I. 245
- 第12号住居跡 I. 43
- 第13号住居跡 I. 29
- 第14号住居跡 I. 32
- 第15号住居跡 I. 33
- 第16号住居跡 I. 36
- 第17号住居跡 I. 59
- 第18号住居跡 I. 247
- 第19号住居跡 I. 45
- 第20号住居跡 I. 50
- 第21号住居跡 I. 35
- 第22号住居跡 I. 62
- 第23号住居跡 I. 63
- 第24号住居跡 I. 65
- 第25号住居跡 I. 69
- 第26号住居跡 I. 70
- 第27号住居跡 I. 70
- 第28号住居跡 I. 74
- 第29号住居跡 I. 51

- 第30号住居跡 I. 38
- 第31号住居跡 I. 88
- 第32号住居跡 I. 89
- 第33号住居跡 I. 91
- 第34号住居跡 I. 93
- 第35号住居跡 I. 78
- 第36号住居跡 I. 95
- 第37号住居跡 I. 97
- 第38号住居跡 (第38号跡に変更)
- 第39号住居跡 I. 36
(第28号住居跡とあるが誤り)
- 第40号住居跡 I. 79
- 第41号住居跡 I. 98
- 第42号住居跡 I. 99
- 第43号住居跡 I. 81
- 第44号住居跡 I. 106
- 第45号住居跡 I. 84
- 第46号住居跡 I. 85
- 第47号住居跡 I. 108
- 第48号住居跡 I. 112
- 第49号住居跡 I. 115
- 第50号住居跡 I. 116
- 第51号住居跡 I. 55
- 第52号住居跡 I. 50
- 第53号住居跡 I. 50
- 第54号住居跡 I. 112
- 第55号住居跡 I. 121
- 第56号住居跡 I. 123
- 第57号住居跡 I. 128
- 第58号住居跡 I. 130
- 第59号住居跡 I. 133
- 第60号住居跡 I. 143
- 第61号住居跡 I. 145
- 第62号住居跡 I. 146
- 第63号住居跡 I. 36

第64号住居跡	I.	84	第101号住居跡	III.	159
第65号住居跡	I.	78	第102号住居跡	III.	159
第66号住居跡	I.	138	第103号住居跡	III.	161
第67号住居跡	I.	149	第104号住居跡	III.	165
第68号住居跡	I.	151	第105号住居跡	III.	165
第69号住居跡	I.	142	第106号住居跡	III.	168
第70号住居跡	I.	198	第107号住居跡	III.	171
第71号住居跡	I.	198	第108号住居跡	III.	171
第72号住居跡	I.	201	第109号住居跡	III.	173
第73号住居跡 (欠番)			第110号住居跡	III.	180
第74号住居跡	I.	204	第111号住居跡	III.	182
第75号住居跡	I.	150	第112号住居跡	III.	236
第76号住居跡	I.	153	第113号住居跡	III.	236
第77号住居跡	I.	201	第114号住居跡	III.	189
第78号住居跡	I.	211	第115号住居跡	III.	190
第79号住居跡	I.	87	第116号住居跡	III.	111
第80号住居跡	I.	213	第117号住居跡	III.	190
第81号住居跡	I.	216	第118号住居跡	III.	238
第82号住居跡	I.	218	第119号住居跡	III.	113
第83号住居跡 (欠番)			第120号住居跡	III.	191
第84号住居跡	I.	155	第121号住居跡	III.	191
第85号住居跡	I.	156	第122号住居跡	III.	113
第86号住居跡	I.	160	第123号住居跡	III.	114
第87号住居跡	I.	161	第124号住居跡	III.	118
第88号住居跡	I.	166	第125号住居跡	III.	118
第89号住居跡	I.	171	第126号住居跡	III.	122
第90号住居跡	I.	172	第127号住居跡	III.	126
第91号住居跡	I.	176	第128号住居跡	III.	126
第92号住居跡	I.	166	第129号住居跡	III.	126
第93号住居跡	I.	182	第130号住居跡	III.	126
第94号住居跡	I.	185	第131号住居跡	III.	131
第95号住居跡	I.	180	第132号住居跡	III.	131
第96号住居跡	I.	185	第133号住居跡	III.	132
第97号住居跡	I.	187	第134号住居跡	III.	134
第98号住居跡	I.	191	第135号住居跡	III.	140
第99号住居跡	I.	180	第136号住居跡	III.	141
第100号住居跡	I.	194	第137号住居跡	III.	50

第138号住居跡	III. 141	第171号住居跡	I. 234
第139号住居跡	III. 53	第172号住居跡	I. 229
第140号住居跡	III. 53	(補遺)	III. 326
第141号住居跡	III. 53	第173号住居跡	I. 236
第142号住居跡	III. 61	第174号住居跡	II. 105
第143号住居跡	III. 61	第175号住居跡	II. 117
第144号住居跡	III. 66	第176号住居跡	II. 141
第145号住居跡	III. 14	第177号住居跡	II. 143
第146号住居跡	III. 17	第178号住居跡	I. 211
第147号住居跡	III. 18	第179号住居跡 (欠番)	
第148号住居跡	III. 21	第180号住居跡	II. 29
第149号住居跡	III. 22	第181号住居跡	II. 51
第150号住居跡	III. 70	第182号住居跡	II. 13
第151号住居跡	I. 197	第183号住居跡	II. 25
第152号住居跡	I. 180	第184号住居跡	II. 71
第153号住居跡	I. 171	第185号住居跡	II. 224
第154号住居跡	I. 174	第186号住居跡	II. 66
第155号住居跡	I. 247	第187号住居跡	II. 15
第156号住居跡	I. 230	第188号住居跡	II. 62
第157号住居跡	I. 232	第189号住居跡	II. 217
第158号住居跡	I. 87	第190号住居跡	II. 72
第159号住居跡	I. 87	第191号住居跡	II. 29
第160号住居跡	I. 220	第192号住居跡	II. 30
第161号住居跡	II. 26	第193号住居跡	II. 217
第162号住居跡	I. 218	第194号住居跡	II. 210
第163号住居跡	I. 218	第195号住居跡	II. 18
第164号住居跡	I. 223	第196号住居跡	II. 223
第165号住居跡	I. 223	第197号住居跡	II. 33
第166号住居跡	II. 21	第198号住居跡	II. 40
(補遺)	III. 326	第199号住居跡 (欠番)	
第167号住居跡	I. 209	第200号住居跡	II. 41
第168号住居跡	I. 226	第201号住居跡	II. 121
(補遺)	III. 326	第202号住居跡	II. 85
第169号住居跡	I. 248	第203号住居跡	II. 88
(補遺)	III. 326	第204号住居跡	II. 15
第170号住居跡	I. 233	第205号住居跡	II. 18
(補遺)	III. 326	第206号住居跡	II. 45

第207号住居跡	II. 47	第244号住居跡	II. 130
第208号住居跡	II. 77	第245号住居跡	II. 130
第209号住居跡	II. 80	第246号住居跡	II. 174
第210号住居跡	II. 63	第247号住居跡	II. 177
第211号住居跡	II. 57	第248号住居跡	III. 144
第212号住居跡	II. 98	第249号住居跡	III. 146
第213号住居跡	II. 98	第250号住居跡	III. 24
第214号住居跡	II. 220	第251号住居跡	III. 150
第215号住居跡	II. 103	第252号住居跡	III. 26
第216号住居跡	II. 66	第253号住居跡	III. 28
第217号住居跡	II. 59	第254号住居跡	III. 70
第218号住居跡	II. 66	第255号住居跡	III. 71
第219号住居跡	II. 60	第256号住居跡	III. 76
第220号住居跡	II. 113	第257号住居跡	III. 76
第221号住居跡	II. 81	第258号住居跡	III. 84
第222号住居跡	II. 82	第259号住居跡	III. 150
第223号住居跡	II. 163	第260号住居跡	III. 150
第224号住居跡	II. 165	第261号住居跡	III. 150
第225号住居跡	II. 137	第262号住居跡	III. 154
第226号住居跡	II. 117	第263号住居跡	III. 85
第227号住居跡	II. 155	第264号住居跡	III. 156
第228号住居跡	II. 152	第265号住居跡	III. 157
第229号住居跡	II. 168	第266号住居跡	III. 32
第230号住居跡	II. 168	第267号住居跡	III. 85
第231号住居跡	II. 203	第268号住居跡	III. 88
第232号住居跡	II. 123	第269号住居跡	III. 89
第233号住居跡	II. 163	第270号住居跡	III. 33
第234号住居跡	II. 163	第271号住居跡	III. 33
第235号住居跡	II. 160	第272号住居跡	III. 35
第236号住居跡	II. 71	第273号住居跡	III. 36
第237号住居跡	II. 98	第274号住居跡	III. 157
第238号住居跡	II. 111	第275号住居跡	III. 40
第239号住居跡	II. 107	第276号住居跡	III. 158
第240号住居跡	II. 127	第277号住居跡	III. 92
第241号住居跡	II. 112	第278号住居跡	III. 42
第242号住居跡	II. 132	第279号住居跡	III. 43
第243号住居跡	II. 135	第280号住居跡	III. 92

第281号住居跡	III. 47	第318号住居跡	III. 217
第282号住居跡	III. 239	第319号住居跡	III. 217
第283号住居跡	III. 48	第320号住居跡	III. 220
第284号住居跡	II. 195	第321号住居跡	III. 220
第285号住居跡	III. 98	第322号住居跡	II. 182
第286号住居跡	III. 102	第323号住居跡	III. 110
第287号住居跡	III. 102	第324号住居跡	II. 194
第288号住居跡	III. 104	第325号住居跡	II. 185
第289号住居跡	II. 177	第326号住居跡	II. 187
第290号住居跡	II. 200	第327号住居跡	II. 187
第291号住居跡	II. 170	第328号住居跡 (欠番)	
第292号住居跡	II. 169	第329号住居跡	III. 203
第293号住居跡	II. 171	第330号住居跡 (第1号竪穴状遺構に変更)	
第294号住居跡	II. 112	第331号住居跡	II. 177
第295号住居跡	III. 107	第332号住居跡	II. 190
第296号住居跡	II. 207	第333号住居跡	II. 190
第297号住居跡	II. 209	第334号住居跡	II. 132
第298号住居跡	II. 174	竪穴状遺構	
第299号住居跡	III. 109	第1号竪穴状遺構	III. 224
第300号住居跡	III. 192	第38号跡	I. 57
第301号住居跡	III. 192	掘立柱建物跡 (SB)	
第302号住居跡	III. 193	第1号掘立柱建物跡	I. 239
第303号住居跡	III. 195	第2号掘立柱建物跡	I. 251
第304号住居跡	III. 199	第3号掘立柱建物跡	I. 251
第305号住居跡	III. 200	第4~10号掘立柱建物跡 (欠番)	
第306号住居跡	III. 200	第11号掘立柱建物跡	III. 243
第307号住居跡	III. 203	第12号掘立柱建物跡	III. 243
第308号住居跡	III. 203	第13号掘立柱建物跡	II. 224
第309号住居跡	III. 206	(補遺)	III. 326
第310号住居跡	III. 206	第14号掘立柱建物跡	II. 224
第311号住居跡	III. 206	第15号掘立柱建物跡	III. 243
第312号住居跡	III. 211	第16号掘立柱建物跡	III. 245
第313号住居跡	III. 215	第17号掘立柱建物跡	II. 227
第314号住居跡	III. 215	円形周溝状遺構 (SX)	
第315号住居跡	III. 215	第1号円形周溝状遺構	II. 228
第316号住居跡	III. 215	第2号円形周溝状遺構	II. 229
第317号住居跡	III. 215	第3号円形周溝状遺構	III. 227

第4号円形周溝状遺構	III. 228	第13号溝跡	III. 254
第5号円形周溝状遺構	III. 228	第14号溝跡	III. 254
道路状遺構		第15号溝跡	III. 254
第1号道路跡	III. 227	第16号溝跡	III. 254
土壙 (SK)		第17号溝跡	III. 257
第1号土壙	I. 240	第18号溝跡	III. 257
第2号土壙 (欠番)		第19号溝跡	III. 257
第3号土壙	I. 252	第20号溝跡	III. 261
第4号土壙	III. 230	第21号溝跡	III. 261
第5号土壙	III. 230	第22号溝跡	III. 261
第6号土壙	III. 230	第23号溝跡	III. 261
第7号土壙	III. 230	第24号溝跡	III. 261
第8号土壙	III. 246	第25号溝跡	III. 261
第9号土壙	III. 230	第26号溝跡	III. 261
第10号土壙	III. 231	第27号溝跡	III. 261
第11号土壙	III. 231	第28号溝跡	III. 261
第12号土壙	III. 231	第29号溝跡	III. 275
第13号土壙	III. 231	第30号溝跡	III. 275
第14号土壙	III. 231	第31号溝跡	III. 275
第15~20号土壙 (欠番)		第32号溝跡	III. 275
第21号土壙	II. 230	第33号溝跡	III. 275
井戸跡 (SE)		第34号溝跡	III. 275
第1号井戸跡	III. 246	第35号溝跡	III. 287
溝跡 (SD)		第36号溝跡	III. 287
第1号溝跡	III. 249	堰跡	
第2号溝跡	III. 249	第1号堰跡	I. 253
第3号溝跡	III. 287	ピット	
第4号溝跡	III. 250	第2ピット群	I. 252
第5号溝跡	III. 250	ピット群	III. 233
第6号溝跡	III. 250	土器集中区	
第7号溝跡	III. 250	土器集中区	III. 231
第8号溝跡	III. 250	河川跡 (SZ)	
第9号溝跡	III. 250	河川跡	III. 297
第10号溝跡	III. 250	その他	
第11号溝跡	III. 254	グリッド・表採遺物	I. 253 II. 230 III. 324
第12号溝跡	III. 254	縄文・弥生時代の遺物	III. 321

I 発掘調査の概要

1. 調査に至るまでの経過

埼玉県は、「環境優先・生活重視」、「埼玉の新しいくにづくり」を基本理念として、豊かな彩の国づくりを推進するため、種々の施策を講じている。

工業の振興では、都心からおおむね50km以遠の県北地域を対象圏域として、豊かな自然環境との調和を図りながら、付加価値の高い工業団地の整備を進め、地域産業の技術の高度化や先端技術産業などの導入を進めるテクノグリーン構想を推進している。

本庄市今井・西富田地区及び児玉町高闘地区にわたる本庄今井工業団地はこの構想に基づき計画された事業である。

県教育局生涯学習部文化財保護課では、この開発事業と文化財の保護について関係部局と事前協議を重ねてきたところである。

平成2年7月31日に開催した協議で、本庄市教育委員会が事業予定地内の埋蔵文化財の試掘調査を実施することを確認した。その後、用地買収等が進展し、終了した平成4年11月13日に試掘調査の方法・日程等を協議した。そして平成5年1月6日から3月12日になり、試掘調査が実施された。

調査の結果、以下の埋蔵文化財包蔵地が確認された。

遺跡・地区名	種別	時代
今井条里遺跡	条里遺跡	古代～中世
今井川越田遺跡	集落跡	古墳、奈良・平安
北廓遺跡	集落跡	奈良・平安
字塚田地区	散布地	縄文
字塔頭地区	散布地	平安

条里跡は現水田面の畦畔・水路に広範囲に留めているが、調査では、現畦畔と走向が異なる旧畦畔・溝な

2. 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

今井川越田遺跡の調査は平成5年4月から開始され平成7年3月をもって終了した。調査面積は約30,000m²である。今井工業団地用地内には今井川越田遺跡の

どが確認された他、事業地の南部で新たに大規模な集落跡（今井川越田遺跡）が確認された。

試掘調査の結果をふまえた協議では、事業の計画変更が不可能であることから、造成地区について記録保存の措置を講ずることとした。調査対象面積が広範囲にわたることなどから、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を実施することになった。

その後、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、県企業局、文化財保護課の三者で工事工程、調査計画、調査期間などについて協議し、平成5年4月から今井条里遺跡、今井川越田遺跡の発掘調査を開始することとした。

文化財保護法第57条3項の規定による埋蔵文化財発掘通知が、平成5年3月25日付け企局土二第312号で埼玉県公営企業管理者から提出され、第57条1項の規定による発掘調査届が平成5年4月1日付け財埋文第1号及び126号で、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。届けに対し、文化庁から平成5年9月2日付け委保第5の939号及び、平成5年9月3日付け委保第5の952号で指示通知があつた。

なお、両遺跡の発掘調査は平成6年度に継続され、平成6年4月1日付け財埋文12号で発掘調査届が提出され、それへの通知が平成6年5月11日付け教文第2—25号をもってなされた。

発掘調査は平成7年3月31日をもってすべての作業を終了した。

（文化財保護課）

他に、今井条里遺跡、地神遺跡、塔頭遺跡が存在した。今井条里遺跡、地神遺跡、塔頭遺跡の3遺跡については平成7年度をもって終了している。発掘調査の実施経過は以下のとおりである。

平成 5 年度 今井工業団地用地内を東西に流れる真下堀川を境として、その南側が対象地域であった。対象の遺跡は今井条里遺跡と今井川越田遺跡である。今井条里遺跡は対象地内の発掘調査を年度内に終了し、今井川越田遺跡の発掘調査は次年度に継続となった。

平成 6 年度 真下堀川の北側から関越自動車道までの間における今井条里遺跡と、継続分の今井川越田遺跡が対象となった。両遺跡とも期間内に終了した。

平成 7 年度 関越自動車道より北側が対象地域である。今井条里遺跡、地神遺跡、塔頭遺跡が発掘調査され、同年度内に終了した。逐次整理報告される予定である。

今井川越田遺跡の調査の経過は次のとおりである。平成 5 年 4 月から 5 月、文化財保護課、企業局担当者と調査工程の打ち合わせを行い、表土掘削を開始。6 月、補助員を導入し、遺跡の北東部から調査を開始する。平成 6 年 1 月～3 月、遺跡の南部に位置する変電所建設用地内の調査を先行することとなり、北東部と並行して調査を行う。平成 5 年度の調査終了。

平成 6 年 4 月、変電所建設用地内の調査を継続し、遺跡中央部の残りの表土を掘削。5 月～9 月、中央部の調査本格化。変電所用地内の調査終了後も、南部に

おいては残りの部分について調査を継続した。10 月、中央部の調査と並行し、南端の集落跡と河川跡の調査を開始。12 月、集落跡の調査はほぼ終了し、航空写真撮影を行った。平成 7 年 3 月 河川跡内の遺物を取り上げた後、埋め戻しを行い、今井川越田遺跡の調査をすべて終了した。

整理・報告書刊行

平成 6 年度は遺跡の北東部を、平成 7 年度は遺跡の中央部を対象に整理を行い、それぞれ第 177 集「今井川越田遺跡」、第 178 集「今井川越田遺跡 II」として報告されている。今回の整理対象は残りの部分であり、今回をもって、今井川越田遺跡すべての整理・報告書刊行事業は終了する

整理事業は、平成 8 年 4 月 1 日から平成 9 年 9 月 30 日まで実施した。4 月～8 月、遺構図面の整理と並行して、遺物の接合・復元・実測を行う。9 月～平成 9 年 2 月、引き続き遺物復元・実測を行い、遺構・遺物図面のトレースを実施する。3 月～6 月、遺構図・遺物図版組、遺物写真撮影を実施。7 月、割付を終え、原稿執筆、校正を行い、9 月末に本書の印刷を終了した。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査

平成 5 年度

理 事 長	荒 井 桂
副 事 長	富 田 真 也
常務理事兼管理部長	柴 崎 光 生
理事兼調査部長	中 島 利 治
管理部	
庶 務 課 長	萩 原 和 夫
主 査	贊 田 清
主 事	菊 池 久
経 理 課 長	関 野 栄 一
主 任	江 田 和 美

主 事	長 滝 美智子
主 事	福 田 昭 美
主 事	腰 塚 雄 二
調査部	
調査部副部長	高 橋 一 夫
調査第三課長	村 田 健 二
主任調査員	磯 崎 一
主任調査員	石 坂 俊 郎
調 査 員	山 本 靖
調 査 員	伴 瀬 宗 一
調 査 員	岩 田 明 広
調 査 員	渡 辺 清 志
平成 6 年度	

理事長	荒井 桂	資料部	
副理事長	富田 真也	資料部長	塩野 博
常務理事兼管理部長	加藤 敏昭	資料部副部長兼	谷井 彪
理事兼調査部長	小川 良祐	資料整理第一課長	
管理部		主任調査員	磯崎 一
庶務課長	及川 孝之	平成7年度	
主査	市川 勇三	理事長	荒井 桂
主事	長瀧 美智子	副理事長	富田 真也
主事	菊池 久	常務理事兼管理部長	新井 秀直
専門調査員兼経理課長	関野 栄一	理事兼調査部長	小川 良祐
主任	江田 和美	管理部	
主任	福田 昭美	庶務課長	及川 孝之
主任	腰塚 雄二	主査	市川 有三
調査部		主事	長瀧 美智子
調査部副部長	高橋 一夫	主事	菊池 久
調査第三課長	村田 健二	専門調査員兼経理課長	関野 栄一
主査	元井 茂	主任	江田 和美
主任調査員	井上 尚明	主任	福田 昭美
主任調査員	高崎 光司	主任	腰塚 雄二
主任調査員	瀧瀬 芳之	資料部長	塩野 博
調査員	伴瀬 宗一	主幹兼資料部副部長兼	谷井 彪
調査員	岩田 明広	資料整理第一課長	
(2)整理・報告書刊行		調査員	伴瀬 宗一
平成6年度		平成8年度	
理事長	荒井 桂	理事長	荒井 桂
副理事長	富田 真也	副理事長	富田 真也
常務理事兼管理部長	加藤 敏昭	専務理事	吉川 國男
理事兼調査部長	小川 良祐	常務理事兼管理部長	稻葉 文夫
管理部		理事兼調査部長	小川 良祐
庶務課長	及川 孝之	管理部	
主査	市川 有三	庶務課長	依田 透
主事	長瀧 美智子	主査	西沢 信行
主事	菊池 久	主任	長瀧 美智子
専門調査員兼経理課長	関野 栄一	主任	菊池 久
主任	江田 和美	専門調査員兼経理課長	関野 栄一
主任	福田 昭美	主任	江田 和美
主任	腰塚 雄二	主任	福田 昭美

主 任	腰 塚 雄 二	管理部	
資料部		庶 務 課 長	依 田 透
資 料 部 長	梅 沢 太久夫	主 査	西 沢 信 行
主幹兼資料部副部長	谷 井 彪	主 任	長 滝 美智子
専門調査員兼		主 任	腰 塚 雄 二
資料整理第一課長	今 泉 泰 之	専門調査員兼経理課長	関 野 栄 一
主 任 調 査 員	瀧 瀬 芳 之	主 任	江 田 和 美
平成9年度		主 任	福 田 昭 美
理 事 長	荒 井 桂	主 任	菊 池 久
副 理 事 長	富 田 真 也	資料部	
専 務 理 事	塙 野 博	資 料 部 長	谷 井 彪
常務理事兼管理部長	稻 葉 文 夫	主幹兼資料部副部長	小久保 徹
理事兼調査部長	梅 沢 太久夫	専門調査員兼	
		資料整理第一課長	坂 野 和 信
		主 任 調 査 員	瀧 瀬 芳 之

II 遺跡の立地と環境

今井川・越田遺跡の立地する本庄台地は、埼玉平野の西に形成された西縁台地群の中でも、もっとも北に位置している。東には妻沼低地が広がり、北には利根川支流である神流川が流れ、南には児玉丘陵が接している。

本庄台地は児玉丘陵につづく残丘である生野山と大久保山とを境として、北の本庄・児玉地域と南の美里地域に分けられる。遺跡はその境目にちかい、本庄・児玉地域の南東部に位置している。

この地域は、神流川によって形成された古い扇状地が段丘化したところである。遺跡の周辺は、女堀川の運んできた沖積堆積物のため、台地上とはいえ水田として利用され、景観は低地の様相を呈している。

本庄台地上には、旧石器時代から中・近世に至るまで、多くの遺跡が分布している。なかでも古墳時代から奈良・平安時代にかけての遺跡は、その量・質とも豊富な内容が明らかとなってきている。古墳時代では東国で最古とされるカマドの導入がみられ、平安時代

には掘立柱建物跡を中心とした大規模集落が形成されるなど、その特異性および先進性が注目されている。

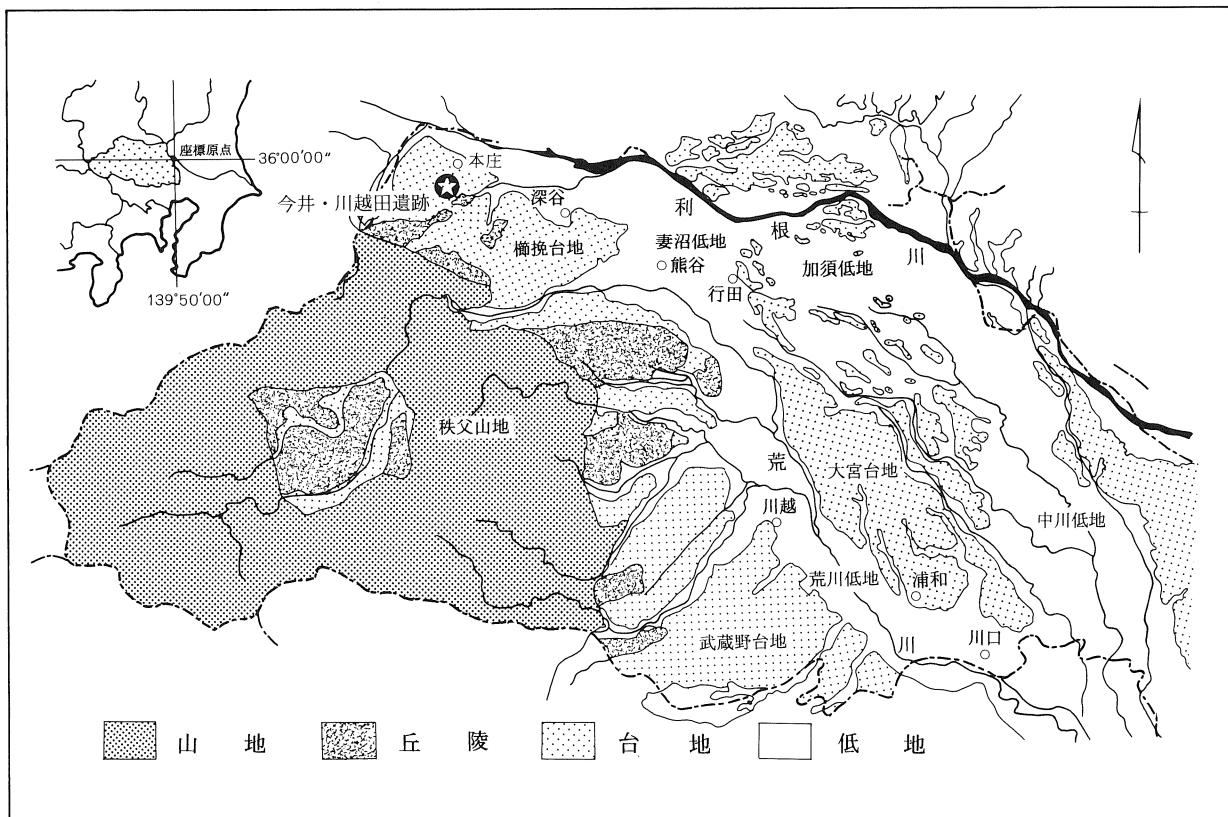
前2回の報告において、本庄台地における歴史的環境および古墳時代の遺跡については、すでに触れられている。ここでは、視点を地域的にさらに絞り込んで、今井川越田遺跡に近接するおもな遺跡を紹介し、古墳時代を中心とした集落の消長を概観する。

1. 後張遺跡（児玉町大字下浅見）

女堀川右岸に立地する大規模な集落遺跡である。A・B両地点は関越自動車道建設に伴って、埼玉県教育委員会が調査した。

検出された遺構は古墳時代の住居跡188軒（前期26軒、中期56軒、後期92軒）・溝跡7条・土壙11基・井戸跡3基、平安時代の住居跡3軒などである。古墳時代の集落は、前期から後期にかけて形成されたものであるが、その中心は五領式期後半から鬼高式期初頭である。この時期に連綿と続いている大規模集落は他に例

第1図 埼玉県の地形



がない。住居跡の規模は時期ごとに大きな変化はないが、大形住居跡は各期を通じて1～3軒づつ存在している。同一集落における炉使用→炉カマド併用→カマド使用という変遷をみてとれる好例といえる。特殊遺物として、石鉗（A区1号溝跡）や骨製刀装具？（第49号住居跡）などが出土している。

C地点は倉庫建設に伴い、児玉町教育委員会が調査したもので、古墳時代の住居跡25軒・溝2条、平安時代の土壙2基、中世の土壙6基が検出されている。

2. 飯玉東遺跡（児玉町大字下浅見）

大久保山丘陵の西側斜面下に突き出した細長い微高地上に立地する。縄文時代から中世に至る複合遺跡である。関越自動車道建設に伴い埼玉県教育委員会が調査した地点がA地点、児玉町教育委員会が県営ほ場整備事業に伴って調査を実施した地点がB地点である。

古墳時代のおもな遺構には、前期の方形周溝墓と、中期の住居跡がある。

方形周溝墓はA地点で5基、B地点で2基検出された。両者の距離が離れており、主軸の向きが異なっているため、A地点のものとB地点のものとはそれぞれ別のグループに大別されている。

古墳時代の住居跡はB地点で検出された和泉式期に属するもの1軒であり、小規模の集落が短期間営まれていたと考えられている。

3. 雷電下遺跡（児玉町大字下浅見）

大久保山丘陵の西端裾部に位置する集落遺跡である。A地点は関越自動車道建設に伴って、埼玉県教育委員会が調査した。検出された住居跡は63軒で、古墳時代後期後半から奈良・平安時代のものが主流を占める。

古墳時代の住居跡は、前期が6軒、後期が7軒である。後期に属する住居跡は規模が小さく、その分布や出土土器からも、続く奈良時代の住居跡との時期的な断絶はみられない。

前期五領式期の第25号住居跡からは、胴部下半に小孔を穿つ穂形土器を含む豊富な土器群と、鉄鎌や鈴鉗

が出土している。とくに鈴鉗は、住居跡からの出土例としては県内でもたいへん珍しいものである。

B・C地点は児玉町教育委員会が県営ほ場整備事業に伴って調査を実施した地点である。36軒の住居跡が検出された。A地点と同じく、奈良・平安時代に属する住居跡が大半を占めている。古墳時代では、7世紀段階のものが数件確認されている。

4. 川越田遺跡（児玉町大字高関）

A地点は、児玉工業団地に付設する取付道路建設に伴い、（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団が、B・C地点は道路拡幅工事に伴い、児玉町教育委員会が調査を実施したものである。B地点では今井川越田遺跡で調査した河川跡の下流にあたる流路が検出されており、両遺跡はともに河川跡の左岸に形成された、自然堤防上に近接して立地していたものと考えられる。

3つの地点で検出された遺構の総数は、住居跡40軒、土壙40基、溝跡18条、河川跡1条である。遺構の密集度は高く、切り合いが著しい。住居跡のうち時期不明のもの以外はすべて古墳時代に属し、前期12軒、中期2軒、後期20軒である。各時期によって数の増減はあるが、前期から後期にかけてある程度の継続性が認められる。

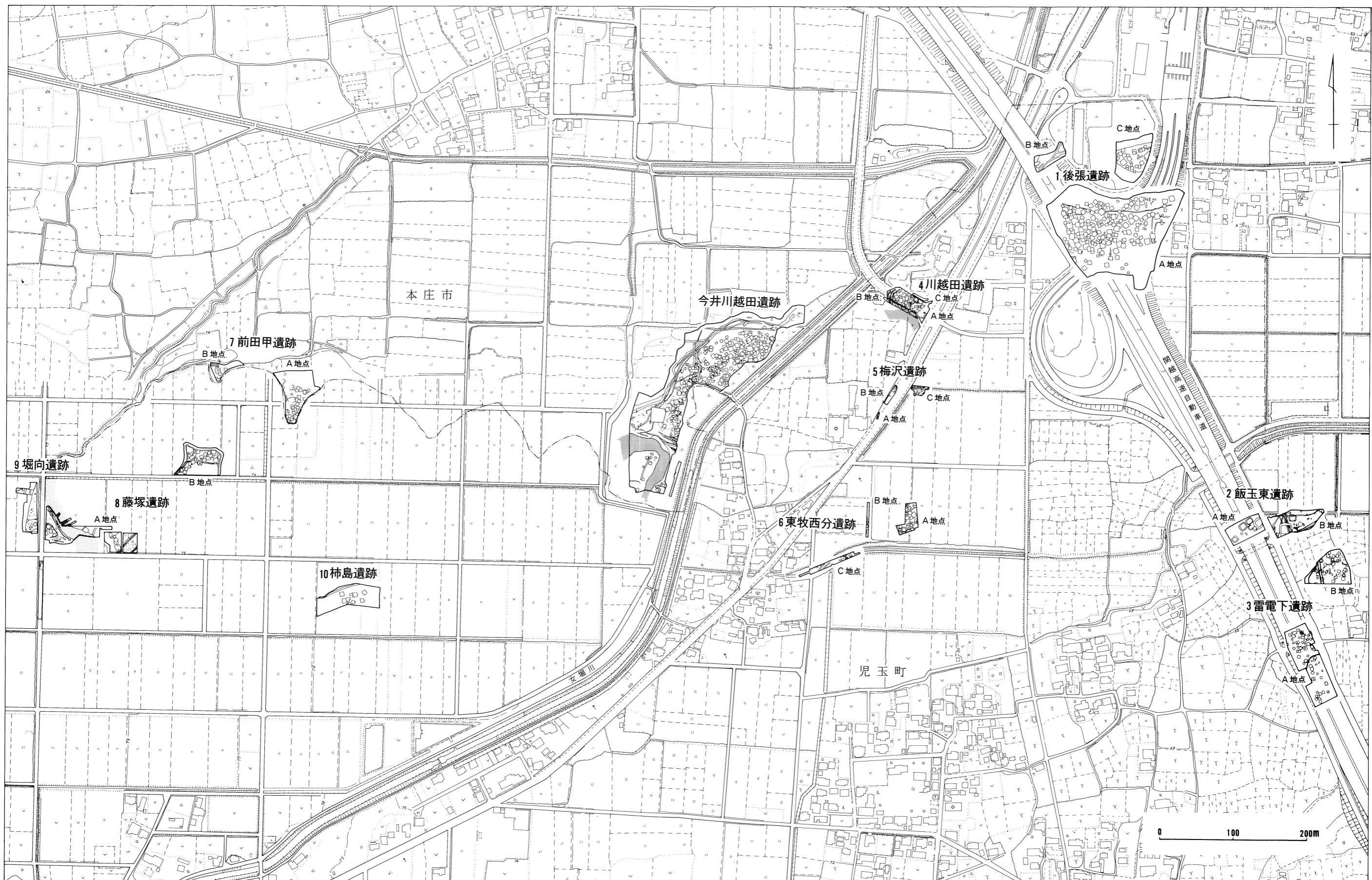
また、前期五領式期にあたる第24・25・32号住居跡などからは、畿内からの影響を受けたと考えられる、叩きの痕跡が認められる土器（「叩き甕」）が12個体分出土している。

5. 梅沢遺跡（児玉町大字高関）

女堀川右岸の自然堤防上に立地する。A・B地点は、児玉工業団地に付設する取付道路建設に伴い、（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団が、C地点はほ場整備事業に伴い、児玉町教育委員会が調査を実施したものである。

検出された古墳時代の住居跡は37軒である。前期に遡る可能性のある1軒を除いて、すべて中期から後期に属する。住居跡同士の重複関係は激しく、その様相

第2図 周辺の遺跡



は今井川越田遺跡や川越田遺跡と共に通している。

中期和泉式期の第37号住居跡から出土した羽口は、この時期のものとしては例が乏しく、注目される。また、所属遺構は不明であるが、B地点からは籠目土器が出土している。

6. 東牧西分遺跡（児玉町大字高関・大字下浅見）

女堀川中流域の比較的広い自然堤防上に立地する。古墳時代から平安時代にかけての集落遺跡である。検出された遺構は、住居跡47軒、掘立柱建物跡3棟、井戸跡3基、土壙13基、溝跡8条である。古墳時代の住居跡は、前期8軒、中期2軒、後期20軒である。後期のものは後期後半（7世紀後半）に属するものが主流となる。

中期和泉式期の第41号住居跡には出現期のものと考えられるカマドが検出されている。

7. 前田甲遺跡（本庄市今井）

女堀川左岸の舌状に張り出した微高地上に位置する。古墳時代前期から平安時代にかけての集落遺跡で、藤塚遺跡と対をなすものと考えられている。

A・B両地点で確認された住居跡の総数は60軒である。調査された住居跡のうち、古墳時代に属するものは前期2軒、中期5軒、後期10軒で、奈良・平安時代のものは3軒である。

中期の住居跡はB地点に集中する傾向にあり、大形のB地点第3号住居跡からは、鳥形の石製品が出土している。

8. 藤塚遺跡（児玉町大字蛭川）

埋没河川跡の右岸に位置する集落遺跡である。A・B地点ともほ場整備事業に伴い児玉町教育委員会が調査を実施したものである。A地点からは住居跡13軒と溝跡4条、土壙6基などが検出された。古墳時代の住居跡は、前期1軒、中期8軒、後期1軒と、前期から後期にわたって検出されている。

B地点では古墳時代後期を主体とする41軒の住居

跡が検出された。そのうちの第9号住居跡は焼失家屋で、豊富な遺物とともに人骨が出土している。

9. 堀向遺跡（児玉町大字下真下）

ほ場整備事業に伴い児玉町教育委員会が調査を実施した。検出された埋没河川跡の左岸に位置し、藤塚遺跡の対面にあたる。河川跡の底面からは和泉式期の土器が出土しており、今井川越田遺跡において検出された河川跡の上流部分にあたるものと推定される。

検出された古墳時代の遺構は、住居跡15軒、土壙8基である。住居跡は前期のものが4軒、中期7軒、後期2軒、不明2軒である。

10. 柿島遺跡（児玉町大字蛭川）

本庄台地の縁辺部の微高地上に位置する。ほ場整備事業に伴い児玉町教育委員会により調査が実施された。

古墳時代前期の住居跡2軒、後期の住居跡1軒、平安時代の住居跡5軒、および掘立柱建物跡1棟と土壙1基（時期不明）が検出された。

今井川越田遺跡で検出された河川跡は、上流では堀向・藤塚遺跡から、下流では川越田遺跡から検出された河川跡と同一のものと考えられる。この河川跡は女堀川の旧河道と推定され、西から東流し、今井川越田遺跡の近くで大きく蛇行しつつ、北東に方向を変えるものと考えられる。

この旧女堀川の自然堤防上には、以上見てきたように多くの集落が形成されていた。古墳時代前期から中期にかけての住居は各遺跡に分布しているが、後張遺跡に代表されるように、主体となる集落は今井川越田遺跡の下流域に存在している。

後期になると、住居の数は全体に増加し、集落は流域のほぼ全体に広がることがわかる。続く古墳時代後期後半から奈良時代にかけて、旧女堀川流域では集落の規模が縮小する。この時期の集落の中心は、雷電下遺跡にみるように、丘陵の裾部などの他の地域に移り変わるものと推定される。

III 遺跡の概要

今井川越田遺跡は、河川に沿って形成された自然堤防上に立地する大規模な集落遺跡である。標高は70m前後に位置している。時期的には、古墳時代後期と平安時代以降に大別される。過去2回の報告分を含め、検出された遺構の種類と総数は、竪穴住居跡328軒・掘立柱建物跡10棟・竪穴状遺構3基・円形周溝状遺構5基・道路状遺構1条・溝跡36条・土壙14基・井戸跡1基・堰跡1基・土器集中区1ヶ所・ピット多数・河川跡1条である。

検出された河川跡は、遺物の出土状況やその内容から、古墳時代にはある程度の水量をもち、平安時代にはすでに埋没していたものと考えられる。同様の埋没河川は、周辺の遺跡からも検出されており、女堀川の旧河道「旧女堀川」であったと推定される。旧女堀川は、西から蛇行しながら東流し、本遺跡のあたりで流れを北東方向に変えるようである。本遺跡が立地する自然堤防は、この旧女堀川によって形成されたものと考えられる。

遺跡の東側は、すべての遺構が砂を大量に含む埋没河川によって侵食されている。これは河川改修以前の女堀川の流路と考えられる。これを「女堀川旧流路」と呼び、「旧女堀川」とは区別して表記する。遺跡の旧状は、さらに東へ広がっていたと推定される。

縄文時代の遺構は検出されていない。遺構の確認面や埋土中、および河川跡から、前期～晩期の土器や石器が出土している。第7号溝跡の埋土からは、中期後半の有孔鍔付系土器が出土しており、注目される。

弥生時代の遺構も存在しない。河川跡から中期の櫛描波状文が施文された壺形土器の破片と、完形に近い壺形土器が出土した。遺構確認面からは後期の櫛描文や縄文施文の土器片がわずかに出土している。

古墳時代前期の遺構は確認されていないが、河川跡からまとまった土器群が出土している。これらはおおむね五領式の新しい段階のものと考えられる。また、住居跡埋土中からはS字状口縁の台付甕の破片が出

土している。

古墳時代中期の遺構は住居跡2軒である。中心となる集落の南端部で検出された。出土した土器は和泉式でも末期のものと考えられる。これよりも古相の土器群が河川跡の底面近くから出土している。

古墳時代後期の遺構は住居跡315軒、掘立柱建物跡4棟、竪穴状遺構3基、円形周溝状遺構5基、溝跡13条、土壙12基、道路状遺構1条、土器集中区1ヶ所などである。本遺跡がもっとも繁栄していた時期にあたり、大量の鬼高式土器の他に、群馬産や末野産の須恵器が出土している。また、土錘などの土製品や、紡錘車・玉類などの石製品、鉄斧や鉄鎌などの鉄製品の出土もみられる。これらの遺物から、住居跡はおおむね6世紀中葉から7世紀前半に属すると考えられる。

住居跡は重複が激しいが、ある程度のまとまりをもって、いくつかの群に分割される。埋土の観察から比較的短期間で埋没したものが多く、河川氾濫などを原因とした、頻繁な立て替えがあったものと推定される。規模や構造に目立った格差はみられない。カマドの方向は北東・北西方向が主流を占めている。

集落の西側を取り囲むように数条の溝跡が検出されている。この中には、水の流れた形跡がなく、底面に間隔を置いた掘り込みをもつ溝や、堰状の施設を有する水路が存在している。溝の西側には該期の遺構はまったく検出されていないため、これらの溝は集落域を区画する役割をもっていたものと考えられる。

道路状遺構は、主体となる集落の南境を画す位置にあり、河川跡に沿って検出された。波板状の掘り込みをもち、堅く締まった硬化面を形成している。出土遺物はほとんどないが、6世紀代のものと推定され、県内でももっとも古いものと位置づけられる。

河川跡で確認された祭祀場からは、ミニチュア土器を含む鬼高式土器や須恵器が、完形品を中心にしてまとまって出土した。この場所は、当時は入江状になっていたと推定される。

第3図 今井川越田遺跡全測図



※スクリーントーンは平安時代以降の遺構を示す。

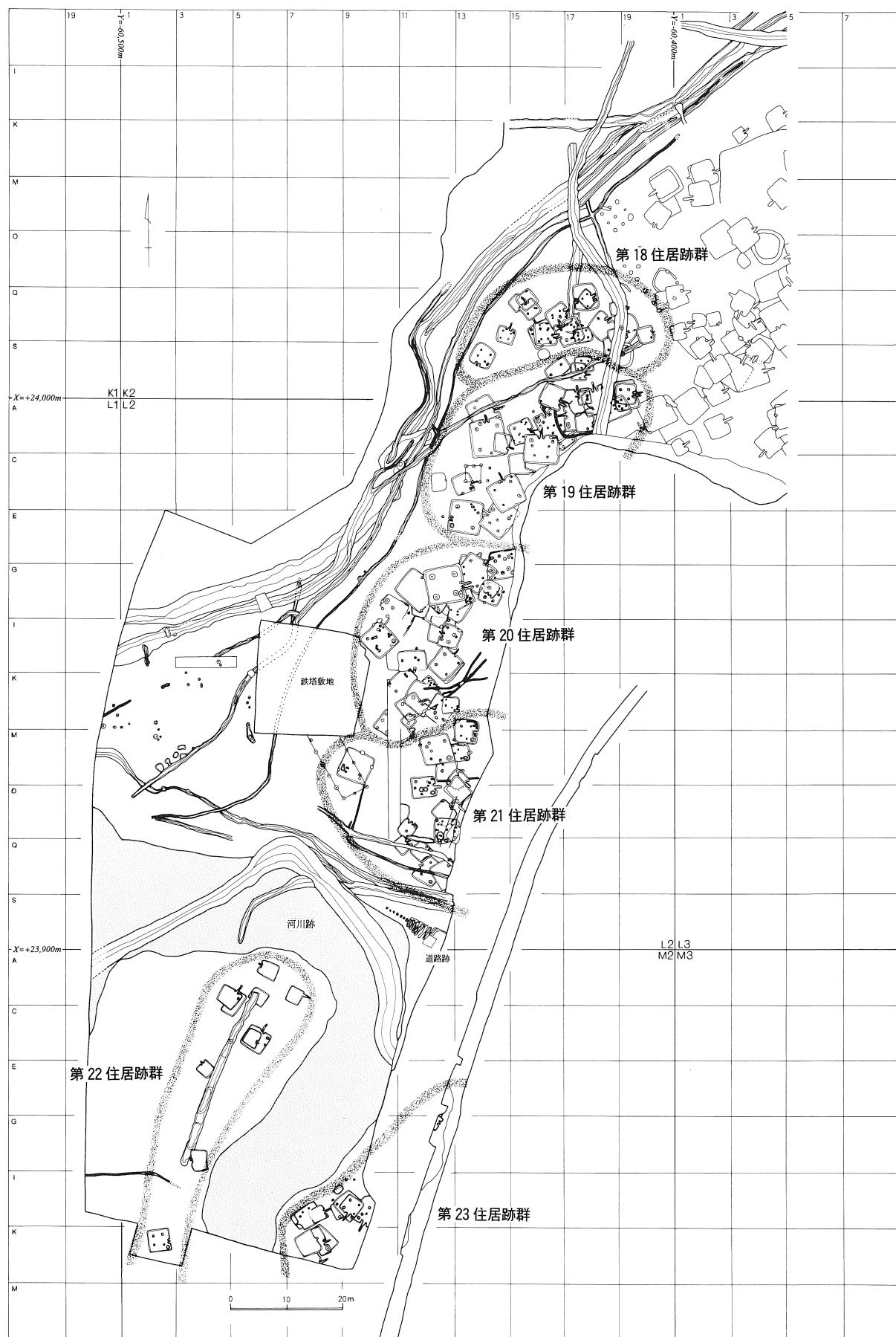
平安時代の遺構は、住居跡10軒、溝跡7条、土壙1基である。住居跡の分布は散漫である。遺構の時期は8世紀末から11世紀にわたっているが、9世紀後半のものが多い。溝跡の中には、今井条里遺跡で検出された水田跡に伴う水路が含まれている。

中世の遺構としては井戸跡1基があげられる。出土

遺物から13世紀後半から14世紀前半にかけてのものと推定される。時期不詳の掘立柱建物跡のいくつかは、この時期に属する可能性がある。

近世の遺構は、堰跡1基と溝跡10条がある。いずれも大規模に展開している該期の水田跡に伴う遺構と考えられる。

第4図 住居跡群分割図



IV 古墳時代の遺構と遺物

概要

この章で報告する遺構は、竪穴住居跡112軒、竪穴状遺構1基、円形周溝状遺構3基、道路跡1条、土壙10基、土器集中区1ヶ所、およびピット群である。

竪穴住居跡は、その重複関係や分布の集中傾向から、数基から数十基までのまとまりをもって、いくつかの住居跡群に分割され、前報告分までに、北から17の住居跡群に分けて報告されている。今回の報告ではそれに引き続いて、第18住居跡群から第23号住居跡群までの、6つの住居跡群に分割した。

第18住居跡群は、第145・146・147・148・149・250・252・253・266・270・271・272・273・275・278・279・281・283号住居跡の計18軒で構成される。このうち、第145・146号住居跡2軒は重複関係のない単独住居跡である。本住居跡群以東の第9・13・15号住居跡群は、分布が若干疎になる傾向が窺えたが、本住居跡群を境に、再び重複が顕著になる。

第19住居跡群は、第137・139・140・141・142・143・144・150・254・255・256・257・258・263・267・268・269・277・280・285・286・287・288・295・299・323号住居跡の計26軒で構成される。このうち、第137・139号住居跡2軒は単独の住居跡である。北側の第18住居跡群とは、わずかな空間をもつが、東隣の第15住居跡群と、重複関係をもつ住居跡が含まれている。南側は女堀川の旧流路によって切られており、その全容は明らかでない。現状から、住居跡の分布はさらに南側に広がる可能性がある。

第20住居跡群は、第116・119・122・123・124・125・126・127・128・129・130・131・132・133・134・135・136・138・248・249・251・259・260・261・262・264・265・274・276号住居跡の計29軒で構成される。今回報告分ではもっとも軒数の多い住居跡群である。北側の第19住居跡群とは、比較的幅のある空間が保たれている。東側は女堀川の旧流路による侵食を受けているが、その方面への広がりはあまり認められない。単独で検

出されている住居跡もあるが、確認面が削平されていたことを考えると、実際には重複していたものと推定される。

第21住居跡群は、第101・102・103・104・105・106・107・108・109・110・111・114・115・117・120・121号住居跡の計16軒で構成される。このうち第104・109号住居跡は、出土遺物から和泉期末に属すると考えられる。これは、今井川越田遺跡のなかでも、もっとも古く位置づけられる住居跡である。北側の第20住居跡群との間隔は狭い。第120号住居跡は、単独で孤立する住居跡であるが、本群に含めて報告する。

第22住居跡群は、第300・301・302・303・304・305・306・307・308・329号住居跡の計10軒で構成される。第18から21住居跡群は、前回までに報告された、重複の著しい住居跡群の継続部分と考えられるが、この第22号住居跡群としたものは、当時流れていた河川の対岸に形成された集落である。したがって、同じ河岸段丘上に立地するという意味での同一の集落とはみなされない。その構成も、6軒の単独住居跡と、最小単位である2軒の重複関係をもつ4軒の住居跡である。住居跡の規模も若干小さくまとまっており、対岸の住居跡群とは様相を異にしている。

第23号住居跡群は、第309・310・311・312・313・314・315・316・317・318・319・320・321号住居跡の計13軒で構成されている。おそらく多くの部分が発掘区域外にかかり、さらに女堀川の旧流路の影響を受けていると考えられる。調査面積の割に、住居跡の軒数が多く、重複も顕著に認められる。このことは、第18～21住居跡群と類似している。

竪穴状遺構は、集落の範囲を示す溝（第3号溝跡）の外側に位置しているため、住居跡ではないと判断したものである。遺物が散乱して出土しており、土器捨て場の様相を呈している。

道路跡は、第21住居跡群の南、河川跡の流路にそって検出された。出土遺物は細片であるが、鬼高期に属

し、波板状の掘り込みから出土した銅地銀張製の耳環も、その大きさや造りから、6世紀代のものと推定される。したがって、この道路跡は、集落の機能している同じ時期に存在していたものと考えられる。

円形周溝状遺構は、遺物の出土はないが、3基すべてが住居跡よりも古く、埋土も似ているため、古墳時代後期の遺構と判断した。

土壙は、調査された11基のうち、10基が当期に属するものと推定される。遺物の出土していないものは、溝との切り合い関係や、埋土の様相から推定したものである。第4・12・13・14号土壙は、住居跡群の中に位置していたものである。第5・6・7・9・10・11号土壙は集落の南西部、第3号溝跡の南端部付近に位

1. 第18住居跡群

第145号住居跡（第6、7図 図版11中）

K2-R14・R15 グリッドに位置する。重複する遺構はない。形状は方形を呈する。長辺×短辺は3.24×3.07m、深さは28cmである。カマドの傾きは N-19°-E である。

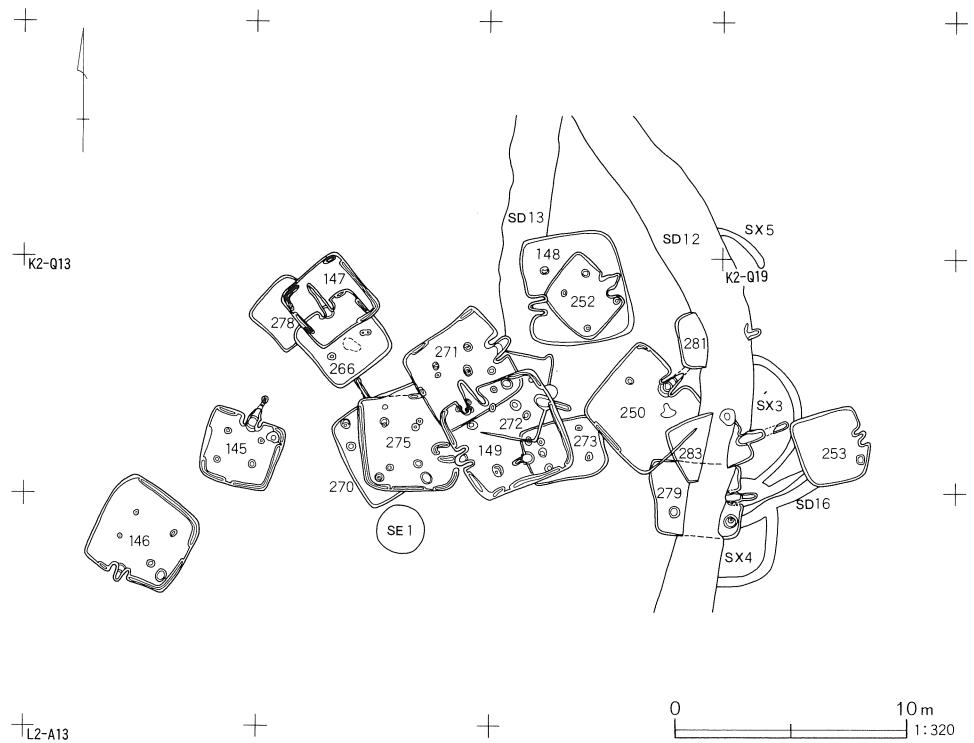
置し、うち第11号土壌を除く5基は、溝に添うように並んで検出されている。

土器集中区は、集落の南西に離れた位置から検出された。掘り込みは確認できなかったが、鬼高期の土器の破片が多量に出土したことから、集落に伴う土器捨て場であったと推定される。

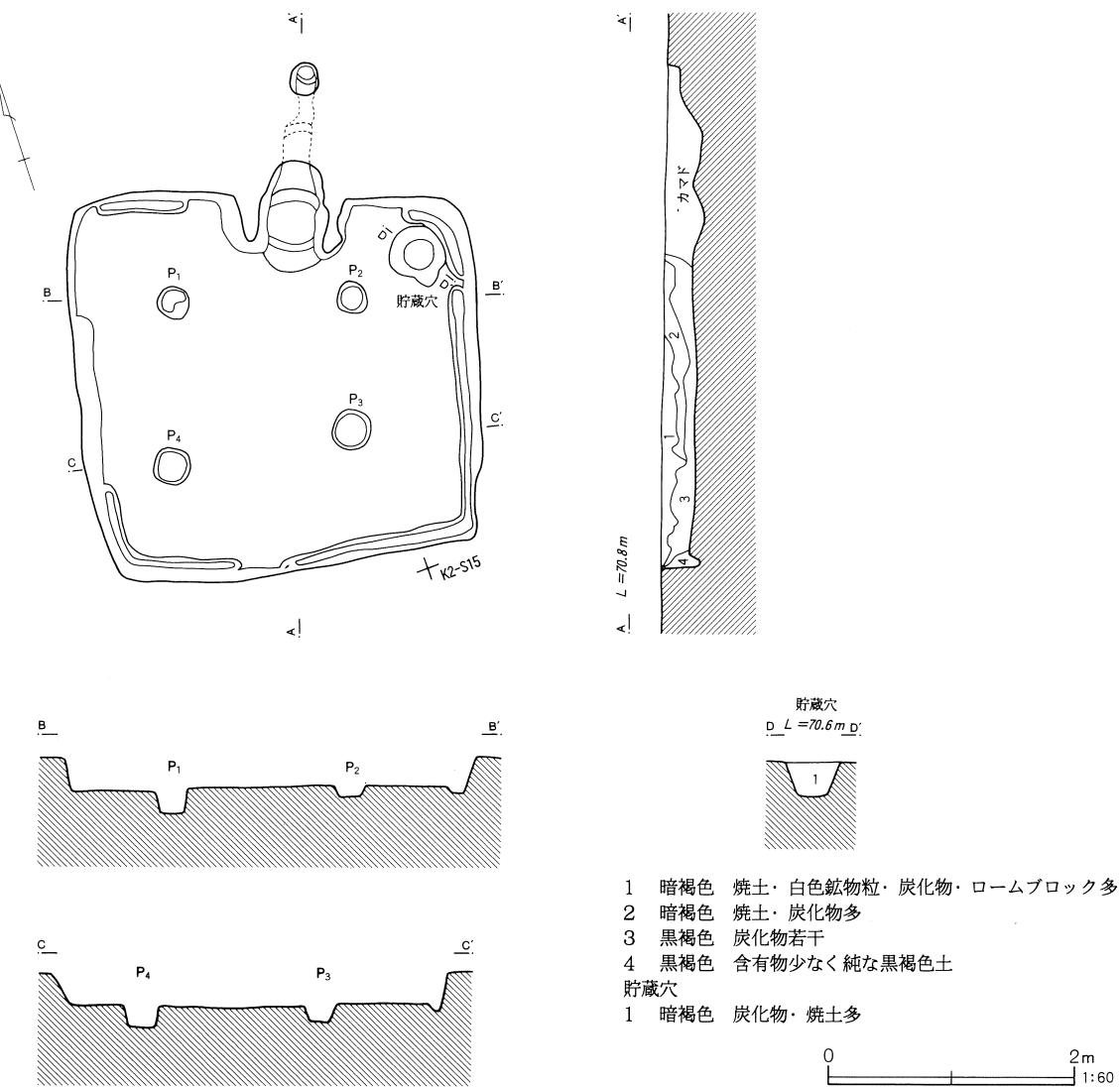
ピット群は、第20住居跡群に伴う一群と、第21住居跡群に伴う一群、土器集中区と土壙群の位置する南西部周辺の一群の3つに分けられる。ほとんど遺物をもたないが、わずかに図示できた遺物から、この章に掲載した。埋土からも、すべてが当期に属するものではないと考えられる。なお、これらのピットの性格は不明である。

カマドは北壁やや東寄りに構築されている。燃焼部の底面は皿状に掘り込まれており、煙道部とは段を介する。煙道部は深く掘り込まれており、煙り出しが口にかけて急激に浅くなる。袖部は地山土を基部としてその上に砂混じりの土で構築されていたと考えられる。

第5図 第18住居跡群



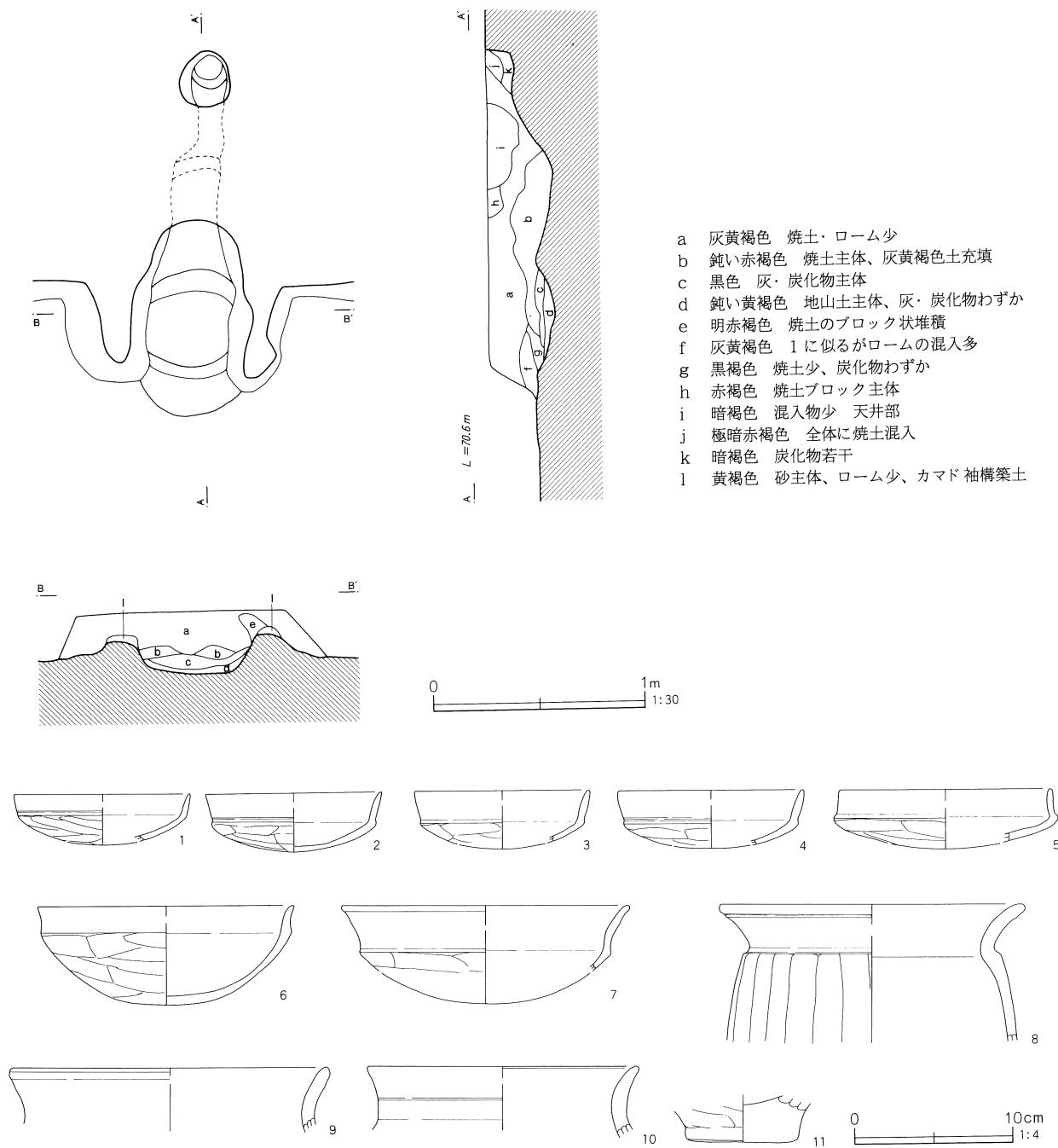
第6図 第145号住居跡



第145号住居跡出土遺物観察表（第7図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(10.9)	(2.9)		A F 1	A	B	30	埋土	器面風化
2	壺	(10.9)	3.6		A C 2	A	B	40	埋土	器面風化
3	壺	(10.8)	(3.3)		A E F 2	A	C	30	埋土	器面風化 内面黒化
4	壺	(11.4)	(3.4)		D F 1	A	C	20	埋土	器面風化 内・外面一部黒化
5	壺	(13.0)	(3.3)		A D F 1	A	C	15	埋土	
6	椀	(15.8)	6.1		D F 2	A	B	35	埋土	器面風化顕著
7	壺	(17.8)	(4.1)		A F 2	A	B	10	埋土	大形模倣壺 器面風化顕著
8	甕	(18.6)	(8.5)		A D F 2	A	B	10	埋土	頸部段顕著
9	甕	(19.6)	(4.0)		A B D F 2	A	B	5	埋土	口縁部破片
10	甕	(16.7)	(4.5)		A D F 5	A	B	5	埋土	口縁部破片
11	甕		(2.9)	7.0	A D F 5	A	B	5	埋土	底部破片

第7図 第145号住居跡カマド・出土遺物



天井部の一部は崩落せずにそのまま検出された。

貯蔵穴は北東コーナーから検出された。直径約40cmの円形を呈する。深さは27cmで、バケツ状に掘り込まれており、底面は平らである。

壁溝は途切れ途切れに巡っている。幅10cm前後、深さ5~10cmである。掘り込みはさほど明瞭ではない。

ピットは4基検出された。いずれも柱穴と考えられるが、深さは8~20cmと浅く、柱痕も認められなかつ

た。P1-P2、P3-P4間はおよそ1.5m、P1-P4間が1.3m、P2-P3間がもっとも短く1.0mである。

床面は踏みしめられていたが、貼り床は認められなかった。

遺物は埋土から土師器壺・甕などが出土した。すべて破片で、その量も少ない。須恵器の破片も含まれているが、図示できるものはない。

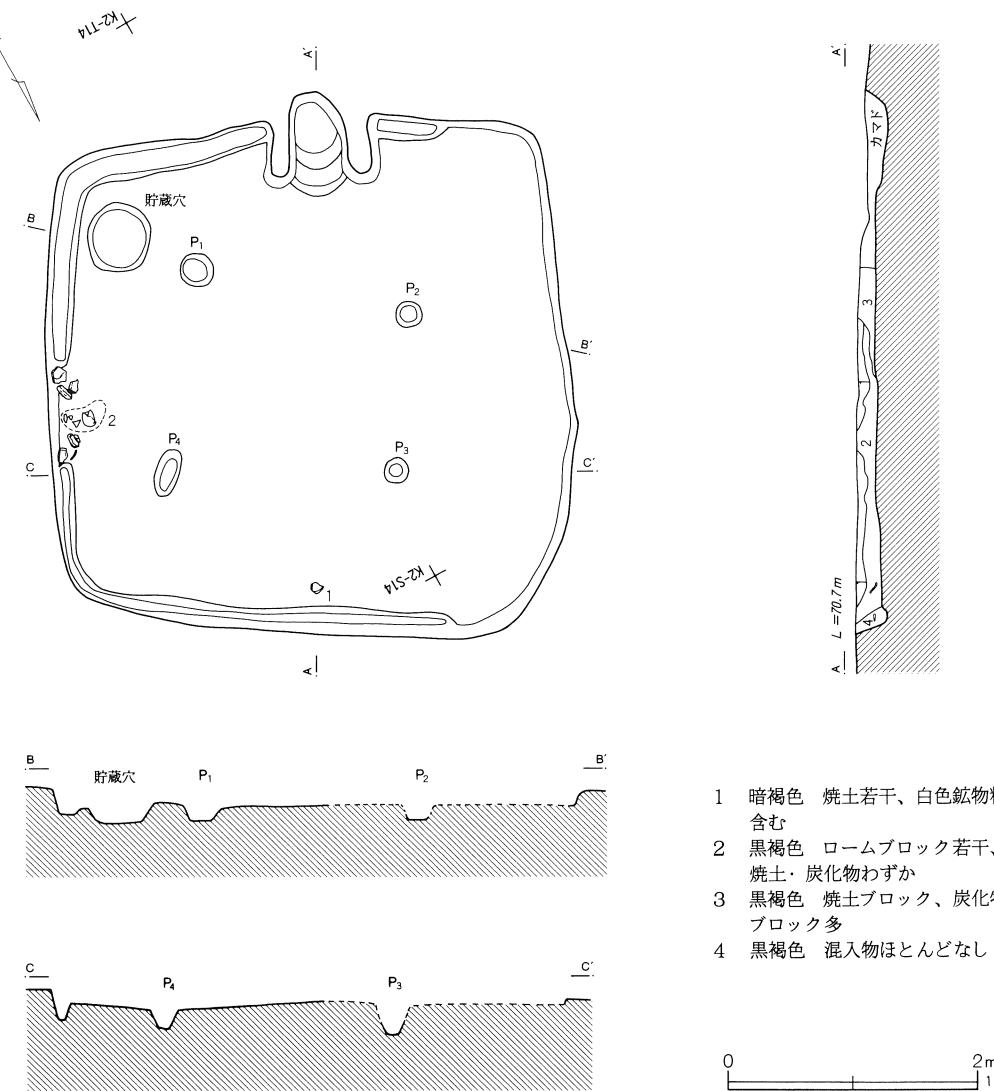
第146号住居跡（第8、9図 図版11下）

K2—R13・R14・S14グリッドに位置する。重複する遺構はない。形状は方形を呈する。長辺×短辺は4.18×3.98m、深さは16cmである。カマドの傾きはN—150°—Wである。

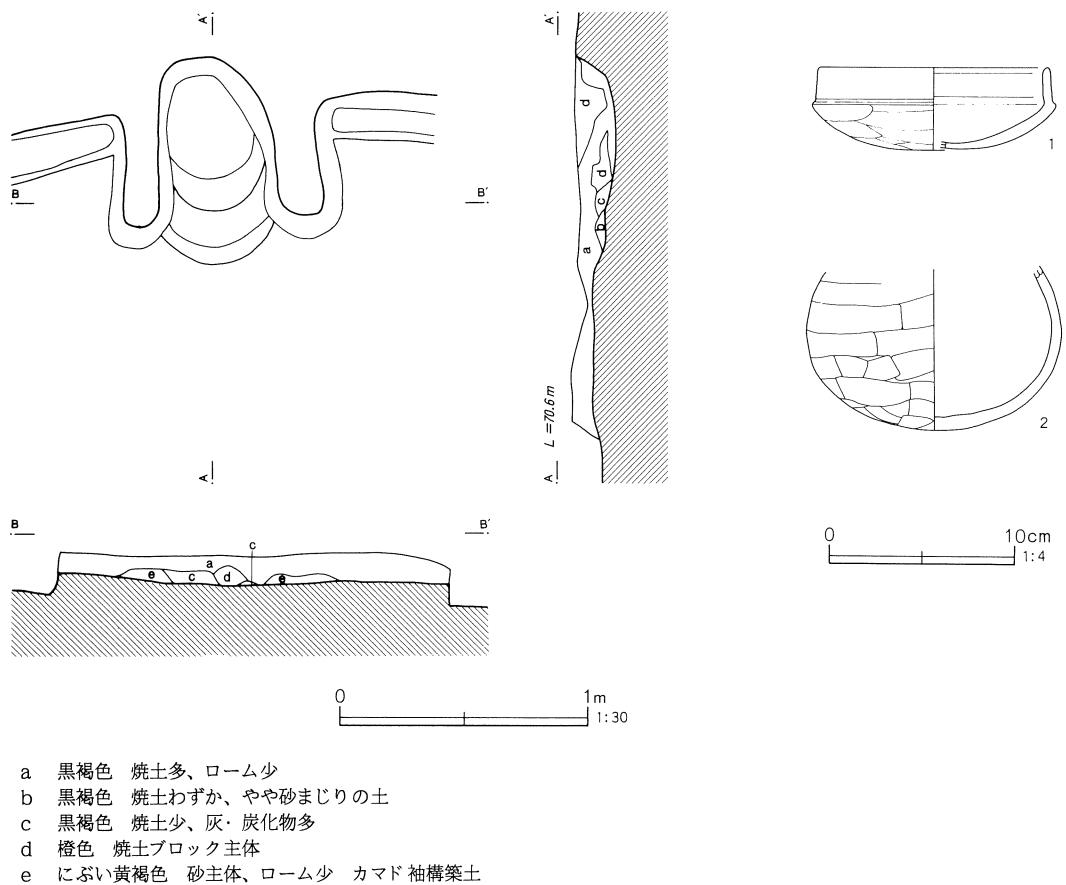
カマドは南壁中央に構築されているが、削平を受けしており、遺存状態は良好でない。燃焼部は楕円形を呈し、皿状に掘り込まれている。規模は82×46cmである。煙道部は検出されなかった。袖部は基部しか残っていないが、砂質土で構築されており、住居跡壁を掘り込んで検出された。被熱面は燃焼部底面で顕著に認められた。

貯蔵穴は東南コーナーに設けられている。形態は円

第8図 第146号住居跡



第9図 第146号住居跡カマド・出土遺物



第146号住居跡出土遺物観察表（第9図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	12.0	4.4		A F 2	A	F	30	床直	外面黒化
2	小形壺		(8.7)		F 1	A	C	35	壁際床直	外面黒化

第147号住居跡出土遺物観察表（第10図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(10.2)	(3.4)		A F 1	A	C	10	埋土	
2	壺	(12.0)	(3.5)		A F 1	A	B	20	埋土	器面風化顯著
3	壺	(11.2)	(3.0)		A F 1	A	C	20	埋土	
4	壺	13.0	(4.0)		A D F 2	A	C	50	埋土	
5	壺	(14.8)	(4.2)		A F 2	A	C	15	埋土	
6	鉢	(20.6)	(8.3)		A D F 1	A	B	20	埋土	
7	小形甌	(19.4)	10.3	6.7	A D F 1	A	B	20	埋土	外面、口縁内面一部黒化
8	甌	(20.0)	(6.8)		A B D E F 5	A	B	10	床直	口縁歪む
9	甌		(8.0)	(7.3)	A D E F 2	A	C	10	埋土	外面一部黒化

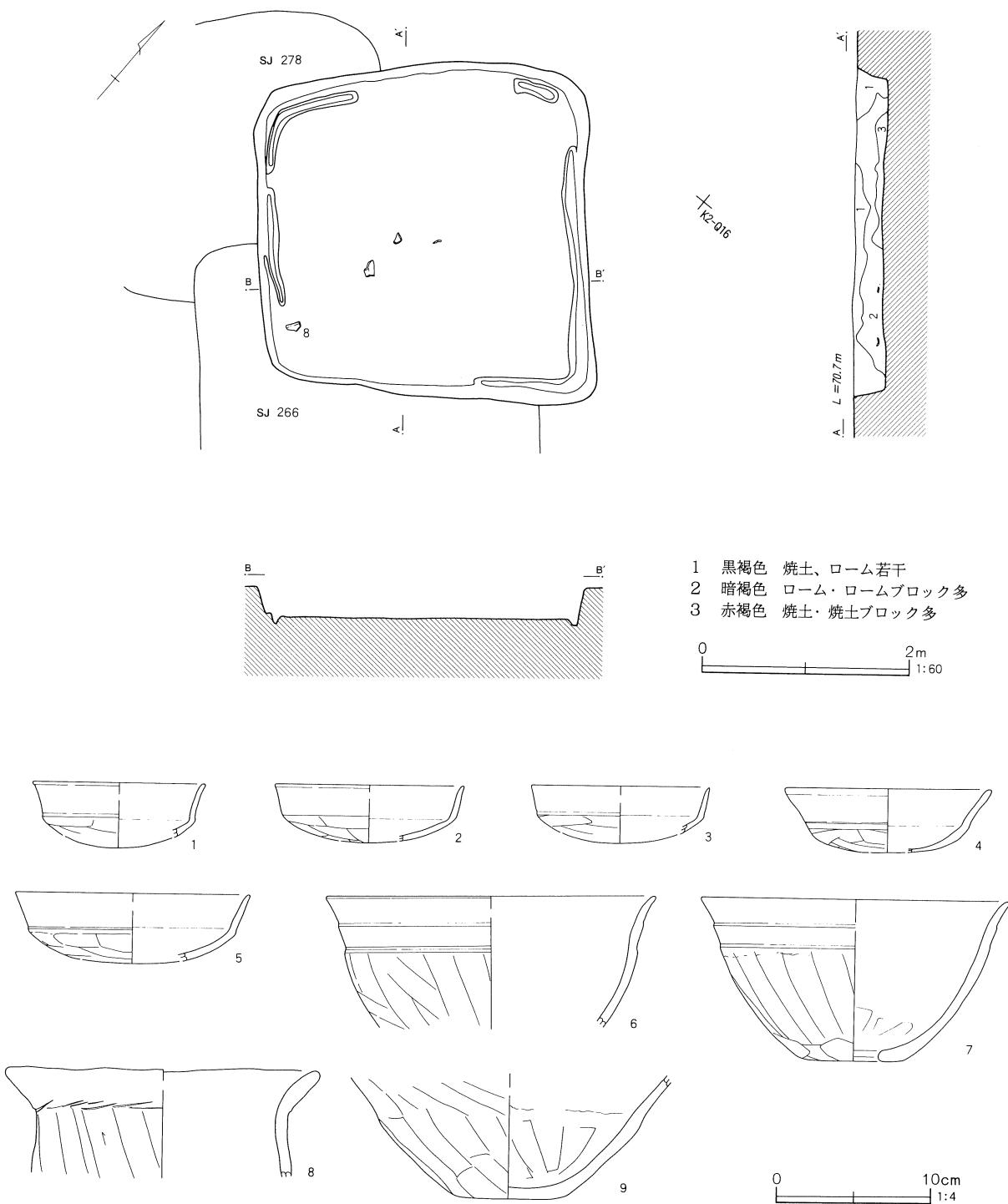
第147号住居跡（第10図 図版12上）

K2-P15・Q15グリッドに位置する。重複する第266・278号住居跡を切っている。形状は正方形に近いが、北東壁がやや長い台形を呈している。長辺×短辺は3.13×3.12mである。埋土の残りは良く、深さは30

cmである。長辺の傾きはN-39°-Wである。

切り合う3基の住居跡の中では、もっとも新しいと考えられる。そのため、カマドがあるものと周辺を精査したが、検出できなかった。また、炉跡の痕跡も認められなかった。

第10図 第147号住居跡・出土遺物

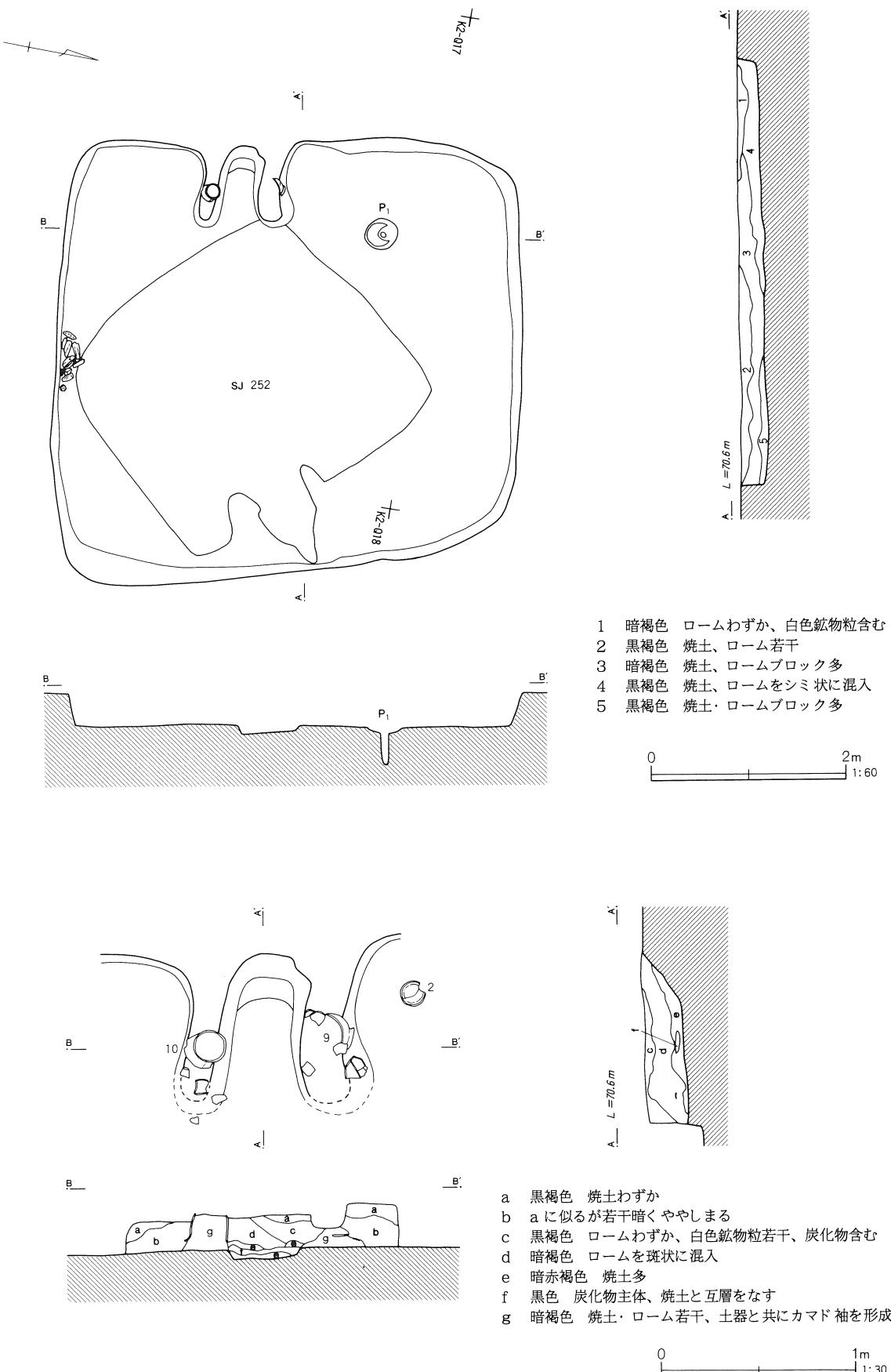


壁溝は部分的に検出された。幅は10cm弱、深さは5cm程である。掘り込みは明瞭でない。

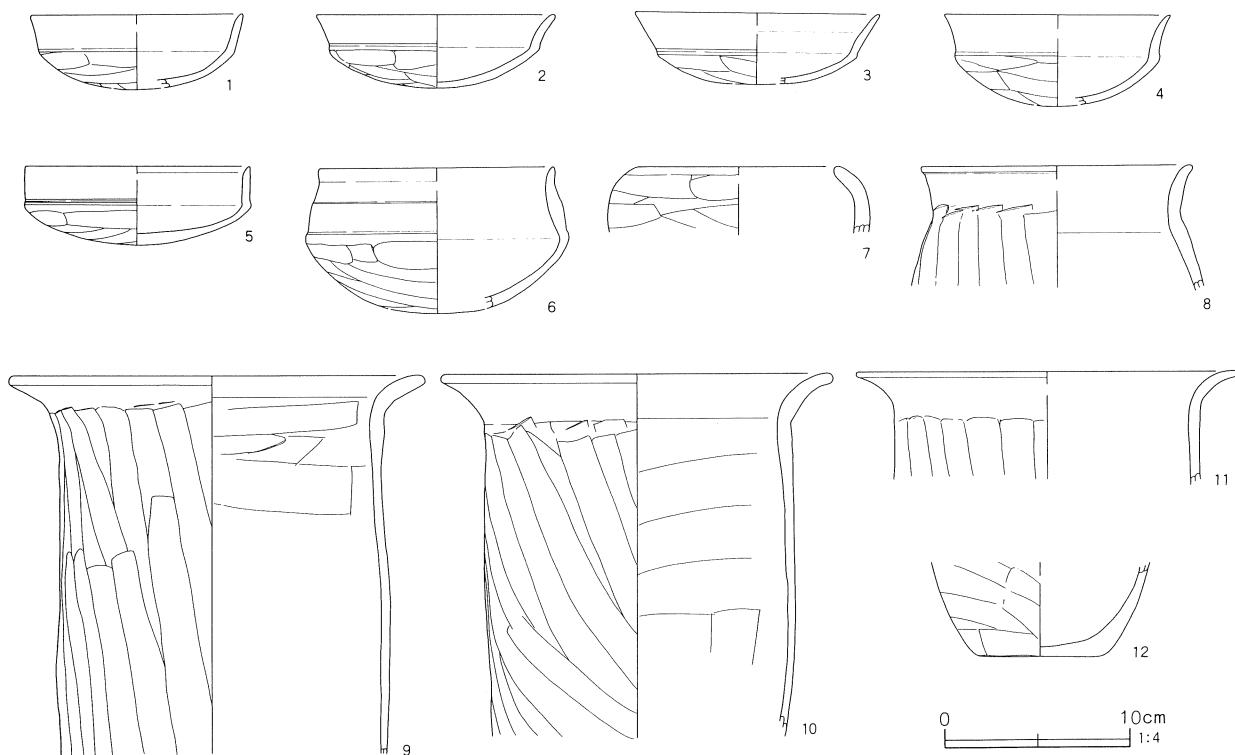
床面はあまりしっかりとしたものではなく、その確認にはサブトレンチを入れて調査した。

出土した遺物は、土師器壺・甕・甌等がある。床面から出土したものはわずかである。小形甌（7）は、鉢形土器の底部を穿孔したもので、本遺跡のなかでは珍しい器形である。

第11図 第148号住居跡・カマド



第12図 第148号住居跡出土遺物



第148号住居跡出土遺物観察表（第12図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	11.2	(3.9)		A F 1	A	B	40	埋土	器面風化顯著
2	壺	12.4	3.9		A D F 2	A	B	95	カマド脇	図版43-1
3	壺	(12.9)	(3.7)		A F 1	A	B	20	埋土	器面風化顯著
4	壺	11.8	(4.8)		A D F 2	A	B	40	埋土	器面風化顯著
5	壺	11.9	4.2		A D F 1	A	C	60	埋土	
6	椀	(12.4)	(7.5)		A F 1	B	B	10	埋土	口唇部外反
7	椀	(10.6)	(3.6)		A D F 2	A	C	5	埋土	口縁内湾 口唇部ナデ
8	小形甕	(14.3)	(6.7)		A D F 5	A	B	10	埋土	
9	甕	21.5	(20.0)		A D F 2	A	C	40	カマド袖	補強材 口唇部肥厚 内面、外面一部黒化
10	甕	20.2	(19.3)		D F 1	A	C	40	カマド袖	補強材 外面一部黒化
11	甕	(20.0)	(6.0)		A D E F 5	B	B	5	埋土	
12	甕		(5.0)	6.0	A D F 2	A	B	5	埋土	

第148号住居跡（第11、12図 図版12中）

K2—P17・P18・Q18 グリッドに位置する。重複関係は、第13号溝跡に切られ、第252号住居跡を切っている。形状は長方形を呈する。長辺×短辺は4.73×4.28m、深さは26cmである。カマドの傾きはN—101°—Wである。

カマドは西壁やや南寄りに構築されている。燃焼部は箱形を呈し、規模は80×40cmである。煙道部は第13号溝によって削平されており検出されなかった。燃焼部の底面は浅く掘り込まれており、ゆるやかな段を介

して煙道部へ続いたものと考えられる。袖部は暗褐色土によって構築され、両方に土師器甕が倒立し、補強材として使用されていた。

ピットは1基確認されたが、本住居跡に伴うものである確証はない。

カマド袖および周辺を除き、遺物はすべて埋土中からの出土である。第252号住居跡の埋土を一部掘り下げてしまったため、遺物は混在している可能性がある。土師器壺・甕が出土している。破片が多くその量は少ない。

第149号住居跡 (第13~15図 図版12下)

K2—Q17・R16・R17・S16・S17グリッドに位置する。重複関係は、第271・272・273号住居跡をすべて切っているが、第275号住居跡との切り合い関係は不明である。形狀は方形を呈する。長辺×短辺は4.70×4.65m、深さは24cmである。カマドAの傾きはN—29°—Wである。

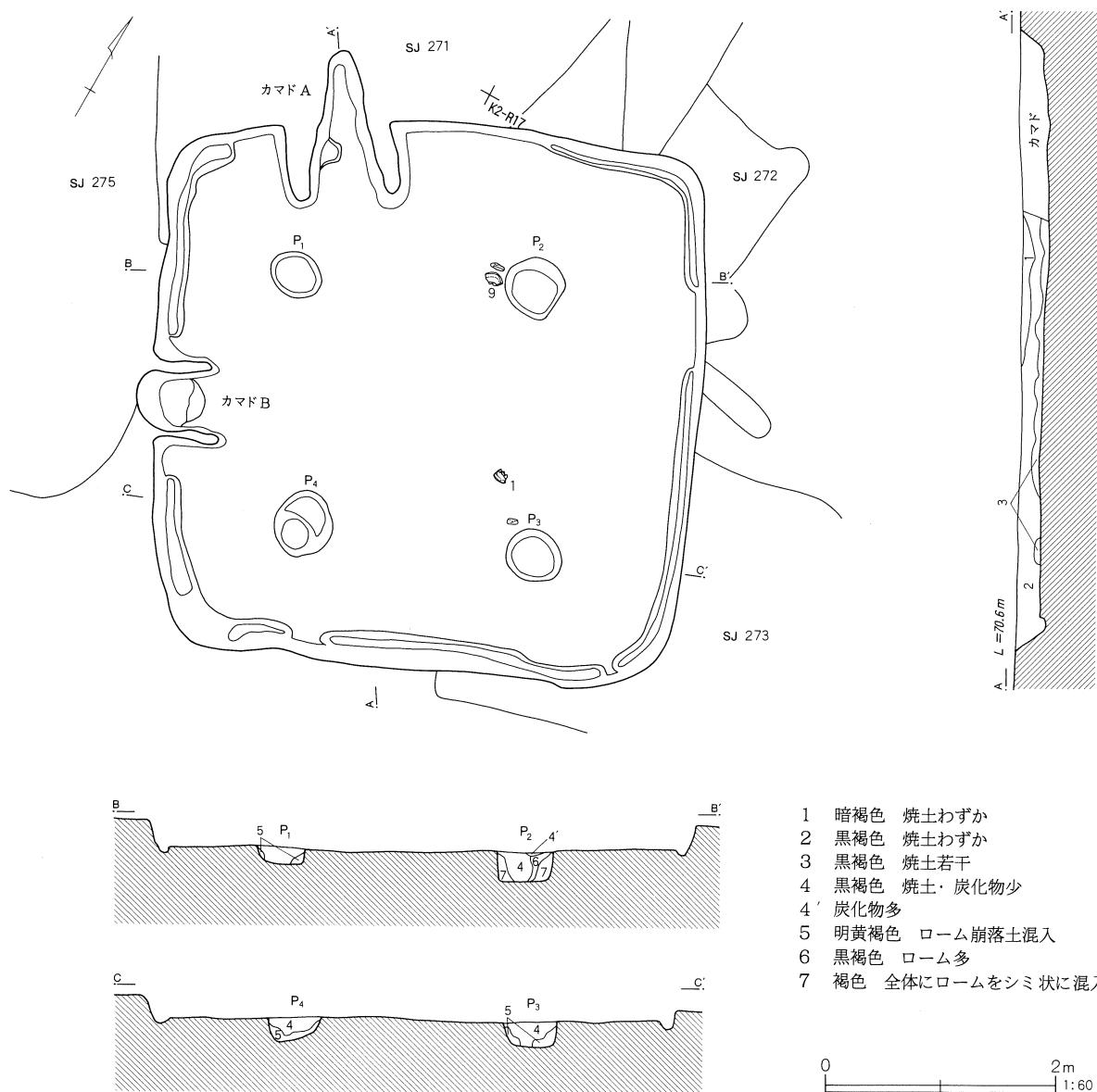
カマドは2基検出された。カマドAは北壁の大きく西に寄った位置に構築されている。燃焼部の掘り込みはなく、底面で煙道部との区別はつかないが、西内壁にその境の痕跡がみられる。煙道部はそのまま徐々に

立ち上がり、煙り出し口に至る。袖部は大きく、黒褐色土とローム土を混ぜて構築している。全体に被熱面あまりみられない。カマドBは西壁中央に構築されている。燃焼部のみの検出である。掘り込みは浅く、形狀は箱形を呈する。袖部もAと同様の土で造られている。Aと比較して被熱面は発達している。これら2基のカマドの新旧関係は不明である。

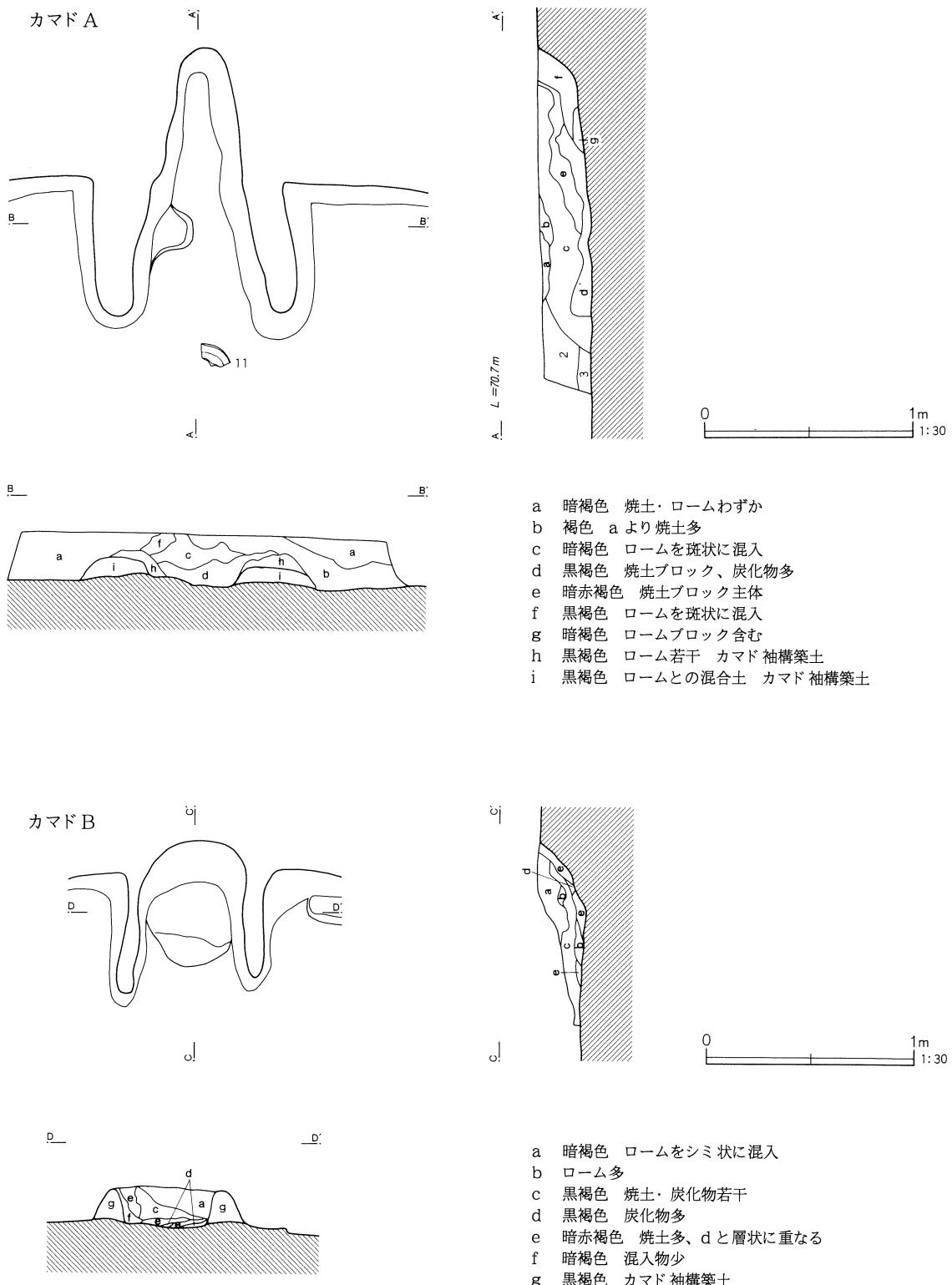
壁溝は部分的に検出された。幅10~13cm、深さ5~8cmである。

ピットは4基検出された。いずれも柱穴と考えられるが、深さは浅く、15~24cmである。柱穴間の長さは

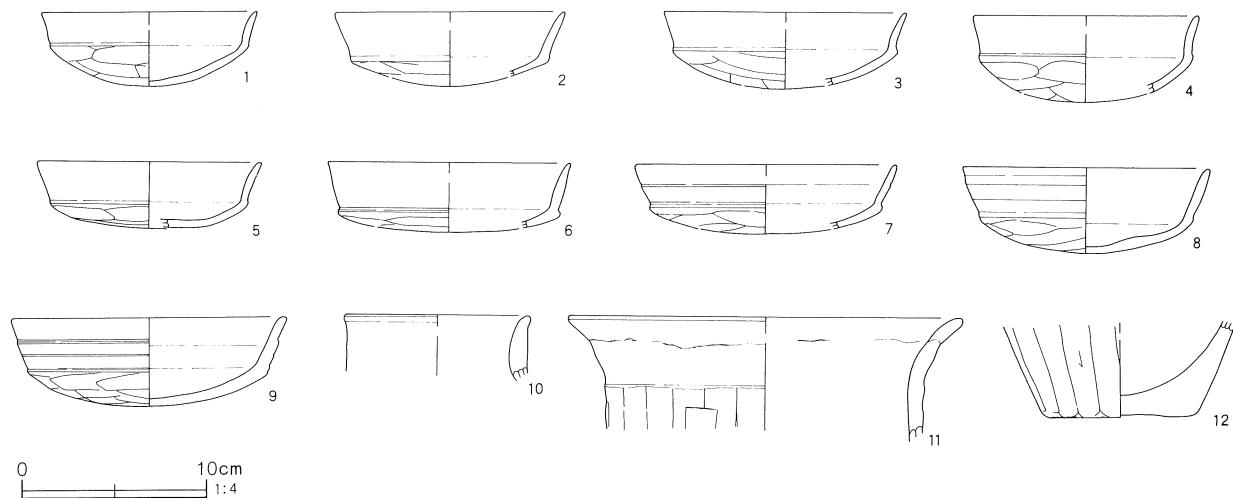
第13図 第149号住居跡



第14図 第149号住居跡カマド



第15図 第149号住居跡出土遺物



第149号住居跡出土遺物観察表（第15図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(11.4)	4.0		ADF 2	A	B	60	床直	器面風化顯著
2	壺	(12.2)	(3.4)		AF 1	A	B	10	埋土	器面風化顯著
3	壺	(12.8)	(4.1)		ADF 2	A	B	40	埋土	器面風化顯著
4	壺	(11.8)	(4.6)		DF 1	A	F	25	埋土	器面風化顯著
5	壺	11.8	(3.4)		AF 1	A	A	60	埋土	器面風化顯著 図版43-2
6	壺	(12.8)	(3.5)		AF 2	A	B	20	埋土	器面風化顯著
7	壺	(13.7)	(3.7)		D 1	A	B	20	埋土	器面風化顯著
8	壺	13.0	4.5		AD 1	A	B	95	埋土	図版43-3
9	壺	14.4	4.7		F 1	A	B	50	床直	
10	小形壺	(9.6)	(3.5)		AD 2	B	C	15	埋土	口縁部破片
11	甕	(20.8)	(6.6)		ADF 2	A	B	5	カマド	
12	甕	(5.0)		7.8	ABDF 2	A	B	5	埋土	

2.1~2.2mとほぼ均等である。

床面直上から出土した遺物は少なく、カマド周辺にもほとんど存在しない。破片がおもに埋土中から出土した。土師器壺・甕がある。

第250号住居跡（第16、17図 図版14下）

K2—Q18・R17・R18グリッドに位置する。重複関係は、第12号溝跡と第281号住居跡に切られている。形状は方形を呈する。長辺×短辺は4.34×4.05m、深さは25cmである。カマドの傾きはN—45°—Eである。

カマドは北東壁中央に構築されている。燃焼部は箱形で、規模は100×45cmである。底面は段皿状に掘り込まれている。燃焼部から煙道部にかけて堆積する砂混じりの層（e層）は、底面を造り直した時の埋土と推定

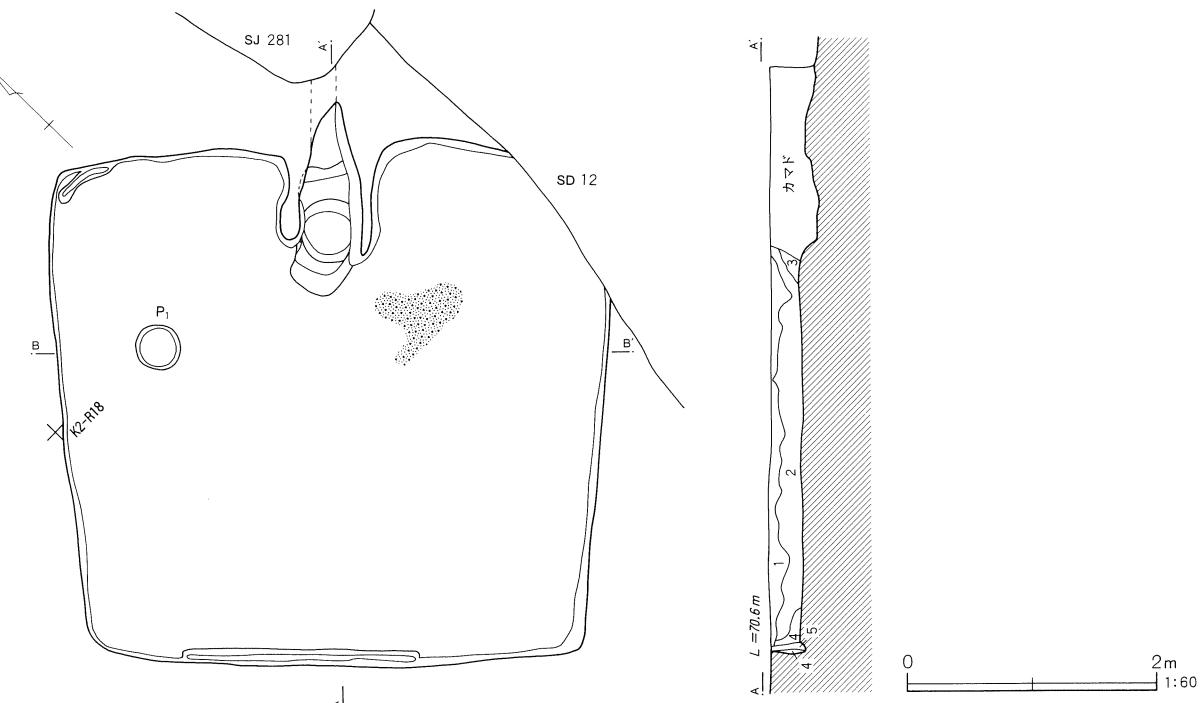
される。カマド廃絶時の底面は、この層の上面になると考えられる。煙道部には天井の崩落土が確認された。煙り出し口は新しい住居によって切られている。袖部は黒褐色土と砂を混ぜ合わした土で構築されている。

壁溝は南西壁および北コーナーで部分的に認められた。幅8cm、深さ5cmと細く浅い。埋土にみられる縦の堆積（5層）は、壁板材の痕跡を示すものかもしれない。

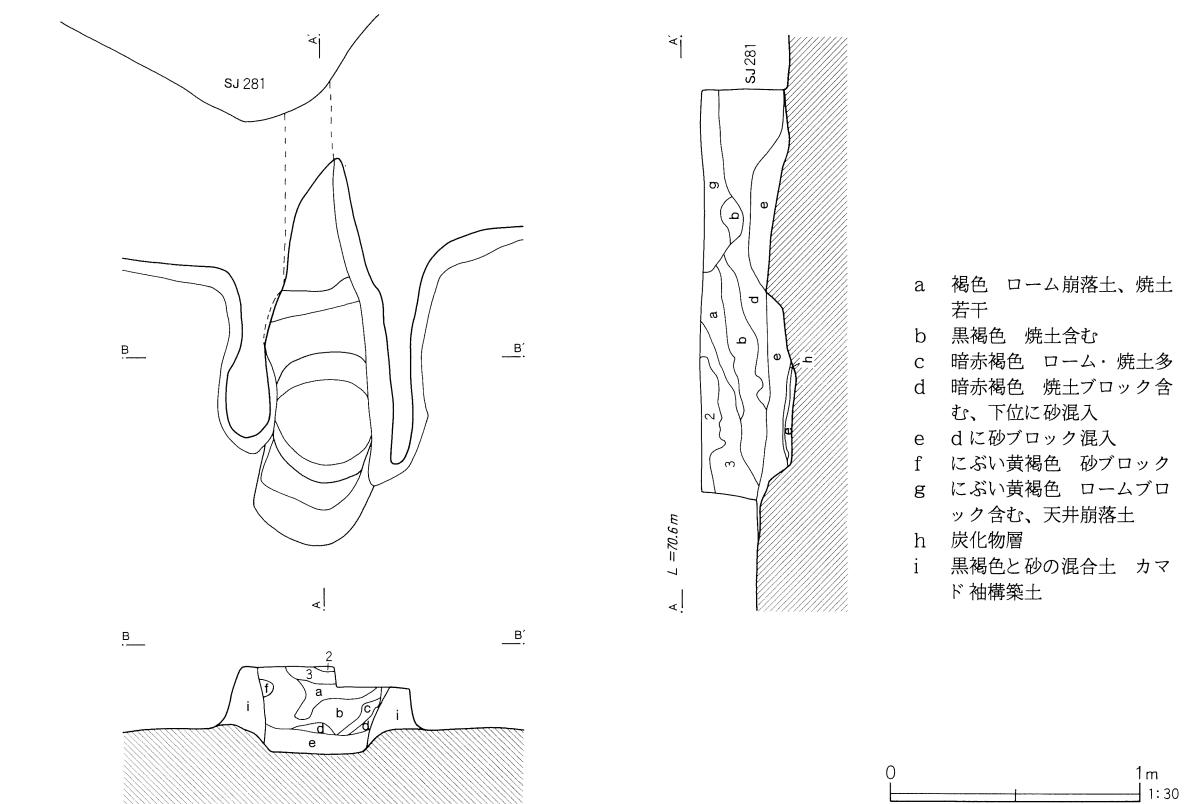
ピットは1基検出された。床面は比較的はっきりとしており、掘り込みも明瞭である。カマド燃焼部手前の床面には砂の堆積が認められた。カマドが砂を主体として構築されていることから、カマド材の痕跡とも考えられる。

遺物は、すべて埋土中からの出土で、量は少ない。

第16図 第250号住居跡・カマド

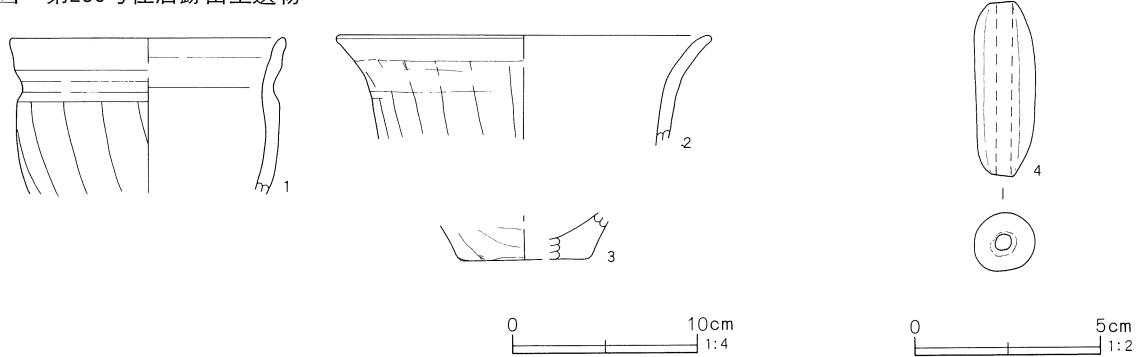


- 1 暗褐色 白色鉱物粒多
 2 暗褐色 ロームを斑状に多く混入
 3 暗褐色 ロームをシミ状に混入
 4 黒褐色 ローム、炭化物若干
 5 褐色 ローム主体
 6 黒褐色 ロームブロック含む



- a 褐色 ローム崩落土、焼土若干
 b 黒褐色 焼土含む
 c 暗赤褐色 ローム・焼土多
 d 暗赤褐色 焼土ブロック含む、下位に砂混入
 e d に砂ブロック混入
 f にぶい黄褐色 砂ブロック
 g にぶい黄褐色 ロームブロック含む、天井崩落土
 h 炭化物層
 i 黒褐色と砂の混合土 カマド袖構築土

第17図 第250号住居跡出土遺物



第250号住居跡出土遺物観察表（第17図）

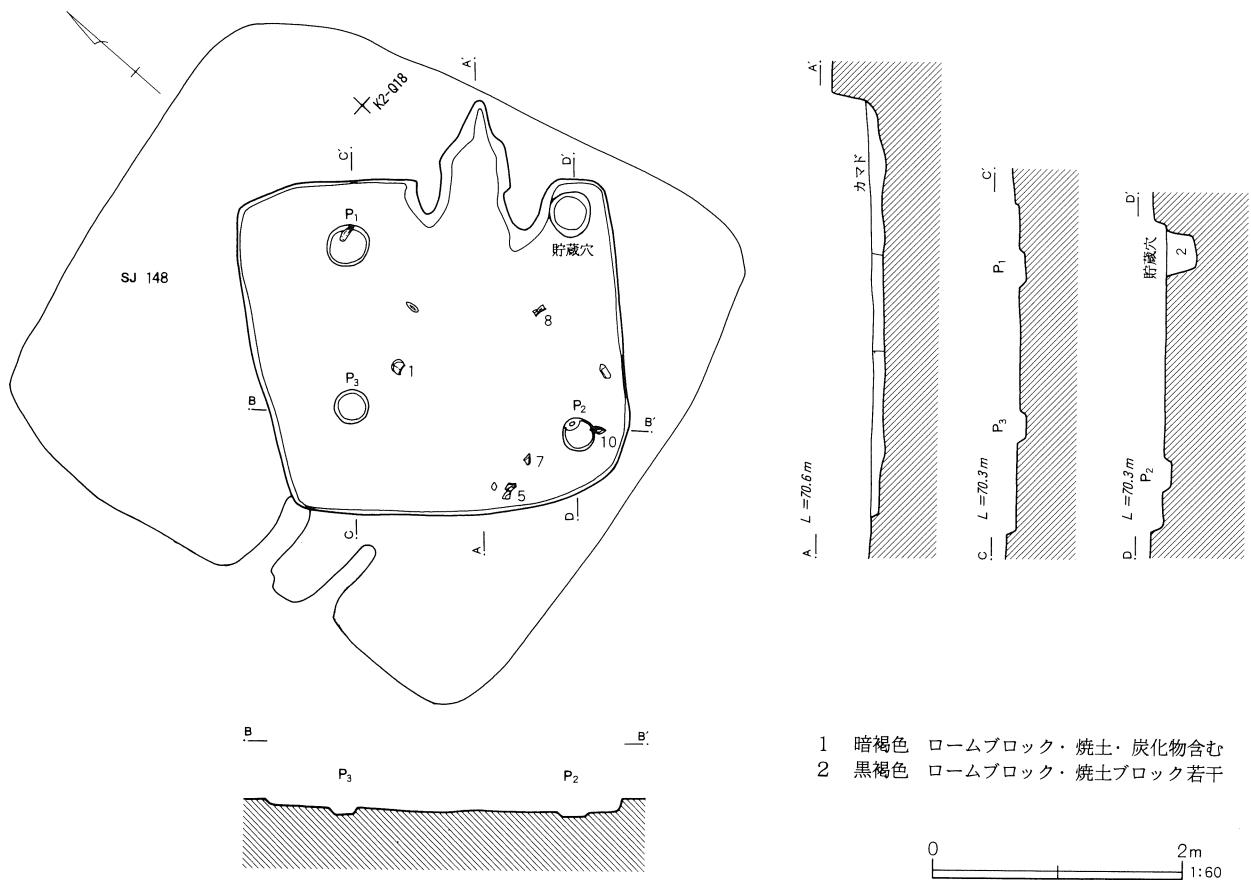
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	小形甕	(14.4)	(8.3)		A D F 2	B	B	10	埋土	
2	小形甌	(19.8)	(5.8)		A D F 1	A	C	5	埋土	
3	甕	(2.4)	(6.8)	A D 1	A	B		5	埋土	器面風化
4	土錘	長さ4.6cm、最大径1.6cm、孔径0.4cm、重さ12.9g						床下		

土師器甕・土錘がある。土師器壺の破片も出土しているが、図示できなかった。

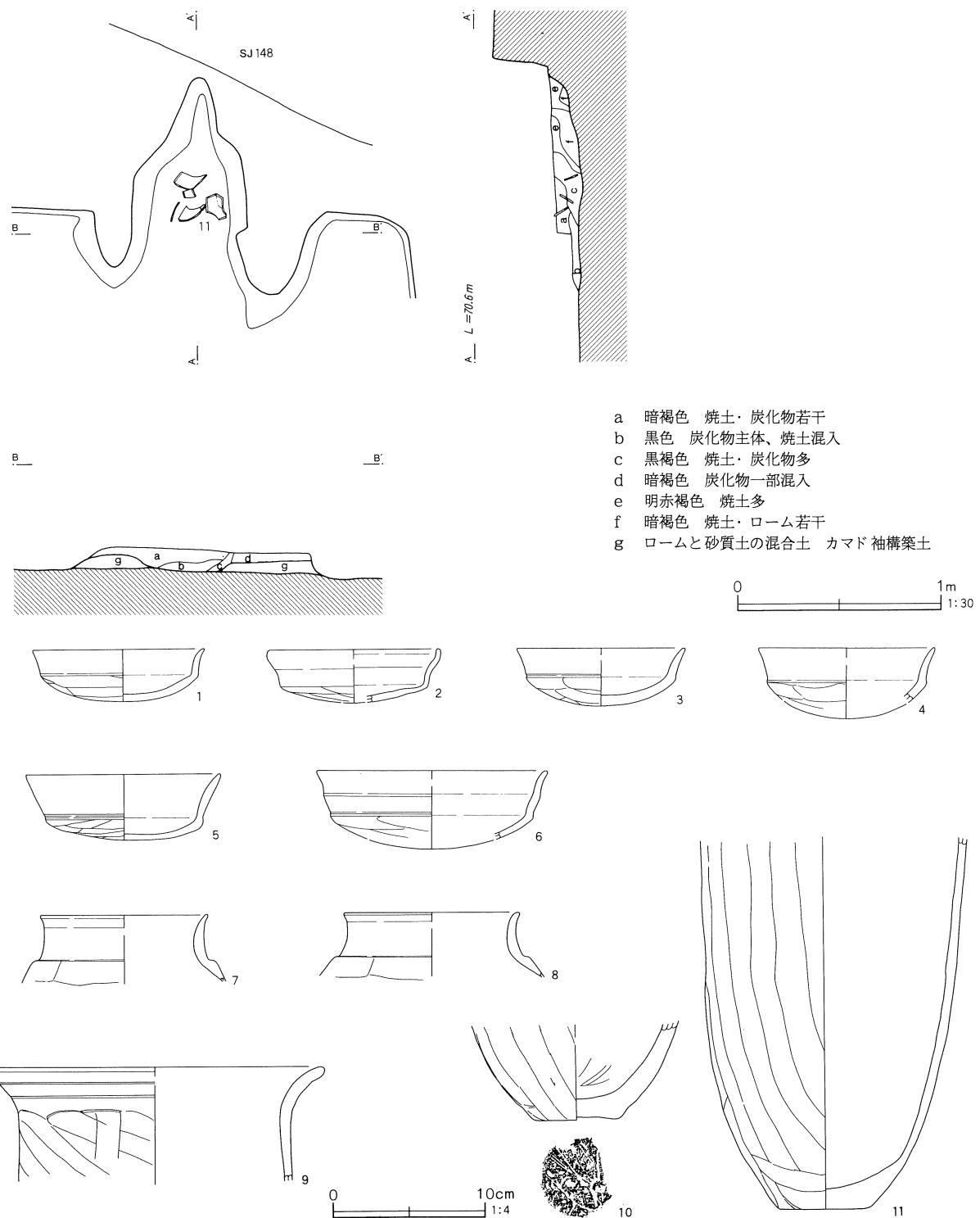
K2—P17・P18・Q17・Q18グリッドに位置する。形状は方形を呈する。長辺×短辺は 2.94×2.63 m、深さは10cmである。第148号住居跡の床面精査の際に検出された住居跡で、第148号住居構築の際に埋め戻さ

第252号住居跡（第18、19図 図版15上）

第18図 第252号住居跡



第19図 第252号住居跡カマド・出土遺物



れた可能性がある。埋土の大半が失われていた。カマドの傾きは N—49°—E である。

カマドは北東壁東寄りに検出されている。やや崩れた平面形を呈する。燃焼部は大きく広がるが、煙道部

は削平のため大半が失われている。全体の長さは約 120cm である。燃焼部の底面は浅く掘り込まれ、袖部はロームと砂質土を混ぜ合わせて造られている。

貯蔵穴は北東コーナーで検出された。直径およそ 30

第252号住居跡出土遺物観察表（第19図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	10.0	3.4		A F 2	B	C	70	床直	外面一部黒化
2	壺	(11.0)	(3.4)		A F 1	A	B	30	埋土	器面風化顯著
3	壺	(10.8)	3.7		A F 2	A	C	50	埋土	器面風化
4	壺	(11.3)	(3.5)		A D F 2	A	B	10	埋土	
5	壺	12.4	4.3		A D F 1	A	C	60	床直	内面、外面一部黒化 図版44-1
6	壺	(14.6)	(4.5)		A F 1	A	C	20	貯藏穴	
7	小形壺	(10.7)	(4.3)		A D F 2	A	B	10	床直	器面風化顯著
8	小形壺	(11.2)	(4.2)		A F 1	A	B	15	床直	器面風化顯著
9	甕	(21.6)	(7.4)		A D F 1	A	C	5	埋土	
10	甕		(6.3)	5.3	A D F 2	A	C	5	床直	底部木葉痕あり
11	甕		(24.1)	6.1	A D F 1	A	C	40	カマド	外面一部黒化

cm、深さは24cmである。底は平らでバケツ状に掘り込まれている。

確認された3基のピットも掘り込みが浅く、柱穴である確証はない。床面は明瞭でない。

出土遺物は、土師器壺・小形壺・甕がある。埋土中の遺物は第148号住居跡のものと混在している。

形を呈し、規模は49×36cmである。底面の掘り込みはほとんどなく、平坦である。煙道部は失われている。支脚には自然石が使用されていた。袖部はロームと暗褐色土の混合土で構築されている。被熱面は燃焼部底面に認められる。

貯藏穴は東南コーナー、カマド右脇に設けられている。楕円形で規模は50×61cm、深さは15cmである。

床面は西壁近くに第16号溝跡による攪乱を受けているが、他はおおむね良好な状態であった。ピットは検出されなかった。

カマドおよびその周辺の床面から、多くの遺物が出土した。カマド燃焼部からは土師器甕と小形甕が計4点、つぶれた状態で出土した。左袖部に接して4点の土師器壺が並び、カマド手前にも壺の並びがみられる。土錘は2点ともカマド支脚脇埋土から出土した。

第253号住居跡（第20、21図 図版15中、下）

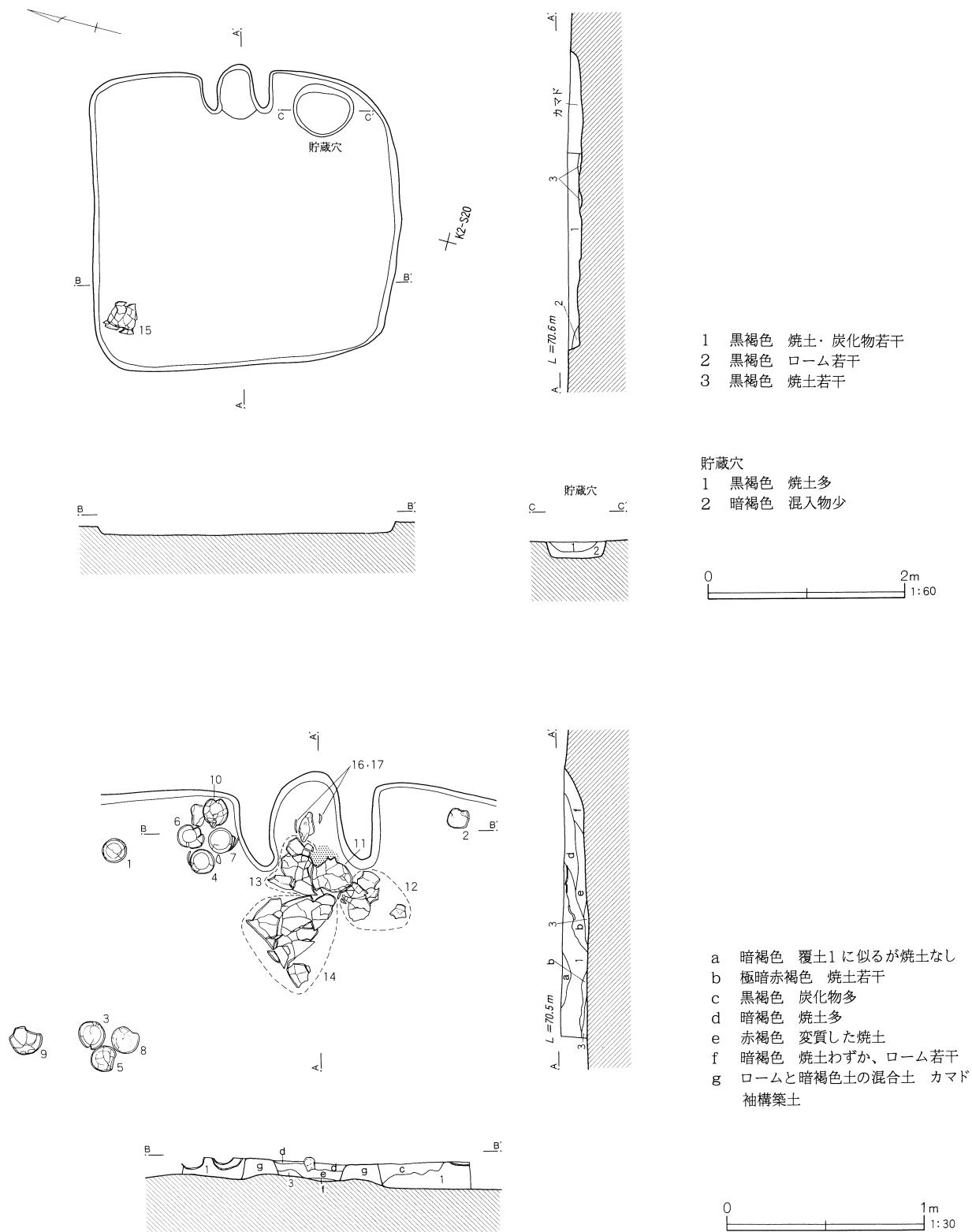
K2—R19・R20・S19・S20 グリッドに位置する。重複関係は、第16号溝跡に切られており、第3号円形周溝状遺構を切っている。形状は方形を呈する。長辺×短辺は3.10×2.96m、深さは9cmである。埋土はほぼ一層で、短時間の埋没が想定される。カマドの傾きはN—74°—Eである。

カマドは東壁中央に構築されている。燃焼部は楕円

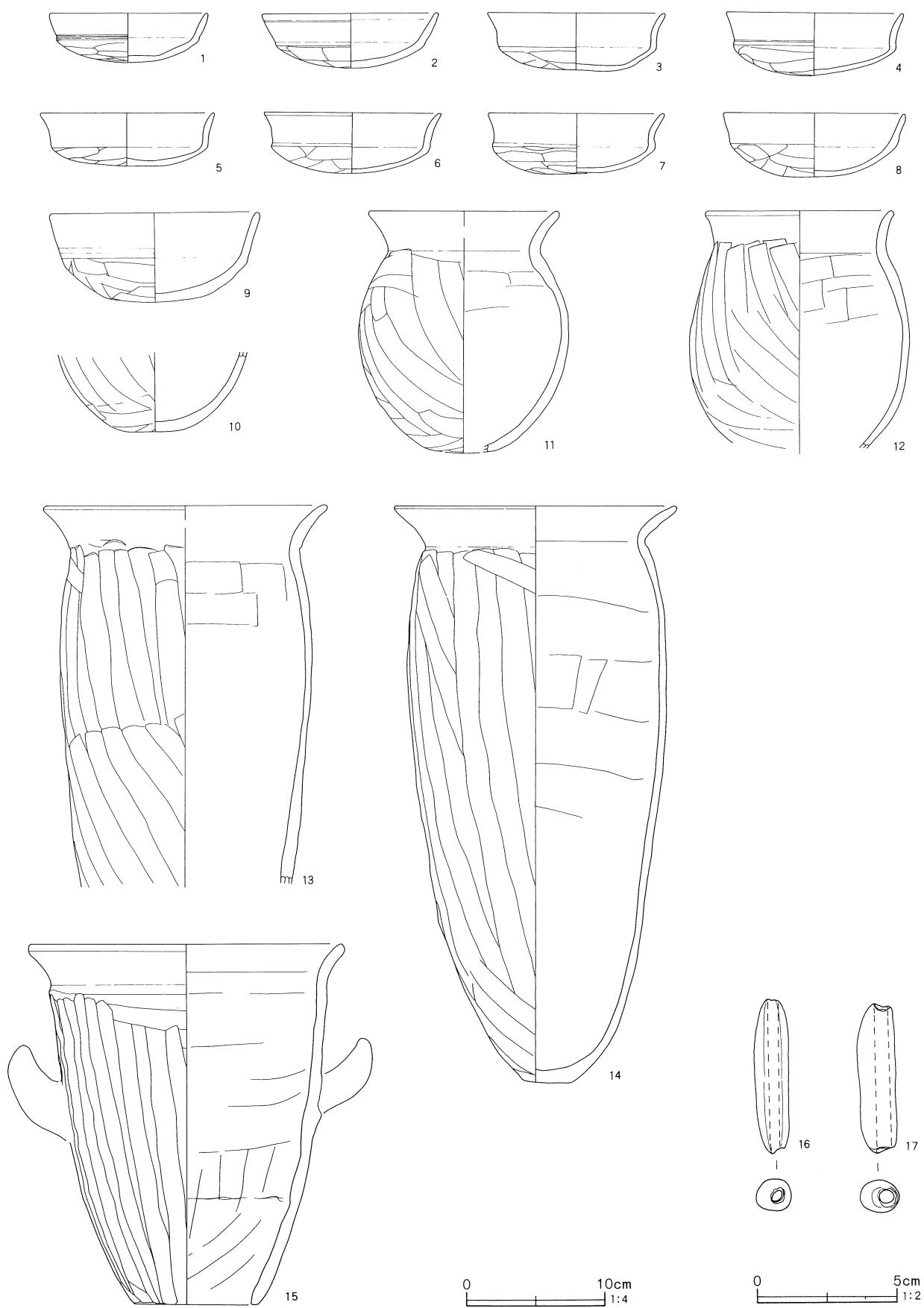
第253号住居跡出土遺物観察表（第21図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	11.2	3.5		A F 1	A	B	100	カマド脇	器面風化顯著 図版44-2
2	壺	12.4	3.9		A D F 1	A	C	50	カマド脇	内面黒色処理
3	壺	12.4	4.7		A D F 2	A	B	100	カマド前	器面風化顯著 図版44-3
4	壺	12.4	4.5		A D F 1	A	B	95	カマド脇	器面風化顯著 図版44-4
5	壺	12.4	3.8		A F 1	A	B	95	カマド前	器面風化顯著 図版44-5
6	壺	12.4	4.3		A F 1	A	C	95	カマド脇	図版44-6
7	壺	12.4	4.4		A F 1	A	B	80	カマド脇	器面風化顯著 外面一部黒化 図版44-7
8	壺	12.8	4.5		A F 2	A	B	95	カマド前	器面風化顯著 外面一部黒化 国版44-8
9	甕	14.8	6.4		A D F 1	A	B	60	カマド前	器面風化顯著 国版44-9
10	小形甕		(5.6)	4.8	A D F 1	A	C	20	カマド脇	外面一部黒化
11	小形甕	(13.3)	(17.6)		A D F 2	B	C	40	カマド	
12	小形甕	13.2	(17.0)		A D F 1	A	C	60	カマド	
13	甕	(19.8)	(27.0)		A D F 1	A	C	30	カマド	
14	甕	19.8	41.3	3.5	A D F 1	A	B	90	カマド	内面、外面一部黒化 国版74-1
15	甕	22.2	25.7	8.8	A D F 1	A	C	95	床直	外面一部黒化 取手欠失 国版79-3
16	土錘	長さ5.5cm、最大径1.2cm、孔径0.3cm、重さ7.6g						カマド埋土		
17	土錘	長さ5.3cm、最大径1.3cm、孔径0.5cm、重さ7.4g						カマド埋土		

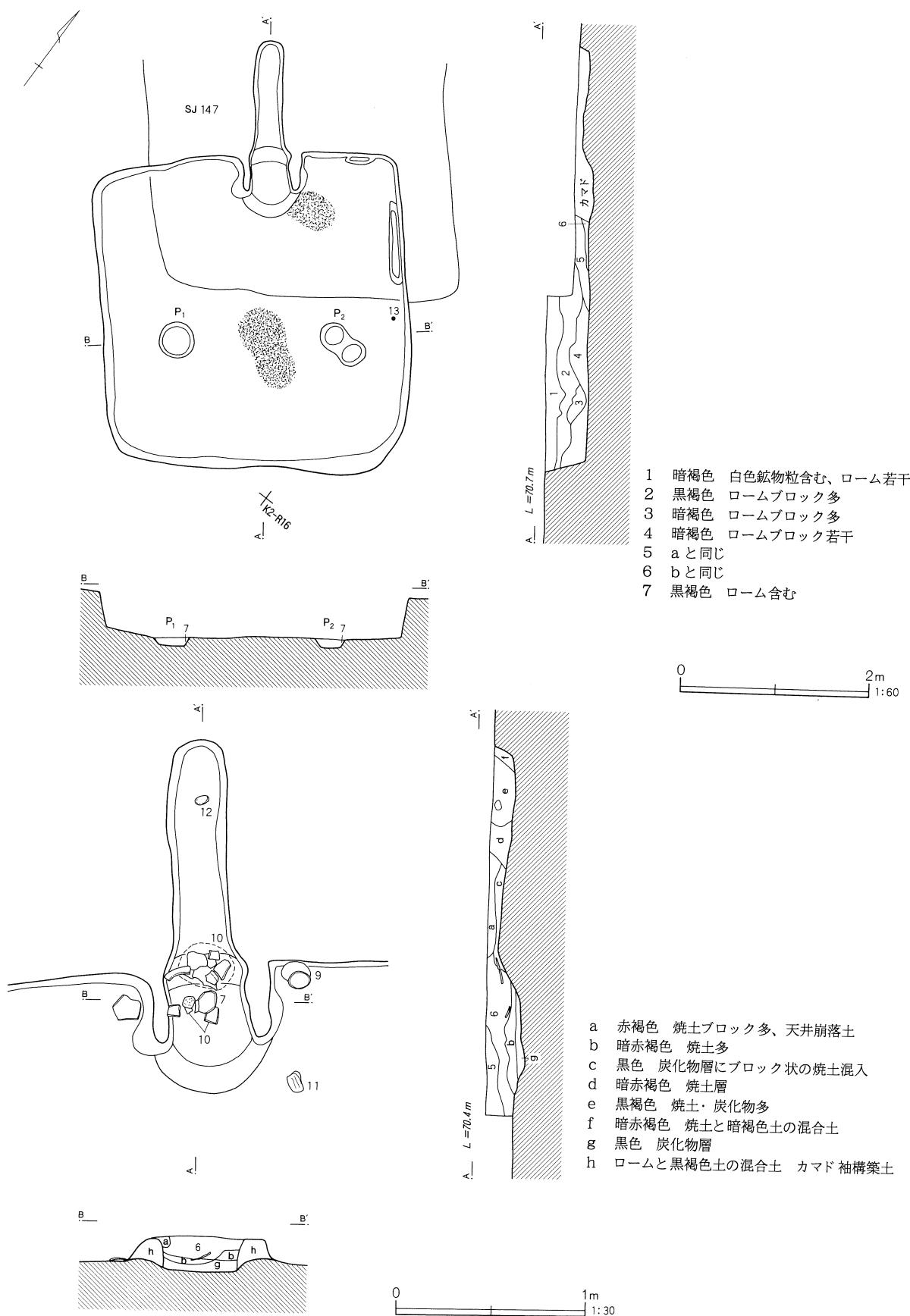
第20図 第253号住居跡・カマド



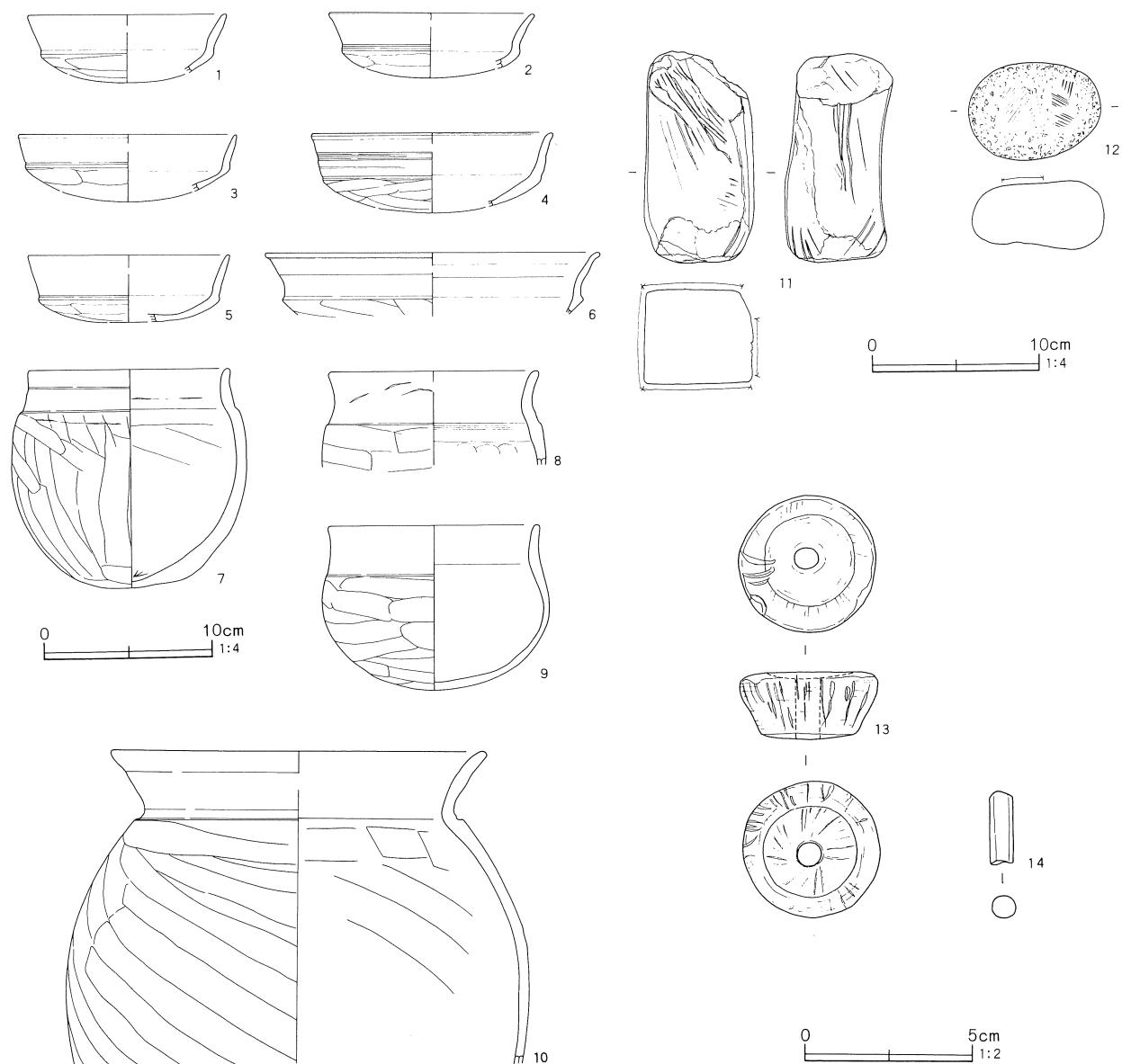
第21図 第253号住居跡出土遺物



第22図 第266号住居跡・カマド



第23図 第266号住居跡出土遺物



第266号住居跡（第22、23図 図版18下）

K2—Q15・Q16・R15 グリッドに位置する。第147号住居跡にカマド部分を切られている。形状は方形を呈する。長辺×短辺は 3.30×3.24 m、深さは45cmである。カマドの傾きは N—36°—W である。

カマドは北西壁わずかに東寄りに構築されている。燃焼部は箱形で、規模は 73×42 cmである。底面は浅く皿状に掘り込まれている。煙道部の規模は長さ110cm、幅29cmである。底面は燃焼部の底面から斜めに立ち上がり、煙り出し口にかけて徐々に深さを増していく。袖部は基部にロームを残し、ロームと黒褐色土の混合

土を積み上げて構築されている。

壁溝は北コーナー付近にわずかに検出された。幅10cm前後、深さは9cm程である。

ピットは2基確認されたが、ともに浅く、柱穴とは判断できない。

壁の掘り込みは深く、立ち上がりもしっかりとしている。床面の直上に炭化物の薄い層が堆積しているところが2ヶ所確認された。

主な出土遺物は、土師器壺・小形甕・甕である。土器の他に、砥石や紡錘車、土製品が出土している。

第266号住居跡出土遺物観察表（第23図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色調	残存率	出土位置	備 考
1	壺	(11.5)	(3.4)		A D 2	A	C	10	埋土	
2	壺	(12.0)	(3.3)		A D 1	A	C	10	埋土	口縁一部黒化
3	壺	(12.7)	(3.4)		A 1	A	C	10	埋土	器面風化
4	壺	(12.0)	(4.4)		D F 1	A	C	15	埋土	
5	壺	(11.7)	(3.9)		A C D 2	A	B	15	埋土	器面風化顯著
6	鉢	(19.5)	(3.7)		A 2	A	B	5	埋土	器面風化顯著
7	小形甕	11.6	13.0		A D F 5	A	B	60	カマド	外面一部黒化
8	小形甕	(12.2)	(5.6)		A D F 1	A	C	5	埋土	
9	小形壺	(12.2)	(9.8)		A B D F 2	A	B	90	カマド脇	器面風化顯著 図版62-6
10	甕	(21.8)	(18.4)		A D F 5	A	C	30	カマド	
11	砥石	長さ12.5cm、断面幅5.5×6.5cm、重さ757.6g							カマド前	研面4面 刃傷あり 凝灰岩
12	すり石	径5.7×7.8cm、重さ131.5g							カマド埋土	すり面一部 刃傷あり 多孔質安山岩(軽石)
13	紡錘車	上径3.5cm、下径2.1cm、厚さ2.0cm、孔径0.7cm、重さ38.1g							床直	縫刻あり 滑石製
14	土製品	長さ2.2cm、最大径0.7cm、重さ1.0g							埋土	棒状品 穿孔なし

第270号住居跡（第24、25図 図版20上）

K2—R15・R16・S15・S16グリッドに位置する。大半を第271・275号住居跡によって切られているが、形状は方形を呈するものと推定される。西壁の長さは4.08m、深さは18cmである。カマドの傾きはN—27°—Wである。

カマドは北壁に構築されているが、第275号住居跡によって燃焼部は失われている。残っていた煙道部は長さ97cm、幅約16cmである。煙り出し口は橢円形に掘り込まれている。底面は煙り出し口に向ってゆるやかに立ち上がっている。

ピットは2基検出されたが、柱穴かどうかは不明で

ある。なお、南西コーナーに自然石が17点集中して出土した。いずれも、使用痕は認められなかった。

床面の出土を確認できた遺物はない。すべて埋土中から出土したものである。主なものに土師器壺・高壺・甕・壺、須恵器蓋・小形甕があるが、本住居跡よりも新しい第275号住居跡と重なる範囲が広いため、両住居跡の遺物が混在して取り上げられているようである。

第271号住居跡（第26、27図 図版20中）

K2—Q16・Q17・R16・R17グリッドに位置する。重複関係は、第13号溝跡と第149号住居跡に切られ、第

第270号住居跡出土遺物観察表（第25図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色調	残存率	出土位置	備 考
1	壺	(10.6)	(3.0)		A D F 1	B	B	20	埋土	高温焼成 須恵質
2	壺	11.3	3.4		A D F 1	A	C	70	埋土	図版47-9
3	壺	10.4	3.3		A D F 2	A	B	60	埋土	外面黒化
4	壺	11.2	3.2		A D F 1	B	B	50	埋土	器面風化顯著
5	壺	(13.9)	(3.5)		A D 1	A	B	10	埋土	内面、外面一部黒化
6	壺	(14.0)	(3.7)		A D F 2	A	C	10	埋土	内面黒化
7	壺	(13.0)	(3.5)		A D F 1	A	B	10	埋土	器面風化顯著
8	壺	(14.6)	(4.1)		A D F 2	A	C	10	埋土	
9	壺	(10.6)	(3.2)		A D F 1	A	B	15	埋土	
10	壺	(14.2)	(3.8)		A D F 1	A	C	25	埋土	
11	高壺	(17.6)	(3.7)		A D F 1	A	C	10	埋土	壺部破片
12	甕	(19.6)	(5.6)		A D F 5	A	B	5	埋土	
13	甕	(23.6)	(8.0)		A D F 1	A	B	10	埋土	
14	甕	(5.0)	(7.5)	A B D F 5	A	B	5	埋土	底部破片	
15	小形甕	(3.6)	(6.0)	A B D F 2	A	C	5	埋土	底部破片 内面、外面一部黒化	
16	甕	(6.1)	(12.0)	A D F 1	A	B	5	埋土	底部破片	
17	蓋	(13.0)	(3.8)	A D F 2	A	C	30	埋土	須恵器 群馬産？	
18	小形甕	(11.8)	(13.0)	D F 2	A	J	25	埋土	須恵器 産地不明 口縁内面ヘラ記号あり	

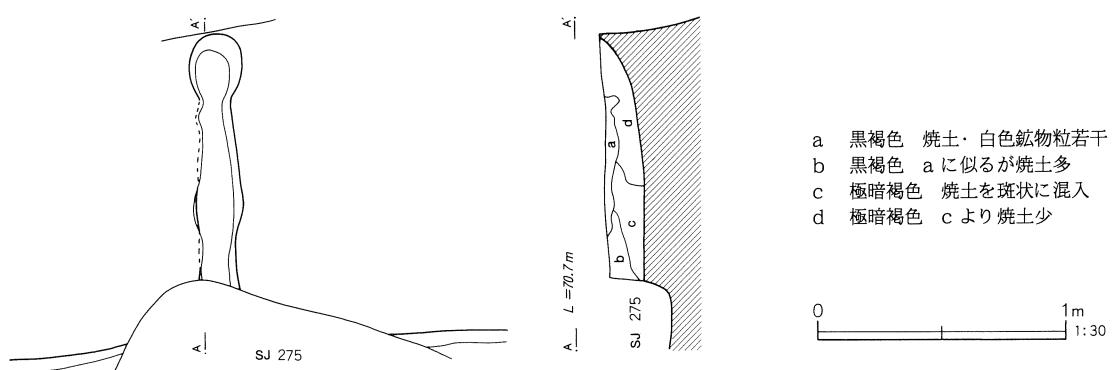
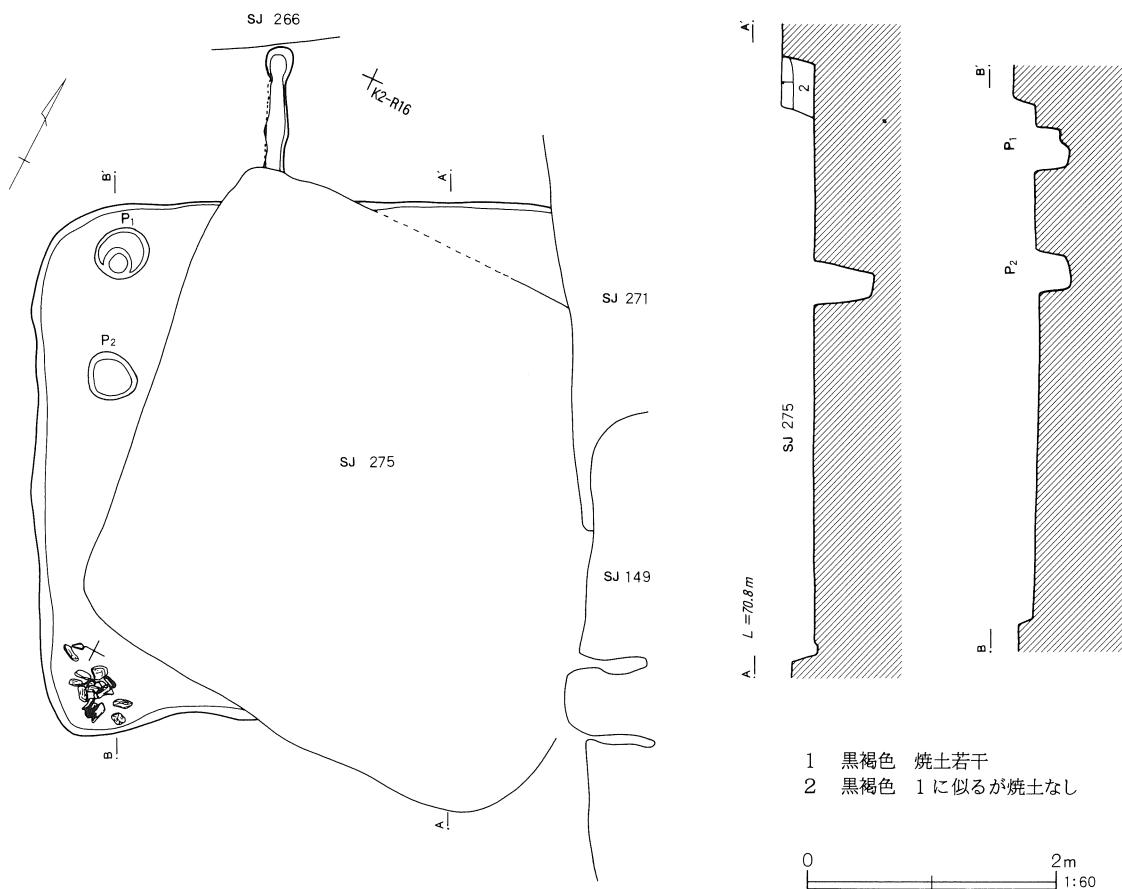
272号住居跡を切っていると考えられるが、第275号住居跡との新旧関係は不明である。形状は方形を呈する。長辺×短辺は4.02×3.87m、深さは27cmである。カマドの傾きはN—55°—Eである。

カマドは北東壁中央に構築されている。壁はカマドを中心として扇状にひらく。燃焼部はややゆがんでおり、規模は70×46cmである。底面は浅く掘り込まれ、

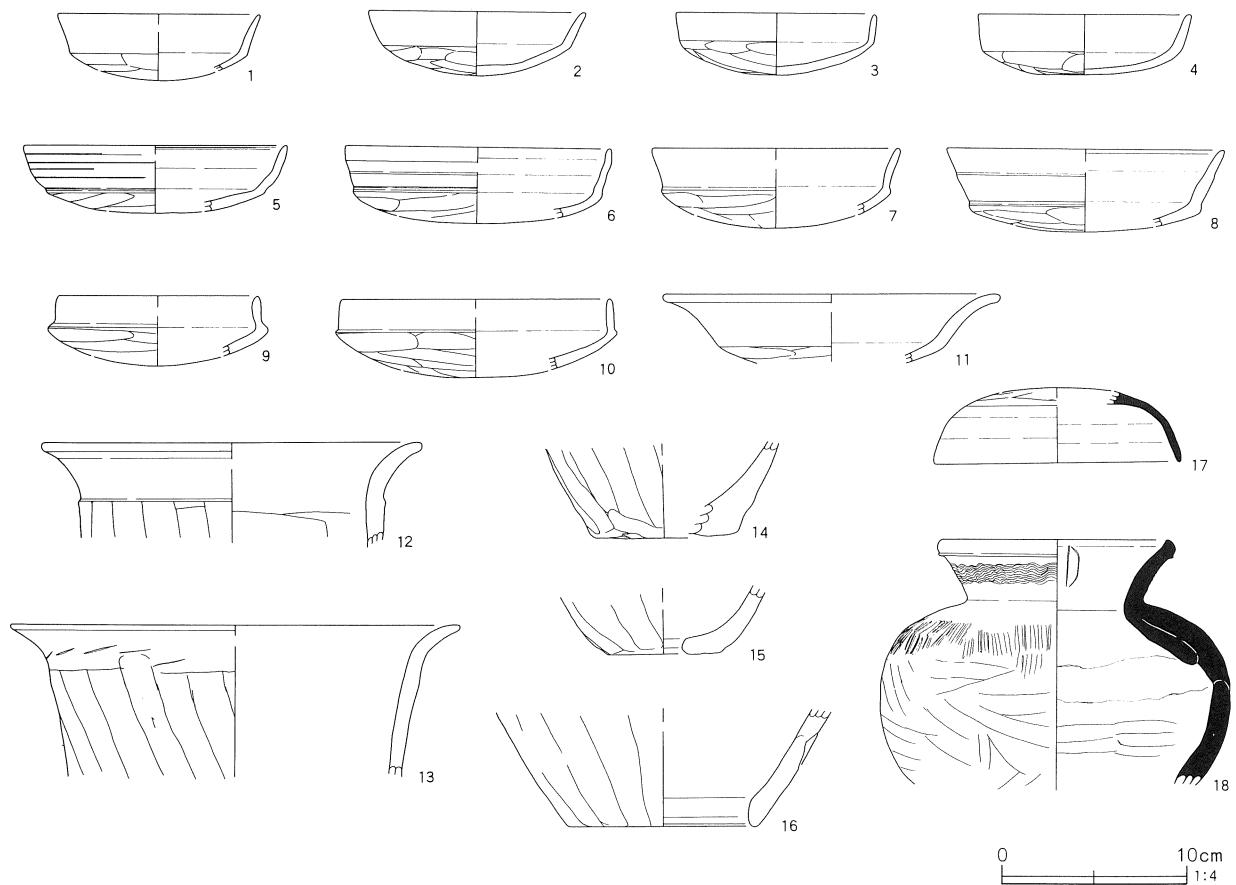
ゆるやかに煙道部へ移行する。煙道部は第13号溝によって、大半が失われている。袖部はロームを基部として構築されていたものと考えられるが、全体に崩れしており、構築土はわずかに認められたに過ぎない。

貯蔵穴は東南コーナーに位置する。形状は楕円形で、規模は44×58cm、深さは12cmと浅い。底面はやや凹凸がみられる。

第24図 第270号住居跡・カマド



第25図 第270号住居跡出土遺物



壁溝は局部的に検出された。幅10cm、深さ5cm前後である。

ピットは7基確認されたが、すべて本住居跡に伴うものと判断した。P1・P2・P3・P4は掘り込みは浅いが、その位置関係から柱穴と思われる。主柱穴の間隔をみると、カマドに向かってやや右寄りに長い長方形を呈する。P1-P2間は約2m、P3-P4間は約2.3m、P2-P3間は約1.3m、P1-P4間は約1.5mである。P6は深さ10cm、P7は深さ34cmである。P5は住居跡の中心に位置し、埋土には焼土が多量に含まれていた。

本住居跡は多くの遺構と切り合い関係にあるが、壁の立ち上がりや床面は明瞭に検出された。

床面近くから出土した遺物はほとんどなく、大半は埋土中から出土した。主な出土遺物には、土師器壺・甕がある。

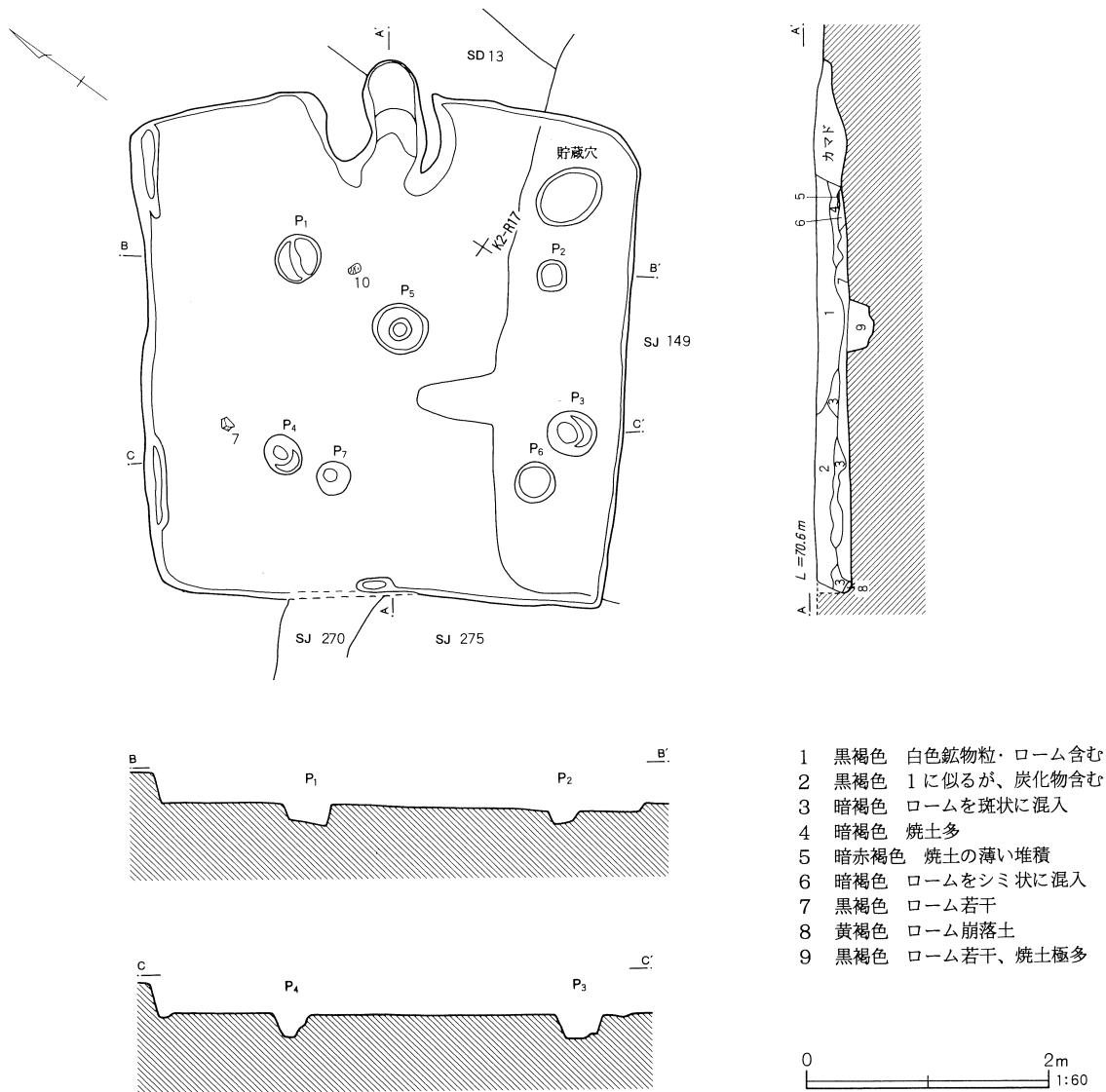
第272号住居跡（第28図 図版20下）

K2-Q17・R16・R17グリッドに位置する。重複関係は第149・271号住居跡に切られており、第273号住居跡を切っている。形状は方形を呈するものと推定される。東壁の長さは3.63m、深さは17cmである。カマドの傾きはN-99°-Eである。

カマドは東壁に中央に構築されている。第149号住居跡の構築時に燃焼部の大半が削平されたものである。燃焼部は痕跡で楕円形の掘り込みが残る。煙道部との境はちょうど第149号住居跡の壁の立ち上がりと重なっており、判然としない。煙道部は長さ約80cm、幅23cmである。底面は平らである。ピットは4基検出された。深さは10~20cmと浅いが、柱穴と考えられる。2軒の住居跡に切られているため、西側の壁は失われ、部分的に床面のレベルまで削平されている。

遺物は土師器の小さな破片が少量出土したが、図示できるものはない。

第26図 第271号住居跡



第273号住居跡（第29図 図版21上）

K2-R17・R18 グリッドに位置する。重複する第149・250・272号住居跡のすべてに切られている。カマドを含む住居跡西半は、第149号住居跡の床面で確認された。形状は長方形を呈する。長辺×短辺は3.39×2.56m、深さは27cmである。カマドの傾きはN-108°-Wである。

カマドは西壁中央に構築されている。燃焼部は楕円形を呈し、規模は67×62cmである。底面は皿状に掘り込まれている。煙道部へは浅くなだらかな段を介する。煙道部は長さ42cm、幅22cmである。第149号住居跡に削平されているため、全体に底面近くのみが残っている。

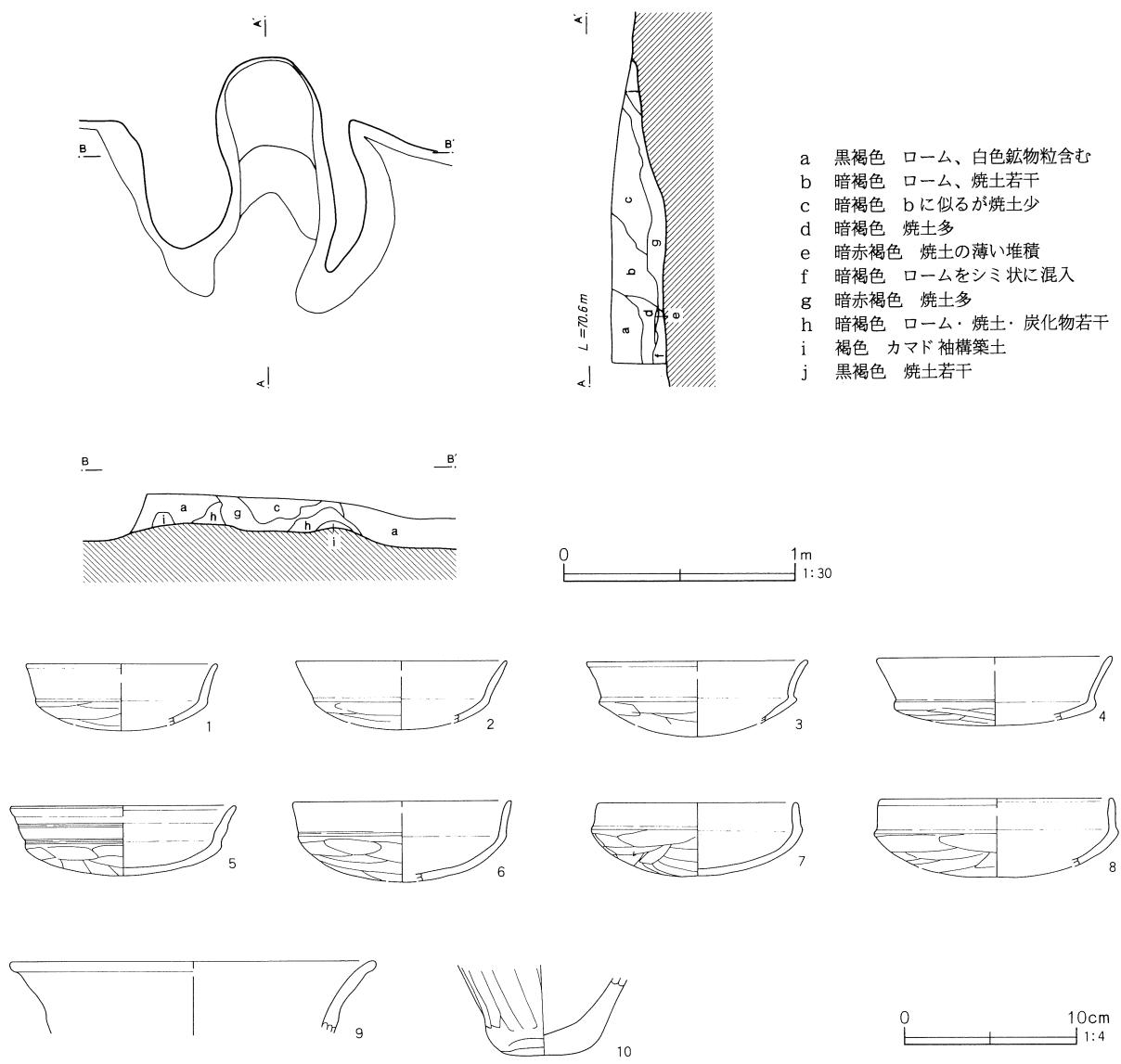
貯蔵穴は北西コーナーに位置する。円形で径35×38cm、深さは11cmと浅い。掘り込みはなだらかで底面はやや丸みを帯びる。

P1-P4 は柱穴と考えられるが、深さは8~15cmといずれも浅く、柱痕は認められなかった。

埋土は比較的自然な堆積状況を示していると考えられるが、北壁際に堆積した埋土には、焼土を多く含む層が確認された。

出土遺物は少なく、すべて埋土中から出土した破片である。図示できたのは土師器壺と甕それぞれ1点ずつである。

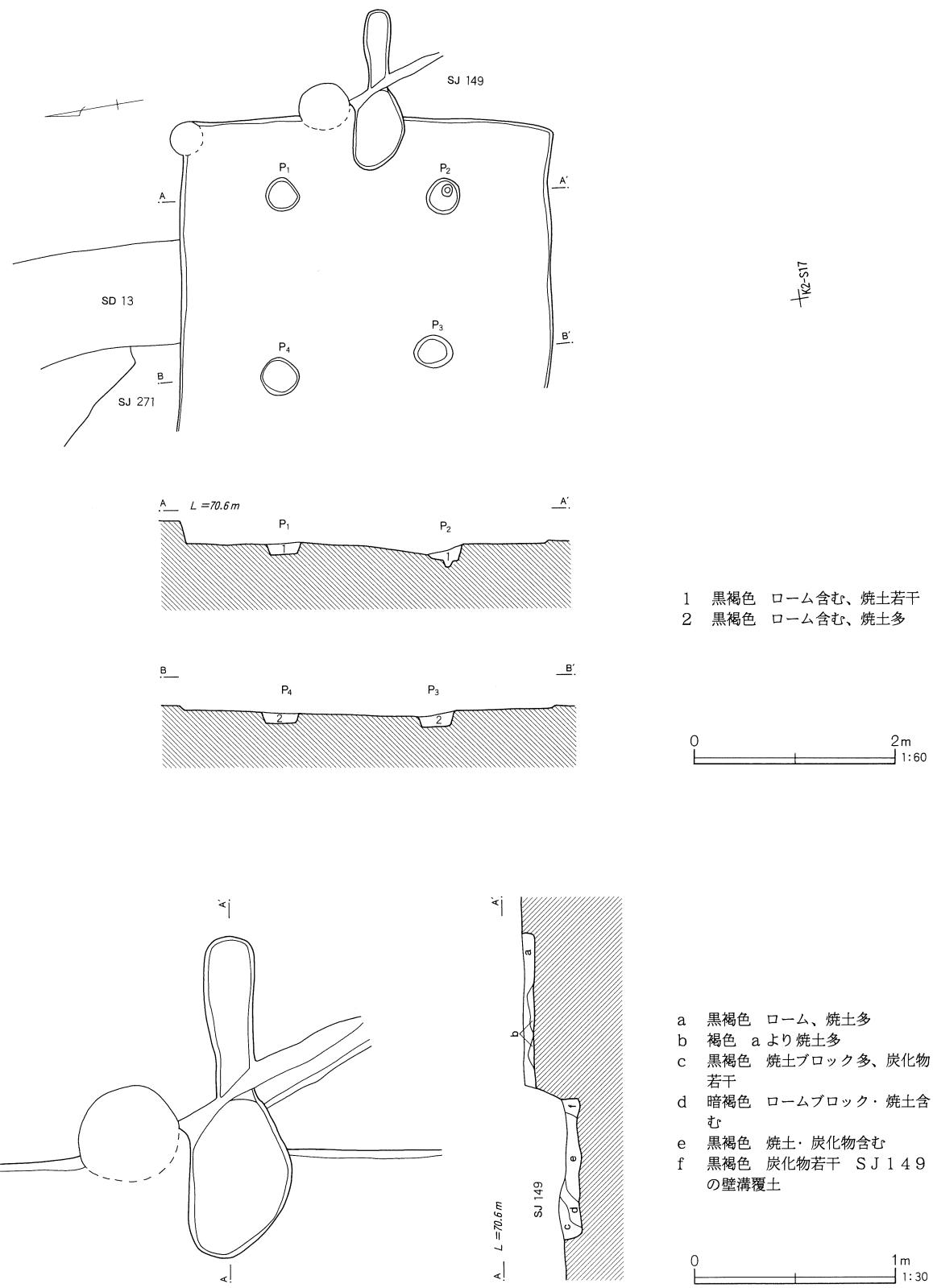
第27図 第271号住居跡カマド・出土遺物



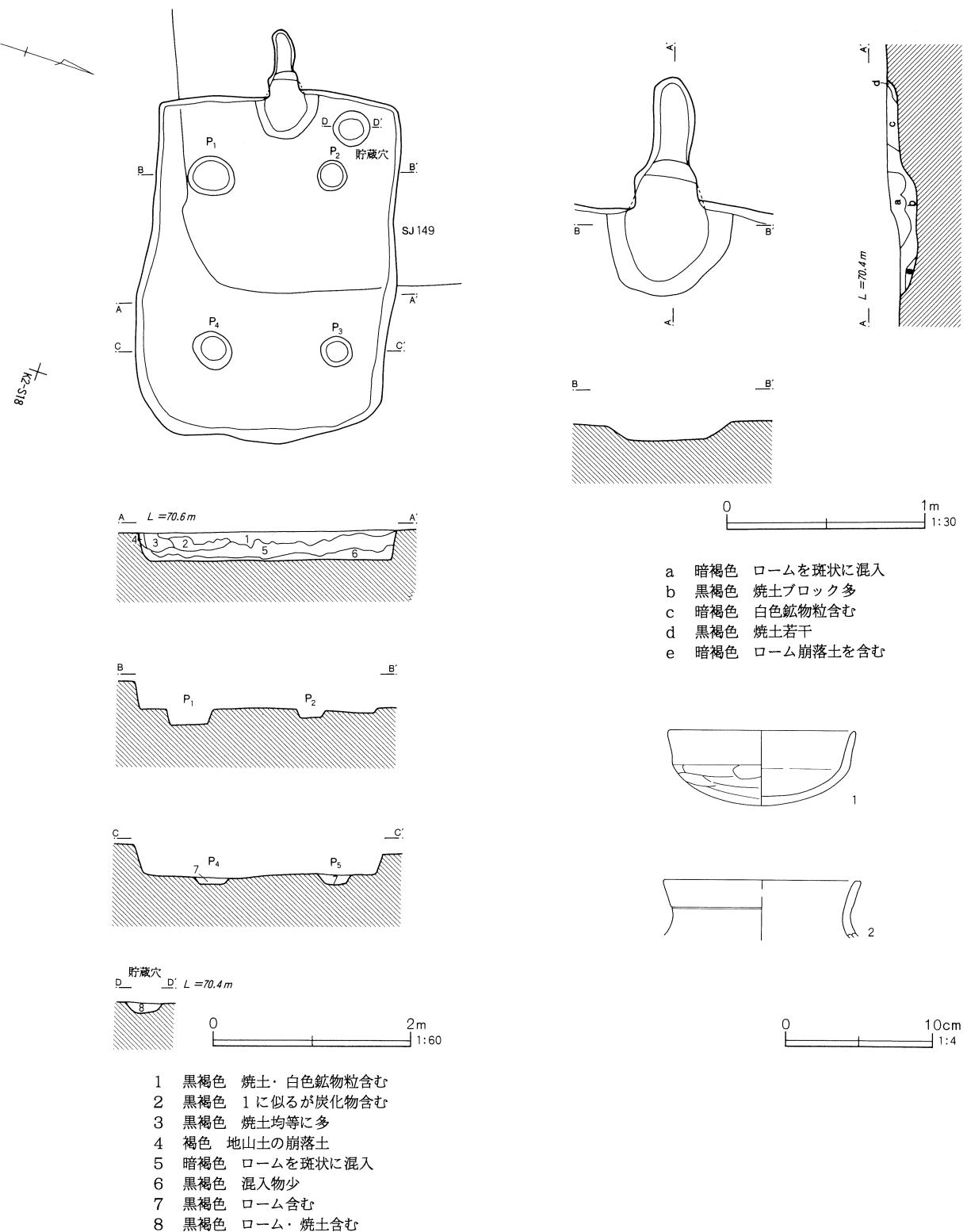
第271号住居跡出土遺物観察表（第27図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(10.6)	(3.5)		DF 2	A	C	25	埋土	
2	壺	(12.0)	(3.6)		ADF 2	A	B	20	埋土	器面風化顕著
3	壺	(12.4)	(3.6)		ADF 2	A	B	10	埋土	器面風化
4	壺	(13.2)	(3.7)		ADF 5	A	C	25	埋土	
5	壺	(12.8)	4.0		DF 1	A	B	15	埋土	内面、外面一部黒色化
6	壺	(12.4)	(4.6)		AF 1	A	B	35	埋土	器面風化顕著
7	壺	11.2	4.2		DF 1	A	F	95	埋土	図版47-10
8	壺	(13.2)	(3.9)		AF 1	A	C	20	カマド	
9	甕	(20.7)	(4.0)		ADF 1	A	C	5	埋土	口縁部破片
10	甕		(4.2)	5.5	ABCD F 5	A	B	5	埋土	底部破片

第28図 第272号住居跡・カマド



第29図 第273号住居跡・カマド・出土遺物



第273号住居跡出土遺物観察（第29図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	12.4	5.0		A F 2	A	C	20	埋土	器面風化顯著
2	小形甕	(13.0)	(3.9)		AD 1	A	B	5	埋土	口縁部破片

第275号住居跡 (第30~32図 図版20上)

K2-R15・R16 グリッドに位置する。第270号住居跡を切るが、他の切り合う住居跡との新旧関係は不明である。形状は方形を呈する。長辺×短辺は3.98×3.81m、深さは20cmである。埋土は黒褐色土と暗褐色土で構成されている。カマドの傾きはN-90°-Eである。

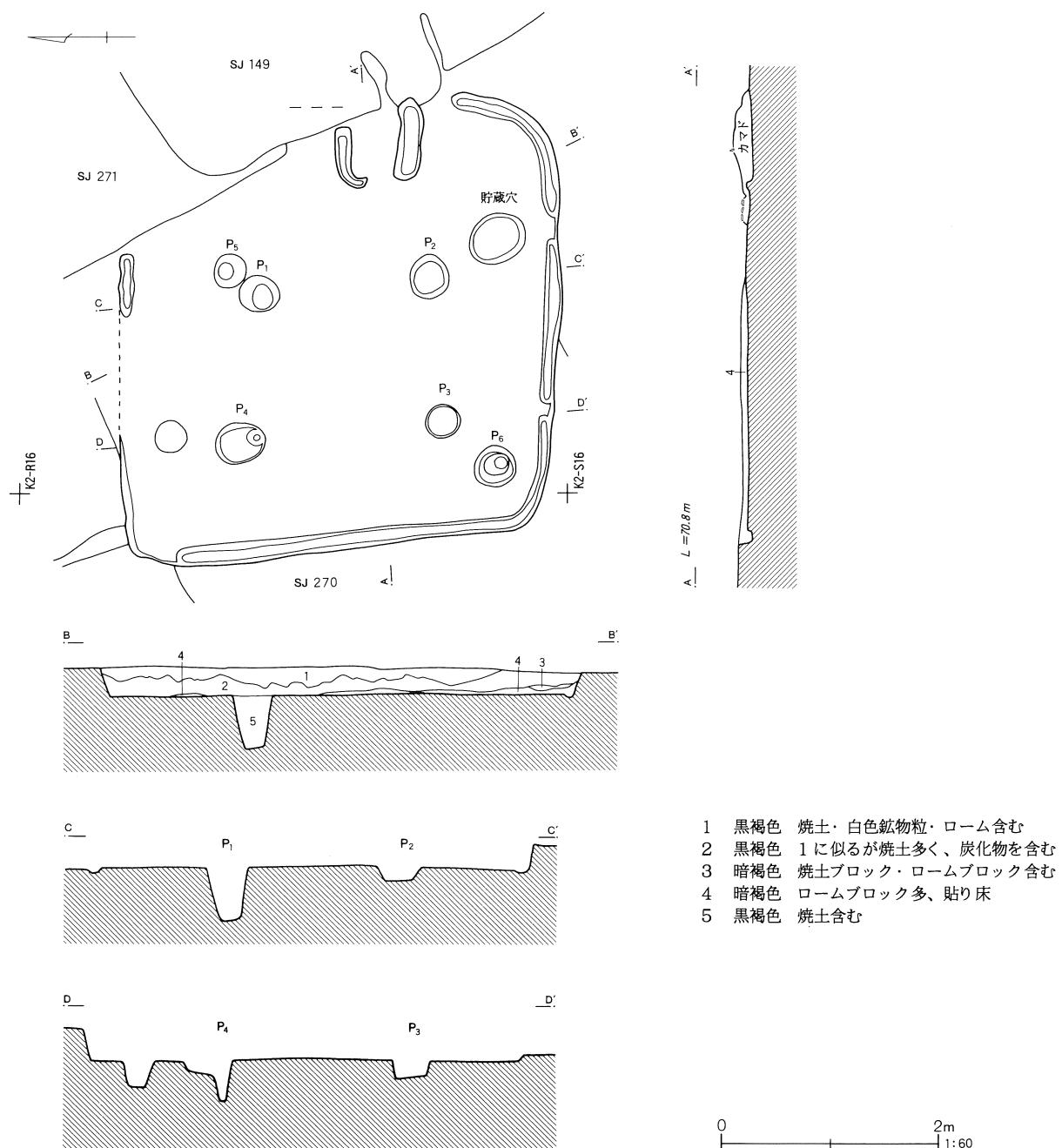
カマドは東壁南寄りに構築されるが、第149号住居跡構築の際に壊されており、燃焼部の一部が残ってい

たものである。燃焼部は箱形を呈していたものと推定される。底面にはわずかに掘り込みをもつ。袖部はロームと砂を混ぜ合わした土で構築されている。

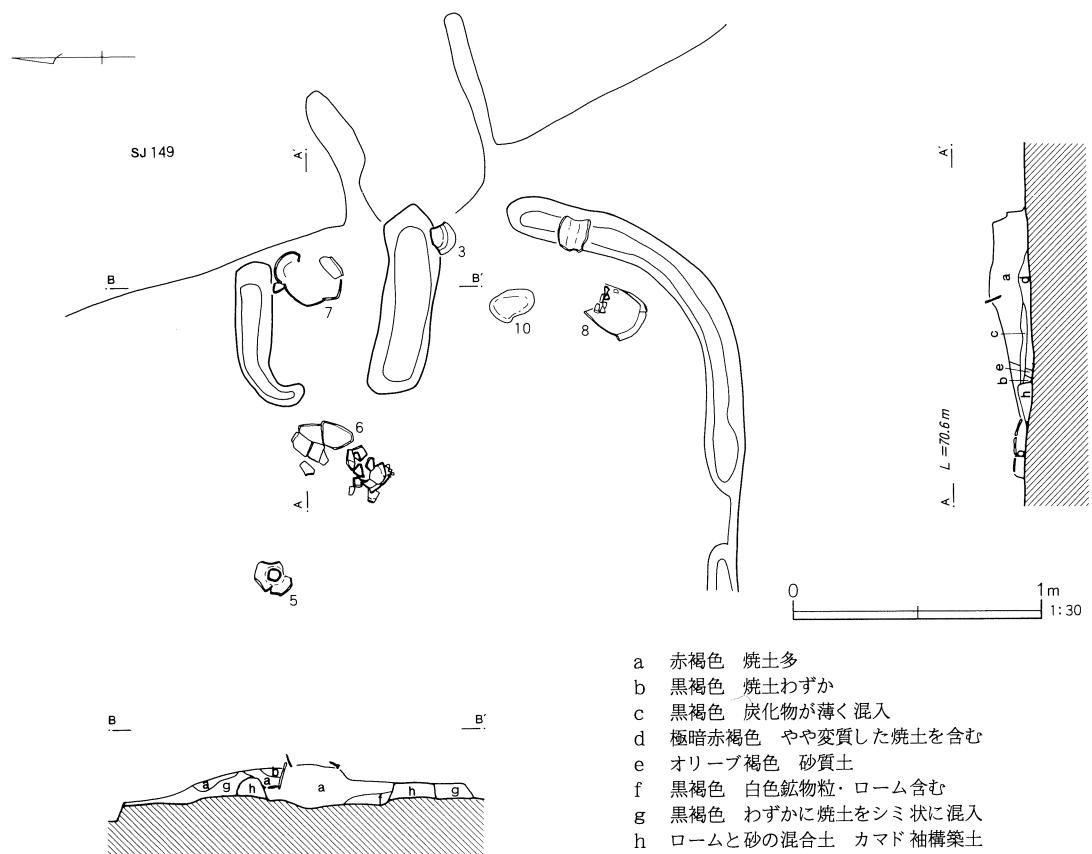
貯蔵穴は東南コーナー近くで検出された。楕円形を呈し、規模は42×54cm、深さは7cmである。埋土には焼土が多く含まれていた。掘り込みは浅く、底面は平らである。貯蔵穴ではない可能性もある。

壁溝は途切れがちではあるが、ほぼ全周する。幅は15~18cm、深さは3~5cmである。北壁は削平されて

第30図 第275号住居跡



第31図 第275号住居跡カマド



第275号住居跡出土遺物観察表（第32図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(11.6)	(3.0)		BD 2	A	H	20	埋土	須恵器 木野産?
2	壺	12.1	4.1		ADF 2	A	C	95	埋土	器面風化顯著 図版48-1
3	壺	12.5	4.0		ADF 2	A	C	55	カマド脇	
4	壺	11.6	3.7		ADF 2	A	C	70	埋土	器面風化顯著
5	高壺	(7.5)	13.0		ADF 5	B	C	30	カマド前	脚部80% 外面一部黒化
6	甕	(26.0)	(6.5)		ADF 1	A	C	50	カマド前	
7	甕	22.3	37.6	4.9	ADF 2	A	C	50	カマド	外面半分黒化 表面に粘土付着 図版74-3
8	甕	17.7	(29.3)		ADF 2	A	C	50	カマド脇	器面風化顯著
9	甕		(6.4)		ADF 5	A	C	5	埋土	外面一部黒化 器面風化顯著
10	すり石	径12.3×17.2cm、重さ759.0g							カマド脇	すり面片面 閃緑岩

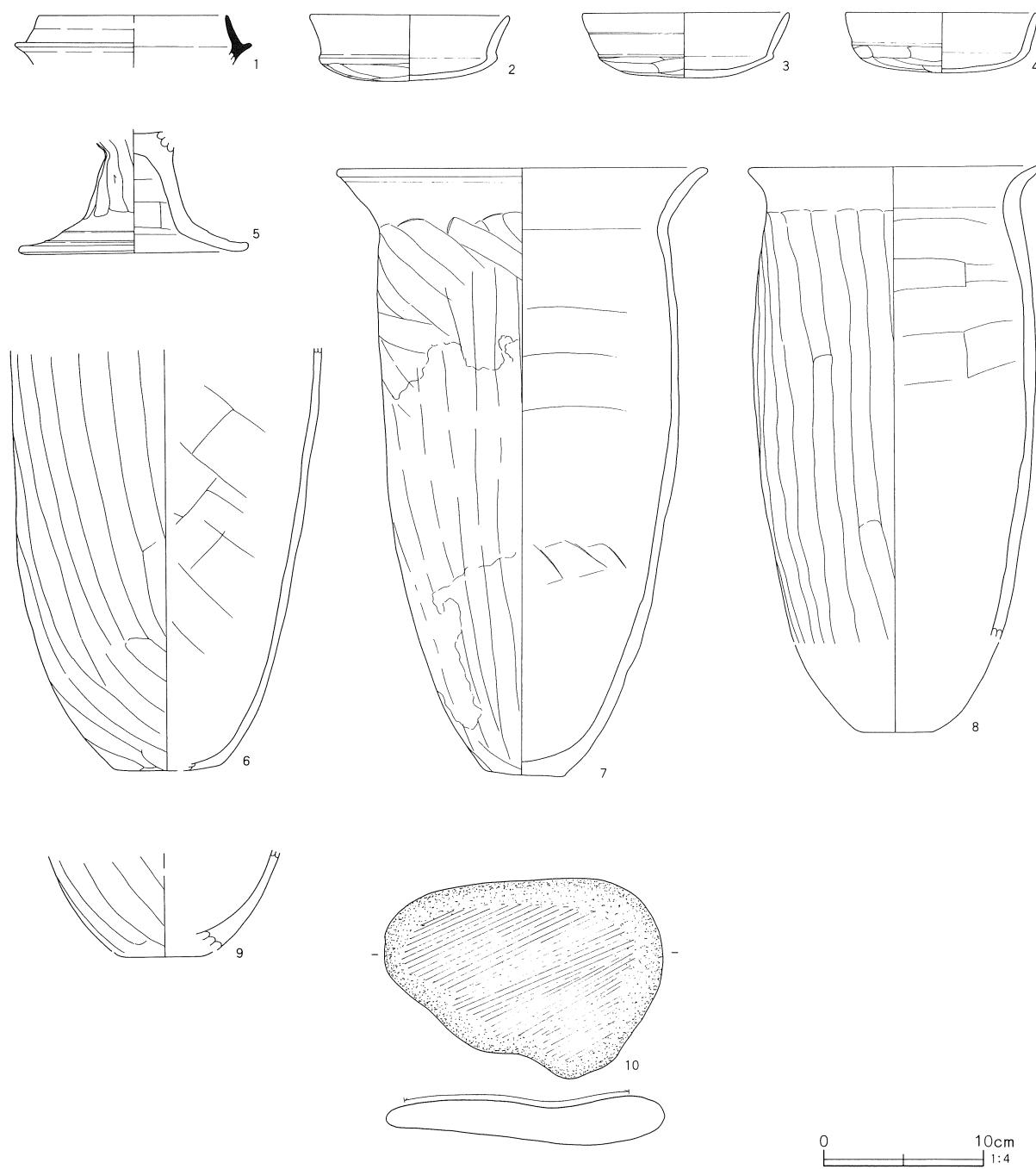
失われたものと考えられる。

ピットは6基検出された。すべて、本住居跡に伴うものと考えられる。柱痕は確認されなかったが、位置的にP1~P4が主柱穴と考えられる。ただし深さは13cm~50cmと一様ではない。P1~P2間は約1.5m、P3~P4間は約1.8m、P2~P3間は約1.3m、P1~P4間は約1.4mである。各柱穴を結ぶ図形は南北に長い長方形を示すが、比較的バランスよく配置されている。P5は深さ46cm、P6は深さ36cmである。

床面はかろうじて削平を免れている。

遺物はおもにカマド周辺の床面から出土している。土師器壺・高壺・甕がある。7の土師器甕は、その出土状況から、カマドの補強材であった可能性がある。カマド脇に置かれていたすり石は、すり面が表を向いて出土した。台石として使用されていたものと推定される。埋土の出土遺物は、第270号住居跡のものと混在している可能性がある。

第32図 第275号住居跡出土遺物



第278号住居跡（第33図）

K2—Q14・Q15 グリッドに位置する。重複関係は、第147・266号住居跡に切られ、この3軒のなかではもっとも古い。形状は方形を呈する。長辺×短辺は 2.65×2.49 m、深さは11cmである。長辺の傾きは N—42°—E である。

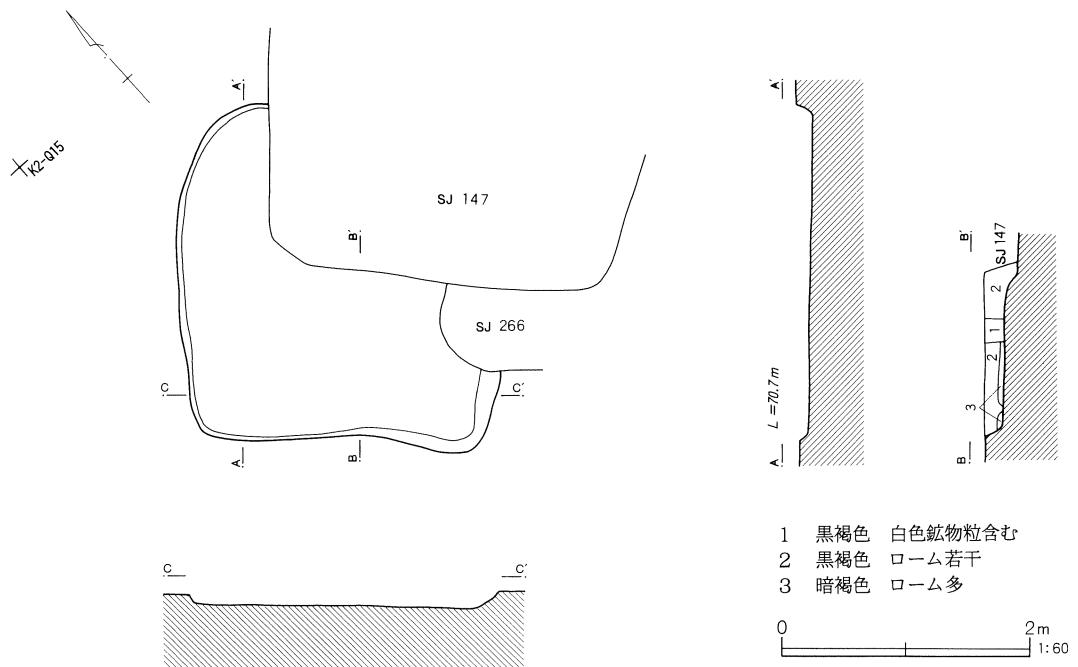
カマドは切り合う住居跡によって失われたものと考

えられる。

壁溝や貯蔵穴、ピット等の施設は検出されなかった。壁の立ち上がりはゆるやかで、明確にとらえられなかった。床面もまた明瞭でなく、南にやや傾斜している。

出土遺物はすべて土器の細片であり、その量も少ない。図示できるものは出土しなかった。

第33図 第278号住居跡



第279号住居跡（第34、35図 図版21下、22上）

K2—R18・R19・S18・S19 グリッドに位置する。重複関係は第12・16号溝跡に切られ、第283号住居跡と第4号円形周溝状遺構を切っている。特に第12号溝跡は住居跡の中央を横切っている。形状は長方形を呈する。長辺×短辺は3.78×3.27m、深さは32cmである。残っている埋土をみると、壁際の崩落土が観察で

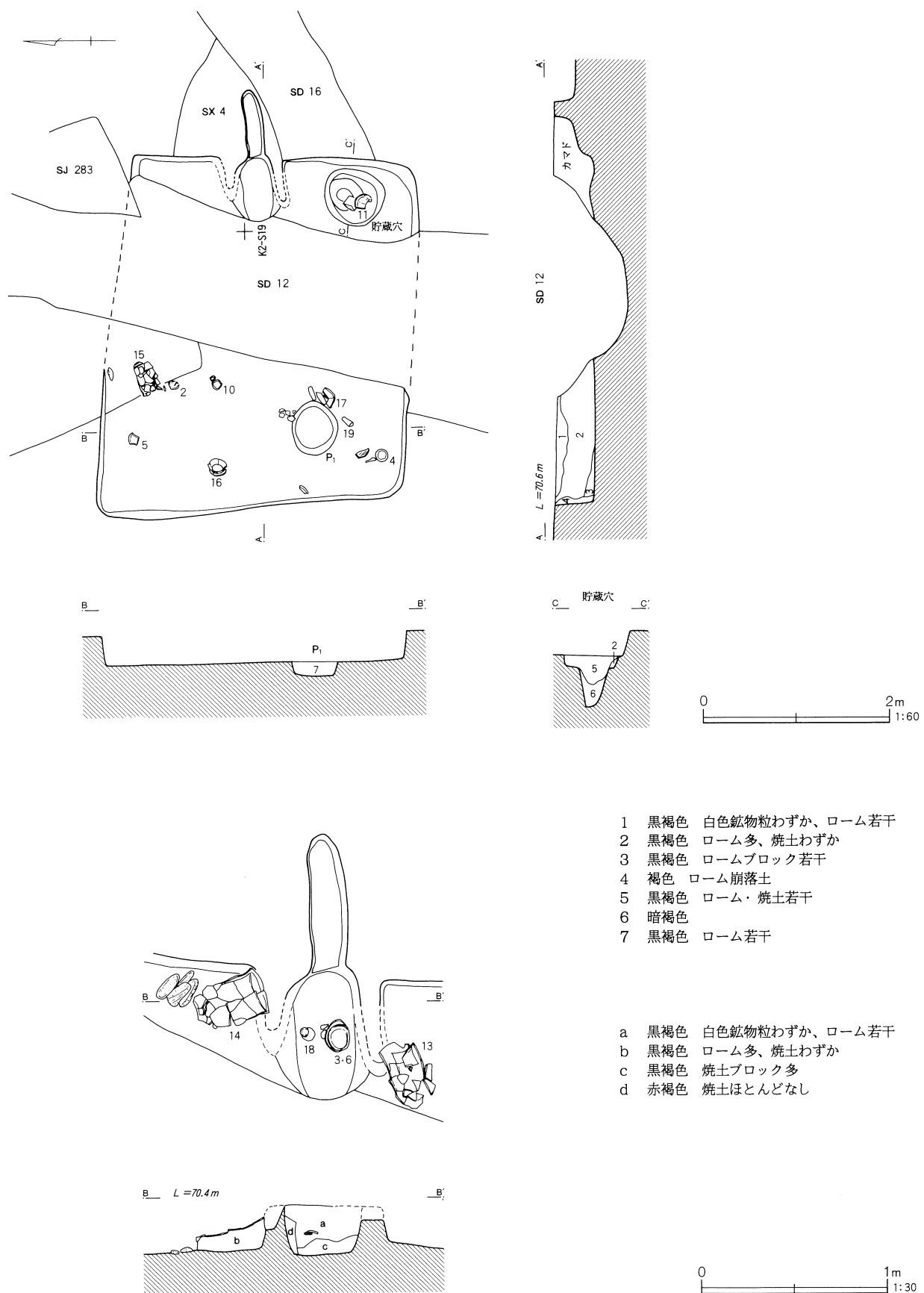
きるが、他の埋土は黒褐色のほぼ同じ土が堆積している。比較的短時間に埋没したものと推定される。カマドの傾きは N—90°—E である。

カマドは東壁やや北寄りに構築されている。燃焼部は楕円形を呈し、規模は69×40cm程である。掘り込みは浅いが明瞭で、底面は皿状となる。煙道部へは段を介し、ゆるやかに浅くなり煙り出し口へ至る。煙道部

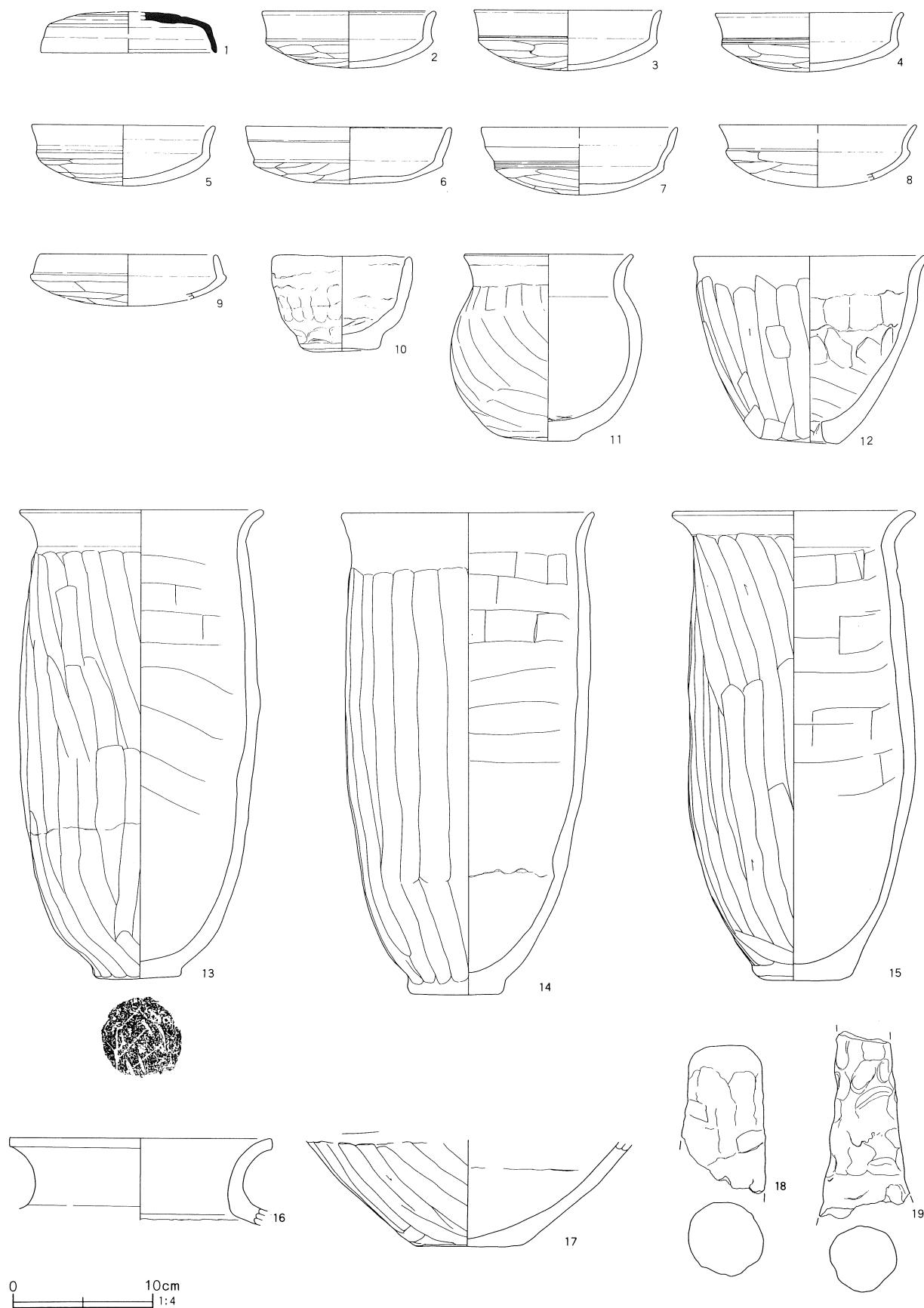
第279号住居跡出土遺物観察表（第35図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	蓋	(12.2)	(2.9)		A D F 5	A	C	15	埋土	須恵器 群馬産?
2	壺	12.0	4.0		A F 1	A	B	80	床直	体部外面一部黒化 図版48-2
3	壺	13.0	4.3		A F 1	A	B	100	カマド	器面風化顯著 図版48-3
4	壺	13.0	4.2		A F 1	A	B	95	床直	器面風化顯著 図版48-4
5	壺	12.2	4.3		A F 1	A	C	85	床直	器面風化顯著 図版48-5
6	壺	14.4	4.1		A D F 1	A	C	85	カマド	底部外面一部黒化 図版48-6
7	壺	(13.7)	4.8		D F 1	A	B	25	埋土	
8	壺	(13.3)	(4.4)		A F 1	A	B	10	埋土	
9	壺	12.5	(3.1)		A F 1	A	C	10	埋土	
10	ミニチュア	9.1	6.7	5.5	A D F 5	A	B	60	床直	手づくね
11	小形甕	11.6	13.2	5.5	A D E F 5	A	B	70	貯藏穴	内面、外面一部黒化 図版64-6
12	小形甕	16.1	13.3	5.5	A D F 5	A	C	100	埋土	底部外面一部黒化 図版65-6
13	甕	16.9	33.2	6.2	A D E F 5	A	C	85	カマド脇	底部木葉痕 内面、外面一部黒化 図版74-4
14	甕	17.5	34.1	6.8	A D E F 5	A	C	100	カマド脇	内面、外面一部黒化 図版75-1
15	甕	16.2	33.3	6.3	A B D F 5	A	B	95	床直	外面一部黒化 図版75-2
16	壺	18.4	(6.1)		A D F 2	A	B	20	床直	口縁100%
17	壺		(7.5)	7.7	A D F 5	A	B	20	床直	外面一部黒化
18	支脚		(10.4)		D F 1	A	C	50	カマド	
19	支脚		(13.2)		A D F 5	A	B	70	床直	

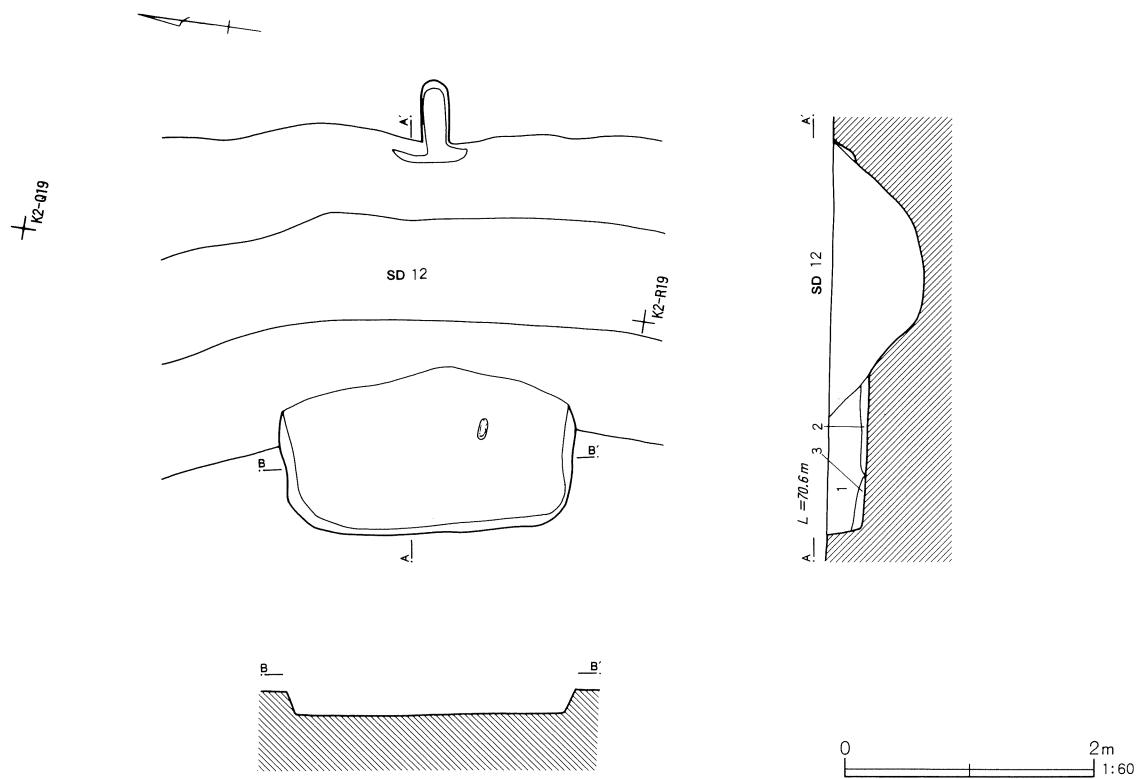
第34図 第279号住居跡・カマド



第35図 第279号住居跡出土遺物



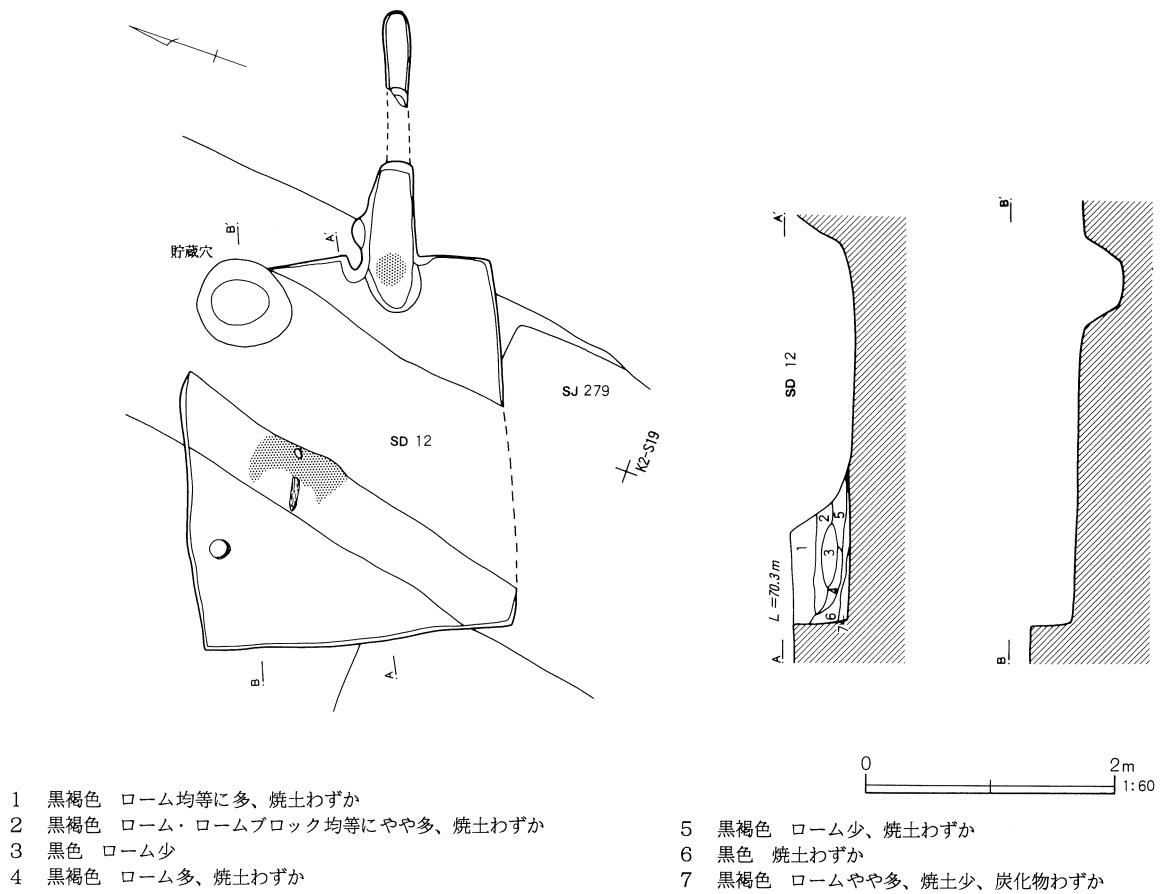
第36図 第281号住居跡・カマド



1 黒褐色 ロームやや多、焼土わずか
 2 黒褐色 ローム少、焼土・炭化物わずか
 3 灰黄褐色 ロームやや多、焼土・炭化物少

a 黒褐色 焼土多、炭化物少
 b 黒褐色 砂質土ブロック混入、焼土少、炭化物わずか
 c 黒褐色 灰多、焼土・炭化物少

第37図 第283号住居跡



は長さ72cm、幅21cmである。袖部は部分的に掘りすぎてしまったが、検出されたのはロームを掘り残したものである。ただし両袖脇に土師器甕が倒れた状態で出土しているので、ロームを基礎にして甕を補強材として用いていた可能性もある。全体によく焼けており、被熱面は袖部～煙道部の内壁に顕著であった。支脚は専用の土製品である。

貯蔵穴は東南コーナーに検出された。楕円形で規模は59×65cm、深さは55cmである。掘り込みは深く、フラット面からさらにピット状に掘り込まれている。

ピットは1基確認されたが、深さは15cmと浅く、柱痕は認められなかった。

壁の掘り込みは急でしっかりと残っていた。床面は明瞭に検出されたが、貼り床は認められなかった。

遺物は、溝跡によって失われた範囲が広いにもかかわらず、カマド周辺と西半の床面を中心に、豊富な遺

物が出土している。接合率も非常に高い。カマドの燃焼部からは土師器壊が2点重なり合って出土した。主な出土遺物には土師器壊・甕・甑がある。埋土中からは須恵器蓋の破片が出土している。

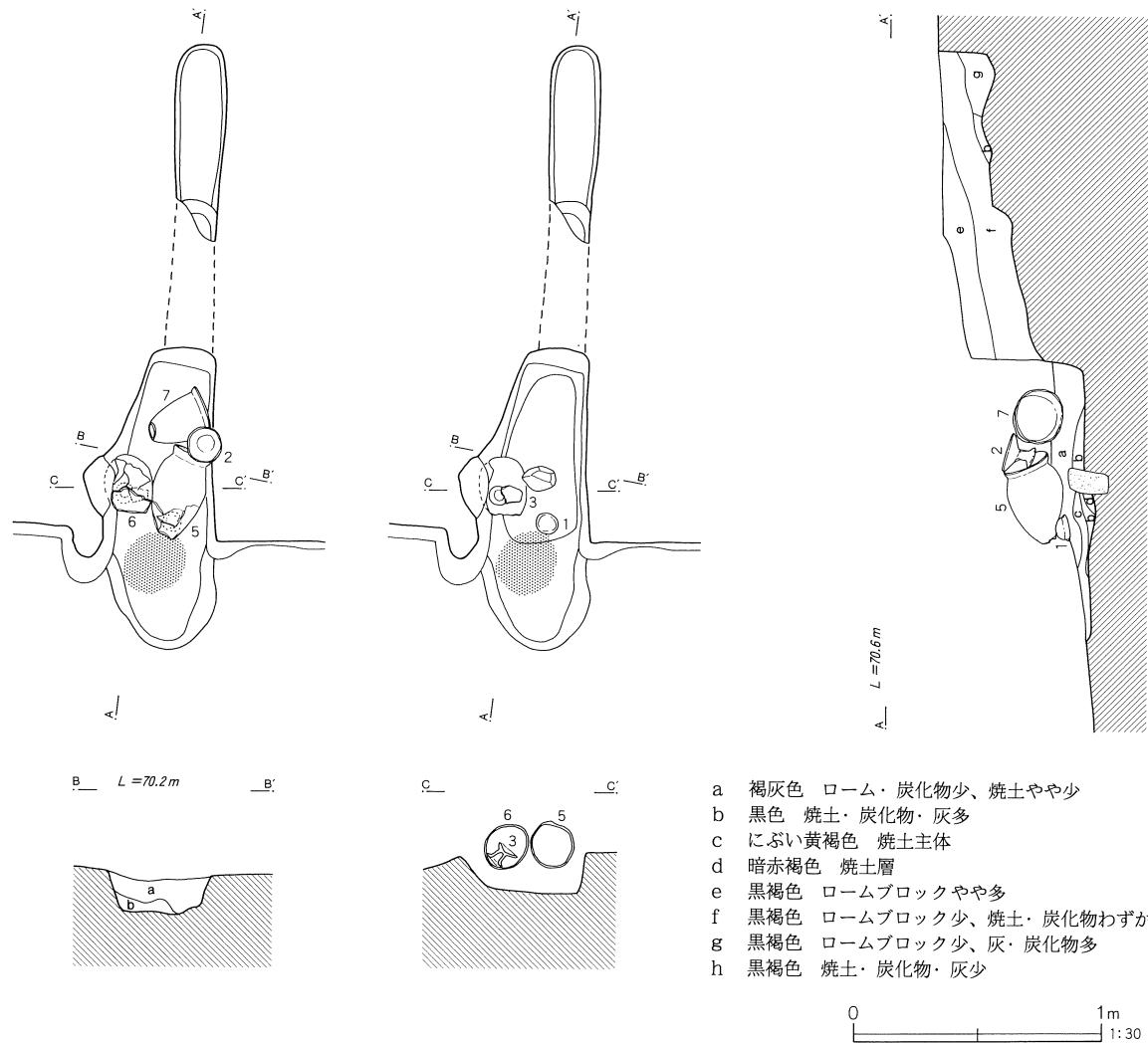
第281号住居跡（第36図 図版22下）

K2-Q18グリッドに位置する。第12号溝跡に切れ東半分が失われている。形状は長方形を呈するものと推定される。西壁の長さは2.33m、深さは20cmである。埋土はほぼ一層で、短時間の埋没が想定される。カマドの傾きはN-81°-Eである。

カマドは東壁に構築されていたものである。第12号溝跡によって大半が失われているが、煙り出し口を含む煙道部の一部、長さ50cm程が検出された。幅は22cm、底面はほぼ平坦である。被熱面は認められなかった。

貯蔵穴や壁溝等の施設は検出されなかった。貯蔵穴

第38図 第283号住居跡カマド



はおそらく溝跡によって削平されたものであろう。

壁の掘り込みは深く、しっかりとしており、床面も明瞭である。

遺物はほとんど出土しなかった。

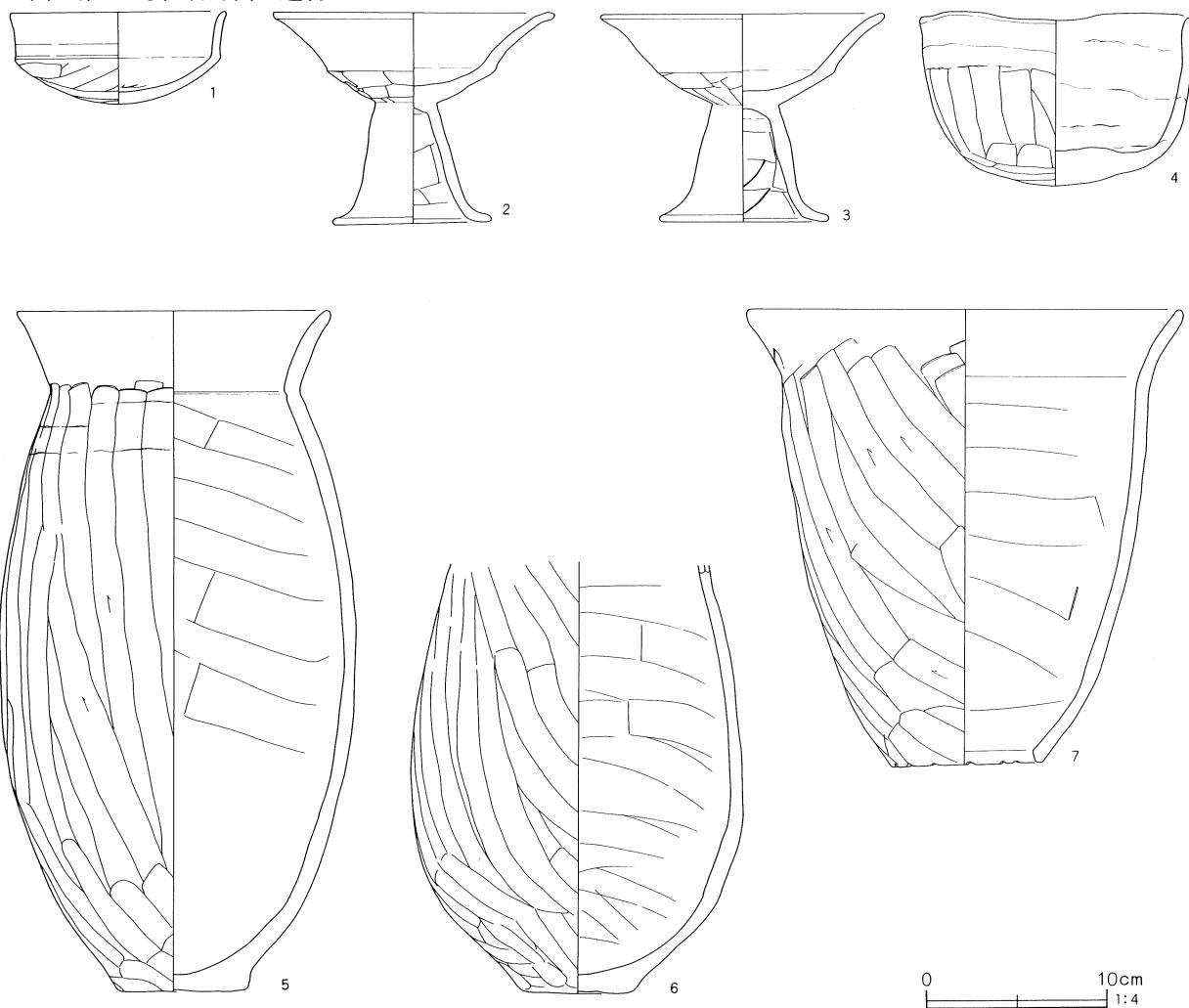
第283号住居跡 (第37~39図 図版23中、下)

K2-R18・R19グリッドに位置する。中央を第12号溝跡に切られるが、掘り込みが深いため、床面への影響は比較的少ない。第279号住居跡との切り合い関係は明確にできなかったが、おそらく第279号住居跡に切られているものと推定される。形状は長方形を呈する。長辺×短辺は3.04×2.56m、深さは43cmである。床面からわずかに浮いた高さの埋土には、部分的に炭

化材と焼土の堆積が認められた。カマドの傾きはN-71°-Eである。

カマドは東壁やや南寄りに構築されている。第12号溝跡によって燃焼部の上面は削平されている。燃焼部は長い箱形で規模は113×42cmである。床面は浅く掘り込まれ、明瞭な段を介して煙道部へと移行する。煙道部の底面は煙り出し口に向って徐々に浅くなるが、なだらかではなく凹凸がある。煙り出し口は直に立ち上がり、底面には掘り込みがみられる。煙道部には天井が一部残っていた(断面図には示されていない)。袖部は溝による削平を受けたものかほとんど残っていなかった。被熱面は燃焼部底面に認められた。支脚は自然石を使用しており、底面に埋め込まれている。

第39図 第283号住居跡出土遺物



第283号住居跡出土遺物観察表（第39図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	11.5	5.0		ADF 2	A	B	100	カマド	図版48-7
2	高壺	15.0	11.6	8.2	ADF 1	A	B	80	カマド	図版59-5
3	高壺	15.1	11.4	8.6	ADF 1	A	B	100	カマド	甕（6）の内部から出土 図版59-6
4	椀	14.6	9.5		ADF 5	A	C	95	埋土	外面一部、内面底部黒化 図版66-2
5	甕	16.7	37.1	6.9	ADF 5	A	B	95	カマド	外面一部黒化 図版76-1
6	甕	(23.5)	5.9		DF 5	A	C	60	カマド	内面下半部黒化
7	甕	23.2	25.0	8.1	ADF 5	A	C	100	カマド	内面、外面一部黒化 図版69-5

貯蔵穴は北コーナーに検出された。楕円形で規模は68×77cm、深さは30cmである。掘り込みはやや浅いバケツ状で、底面はわずかにくぼむ。

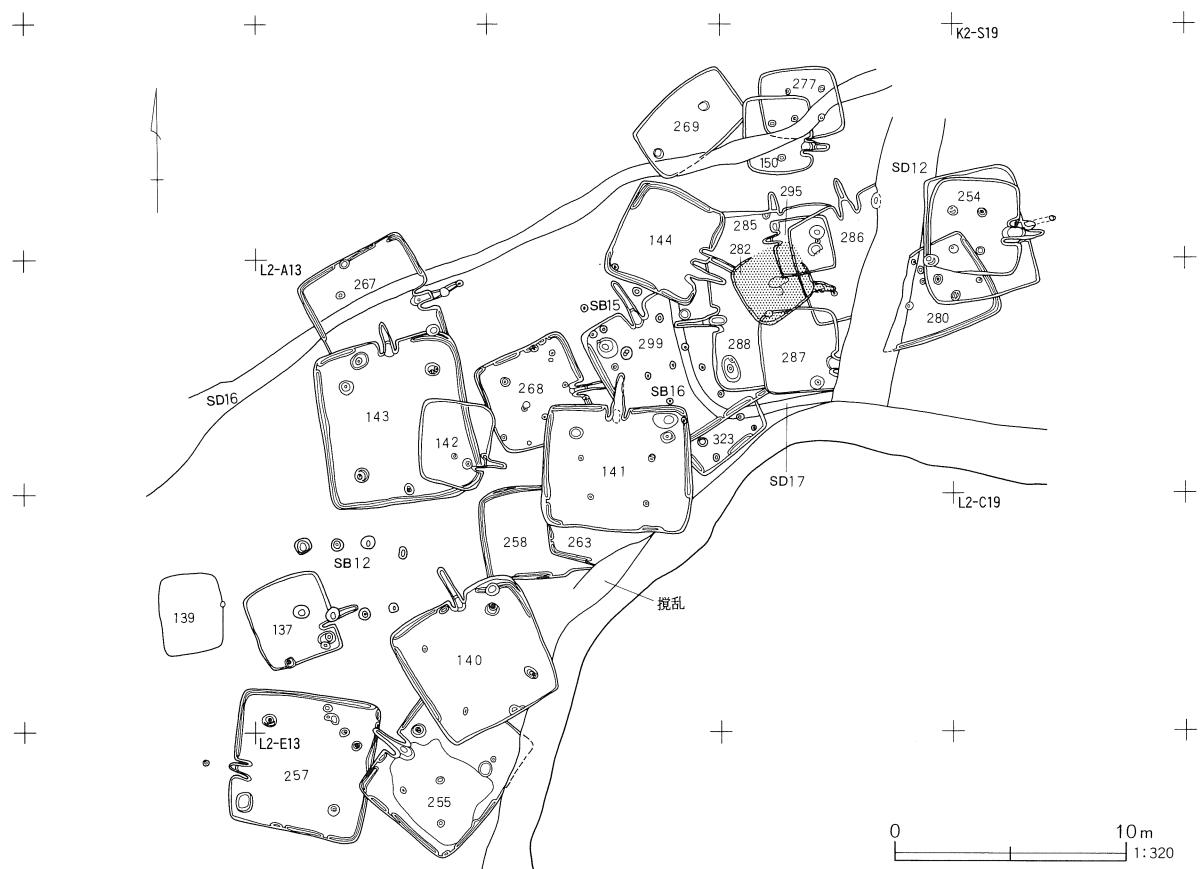
壁溝やピットは検出されなかった。

壁の掘り込みは深く、床面は明瞭である。

遺物は、埋土中にはほとんどなく、カマドから集中して出土している。土師器壺・高壺・甕・甌があるが、いずれも残りは良好である。空洞の甕の中に高壺が入り込んだ状態で出土している。

2. 第19住居跡群

第40図 第19住居跡群



※ スクリントーンは平安時代の住居跡

第137号住居跡（第41、42図 図版8中）

L2-C12・C13・D12・D13 グリッドに位置する。重複する住居跡はないが、第12号掘立柱建物跡に切られている。形状はほぼ正方形で、規模は長辺×短辺が 3.53×3.43m、深さは12cmである。

第12号掘立柱建物構築の際に、埋土が攪乱された状況をみてとれる。本来の埋土はおそらく一層であり、短期間の埋没が想定できる。カマドの傾きは N-71°-E である。

カマドは東壁ほぼ中央に構築されている。ちょうど燃焼部にあたる部分が第12号掘立柱建物跡の柱穴によって失われている。検出された煙道部は幅35cm、長さ87cmである。底面はほぼ平らで、煙り出し口にかけてわずかに深くなる。袖は地山ローム土を基礎とし、

ローム土と黒褐色土との混合土で構築されている。左側の袖はほとんど残っておらず、断面で確認されたに過ぎない。被熱面は検出されなかった。

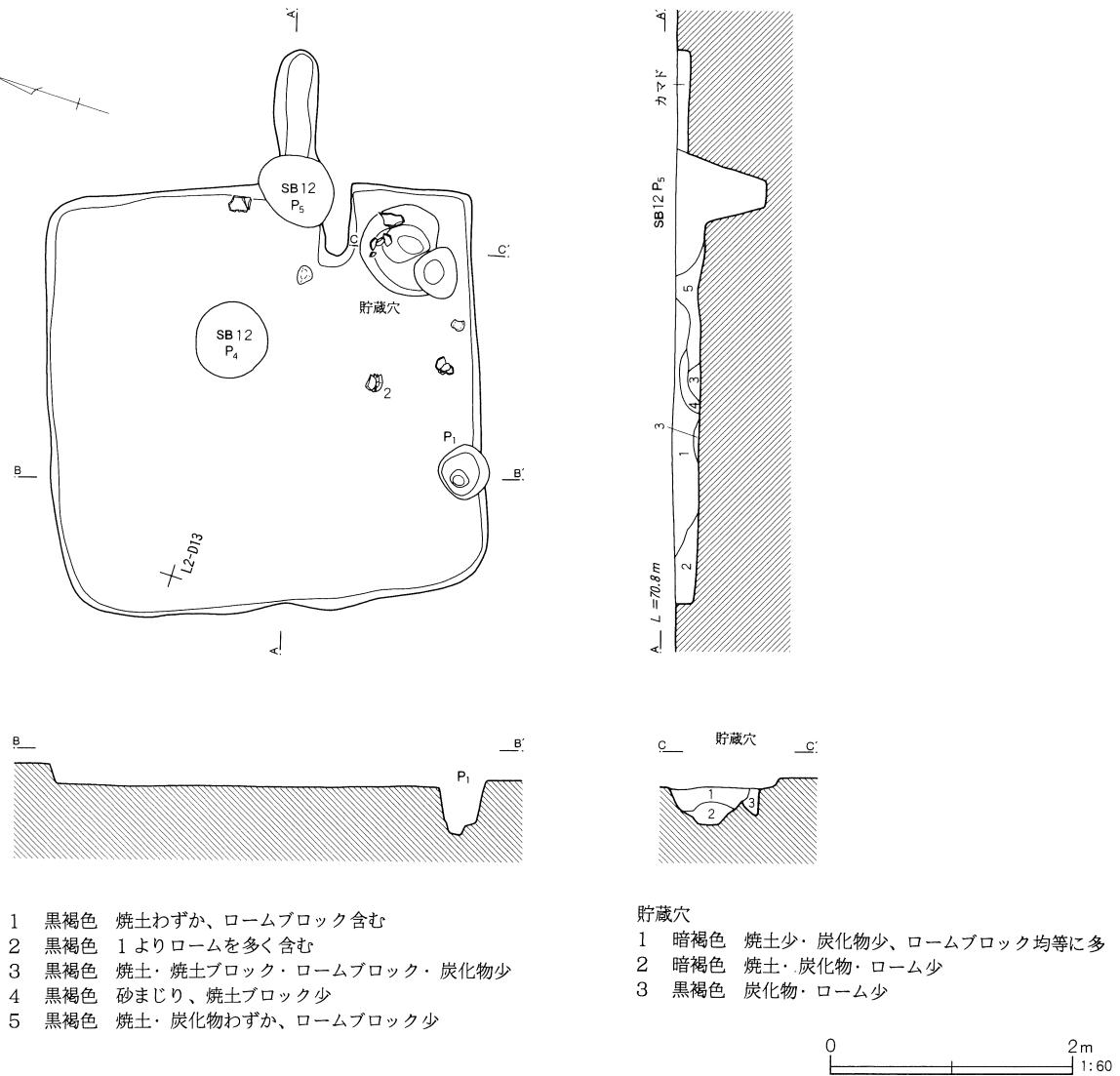
貯蔵穴は南東コーナーに検出された。不整円形を呈し、規模は72×60cm、深さは30cmである。掘り込みは底へいくにつれて幅を狭め、底面は平坦になる。掘り込みは眼鏡状に重なるが、南側はピットと切り合っているのかもしれない。

壁溝は検出されなかった。

ピットは、南壁際に1基検出された(P1)。壁を切るようく掘り込まれているため、本住居跡に伴うものでない可能性もある。柱痕は埋土からは確認されなかつたが、底面に径15cm程のくぼみが認められた。

壁の掘り込みは比較的明瞭であった。床面は踏みし

第41図 第137号住居跡



第137号住居跡遺物観察表（第42図）

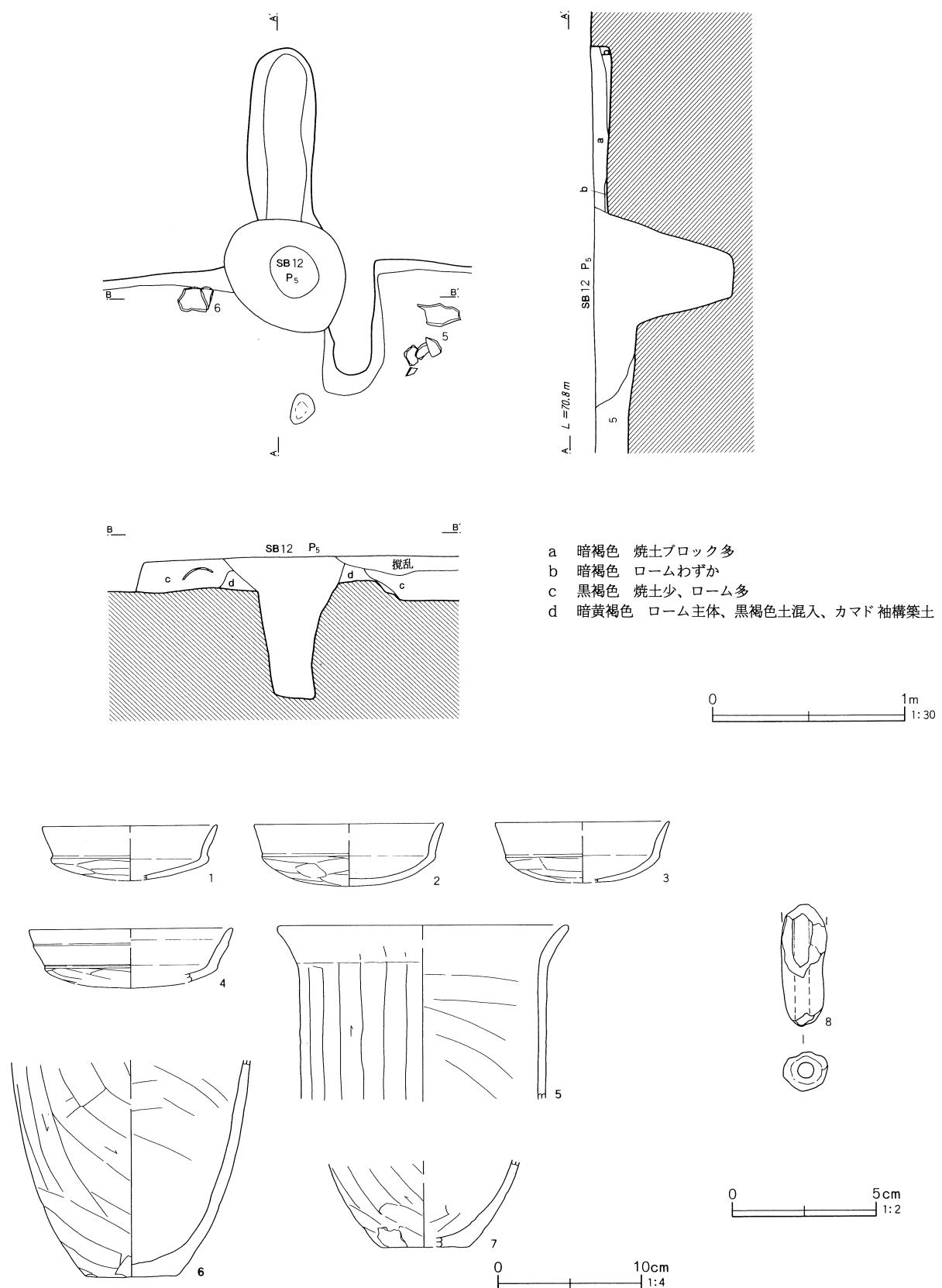
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(11.9)	(3.2)		A D F 1	A	B	25	埋土	器面風化顕著
2	壺	(12.9)	4.2		A D F 2	A	B	30	床直	器面風化顕著
3	壺	(11.9)	(4.1)		A D F 1	A	C	25	埋土	器面風化顕著
4	壺	(13.9)	(3.7)		A D F 1	A	C	20	埋土	内・外面一部黒化
5	甕	(19.8)	(12.9)		A B D E F 5	A	B	15	貯蔵穴	外面一部黒化
6	甕	(15.0)	6.5	A D E F 5	A	B	15	カマド脇	外面一部黒化	
7	甕	(5.9)	(6.2)	A D E F 5	A	C	5	埋土	外面一部黒化	
8	土錐	現長4.1cm、最大径1.5cm、孔径0.5cm、重さ6.5g					埋土	欠損品		

められており、検出は容易だったが、貼り床は確認されなかった。

遺物の出土量はあまり多くはない。土師器壺・甕の他に土錐が出土している。カマドや貯蔵穴の周辺には、

床面直上からの出土遺物が認められる。土師器甕(5・6)は、カマド袖部付近から出土したもので、カマドが搅乱を受けていることを考慮に入れると、袖部の補強材であったと推定される。

第42図 第137号住居跡カマド・出土遺物



第139号住居跡（第43図）

L2—C12・D12 グリッドに位置する。形状は長方形を呈する。規模は長辺×短辺が 3.31×2.64 mである。長辺の傾きは N—90°—E である。

埋土が存在せず、床面も完全に削平されていた。検出されたのは掘形の範囲であり、プランが辛うじてわかる程度であった。北壁寄りの中央付近に、被熱面がわずかに認められた。カマドの燃焼部の痕跡であろう。

遺物はまったく出土しなかった。

第140号住居跡（第44～47図 図版8下、9上）

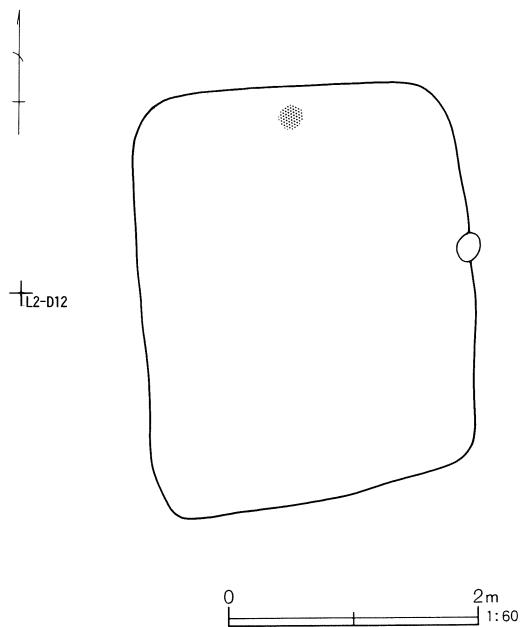
L2—C14・C15・D14・D15・E14 グリッドに位置する。重複関係は、第255号住居跡を切り、第258号住居跡に切られている。形状は方形を呈するが、東南コーナー部分は旧河川流路によって失われている。長辺×短辺は 5.95×5.55 m、深さは32cmである。埋土は一部攪乱を受けているが、ほぼ黒褐色の単一層で占められており、短期間の埋没が想定される。カマドの傾きは N—29°—W である。

カマドは北壁中央に構築されている。燃焼部は楕円形を呈し、規模は 74×35 cmである。底面は皿状に浅く掘り込まれている。煙道部の底面は煙り出し口まで徐々に浅くなる。煙道部は長さ139cm、幅22cmである。袖部の検出された部分はローム地山の掘り残しであるが、左袖端部に補強に使用された甕が倒立していたことから、地山を基部として、構築されていたものと考えられる。天井部は一部分であるが残存しており、煙道部の土層断面にその被熱面が観察された。被熱面は袖部から煙道部内壁にかけて認められた。

貯蔵穴は北東コーナーに位置する。 55×63 cmの楕円形で、深さは36cmである。壁溝は北側を中心に半周分検出された。幅15cm、深さは7～10cmである。

確認されたピットは4基で、P4は深さ20cmとやや浅めだが、柱穴とみなしてよからう。柱痕は認められなかつたが、P2とP3には、柱を抜き取った様子がうかがえる。また、カマドの対面の南壁寄り中央には、深さ10cmほどの不定型の掘り込みが確認された。位置

第43図 第139号住居跡



的に入口の施設と推定される。この周辺の埋土には焼土や炭化物が集中して含まれていたが、壁面は被熱しておらず、焼失など廃絶時に関わるものである可能性は薄い。

床面はしっかりと確認され、柱穴内区では貼り床が顕著に認められた。

遺物の出土は比較的豊富であり、床面近くの埋土から多くの遺物が出土している。土師器壺や甕類、須恵器壺がある。須恵器壺（1）は完形に近く、床面直上の出土である。この他に、土錘・紡錘車・砥石も出土している。図示しなかった遺物の中に、須恵器甕口縁（波状文施文）や蓋？の細片がある。

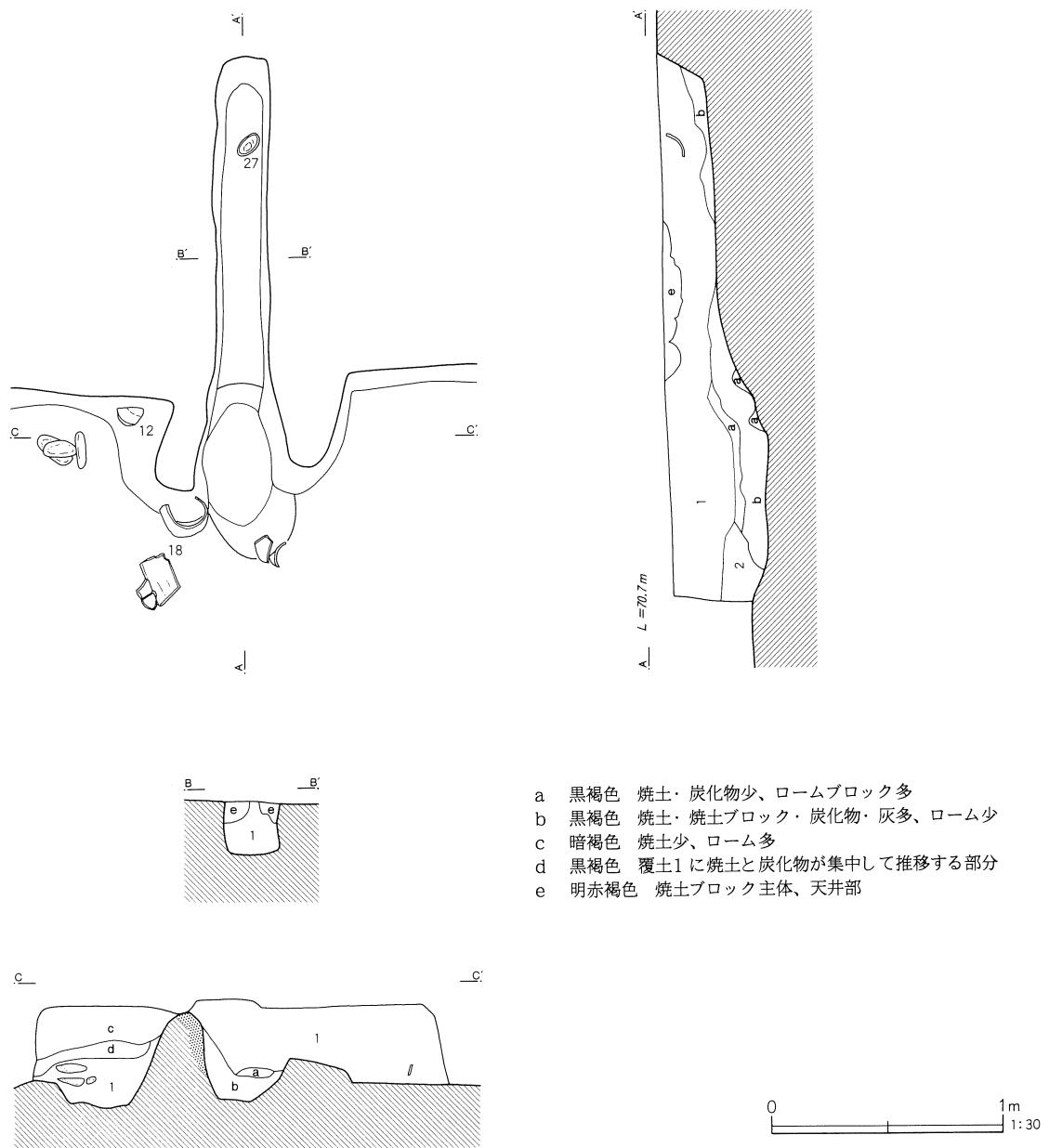
第141号住居跡（第48～50図 図版9中、下、10上）

L2—B15・B16・C15・C16 グリッドに位置する。重複関係は第258・263・268・299・323号住居跡をそれぞれ切っている。形状は長方形を呈するが、南東コーナーは旧流路に切られており、プランは推定である。長辺×短辺は 6.22×5.30 m、深さは36cmである。埋土には皿状の堆積が認められ、自然埋没の様相を呈して

第44図 第140号住居跡



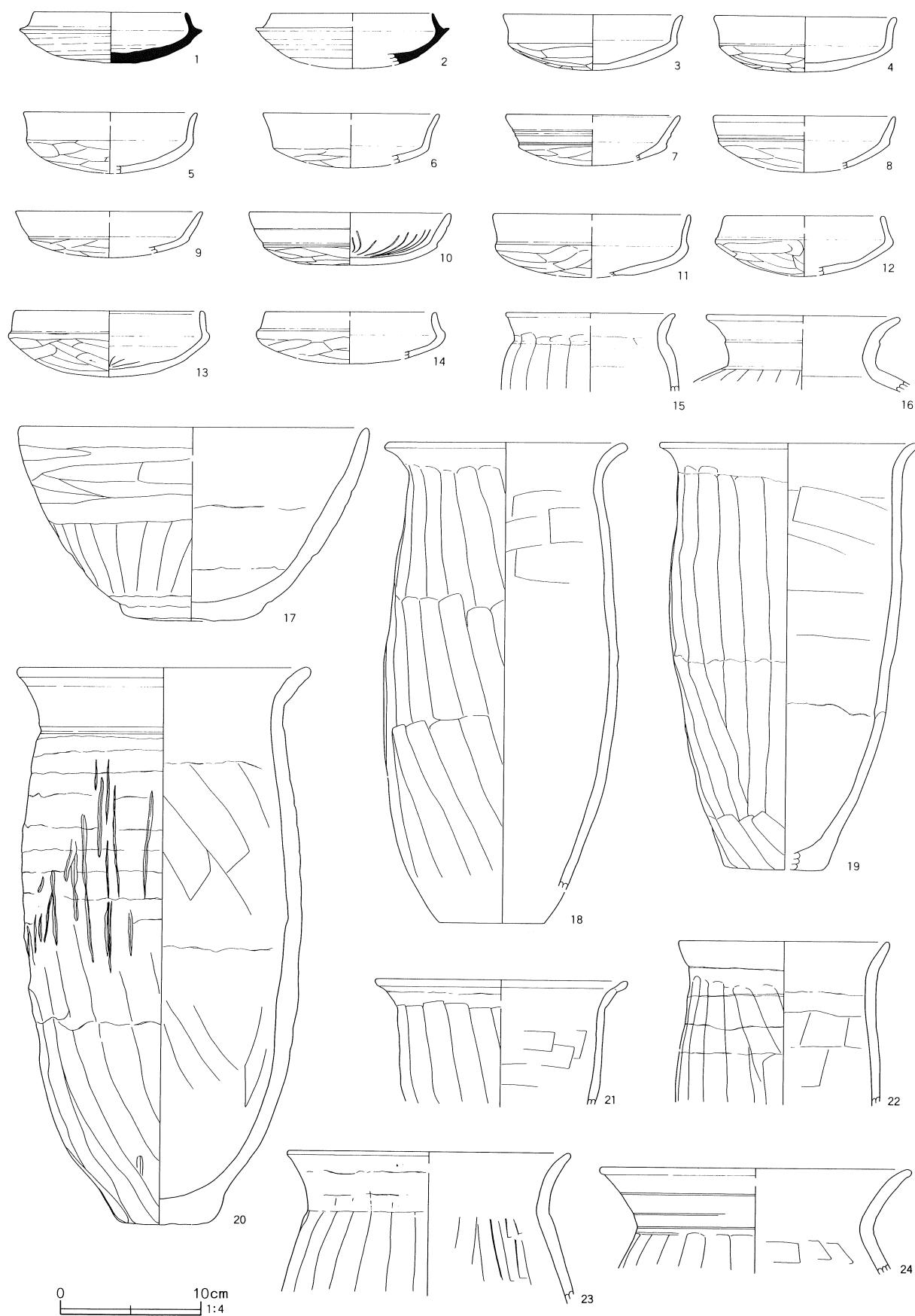
第45図 第140号住居跡カマド



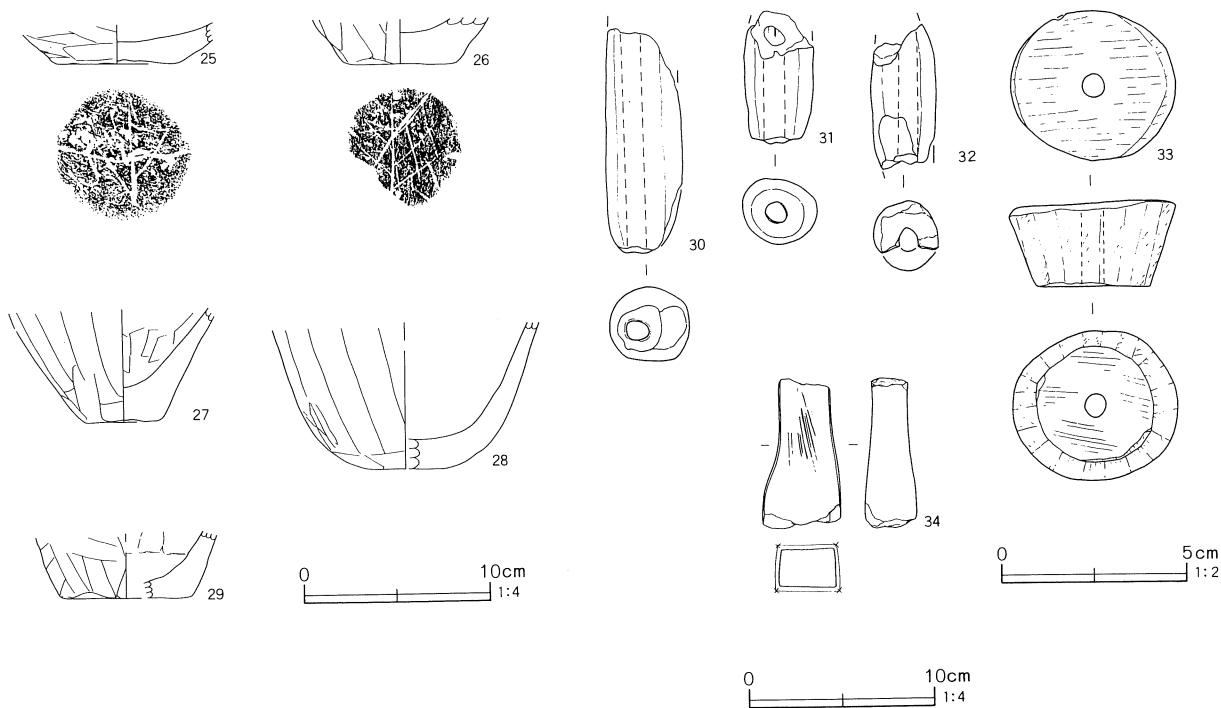
第140号住居跡遺物観察表(I) (第46図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	10.8	3.6		ADF 5	A	I	95	床直	須恵器 産地不明 図版37-1
2	壺	(11.4)	(3.7)		DEF 5	A	F	30	埋土	須恵器 未野産
3	壺	12.5	4.0		AF 1	A	B	90	埋土	器面風化顯著 図版41-5
4	壺	12.7	3.9		AF 1	A	C	90	埋土	器面風化顯著 内面、口縁一部黒化 図版41-6
5	壺	(12.1)	(4.3)		AF 2	A	B	50	カマド埋土	
6	壺	(12.3)	(3.5)		AF 2	A	B	15	埋土	器面風化顯著
7	壺	(12.2)	(3.2)		ADF 1	A	B	25	カマド埋土	内面黒色処理
8	壺	(12.6)	(3.7)		ADF 1	A	B	10	埋土	
9	壺	(13.0)	(3.0)		ADF 1	A	C	25	埋土	外面一部黒化
10	壺	14.2	3.7		F 1	A	B	70	床直	内面暗文風調整 図版41-7
11	壺	(13.3)	(4.4)		AF 1	A	B	30	埋土	器面風化顯著

第46図 第140号住居跡出土遺物(1)



第47図 第140号住居跡出土遺物(2)



第140号住居跡遺物観察表(2) (第46・47図)

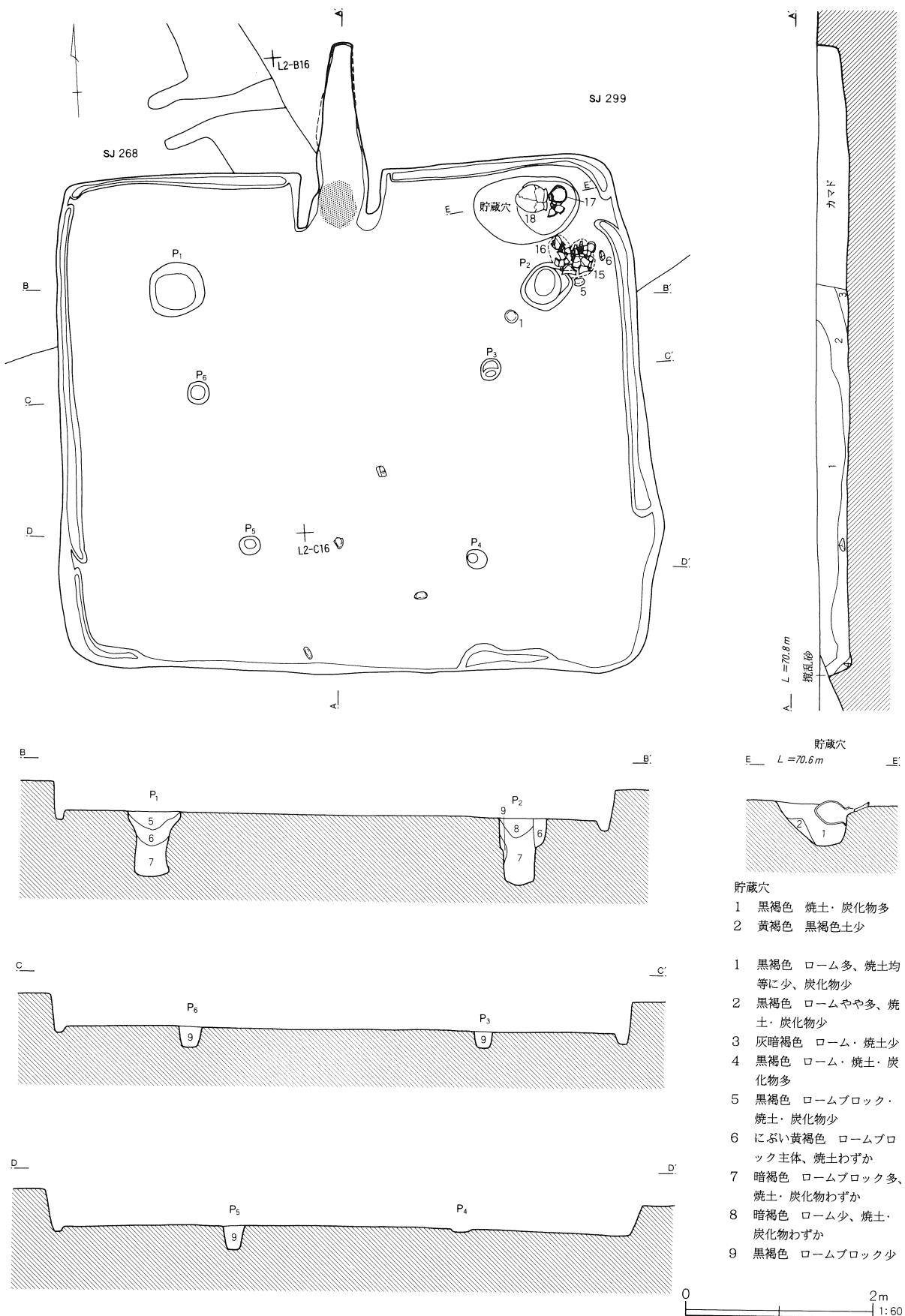
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
12	壺	(11.1)	(4.2)		ADF 1	A	B	30	カマド脇	
13	壺	13.2	4.7		ADF 1	A	B	50	壁際	内・外面一部黒化
14	壺	(12.0)	(3.3)		ADF 1	A	B	30	床直	
15	小形甕	(11.7)	(5.5)		ADF 2	A	B	10	埋土	内面黒化
16	壺	(13.4)	(5.3)		ADF 5	A	B	5	埋土	口縁黒化
17	鉢	(24.3)	13.7	9.6	ADF 5	A	B	40	床直	内・外面一部黒化
18	甕	16.5	(31.4)		ADEF 5	A	B	50	カマド袖	補強材 内・外面一部黒化
19	甕	17.9	30.2	(7.2)	ADF 2	A	B	90	床直	外面一部黒化 図版72-4
20	甕	20.2	39.2	6.8	ADF 5	A	B	70	床直散在	体部上半に工具痕、輪積未調整 図版73-1
21	小形甕	(17.6)	(8.7)		ADF 5	A	B	20	埋土	
22	甕	14.7	(11.6)		ADF 5	A	C	30	床直	
23	甕	(19.7)	(10.7)		ADEF 5	A	B	10	埋土	
24	甕	(21.6)	(7.4)		ADF 2	A	B	10	埋土	口縁部破片
25	甕	(2.2)	6.8		ADF 5	A	B	10	埋土	底部破片、木葉痕あり
26	甕	(2.5)	6.2		ADEF 5	A	B	5	埋土	底部破片、木葉痕(二重)あり
27	甕	(6.0)	4.2		ADEF 5	A	B	10	カマド煙道	底部破片
28	甕	(7.7)	(5.0)		ADF 2	A	B	5	埋土	底部破片 内面、外面一部黒化
29	甕	(3.5)	(7.1)		ADF 2	A	B	5	埋土	底部破片
30	土錘	現長5.9cm、最大径2.0cm、孔径0.5cm、重さ20.2g							埋土	欠損品
31	土錘	現長3.5cm、最大径1.9cm、孔径0.5cm、重さ8.6g							埋土	欠損品
32	土錘	現長3.6cm、最大径1.8cm、孔径0.5cm、重さ6.0g							埋土	欠損品
33	紡錘車	上径4.5cm、下径3.0cm、厚さ2.2cm、孔径0.6cm、重さ60.3g						壁際		滑石製
34	砥石	長さ8.0cm、断面幅1.9×3.0cm、重さ118.5g							埋土	研面4面 刀傷あり 凝灰岩

いる。カマドの傾きは N—9°—E である。

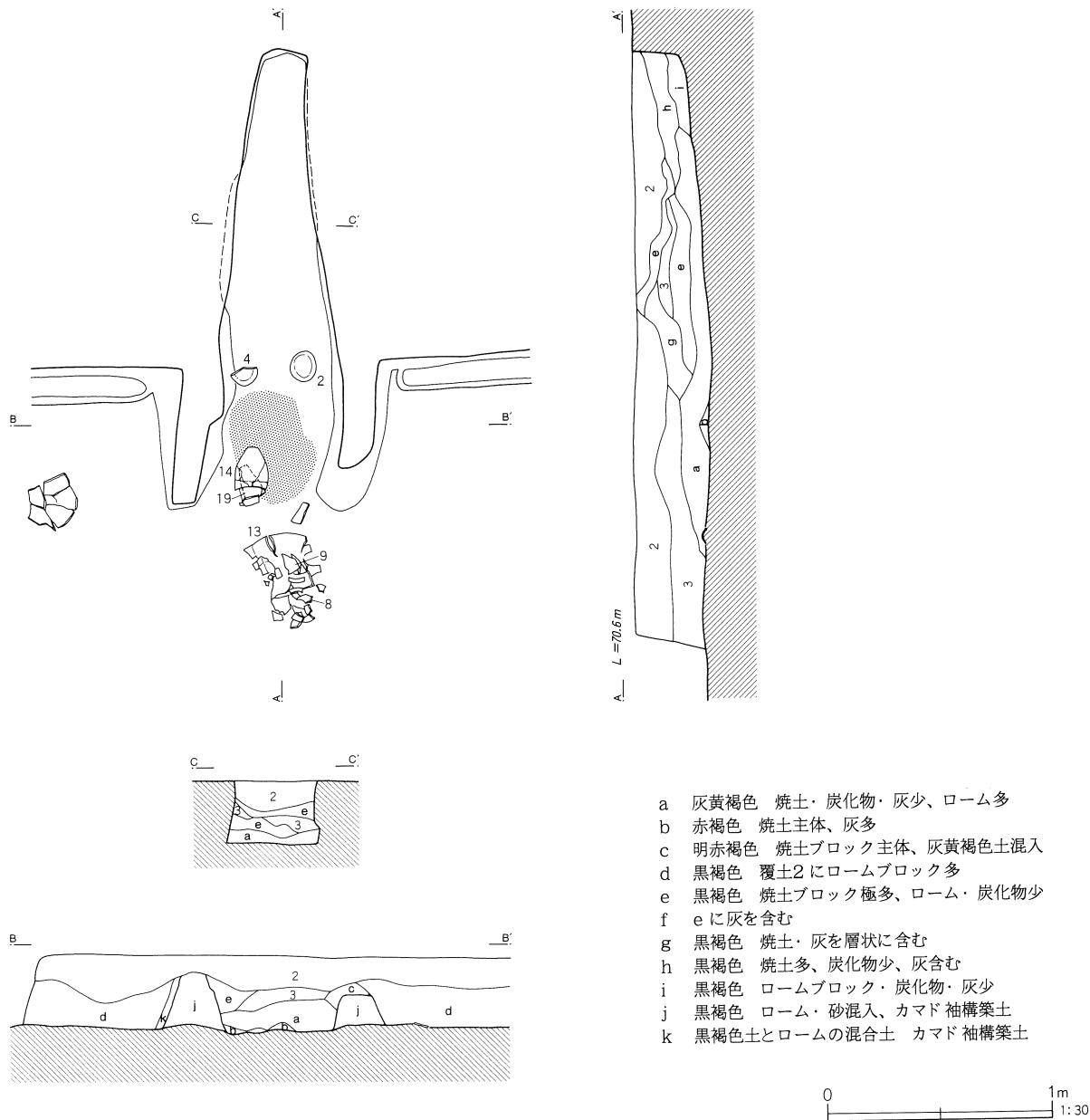
カマドは北壁中央に構築される。燃焼部には掘り込みはない。煙道部との境も認められず、煙り出し口に向ってゆるやかに浅くなる。全体の長さは201cm、燃焼

部の幅は約55cmである。袖部はローム地山を基礎として、砂混じりの土で構築されている。被熱面は燃焼部底面で顕著であり、煙道部内壁にも認められるが左壁はあまり焼けていない。支脚は専用の土製品である。

第48図 第141号住居跡



第49図 第141号住居跡カマド



甕が乗り、つぶれた状態で出土した。

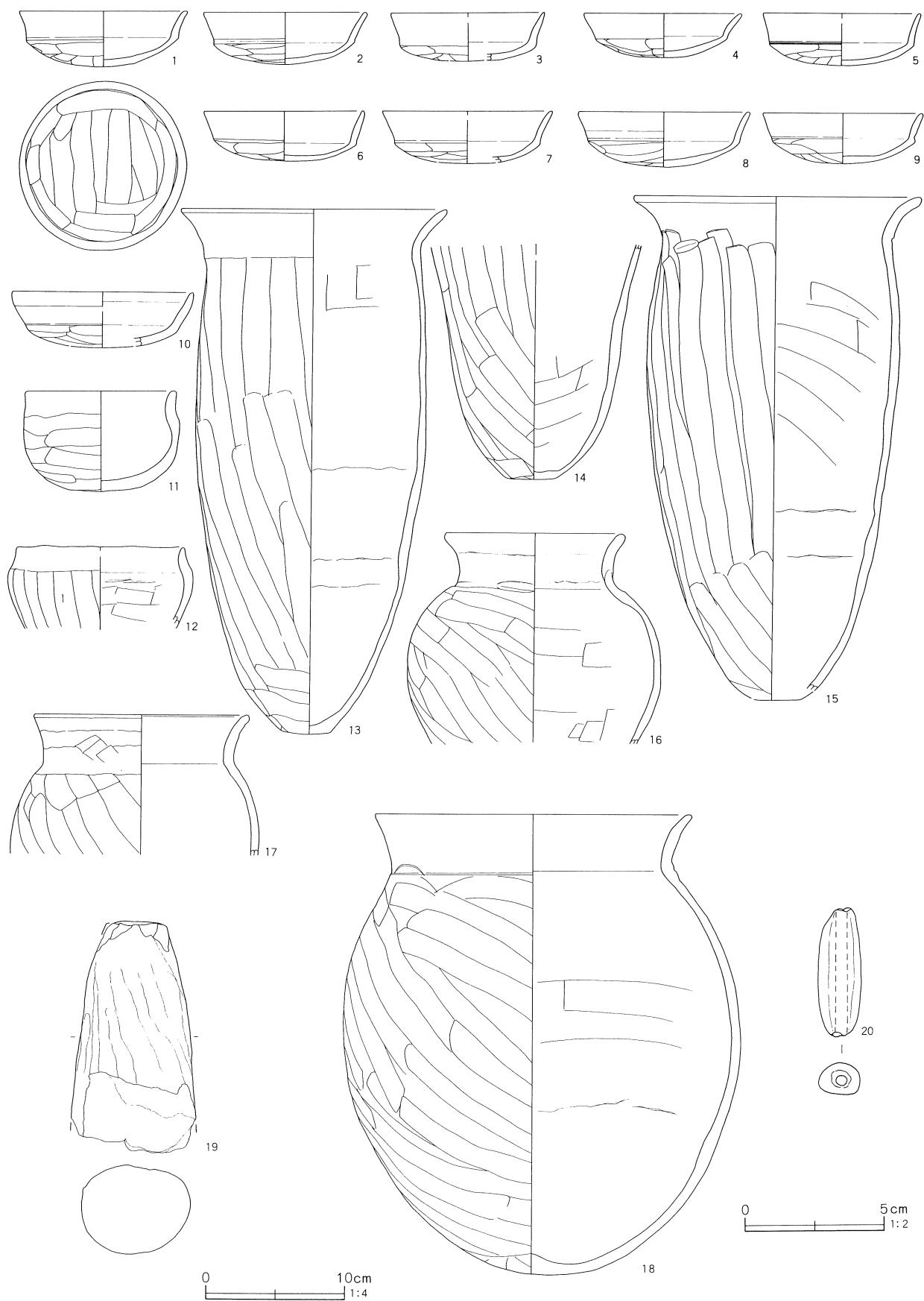
貯蔵穴は東北コーナーに検出された。楕円形を呈し、規模は68×113cm、深さ42cmである。掘り込みはすり鉢状となり、底は狭い。壁溝は途切れ途切れの状態で検出された。特に南壁は部分的である。掘り込みはしっかりと明瞭で、幅15cm、深さ12cm前後である。

6基検出されたピットは均等に配置されていないが、柱穴とみなしてよいだろう。ただし、P4はくぼみ程度のものであり、置き柱であったのかもしれない。

床面はほぼ全面に貼り床がみられる。

主な出土遺物は、土師器壺・甕・土錘などである。カマドや貯蔵穴の中および周辺からの出土が目立つ。特に、貯蔵穴からは土師器甕(18)がほぼ完全な形で出土した。カマド燃焼部埋土上層からは土師器壺が2点並んで出土した(2・4)。カマドの上に置かれていたものかもしれない。燃焼部手前の床面からは土師器甕(13)が1個体つぶれて出土している。また、カマド燃焼部の左床面には土師器甕の胴部が出土しているが図示できなかった。

第50図 第141号住居跡出土遺物



第141号住居跡遺物観察表（第50図）

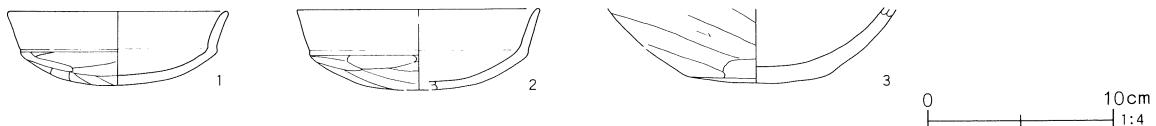
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	11.9	4.0		ADF 5	A	B	100	床直	器面風化顯著 図版41-8
2	壺	11.5	3.7		ADF 5	A	B	100	カマド	器面風化顯著 図版41-9
3	壺	(10.9)	(3.4)		ADF 1	A	B	35	埋土	器面風化顯著 外面一部黒化
4	壺	11.2	3.1		ADF 2	A	B	90	カマド	器面風化顯著 図版41-10
5	壺	(11.2)	3.8		ADF 2	A	B	45	床直	器面風化顯著
6	壺	11.4	3.6		ADE F 5	A	B	95	床直	器面風化顯著 図版42-1
7	壺	(12.0)	(3.7)		ADF 2	A	B	30	埋土	器面風化顯著
8	壺	12.0	4.0		AF 2	A	B	95	カマド前	器面風化顯著 図版42-2
9	壺	11.3	3.6		AF 1	A	B	95	カマド前	器面風化顯著
10	壺	(12.8)	(4.0)		ADF 1	A	B	20	埋土	
11	椀	10.5	7.2		ADF 5	A	B	80	カマド埋土	内・外面一部黒化 図版62-2
12	小形甕	(11.9)	(5.8)		ADE F 5	A	B	15	カマド埋土	
13	甕	18.9	37.6	3.5	ADF 5	A	B	75	カマド前	外面、口縁内面一部黒化
14	甕		(16.8)	3.8	ADE F 5	A	C	30	カマド	
15	甕	20.3	(36.0)		ADF 5	A	C	90	床直	底部外面一部黒化 図版73-2
16	壺	12.5	(15.0)		BDF 2	A	C	40	床直	内・外面一部黒化
17	甕	15.1	(10.0)		DF 2	A	C	30	貯藏穴	外面一部黒化
18	甕	22.5	32.9		ADF 5	A	C	95	貯藏穴	下半部外面、口縁一部黒化 図版68-1
19	支脚		16.6		ADF 5	A	C	30	カマド	
20	土錘	長さ4.5cm、最大径1.5cm、孔径0.4cm、重さ8.8g					P5 埋土			

第142号住居跡（第51、52図 図版10中）

L2—B14・B15グリッドに位置する。重複関係は、第143・268号住居跡を切っているものと思われる。形状は長方形を呈する。長辺×短辺は3.58×2.92m、深さは23cmである。カマドの傾きはN—105°—Eである。

カマドは東壁南寄りに構築されている。燃焼部は掘り込みがなく、底面は平らである。煙道部との境には高い段がある。煙道部は長さ94cm、幅23cmである。底面はわずかに掘り込みをもち、中央がもっとも深い。袖部は地山土を基礎として、黒褐色土を貼り付けて構築されていたものと考えられる。被熱面は袖部内壁にわずかに認められるが、他の部分にはない。

第51図 第142号住居跡出土遺物



第142号住居跡遺物観察表（第51図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	11.6	3.9		F 2	A	C	90	埋土	器面風化顯著 図版42-3
2	壺	(12.9)	(4.3)		AF 1	A	B	20	埋土	器面風化顯著
3	甕		(4.0)	7.5	DF 2	A	C	5	床直	外面一部黒化

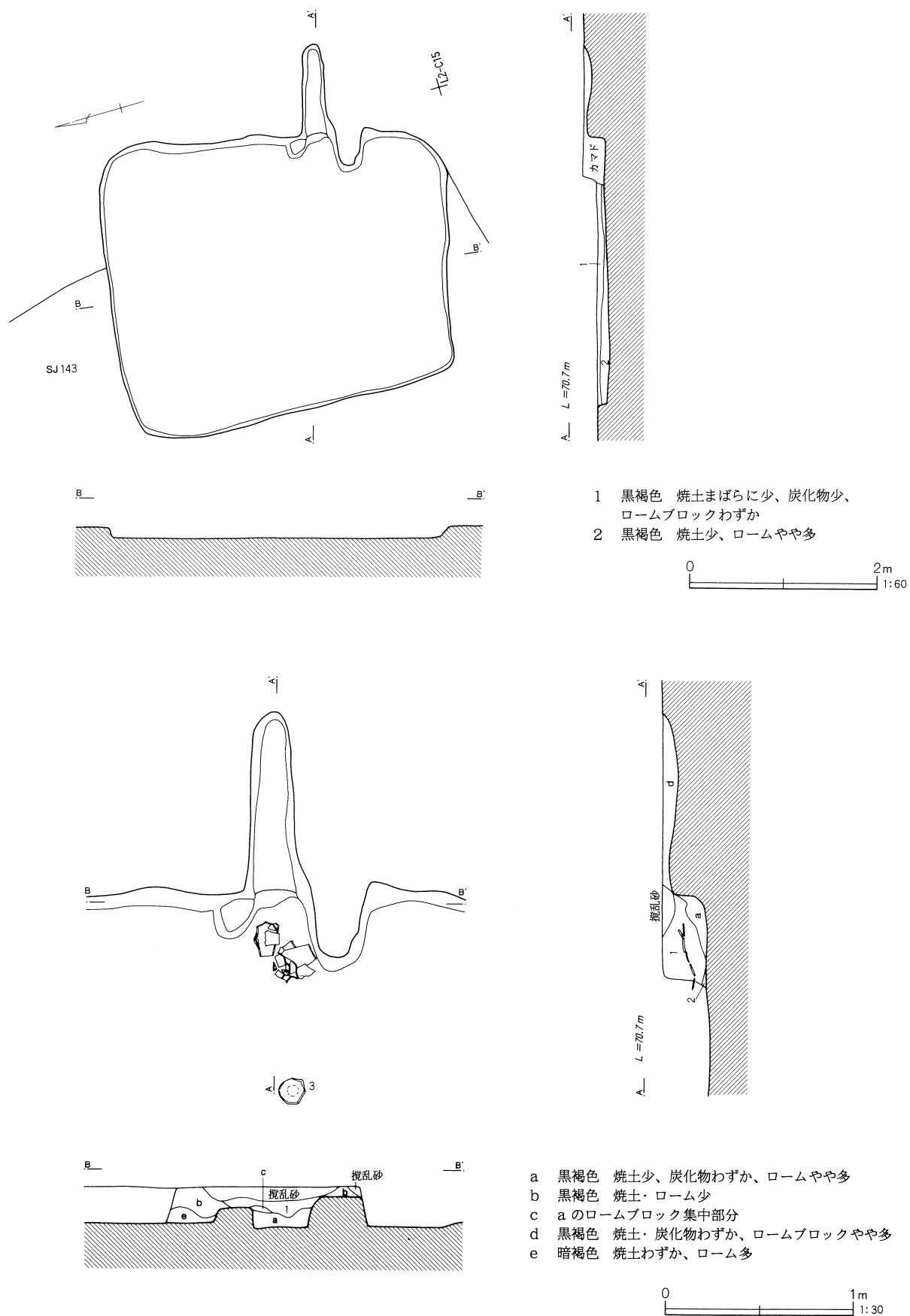
床面はあまりはつきりとせず、貯蔵穴や壁溝等の施設も確認できなかった。

出土遺物は少なく、すべて破片である。土師器壺・甕がある。また、図示していないが、カマド燃焼部埋土からは土師器甕の胴部がややまとまりをもって出土した。

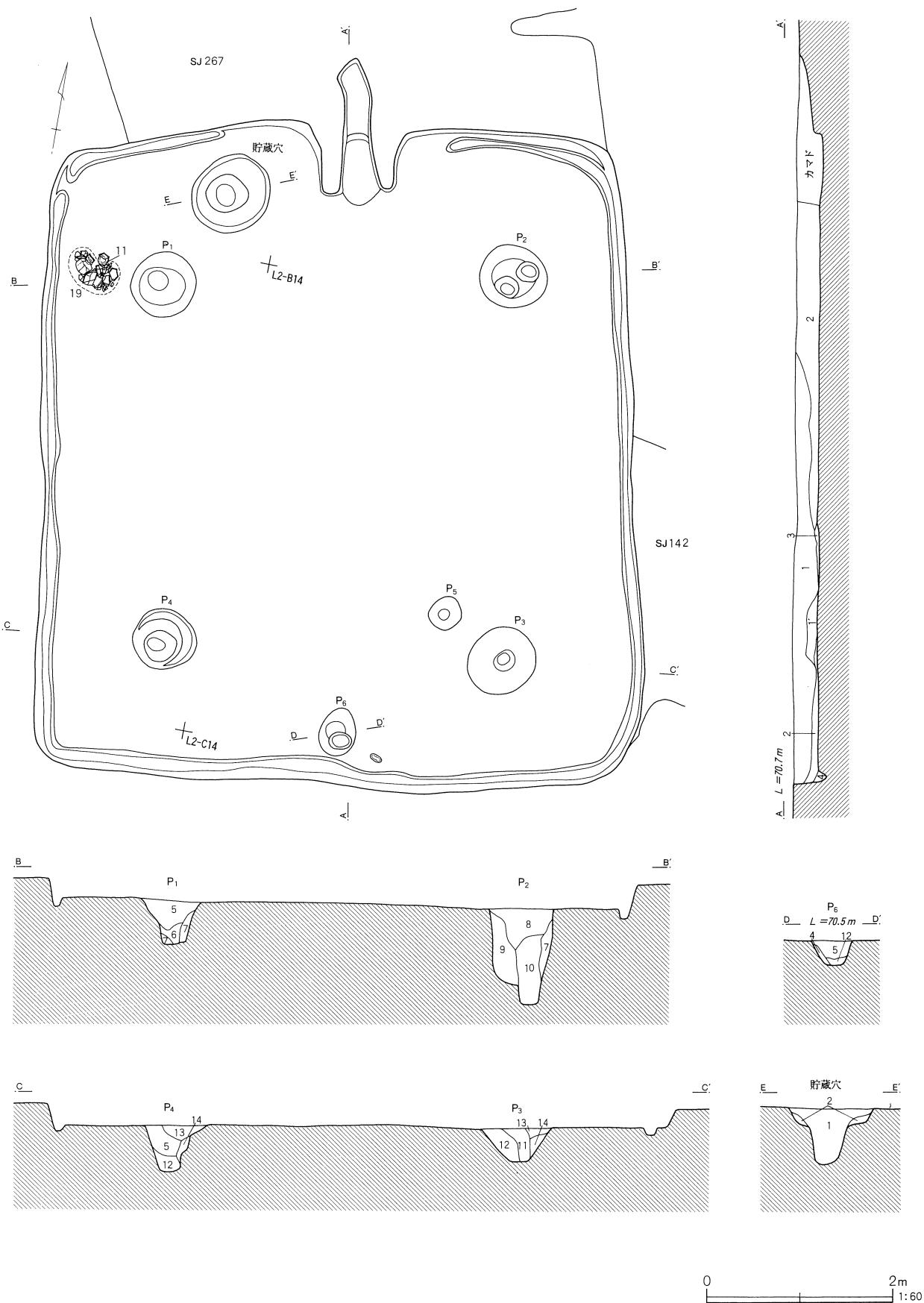
第143号住居跡（第53～56図 図版10下）

L2—A13・A14・B13・B14・C13・C14グリッドに位置する。重複関係は、第142号住居跡に切られ、第267号住居跡を切っている。形状は長方形を呈する。第19号住居跡群のなかではもっとも規模の大きい住居跡である。長辺×短辺は6.96×6.50m、深さは28cmである。

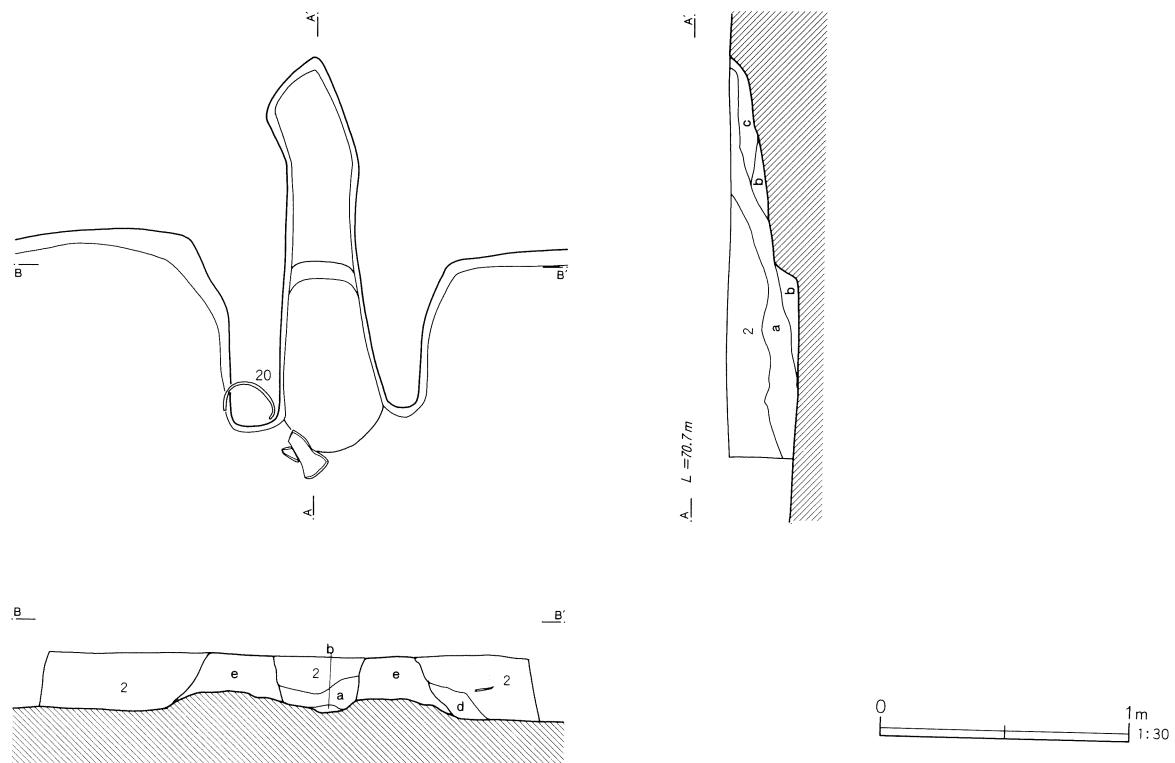
第52図 第142号住居跡・カマド



第53図 第143号住居跡



第54図 第143号住居跡カマド



- 1 黒褐色 ローム均等に少、焼土わずか
- 1 1にロームブロック・焼土ブロック混入
- 2 黒褐色 ローム・焼土少、炭化物わずか
- 3 黒褐色 ローム少、焼土・炭化物やや多
- 4 黒褐色 ローム多
- 5 黒褐色 ローム少、焼土・炭化物わずか
- 6 黒褐色 ロームやや多、焼土・炭化物少
- 7 灰黄褐色 ローム多、焼土・炭化物少
- 8 黒褐色 ローム均等に少、焼土やや多、炭化物少
- 9 黒褐色 ローム少
- 10 黒褐色 ローム少、焼土・炭化物やや多
- 11 黒褐色 ローム・焼土・炭化物少
- 12 黒褐色 ロームやや多、焼土わずか
- 13 黒褐色 ローム多、焼土・炭化物少
- 14 黒褐色 ロームブロック集中部分

- a 灰黄褐色 ロームわずか、焼土部分的に多、炭化物少、砂をブロック状に含む
- b 黒褐色 焼土少、炭化物・灰少、砂まじり
- c 灰黄褐色 烧土・炭化物・灰少、やや砂まじり
- d にぶい黄褐色 砂主体、焼土・炭化物わずか、カマド袖構築土
- e にぶい黄褐色 砂主体、ローム少、焼土・炭化物わずか、カマド袖構築土

貯蔵穴

- 1 灰黄褐色 ローム・焼土・炭化物少
- 2 灰黄褐色 ロームブロック多

カマドの傾きは N—10°—W である。

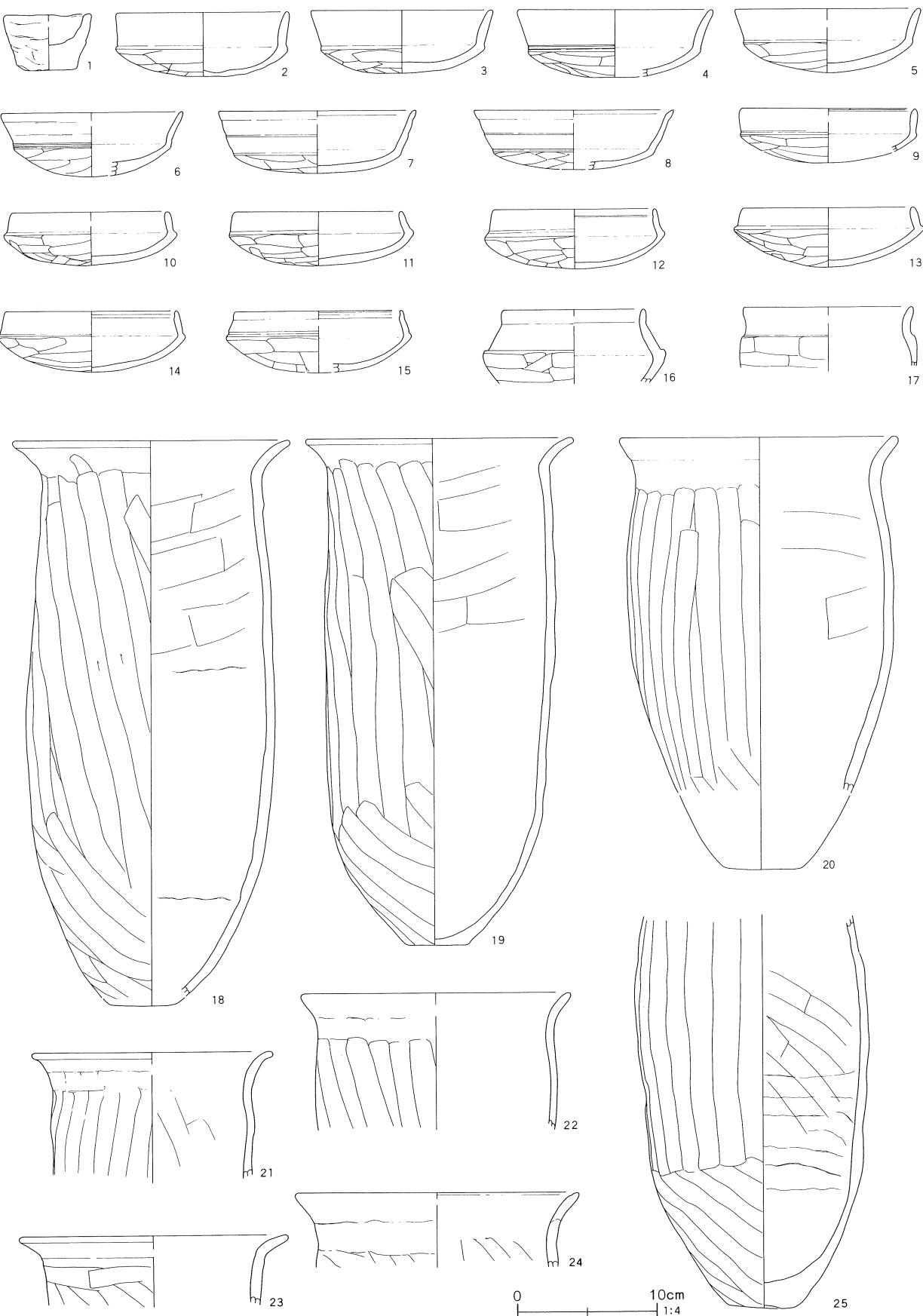
カマドは北壁中央に検出された。燃焼部は箱形に近く、底面にはわずかに掘り込みをもつ。煙道部へは明瞭な段を介して移行し、煙道部の底面は煙り出し口に向って急激に浅くなる。煙り出し口部分は削平もしくは崩落したものか、プランはあいまいとなる。袖部は砂で構築されており、左袖には補強材として土師器甕が使用されている。被熱面は燃焼部底面が顕著であり、袖部～煙道部の内壁にも認められる。

貯蔵穴は北壁寄りカマド西側に設けられている。

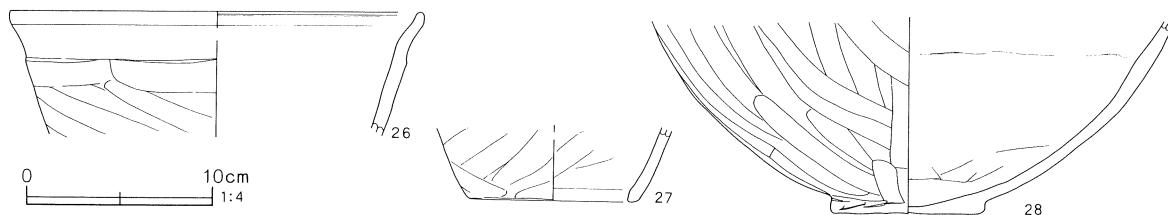
82×85cmとほぼ円形を呈する。掘り込みは段を有し、底は狭くくぼんでいる。壁溝はほぼ全周するが、プランはあまり明瞭でない。幅・深さともに10cm前後である。

ピットは6基検出され、そのうち主柱穴と思われるものがP1・P2・P3・P4の4基である。P1—P2間は約4m、P2—P3間は約4.1m、P3—P4間は約3.7m、P1—P4間は約3.9mとだいたい均等に配置されている。柱穴の掘り込みは大きく、柱痕も一部で確認されている。P5は深さ24cm、ローム混じりの黒褐色土が充填し

第55図 第143号住居跡出土遺物(1)



第56図 第143号住居跡出土遺物(2)



第143号住居跡遺物観察表 (第55・56図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	ミニチュア	(6.0)	4.0	4.4	DF 1	A	B	50	埋土	手づくね
2	壺	11.9	4.6		ADF 1	A	B	95	埋土	図版42-4
3	壺	12.2	4.4		ADF 2	A	C	95	埋土	器面風化 図版42-5
4	壺	13.6	(4.8)		AF 2	A	C	70	P1 埋土	器面風化顕著 外面一部黒化 図版42-6
5	壺	(12.9)	4.5		AF 2	A	B	70	埋土	器面風化顕著
6	壺	(12.8)	(4.5)		ADF 1	A	B	30	埋土	
7	壺	(13.8)	4.4		ADF 1	A	C	35	カマド埋土	外面一部黒化
8	壺	(14.0)	(4.2)		ADF 1	A	B	40	埋土	外面一部黒化
9	壺	(12.2)	(3.0)		DF 1	A	C	20	埋土	
10	壺	(11.0)	3.7		ADF 2	A	B	50	P1 埋土	一部ハケメ状ヘラケズリ 内・外面一部黒化
11	壺	11.7	3.8		ADF 1	A	B	80	床直	外面大半黒化 図版42-7
12	壺	11.2	4.2		ADF 1	A	C	80	埋土	図版42-8
13	壺	11.9	4.2		ADF 1	A	B	70	埋土	図版42-9
14	壺	12.0	4.3		DF 2	A	C	75	埋土	外面一部黒化 図版42-10
15	壺	(11.8)	(4.4)		ADF 2	A	C	40	埋土	
16	椀	(9.9)	(5.2)		DF 1	A	B	20	埋土	口唇部直立 口唇部内・外面黒化
17	椀	(11.8)	(4.2)		ADF 1	A	B	10	埋土	
18	甕	19.4	(39.4)		ADF 5	A	C	70	埋土	外面一部黒化 図版73-3
19	甕	18.6	35.8	4.4	ADF 5	A	B	90	床直	外面一部黒化 図版73-4
20	甕	19.3	(25.2)	5.4	ADF 5	A	B	30	カマド袖	補強材 外面一部黒化
21	甕	(16.2)	(9.0)		ADF 5	A	C	10	埋土	
22	甕	(18.8)	(9.7)		ADF 2	A	B	5	カマド埋土	
23	甕	(18.7)	(5.0)		ADF 5	A	B	5	埋土	口縁部破片
24	甕	(19.7)	(5.3)		DF 1	A	B	5	埋土	口縁部破片
25	甕		(27.7)	5.0	ADF 5	A	B	40	埋土	外面一部黒化
26	鉢	(21.8)	(6.5)		ADF 1	B	B	5	埋土	口縁部破片
27	甌		(4.0)	9.2	ADF 1	A	B	5	埋土	底部破片 内面、外面一部黒化
28	壺		(10.3)	8.2	ADF 5	A	B	20	埋土	底部円盤状平底 外面黒斑あり

ていた。

西南コーナーの埋土中に、床面からは浮いた状態で、焼土が集中して堆積していた。

壁の立ち上がりは明瞭で、床面にはほぼ全面に貼り床が認められた。

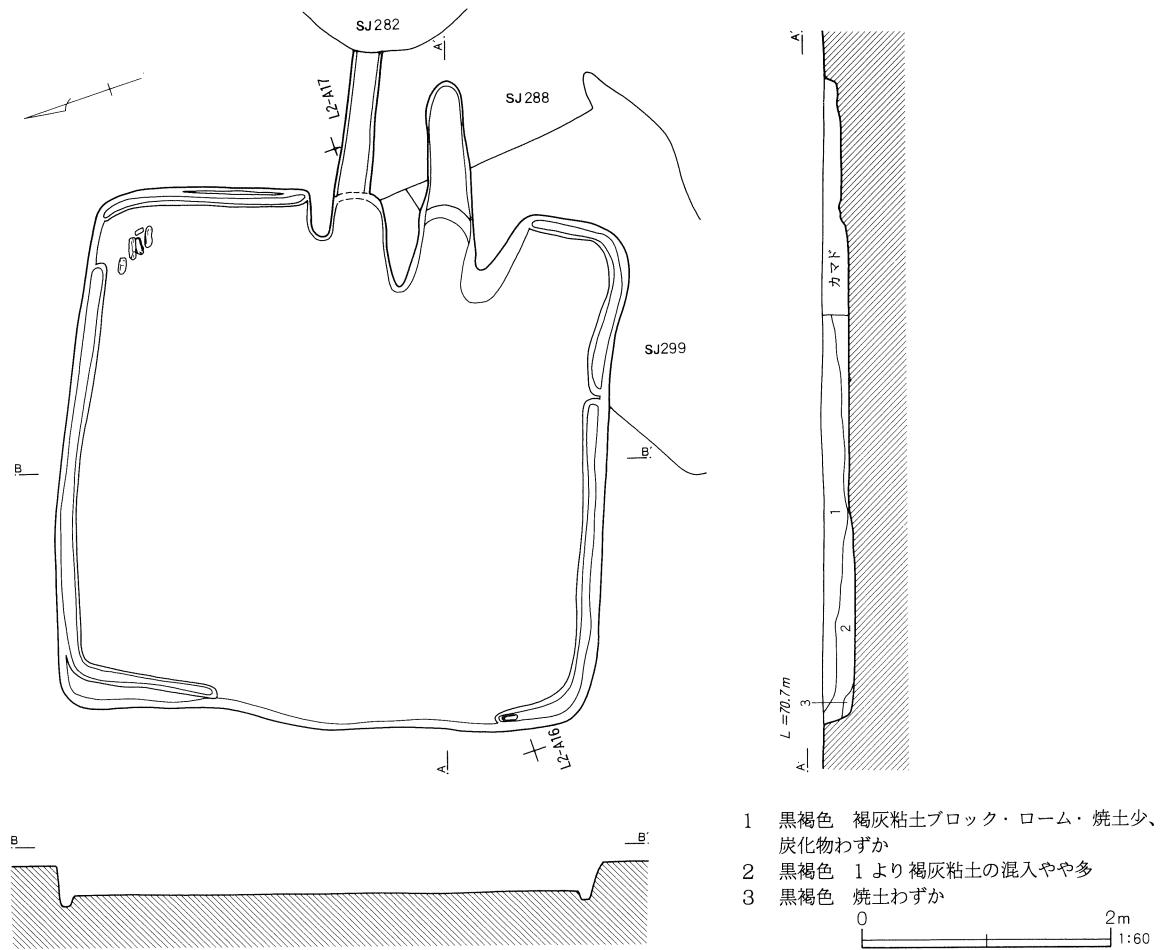
遺物はおもに埋土上～中層から出土しており、床面直上から出土した遺物は少ない。土師器壺・椀・甕・壺・甌、ミニチュア土器などがある。図示していないが土師器高壺の脚部破片も出土している。

第144号住居跡 (第57・58図 図版11上)

K2-T16・T17・A16・A17グリッドに位置する。重複関係は、第282号住居跡に切られ、第285・288・299号住居跡を切っている。形状は方形を呈する。長辺×短辺は4.30×4.18m、深さは22cmである。カマドの傾きはN-112°-Eである。

2基のカマドが東壁から検出された。カマドAの焼部は箱形で、規模は75×50cmである。底面は掘り込みをもたず、平坦である。煙道部へは浅い段を介している。煙道部は長さ96cm、幅30cmで、底面は中央がわ

第57図 第144号住居跡



第144号住居跡遺物観察表（第58図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	ミニチュア	(5.7)	(2.8)		AD F 2	A	B	10	埋土	
2	壺	(11.9)	(2.8)		F 2	A	C	10	埋土	器面風化顯著
3	壺	(13.8)	(3.6)		AD F 2	A	B	5	埋土	口縁部破片
4	壺	(13.9)	(4.0)		AD F 2	A	B	15	埋土	
5	高壺	21.8	(4.0)		AD F 2	A	B	10	埋土	壺部破片
6	高壺		(3.7)		DF 1	A	C	10	埋土	脚部破片
7	甕	(18.7)	(3.3)		AD F 2	A	C	5	埋土	口縁部破片
8	甕		(3.5)	(5.3)	AF 5	A	C	5	埋土	底部破片 内面黒化
9	甕		(5.3)	(4.2)	AD F 5	A	C	5	埋土	底部破片
10	鉄製品	現長2.4cm、幅0.5×0.7cm、重さ3.2g							埋土	角棒状の破片 用途不明

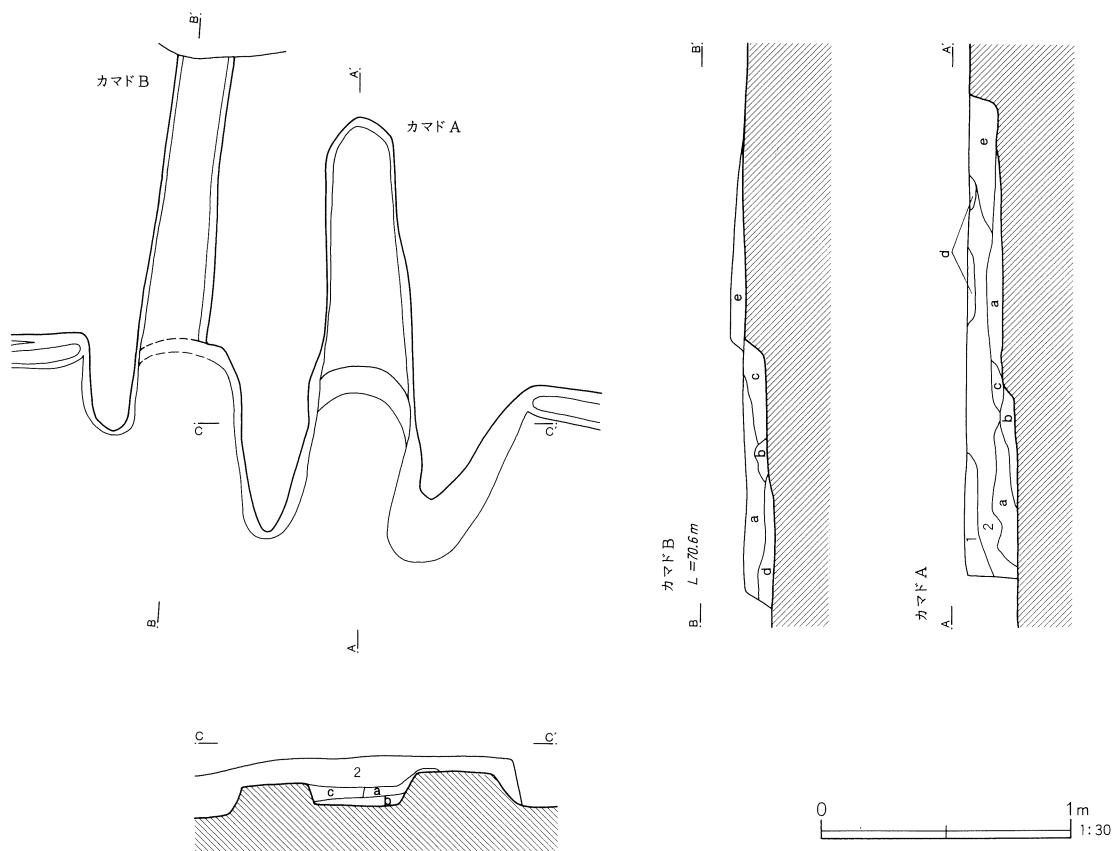
すかに深くなり、煙り出し口底面がもっとも浅くなる。袖部は地山土の掘り残しである。カマドBもカマドAと同様の造りであるが、煙道部へ移る段が深く、煙道部が中軸から左寄りに構築されている。被熱面がカマドAの燃焼部底面にのみみられることや、カマドBが壁中央に位置することから、住居廃絶時に使用されていたのはカマドAと推定される。

壁溝は西壁中央付近を除いて検出された。幅12cm、深さ8cm前後である。

床面は明瞭でなく、柱穴や貯蔵穴も検出されなかつた。

遺物は埋土中から破片が少量出土した。土師器壺・甕・ミニチュア土器の他に、棒状の鉄製品が出土している。

第58図 第144号住居跡カマド・出土遺物

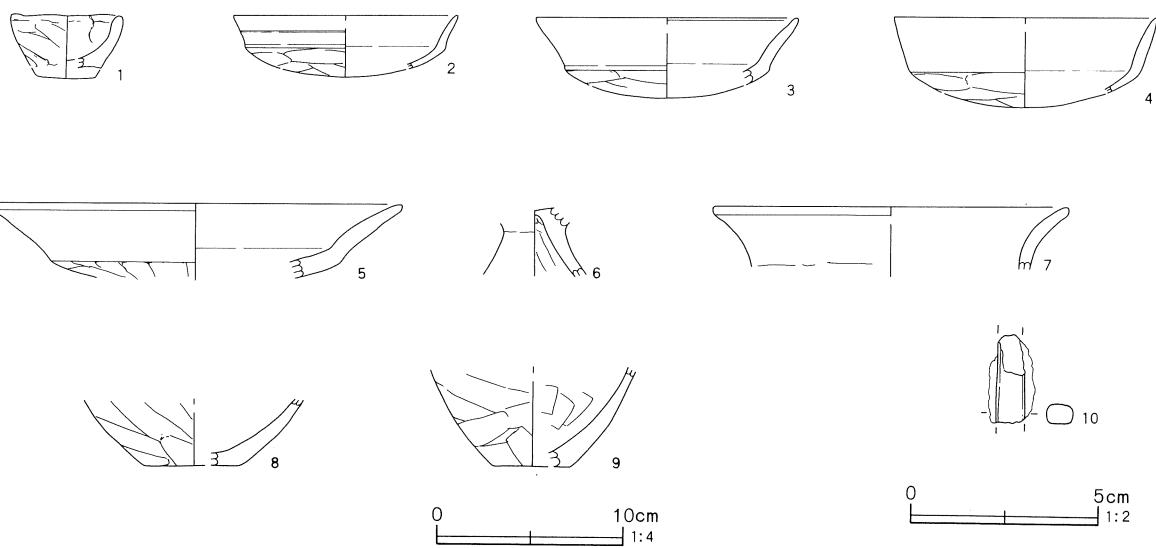


カマド A

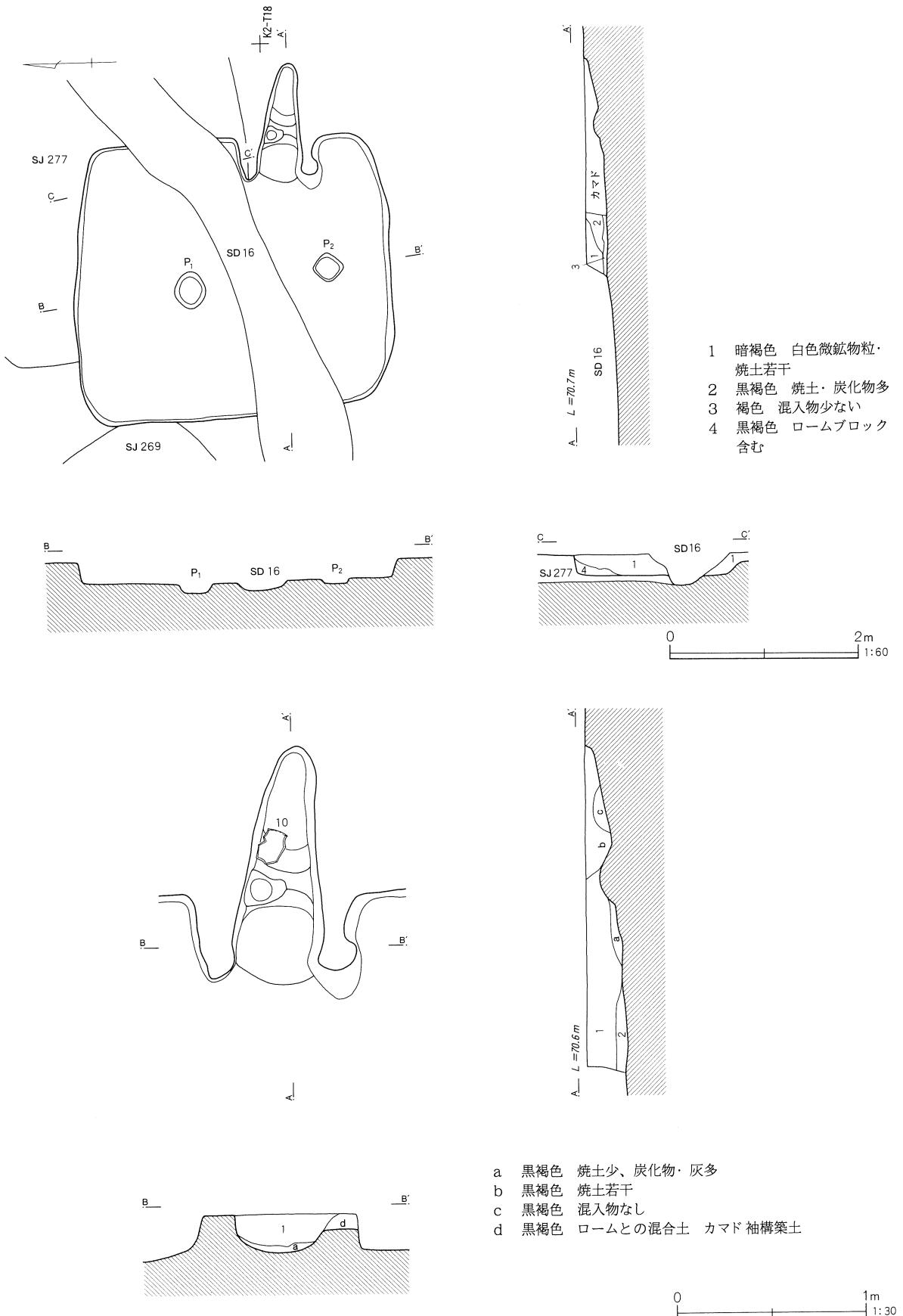
- a 黒褐色 焼土ブロック多、灰・炭化物少
- b 暗灰色 灰主体、焼土多、炭化物少
- c 黒褐色 焼土・炭化物・灰少
- d 橙色 焼土層（天井被熱部）
- e 黒褐色 焼土・焼土ブロック多、炭化物少

カマド B

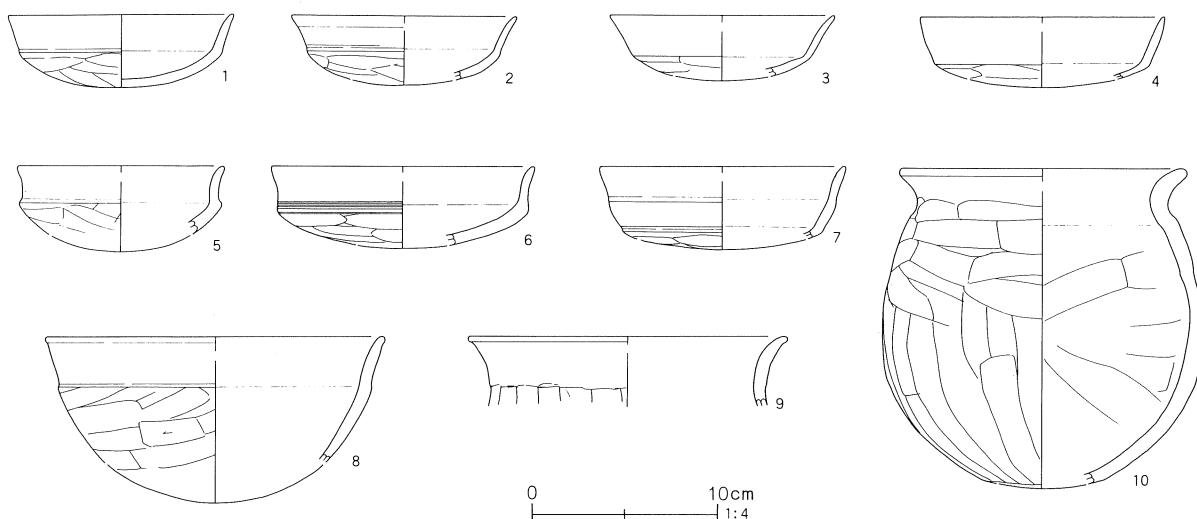
- a 黒褐色 焼土や多、炭化物少、ロームわずか
- b 焼土ブロック
- c 黒褐色 焼土・焼土ブロック部分的に多、炭化物少
- d 黒褐色 焼土・炭化物少、灰多
- e 黒褐色 焼土・炭化物わずか



第59図 第150号住居跡・カマド



第60図 第150号住居跡出土遺物



第150号住居跡遺物観察表（第60図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(11.9)	3.9		A F 2	A	C	35	埋土	器面風化顯著
2	壺	(11.9)	(3.4)		AD F 2	A	B	20	埋土	内面黒化
3	壺	(11.9)	(3.2)		AD F 5	A	B	20	埋土	器面風化顯著
4	壺	(12.9)	(3.8)		A F 2	A	C	15	埋土	器面風化顯著
5	壺	(10.8)	4.6		AD F 2	B	B	25	埋土	器面風化顯著
6	壺	(13.9)	(4.2)		AD F 2	B	B	20	埋土	体部外面黒化
7	壺	(13.0)	(4.0)		AD F 1	A	C	15	埋土	器面風化顯著
8	鉢	(17.9)	(6.1)		A D E F 5	A	B	5	埋土	内・外面一部黒化 口縁部破片
9	甕	(16.8)	(3.7)		AD F 2	A	C	5	埋土	器面風化顯著
10	小形甕	(14.9)	(16.7)	(6.4)	AD F 5	B	C	35	カマド煙道	内面、外面一部黒化

第150号住居跡（第59・60図 図版13上）

K2—S17・T17 グリッドに位置する。重複関係は、第16号溝跡に切られ、第277号住居跡を切る。第269号住居跡との関係は定かではないが、本住居跡の方が新しいと推定される。形状は方形を呈する。長辺×短辺は3.33×2.90m、深さは23cmである。カマドの傾きはN—90°—Eである。

カマドは東壁の南寄りに構築されている。燃焼部はやや丸みをもち、規模は50×45cmである。燃焼部底面の掘り込みは浅く皿状で、煙道部との境には丸い段を有する。煙道部は長さ75cm、幅28cmである。底面は一旦深くなるが、煙り出し口に向って急激に立ち上がっている。袖部は掘り残した地山土を基礎として、黒褐色土で構築されている。

2基のピットは深さ10cm未満で浅く、柱穴ではないかもしれない。その他の施設は検出されなかった。

床面は不明瞭で、きれいに検出できなかった。

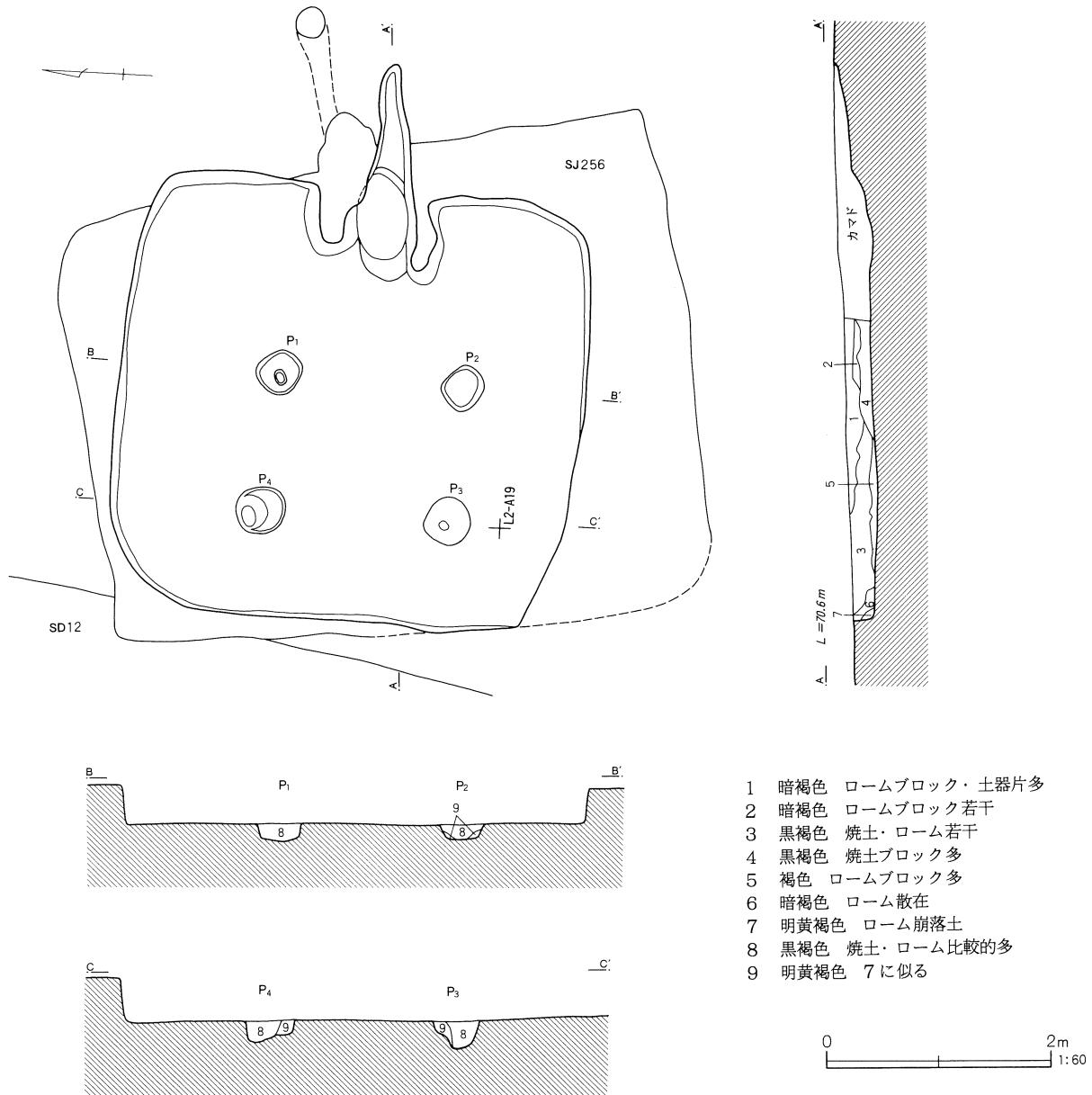
遺物は、すべて埋土中からの出土である。破片が多く、その量は少ない。主なものに土師器壺・鉢・甕がある。

第254号住居跡（第61、62図 図版16上）

K2—T18・T19、L2—A18・A19 グリッドに位置する。第256号住居跡を切って構築されている。形状は方形を呈する。長辺×短辺は4.12×3.78m、深さは23cmである。カマドの傾きはN—92°—Eである。

カマドは東壁中央に構築されている。燃焼部は楕円形で規模は100×45cmである。底面は皿状に掘り込まれている。煙道部は先細りで、長さ91cm、幅は中央で25cmである。底面は徐々に浅くなり、煙り出し口部分がもっとも浅い。燃焼部から煙道部へは明瞭な段を介する。袖部はロームと黒褐色土を混ぜ合わせた土で

第61図 第254号住居跡



構築されている。支脚は専用土製品である。

当初切り合い関係が不明であり、第256号住居跡と一緒に掘り下げを行なった。遺物は一部混在して取り上げている。またそのため、南西コーナー付近の壁は、確認することができなかった。床面の高さは第256号住居跡より低い。

ピットは4基検出された。本住居跡に伴うと考えられるが、深さは16~25cmと浅い。

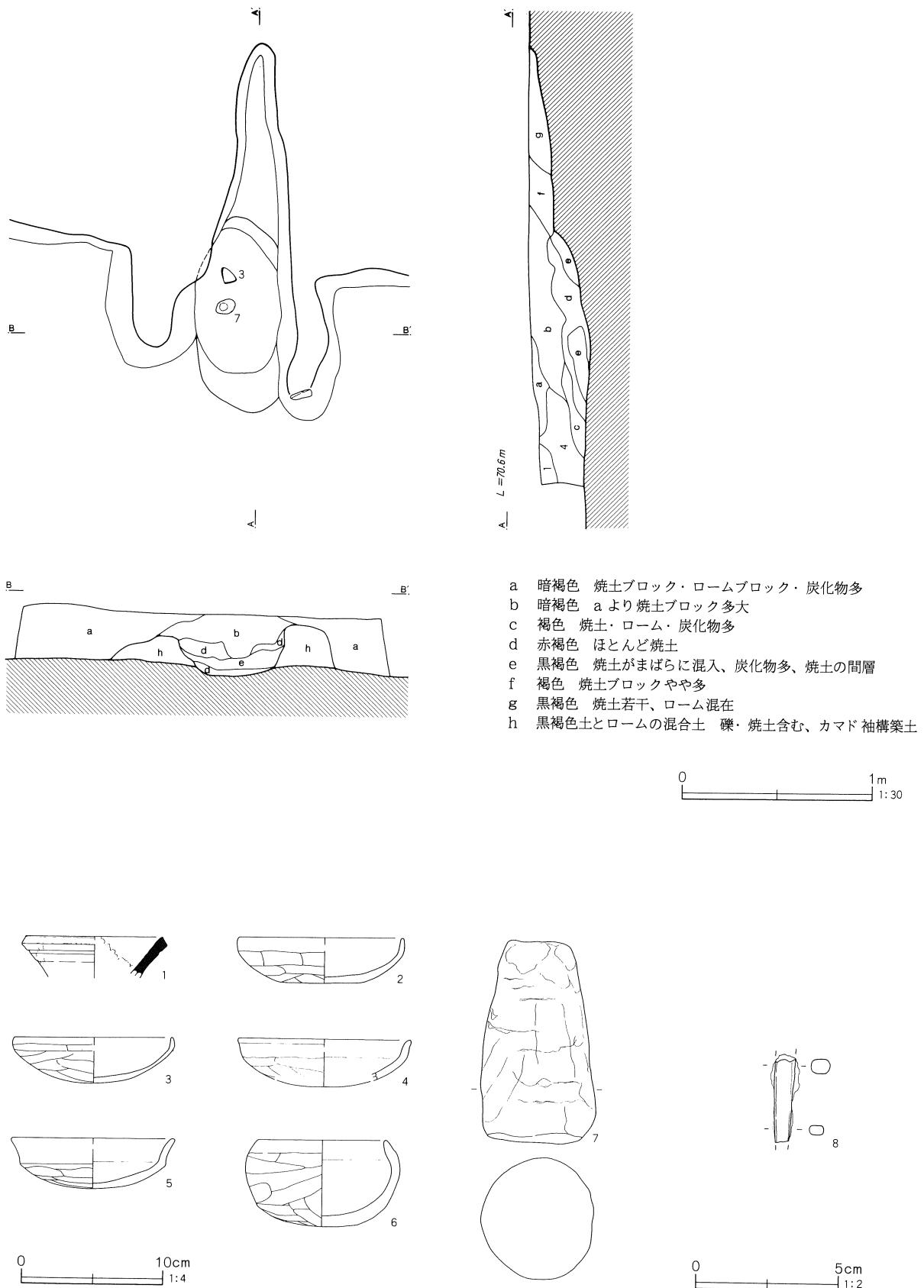
遺物はおもに東南コーナー付近の埋土から出土している。土師器壺類が主体であるが、切り合う第256号住

居跡のものと混在しており、5と6はそれにあたる可能性がある。

第255号住居跡（第63~65図 図版16中、下）

L2-D14・D15・E13~E15グリッドに位置する。北コーナーを第140号住居跡に切られ、東コーナーは旧流路によって失われている。第257号住居跡も切っている。形状は長方形を呈する。長辺×短辺は6.36×5.22m、深さは13cmである。埋土は一層で、短期間の埋没が想定される。カマドの傾きはN-54°-Wである。

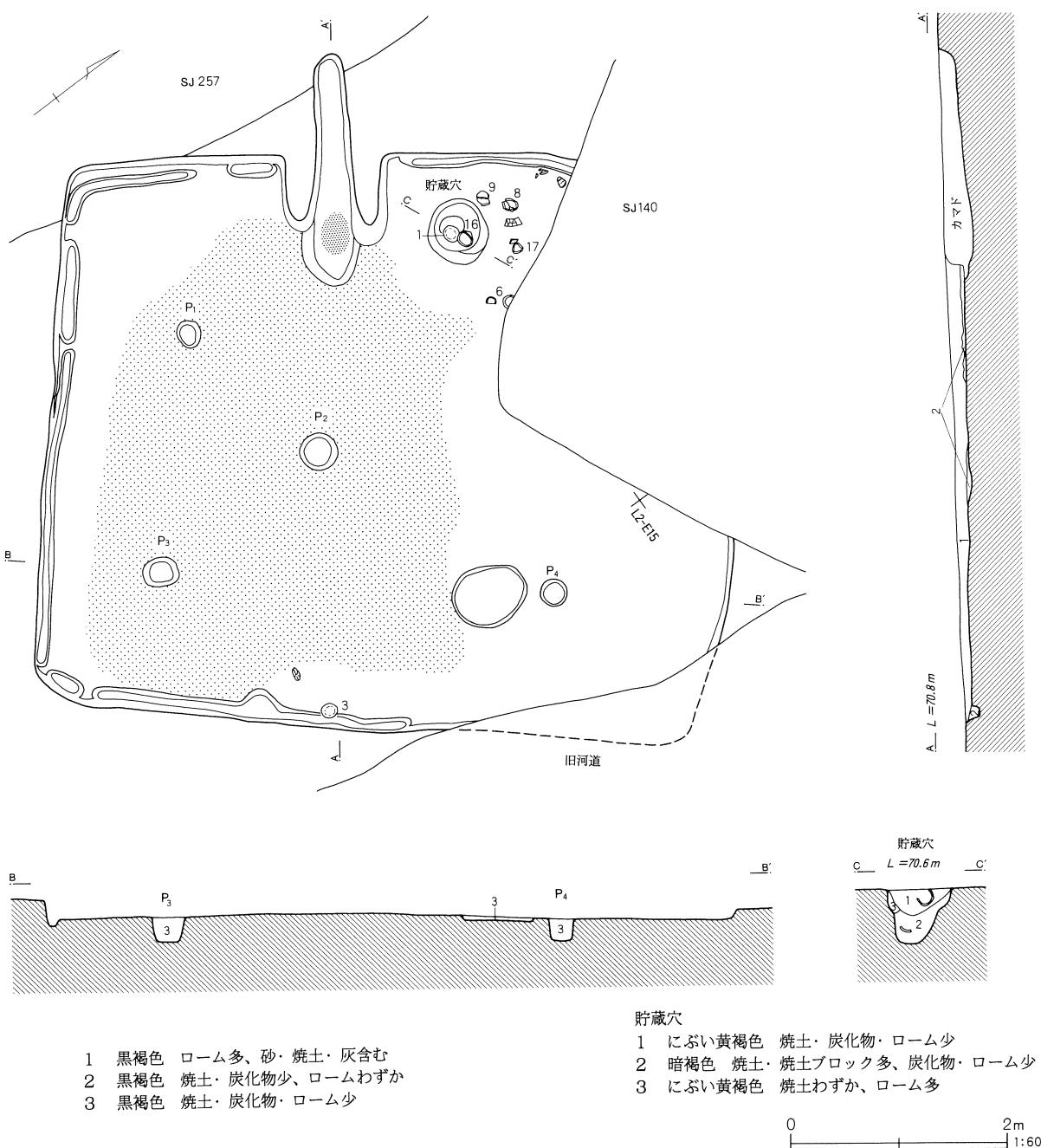
第62図 第254号住居跡カマド・出土遺物



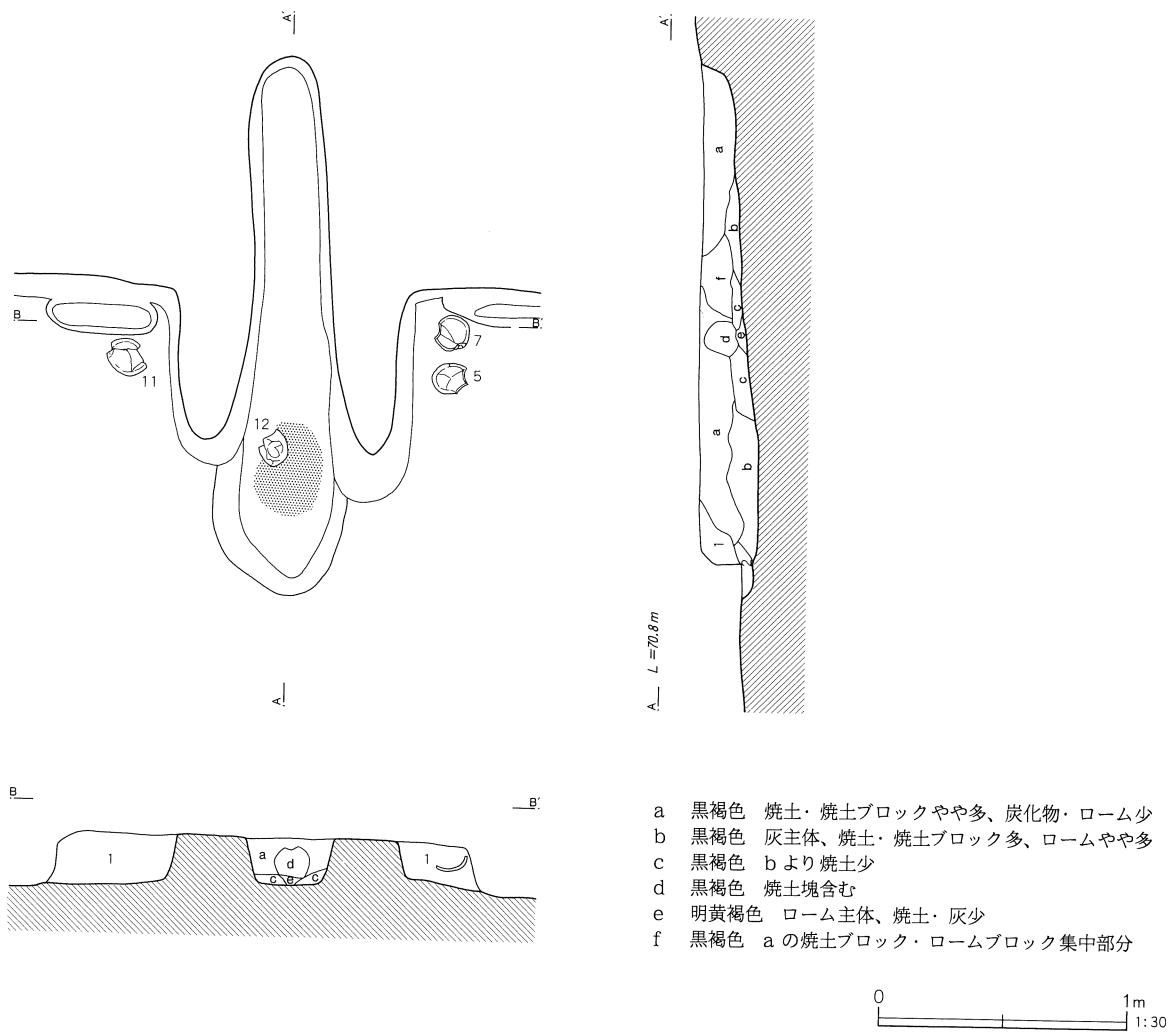
第254号住居跡遺物観察表（第62図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(9.5)	(2.9)		ADF 2	A	E	5	埋土	須恵器 口縁部破片 自然釉 東海産?
2	壺	(11.4)	3.2		ADE F 2	A	C	40	埋土	
3	壺	(11.0)	3.2		ADF 2	A	C	40	カマド	器面風化顯著
4	壺	(11.9)	(3.3)		ADF 1	A	B	20	埋土	器面風化顯著
5	壺	(11.2)	3.5		F 2	A	C	20	埋土	
6	椀	8.9	6.1		ADF 5	A	B	100	埋土	外面一部黒化 図版57-2
7	支脚		14.0		ADF 5	A	C	100	カマド	
8	鉄製品	現長3.0cm、幅0.3~0.5×0.7cm、重さ2.0g					埋土	丸棒状の破片 用途不明		

第63図 第255号住居跡



第64図 第255号住居跡カマド



る。

カマドは北西壁やや南寄りに構築されている。燃焼部は楕円形で、底面は浅く掘り込まれている。底部は煙道部へなだらかに浅くなり、その境は判然としない。全体の長さは212cmである。煙道部の幅は30cm程度である。袖部は地山土（ローム）を掘り残して造られている。被熱面は燃焼部底面に明瞭で、袖部～煙道部の内壁にも認められた。

貯蔵穴はカマド右脇に検出された。円形で規模は直径58cmである。深さは50cmで、掘り込みは幾分段をもち、底は丸い。

壁溝は検出された壁のほとんどで確認された。幅は10cm前後、深さは5～7cmである。途切れがちに巡っ

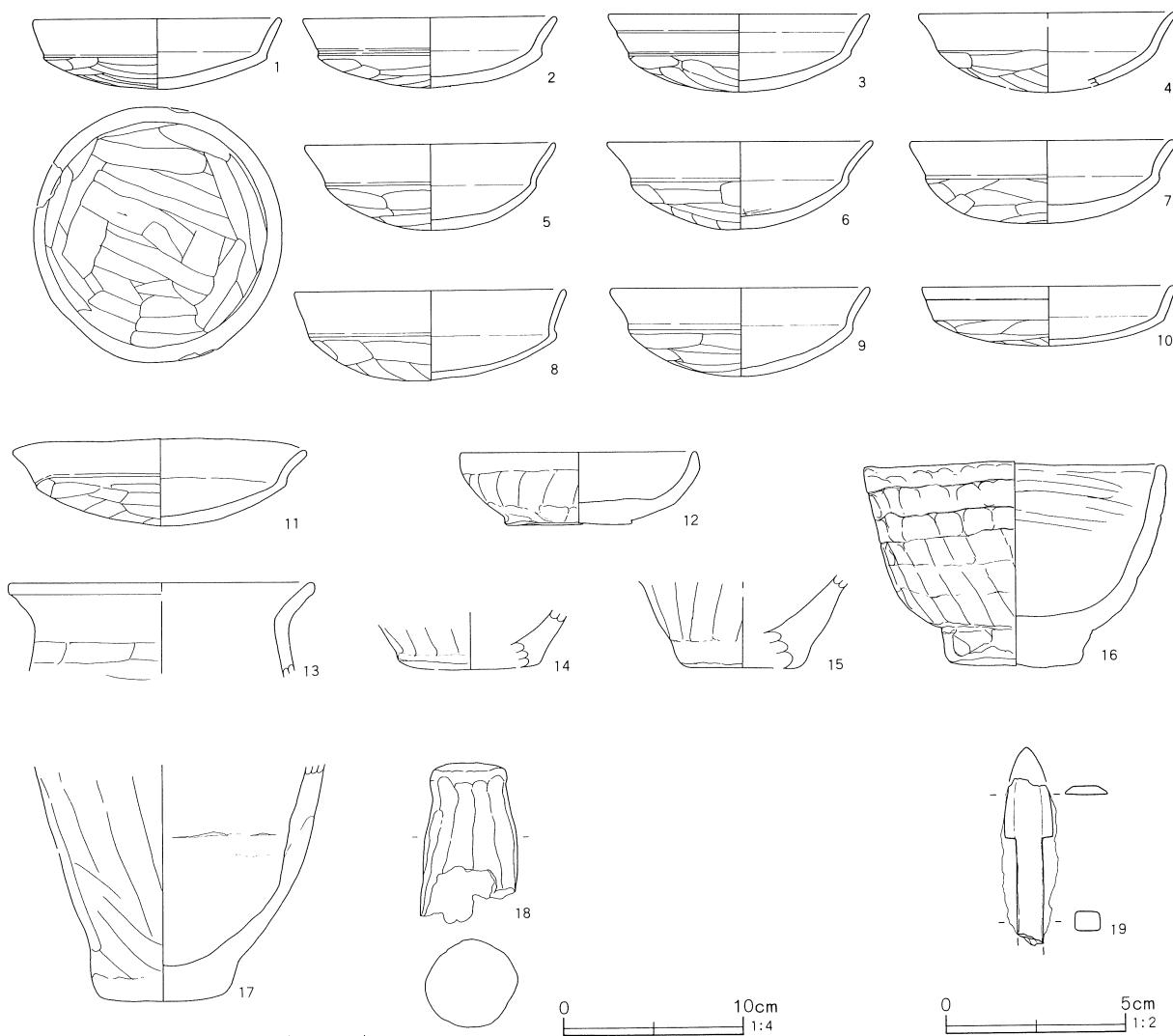
ている。

ピットは4基確認された。P1・P3・P4がその位置から柱穴と考えられる。ただし、総じて浅く、柱痕はみられない。P1は深さ9cm、P2は深さ7cmで、埋土は他のピットと同様の黒褐色土である。P1-P3間は2.2m、P3-P4間は3.5mである。

壁の掘り込みは、部分的にではあるがしっかりと検出された。床面は明瞭で、貼り床が図示した範囲で確認された。

遺物は、おもにカマドと貯蔵穴、およびその周辺から出土した。土師器壺・甕などがある。また、埋土中から鉄鎌が出土している。

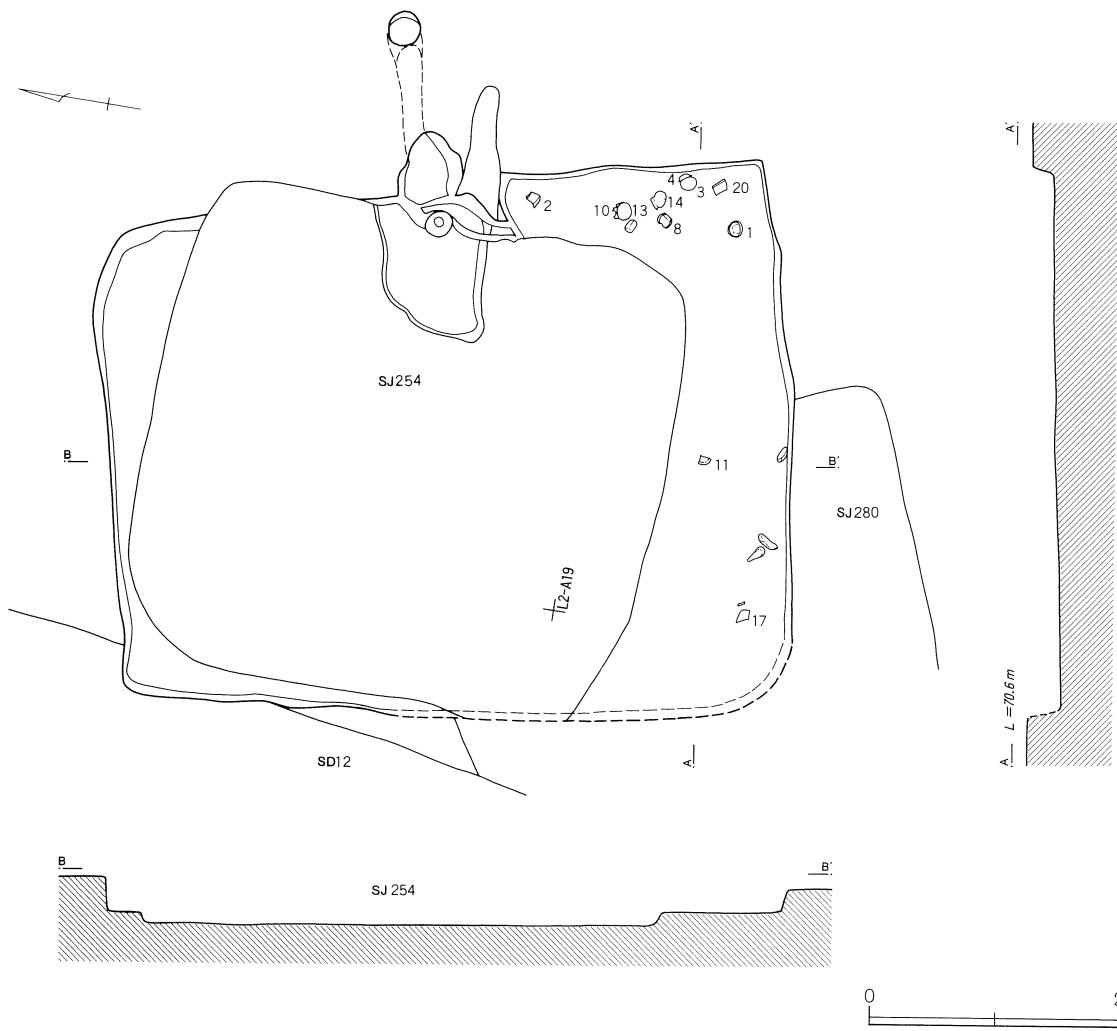
第65図 第255号住居跡出土遺物



第255号住居跡遺物観察表（第65図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	13.5	4.4		ADF 2	A	B	95	貯蔵穴	外面一部黒化 図版44-10
2	壺	13.8	3.9		DF 1	A	B	80	埋土	外面一部黒化 図版45-1
3	壺	14.2	4.8		ADF 5	A	C	95	壁際	図版45-2
4	壺	14.0	(4.1)		ADF 2	A	B	50	埋土	器面風化顕著
5	壺	13.7	4.8		ADF 2	A	B	90	カマド脇	器面風化顕著 外面一部黒化 図版45-3
6	壺	14.5	4.8		ADF 5	A	C	70	床直	器面風化顕著 図版45-4
7	壺	14.3	4.6		ADF 5	A	B	95	カマド脇	図版45-5
8	壺	14.8	5.0		ADF 2	A	B	80	床直	器面風化顕著 図版45-6
9	壺	14.0	4.9		ADF 5	A	C	50	床直	外面一部黒化
10	壺	13.8	3.3		ADF 2	A	C	50	埋土	
11	壺	16.1	4.8		ADF 5	A	C	95	カマド脇	歪み顕著 外面一部黒化 図版45-7
12	壺	12.9	4.0	7.0	ADF 2	A	C	75	カマド	底部平らにケズリ出し 外面一部黒化 図版45-8
13	甕	(16.6)	(5.3)		ADF 2	A	B	5	貯蔵穴	口縁部破片
14	甕		(3.2)	(7.6)	DF 2	A	C	5	カマド埋土	底部破片
15	甕		(5.2)	(6.2)	ADF 2	A	B	5	埋土	底部破片、木葉痕あり
16	鉢	16.3	11.1	7.6	ADF 2	A	B	80	貯蔵穴	図版65-4
17	甕		(13.0)	7.2	AD 5	A	B	15	床直	
18	支脚		(8.3)		ADF 2	A	B	40	埋土	
19	鉄鎌	現長4.6cm、鎌身幅1.3cm、頸部幅0.5×0.7cm、重さ7.6g							埋土	長頸鎌 片刃造

第66図 第256号住居跡



第256号住居跡（第66～68図 図版17上）

K2—T18・T19、L2—A18・A19 グリッドに位置する。重複関係は第12号溝跡と第254号住居跡に切られ、第280号住居跡を切っている。形状は長方形を呈すると思われるが、西側の壁は、他の遺構との切り合いによって明確にできず、推定ラインである。長辺×短辺は $5.44 \times 4.35\text{m}$ 、深さは15～25cmである。カマドの傾きはN—82°—Eである。

カマドは東壁中央に構築されている。燃焼部は第254号住居跡のカマドによって壊されており、形状は不明だが、底部の掘り込みは比較的深く、際にはピット状の掘り込みがある。煙道部との境には高い段をもち、底面はそこでもっとも浅くなる。煙道部は天井がやや崩れがちに残っている。底面は徐々に深くなり、煙り出し口の部分で急激に立ち上がる。煙り出し口は直径

27cm、深さ45cmである。袖部は残存していなかった。被熱面は天井部および煙り出し口で明瞭に認められた。

貯蔵穴や柱穴は検出されなかった。

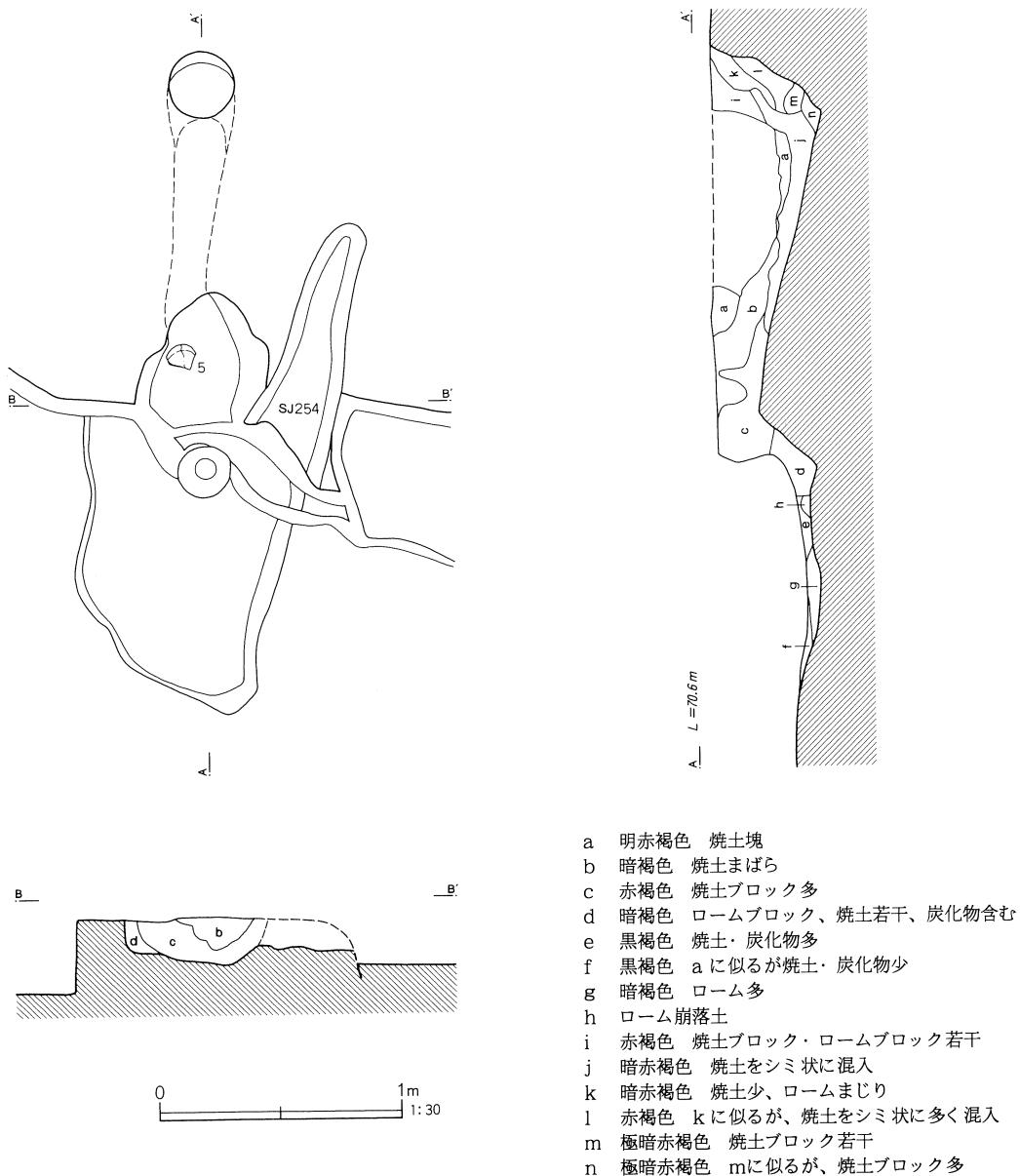
遺物は、東南コーナー付近の床面からおもに出土している。土師器壊・小形壺・甕・甌などがみられる。また、鉄製品として、弓金具（両頭金具）が出土した。

第257号住居跡（第69～73図 図版17中、下、18上）

L2—D12・D13・E12・E13 グリッドに位置する。第255号住居跡に切られている。形状は方形を呈する。長辺×短辺 $5.88 \times 5.77\text{m}$ 、深さは20cmである。焼失家屋であり、遺存状態は良好である。埋土は焼失後、放置されて自然に埋没したものと推定される。

カマドの傾きはN—82°—Wである。

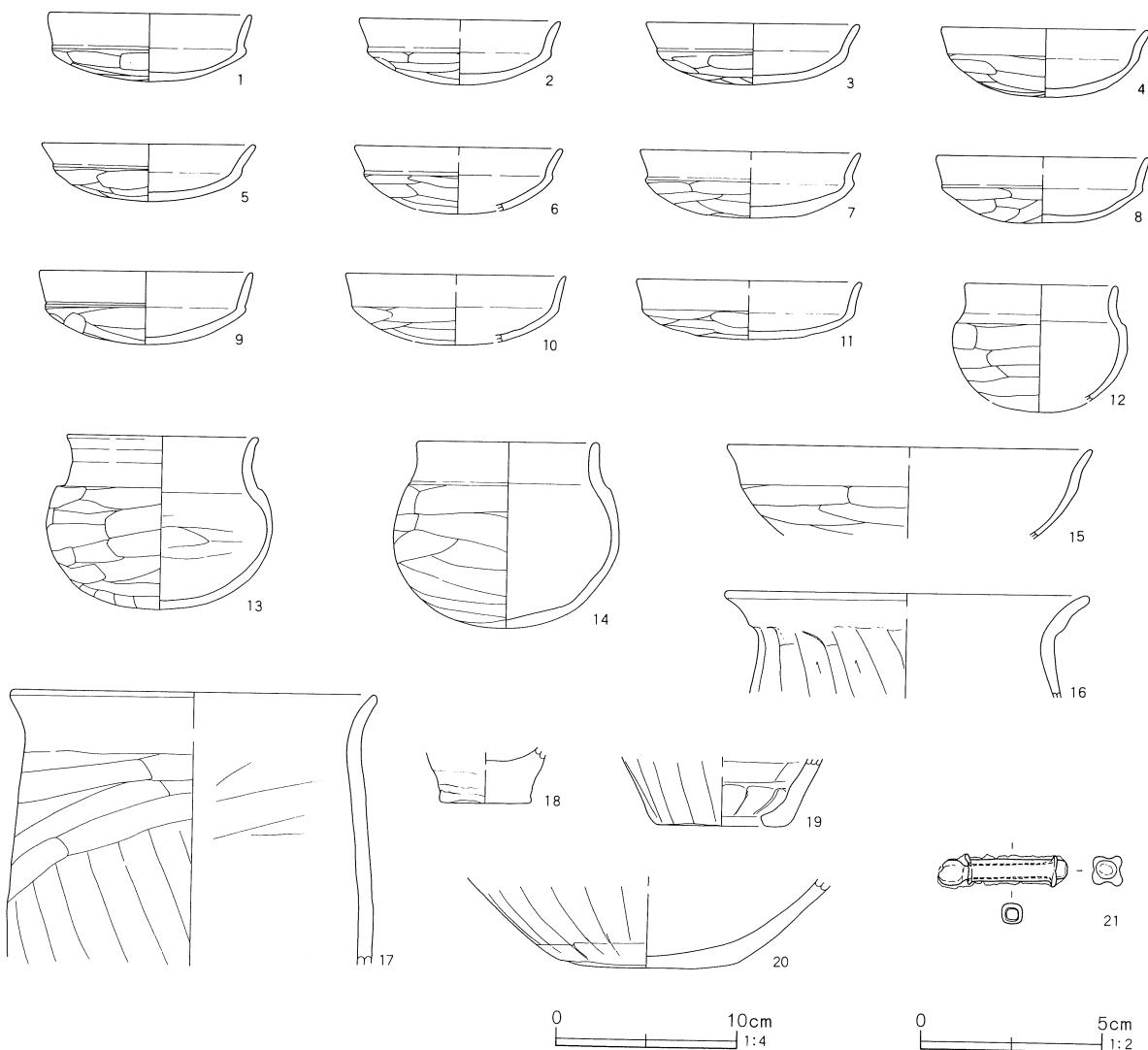
第67図 第256号住居跡カマド



第256号住居跡遺物観察表(1) (第68図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	10.9	3.7		D 2	A	B	100	床直	図版45-9
2	壺	(10.8)	3.5		F 2	A	C	50	床直	外面一部黒化
3	壺	11.4	3.4		F 2	A	C	80	床直	器面風化 図版45-10
4	壺	11.1	3.8		D F 2	A	C	65	床直	器面風化
5	壺	11.4	3.2		F 2	A	C	60	カマド	器面風化顕著
6	壺	(11.2)	(3.3)		D F 2	A	B	25	埋土	
7	壺	(11.8)	4.6		F 1	A	C	40	埋土	
8	壺	(11.5)	3.6		D 2	A	B	45	床直	
9	壺	11.4	4.0		D 2	A	B	95	埋土	図版46-1
10	壺	(11.8)	(3.6)		F 1	A	C	25	床直	器面風化顕著
11	壺	(12.0)	3.2		D F 2	A	C	40	床直	器面風化
12	小形壺	8.0	(6.3)		F 2	A	B	50	埋土	器面風化
13	小形壺	10.2	9.5		D F 2	A	B	100	床直	器面風化顕著 図版62-3
14	小形壺	9.6	10.2		D F 2	A	B	100	床直	器面風化顕著 図版62-4

第68図 第256号住居跡出土遺物



第256号住居跡遺物観察表(2) (第68図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
15	鉢	(19.7)	(4.9)		D F 2	A	B	5	埋土	器面風化顯著 底部破片 外面黒化 外面一部黒化
16	甕	(19.4)	(5.6)		A D F 5	A	C	5	埋土	
17	甕	(19.7)	(14.8)		A D F 5	A	B	10	床直	
18	ミニチュア		(3.1)	4.9	A D 2	A	B	10	埋土	
19	甌		(3.7)	7.0	A D 2	A	B	5	埋土	
20	壺		(5.0)	9.8	A D E 2	A	B	5	床直	
21	弓金具	長さ3.5cm、幅0.6cm、重さ3.6g						埋土	花座の筒金具に鉢を打ち込むもの	

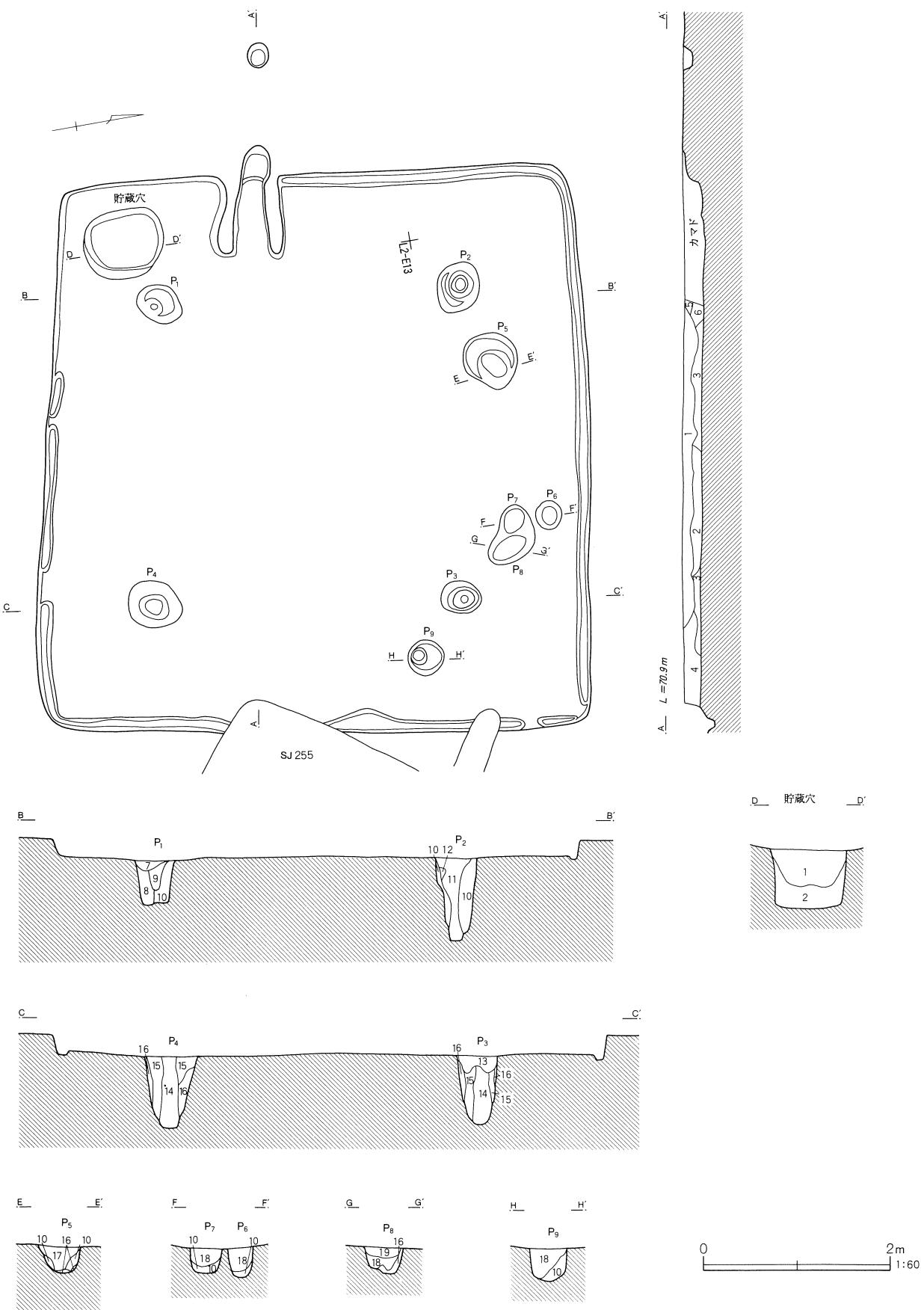
カマドは西壁南寄りに構築されている。燃焼部は長方形で、規模は88×37cmである。底面の掘り込みはほとんどなく、煙道部への移行は高い段をもつ。煙道部は削平されてほとんど残存していない。わずかに煙り出し口底面の掘り込みが確認されたに過ぎない。袖部は長く、黒褐色土によって構築されている。埋土中に天井部の崩落土が観察された。被塗面は袖内壁に顯著

に認められた(m層)。支脚には自然石が使用されていた

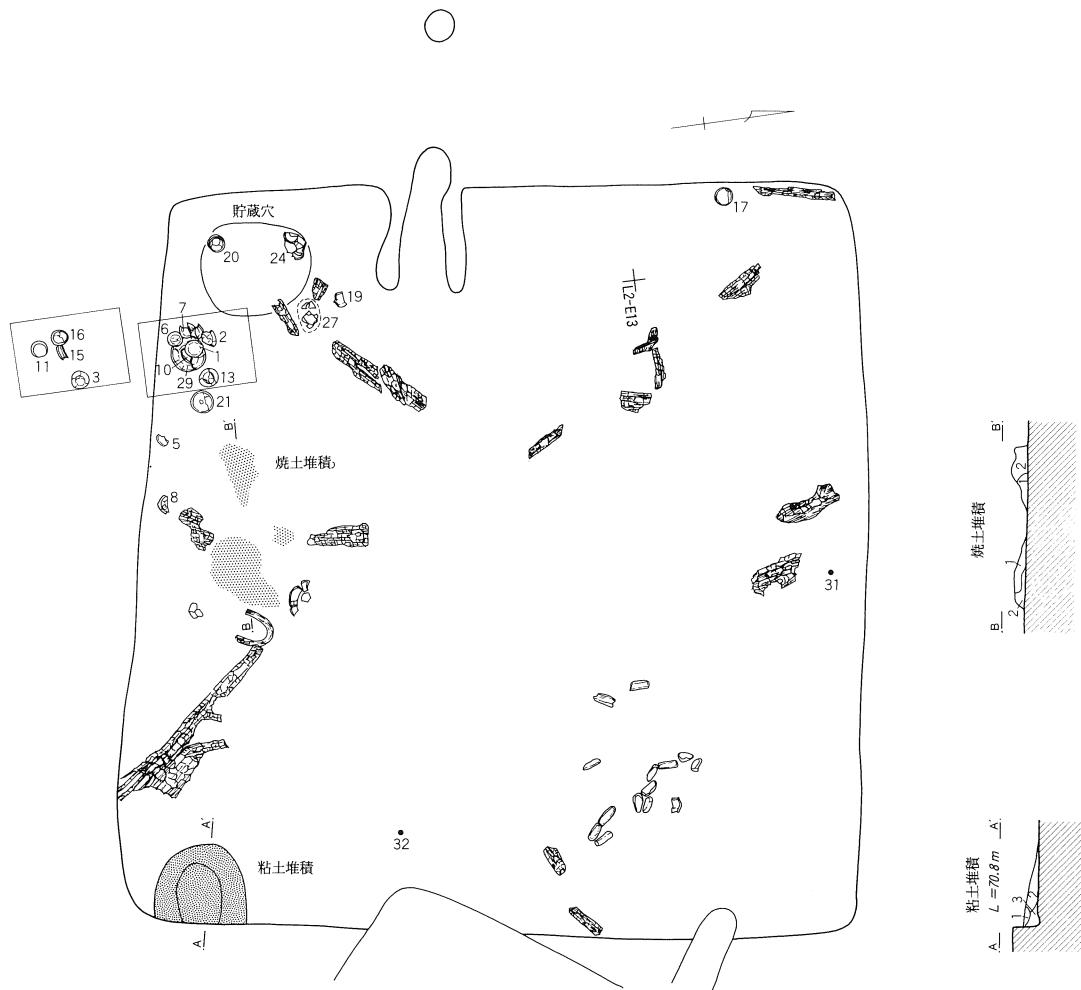
貯蔵穴は南西コーナーに検出された。楕円形で、規模は71×87cm、深さは63cmで、ほぼ直に掘り込まれている。底面は平らである。

壁溝は南西コーナーを除いてほぼ巡っている。幅10cm、深さ5cm前後である。掘り込みは比較的明瞭である。

第69図 第257号住居跡(1)



第70図 第257号住居跡(2)



- 1 黒褐色 焼土・炭化物・ローム・ロームブロック少
- 2 黒褐色 焼土・炭化物・ローム・ロームブロック多
- 3 黒褐色 焼土・炭化物多・ローム・ロームブロック少
- 4 黒褐色 焼土・炭化物少・ローム・ロームブロック多
- 5 黒褐色 焼土多・炭化物・ローム少
- 6 黒褐色 焼土・炭化物多・ロームブロック少
- 7 黒褐色 焼土わずか・ローム少
- 8 黒褐色 焼土・炭化物少・ローム下面でやや多
- 9 黒褐色 焼土・炭化物わずか
- 10 暗褐色 ローム多・他の混入物なし
- 11 黒褐色 焼土・炭化物少・ロームブロック多
- 12 ロームブロック
- 13 にぶい黄褐色 ロームブロック主体・焼土・炭化物わずか
- 14 黒褐色 焼土・ロームブロック少・炭化物多
- 15 黒褐色 焼土少・炭化物・ロームブロック多
- 16 にぶい黄橙色 ローム主体
- 17 黒褐色 焼土・炭化物・ローム少
- 18 黒褐色 焼土・炭化物少・ロームブロック多
- 19 暗褐色 焼土少・炭化物・ローム多

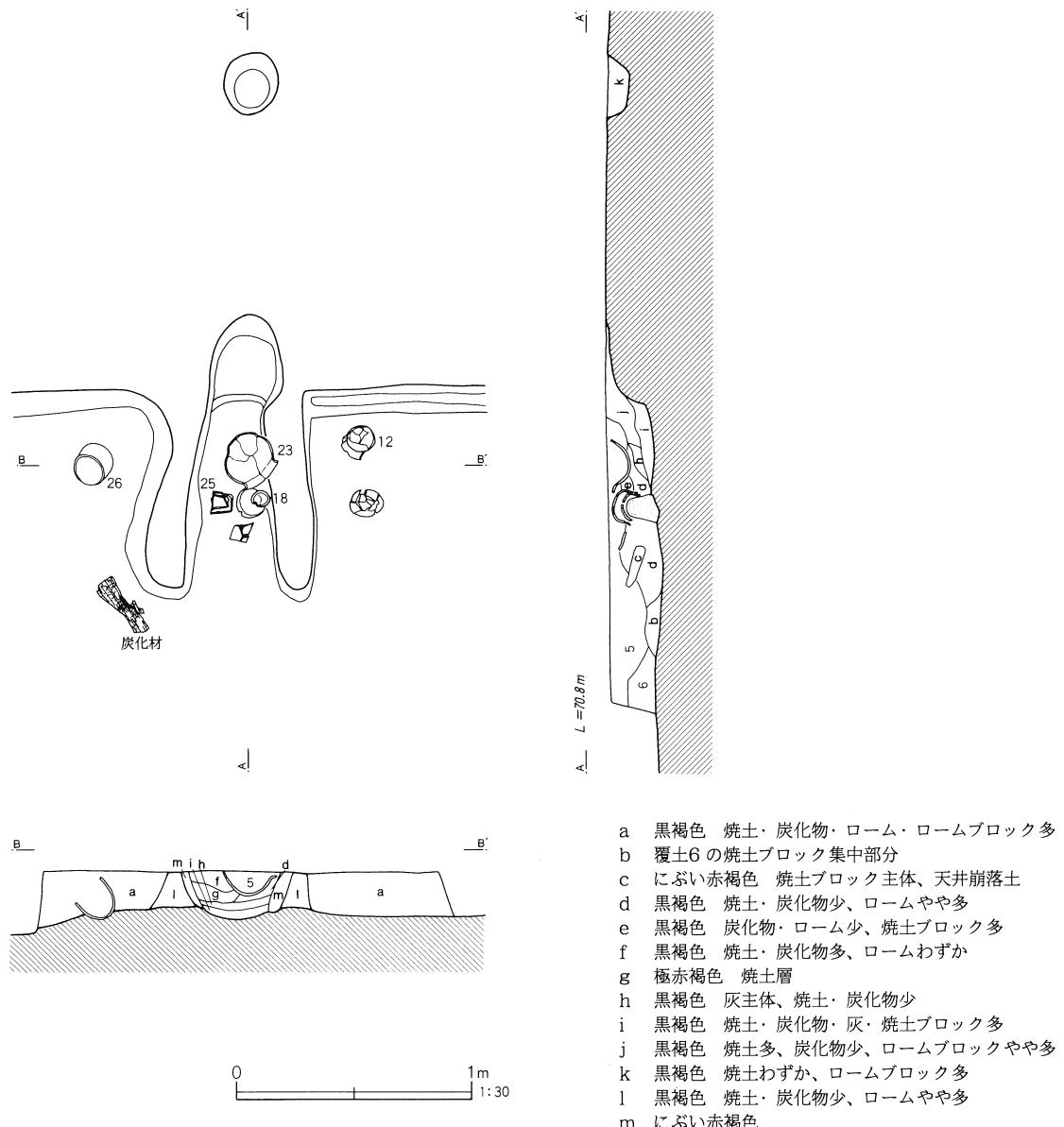
- 貯蔵穴
- 1 黒褐色 焼土・ローム少・炭化物やや多
 - 2 黒褐色 焼土・炭化物やや多・ローム多

- 粘土堆積
- 1 褐灰色 焼土少・炭化物極多
 - 2 にぶい黄橙色 粘土主体・ローム多
 - 3 黒褐色 焼土・炭化物・ローム少

- 焼土堆積
- 1 橙色 焼土ブロック層間に灰褐色土充填
 - 2 灰褐色 焼土ブロック多

0 2m 1:60

第71図 第257号住居跡カマド



る。

ピットは9基確認され、主柱穴と考えられるP1・P2・P3・P4の4基には柱痕が認められた。ピット間の距離は、P1—P4間でやや短く3.2m、他のピット間は3.3mであり、バランスよく均等に配置されている。

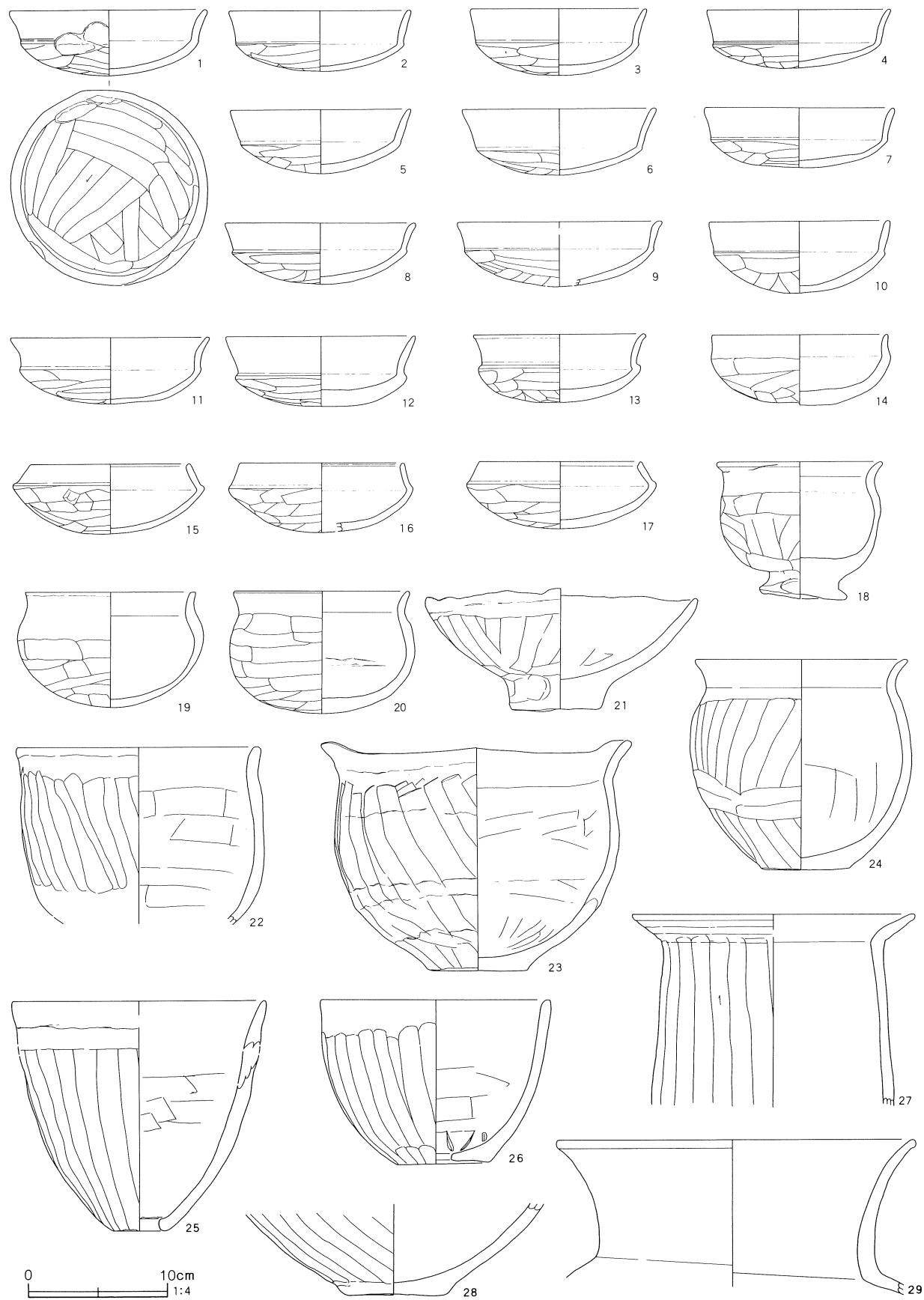
埋土中には焼土と炭化物が多く含まれ、床面からわずかに浮いた地点から炭化材が出土した。また、焼土の集中が数カ所で確認され、東南コーナーには粘土の堆積が検出された。いずれも床面のすぐ上に堆積して

いたものである。焼土は炭化材とともに火災直後に堆積したものと推定されるが、粘土の堆積は生活時の所産と考えられる。

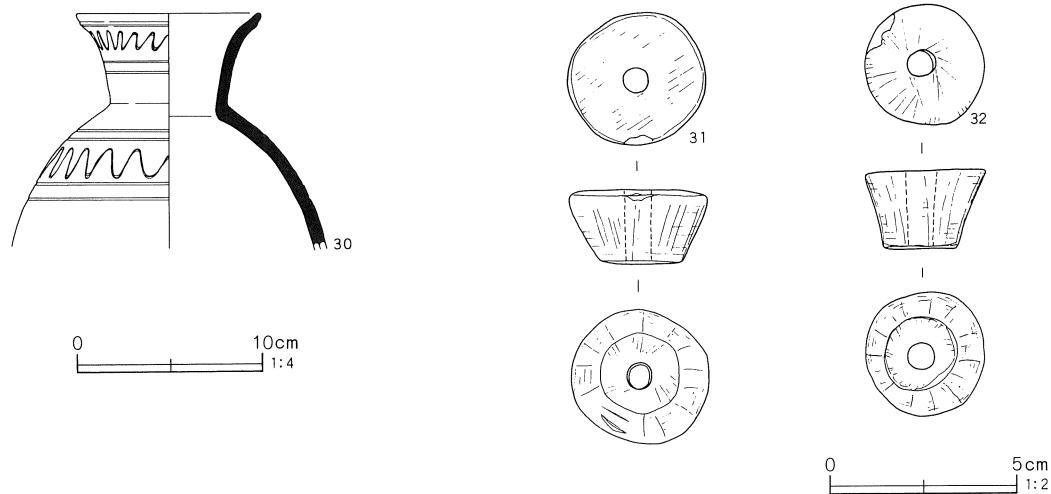
壁の掘り込みはしっかりとしており、床面はよく踏みしめられ、ともに明瞭に検出された。

出土遺物は多く、カマドや貯蔵穴の中、およびその周辺の床面から出土した。特に、貯蔵穴の近くには数点の土師器壊が、打ち欠いた大形の壺の口縁部と重なり合って出土している。台付きの椀(18)や、底部の

第72図 第257号住居跡出土遺物(1)



第73図 第257号住居跡出土遺物(2)



第257号住居跡遺物観察表 (第72・73図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	13.8	4.7		D 2	A	B	95	床直集中	外面一部粘土剥落 図版46-2
2	壺	12.7	4.3		A F 1	A	B	95	床直集中	内面、外面一部黒化 図版46-3
3	壺	12.3	4.7		A D F 2	B	B	95	埋土	図版46-4
4	壺	12.8	4.2		A F 2	B	B	90	埋土	図版46-5
5	壺	(12.6)	4.6		F 1	A	C	80	床直	外面黒斑あり
6	壺	13.4	4.7		A F 1	A	B	90	床直集中	図版46-6
7	壺	13.2	4.3		A F 2	A	B	90	床直集中	図版46-7
8	壺	13.3	4.4		A D F 2	A	C	70	床直	外面黒斑あり
9	壺	(14.0)	(4.5)		A D F 1	B	C	45	埋土	内面、口縁一部黒化
10	壺	12.6	5.1		A F 2	A	B	90	床直集中	外面黒斑あり 図版46-8
11	壺	13.6	4.7		D F 1	B	B	90	床直集中	図版46-9
12	壺	13.2	5.0		A F 1	A	B	60	カマド脇	内面、外面一部黒化
13	壺	12.0	4.9		F 1	B	B	95	床直集中	内面黒斑あり 図版46-10
14	壺	12.3	5.0		A F 1	A	B	85	埋土	外面一部黒化 図版47-1
15	壺	11.2	4.9		A F 1	B	B	80	床直集中	内面、外面一部黒化 図版47-2
16	壺	11.4	(4.8)		A F 1	A	B	90	床直集中	内面、外面一部黒化 図版47-3
17	壺	11.4	4.8		A D F 1	A	F	95	床直	黒化 図版47-4
18	台付椀	11.4	9.8	5.9	A D F 2	A	B	90	カマド	支脚転用か 図版61-6
19	椀	12.0	8.2			A	C	80	床直	輪状の黒斑あり 図版57-3
20	椀	12.2	8.7		F 1	A	B	90	貯藏穴	輪状の黒斑あり 図版62-5
21	鉢	19.0	8.7	6.2	A D F 2	A	B	100	床直集中	底部肥厚し台状となる 口縁黒斑あり 図版57-4
22	小形甕	16.8	12.6		A D 1	A	B	35	埋土	
23	小形甕	21.4	16.3	7.0	A D F 5	B	B	55	カマド	内・外面に黒斑あり
24	小形甕	14.6	14.9	6.0	A D E F 5	A	B	90	貯藏穴	内面黒斑あり 図版64-5
25	小形甕	(17.6)	(16.3)	3.5	A D 2	A	B	30	カマド	
26	小形甕	16.0	11.8	6.4	A D F 2	A	B	100	カマド脇	輪状の黒斑あり 図版65-5
27	甕	(19.6)	(13.6)		A F 2	A	F	10	床直	
28	壺		(6.6)	7.2	A D E F 5	A	B	20	埋土	
29	壺	25.0	(11.1)		D F 2	B	B	15	床直集中	口縁部100% 輪状の黒斑あり
30	壺	9.6	(12.6)		F 1	A	H	30	埋土	須恵器 徳利形平底壺 群馬産? 図版67-4
31	紡錘車	上径3.5cm、下径2.1cm、厚さ2.0cm、孔径0.7cm、重さ38.1g				壁際床直		滑石製		
32	紡錘車	上径3.1cm、下径1.9cm、厚さ2.1cm、孔径0.7cm、重さ26.8g				床直		滑石製		

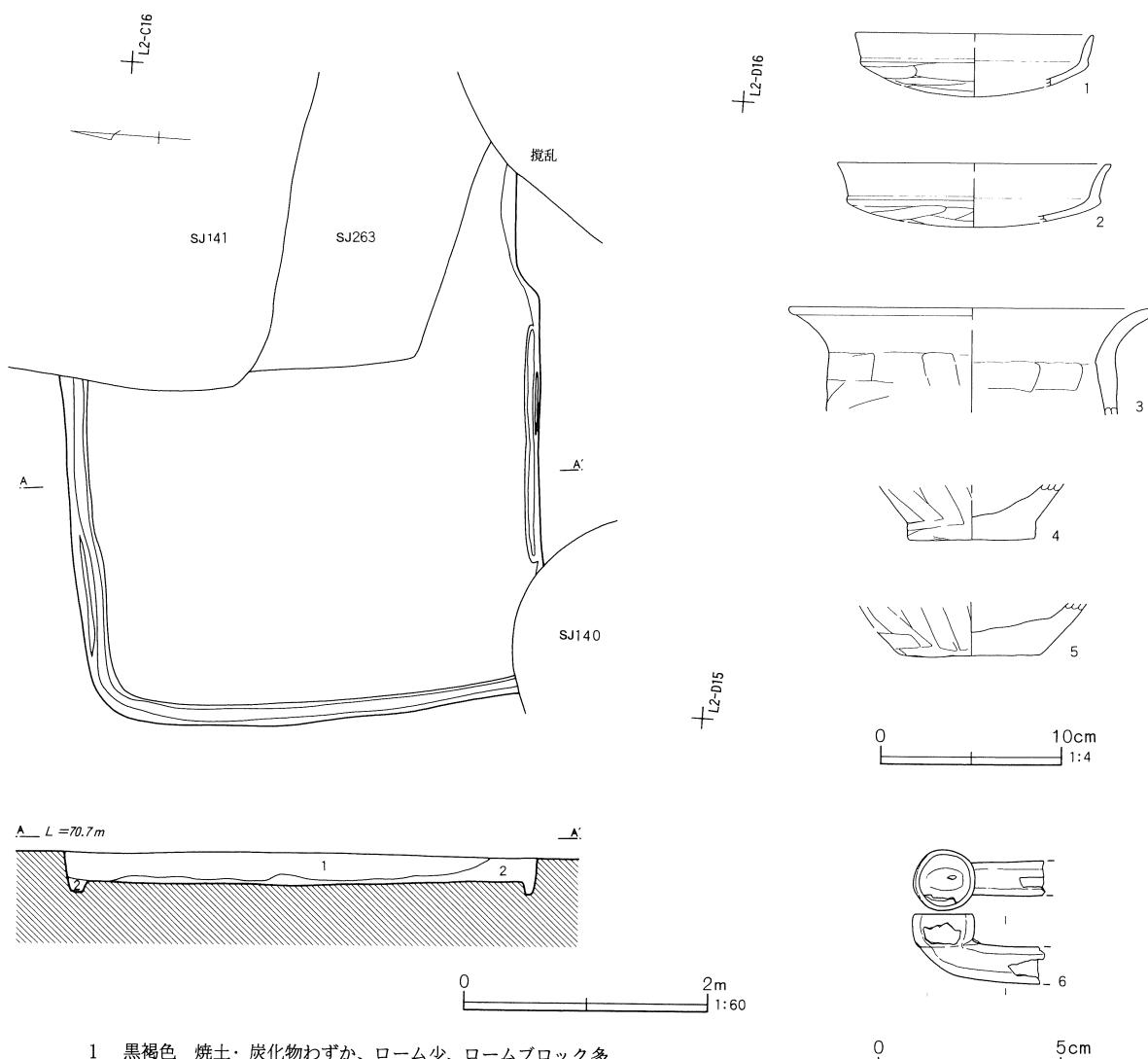
分厚い鉢(21)など、変わった器形をもつ土師器もある。埋土からではあるが、平底の須恵器壺が出土して

いるのも注目される。また、紡錘車が2点床面近くから出土している。

第258号住居跡（第74図）

L2—B15・C14・C15 グリッドに位置する。第141・263号住居跡や攪乱に切られ、全貌は明らかでない。形状は長方形を呈するものと推定される。短辺の長さは3.82m、深さは26cmである。埋土にはロームブロックが多く含まれており、埋め戻された可能性が大きい。カマドの傾きはN—86°—Eである。

第74図 第258号住居跡・出土遺物



第258号住居跡遺物観察表（第74図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(12.8)	(2.9)		AD 1	A	B	5	埋土	口縁部破片 器面風化
2	壺	(14.8)	(3.2)		ADF 2	A	B	20	埋土	外面黒化
3	甕	(19.6)	(5.9)		ADF 1	A	B	5	埋土	口縁部破片
4	甕	(3.0)	6.8	6.8	ADF 5	A	C	5	埋土	底部破片 外面黒化
5	甕	(2.8)	7.5	7.5	ADF 5	A	B	5	埋土	底部破片
6	キセル	現存長3.1cm、吸口径1.7cm、重さ3.7g							埋土	雁首 銅製 混入品

壁溝は幅10~15cm、深さ10cm前後である。南壁は部分的に検出された。床面は凹凸があるものの部分的に明瞭で、貼り床も一部に認められる。

カマドやピット等の施設は検出されなかった。

出土遺物は少なく、破片のみである。床面から出土した遺物はない。土師器壺・甕がある。6のキセルは混入遺物である。

第263号住居跡（第75図）

L2—C15・C16 グリッドに位置する。重複関係は第141号住居跡に切られ、第258号住居跡を切っている。残存する部分は少なく、形状は不明である。床面までの深さは10cmである。

壁溝は確認された壁すべてに巡っている。掘り込みはしっかりとしており、幅15cm、深さ5cm前後である。

床面に貼り床はないが、踏みしめられていたものか比較的明瞭である。

検出範囲が狭く、カマド等の施設は検出されなかつた。

出土遺物は少なく、破片である。土師器壊・甕がある。床面からは帶状にすり面のある石が出土した。手

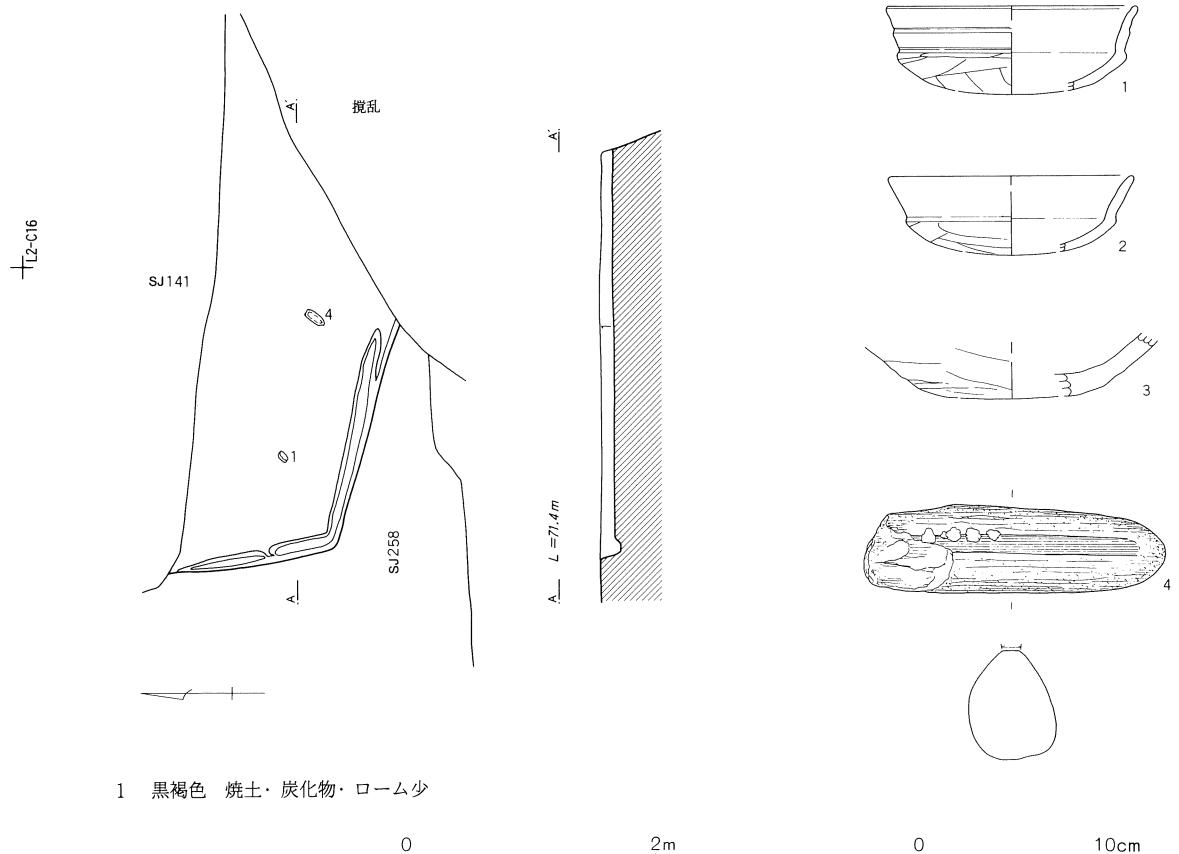
に所持して使用したものと考えられる。

第267号住居跡（第76、77図 図版19上）

K2—T13・T14、L2—A13・A14 グリッドに位置する。第16号溝跡と第143号住居跡に切られているが、形状は方形を呈するものと推定される。北壁の長さは5.15m、深さは13cmである。埋土は二層に分けられるが、ともにロームブロックが均等に含まれることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。カマドの傾きはN—67°—Eである。

カマドは東壁のおそらく中央部分に構築されていたと思われる。燃焼部は箱形を呈し、規模は104×45cmである。底面は皿状にはっきりと掘り込まれ、煙道部へ

第75図 第263号住居跡・出土遺物

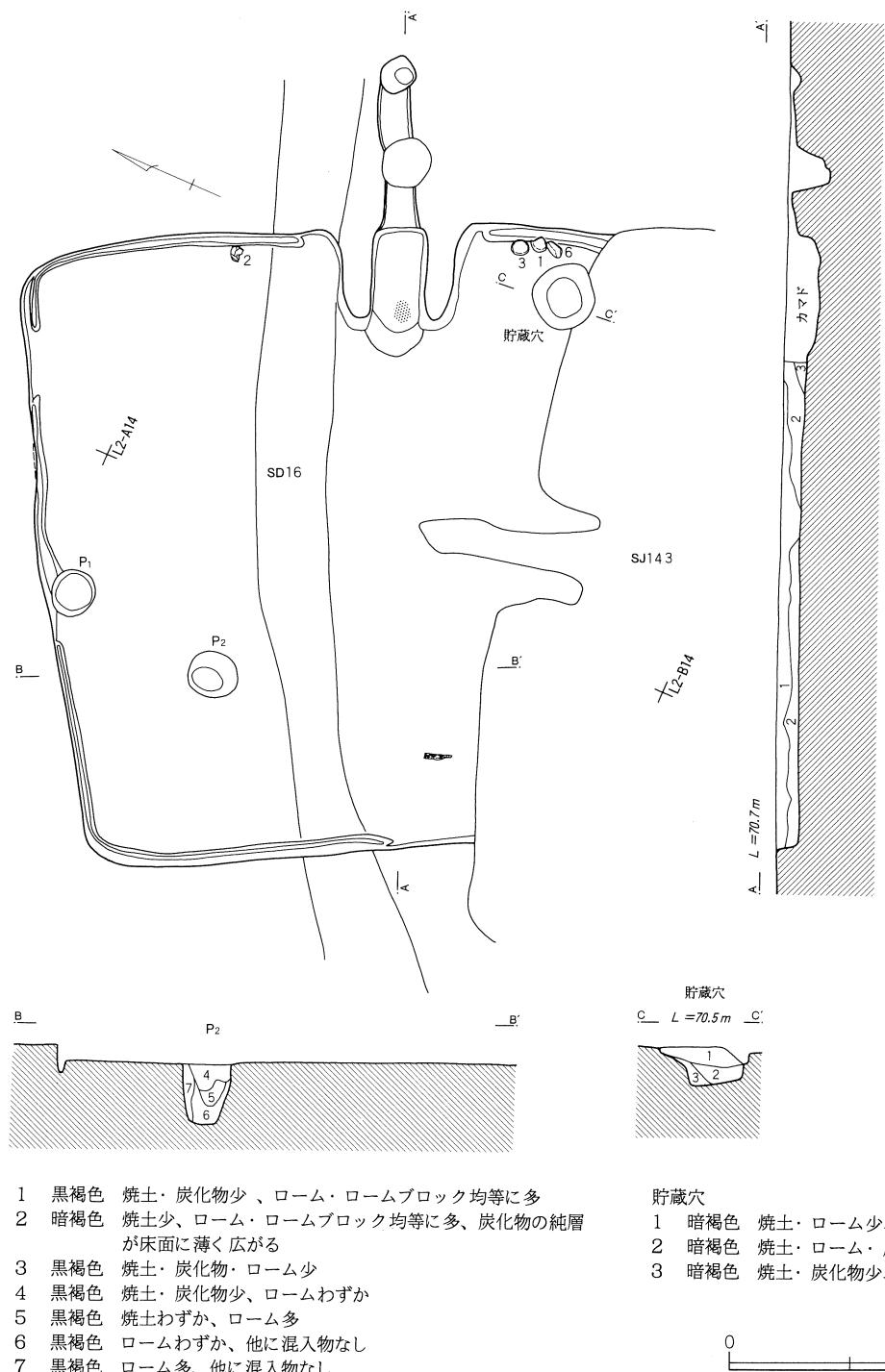


1 黒褐色 焼土・炭化物・ローム少

第263号住居跡遺物観察表（第75図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壊	(13.1)	(4.5)		DF 1	A	F	15	床直	内・外面黒化
2	壊	(12.8)	(4.0)		ADF 1	A	B	10	埋土	器面風化顯著
3	甕	(3.2)	(7.6)		ADF 5	A	B	5	埋土	底部破片
4	すり石	径16.0×4.6cm、重さ278.6g					床直	すり面帶状 片岩		

第76図 第267号住居跡



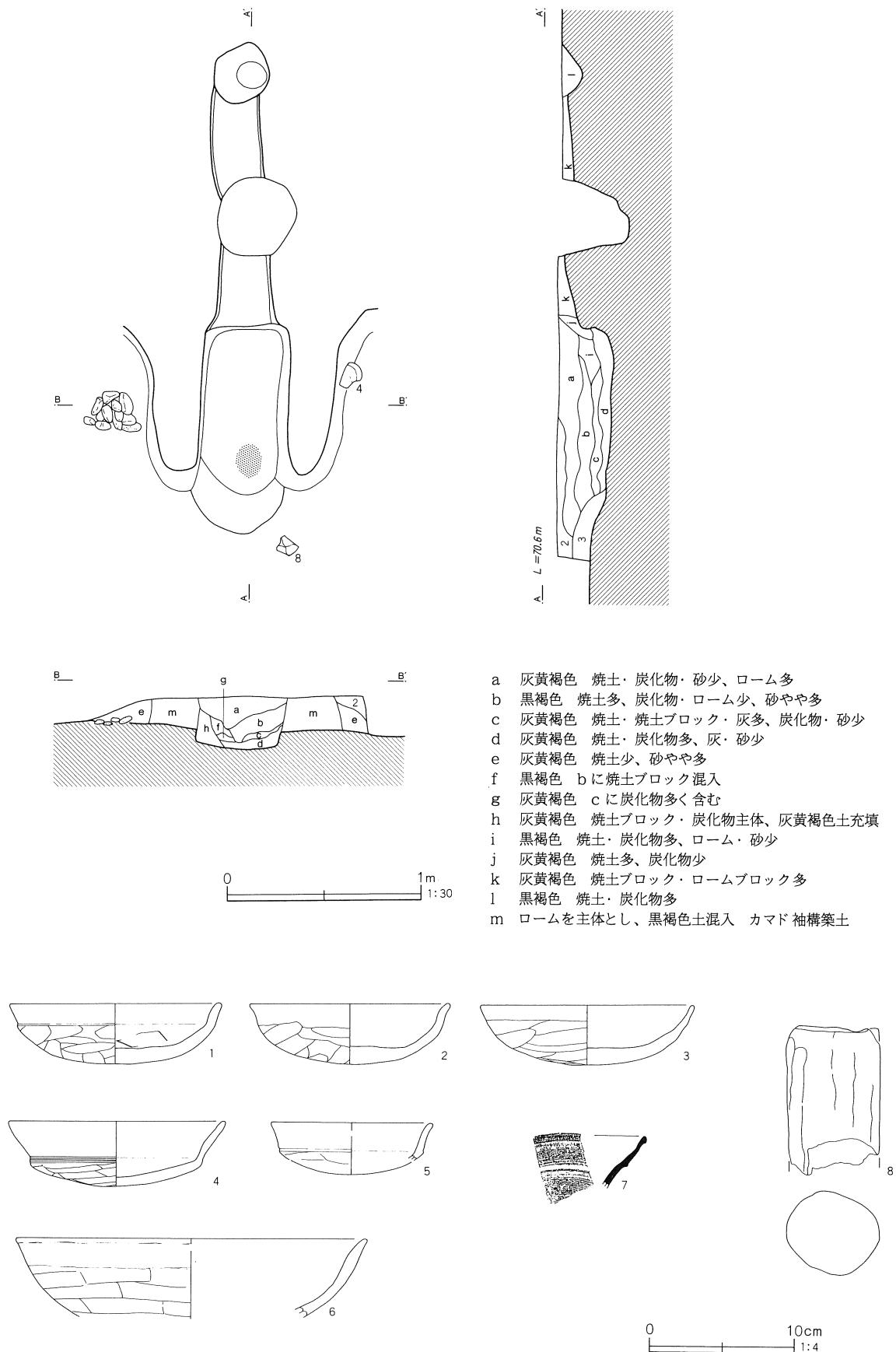
は明瞭な段を介する。煙道部は一部新しいピットに切られれているが、長さ143cm、幅26cmである。底面は煙り出し口へ向ってゆるやかに浅くなる。煙り出し口の底面はやや深い掘り込みをもつ。袖部は長く、ロームを主体とした混合土で構築されている。支脚には専用の土製品が用いられたようで、破片が燃焼部近くの埋土

から出土している。被熱面は燃焼部底面と袖および段の内壁、煙道部元の底面に顕著である。

貯蔵穴は直径50cm程の円形を呈している。掘り込みは比較的浅い。底面は平らとなり、深さは33cmである。

壁溝は検出された壁ほぼすべてに巡っている。幅・深さとも10cm前後である。

第77図 第267号住居跡カマド・出土遺物



第267号住居跡遺物観察表（第77図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	14.0	4.1		ADF 5	A	B	70	カマド脇	内面、外面一部黒化 図版47-7
2	壺	13.2	4.2		ADF 5	A	B	60	壁際	外面黒化
3	壺	14.3	4.1		ADF 5	A	B	80	カマド脇	外面一部黒化
4	壺	14.6	4.5		ADF 2	A	B	70	カマド脇	内面、外面一部黒化
5	壺	(10.6)	(2.6)		ADF 1	A	B	10	P2 埋土	
6	鉢	23.6	(5.4)		ADF 5	A	B	20	カマド脇	内面黒化
7	甌		(3.6)		D 1	A	H	5	埋土	須恵器 口縁部破片 産地不明
8	支脚		(10.2)		D 2	A	B	40	カマド前	

ピットは2基確認された。P2はその規模から柱穴の可能性があるが、対応する位置には柱穴となるピットは検出されなかった。P1は深さ31cmである。壁際に存在し、本住居跡の所属になるかどうかは不明である。

壁の掘り込みは深く明瞭である。床面には全面に貼り床がされており、堅牢である。床面の直上には炭化物の薄い堆積が広く認められた。また、北コーナー部分からP1付近までの埋土には、焼土が多く含まれていた。

主な出土遺物には土師器壺・鉢がある。貯蔵穴近くの壁際には土師器壺類が並んで出土した。埋土中からは須恵器甌の口縁部破片も出土している。また、カマド脇の壁際には、自然石が12点ほどまとまって検出された。いずれの石にも使用痕は認められなかったが、大きさから編み物石の可能性がある。

第268号住居跡（第78、79図 図版19中）

L2-A14・A15・B14・B15グリッドに位置する。重複する第141・142・299号住居跡すべてに切られている。形状は方形を呈する。長辺×短辺は4.29×4.04m、深さは15cmである。埋土はロームブロックを多く含む黒褐色土が大半を占める。ある程度自然に埋まってのちに、改めて埋め戻されたものと推定される。カマドの傾きはN-65°-Eである。

カマドは東壁南寄りに構築されている。燃焼部は箱形を呈し、規模は73×35cmである。底面はわずかに掘

りくぼめられ、煙道部へは明瞭な段を介して移行する。煙道部は幅20cm、煙り出し口は第299号住居跡によつて切られている。底面は中央がわずかに深くなっている。袖部は地山土（ローム）を掘り残して構築されている。被熱面は燃焼部底面と袖部内壁に認められた。

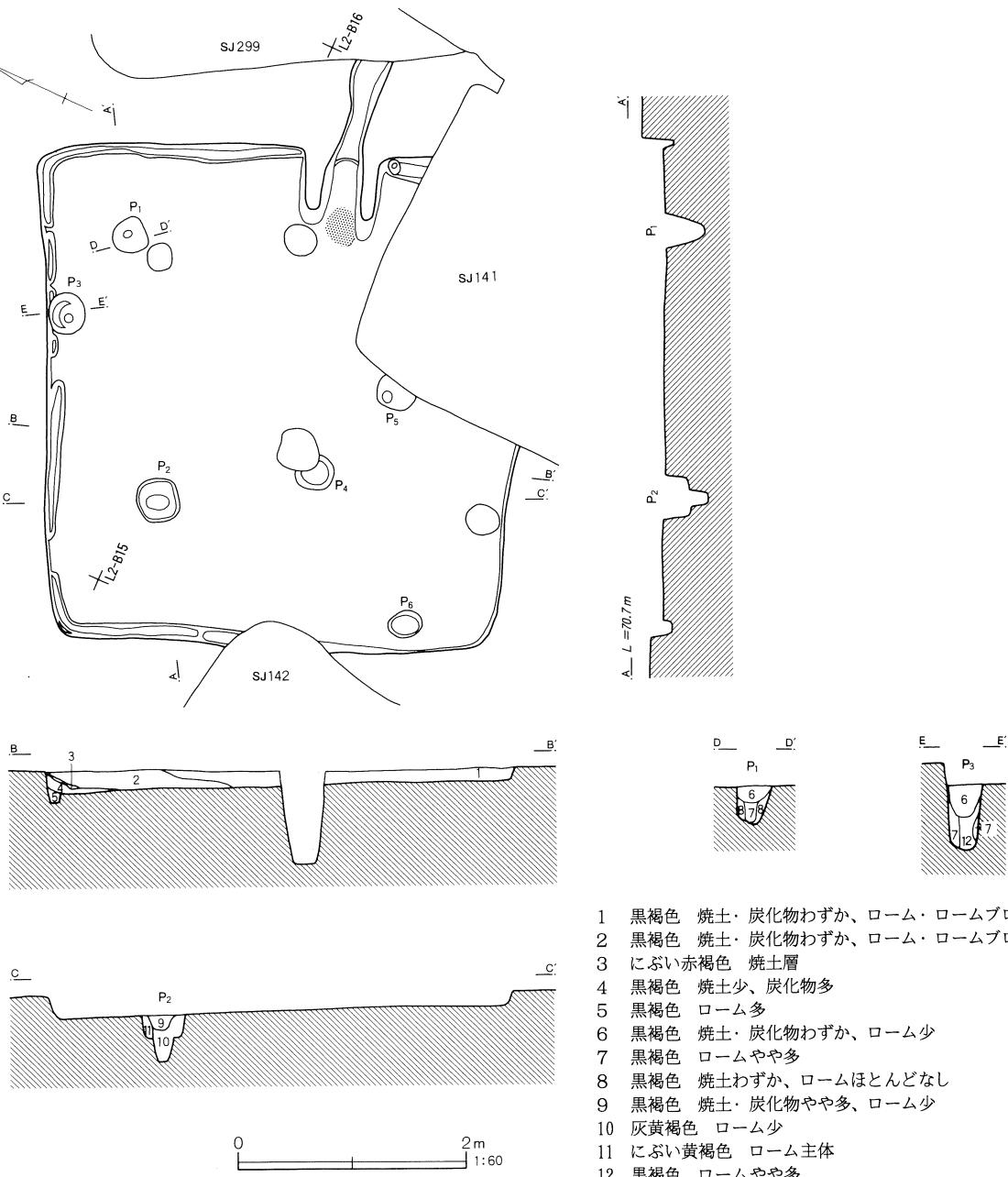
壁溝は南西コーナーを除いて検出された。北壁では途切れがちに続いている。幅は8~15cm、深さは10cm前後である。掘り込みはしっかりととしており、検出は容易であった。

ピットは10基検出されたが、明らかに住居跡の埋土を切るものを除くと、うち6基が本住居跡に伴うものと考えられる。明瞭に柱痕が観察できたものはないが、少なくともP1・P2・P3は柱穴と考えられる。全体的にその配置はバランスを欠いている。P1-P2間の距離は約2.3mである。P4は深さ19cmである。P5は深さ33cm、埋土はローム・焼土をわずかに含む黒褐色土である。P6は深さ18cm、埋土は黒褐色土で、ロームをやや多く含み、焼土・炭化物を少量含む層である。

壁の掘り込みはしっかりと検出され、明らかに崩れた部分は認められない。床面は南側に向かって浅く傾斜する。よく踏みしめられており、明瞭に検出されたが、貼り床はみられなかった。

出土遺物は少なく、主なものに、土師器壺・甌、土錘がある。土器はすべて破片であり、埋土中から出土したものである。

第78図 第268号住居跡



第269号住居跡（第80、81図 図版19下）

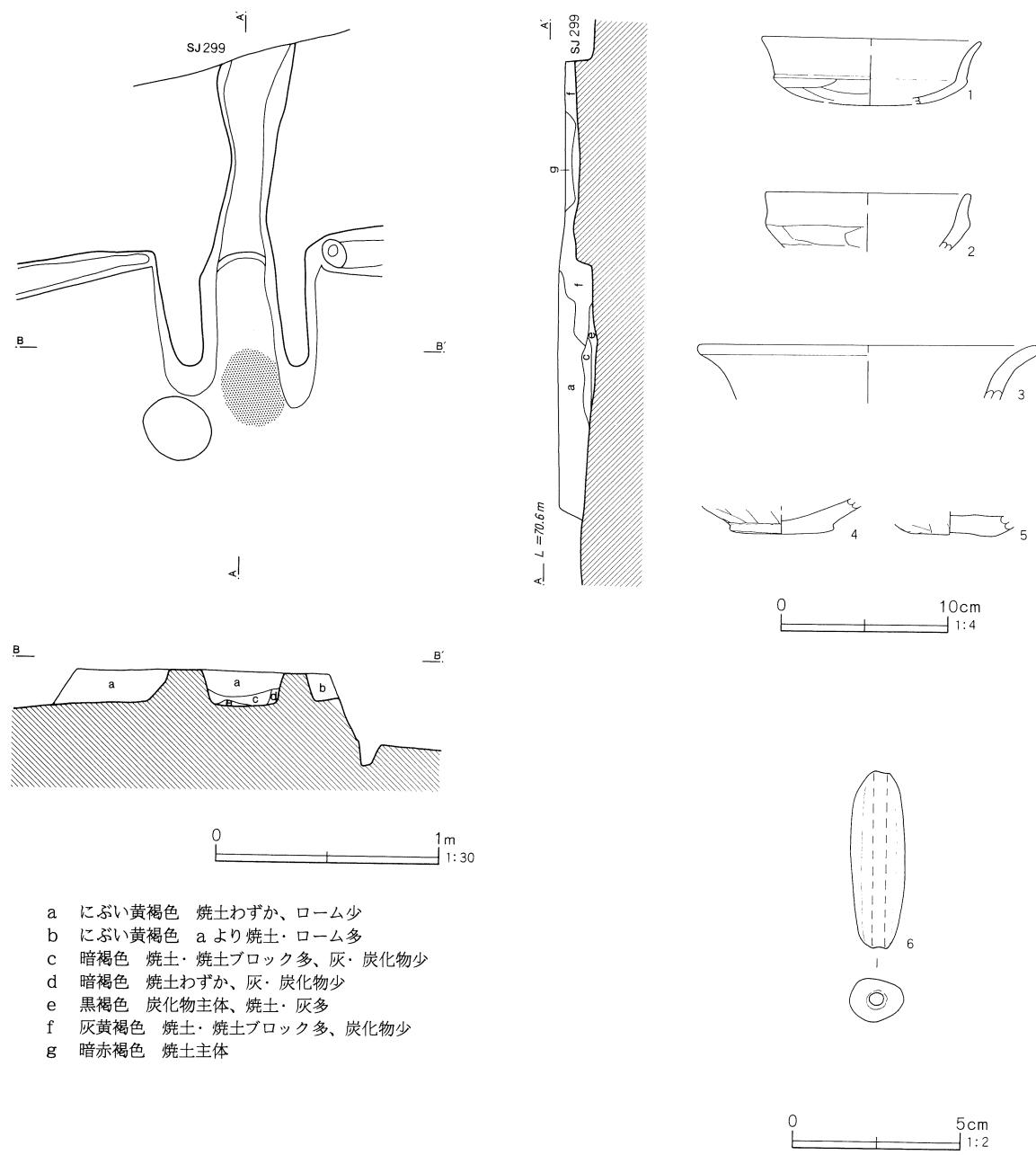
K2—S16・S17・T16グリッドに位置する。重複関係は、第16号溝跡と第150号住居跡に切られている。形状は東西方向に長い長方形を呈する。長辺×短辺は4.71×2.98m、深さは27cmである。長辺の傾きはN—51°—Eである。

本住居跡は焼失家屋と推定されるものである。床面近くの埋土には焼土と炭化物が多く含まれていた。床面近くからは、炭化材も検出されている。

掘り込みは深く、プランの確認も容易であったが、カマドや貯蔵穴等の施設は見あたらなかった。ただし、東壁際の位置に土製の支脚（7）が出土していることから、カマドは第16号溝跡によって破壊されてしまった可能性もある。

ピットは2基確認されたが、ほとんど掘り込みは存在しない。柱穴とみなすには根拠が薄く、置き柱の痕跡かもしれない。また、東南壁際には粘土の堆積が確認された。

第79図 第268号住居跡カマド・出土遺物



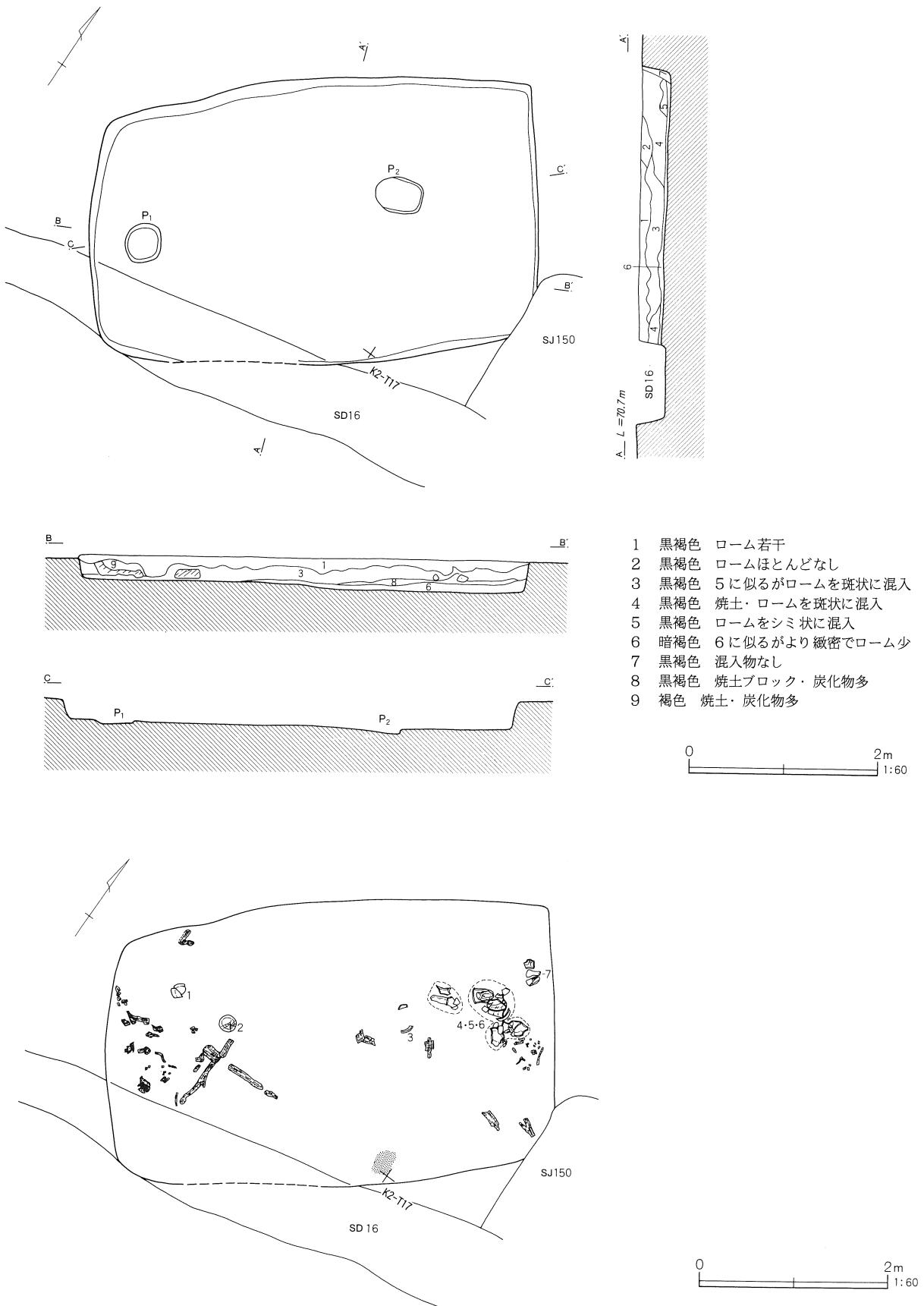
第268号住居跡遺物観察表 (第79図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(12.8)	(3.8)		ADF 1	A	C	5	埋土	内面黒化
2	壺	(12.0)	(3.3)		ADF 5	A	B	5	埋土	口縁部破片
3	甕	(20.0)	(3.2)		ADF 2	A	B	5	埋土	口縁部破片
4	甕	(2.1)		6.0	ADF 1	A	B	5	埋土	底部破片 外面一部黒化
5	甕	(1.2)		5.0	ADF 2	A	B	5	埋土	底部破片
6	土錐	長さ5.3cm、最大径1.6cm、孔径0.3cm、重さ10.8g							埋土	

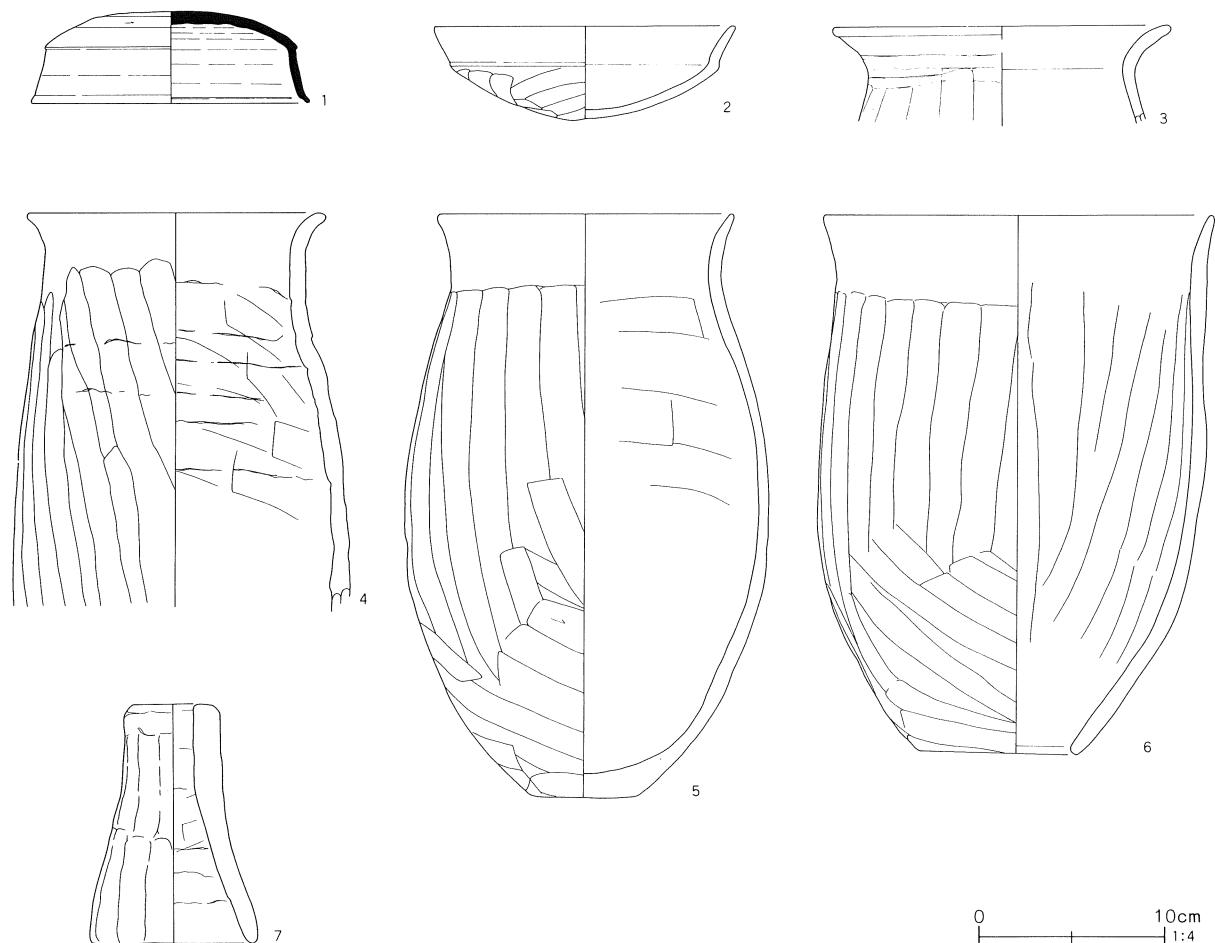
本住居跡の形態は、他のものと比較して特異であり、その位置も集落域のはずれにあたる。居住以外の機能をもつ施設であったと推定される。

遺物は床面近くから多く出土している。接合率、残存率ともに高い。主なものに須恵器蓋、土師器壺・甕・甌がある。

第80図 第269号住居跡



第81図 第269号住居跡出土遺物



第269号住居跡遺物観察表（第81図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	蓋	14.7	4.9		A 1	A	H	80	床直	須恵器 群馬産？ 図版37-6
2	壺	15.6	5.0		AD F 5	A	B	95	床直	外面一部黒化 図版47-8
3	甕	(17.6)	(5.2)		A D E F 5	A	B	5	床直	口縁部破片
4	甕	15.4	(21.3)		AD F 2	A	B	30	床直	
5	甕	15.4	31.1	5.6	AD F 5	A	B	60	床直	外面一部黒化 図版74-2
6	甕	20.5	28.7	8.3	AD F 5	A	B	60	床直	外面一部黒化 図版69-4
7	支脚	4.2	12.2	8.4	AD F 5	A	B	100	床直	図版58-6

第277号住居跡（第82図 図版21中）

K2—S17・S18 グリッドに位置する。第16号溝跡と第150号住居跡に切られている。形状は長方形を呈する。長辺×短辺は3.30×3.00m、深さは29cmである。埋土は黒褐色土が主体となる。一部の観察では、比較的短期間に埋没したものと推定される。短辺の傾きはN—11°—Wである。

ピットは4基検出されたが、掘り込みは明瞭でなく、深さはいずれも10cmに満たない。その他の施設は検出

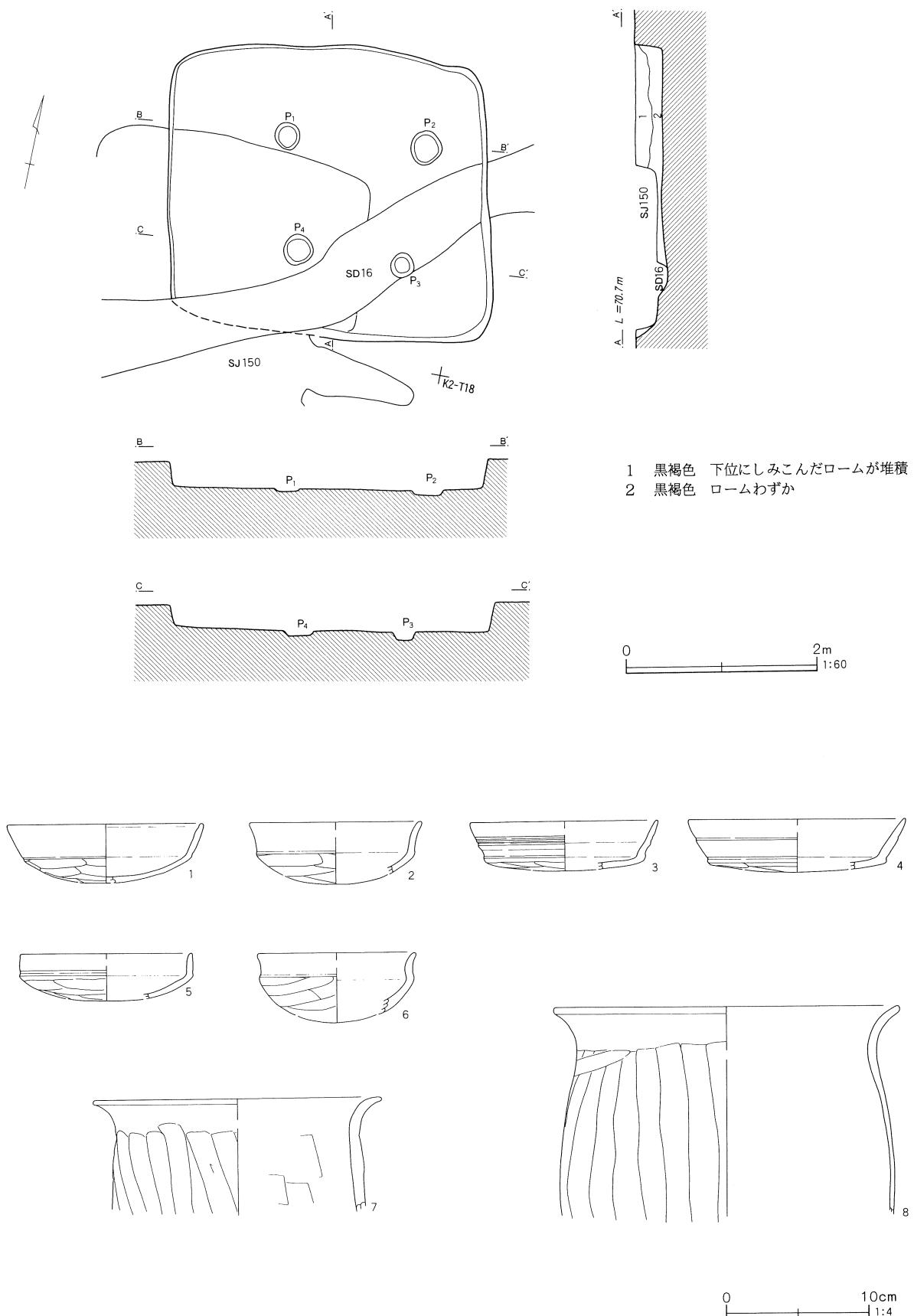
されなかった。切り合いのない部分では、床面は明瞭に検出された。

遺物は、埋土中から土師器壺・甕の破片が出土した。総量は少ない。

第280号住居跡（第83～85図 図版22中）

K2—T18・T19、L2—A18・A19 グリッドに位置する。第254・256号住居跡に切られている。第12号溝跡に西側を削平されているため、形状は不明だが、長方

第82図 第277号住居跡・出土遺物



第277号住居跡遺物観察表（第82図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	13.4	(4.1)		F 1	A	C	50	埋土	口縁一部内・外面黒化
2	壺	11.8	(3.6)		ADF 2	A	C	15	埋土	内面黒化
3	壺	(12.8)	(3.4)		ADF 1	A	C	10	埋土	内・外面黒化
4	壺	(14.8)	(3.5)		ADF 1	A	C	15	埋土	
5	壺	(11.8)	(3.1)		ADF 1	A	B	10	埋土	
6	椀	(10.8)	(4.3)		ADF 5	A	B	20	埋土	内面、外面一部黒化
7	甕	(19.6)	(7.9)		ADF 5	A	C	10	埋土	内面、外面一部黒化
8	甕	(23.6)	(14.5)		ADF 2	A	C	10	埋土	器面風化顕著 外面一部黒化

形を呈するものと思われる。東壁の長さは3.9m、深さは31cmである。新しい遺構に切られている部分が多いが、掘り込みが深く、遺存状態は比較的良好である。

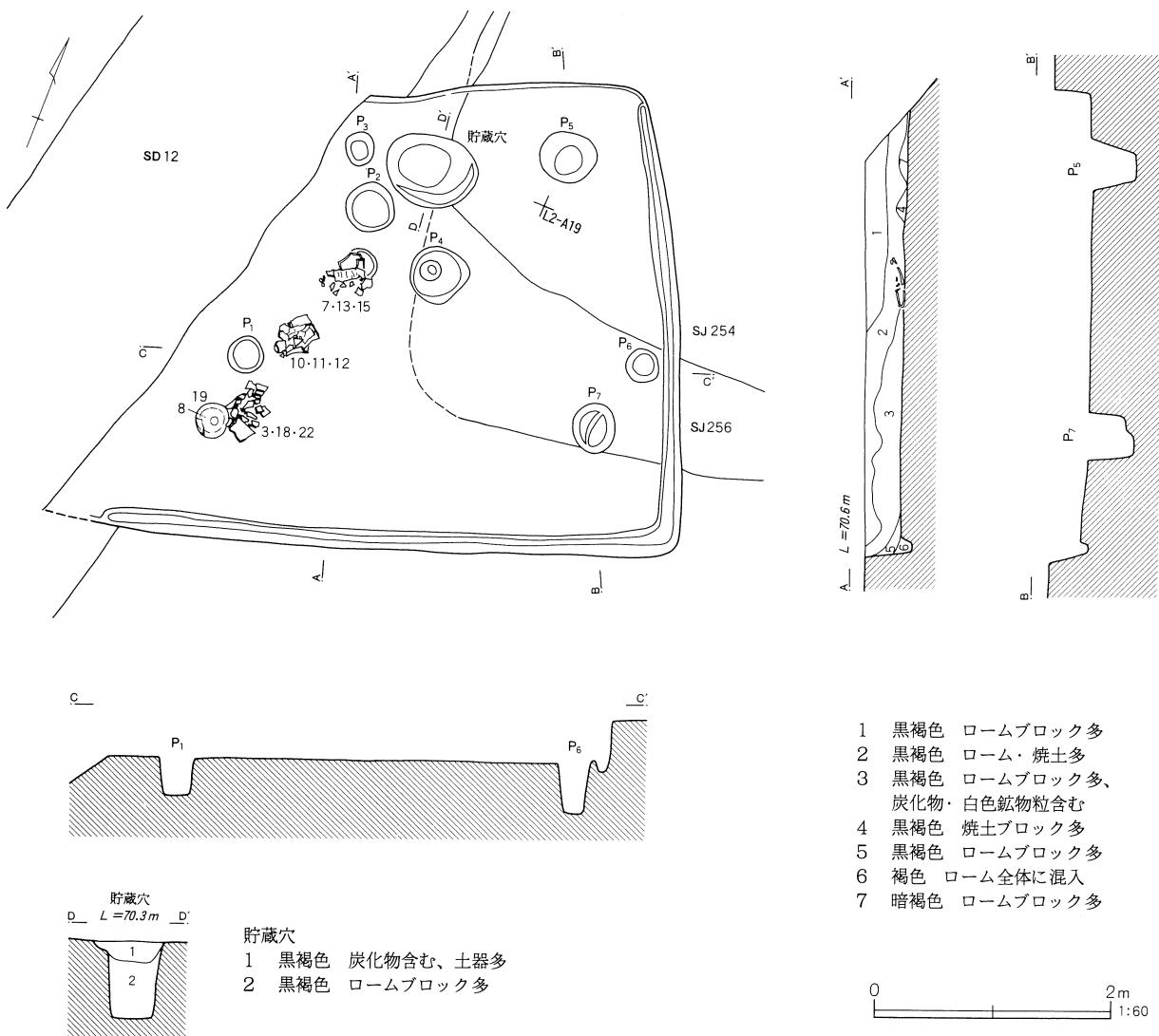
貯蔵穴は形状は橢円形を呈し、規模は60×78cm、深さは63cmである。掘り込みは急で底面は平らである。

三日月状のテラスをもつ。

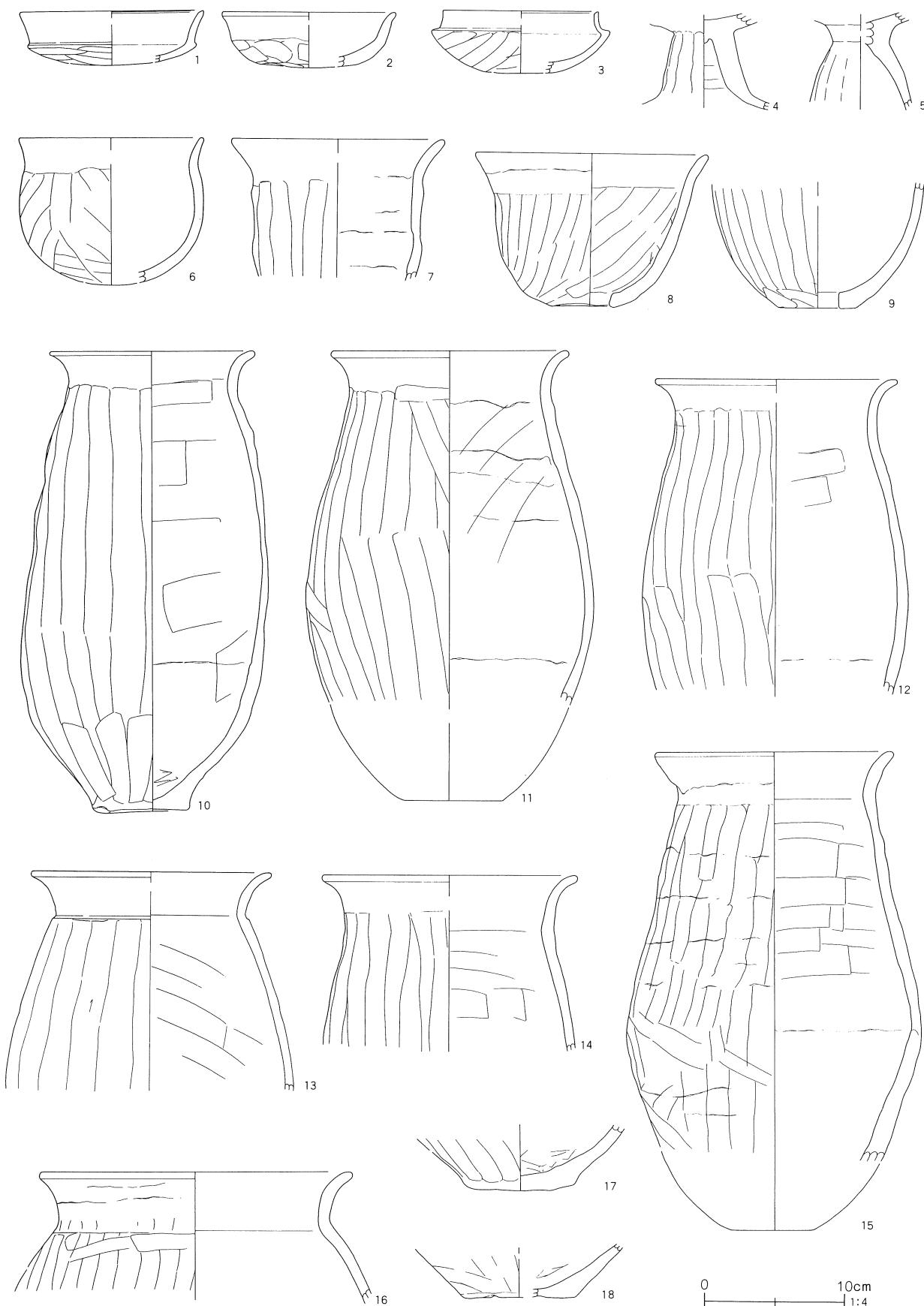
壁溝は東～南壁に巡る。幅は15cm前後、深さは10cm程度である。掘り込みは明瞭である。

ピットは7基確認され、位置的にP1・P5・P7が柱穴と判断される。図示していない他のピットの深さは、

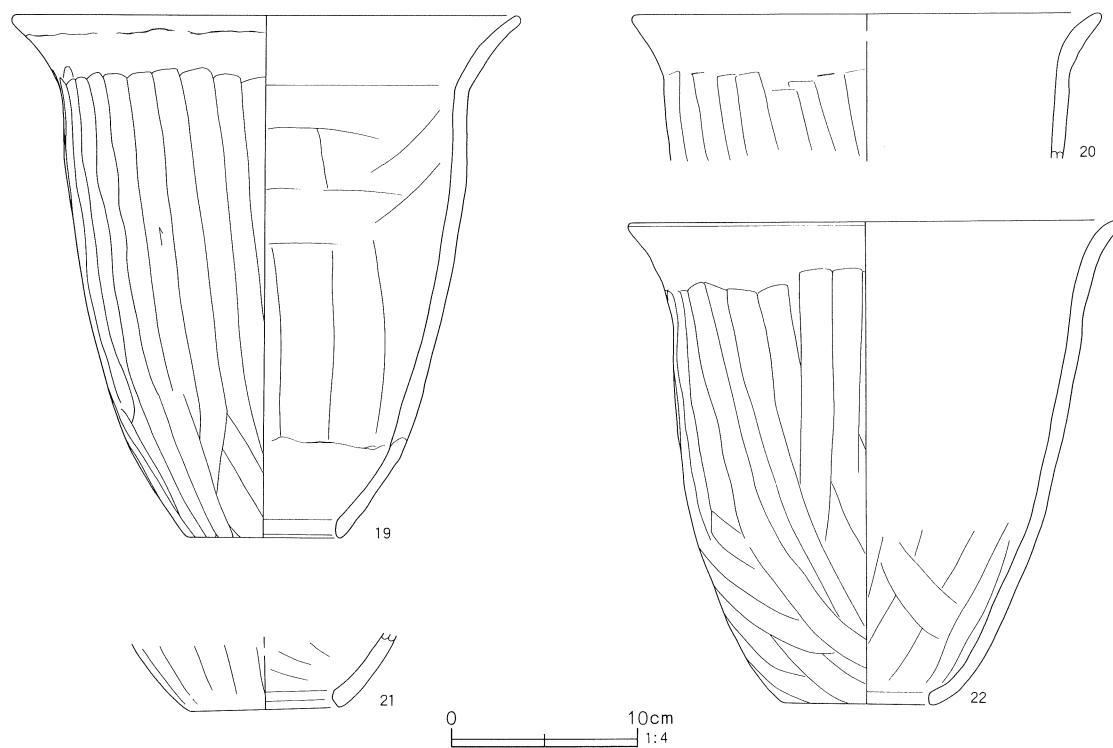
第83図 第280号住居跡



第84図 第280号住居跡出土遺物(1)



第85図 第280号住居跡出土遺物(2)



第280号住居跡遺物観察表 (第84・85図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(13.0)	(3.6)		ADF 1	A	C	10	貯蔵穴	
2	壺	(12.0)	(3.9)		ADF 2	A	B	40	埋土	内面、外面一部黒化
3	壺	(11.0)	(4.4)		ADF 1	A	C	20	埋土	
4	高壺		(6.8)		ADF 5	A	B	30	埋土	脚部破片
5	高壺		(7.0)		ADF 1	A	C	10	貯蔵穴	脚部破片
6	小形甕	(13.0)	(10.3)		ADF 2	A	B	40	埋土	底部近く内面黒化
7	小形甕	(14.7)	(10.0)		ADF 2	A	C	10	床直	
8	小形甕	16.2	10.9	4.4	ADF 2	A	C	100	床直	伏せて出土 図版66-1
9	小形甕		(8.8)	(5.4)	ADF 2	A	B	10	埋土	
10	甕	14.0	32.9	6.6	ADF 5	A	B	95	床直	胴部外面一部黒化 図版75-3
11	甕	16.2	25.3		AD 1	A	B	40	床直	胴部外面・口縁一部黒化
12	甕	(16.6)	(22.3)		ADF 2	A	B	15	床直	
13	甕	(16.8)	(15.3)		ADF 1	A	B	10	床直	
14	甕	(17.8)	(12.4)		ADF 2	A	B	10	貯蔵穴	
15	甕	16.4	(29.1)		ADF 2	A	B	70	床直	体部外面・口縁一部黒化 図版75-4
16	甕	21.8	(9.4)		ADF 5	A	B	10	埋土	
17	甕	(4.6)	7.6		ADF 2	A	B	10	埋土	
18	甕	(3.8)	(7.8)		ADF 2	B	C	5	床直	底部破片 器面風化
19	甕	26.5	27.9	8.0	AD 2	A	B	100	埋土	底部端内・外面黒化 図版79-4
20	甕	(24.4)	(7.8)		ADF 5	A	B	10	埋土	
21	甕		(3.8)	8.0	ADF 5	A	B	5	埋土	底部破片 外面一部黒化
22	甕	25.8	25.8	7.8	ADF 5	A	B	90	床直	図版80-1

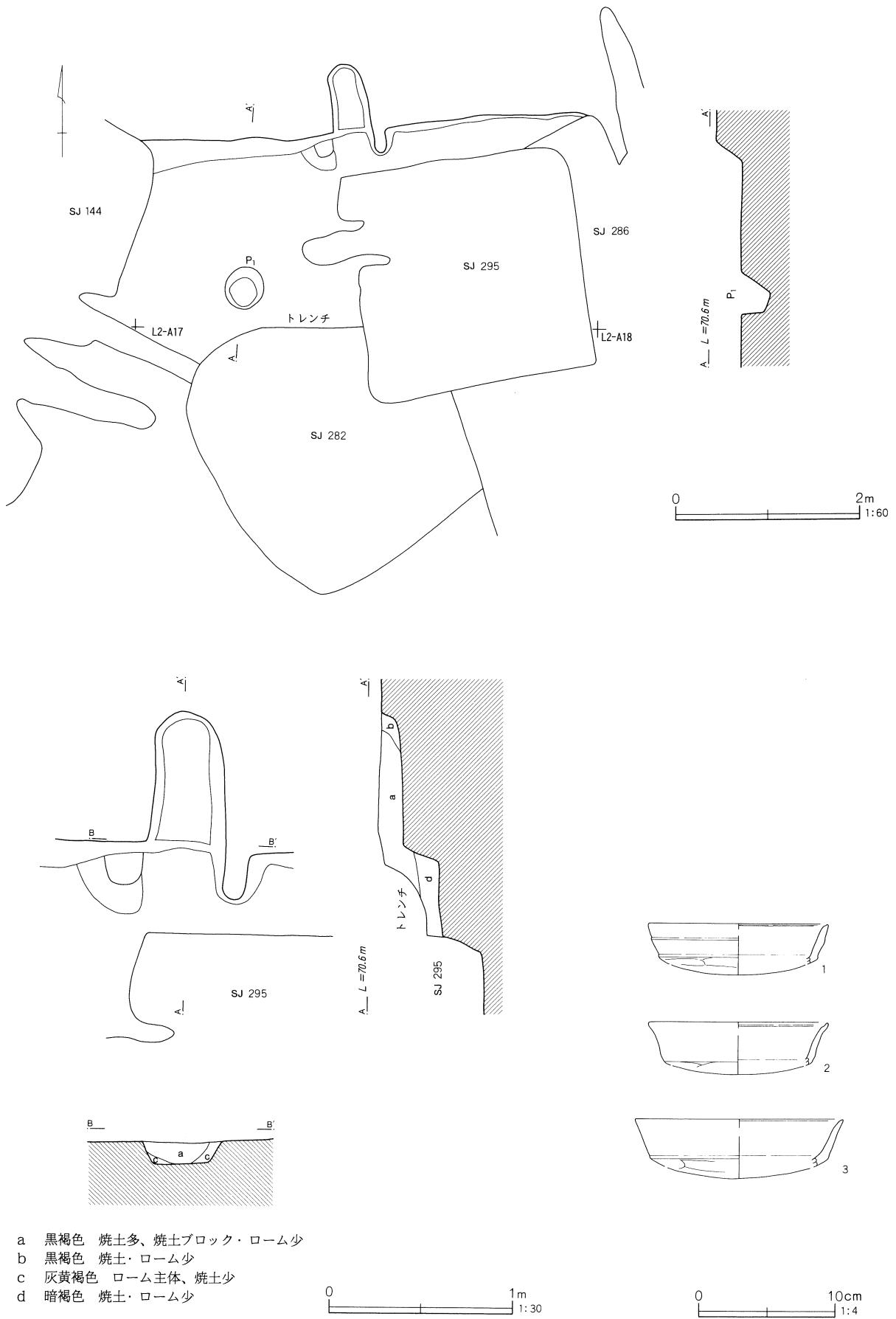
P2 が31cm、P3 が28cm、P4 が37cmである。

西側中央、第12号溝跡に切られる付近では、焼土の堆積が観察された。したがって、カマドは西壁に構築されており、第12号溝跡によって失われたものと考え

られる。床面はよく踏み固められており検出は容易であった。

遺物は、床面直上から出土したものが多い。土師器壺・高壺・甕・甕が出土している。

第86図 第285号住居跡・カマド・出土遺物



第285号住居跡遺物観察表（第86図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(12.8)	(2.9)		ADF 1	A	B	5	埋土	口縁部破片
2	壺	(12.8)	(3.1)		ADF 1	A	C	5	埋土	口縁部破片
3	壺	(14.8)	(3.5)		ADF 1	A	B	5	埋土	口縁部破片

第285号住居跡（第86図 図版24上）

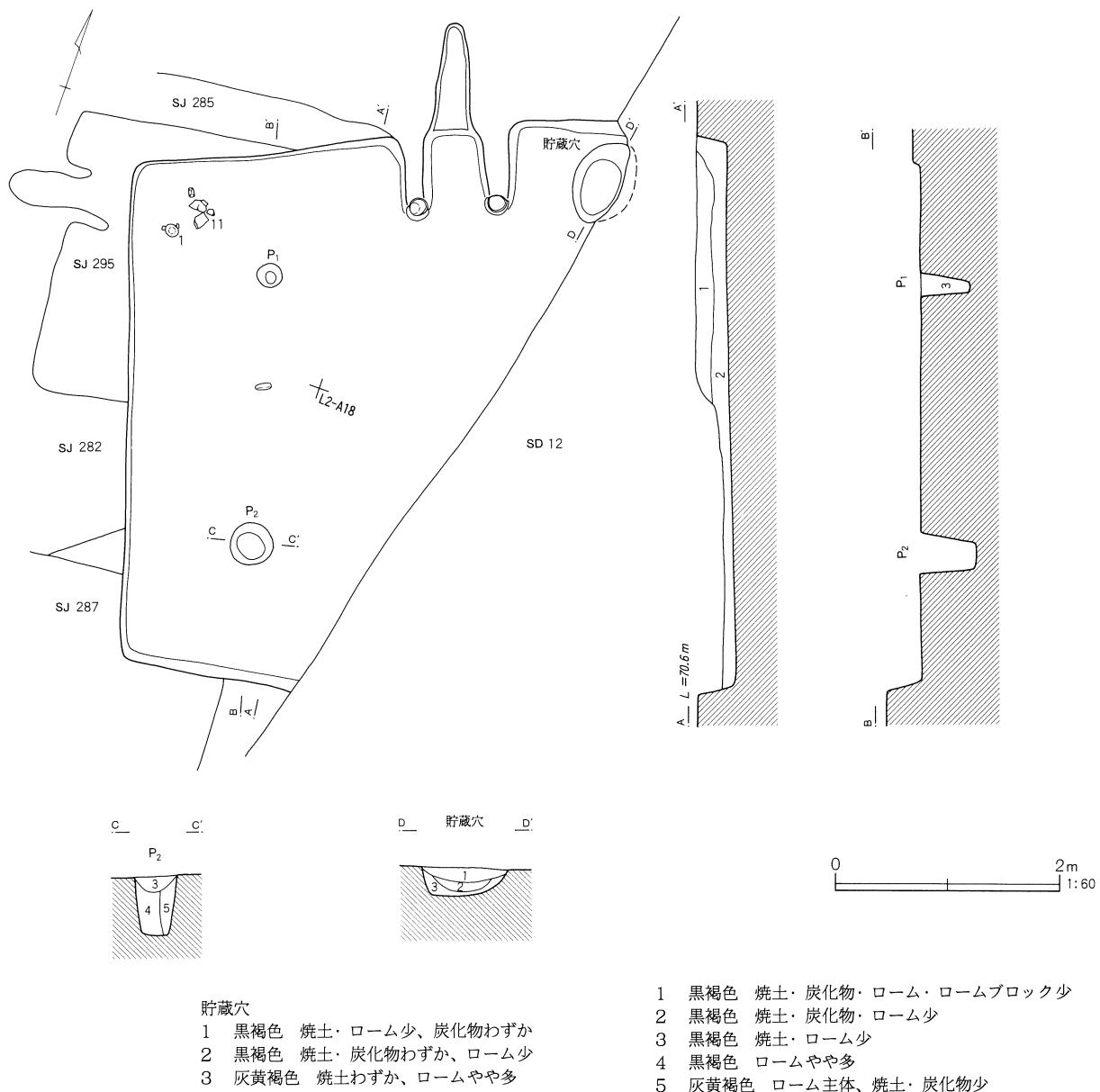
K2—T16・T17、L2—A17 グリッドに位置する。重複する第144・282・286・295号住居跡すべてに切られてしまい、形状は不明である。深さは28cmである。カマドの傾きは N—7°—W である。

カマドは北壁に構築されている。燃焼部の一部はトレンチおよび第295号住居跡によって削平されてい

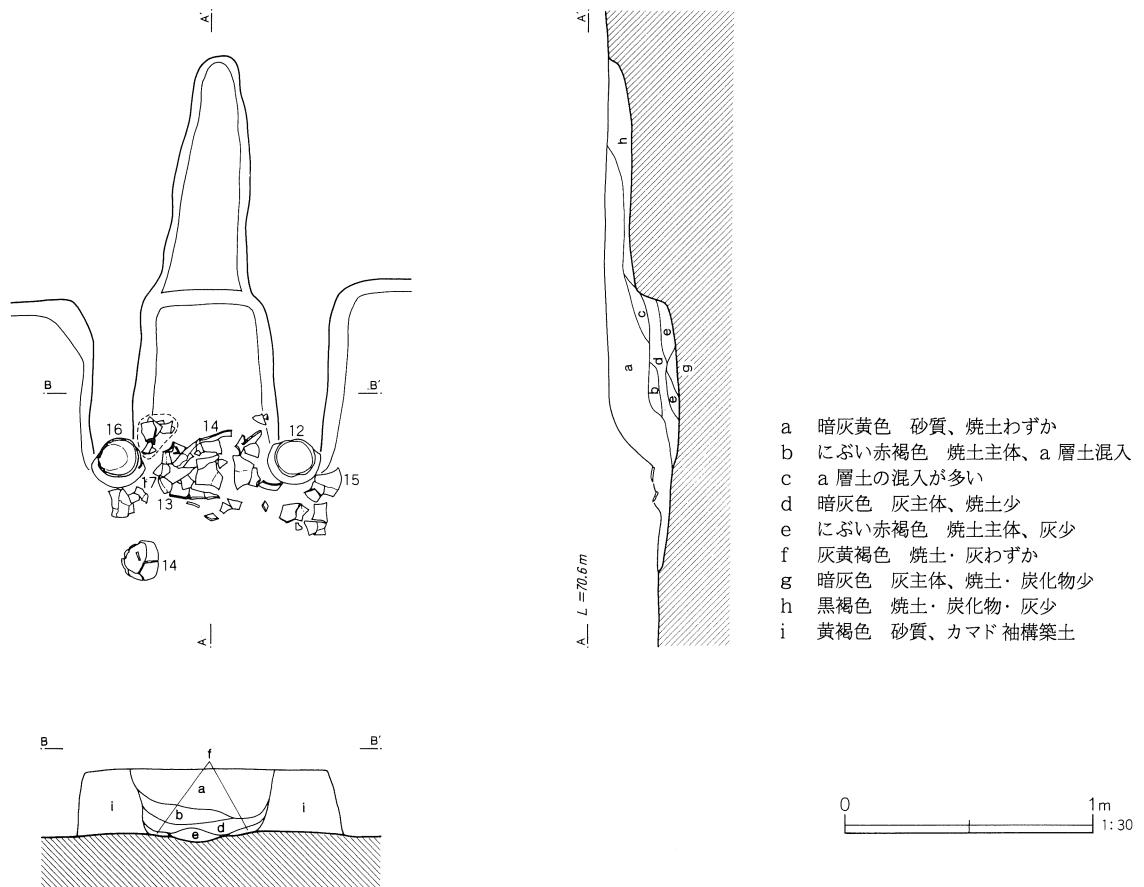
る。燃焼部の掘り込みはほとんどなかったものと推定される。煙道部は長さ69cm、幅38cmで、底面はほぼ平坦である。袖部は不明瞭であったが、ロームの掘り残しの部分が検出された。被熱面は煙道部内壁にわずかに認められた。

出土遺物は少なく、埋土中から土師器壺を含む破片が出土した。

第87図 第286号住居跡



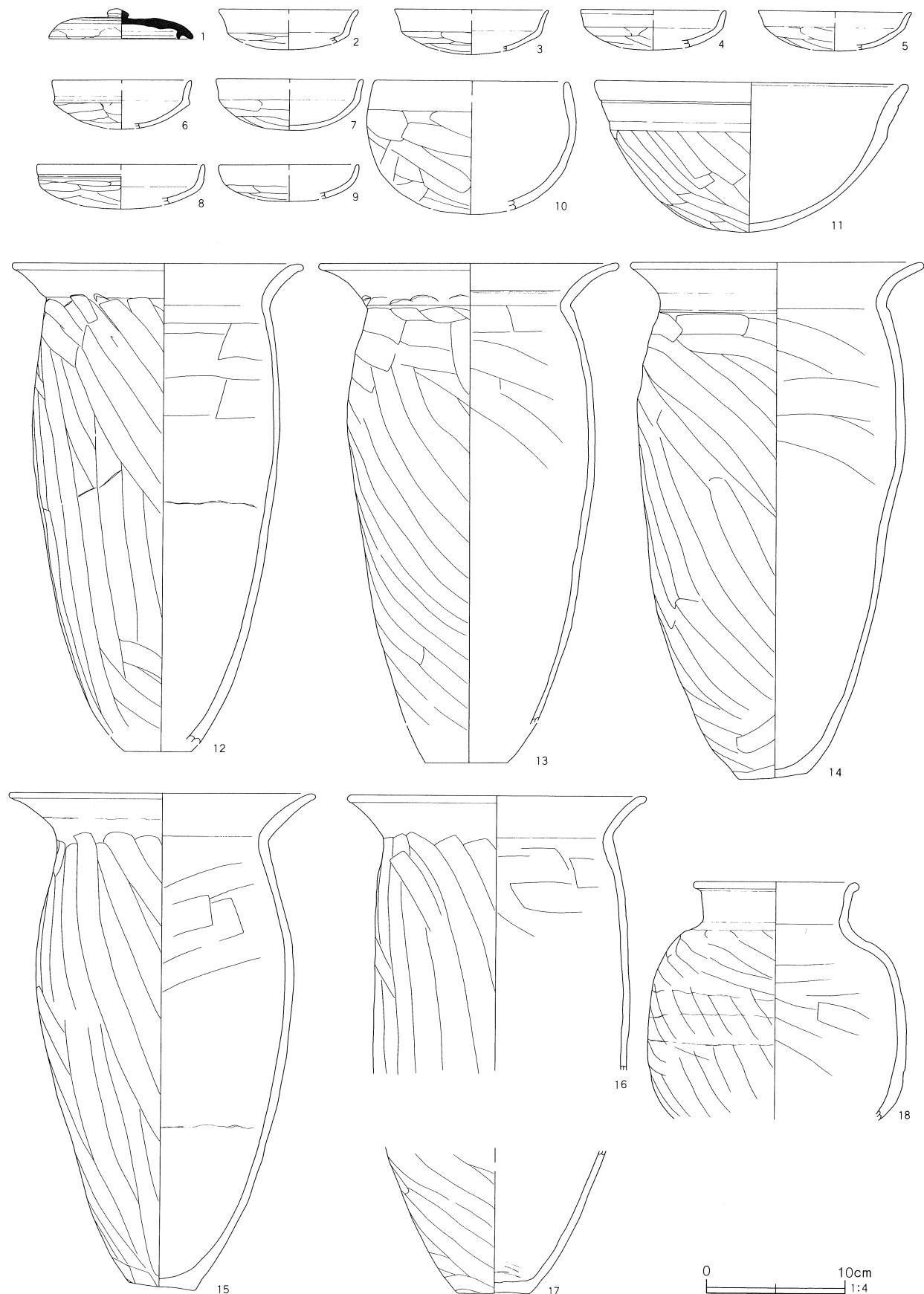
第88図 第286号住居跡カマド



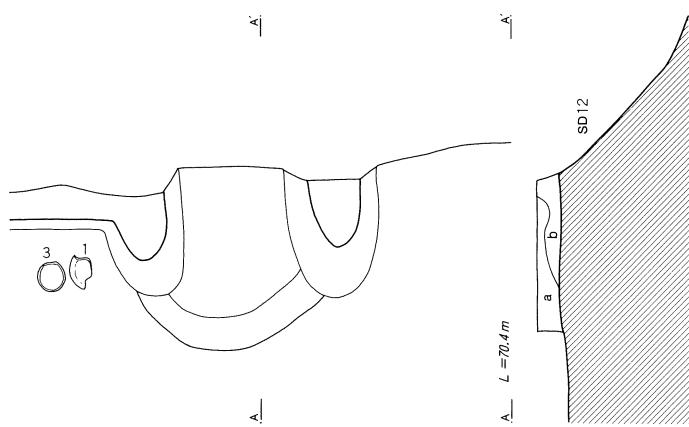
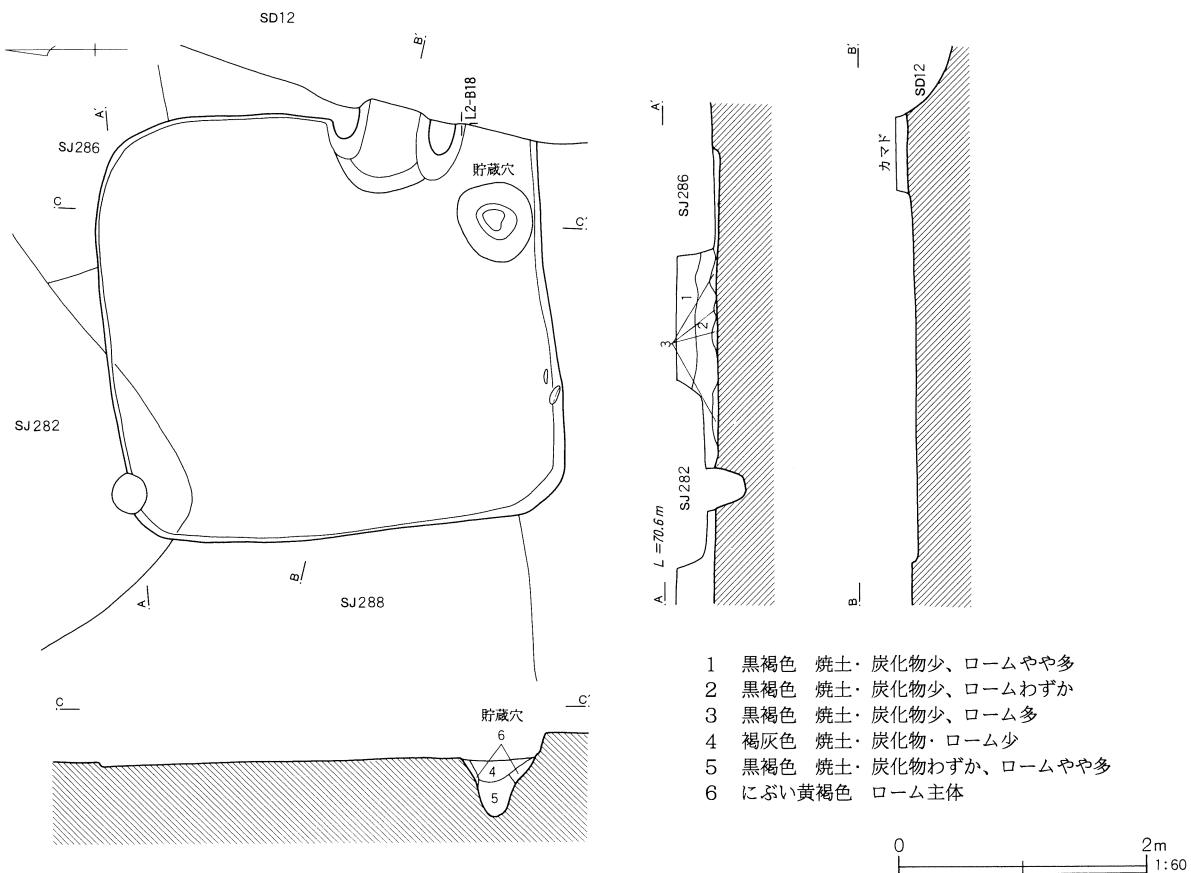
第286号住居跡遺物観察表（第89図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	蓋	10.1	2.2		DF 1	A	E	100	床直	須恵器 外面自然釉 群馬産？ 図版37-7
2	壺	(9.8)	(2.4)		AD 1	A	B	10	埋土	器面風化顯著
3	壺	(10.8)	(3.0)		AD 2	A	B	20	埋土	器面風化顯著
4	壺	(10.2)	(2.7)		F 1	A	C	30	埋土	外面一部黒化
5	壺	(10.8)	(2.7)		AD F 1	B	B	20	埋土	
6	壺	(9.8)	(3.4)		D 1	A	C	30	埋土	器面風化顯著
7	壺	(10.3)	3.7		DF 1	A	C	40	埋土	
8	壺	(11.8)	(2.9)		F 1	A	B	20	埋土	
9	壺	(9.8)	(2.4)		AD 1	A	C	20	埋土	器面風化顯著
10	椀	(13.6)	(9.2)		AD F 1	A	C	40	埋土	
11	鉢	22.0	10.7		AD F 1	A	C	50	床直	外面一部黒化
12	甕	20.1	(34.4)		AD 2	A	C	95	カマド袖	補強材 体部内・外面一部黒化 図版76-2
13	甕	20.9	(33.0)		AD F 1	A	C	70	カマド	底部近く内・外面黒化 口縁一部黒化
14	甕	20.6	37.1	4.8	AD F 2	A	C	80	カマド	底部外面黒化 図版76-3
15	甕	21.4	35.6	4.8	DF 2	A	C	70	カマド袖	図版76-4
16	甕	21.0	(19.6)		AD F 1	A	C	35	カマド袖	補強材 口縁・体部外面一部黒化
17	甕		(10.2)	(5.1)	AD F 1	A	F	10	カマド	
18	壺	11.2	(17.0)		ADEF 5	A	C	50	埋土	口縁肥厚 口縁外面一部黒化

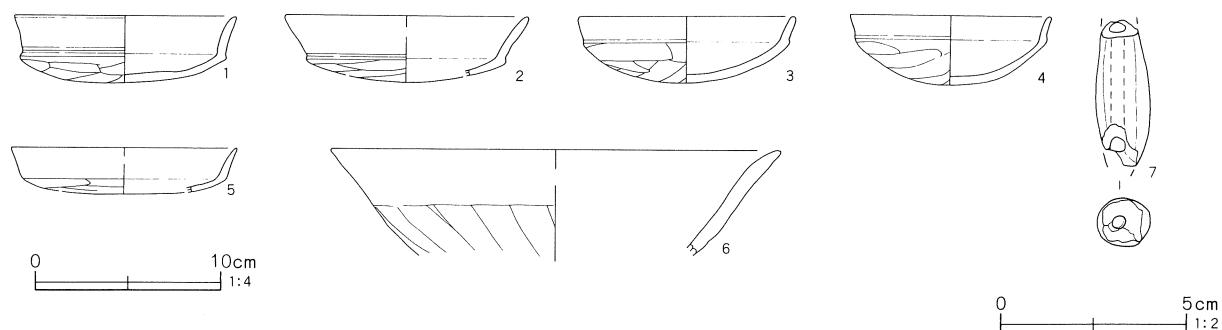
第89図 第286号住居跡出土遺物



第90図 第287号住居跡・カマド



第91図 第287号住居跡出土遺物



第287号住居跡遺物観察表（第91図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	11.6	3.6		ADF 1	A	B	85	カマド脇	図版48-8
2	壺	(12.8)	(3.2)		ADF 1	A	C	10	埋土	
3	壺	11.3	3.6		DF 1	A	B	95	カマド脇	器面風化 図版48-9
4	壺	10.4	3.7		DF 1	A	B	80	埋土	図版48-10
5	壺	(11.8)	(2.3)		DF 1	A	B	10	埋土	器面風化顯著
6	鉢	(23.6)	(5.6)		DF 1	A	C	5	埋土	口縁部破片
7	土錐	現長3.9cm、最大径1.4cm、孔径0.3cm、重さ7.3g							埋土	欠損品

第286号住居跡（第87～89図 図版24中、下）

K2-T17・T18、L2-A17・A18グリッドに位置する。東半分を第12号溝跡によって切られているため、その形状は不明であるが、方形を呈するものと推定される。他の遺構との重複関係は、第282号住居跡に切られ、第285号住居跡と、おそらくは第287・295号住居跡を切っている。西壁の長さは4.7m、深さは26cmである。埋土は同質の黒褐色土を主体としており、短期間の埋没が想定できる。カマドの傾きはN-20°-Wである。

カマドは北壁に構築されている。燃焼部はきれいな箱形で、規模は75×55cmである。底面は皿状に浅く掘り込まれ、煙道部との境には明瞭な段をもつ。煙道部は長さ93cm、幅31cmで、底面はゆるやかに浅くなり煙り出し口へと移行する。やや先細りの形状を呈する。袖は長く、大きい。ロームの掘り残しを基礎として、砂質土で構築されている。先端には補強材の土師器甕が逆さまに埋め込まれていた。燃焼部底面はあまり焼けておらず、被熱面は袖内壁や煙道部手前の内壁に認められた。

貯蔵穴はカマドの東隣に位置している。第12号溝跡に切られているため全容は明らかでないが、楕円形で

長径75cmの規模をもつ。深さは25cmである。底面は平らであったと思われる。

ピットは2基検出された。柱痕は明らかでないがともに柱穴とみなされる。

カマド手前から中央にかけての床面は貼り床がされているが、他の部分は軟らかく、あまり明瞭に検出されなかった。

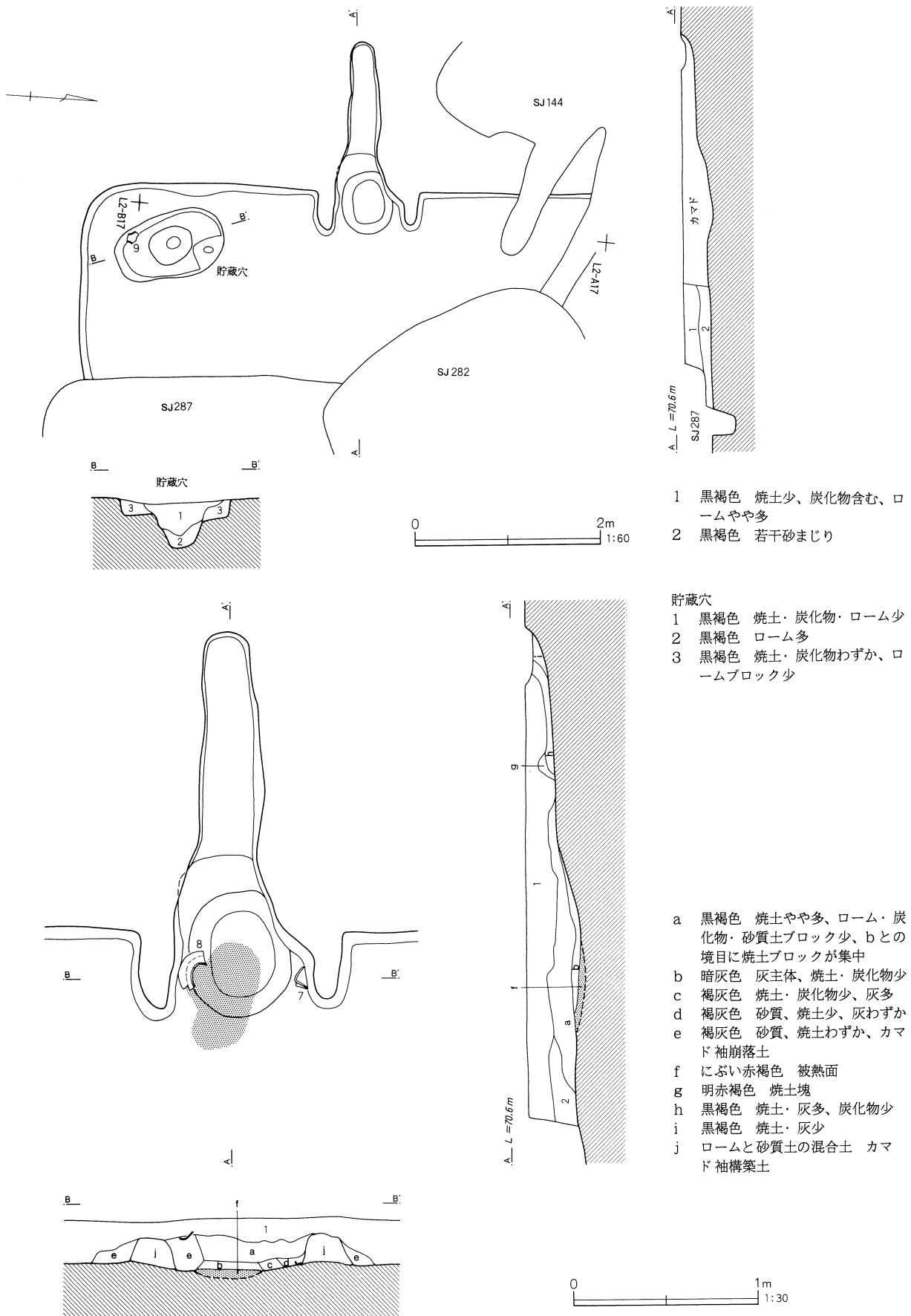
遺物は、カマド燃焼部からの出土が目立つ。補強材も含めすべて土師器甕である。西コーナー付近の床面直上からは、土師器鉢と須恵器蓋が出土している。

第287号住居跡（第90、91図 図版25上）

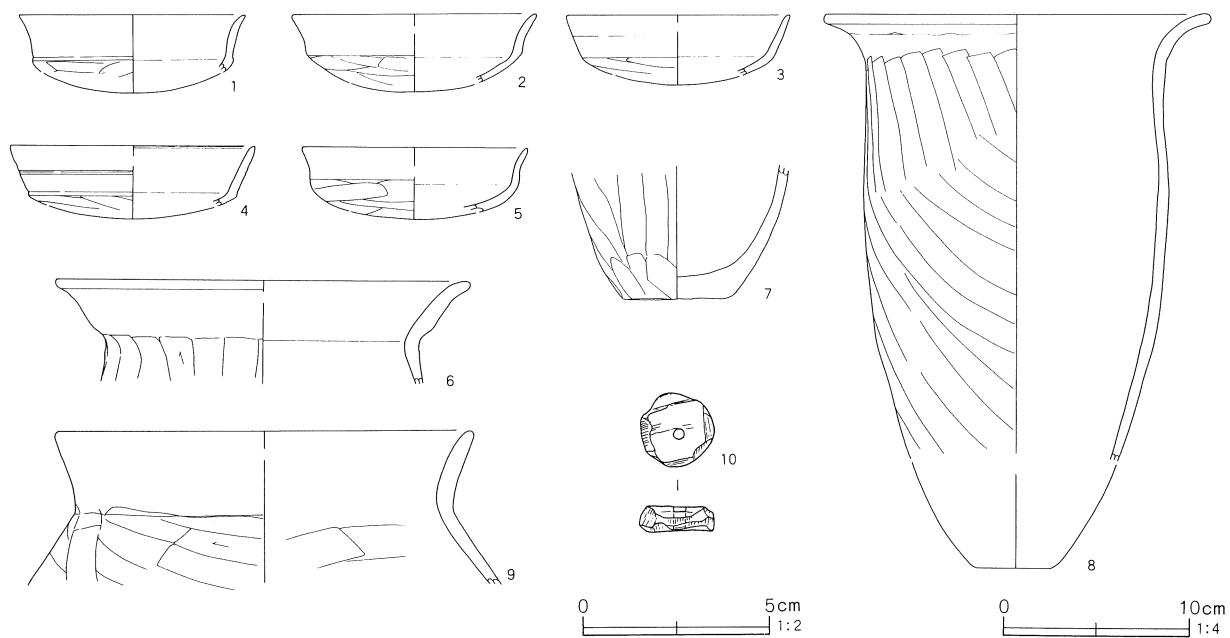
L2-A17・A18・B17グリッドに位置する。重複関係は、第12号溝跡と第282・286号住居跡に切られ、第288号住居跡を切っている。形状は方形を呈する。長辺×短辺は3.55×3.36m、深さは13cmである。カマドの傾きはN-90°-Eである。

カマドは東壁南寄りに構築される。燃焼部の一部と煙道部は第12号溝跡によって切られ失われている。燃焼部の底面はわずかに掘り込みが認められる。袖部は砂質土を貼り付けて構築したものである。燃焼部は焼けておらず、被熱面は認められなかった。

第92図 第288号住居跡・カマド



第93図 第288号住居跡出土遺物



第288号住居跡遺物観察表（第93図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	11.8	(3.1)		A F 1	A	B	10	埋土	器面風化顯著
2	壺	(12.8)	(3.6)		A F 1	A	B	10	埋土	器面風化顯著
3	壺	(11.8)	(3.2)		A F 1	A	B	5	埋土	器面風化顯著
4	壺	(12.8)	(3.2)		D F 1	A	C	5	埋土	
5	壺	(11.9)	(3.4)		A F 1	A	B	10	埋土	器面風化
6	甕	(21.6)	(5.5)		D F 1	A	B	5	埋土	
7	甕		(7.1)	5.4	A D F 2	A	B	5	カマド	
8	甕	20.0	(23.7)		A D F 1	A	B	30	カマド	体部外面一部黒化
9	甕	(21.9)	(8.2)		A D F 2	A	C	5	貯蔵穴	
10	白玉	径1.9cm、厚さ0.6cm、孔径0.3cm、重さ3.5g							埋土	滑石製 未製品？

貯蔵穴はカマド南脇、東南コーナーにあたる位置に検出された。円形を呈し、直径は62cm、深さは47cmである。すり鉢状に掘り込まれ、底は狭く丸くへこむ。ピットは検出されなかった。

床面は踏みしめられているが、顯著な貼り床は認められない。

出土遺物の量は少なく、床面でおさえられた遺物はない。土師器壺・鉢、土錐が出土している。

第288号住居跡（第92、93図 図版25中）

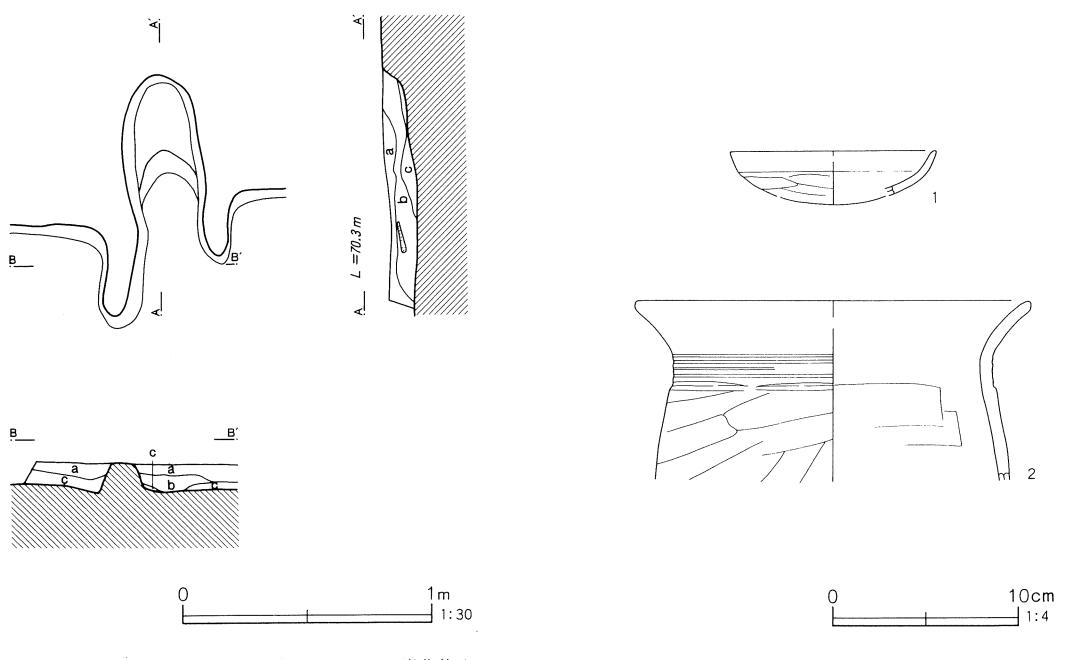
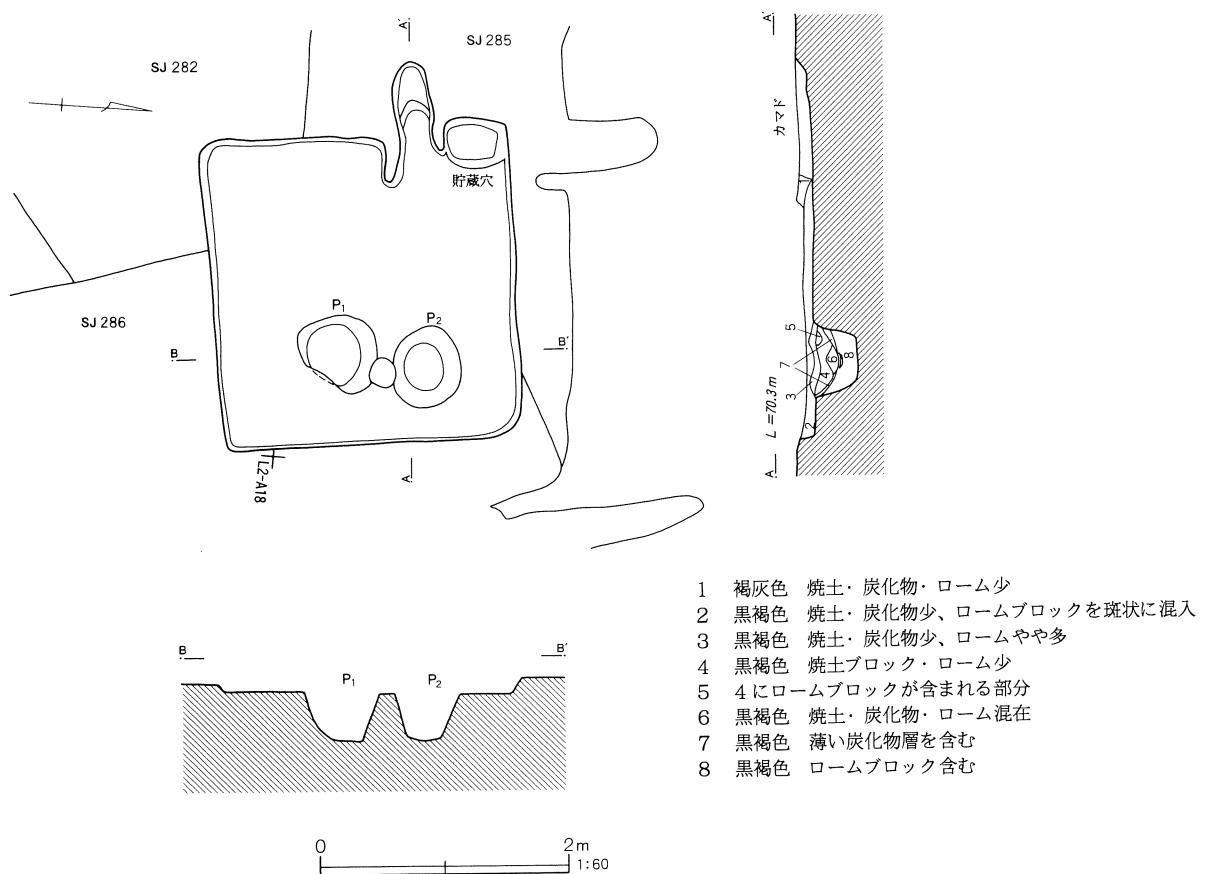
L2-A16・A17・B16・B17グリッドに位置する。第144・282・287号住居跡に切られており、形状は不明である。深さは30cmである。カマドの傾きはN—95°—Wである。

カマドは西壁に構築されている。燃焼部はやや崩れているが、箱形を呈していたものと思われる。規模は85×58cmである。底面は浅く掘り込まれ皿状となる。煙道部との境には段はなく、ゆるやかに立ち上がり移行す

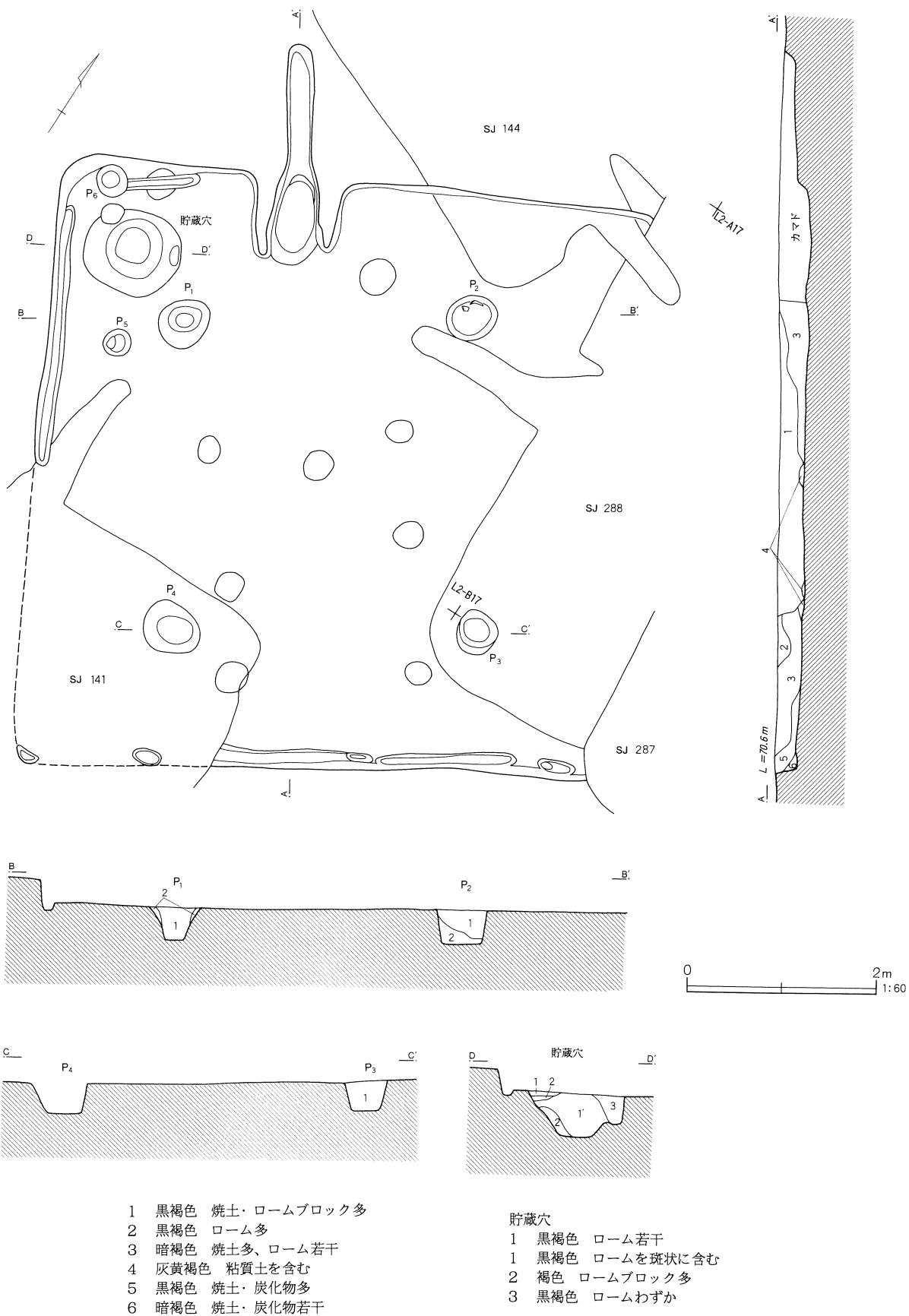
第295号住居跡遺物観察表（第94図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(10.8)	(2.4)		D F 1	A	B	5	埋土	器面風化
2	甕	(20.7)	(9.5)		A D F 1	A	C	10	埋土	頸部工具アテ

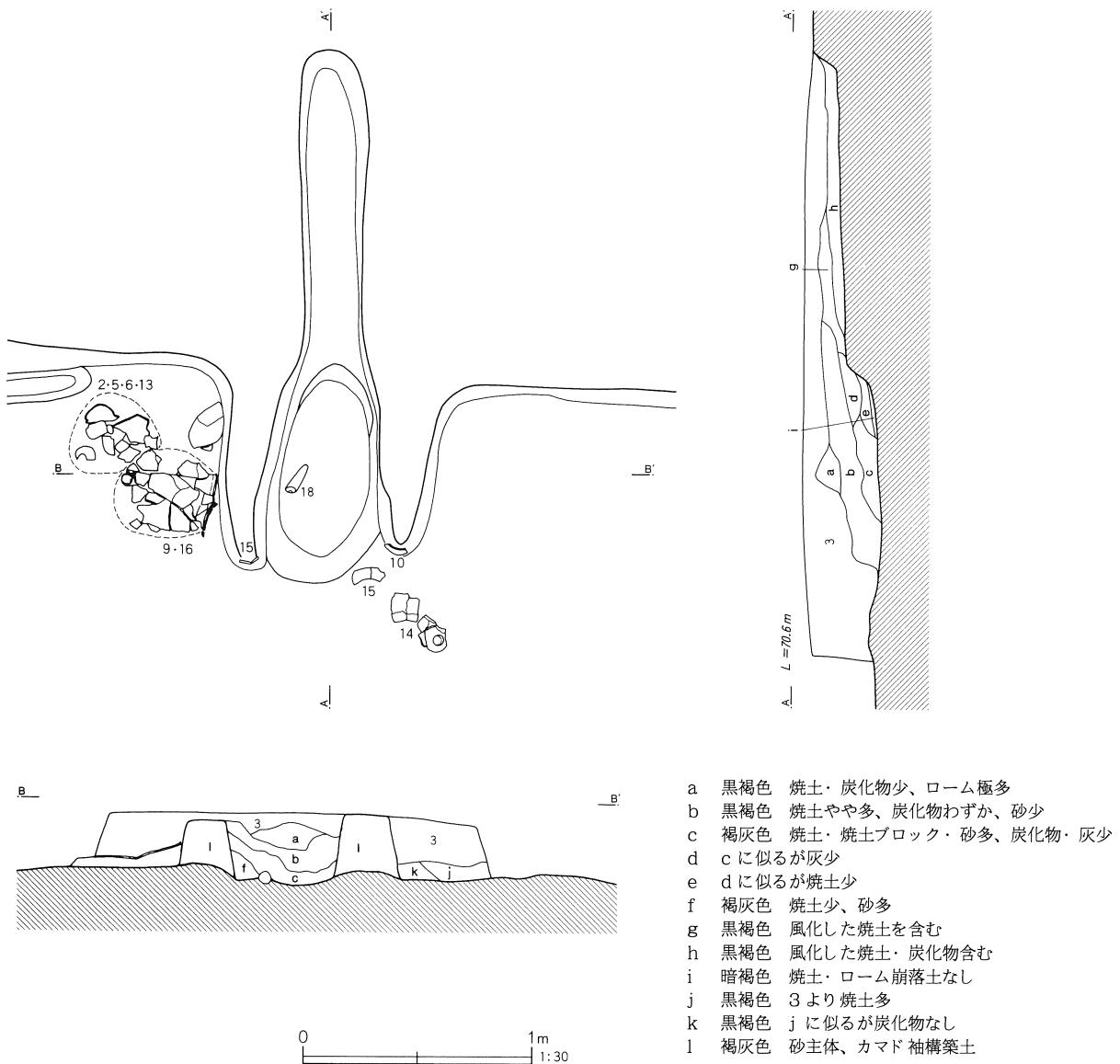
第94図 第295号住居跡・カマド・出土遺物



第95図 第299号住居跡



第96図 第299号住居跡カマド



る。煙道部は長さ119cm、幅34cmで、底面は煙り出し口に向けてなだらかに浅くなる。袖部はロームを削り残して基部とし、砂質土との混合土で構築している。被熱面は燃焼部底面と、袖部～煙道部の内壁に認められる。

貯蔵穴は西南コーナーに設けられている。形状は楕円形で、規模は57×118cm、深さ48cmである。壁は明瞭に検出できず、一部掘り過ぎているかもしれない。本来の形状は、埋土1・2層が示している形になる可能性もある。

床面は全体にしっかりとしており、カマドを中心と

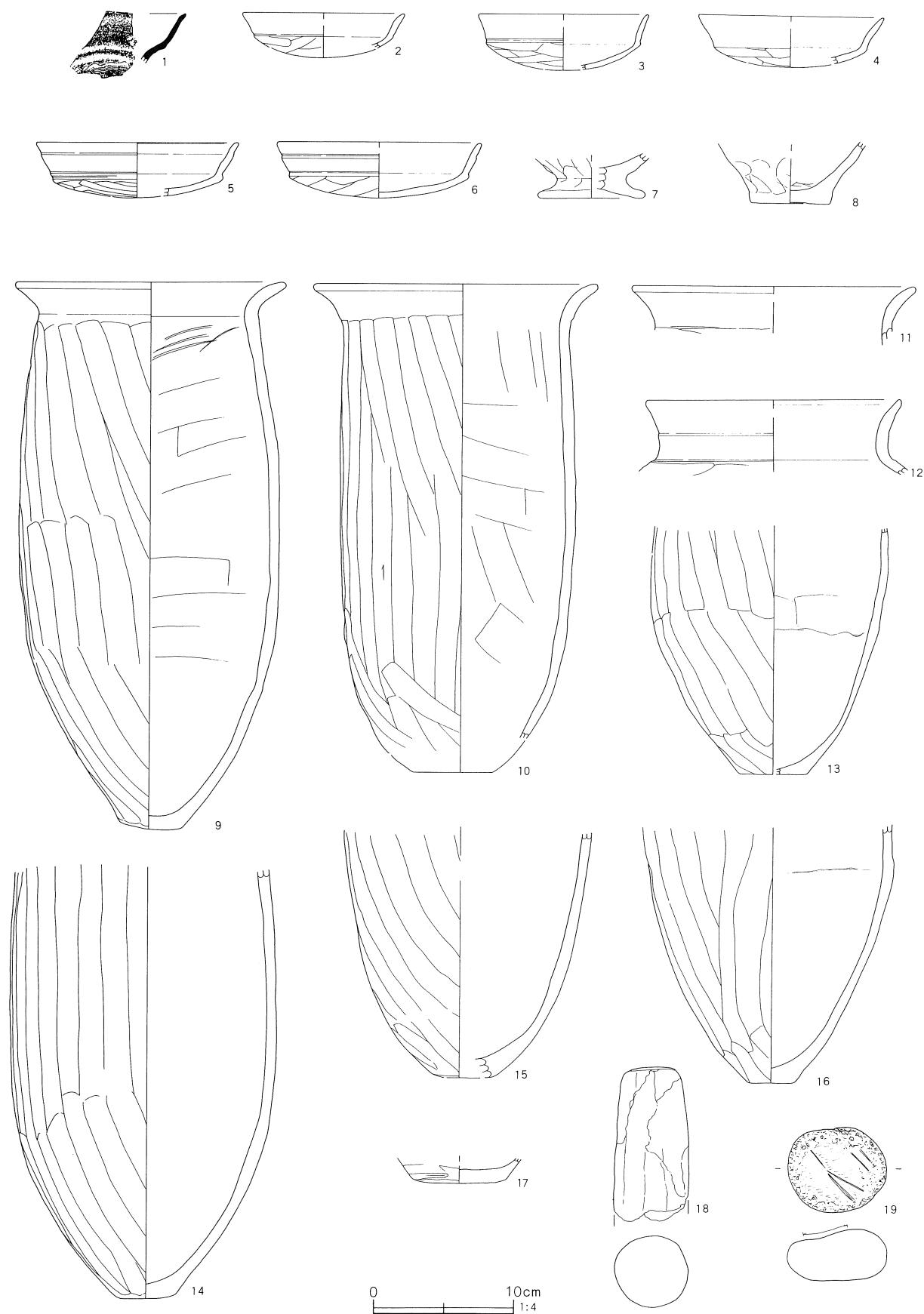
した狭い範囲に貼り床がみられる。

遺物は、カマドと貯蔵穴内以外は、すべて埋土中の出土である。土師器壺・甕の他に、白玉が1点出土した。

第295号住居跡（第94図 図版25下）

K2—T17, L2—A17グリッドに位置する。重複関係は、第286号住居跡に切られ、第285号住居跡を切っているものと考えられる。形状はほぼ正方形を呈し、長辺×短辺は2.44×2.46m、深さは11cmである。カマドの傾きはN—95°—Wである。

第97図 第299号住居跡出土遺物



第299号住居跡遺物観察表（第97図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺		(4.5)		D 1	A	H	5	埋土	須恵器 口縁部破片 産地不明
2	壺	(11.2)	(2.5)		D F 1	A	B	10	カマド脇	器面風化
3	壺	(11.8)	(3.9)		A 1	A	B	45	埋土	器面風化顯著
4	壺	(12.8)	(3.3)		A D F 2	A	B	20	埋土	
5	壺	14.0	(3.8)		A D F 2	A	B	50	カマド脇	
6	壺	(14.2)	4.0		A D 1	A	B	30	カマド脇	
7	台付甕		(3.1)	(7.0)	A D F 5	A	F	5	埋土	脚部破片
8	甕		(4.4)	5.5	A D F 2	B	C	5	埋土	
9	甕	18.6	38.7	4.4	A D E F 5	A	B	95	カマド脇	胴部外面半分、内面・口縁一部黒化 図版77-1
10	甕	19.6	(33.2)		D E F 5	A	B	40	カマド袖	補強材 体部外面一部黒化
11	甕	(19.6)	(4.2)		A D E F 5	A	B	5	埋土	口縁部破片
12	甕	(17.7)	(5.3)		A D F 2	A	C	5	埋土	口縁部破片
13	甕	(17.4)	(4.6)		A D E F 5	A	C	40	カマド脇	外面特に器面風化
14	甕	(30.3)	3.9		A D E 5	A	B	70	カマド前	体部外面一部黒化 内面風化
15	甕	(17.3)	(4.2)		A D E F 5	A	B	40	カマド袖	補強材
16	甕	(18.3)	3.2		D F 5	A	C	70	カマド脇	
17	甕	(1.8)	6.2		A D F 2	B	B	5	埋土	
18	支脚	(10.9)			D 2	A	B	80	カマド	底部破片
19	すり石	径6.0×6.9cm、重さ75.6g					埋土	すり面1面 刃傷あり 多孔質安山岩（軽石）		

重複やトレンチによる削平のため、北側の壁プラン以外は明瞭に検出できず、推定を交えて調査した。カマドは西壁北寄りに構築されている。燃焼部は明瞭な掘り込みをもたず、底面はほぼ平らである。わずかに浅くなつて煙道部へ移行する。全体の長さは約95cm、煙道部の幅は31cmである。袖部は片側がトレンチによって壊されている。ロームを掘り残したものである。被熱面は残りのよい方の袖内壁に顯著に認められた。

貯蔵穴はカマドの北側に接し、住居の北西コーナーを形成している。規模は40×45cm、床面からの深さは13cmである。底面は平らである。ピットは床下土壌に類したもので、柱穴とはみなされない。

主な出土遺物には土師器壺・甕がある。全体の量は少ない。

第299号住居跡（第95～97図）

L2-A16・B16・B17グリッドに位置する。重複が激しく、第141・144・288号住居跡および第17号溝跡に切られている。さらに、第268・323号住居跡を切っている。形状は方形を呈するものと思われる。西壁の長さは6.06m、深さは26cmである。埋土は埋め戻されたものか、乱れており、南壁際の埋土中には焼土と炭化

物が多く含まれていた。カマドの傾きはN-33°-Wである。

カマドは北壁やや西寄りに構築されている。燃焼部は楕円形を呈し、規模は94×50cmである。底面は浅く掘り込まれており、煙道部とは明確な段を介する。煙道部は長さ135cm、幅28cmである。底面は直線的にわずかに高くなり煙り出し口へと至る。袖部は基部にロームを残し、砂混じりの土で構築されている。先端には土師器甕か補強材として埋め込まれていた。支脚には土製の専用品が用いられていた。

貯蔵穴は北西隅に検出された。楕円形で、規模は90×102cm、深さは44cmである。掘り込みはやや開いたバケツ状で、底面は平らである。

壁溝は南壁と北西コーナーを中心に検出された。幅は10～15cm、深さは10cm弱である。掘り込みは深く、明瞭である。

ピットは6基検出され、位置的にP1～P4が柱穴と判断した。柱痕は認められなかった。ピット間の距離は、P1-P2間が約3m、他は約3.2mである。平面プランとは角度を異にするが、ほぼ均等に配置されている。なお、図示していないピットの深さは、P5が18cm、P6が21cmである。

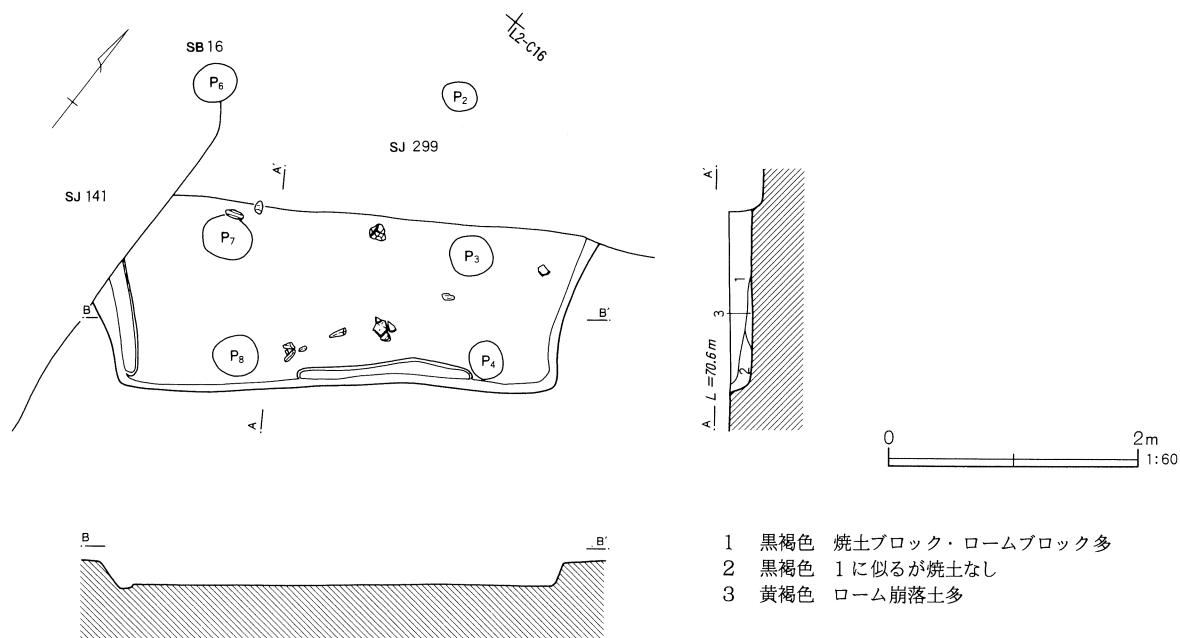
壁の掘り込みは深く、床面は貼り床こそ認められなかったが、全体によく踏みしめられていた。

遺物は、カマド周辺から多く出土している。土師器壊と甕がある。埋土からは須恵器縫の口縁部破片や、軽石のすり石などが出土している。

第323号住居跡（第98図）

K2—B16・B17 グリッドに位置する。重複する

第98図 第323号住居跡・出土遺物



3. 第20住居跡群

第99図 第20住居跡群



※ スクリーントーンは平安時代の住居跡

第116号住居跡（第100、101図 図版5下）

L2-K12・K13・L12・L13 グリッドに位置する。第129号住居跡と重複するが、切り合い関係はとらえられなかった。形状は歪んだ方形を呈する。長辺×短辺は2.9×2.88mで、深さは18cmである。カマドの傾きはN-90°-Eである。

カマドは東壁南寄りに設置されている。燃焼部は箱形を呈し、規模は53×40cmである。底面は平らで掘り込みはない。煙道部は削平されたものか存在しない。袖部は地山ローム土と黒褐色土を混せて土台としている。燃焼部内壁および天井部（崩落）には砂質土を使用している。燃焼部の底面は被熱し赤化している面がある。

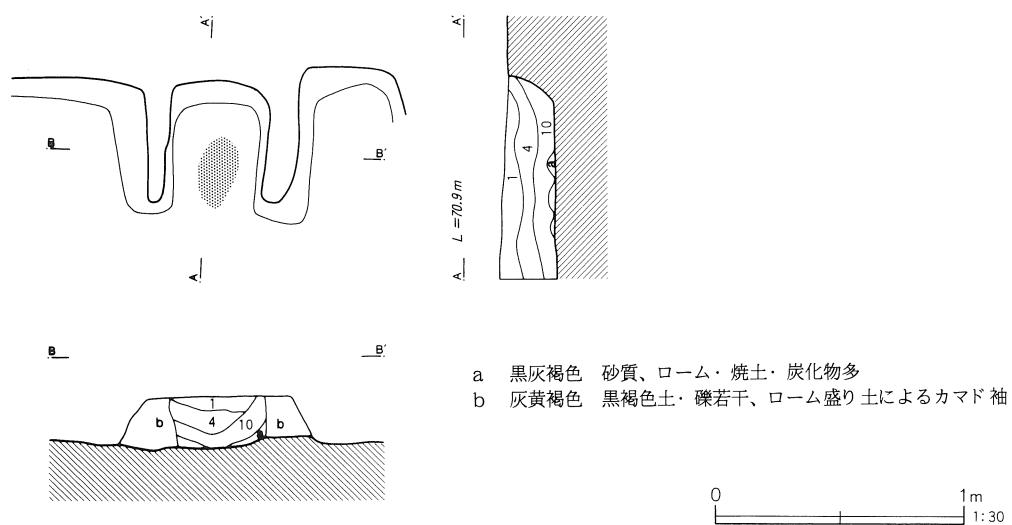
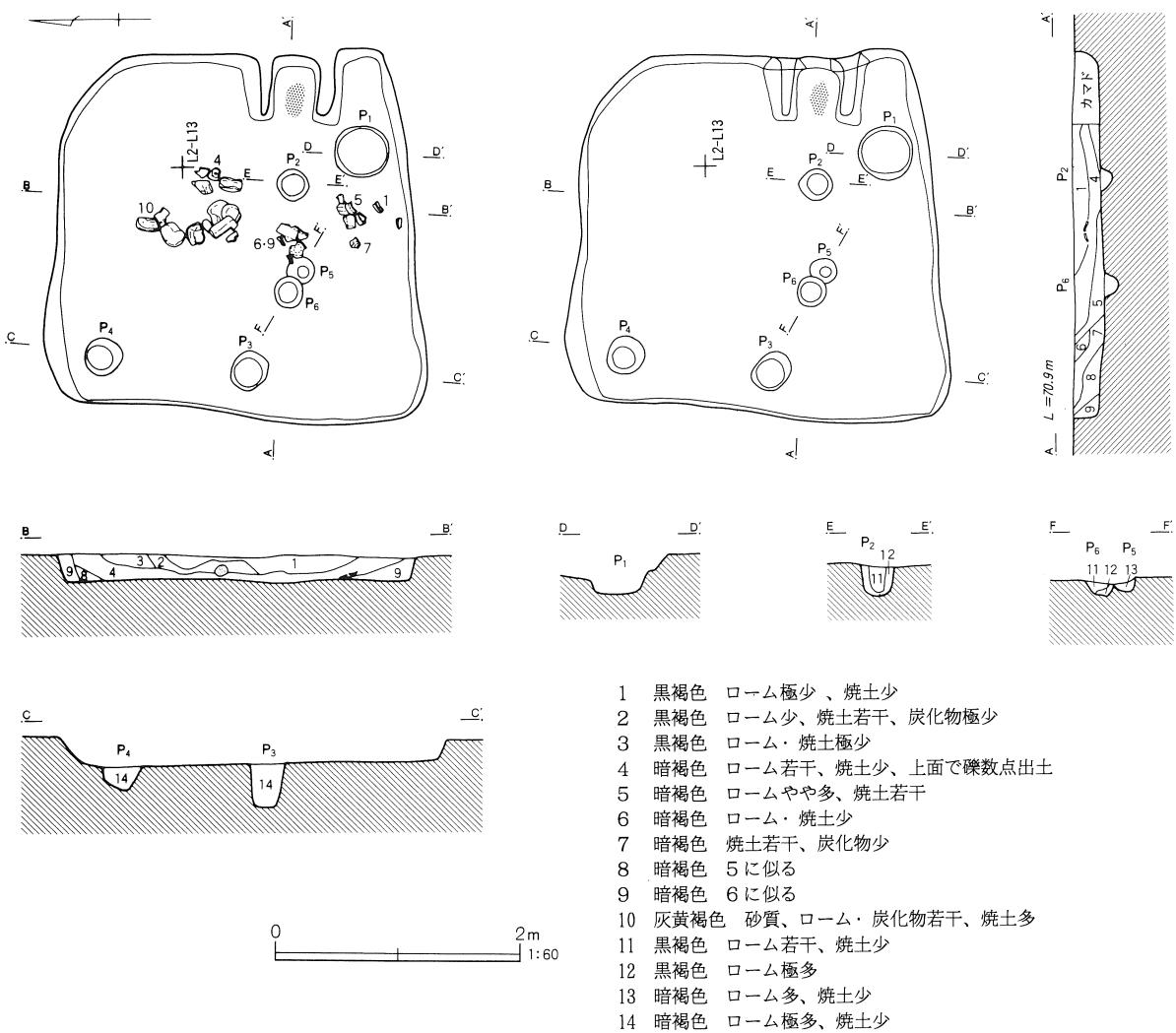
ピットは全部で6基検出されたが、P1はその規模（直径44cm・深さ17cm）や位置から、貯蔵穴の可能性がある。底面は平らに掘り込まれている。

P2には柱痕がみられ、柱穴と推定されるが、他のピットの用途は不明である。各ピットの深さはまちまちであり、配置には規則性が認められない。

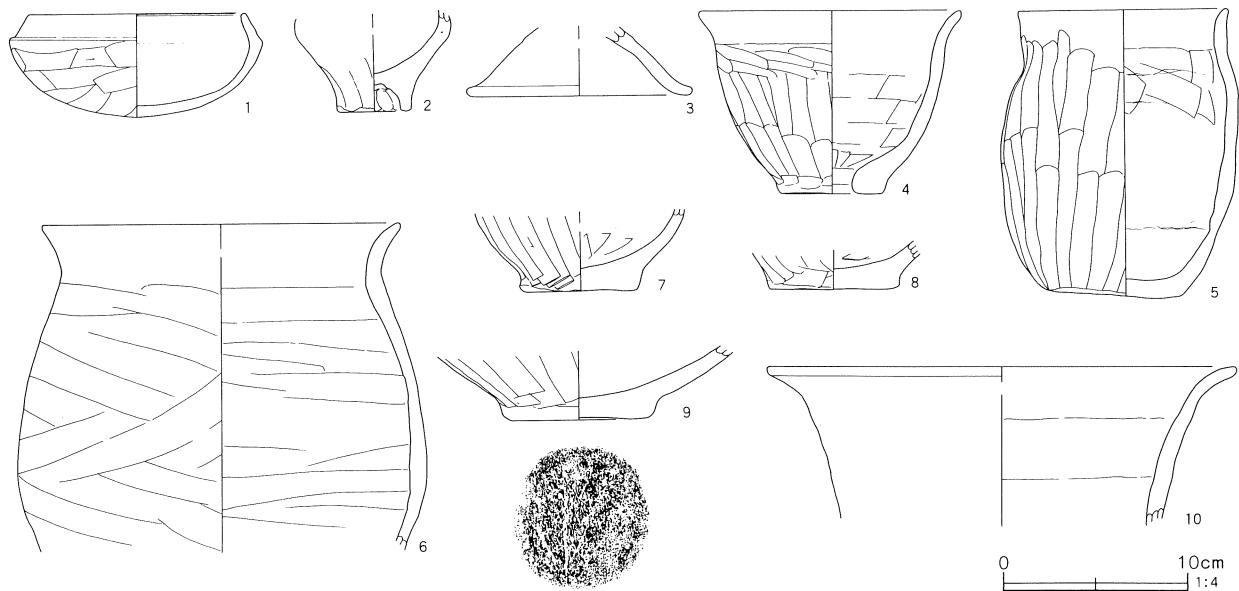
壁の立ち上がりは明瞭である。掘形はなく、地山面をそのまま床面としている。

遺物は埋土下層から床面直上にかけて出土している。土師器壺・甕・甌等がある。須恵器は図示していないが、櫛描波状文の施された胴部破片がある。また、遺物と同じ層位から拳大の自然石が集中して出土している。これらの石に使用痕は認められなかった。

第100図 第116号住居跡・カマド



第101図 第116号住居跡出土遺物



第116号住居跡遺物観察表（第101図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	11.4	5.5		AD F 2	A	B	75	床直	内面、外面一部黒化 図版38-10
2	ミニチュア		(5.4)	(2.8)	AD F 2	A	B	15	埋土	脚付
3	台付甕		(3.7)	11.4	AD 2	A	B	5	埋土	脚部破片
4	小形甕	13.7	9.8	5.4	AD 5	A	B	40	床直	
5	小形甕	10.9	15.4	6.8	AD 5	A	B	85	床直	図版65-1
6	甕	(18.8)	(17.4)		AD F 2	A	B	15	床直	
7	甕		(4.3)	6.2	AD F 5	A	B	5	床直	
8	甕		(2.6)	6.8	AD F 5	A	B	5	カマド埋土	
9	甕		(3.8)	7.6	DF 5	A	C	5	床直	内面黒化 底部木葉痕あり
10	壺	(24.5)	(8.4)		AD 5	A	B	5	床直	

第119号住居跡（第102図）

L2—L10・M10 グリッドに位置する。東斜め半分をトレンチによって削平されている。確認された床面までの深さは 6 cm で、埋土の残りは少ない。非常に遺存状態が悪い住居跡である。

形状は方形を呈すると考えられるが、規模は不明である。確認された北西壁の長さは 4.15m である。北西壁の傾きは N—36°—E である。

ピットは全部で 7 基検出されたが、すべてが本住居跡に属するものではないようである。配置や深さから、P3 と P7 は柱穴の可能性がある。その間の距離は約 2.6m である。柱痕は認められなかった。

断面で図示した以外のピットの深さは、P1 が 8 cm、

P2 が 33cm、P4 が 20cm、P5 が 25cm、P6 が 8 cm である。

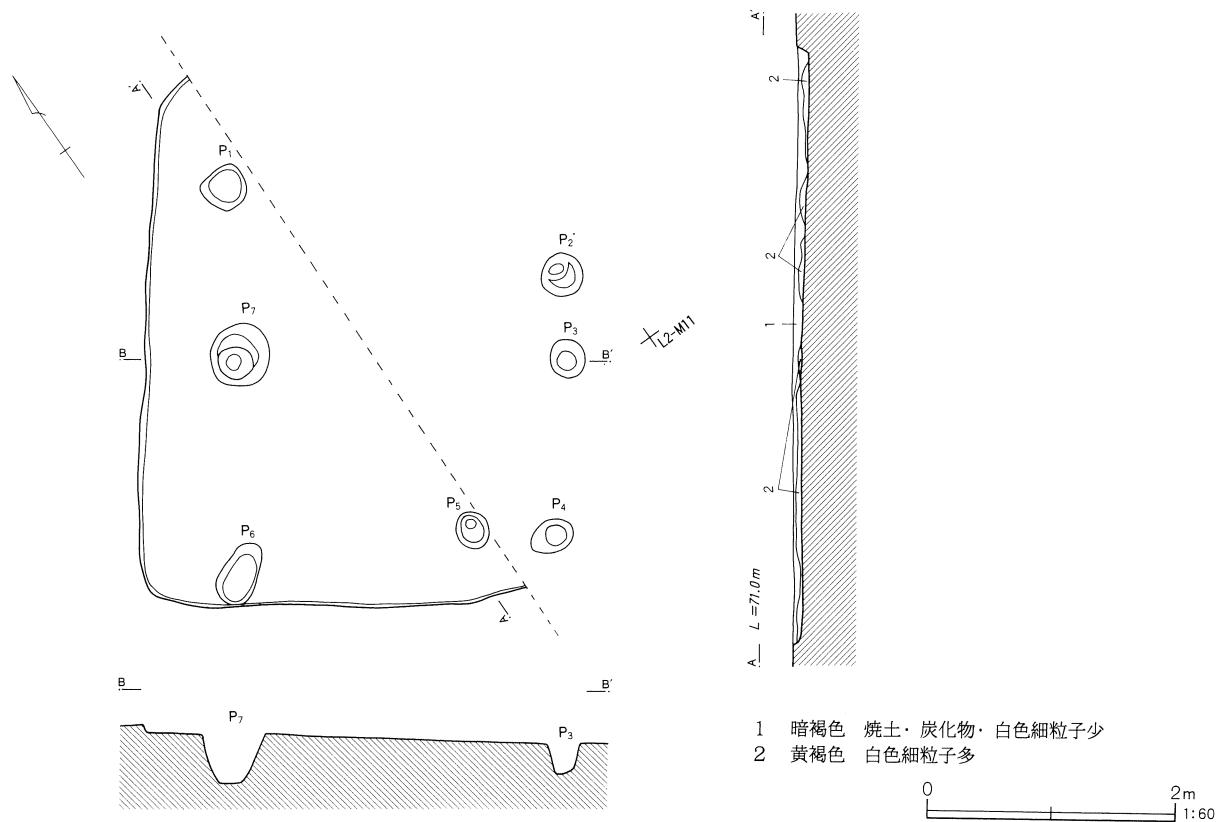
壁の立ち上がりは、削平を受けているため浅いが、トレンチ外の平面プランは明瞭に検出された。掘形はなく、地山面を床面としている。

カマドや貯蔵穴などの施設は確認されなかった。出土遺物は少量の細片であり、図示できる遺物はない。

第122号住居跡（第103、104図 図版 6 上）

L2—I9—I11・J9・J10 グリッドに位置する。重複する住居跡は存在していない。形状は方形を呈する。長辺×短辺は 5.31×5.1m と正方形に近い。深さは 14cm である。カマドの傾きは推定で N—49°—E である。

第102図 第119号住居跡



カマドは検出されなかったが、北東壁際のやや東寄りに、不定形の掘り込みが検出された。深さは15~18cmで、底面には凹凸がある。埋土上層に焼土を多量に含むため、カマドの痕跡と判断した。底面に被熱面は認められないが、位置的には妥当なところにあるといつてよい。

貯蔵穴は東南コーナーに設けられている。規模は74×88cmの楕円形で、深さは50cmである。底面は平らでバケツ状を呈する。しっかりとした掘り込みをもち、埋土には炭化物の薄い層が確認された。

壁溝は北東壁を除いて全周している。幅は8~20cm、深さは10cm前後である。掘り込みは深く、明瞭である。南東壁の貯蔵穴寄りの位置に、壁溝が分かれて住居内に延びる部分が検出された。直上の埋土には焼土が多く含まれ、遺物がまとまって出土した。

ピットは10基検出された。そのうち主柱穴と思われるものがP1・P2・P3・P4の4基である。主柱穴間の距離は、P1-P2間は約2.5m、P2-P3間は約2.7m、P3

—P4間は約2.8m、P1—P4間は約2.6mである。P4がやや外側にはみ出しが、おおむね均等に配置されている。P2は柱痕が明瞭に観察できる。図示した以外のピットの深さは、P8が18cm、P9が14cm、P10が19cmである。

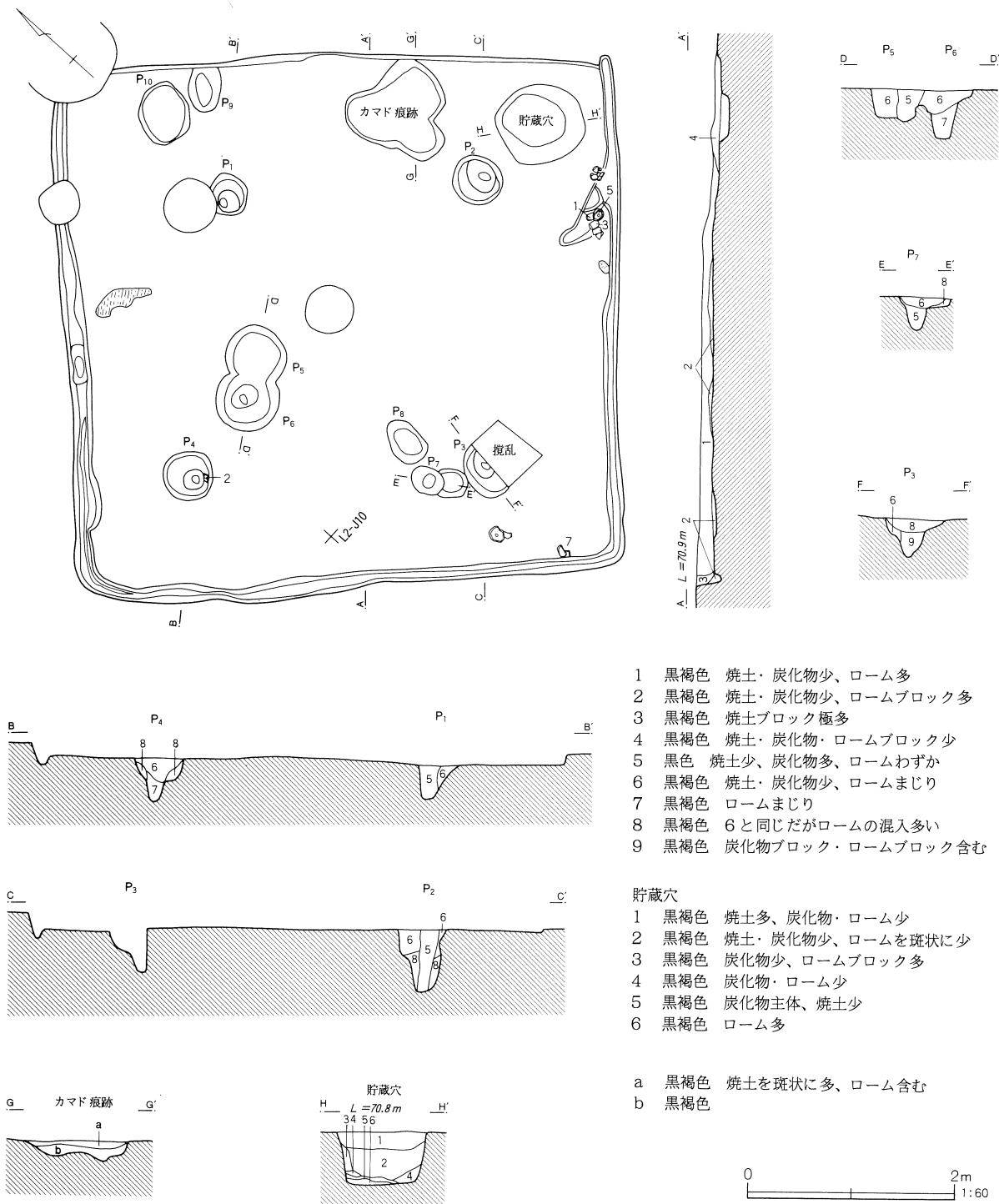
床面には、主柱穴内区を中心に貼床が顕著に認められるが、壁近く、特に、北東壁際は不明瞭であり、若干傾斜している。また、範囲は狭いが、床面に炭化物が集中している箇所もある。

主な出土遺物は、土師器壺・甌・甕である。南東壁際の焼土集中部分に、比較的残りのよい遺物が出土している。

第123号住居跡（第105、106図）

L2—J11・J12 グリッドに位置する。形状は長方形を呈する。長辺×短辺は5.05×3.68m、深さは16cmである。埋土は浅く一層である。黒褐色土で焼土・炭化物を少量含み、下面にはロームブロックが含まれる。埋

第103図 第122号住居跡



没状況は明らかでない。

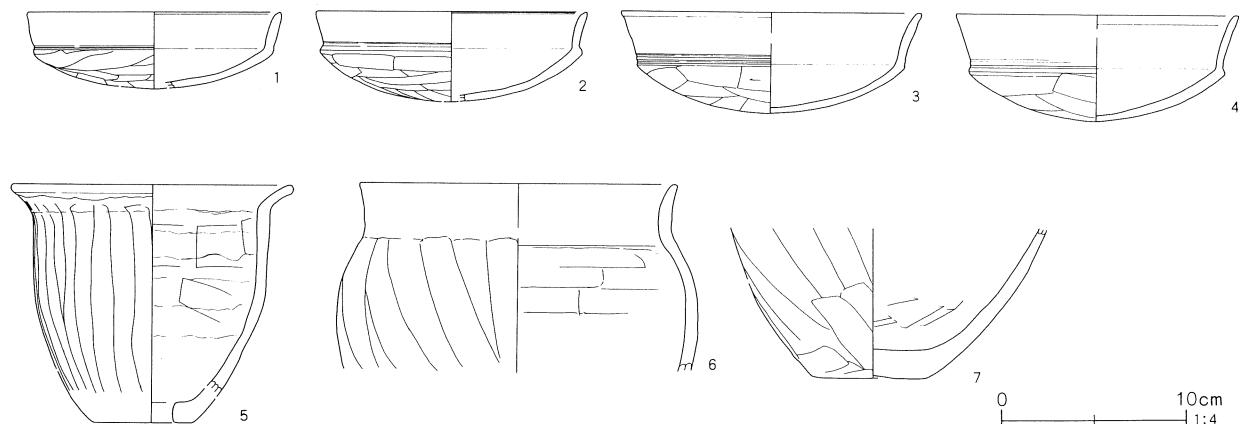
壁の立ち上がりが浅く、遺存状態は良好でない。西側はトレーナーで削平されている。南側も切り合いによって不明瞭であり、第125号住居跡との関連は不明である。

P4とP5との間に、焼土が散っている範囲が検出さ

れた。甕や甌が集中して出土していることから、カマドはこの位置に設けられていたのかもしれない。

ピットは5基検出されたが、本住居跡の柱穴と考えられるのはP1とP2である。P1は直径32cm・深さ43cm、P2は直径25cm・深さ56cmである。P4とP5は本住居跡に伴う確証はない。深さはP4が65cm、P5が34

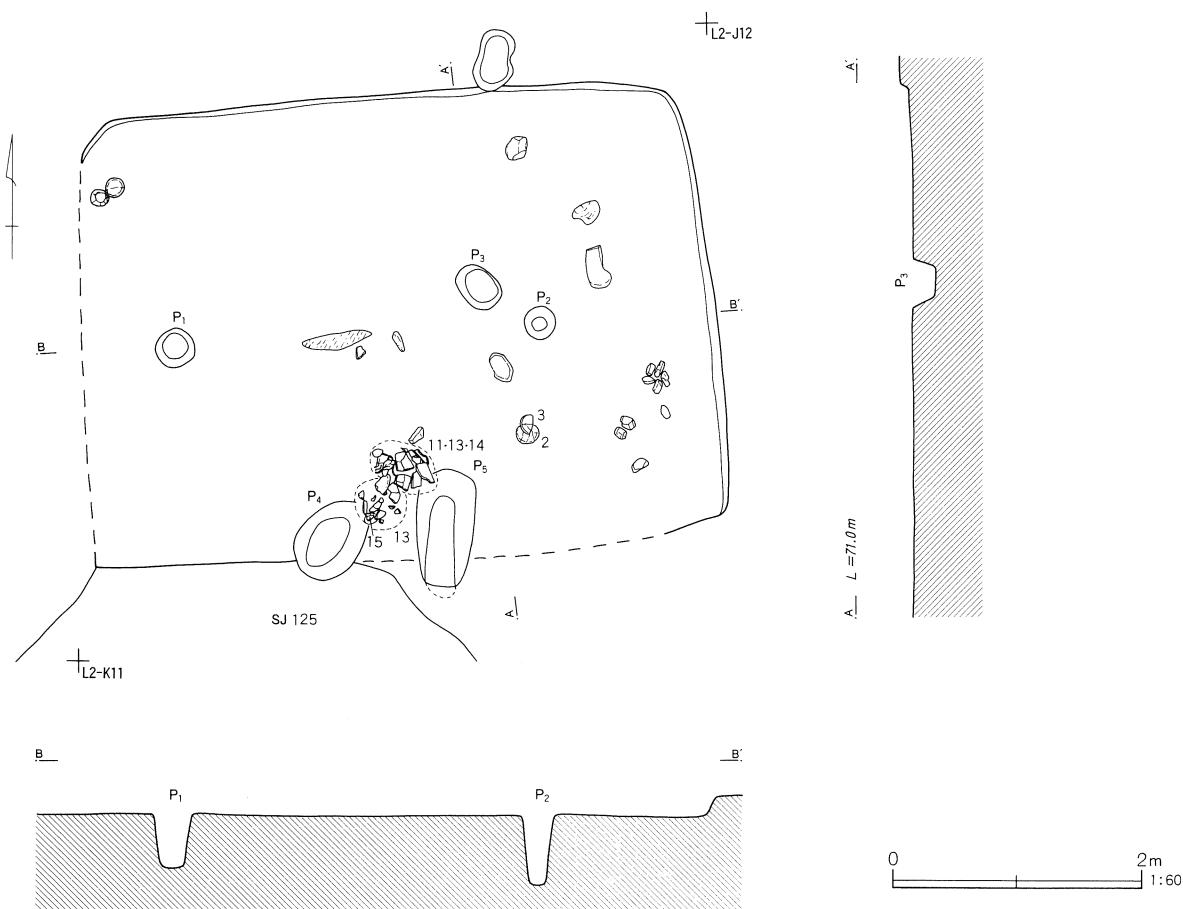
第104図 第122号住居跡出土遺物



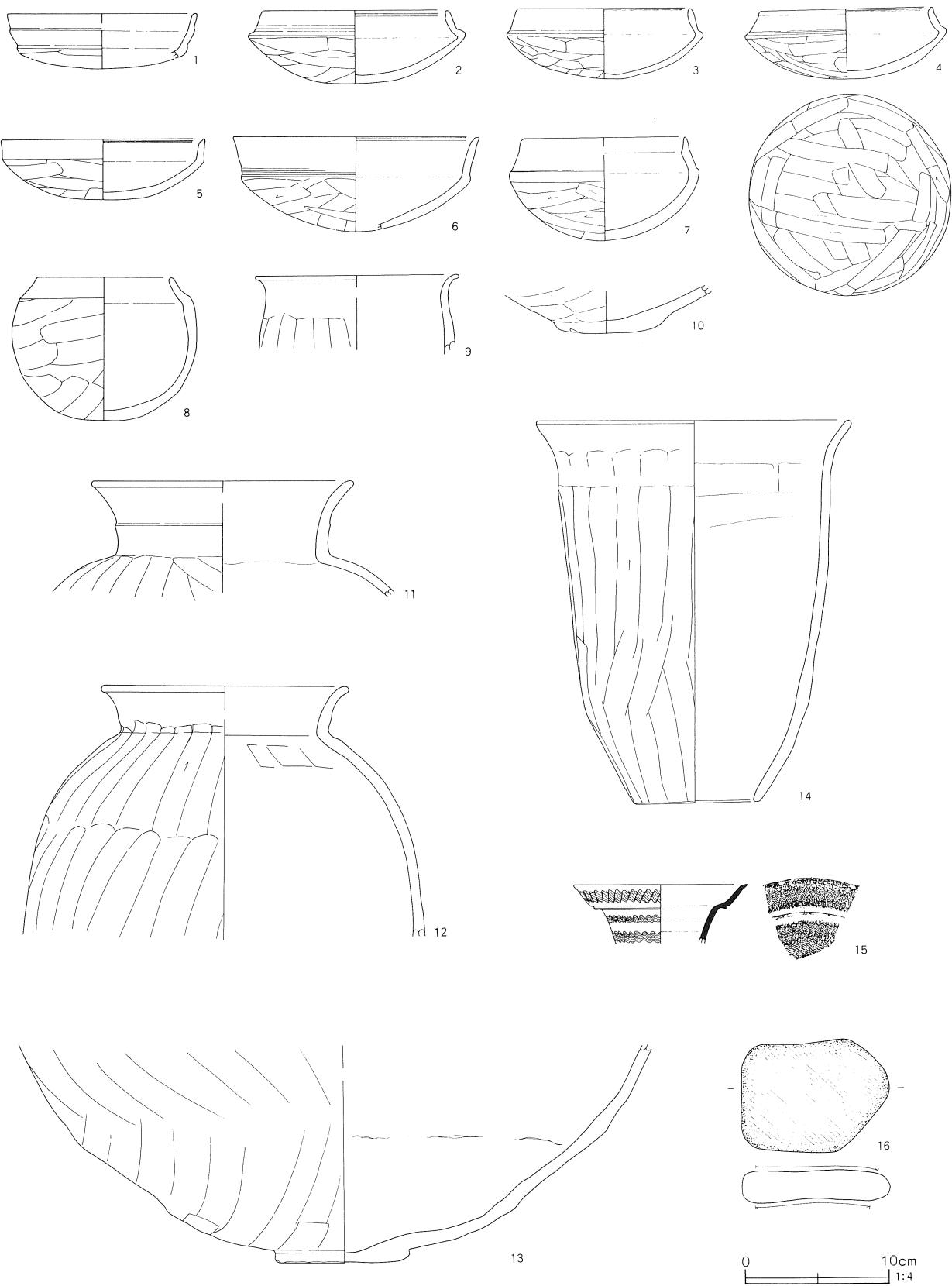
第122号住居跡遺物観察表 (第104図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	13.3	(4.1)		ADF 1	A	B	70	壁溝	器面風化 内・外面一部黒化
2	壺	14.2	(4.8)		AF 1	A	B	60	P4 埋土	外面一部黒化
3	壺	(15.8)	5.4		ADF 1	A	B	25	壁溝	器面風化
4	壺	(15.0)	5.6		ADF 1	A	C	25	埋土	外面一部黒化
5	小形甌	14.6	(11.2)		ADF 2	A	B	90	壁溝	図版65-2
6	甌	(16.6)	(9.9)		ADF 2	A	C	10	埋土	内・外面一部黒化
7	甌		(8.0)	6.1	ADF 2	A	B	20	床直	内・外面一部黒化

第105図 第123号住居跡



第106図 第123号住居跡出土遺物



第123号住居跡遺物観察表（第106図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(13.0)	(3.1)		AD 1	A	B	25	埋土	
2	壺	12.5	5.1		AD F 1	A	F	95	床直	黒化 図版39-2
3	壺	11.8	4.8		A F 2	A	C	90	床直	図版39-3
4	壺	11.8	4.8		A D F 2	A	C	100	埋土	内面、外面一部黒化 図版39-4
5	壺	13.8	4.1		D 1	A	F	50	埋土	
6	壺	(16.8)	(6.4)		A D F 1	A	B	45	埋土	
7	椀	(11.0)	7.1		D F 1	A	B	30	埋土	口唇部面取
8	小形壺	9.0	9.8		F 1	A	C	90	埋土	口縁部内傾 図版62-1
9	小形甕	(13.8)	(5.4)		A D 1	A	C	5	埋土	
10	甕		(3.1)	6.7	D E F 5	A	B	5	埋土	底部破片
11	壺	(17.6)	(7.9)		A D F 2	A	B	5	床直	
12	壺	(16.7)	(17.0)		A D F 2	A	B	15	埋土	
13	壺		(14.9)	8.8	A 1	A	B	30	床直散乱	外面黒斑あり 底部円盤状平底
14	甕	21.2	26.4	8.2	A D F 2	A	B	75	床直	底部一部黒化 図版79-1
15	甕	12.0	(4.1)		D 1	A	H	5	床直	須恵器 口縁部破片 群馬産？
16	すり石	径7.7×10.2cm、重さ297.5g							埋土	すり面2面 砂岩

cmである。

床面は中央部で貼り床が顕著に認められた。

埋土が浅い割に、出土遺物は豊富である。土師器壺・甕・壺・甕の他に、須恵器甕の口縁破片がある。また、床面からは礫が多く出土しており、すり石が1点含まれていた。

第124号住居跡（第107～109図 図版6中）

L2-J12・J 13・K12・K13グリッドに位置する。重複関係は第131号住居跡を切り、第132号住居跡に切られている。形状は方形を呈する。長辺×短辺は5.0×4.62m、深さは22cmである。黒褐色土が主体であり、短期間の埋没が想定される。カマドの傾きはN-42°-Eである。

カマドは北東壁中央に構築されている。燃焼部はほとんど掘り込みがなく、底面は平らである。煙道部への移行は、住居壁の立ち上がりと同一であり、壁に煙道を設ける形になっている。煙道部は長さ130cm、幅20cmで、煙り出し口の底面はわずかに掘り込まれている。袖部はローム地山を基礎に、砂質土で構築されている。左側の袖は壊されたものか検出できなかった。カマド周辺の床面直上には、薄く炭化物の層が堆積している。この層が、袖の下面に入り込んでおり、袖が何度も作り直されていることがわかる。被熱面は煙道部の壁に

顕著であり、燃焼部には認められなかった。

壁溝はカマドの構築されている北東壁には認められなかった。幅5～10cm、深さ4～10cmである。

ピットは4基確認された。すべて柱穴と考えられるが、P2は深さ21cmと浅く、壁に寄ったその位置や埋土の状況から、他の柱穴とは様相を異にしている。P1-P4、P3-P4間はそれぞれ2.6mである。北東側の同間隔にあたる所を精査したが、柱穴は発見できなかった。

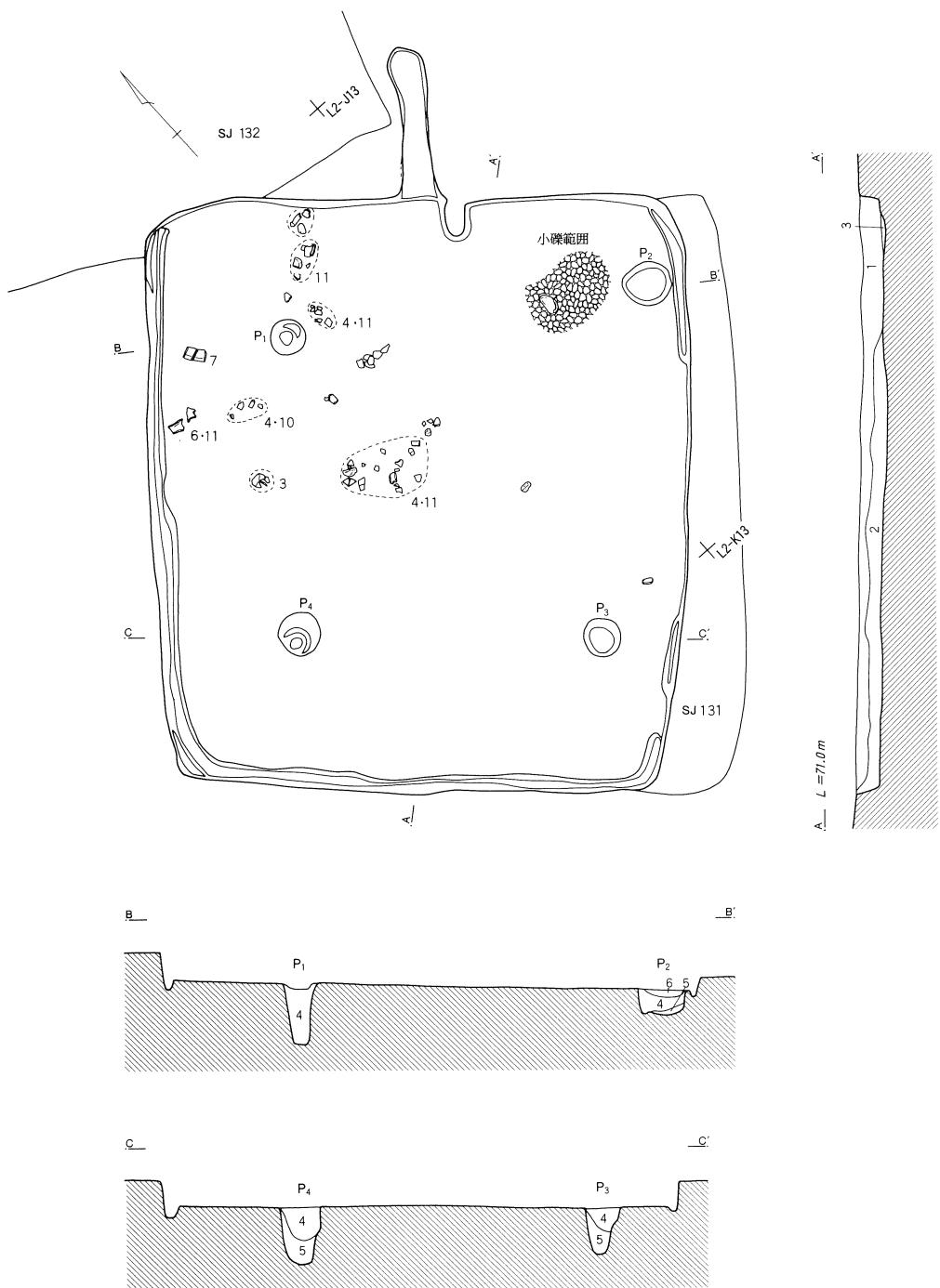
壁の立ち上がりは明瞭で、床には貼り床が施されている。貼り床は、カマド手前から中央部にかけては厚みをもつ。北東コーナー近くには、細かい礫が集中している箇所が検出された。小礫は重なっておらず、床面に敷かれていたものと考えられる。

遺物は、カマド燃焼部からP1周辺にかけて、土師器甕類が散乱して出土した。埋土からは土師器壺や鉄鎌が出土している。また、すり石も1点出土している。

第125号住居跡（第110図）

L2-J10・J11・K10・K11グリッドに位置する。床面は削平されており、掘形によって、規模のみが把握された住居跡である。平面プランも他の住居跡との切り合いや、トレンチによって、明確にできなかった。重複関係も定かではないが、第130号住居跡に切られ、第123号住居跡を切っていると推定される。形状は長

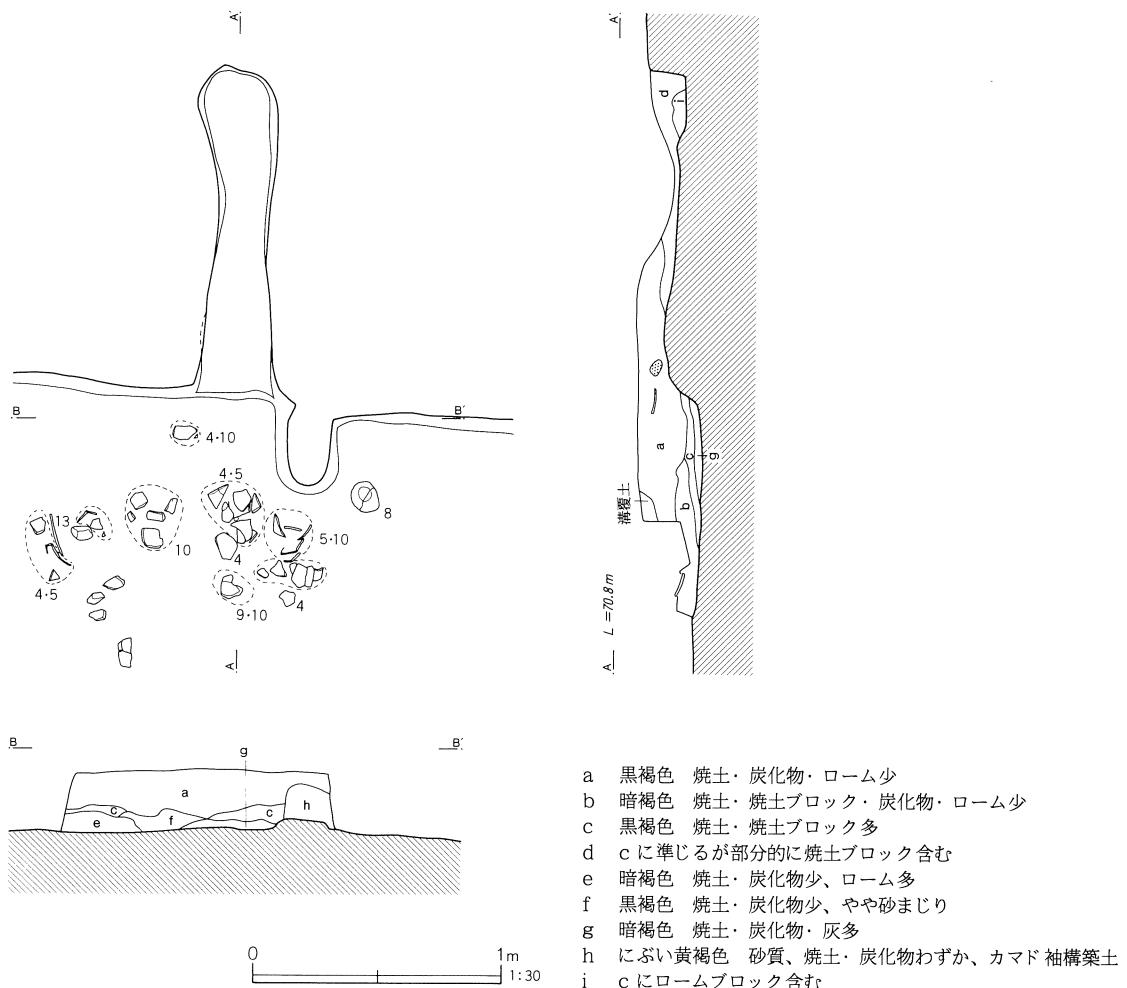
第107図 第124号住居跡



- 1 黒褐色 焼土・ローム・炭化物均等に少
 2 黒褐色 焼土ブロックわずか、ロームブロック含む
 3 黒色 焼土・炭化物・灰多
 4 黒褐色 焼土・炭化物わずか
 5 暗褐色 ローム多
 6 暗褐色 焼土・炭化物多、ローム少

0 2m 1:60

第108図 第124号住居跡カマド



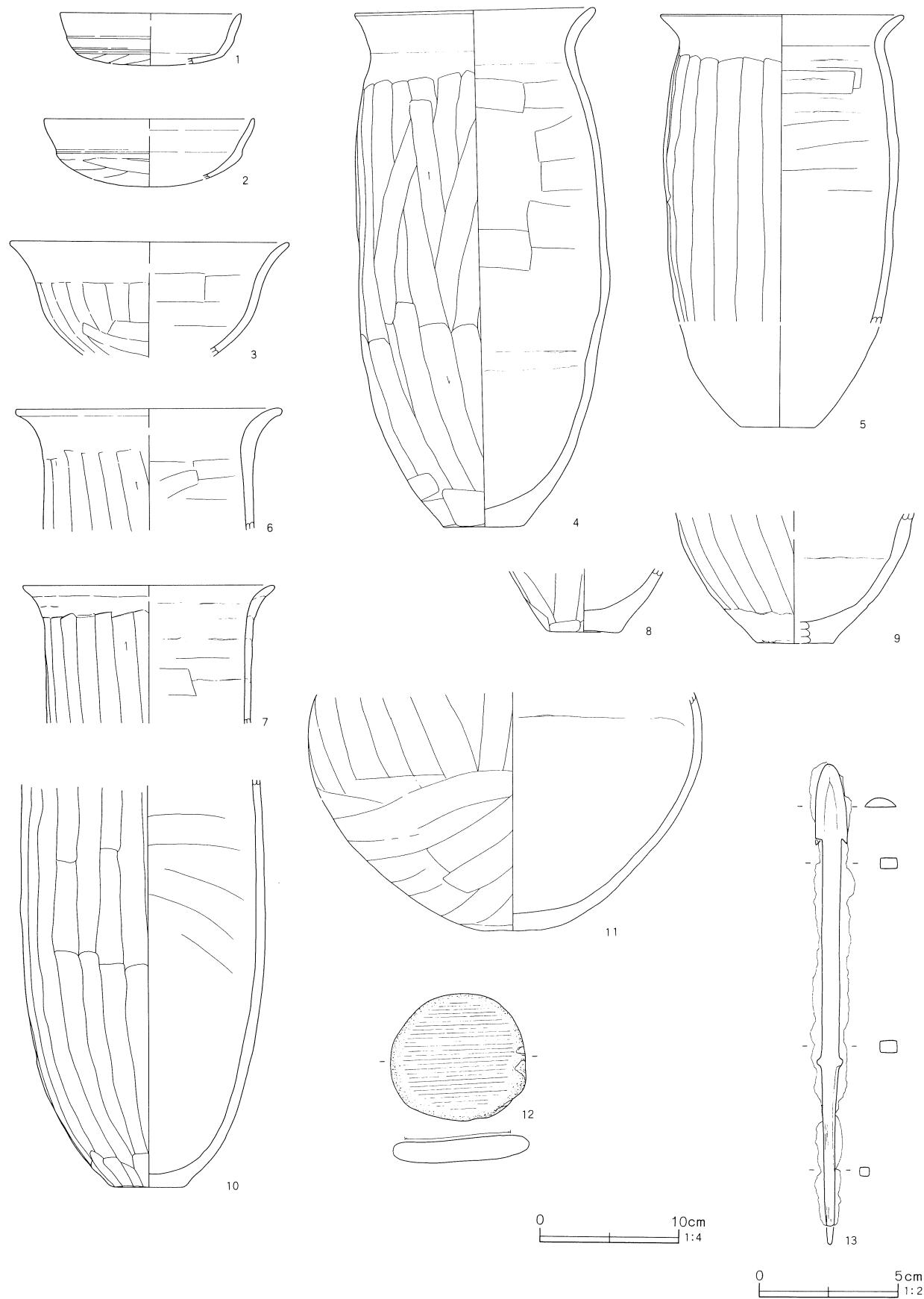
第124号住居跡遺物観察表（第109図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(12.8)	(3.6)		ADF 1	A	B	10	カマド埋土	
2	壺	(14.8)	(4.2)		ADF 1	A	B	15	埋土	内・外面一部黒化
3	鉢	(19.6)	(8.2)		ADF 2	B	B	20	床直	
4	甕	16.8	36.9	5.7	ADF 5	A	C	80	床直散乱	器面風化 外面一部黒化 図版72-1
5	甕	17.0	(21.9)		ADF 5	A	B	40	カマド	外面一部黒化
6	甕	(18.6)	(8.7)		ADEF 5	A	C	20	床直	器面風化顯著
7	甕	(17.6)	(9.8)		ADEF 5	A	C	15	床直	内・外面一部黒化
8	甕		(4.6)	5.0	ADF 2	A	B	5	カマド脇	底部破片
9	甕		(9.3)	(5.3)	ADEF 5	B	C	10	カマド	
10	甕		(29.1)	5.0	ADF 5	A	B	50	カマド	内・外面一部黒化
11	壺		(16.9)	7.6	ADF 5	A	B	30	床面散乱	器面風化 外面一部黒化
12	すり石	径9.0×9.6cm、重さ250.8g							埋土	すり面1面 砂岩
13	鉄鎌	現長16.4cm、刃部長2.3cm、頸部幅0.4×0.6cm、重さ25.1g							埋土	長頸鎌 片丸造 茎部先端欠損

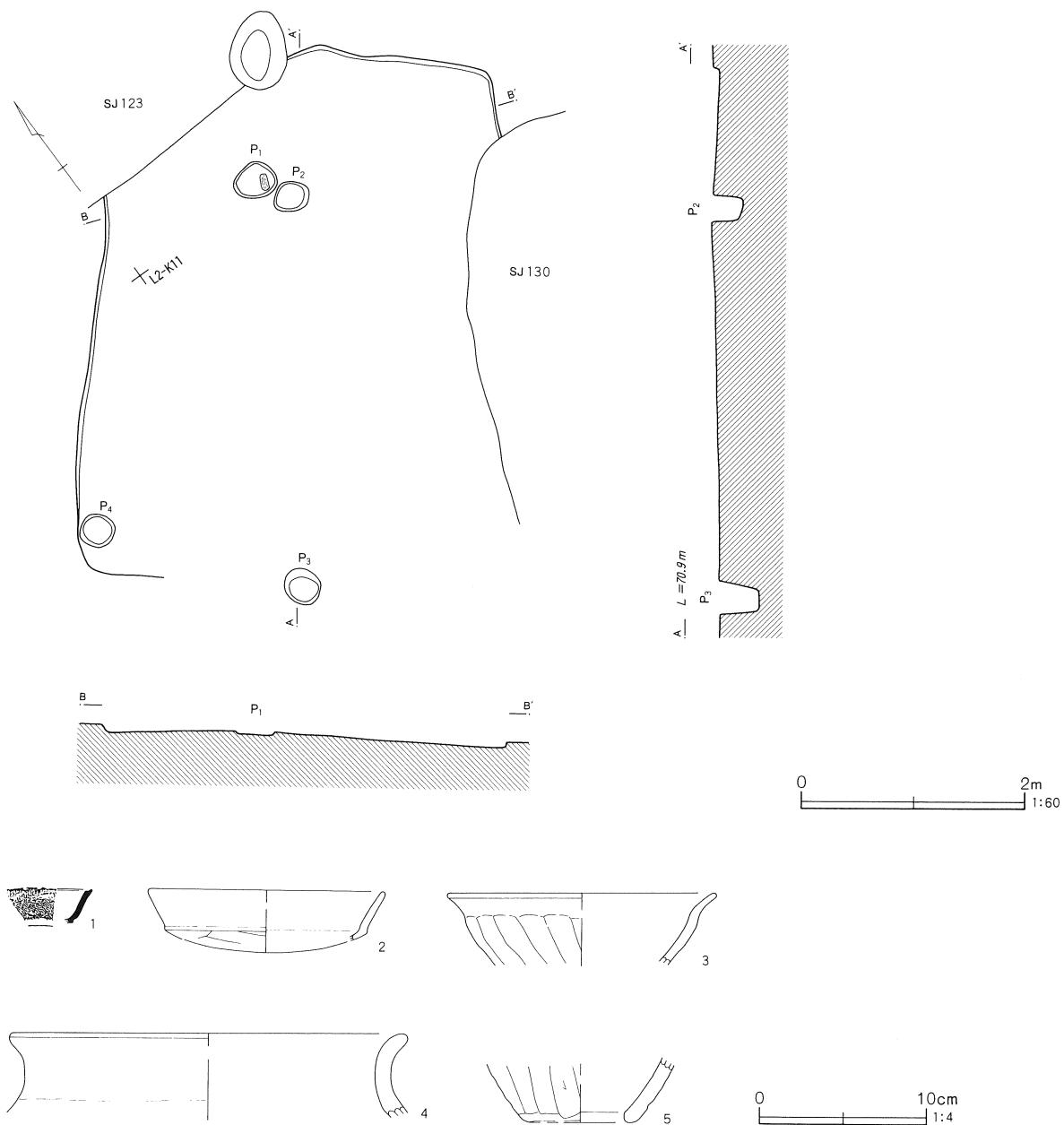
方形を呈し、長辺×短辺が4.7×3.4mになると思われる。カマド等の施設は明らかでない。ピットは4基検出された。P4は深さ15cmである。いずれも本住居跡に伴

う確証はない。出土遺物は破片が多く、床直の位置からは出土していない。土師器壺・甕・甌などがある。

第109図 第124号住居跡出土遺物



第110図 第125号住居跡・出土遺物



第125号住居跡遺物観察表（第110図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	甌		(3.0)		D 1	A	H	5	埋土	須恵器 口縁部破片 歪みあり 群馬産?
2	壺	(13.8)	(2.9)		A D F 1	A	B	10	埋土	器面風化顯著
3	椀	15.8	(4.2)		A D F 1	A	C	5	埋土	内面黒化
4	甕	(23.0)	(5.0)		A D F 2	A	C	5	埋土	内面黒化 口縁部破片
5	甌		(3.9)	5.9	A D F 5	A	C	5	埋土	底部破片

第126号住居跡（第111、112図 図版6下）

L2-K11・K12・L10～L12 グリッドに位置する。

重複関係は、第118号住居跡に切られ、第130号住居跡を切っている。形状は方形を呈する。長辺×短辺は

4.3×4.18、深さは14cmである。カマドの傾きはN-58°-Eである。

カマドは北東壁やや南寄りに構築されている。燃焼部の形態は橢円形で、規模は75×45cmである。掘り込

みはあまり深くはないが明瞭で、底面はほぼ平らである。燃焼部から煙道部への移行はなだらかである。煙道部は長さ118cmで、煙出し口へかけて先がすぼまる。袖部は壊されているため判然としないが、ロームを基に砂質土で構築されたものと考えられる。被熱面は袖部から煙道部にかけての内壁に顕著で、燃焼部底面は若干被熱している。また、埋土下層には炭化物や灰の堆積が多くみられた。

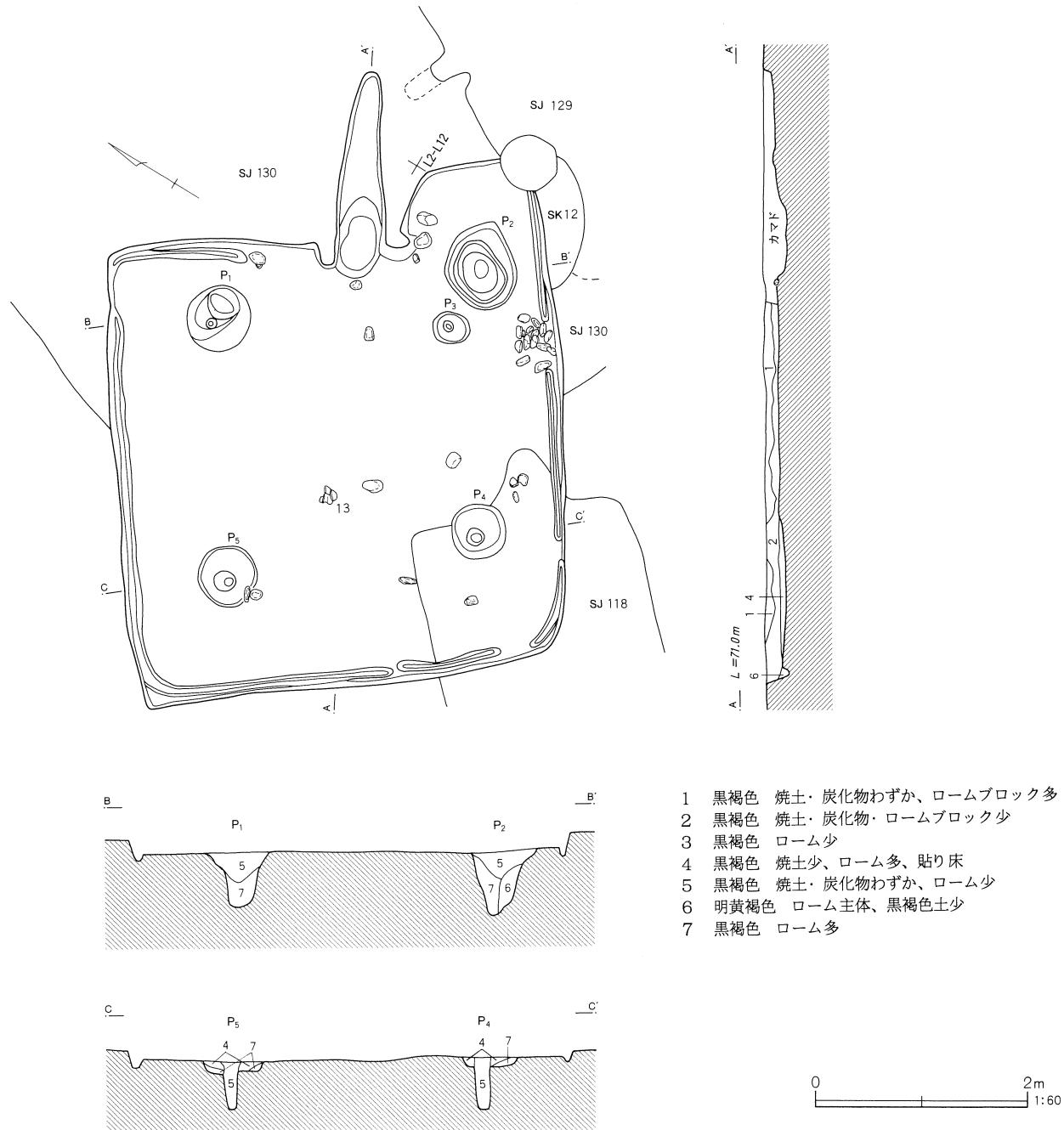
壁溝は一部を除いてほぼ全周する。幅10cm前後、深

さは5~8cmと深く、しっかりととした掘り込みをもつ。

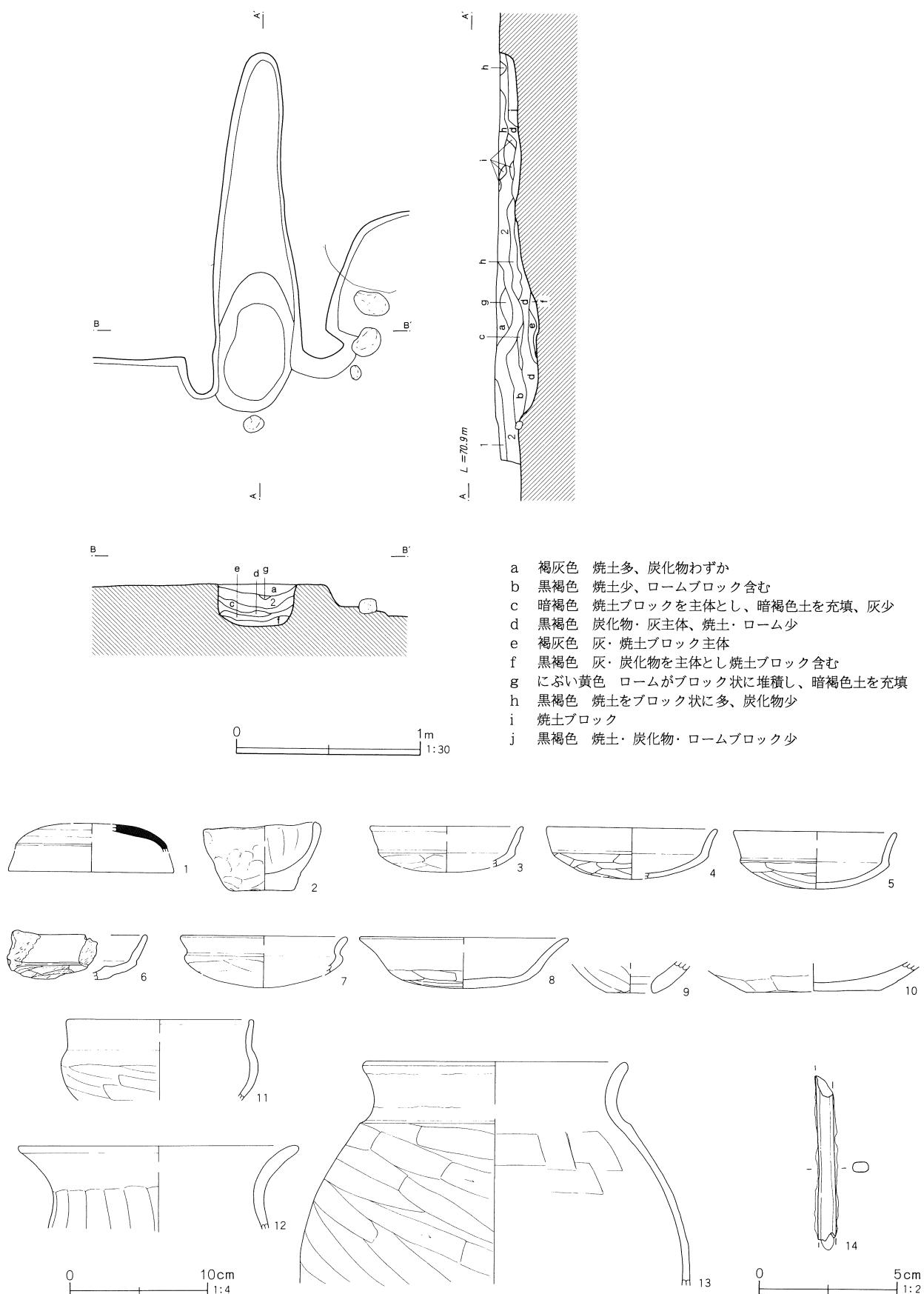
ピットは5基検出され、すべて柱穴になるものと考えられる。いずれも深さが50cm以上と深く、P3も深さ55cmである。P4とP5は柱痕が明瞭である。位置的にP2は貯蔵穴とも考えられるが、掘り込みの深さから柱穴と判断した。P2とP3の位置のずれは建て替えの結果によるものと考えることもできる。

全体に遺存状態は良好で、壁の掘り込みも深く、床には貼り床がほぼ全面に認められた。

第111図 第126号住居跡



第112図 第126号住居跡カマド・出土遺物



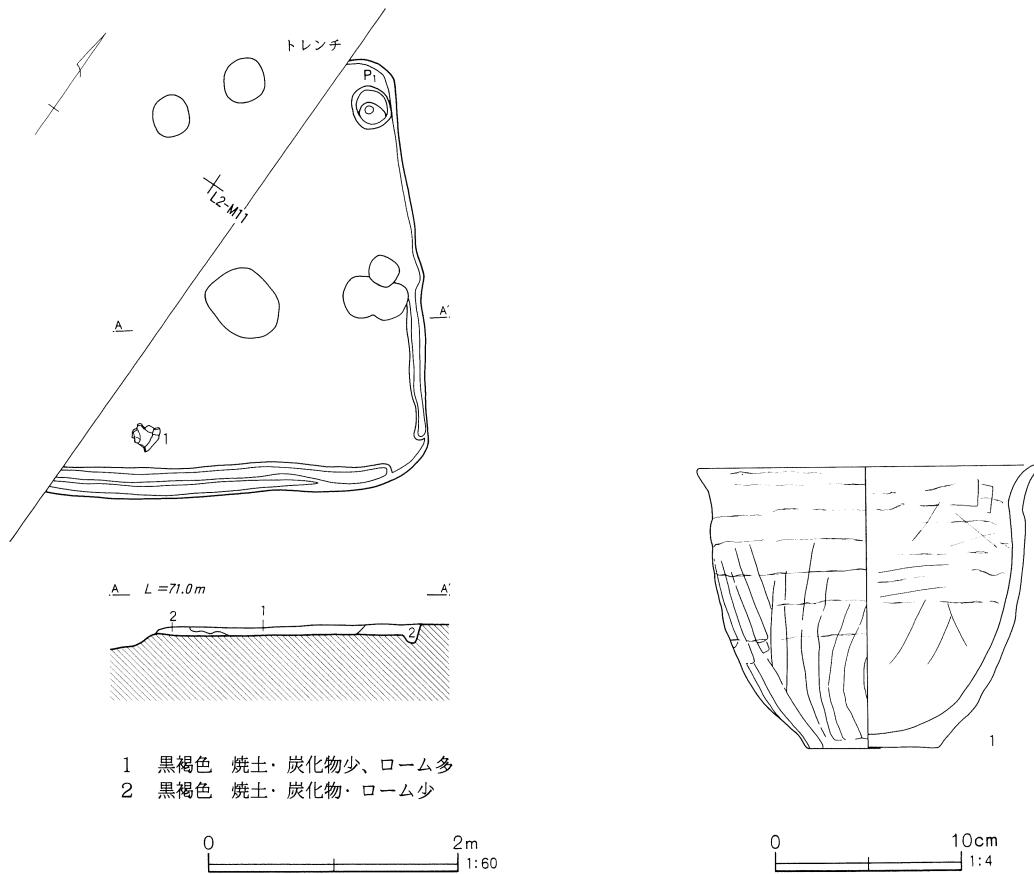
第126号住居跡遺物観察表（第112図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	蓋		(2.0)		D 1	A	I	5	埋土	須恵器 体部破片 群馬産?
2	ミニチュア	(7.9)	4.9	4.6	A D F 1	A	C	50	埋土	手づくね
3	壺	(10.8)	(3.3)		D F 2	A	C	10	埋土	内面一部黒化
4	壺	12.1	(3.6)		A D F 1	A	B	80	埋土	図版39-5
5	壺	(11.4)	(4.1)		D F 1	A	C	70	埋土	外面黒化
6	壺		(3.2)		D 1	B	B	10	埋土	高温被熱 須恵質
7	壺	(11.7)	(2.8)		A D F 1	A	B	10	埋土	
8	壺	(14.8)	(3.6)		D F 1	A	B	60	埋土	器面風化 内面黒化 図版39-6
9	甌		(2.3)	3.4	A D F 1	A	B	5	埋土	底部破片 外面黒化
10	甌		(2.0)	9.5	A D F 1	A	B	5	カマド埋土	外面一部黒化
11	椀	(13.1)	(5.8)		A D 1	A	B	10	埋土	器面風化顯著
12	甌	(19.6)	(6.1)		A D F 1	A	C	5	埋土	口縁部破片
13	甌	(18.4)	(16.0)		A D F 5	A	B	10	床直	外面一部黒化
14	鉄製品	現長6.3cm、幅0.4×0.6cm、重さ3.1g							埋土	丸棒状品 用途不明

出土遺物の多くは埋土上層から出土した。破片が多い。土師器壺・甌・甌の他に、ミニチュア土器や須恵器蓋、鉄製品が出土している。また、東南壁ピット寄

りの床面から、自然石が15個集中して出土した。使用痕は認められなかったが、編物石の可能性がある。

第113図 第127号住居跡・出土遺物



第127号住居跡遺物観察表（第113図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	小形甌	17.8	15.0	6.9	A D F 2	A	B	60	床直	内面、外面一部黒化 図版65-3

第127号住居跡（第113図）

L2—L11・M11 グリッドに位置する。東半分がトレンチによって削平されている。重複関係は、第118号住居跡に切られ、第128号住居跡を切っているようである。形状は方形を呈するものと思われる。北東壁の長さは3.36m、深さは9cmである。

壁溝は部分的に検出された。幅16cm、深さ6cm前後である。カマドや貯蔵穴等の施設は検出されなかった。ピットの多くは新しいもので、唯一P1が本住居跡に伴うものと推定される。深さは37cmである。床面には一部貼り床が認められた。

遺物は、埋土から破片が少量出土したに過ぎない。土師器小形甕が1点床直埋土から出土した。

L2—K12・L12 グリッドに位置する。重複関係は、第23号溝跡・第12号土壙に切られ、第130号住居跡を切っている。第116号住居跡との新旧関係は不明である。調査当初はプランを上面で確認できず、掘り下げ途中でカマドが検出されたため住居跡としたものである。そのため、東側の壁の立ち上がりをおさえることができなかった。形状は方形を呈するものと思われ、長辺×短辺は推定4.6×4.26mである。カマドの傾きはN—62°—Wである。

カマドはかろうじて燃焼部の一部が確認された。北西壁のほぼ中央に位置する。燃焼部の掘り込みは浅く、皿状である。袖部は明瞭でなく、一部地山の掘り残しが観察された。煙道部は削平されているが、焼土が散っていた範囲からすると、燃焼部の掘り込みから少なくともおよそ30cmまでは延びていたと考えられる。被熱面は燃焼部底面および内壁に認められた。

浅い土壙が2基検出されたが、本住居跡に伴う確証はない。規模はともに70×50cmの楕円形で、深さは10cm前後である。床面はあまり明瞭でない。

遺物は、埋土中から土師器壺・甕の小片が出土したに過ぎない。

第128号住居跡（第114、115図 図版7上）

L2—L11・M11 グリッドに位置する。第118・127号の2軒の住居跡に切られており、全体の1/3が検出された。復元すると、およそ2m四方の小さな住居跡になると推定される。埋土の深さは5cmである。カマドの傾きはN—98°—Eである。

カマドは東壁中央に燃焼部のみ検出された。底面は小さな凹凸をもちらん徐々に煙道部の方向に浅くなっていく。煙道部は削平されたものと推定される。袖部は地山の掘り残しだけである。被熱面は燃焼部左内壁に認められたが、底面ではなく、全体にあまり熱を受けていない。

貯蔵穴はカマド両脇に2基検出された。当初は他の遺構と考えられたが、埋土の状況も共通しており、ともに本住居跡に伴うものと判断した。貯蔵穴1は不整楕円形を呈し、規模は62×35cm、深さは10cmである。貯蔵穴2は直径62cmほどの円形で、深さは58cmである。底は平らでバケツ状に掘り込まれている。

出土遺物は多い。貯蔵穴1の埋土から土師器甕が、貯蔵穴2の落ち際、カマド脇からは土師器壺や甕、甕等が出土した。壺は2点重なって出土している。

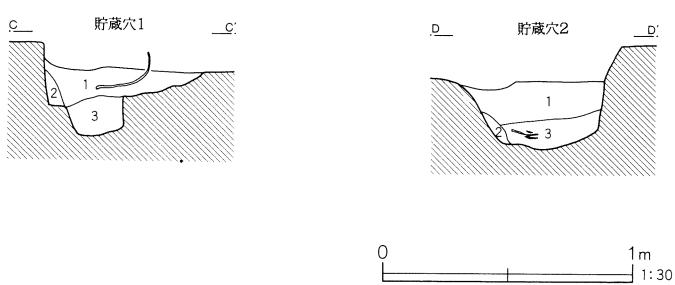
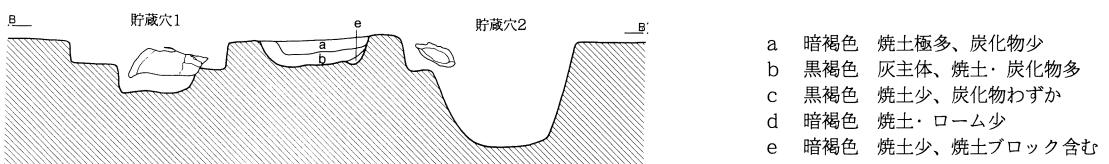
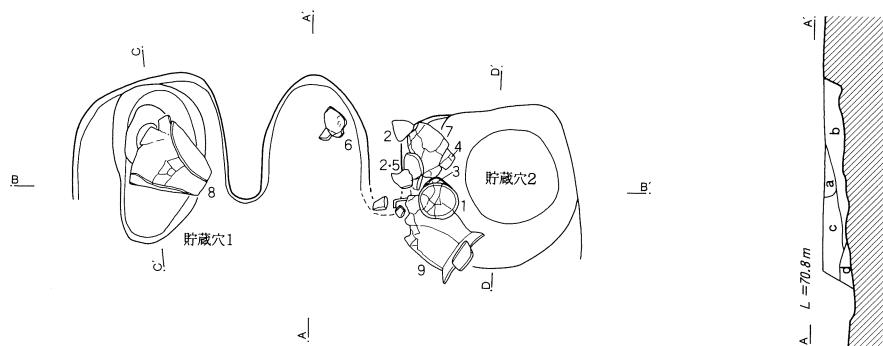
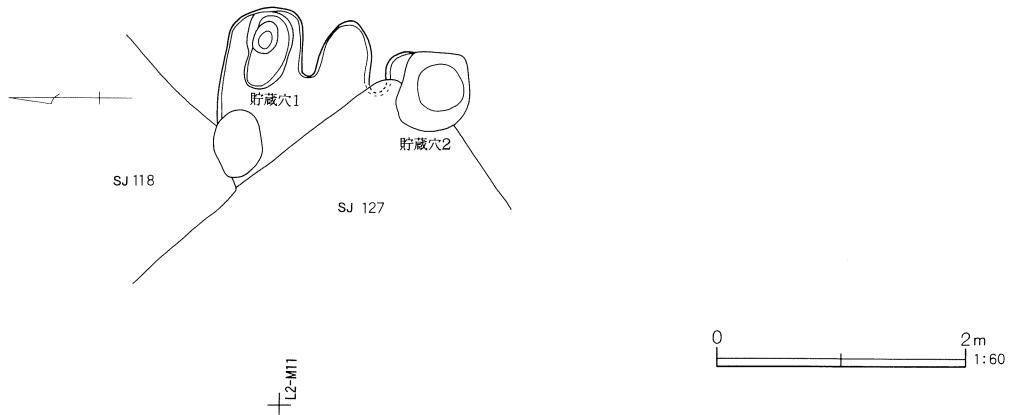
第130号住居跡（第117、118図）

L2—K11・K12 グリッドに位置する。重複関係は、第126・129号住居跡・第12号土壙に切られ、第138号住居跡を切っている。形状は方形を呈すると思われるが、壁の立ち上がりは東側で弱く、平面プランは推定である。長辺×短辺は5.21×5.5m、深さは8cmである。カマドの傾きはN—27°—Eである。

本住居跡のカマドは、第138号住居跡の埋土面に構築されており、確認調査における掘り下げのため、大半が失われてしまった。北壁ほぼ中央に構築されている。被熱した燃焼部の底面とわずかな埋土のみが残存していた。燃焼部および煙道部の形状は推定である。燃焼部は推定楕円形で、底面はよく焼けており、被熱面の断面から、皿状に掘り込まれていたと考えられる。袖は明瞭に検出できなかったが、若干の砂質土ブロック

第129号住居跡（第116図）

第114図 第128号住居跡・カマド



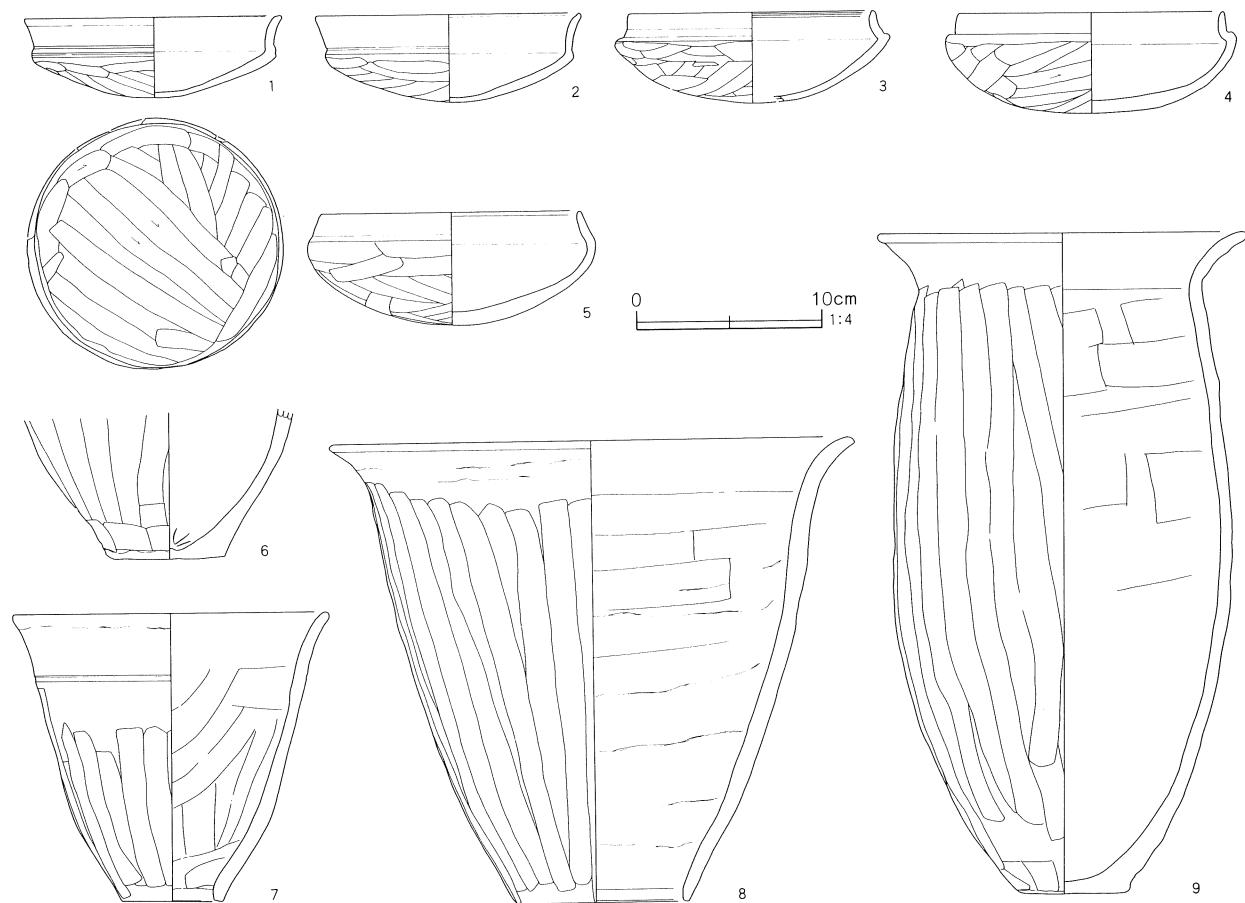
貯蔵穴1

- 1 黒褐色 焼土・炭化物わずか、ロームブロック少
- 2 黒褐色 1よりロームブロック多
- 3 黒褐色 焼土・ローム少、炭化物多

貯蔵穴2

- 1 黒褐色 焼土・炭化物少、ロームわずか
- 2 黒褐色 1にロームブロック混入
- 3 黒褐色 焼土・ローム少、炭化物多

第115図 第128号住居跡出土遺物



第128号住居跡遺物観察表（第115図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	13.5	4.3		AD 1	A	B	95	カマド脇	図版39-7
2	壺	13.9	4.7		F 1	A	B	70	カマド脇	図版39-8
3	壺	12.9	4.8		F 1	A	B	75	カマド脇	外面黒化 図版39-9
4	壺	14.0	5.3		ADF 5	A	B	75	カマド脇	黒斑あり
5	壺	13.6	6.1		ADF 2	A	B	85	カマド脇	外面一部黒化 図版39-10
6	甕		(7.9)	6.3	ADF 2	A	B	10	カマド	内・外面一部黒化
7	小形甕	16.5	15.4	5.3	AD 2	A	B	40	カマド脇	器面粘土付着
8	甕	27.2	24.6	9.0	ADF 2	A	C	85	貯蔵穴 1	内・外面一部黒化 図版69-3
9	甕	19.2	35.2	5.6	AD 2	A	B	80	カマド脇	外面一部黒化 図版72-2

第129号住居跡遺物観察表（第116図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(11.9)	(4.1)		F 1	A	B	35	埋土	器面風化顯著
2	壺	(12.7)	(3.6)		F 1	A	B	15	埋土	器面風化
3	甕		(2.9)	3.2	DF 1	A	B	5	埋土	底部破片 内面黒化

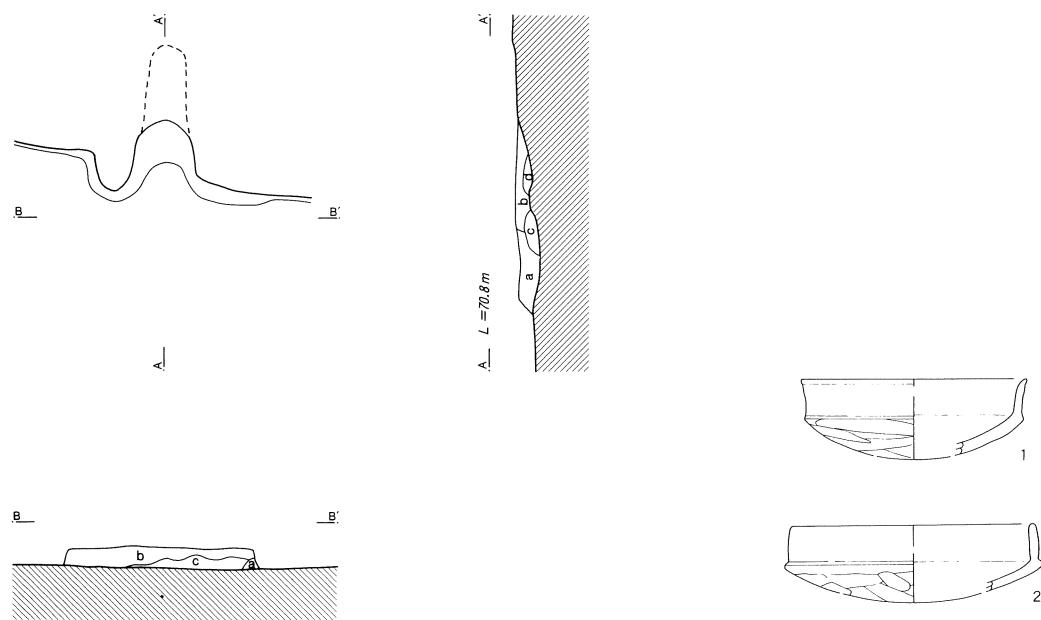
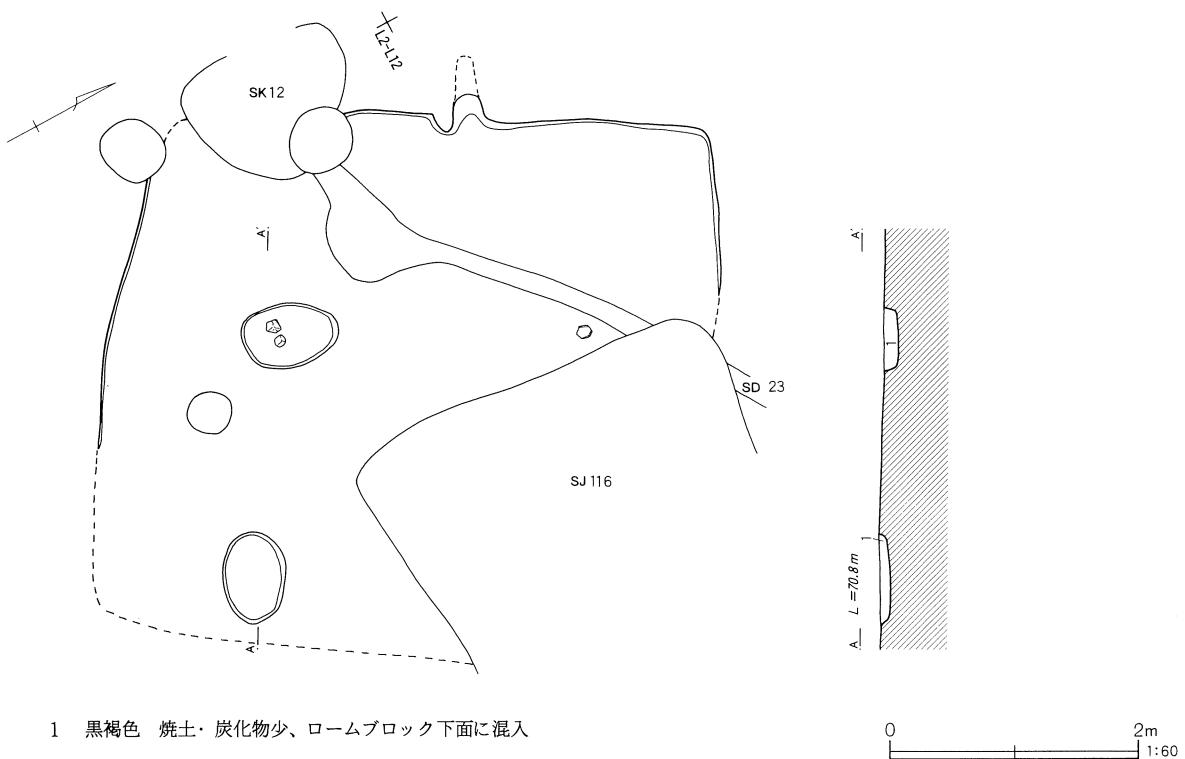
クが埋土に含まれていたため、砂質土で構築されていたと推定される。

壁溝は東壁から北壁カマドまでの範囲に検出された。幅は10~20cm、深さは8cm前後である。本住居跡

に伴うと考えられるピットは1基で、東南コーナー近くに検出された。直径35cm、深さは16cm程度である。柱穴ではない。

床面には貼り床がされており、中央部でとくに顯著

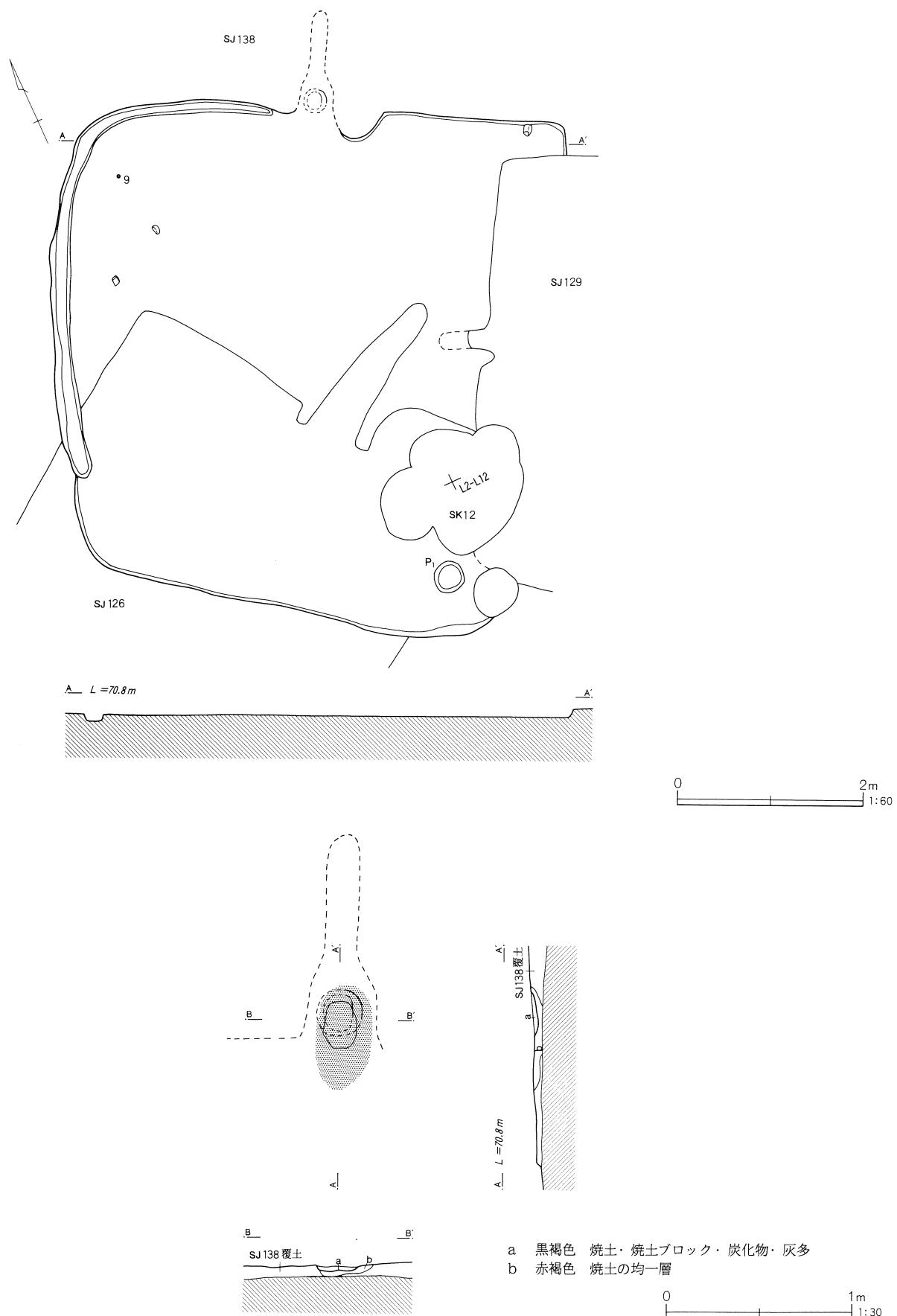
第116図 第129号住居跡・カマド・出土遺物



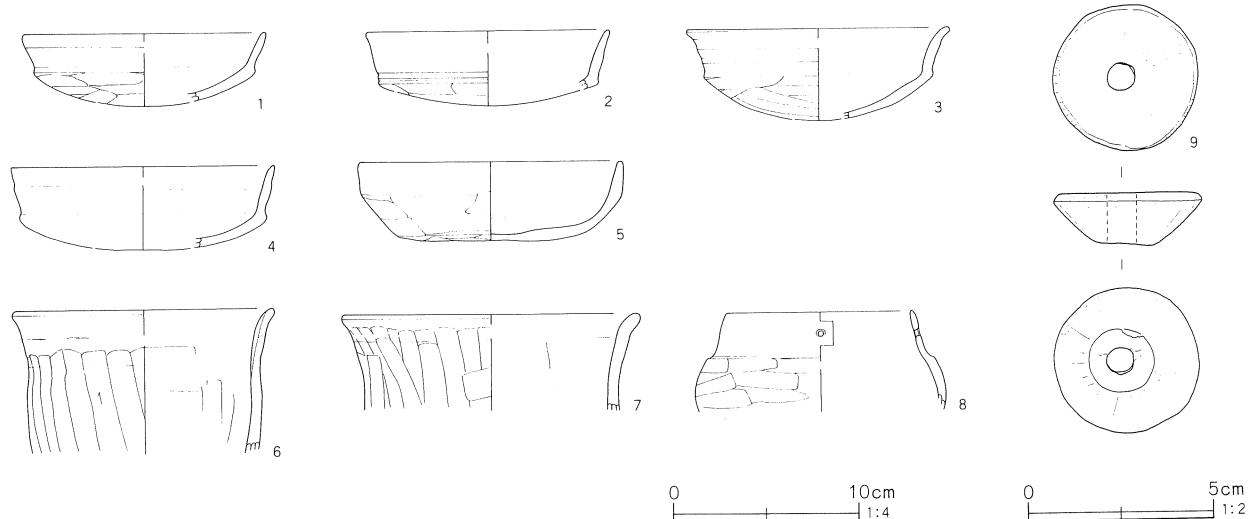
- a 黒褐色 焼土・ローム少、部分的にやや砂majiri
 - b 暗褐色 焼土多、焼土ブロック・炭化物・ロームブロック少
 - c 暗褐色 焼土・炭化物・ロームブロック少、焼土ブロック多、灰若干
 - d 暗褐色 焼土・炭化物多、灰含む



第117図 第130号住居跡・カマド



第118図 第130号住居跡出土遺物



第130号住居跡遺物観察表（第118図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(12.8)	(3.6)		A D E F 5	A	C	15	埋土	器面風化顯著
2	壺	(12.8)	(3.2)		A F 2	A	B	10	埋土	器面風化顯著
3	壺	(13.8)	(4.8)		A D F 1	A	B	20	埋土	器面風化顯著 内面黒化
4	壺	(13.9)	(4.3)		A D F 2	A	C	15	埋土	外面一部黒化
5	壺	13.7	4.3		F 1	A	B	70	埋土	器面風化 図版40-1
6	小形甕	(13.6)	(7.7)		A D F 2	A	B	10	埋土	内面一部黒化
7	小形甕	(15.5)	(5.2)		A D F 1	A	C	5	埋土	内面黒化
8	小形壺	(9.7)	(5.3)		A D F 1	A	B	5	埋土	口縁部補修孔あり
9	紡錘車	上径4.0cm、下径1.4cm、厚さ1.4cm、孔径0.8cm、重さ24.7g				床直				滑石製

である。

遺物の出土量は少ない。破片が多く、土師器壺・甕などがある。須恵器蓋?の破片も出土しているが、細片のため図示できなかった。紡錘車が北東コーナー近くの床面直上から出土している。

第131号住居跡（第119図）

L2-J12・J13グリッドに位置する。東南壁の長さは5.04m、深さは6cm、埋土は黒褐色土の一層である。焼土をわずかに含む。当初は第124住居跡の単独1軒と考え掘り下げたが、第131号住居跡の床面において、第124号住居跡の東側プランが確認されたため、別住居とした。第124号住居跡に切られるものと判断される。

壁溝は検出された壁ほとんどに巡っている。幅10~20cm、深さ7cm前後である。床面は比較的しっかりと検出された。

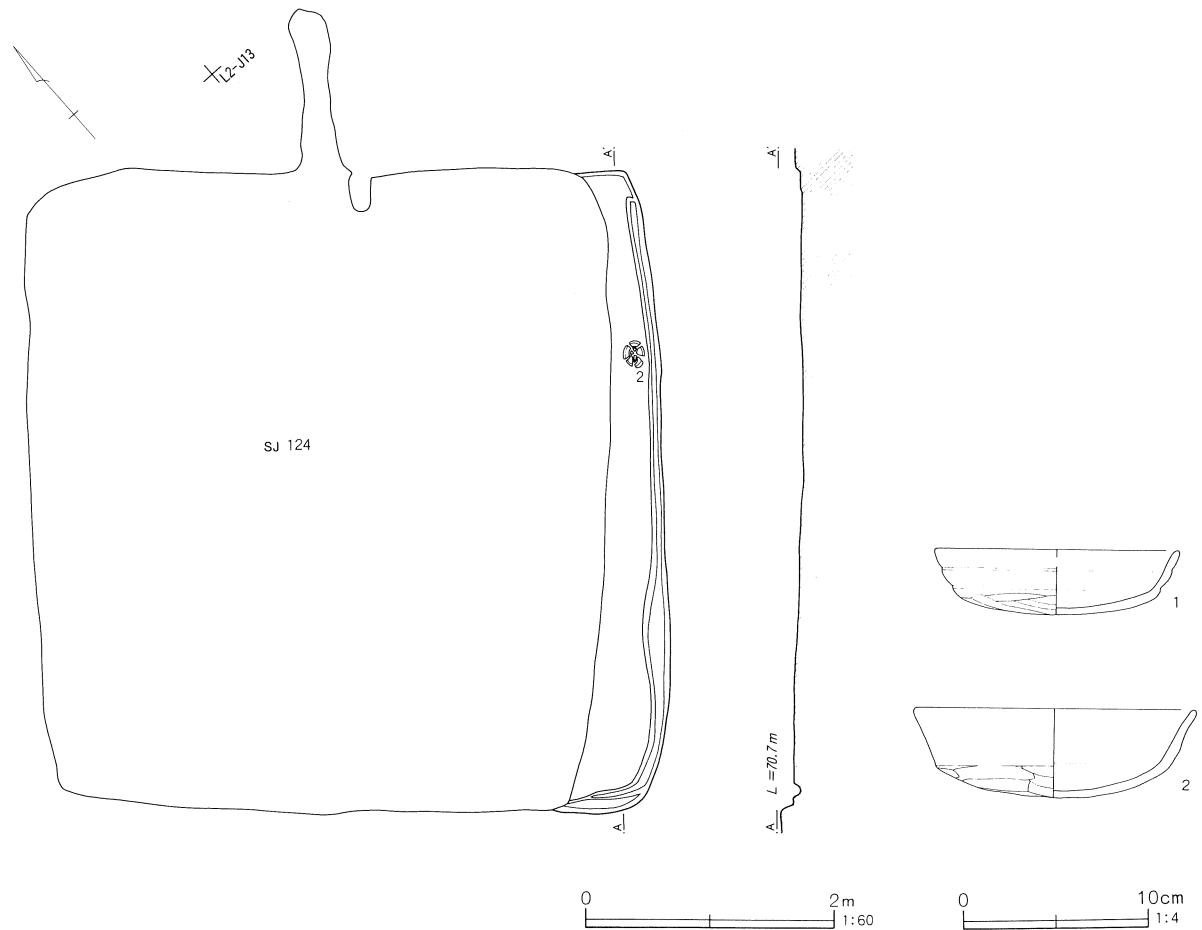
床面直上から土師器壺が出土した。埋土中の出土遺物は少ない。

第132号住居跡（第120、121図 図版7中）

L2-I12・I13・J12・J13グリッドに位置する。第124号・第249号住居跡を切っている。形状は方形を呈する。長辺×短辺4.19×3.6m、深さは21cmである。埋土はほぼ一層で、人為的もしくは洪水などにより短期間に埋没したものと考えられる。カマドの傾きはN-67°-Wである。

カマドは西壁中央に構築されている。燃焼部の形態は細長く、規模は88×35cmである。底面はゆるやかに浅く掘り込まれている。煙道部へは高い段を境として移行する。煙道部は削平を受け、一部が残っているものと考えられる。袖部は基部を地山とし、黄褐色砂質土の混合土で構築されている。埋土に同様の砂質土がブロック状に含まれており、天井部が崩落したものと

第119図 第131号住居跡・出土遺物



第131号住居跡遺物観察表 (第119図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(12.8)	3.4		ADF 1	A	C	30	埋土	器面風化顯著 内面一部黒化 図版40-2
2	壺	14.8	4.7		ADF 2	A	C	100	床直	

推定される。被熱面は袖部から燃焼部にかけての内壁上面で著しくみられ、燃焼部底面はあまり焼けていない。支脚には自然石が使用されていた。

ピットは4基検出されたが、P2は深さが5cmと浅く、柱穴とは考えにくい。この位置に柱穴と考えられるピットは検出されなかった。

掘り込みはしっかりとしており、明瞭である。床面は踏みしめられているが、貼り床は存在しない。

主な出土遺物には土師器壺・甕がある。埋土上～中位にかけて出土したものがほとんどである。土師器小形甕の胴部も出土しているが図示できなかった。カマド煙道部先端から出土した須恵器盤(10)は混入遺物と推定される。

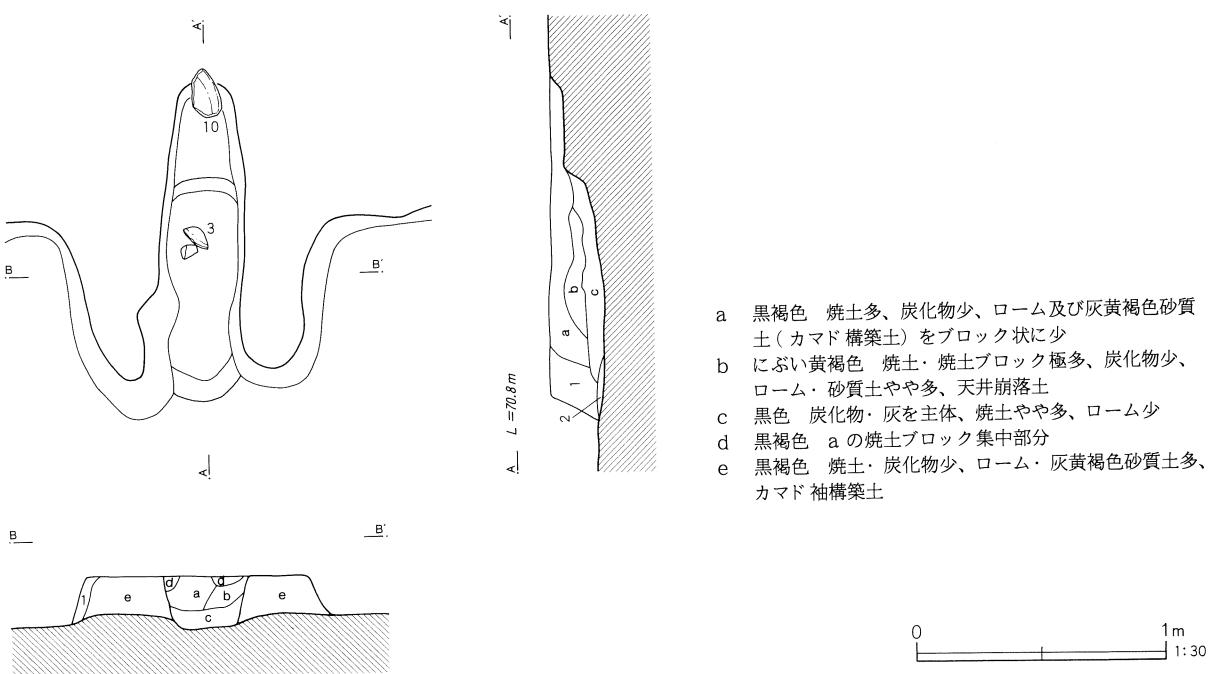
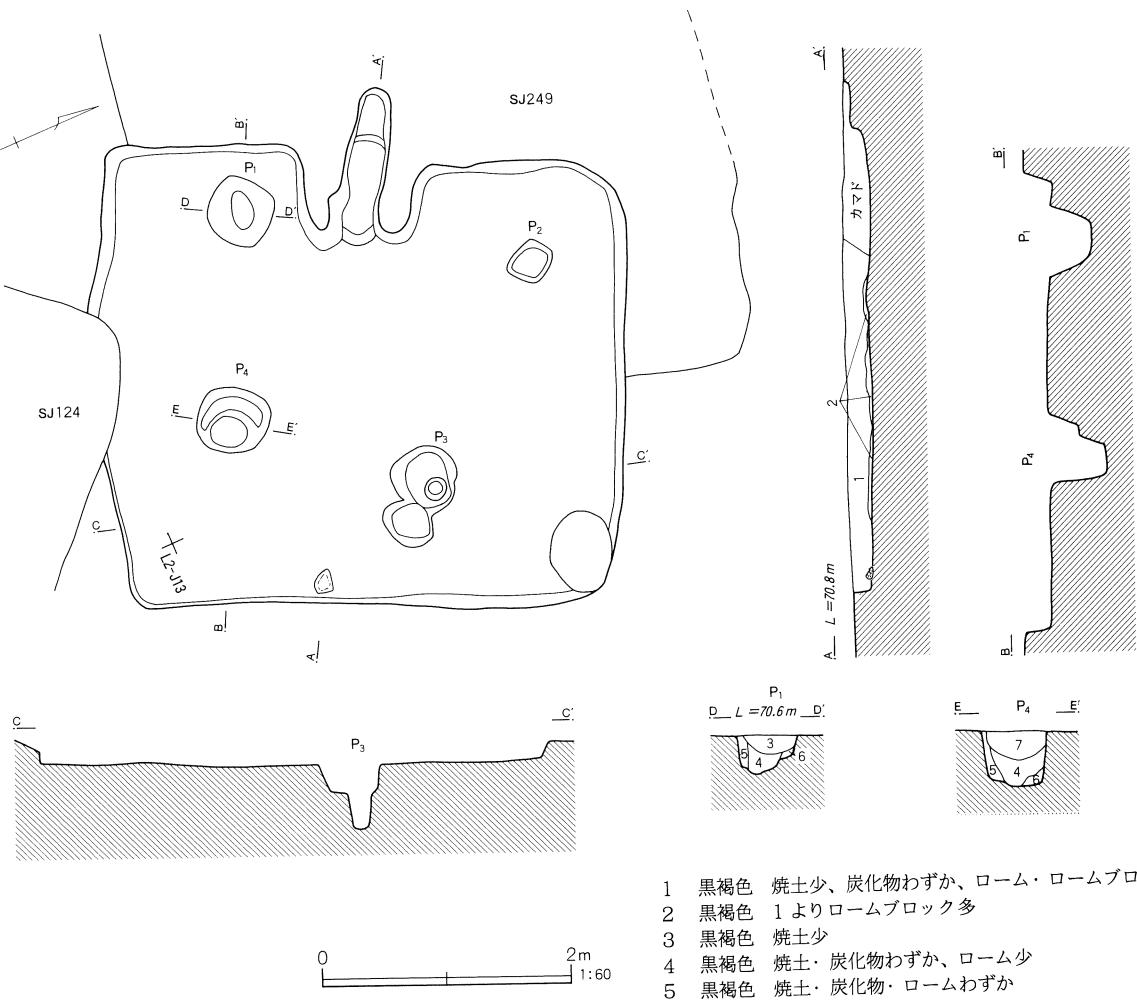
第133号住居跡 (第122図)

L2-H10・I11グリッドに位置する。第259号住居跡との切り合い関係は不明である。トレンチ等によって、床面は削平されており、平面プランは掘形によるものである。北壁の長さは4.76mである。北壁の傾きはN-64°-Wである。

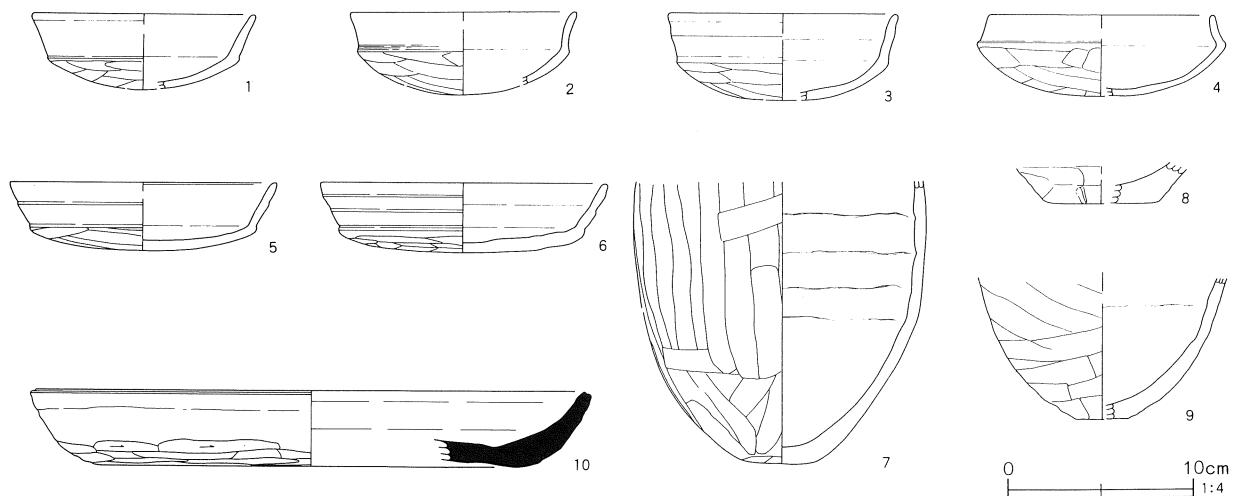
カマドはほとんど削平されているが、西壁に燃焼部の痕跡と推定される被熱面が検出された。貯蔵穴は北西コーナーに設けられている。規模は88×60cm、深さは37cmである。掘り込みはやや角度をもち底は平らである。

壁溝は西壁の貯蔵穴付近と、東北コーナに検出された。遺存状況の良いところに確認されたので、実際に

第120図 第132号住居跡・カマド



第121図 第132号住居跡出土遺物



第132号住居跡遺物観察表（第121図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(11.6)	(4.0)		A F 1	A	B	30	埋土	
2	壺	(11.9)	(3.9)		A 1	A	B	20	埋土	器面風化顯著
3	壺	(12.0)	(4.6)		A F 1	A	C	50	カマド	
4	壺	(11.8)	(4.3)		A D F 1	A	B	35	埋土	外面一部黒化
5	壺	(14.0)	3.7		A D 1	A	C	45	埋土	内・外面黒化
6	壺	15.1	3.8		D F 1	A	B	75	埋土	内面黒化、器面剥落顯著 図版40-3
7	甕	(15.0)	4.0		A D F 5	A	B	15	埋土	外面一部黒化
8	甕	(2.2)	(6.0)		D F 2	A	C	5	埋土	底部破片 外面一部黒化
9	甕	(7.5)	(2.8)		D F 2	A	B	10	埋土	
10	盤	29.2	5.0	(22.0)	D 5	A	H	10	カマド煙道	須恵器 末野産 混入品

は他の壁際にも巡っていたものと考えられる。幅は約12cm、深さは深いところで6cmである。

本住居跡に伴うピットは2基検出され、配置から、2本柱穴の住居跡であったと考えられる。したがって、住居跡の南北規模は5.5m程になると推定される。

遺物はすべて貯蔵穴からの出土である。土師器壺と甕がある。

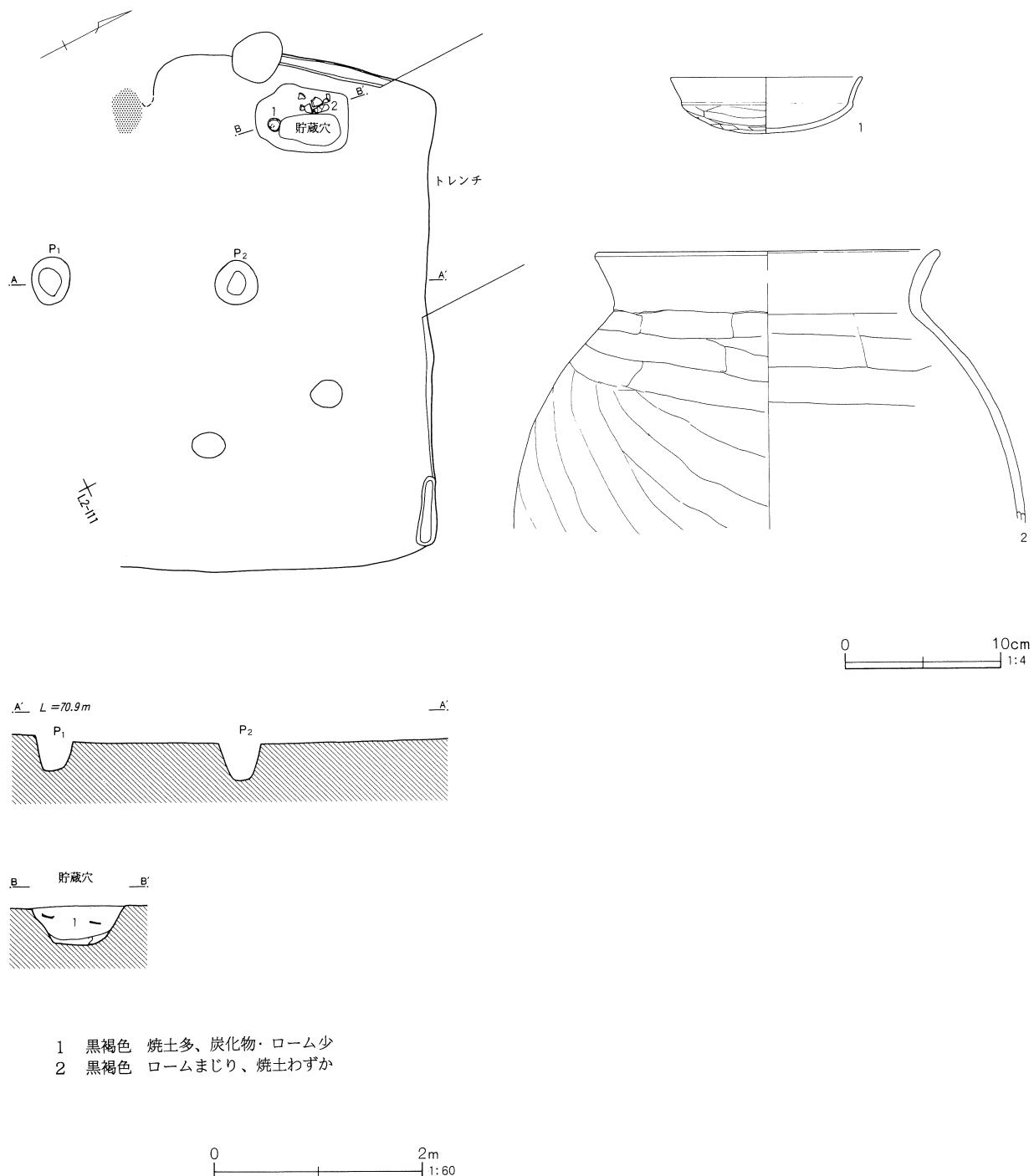
第134号住居跡（第123～126図 図版7下、8上）

L2-G11～G13・H12・H13グリッドに位置する。重複関係は、第248・251・261・264・265・274・276号住居跡を切っている。切り合う住居跡の中ではもっとも新しいものである。形状は正方形に近く、長辺×短辺は6.84×6.74m、深さは16cmである。埋土には部分的にレンズ状の堆積が観察され、比較的時間をかけた自然埋没と推定される。カマドAの傾きはN-82°

—Eである。

カマドは東壁やや南寄りに2基（A・B）、西壁北寄りに1基（C）、合計3基検出された。カマドAは、Bよりも新しく、住居廃絶時に使用されていたカマドと考えられる。燃焼部の掘り込みはなく平坦で、底面に煙道部との境も認められない。煙り出し口にあたる底面はわずかに掘りくぼめられている。燃焼部～煙道部の長さはおよそ2mである。煙道部から煙り出し口にかけての埋土には、炭化物と灰を主体とする層（d層）が2層に分かれており、その間に砂を主体とするカマド構築土（h層）が堆積している。これは煙道に灰がたまつたところで一度新たに底を作り直したものと考えられる。袖部はその大半が砂質土によって構築されたもので、右袖には土師器甕が補強材として使用されている。被熱面は燃焼部底面がもっとも硬く、袖部から煙道部にかけての内壁もよく焼けている。支脚は専用

第122図 第133号住居跡・出土遺物



第133号住居跡遺物観察表（第122図）

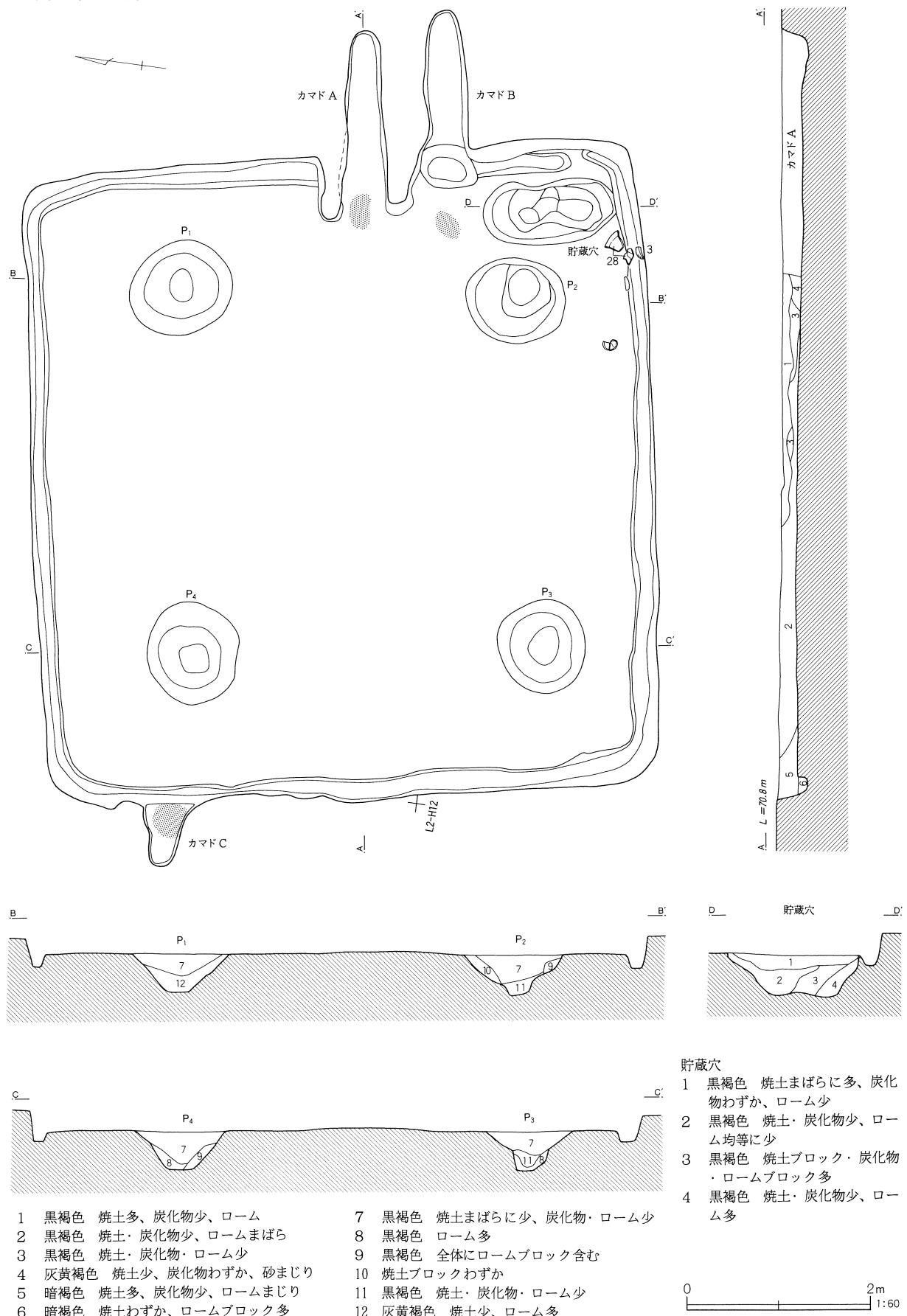
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	12.0	3.6		AD 1	A	B	100	貯蔵穴	器面風化著 観察表
2	甕	(21.6)	(17.3)		ADF 2	B	C	15	貯蔵穴	図版40-4 内面黒化

の土製品である。

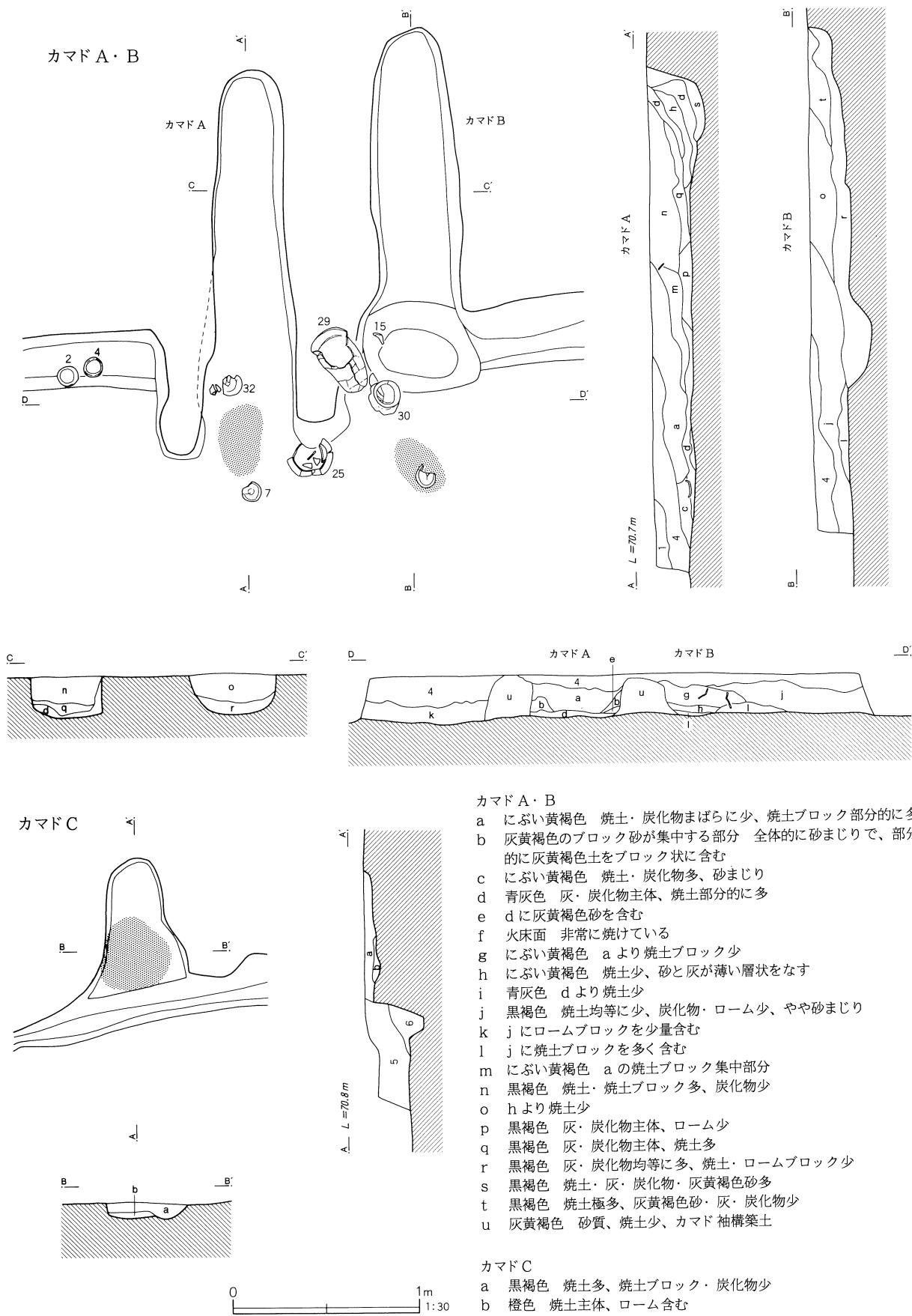
カマド B は、煙道部手前にピット状の掘り込みをもつが、おそらく掘形と考えられる。燃焼部はカマド A

と同じく、掘り込みをもたないものであり、被熱面が認められる箇所がそこにあたると考えられる。煙道部は長さ 1.43m で、底は徐々に浅くなり、煙り出し口の

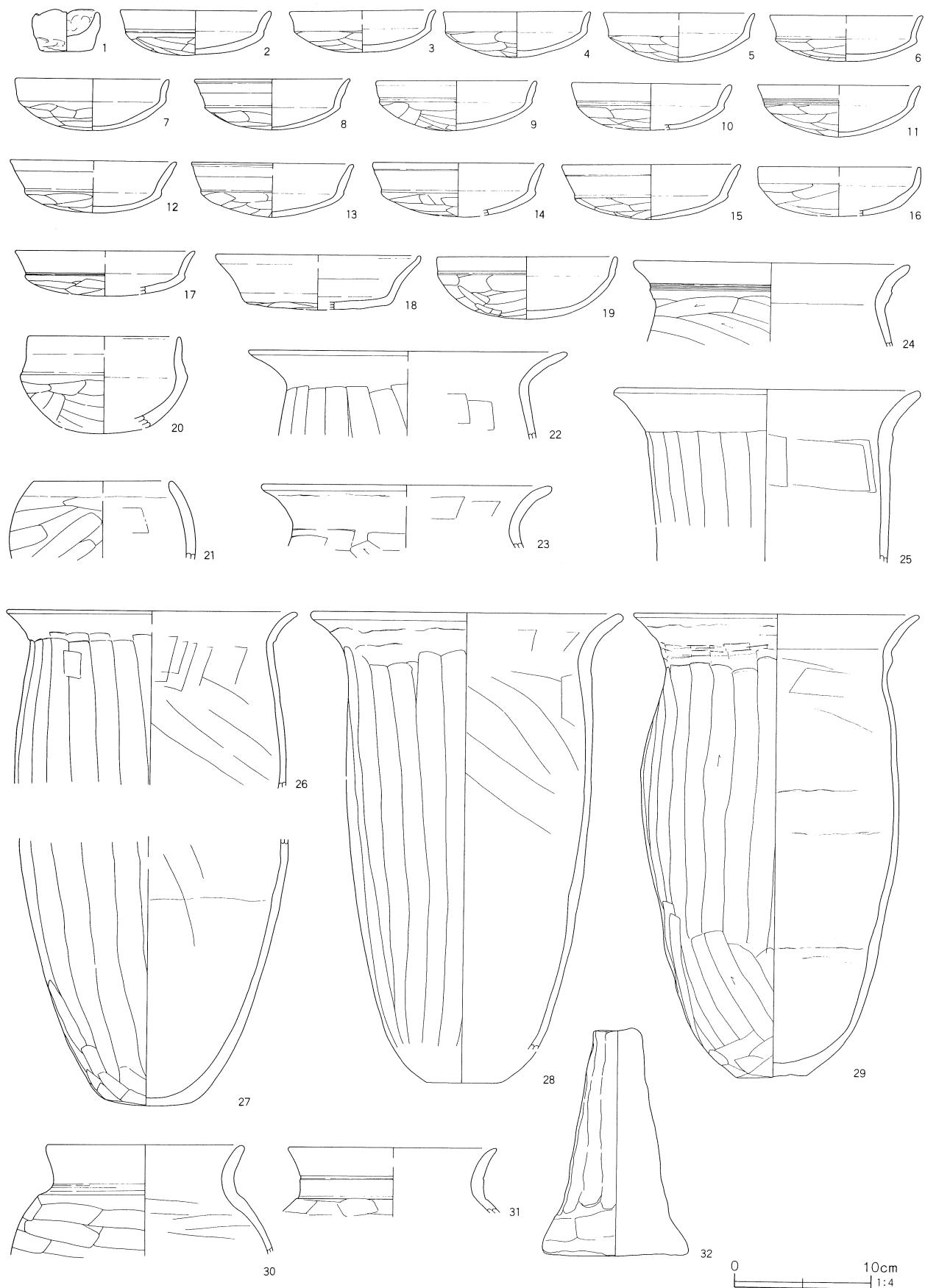
第123図 第134号住居跡



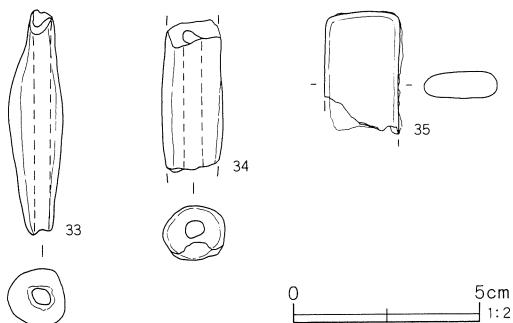
第124図 第134号住居跡カマド



第125図 第134号住居跡出土遺物(1)



第126図 第134号住居跡出土遺物(2)



底面がもっとも浅い。カマド A にくらべて埋土には焼土や灰の堆積が少なく、被熱面も煙道部内壁にみられるほかは、全体的にあまり焼けていない。袖部はカマド A 構築の際に壊されたものか検出されなかった。

カマド C は、壁を掘り抜いた形態で検出された。規

模は長さ68cmである。埋土は10cmに満たないが、焼土の堆積が多い。燃焼部にあたる部分の底面はたいへんよく焼けている。袖部はないものと考えられる。

貯蔵穴は東南コーナーに設けられている。不整橈円形を呈し、規模は141×65cm、深さは44cmである。掘り込みはゆるやかで、底面には凸凹がある。

壁溝はほぼ全周する。幅は20cm前後、深さは10~15cmと明瞭に掘り込まれている。

ピットは4基検出された。いずれも柱穴と考えられる。径は95~115cmと規模が大きい。深さはおよそ40cmで、すりばち状の掘り込みをもつ。柱痕は検出されなかった。柱穴間の間隔はだいたい3.75mであり、バランスよく配置されている。

第134号住居跡遺物観察表（第125・126図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	ミニチュア	4.5	3.1	3.7	ADF 2	A	B	95	埋土	手づくね 外面一部黒化 図版55-4
2	壺	10.6	3.3		F 2	A	B	95	カマド A 脇	図版40-5
3	壺	(10.3)	3.1		DF 1	A	C	50	壁溝	器面風化
4	壺	10.5	3.3		DF 1	A	B	100	カマド A 脇	器面風化顕著 図版40-6
5	壺	(10.7)	3.5		F 1	A	B	60	カマド埋土	器面風化顕著
6	壺	10.8	3.4		D 1	A	C	45	貯蔵穴	器面風化顕著 外面黒斑あり
7	壺	10.9	3.7		ADF 5	A	B	80	カマド A	器面風化顕著 図版40-7
8	壺	11.1	3.7		AD 2	A	B	95	埋土	図版40-8
9	壺	11.4	3.6		DF 1	A	B	95	埋土	器面風化顕著 図版40-9
10	壺	11.3	(3.3)		F 1	A	B	75	カマド A	器面風化 図版40-10
11	壺	(11.5)	3.8		F 1	A	B	45	カマド A	器面風化顕著
12	壺	11.8	3.7		F 2	B	B	25	埋土	器面風化顕著
13	壺	(11.5)	3.9		AF 2	A	B	50	埋土	器面風化
14	壺	12.1	(3.8)		A 2	A	C	80	カマド埋土	図版41-1
15	壺	12.7	4.0		AF 2	A	C	60	カマド B	器面風化顕著 図版41-2
16	壺	(11.9)	(3.5)		D 2	A	B	30	カマド B	器面風化顕著
17	壺	12.7	(3.1)		F 5	A	C	30	カマド A	外面一部黒化
18	壺	(14.6)	(4.0)		ADF 2	A	B	40	埋土	口唇部内傾
19	椀	12.8	4.5		D 2	A	B	95	埋土	器面風化顕著 図版41-3
20	椀	(10.8)	(6.6)		D 1	A	C	30	カマド B	器面風化顕著
21	小形甕	(9.9)	(5.7)		ADF 1	A	C	20	カマド B	口縁部立ち上がりらず内傾
22	甕	(22.6)	(6.3)		ADF 1	A	B	5	カマド埋土	口縁部破片
23	甕	(20.6)	(4.5)		ADF 2	A	C	5	カマド埋土	口縁部破片
24	甕	(19.6)	(5.9)		ADF 2	A	B	5	埋土	口縁部破片 頸部工具アテ
25	甕	21.7	(12.5)		AD 2	A	B	20	カマド A 袖	補強材 外面一部黒化
26	甕	(20.6)	(12.8)		ADF 2	A	C	15	埋土	内・外面一部黒化
27	甕	(19.3)	5.9	5.9	ADE F 5	A	B	20	埋土	
28	甕	21.9	(26.5)		AD 2	A	B	60	壁溝	
29	甕	20.3	33.6	5.1	ADF 2	A	C	80	カマド A 袖	補強材 図版72-3
30	甕	14.0	(8.0)		ADF 5	A	C	10	カマド B	
31	壺	(14.8)	(4.7)		ADF 1	A	B	5	埋土	口縁部破片 外面一部黒化
32	支脚	3.2	16.5	10.4	DF 5	A	B	70	カマド A	図版58-5
33	土錘	長さ6.0cm、最大径1.5cm、孔径0.4cm、重さ9.4g							埋土	
34	土錘	現長3.9cm、最大径1.6cm、孔径0.5cm、重さ10.6g							埋土	欠損品
35	鉄製品	現長3.3cm、幅0.7×2.0cm、重さ9.0g							埋土	延板状品 用途不明

壁の掘り込みはしっかりとしており、壁面の検出は容易であった。床面には明瞭な貼り床は認められなかったが、よく踏みしめられている。

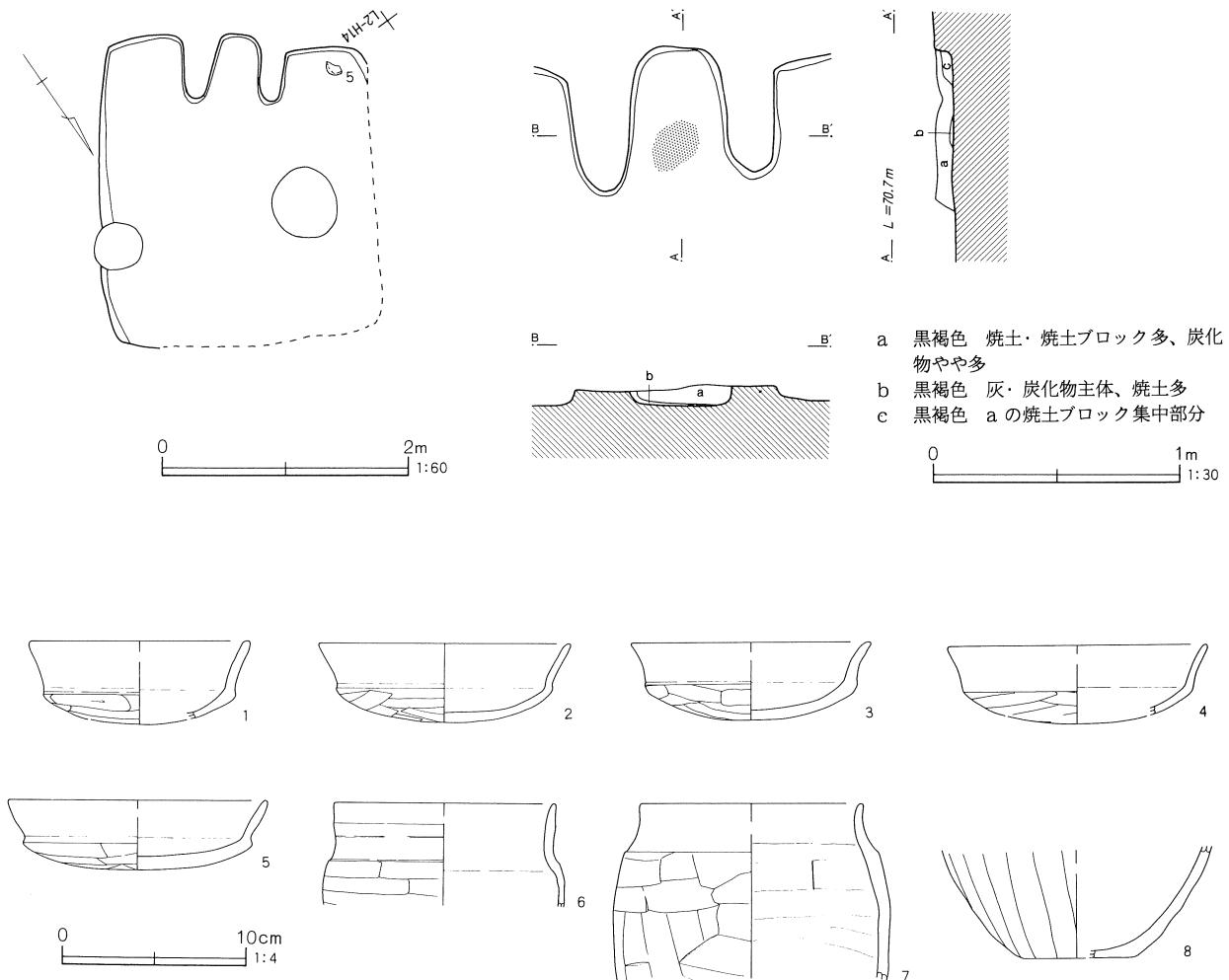
カマド周辺を除き、床面直上からの出土遺物は少ない。土師器壺・甕・壺の他に、ミニチュア土器や土錘、鉄製品も出土している。図示していないが、須恵器甕の胴部破片も出土した。

第135号住居跡（第127図）

L2—G14・H14 グリッドに位置する。第136号住居跡に全体が入り込む形で検出された。本住居跡の方が新しいようである。形状は方形を呈する。長辺×短辺は2.5×2.11m、深さは8cmである。埋土は黒褐色土の一層で、焼土をわずかに含み、ロームが混じる。カマドの傾きはN—144°—Wである。

カマドは東南壁中央に構築されている。燃焼部は箱

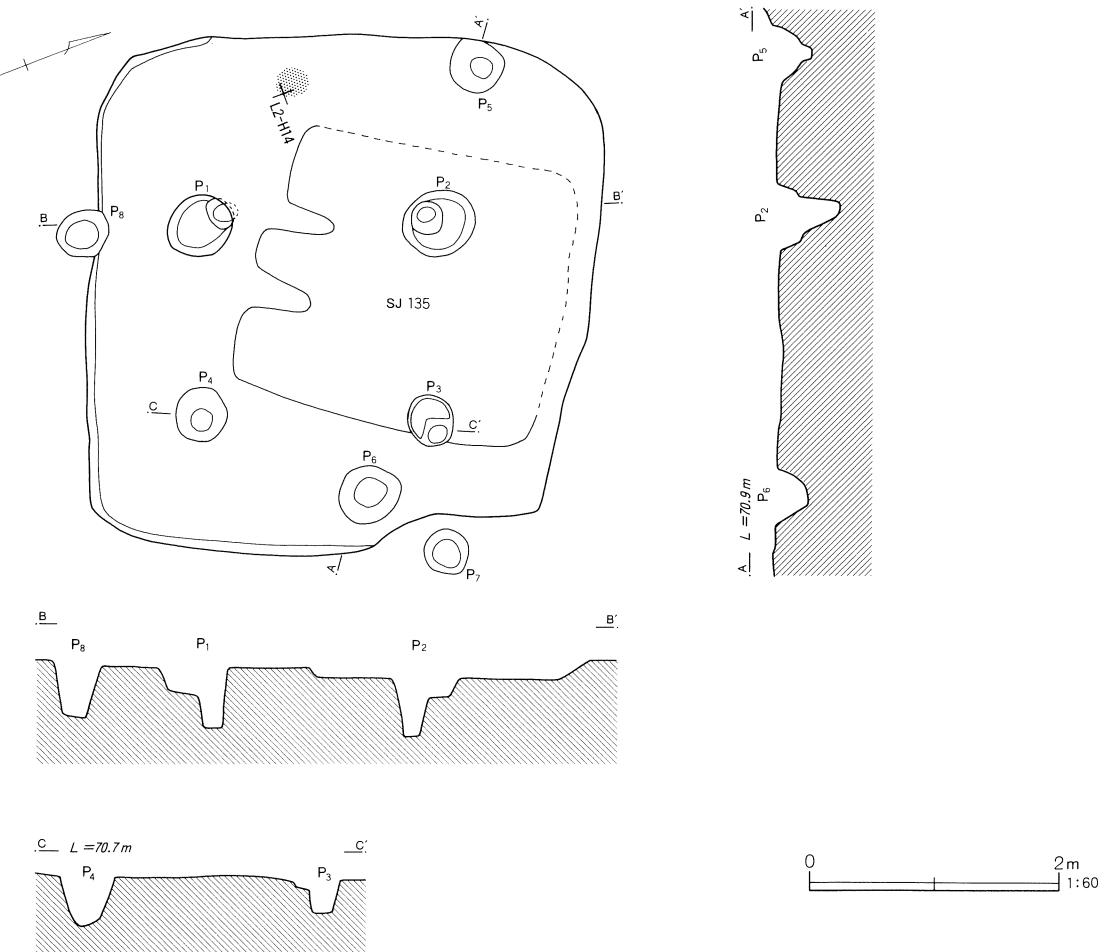
第127図 第135号住居跡・カマド・出土遺物



第135号住居跡遺物観察表（第127図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(11.8)	(4.2)		ADF 1	A	B	30	埋土	
2	壺	13.4	4.2		ADF 1	A	B	70	埋土	内・外面一部黒化 図版41-4
3	壺	(12.8)	4.2		ADF 1	A	B	50	埋土	
4	壺	(13.9)	(3.3)		AF 1	A	B	20	埋土	
5	壺	(13.8)	3.7		ADF 2	A	B	50	床直	口縁一部黒化
6	小形壺	(11.9)	(5.5)		A 1	A	B	10	埋土	器面風化顯著
7	小形甕	(11.9)	(9.5)		DF 5	A	F	10	埋土	外面黒化
8	甕	(5.9)	(6.2)		DF 2	A	B	10	埋土	内面、外面一部黒化

第128図 第136号住居跡



形を呈し、規模は55×38cmである。掘り込みはなく、底面は平らである。煙道部は削平されている。袖部は地山土の掘り残しである。被熱面は燃焼部底面にわずかに認められた。

本住居跡は当初第136号住居跡との切り合いが不明であり、同時に発掘してしまったため、遺物の帰属は明らかでない。カマド以外の施設も明らかにできなかった。

出土遺物は破片が主体で、床面直上から出土した遺物はほとんどない。第136号住居跡の遺物が含まれている可能性がある。土師器壺・甕がある。

第136号住居跡（第128図）

L2—G13・G14・H13・H14グリッドに位置する。形状は方形を呈する。長辺×短辺は4.08×3.98m、深さは6cmである。長辺の傾きはN—162°—Wである。

埋土はまったく残っていない。一部床面まで削平を受けており、残りは非常に悪い。カマドは完璧に削平されている。ただし、西壁際やや南寄りに被熱範囲が検出され、これが燃焼部の残存であるかもしれない。

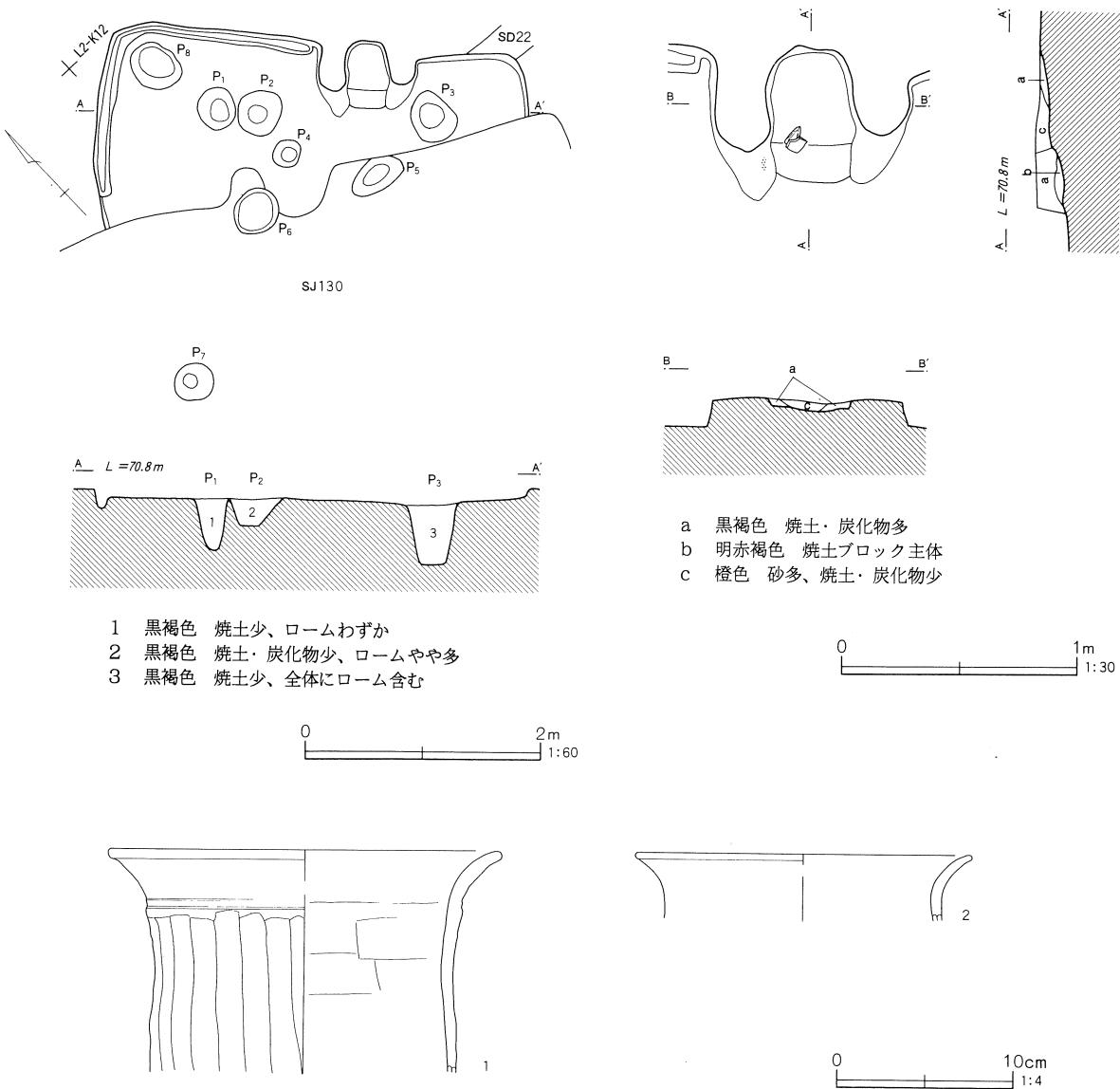
ピットは8基検出された。すべてが本住居跡に伴う確証はないが、P1～P4は、その位置関係から、本住居跡の柱穴と考えてよいだろう。

発掘の不手際から、第135号住居跡出土遺物としたものに、本住居跡に帰属する遺物が混入している可能性がある。

第138号住居跡（第129図）

L2—K11・K12グリッドに位置する。第130号住居跡に切られており、残りは悪い。第22号溝跡を切る。北東壁の長さは3.62m、深さは9cmである。カマドの傾きはN—45°—Eである。

第129図 第138号住居跡・カマド・出土遺物



第138号住居跡遺物観察表 (第129図)

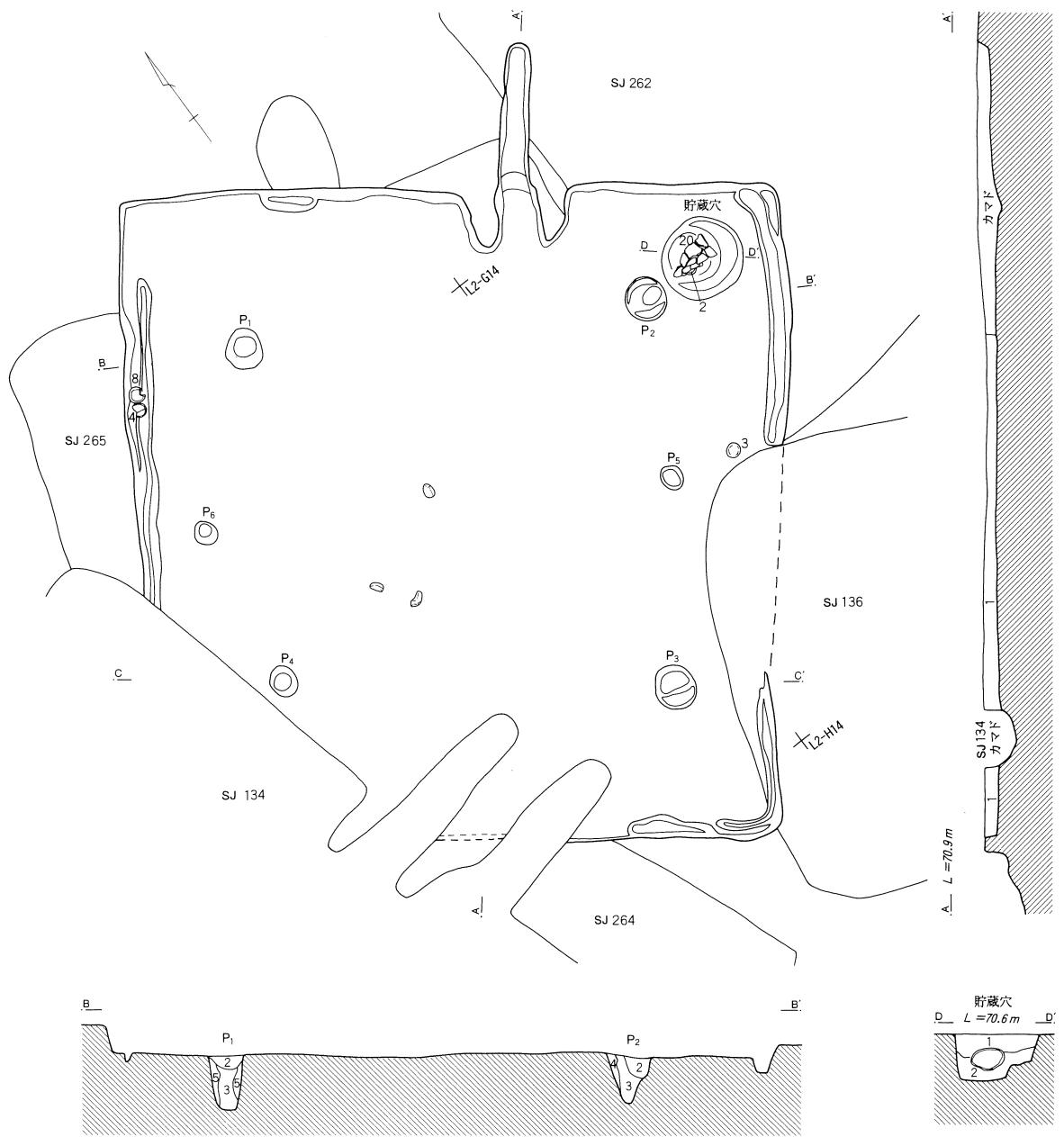
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	甕	(21.8)	(12.4)		DF 2	A	B	10	埋土	
2	甕	(18.6)	(3.7)		DF 1	A	B	5	埋土	口縁部破片 内・外面一部黒化

カマド1基が検出されている。検出された北東壁のやや南寄りに構築されている。燃焼部は階段状に掘り下げられ、底は皿状となる。煙道部と燃焼部との境に段をもち、煙道部は底面が徐々に浅くなる。煙道部は削平を受けているものと考えられる。袖部は地山の掘り残しである。燃焼部の底面には焼土ブロックの堆積が認められた。支脚には自然石を使用している。

壁溝はコーナーを中心とし、検出された北側の壁に巡っている。幅は12cm、深さは7cm前後である。

ピットは8基確認された。柱痕は認められなかったが、その位置や規模から、少なくともP1・P2・P7は柱穴であった可能性がある。P4は深さ16cm、P7は深さ36cmで、ともに埋土はP1と共通(1層)である。P5は深さ20cm、埋土は黒褐色で砂ブロックが混入し、ロー

第130図 第248号住居跡

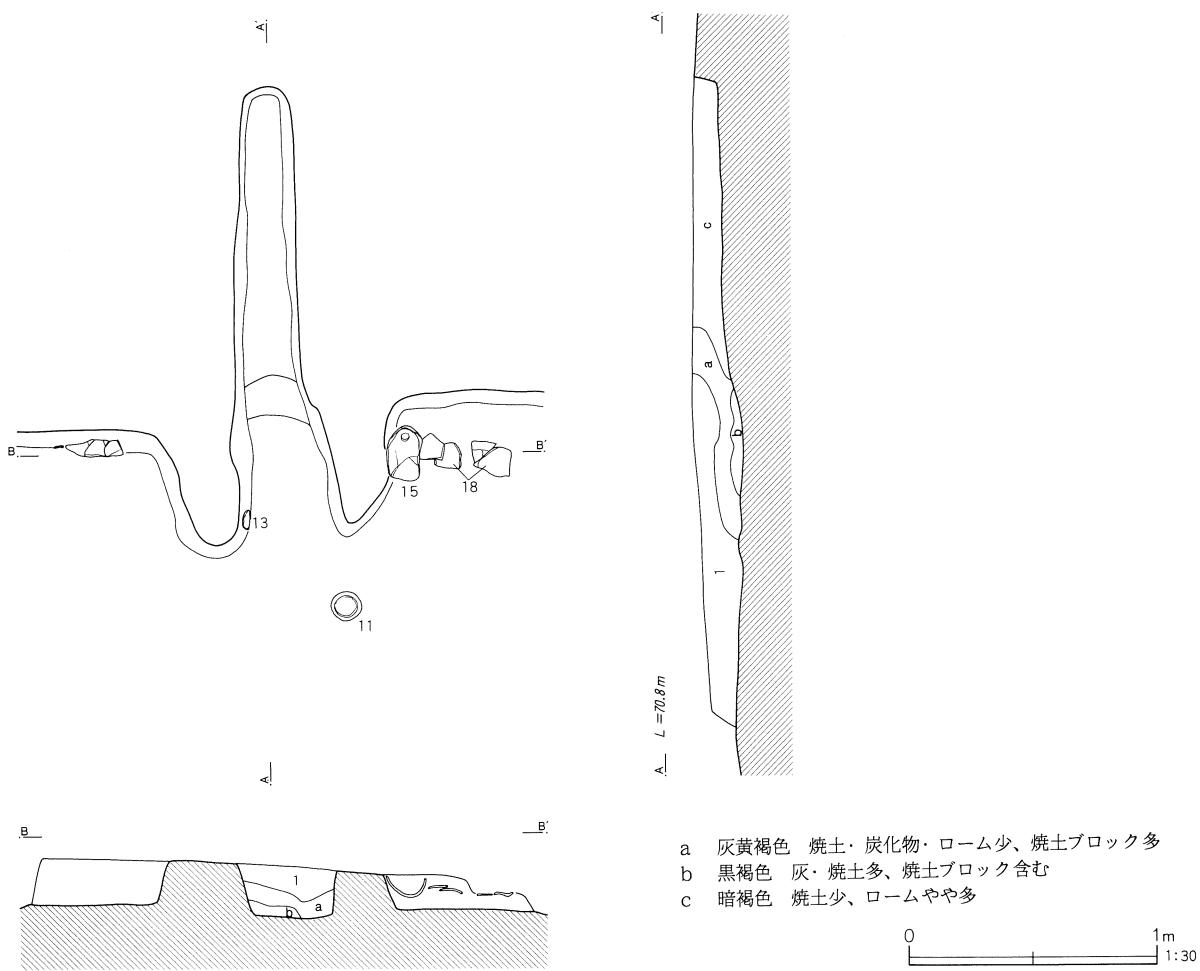


- 1 黒褐色 焼土・炭化物少、ローム均等にやや多
 2 黒褐色 焼土・ローム少
 3 黒褐色 焼土・ロームわずか
 4 黒褐色 焼土少、ロームやや多
 5 黒褐色 ローム多
 6 黒褐色 焼土少、ローム一部ブロック状に少
 7 黒褐色 焼土わずか、ローム少

- 貯藏穴
 1 黒褐色 焼土・灰・ローム少、
 2 黒褐色 焼土わずか、ローム多

0 2m 1:60

第131図 第248号住居跡カマド



ムを少量、焼土・炭化物を多量に含む。P6 は深さ 3 cm と浅く、埋土は暗褐色で焼土が少量含まれる。P8 は深さ 8 cm、埋土は黒褐色で、焼土・炭化物を多量に、ロームを少量含む。しまりなくもろい土である。

出土遺物は少なく、土師器甕を 2 点図示できたに過ぎない。

第248号住居跡(第130～132図 図版13中、下、14上)

L2-F13・F14・G13・G14 グリッドに位置する。重複関係は、第134・136号住居跡に切られ、第262・264・265号住居跡を切っていると思われる。形状は方形を呈する。長辺×短辺は 5.84×5.74m、深さは 19cm である。埋土はほぼ一層である。ただし、南西側、第134号住居跡に接する周辺の埋土には、ローム土と黒褐色土の斑状の堆積が認められた。これは、第134号住居構築のた

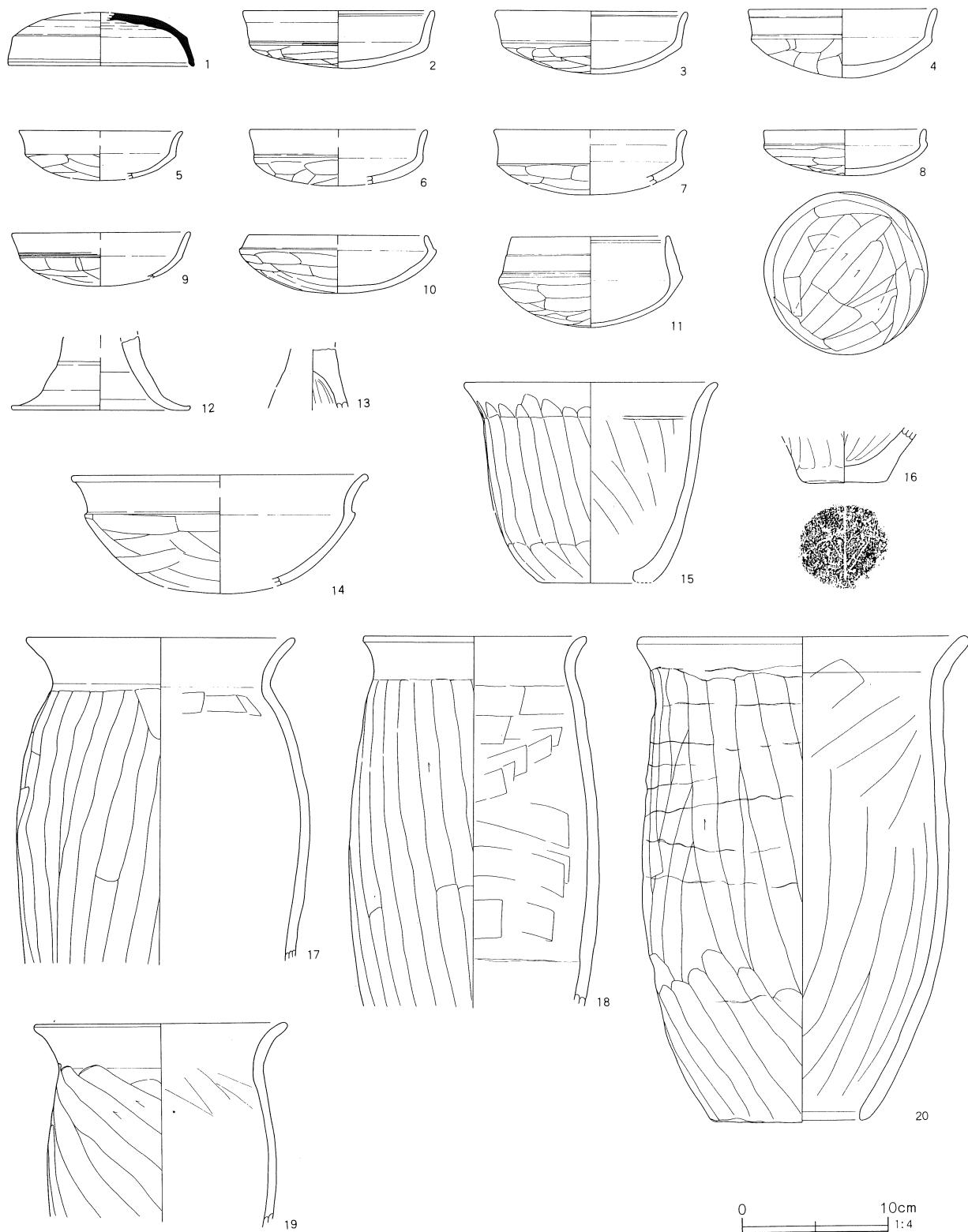
めの整地に伴う、人為的な埋土と考えられる。カマドの傾きは N-37°-E である。

カマドは北東壁東寄りに構築されている。燃焼部は橢円形を呈し、規模は 68×40cm である。底面は皿状に浅く掘り込まれている。煙道部は長さ 113cm、幅 25cm である。燃焼部から煙道部への移行はなだらかで、煙道部の底面は煙り出し口に向ってほんのわずか浅くなる。袖部は検出された部分は地山土の掘り残しだけであるが、カマド埋土に砂質土の堆積(a 層)があるため、上部および天井部は砂質土で構築されていたと推定される。被熱面は燃焼部底部、袖部内壁に認められた。

貯蔵穴は東コーナーで検出された。直径 71cm、深さ 43cm で、三日月状のテラスをもつ。底面は平らである。

壁溝は途切れがちに検出された。もっとも広い箇所で幅 15cm、深さ 12cm である。

第132図 第248号住居跡出土遺物



第248号住居跡遺物観察表（第132図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	蓋	12.4	(3.6)		D F 2	A	F	90	埋土	須恵器 群馬産 図版37-5
2	壺	12.7	3.9		A F 1	A	C	100	貯藏穴	図版43-4
3	壺	12.8	4.2		A 1	A	B	100	床直	図版43-5
4	壺	12.6	4.6		A 1	A	B	75	壁溝	器面風化 図版43-6
5	壺	(10.9)	(3.2)		A D 1	A	B	40	埋土	器面風化顯著
6	壺	(11.9)	(3.7)		A 1	A	B	20	埋土	器面風化顯著 外面一部黒化
7	壺	(12.8)	(3.7)		A F 1	A	B	15	埋土	器面風化顯著 内面、外面一部黒化
8	壺	10.8	3.1		D F 1	A	B	100	壁溝	図版43-7
9	壺	(12.0)	(3.1)		D F 1	A	B	15	埋土	
10	壺	(12.0)	3.9		D F 1	A	B	30	埋土	口縁一部黒化
11	壺	10.5	6.1		A D F 1	A	B	100	カマド前	内・外面一部黒化 図版43-8
12	高壺		(5.0)	12.0	A D F 2	A	B	15	埋土	脚部破片 器面風化顯著
13	高壺		(4.0)		D F 1	A	B	10	カマド	脚部破片
14	鉢	(19.7)	(7.5)		A F 1	A	C	20	埋土	
15	小形甌	16.8	13.5	7.7	A 2	A	B	50	カマド脇	外面黒斑あり
16	甌		(3.7)	5.8	A D 2	A	C	10	埋土	底部破片 木葉痕あり
17	甌	17.8	(21.7)		A D F 5	A	B	20	カマド埋土	外面一部黒化
18	甌	(14.3)	(24.9)		D F 2	A	B	60	カマド脇	外面一部黒化
19	甌	16.8	(13.8)		A D F 1	A	B	40	埋土	
20	甌	21.8	32.8	10.6	A D E F 5	A	B	95	貯藏穴	外面一部黒化 体部上半輪積痕明瞭 図版79-2

ピットは6基検出された。そのうち主柱穴と思われるのがP1・P2・P3・P4の4基である。その配置は壁のプランにくらべ、やや東に傾いている。P1など柱痕が明瞭に認められるものもある。P5は深さ16cm、P6は深さ12cmである。床面は全体にしっかりとおり、柱穴の内区は貼り床が認められた。

遺物は、カマド周辺および壁際の床面直上、貯藏穴内から良好な状態で出土している。土師器壺・甌・甌等がある。須恵器蓋の破片も出土している。

第249号住居跡（第133図 図版14中）

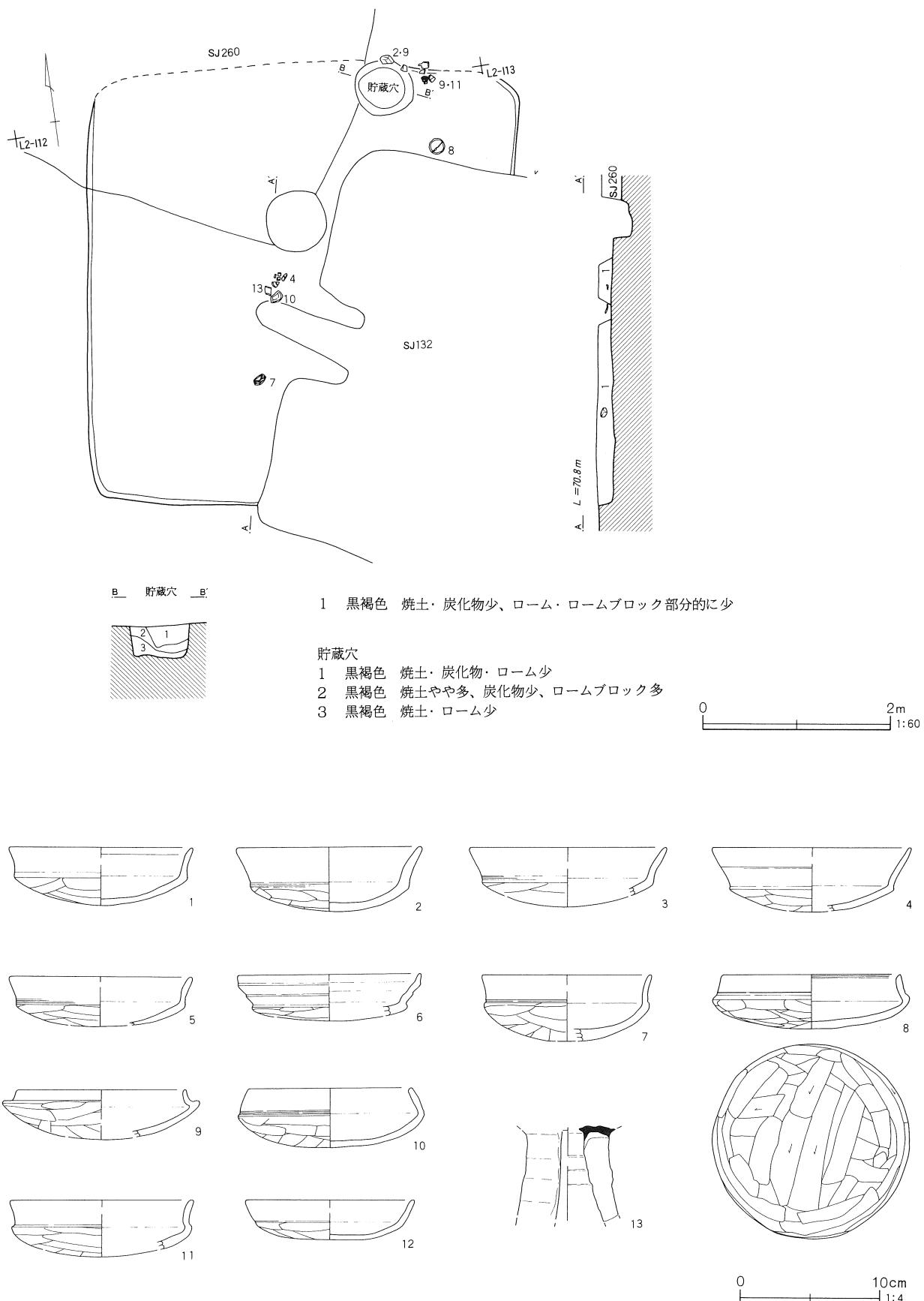
L2—H12・I12・I13グリッドに位置する。第132・260号住居跡に切られている。形状は方形を呈するものと推定される。長辺×短辺は4.6×4.54m、深さは14cmである。埋土は一層で、短期間の埋没状況を示している。2軒の住居に切られることから、再整地の際に埋め戻されたものかもしれない。西壁の傾きはN—9°—Eである。

貯藏穴は北東コーナー近くに検出された。直径およそ60cmの円形を呈し、深さは34cmである。掘り込みは直で、底面はわずかな凹凸をもつ。床面は踏み固め

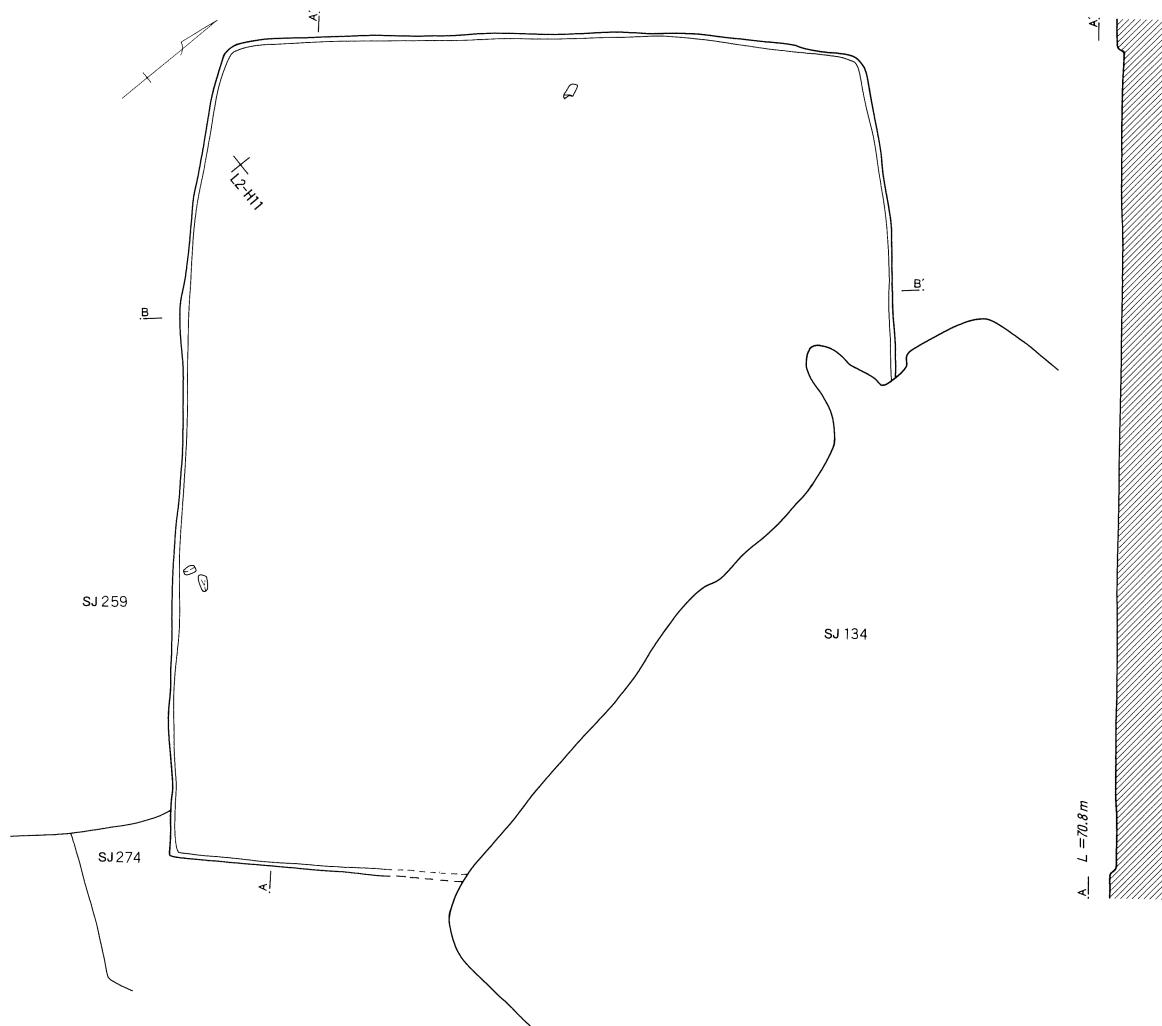
第249号住居跡遺物観察表（第133図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(12.9)	4.1		A 1	A	B	25	埋土	器面風化顯著
2	壺	13.0	4.6		A F 1	A	B	60	床直	器面風化顯著
3	壺	(13.8)	(3.4)		A D 1	A	B	10	埋土	器面風化顯著
4	壺	(13.9)	(4.5)		A D 1	A	B	15	床直	外面一部黒化
5	壺	(12.8)	(3.4)		A D 1	A	B	15	埋土	器面風化顯著
6	壺	(13.0)	(3.0)		A D 1	A	C	10	埋土	
7	壺	(11.9)	(4.7)		A 1	A	C	40	床直	器面風化顯著
8	壺	12.5	3.8		A D F 1	A	C	100	床直	外面一部黒化 図版43-9
9	壺	(12.8)	(3.3)		A D F 1	A	C	40	床直散乱	
10	壺	11.5	4.2		A D F 1	A	B	85	床直	器面風化 外面一部黒化 図版43-10
11	壺	(12.8)	(3.5)		A F 1	A	C	25	床直	
12	壺	(11.9)	2.9		A F 2	A	B	50	埋土	
13	高壺		(6.8)		D F 5	A	H	15	床直	須恵器 脚部破片 透3方向 末野産

第133図 第249号住居跡・出土遺物

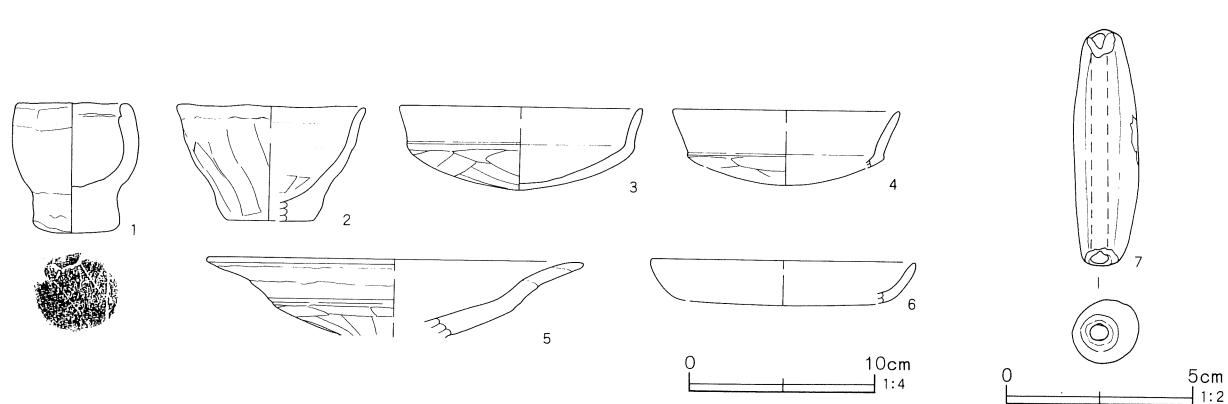


第134図 第251号住居跡・出土遺物



1 黒褐色 焼土・炭化物少、ローム均等に多
2 黒褐色 焼土・炭化物少、ロームブロック多

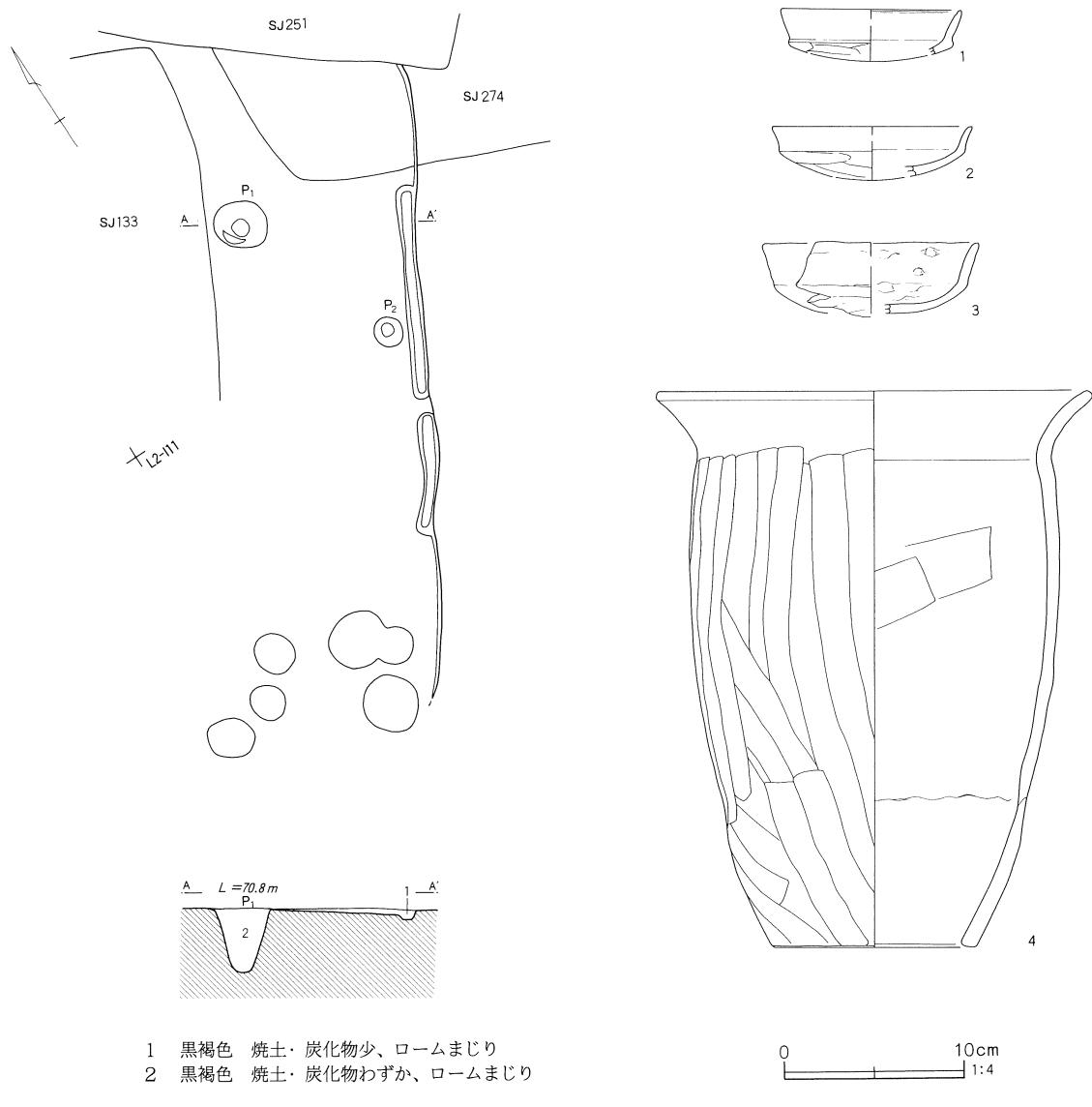
0 2m 1:60



第251号住居跡遺物観察表（第134図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	ミニチュア	5.8	6.9	4.7	F 1	A	B	50	埋土	底部木葉痕あり 図版55-5
2	ミニチュア	(9.9)	(6.1)		A 1	A	B	40	埋土	内面黒化
3	壊	(12.8)	4.4		A F 1	A	B	35	埋土	器面風化顕著
4	壊	(11.9)	(3.0)		A 1	A	B	10	埋土	器面風化顕著
5	高壊	(19.8)	(4.0)		A D F 2	A	B	15	床下	壊部破片
6	壊	(13.9)	(2.2)		A 1	A	E	10	埋土	器面風化顕著
7	土錘	長さ6.3cm、最大径1.7cm、孔径0.4cm、重さ16.9g					埋土			

第135図 第259号住居跡・出土遺物



第259号住居跡遺物観察表（第135図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壊	(9.9)	(2.4)		A D F 1	A	C	10	埋土	
2	壊	(10.9)	(2.8)		D 1	A	B	15	埋土	器面風化顕著
3	壊	(11.7)	(3.8)		A 1	B	C	30	埋土	高温被熱による気泡顕著 須恵質
4	甌	23.5	30.5	11.3	D F 1	A	C	40	埋土	底部一部黒化

られており、検出は容易であったが、貼り床は認められなかった。貯蔵穴との位置関係から、カマドは北壁に構築されていたと考えられる。

床面近くから出土したものも含め、遺物の量は少ない。土師器壺が主である。甕類は破片は出土したが、図示できるものはない。他に、須恵器高壺の脚部がある。

第251号住居跡（第134図）

L2—G10・G11・H10～H12 グリッドに位置する。重複関係ははっきりととらえられなかった。第134号住居跡に切られているが、第259号住居跡との関係は不明である。形状は長方形を呈する。長辺×短辺は 6.6×5.67m、深さは 8 cm である。長辺の傾きは N—52°—W である。

床面まで削平された住居跡と考えられ、カマド等の施設は検出されなかった。底面は、はっきりとせず、一部に凹凸がある。北西壁寄りの中央付近に焼土が散在していた箇所が認められた。カマドの構築場所を示すものかもしれない。

主な出土遺物は、土師器壺・高壺、ミニチュア土器、土錘である。いずれも埋土中から破片で出土したものである。6 は混入遺物と考えられる。

第259号住居跡（第135図）

L2—H11・I11 グリッドに位置する。重複する第 133・251・274号住居跡との新旧関係は不明である。残りが悪く、形状や規模は不明である。深さは 5 cm である。

壁溝は東壁にわずかに検出された。幅 10 cm、深さは 3 cm 前後と浅い。

ピットは 2 基検出された。P1 には柱痕は認められないが、位置的に本住居跡の柱穴と推定される。P2 は深さ 3 cm と浅いものである。

床面はほとんど削平を受けているが、中央部は地山面をそのまま床面としたものと考えられる。

出土遺物の量は少ない。土師器壺・甕がある。4 の

甕は床面から出土した。

第260号住居跡（第136図）

L2—H11・H12・I11・I12 グリッドに位置する。重複関係は、はっきりととらえられなかったが、第134号住居跡に切られ、第249・264・276号住居跡を切っていると考えられる。形状は方形を呈するものと推定される。長辺×短辺は 3.9×3.84m、深さは 18 cm である。

全体に削平を受け、南西コーナーには地山土の掘り残しが確認された。カマド等の諸施設はまったく確認されなかった。

出土遺物はすべて破片で、量は少ない。土師器壺・甕などがある。

第261号住居跡（第137図 図版18中）

L2—H12・H13 グリッドに位置する。重複関係は、北側を第134号住居跡に切られ、第264・276号住居跡を切っている。第260号住居跡との関係はよくわからない。形状は方形を呈する。長辺×短辺は 4.53×4.13m、深さは 14 cm である。カマドの傾きは N—38°—E である。

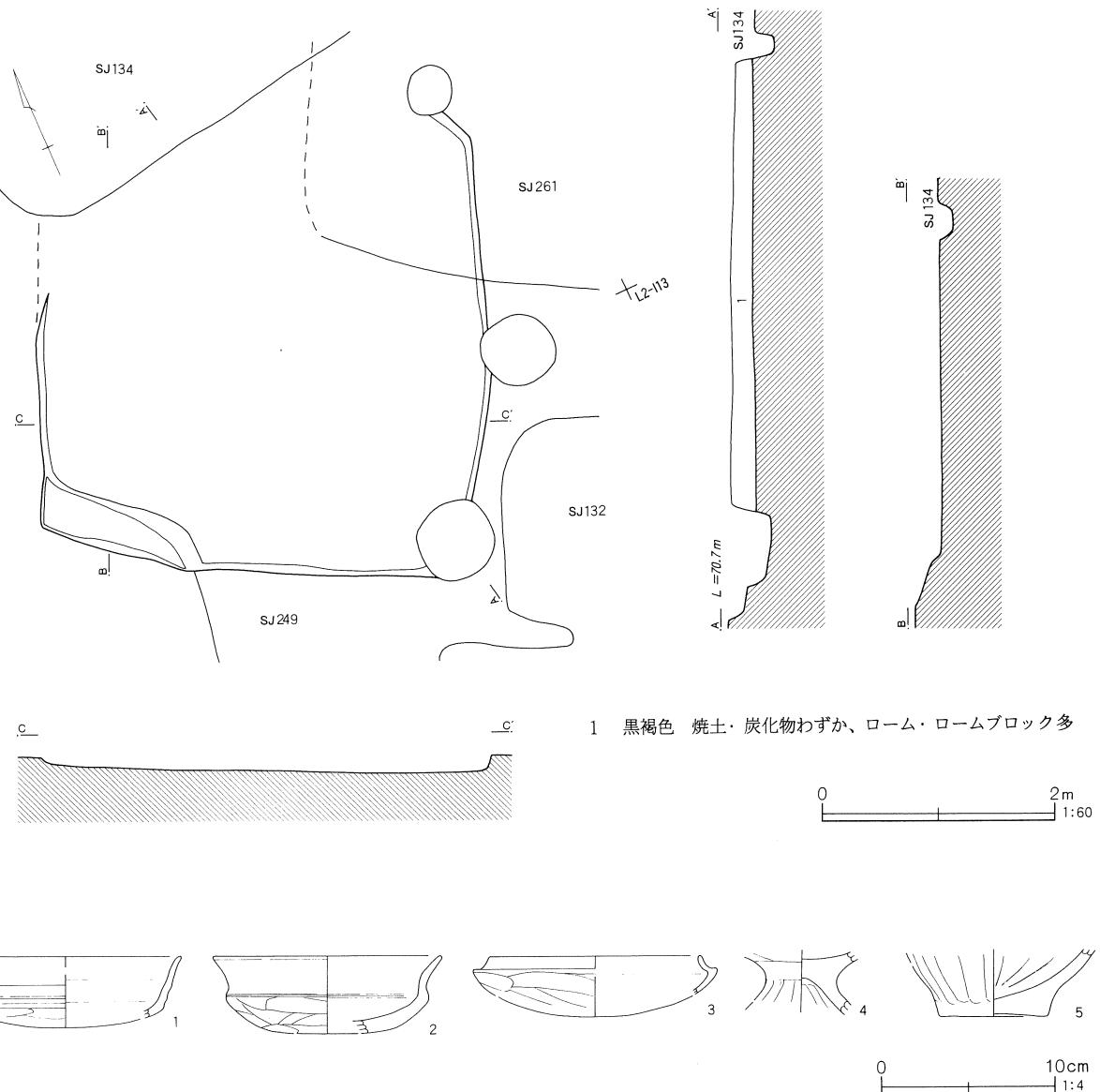
カマドは北東壁東寄りに検出された。半分近くが第134号住居跡に切られて失われている。燃焼部は形状は定かではないが、底面は皿状の掘り込みをもつ。煙道部を含めた全体の長さは 121 cm、煙道部の幅は 26 cm である。底面は燃焼部からゆるやかに浅くなり、煙り出し口へわずかに深くなっている。カマドは第264住居跡の埋没後に構築されたものであるが、構築時には煙り出し口付近をロームで補強している。袖は砂質土で造られており、補強材に土師器甕が用いられていた（胴部の破片で図示していない）。

典型的な貯蔵穴は検出されなかったが、その位置から、P6 としたものが貯蔵穴であるかもしれない。

壁溝は東壁にのみ途切れて検出された。幅は 8～10 cm、深さは 5 cm 弱である。

ピットは 6 基検出された。これらのピットのうち、P1 は深さ 6.5 cm、P4 は深さ 6 cm である。ともに埋土は

第136図 第260号住居跡・出土遺物



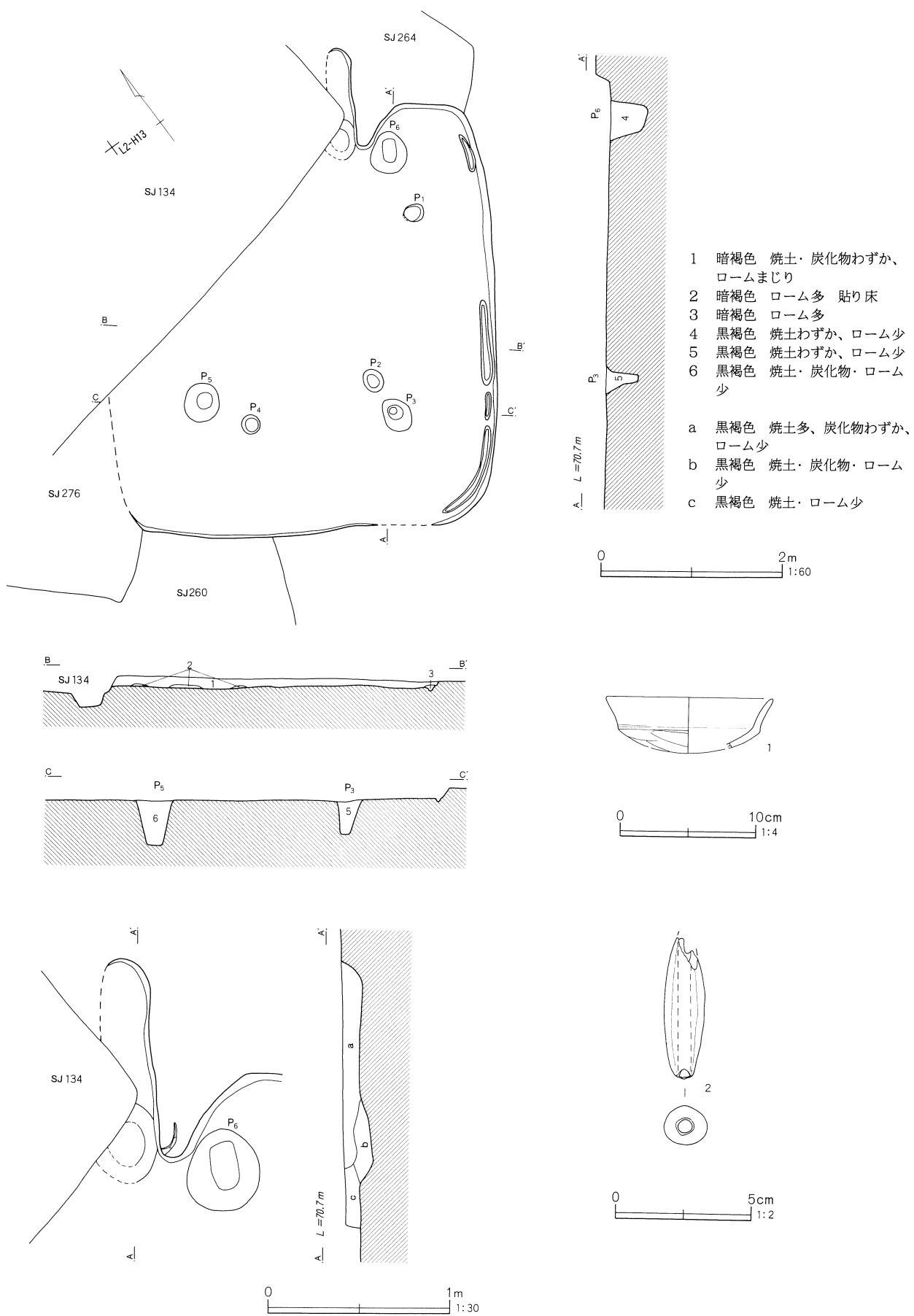
第260号住居跡遺物観察表（第136図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(12.9)	(3.5)		A F 1	A	B	10	埋土	黒化顯著
2	壺	12.9	(4.4)		A 1	A	B	20	埋土	黒化顯著
3	壺	(11.9)	(2.7)		A D 1	A	F	5	埋土	口縁部破片 外面黒化
4	高壺?		(3.5)		A F 1	A	C	10	埋土	脚部破片 器面風化顯著
5	甕		(3.8)	6.3	A D F 2	A	F	10	埋土	外面黒化

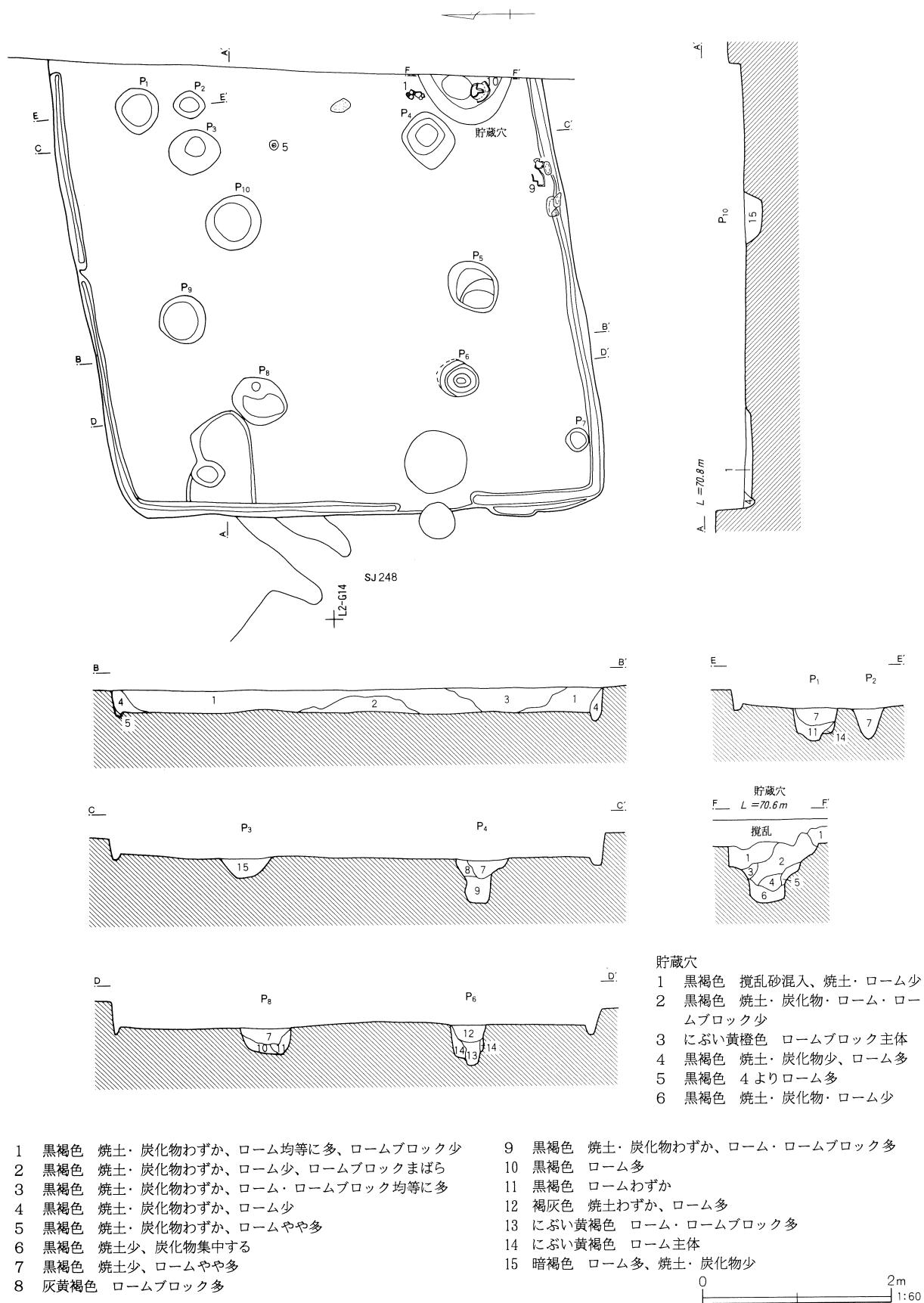
第261号住居跡遺物観察表（第137図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	12.0	(3.7)		A 1	A	B	10	埋土	器面風化顯著
2	土錘	現長5.1cm、最大径1.5cm、孔径0.4cm、重さ8.9g							埋土	一部破損

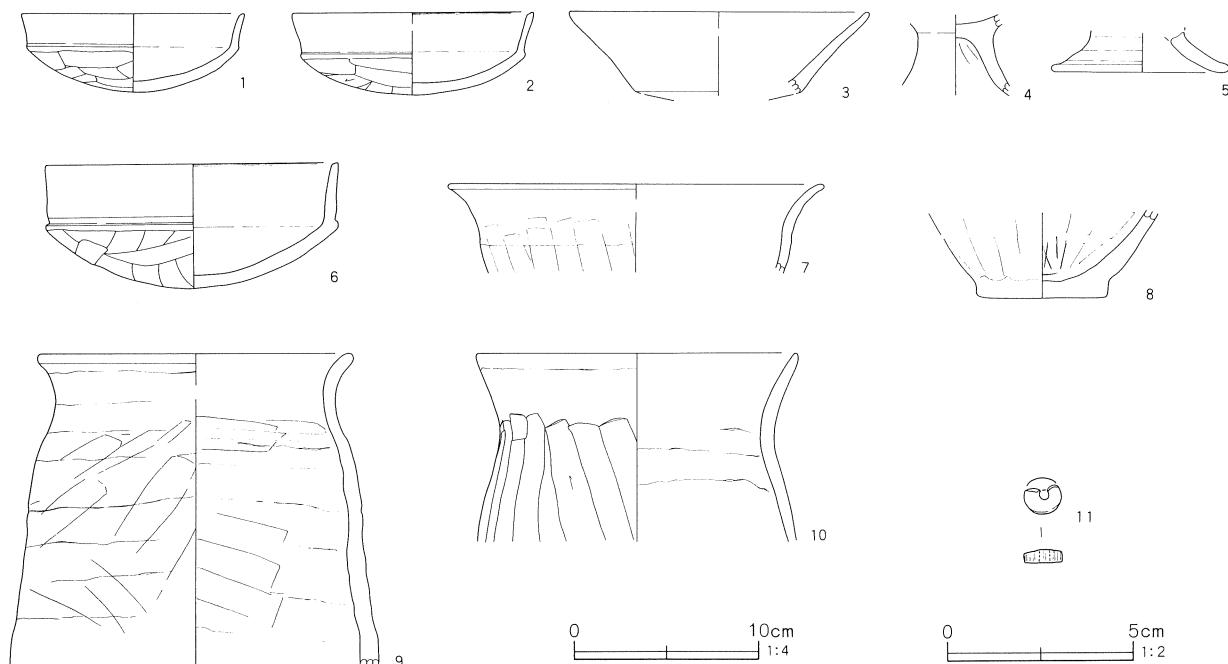
第137図 第261号住居跡・カマド・出土遺物



第138図 第262号住居跡



第139図 第262号住居跡出土遺物



第262号住居跡遺物観察表（第139図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	坏	11.2	4.2		AD 1	A	B	60	床直	
2	坏	(12.3)	4.4		ADF 1	A	B	15	埋土	
3	高坏	(15.9)	(4.4)		DF 1	A	B	10	埋土	坏部破片 内・外面一部黒化
4	高坏	(4.4)			DF 1	A	B	10	埋土	脚部破片
5	台付甕		(2.2)	9.3	ADF 1	A	B	40	床直	脚台部破片 外面一部黒化
6	坏	15.5	6.6		ADF 1	A	B	60	埋土	大形模倣坏 器面風化
7	鉢	(19.9)	(4.8)		ADF 1	A	C	5	貯蔵穴	内面黒化
8	甕	(4.7)		7.0	ADF 2	A	B	10	埋土	
9	甕	(16.5)	(16.7)		ADF 2	A	B	20	壁溝	輪積痕明瞭
10	甕	17.0	(10.0)		ADF 2	A	B	35	貯蔵穴	内・外面一部黒化
11	白玉	径1.0cm、厚さ0.3cm、孔径0.3cm、重さ0.4g							埋土	一部破損 滑石製

黒褐色土の単一層で、焼土・炭化物を少量含む。P2は深さ28cm、埋土は焼土をわずかに含む黒褐色土の一層である。他は図示した通りであるが、いずれのピットからも柱痕は確認されていない。床面はあまり硬化していない。

主な出土遺物には、土師器坏と土錘がある。これらはすべて埋土中から出土したものである。

第262号住居跡（第138、139図）

L2—F14・F15・G14・G15グリッドに位置する。東側を旧河川流路に削平されて、さらに第248号住居跡に切られている。形状は長方形を呈する。長辺×短辺

は5.2×4.7m、深さは23cmである。埋土は壁際に崩落土が確認され、自然な埋没状況を示していると考えられる。

貯蔵穴は旧河川にともなう攪乱に切られており、半分は失われている。住居の東南コーナーに設けられていたものと推定される。形状は橢円形もしくは円形で、検出された最大幅は約100cmである。深さは60cm程で、掘り込みは段をもち、底面はほぼ平らである。

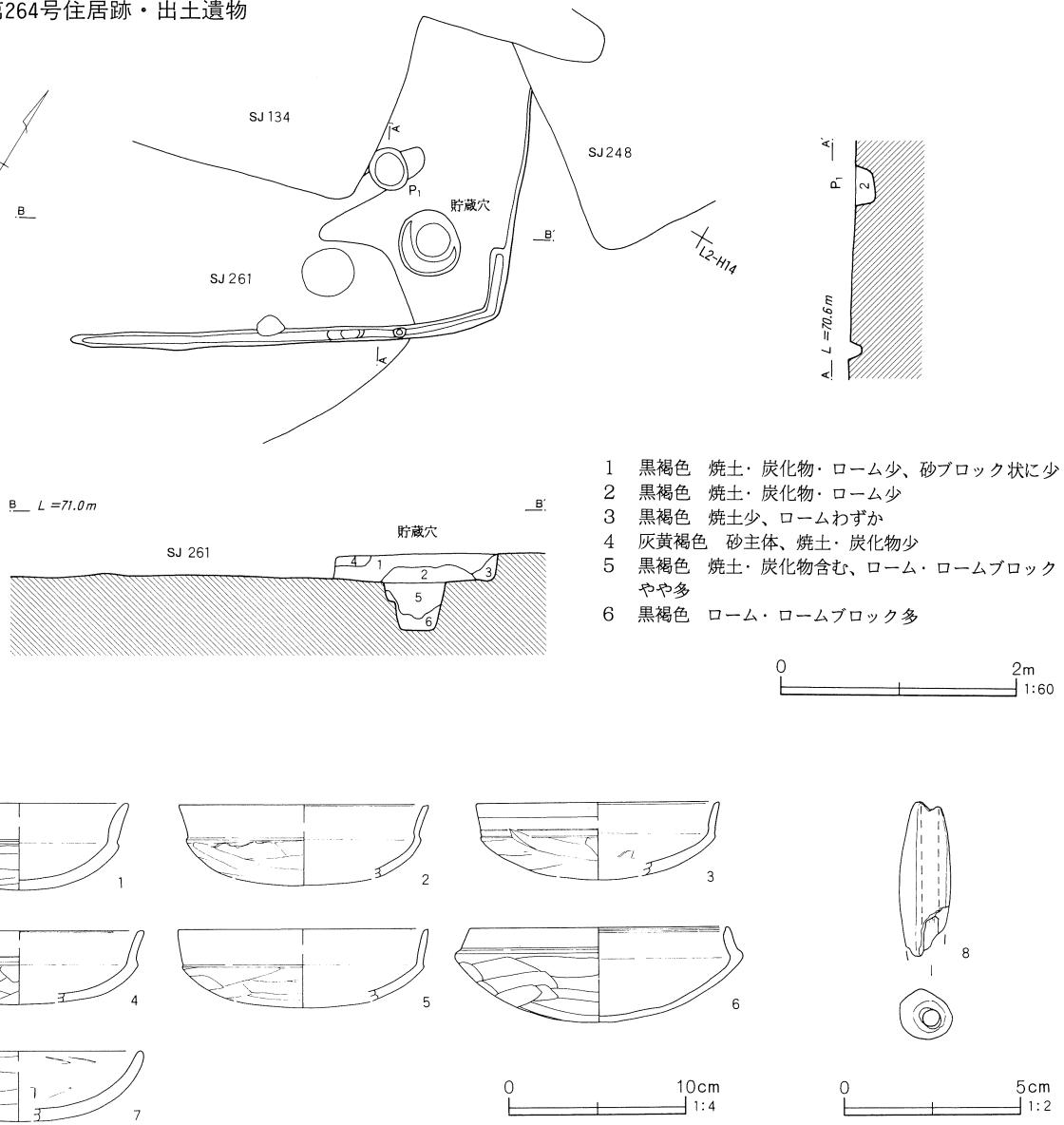
壁溝はほぼ全周するものと考えられる。幅は7~12cm、深さは5~10cmである。掘り込みは明瞭である。カマドは削平された東壁に構築されていたと推定され、貯蔵穴の北側、攪乱寄りの床面付近に焼土が散在

していた箇所があった。

西壁北寄りには舌状の浅い掘り込みが確認された。出入入口の施設に関連したものと考えられる。

ピットは10基検出された。位置的にP3・P4・P6・P8が主柱穴と推定されるが、P5とP9もその深さか

第140図 第264号住居跡・出土遺物



第264号住居跡遺物観察表（第140図）

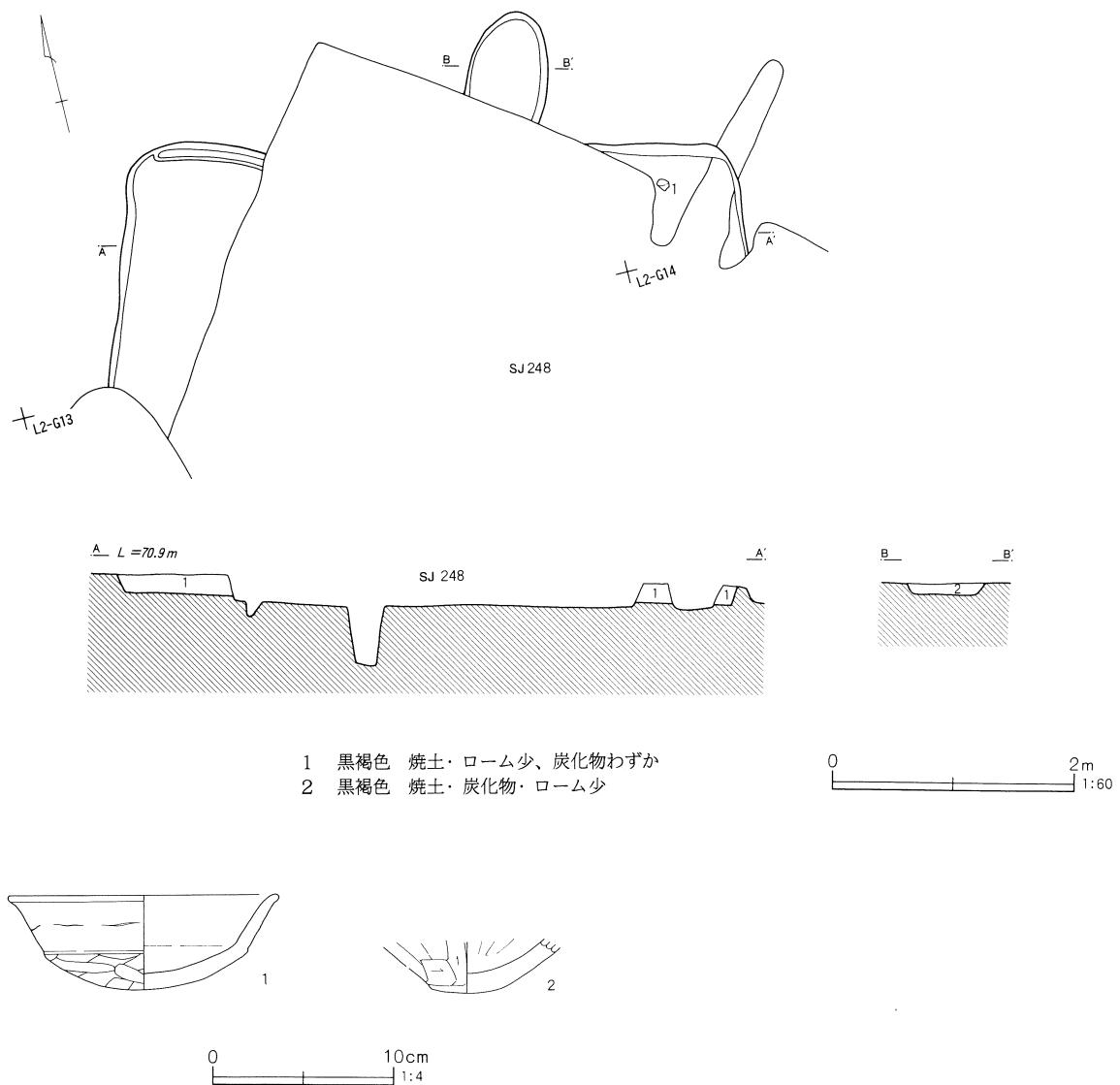
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(12.1)	4.9		F 1	A	C	50	埋土	外面一部黒化
2	壺	(13.9)	(4.5)		D 1	A	F	25	貯蔵穴	内・外面黒化
3	壺	(13.6)	(4.1)		AD 1	A	F	30	貯蔵穴	内・外面黒化
4	壺	(13.9)	(4.0)		AD 1	A	F	20	埋土	内・外面黒化
5	壺	(14.0)	(4.4)		D 1	A	F	35	埋土	内・外面黒化
6	壺	14.4	5.3		AD F 1	A	B	80	貯蔵穴	外面一部黒化 図版47-5
7	壺	(13.8)	(4.0)		AD 1	A	B	15	埋土	外面一部黒化
8	土錘	現長4.3cm、最大径1.4cm、孔径0.5cm、重さ6.5g					貯蔵穴	欠損品		

炭化物を少量含む。

壁の掘り込みは深く、床面もしっかりとした状態で検出された。

出土遺物の量はあまり多くはないが、貯蔵穴内や壁際などから出土している。土師器壺・高壺・甕および臼玉が出土した。5の台付甕脚部は混入遺物と考えられる。

第141図 第265号住居跡・出土遺物



第265号住居跡遺物観察表（第141図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	14.7	5.2	3.9	D F 1	A	B	70	床直	内面一部黒化 図版47-6
2	甕		(2.9)		D F 1	A	B	5	埋土	外面一部黒化 底部破片

である。壁溝は東南壁に認められる。幅12cm、深さ10cm前後である。

本住居跡に伴うピットは1基検出された。

床面の高さは、本住居跡を切る第261号住居跡とはほぼ同一で、切り合う部分は壁溝のみが確認された。

発掘面積は少ないが、比較的多くの遺物が出土した。土師器壺と土錘がある。7の壺は混入と考えられる。

第265号住居跡（第141図）

L2-F13・F14・G13・G14グリッドに位置する。第248号住居跡に大半を切られており、その形状は不明だが、少なくとも方形を呈するものと推定される。北壁の長さは5.06m、深さは19cmである。

壁溝は北西コーナー寄りの北壁に検出された。幅12cm、深さ11cmである。北側に楕円形の落ち込みがあり、位置的に本住居跡に伴うもの（カマド痕跡か？）と思

い調査したが、その形跡は認められなかった。

床面は硬いが、貼り床は認められない。

出土遺物はたいへん少なく、図示できたものは土師器壺と甕底部のみである。

第274号住居跡（第142図）

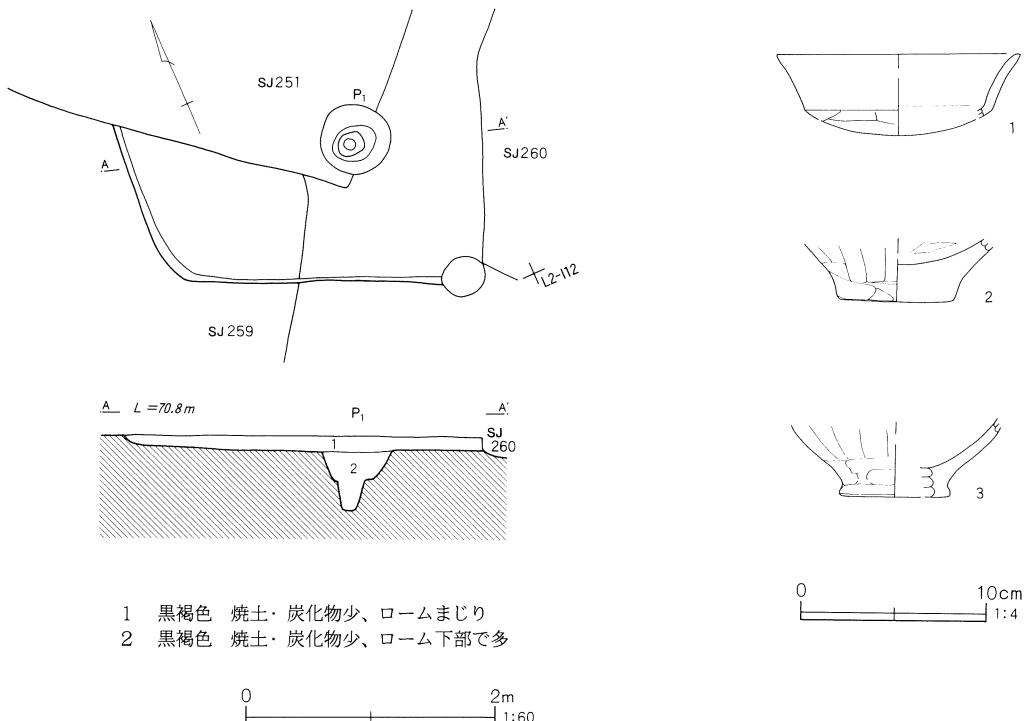
L2-H11・H12グリッドに位置する。重複する住居跡は第134・251・259・260号住居跡と多く、コーナー部分が調査されたに過ぎない。新旧関係は明確にとらえられなかった。深さは11cmである。

削平され掘り込みは浅いが、床面には貼り床が一部で認められた。

P1は本住居跡に伴う柱穴の可能性がある。カマド等の施設は検出されなかった。

遺物は、埋土中からわずかな量の遺物が出土した。土師器壺・甕底部がある。

第142図 第274号住居跡・出土遺物



第274号住居跡遺物観察表（第142図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(12.9)	(3.4)		A 1	A	B	10	埋土	器面風化顯著
2	甕		(3.4)	6.2	AD 1	A	C	5	埋土	底部破片
3	小形甕		(4.3)	5.9	AD F 1	A	B	5	埋土	器面風化顯著

第276号住居跡（第143図）

L2—H12 グリッドに位置する。重複する第134・260・261号住居跡すべてに切られており、コーナー部分のみが検出された。床面までの深さは10cmである。

貯蔵穴は確認されたコーナーの南西壁際に検出された。楕円形を呈し、規模は62×50cm、深さは27cmである。バケツ状に掘り込まれており、底部はほぼ平らである。

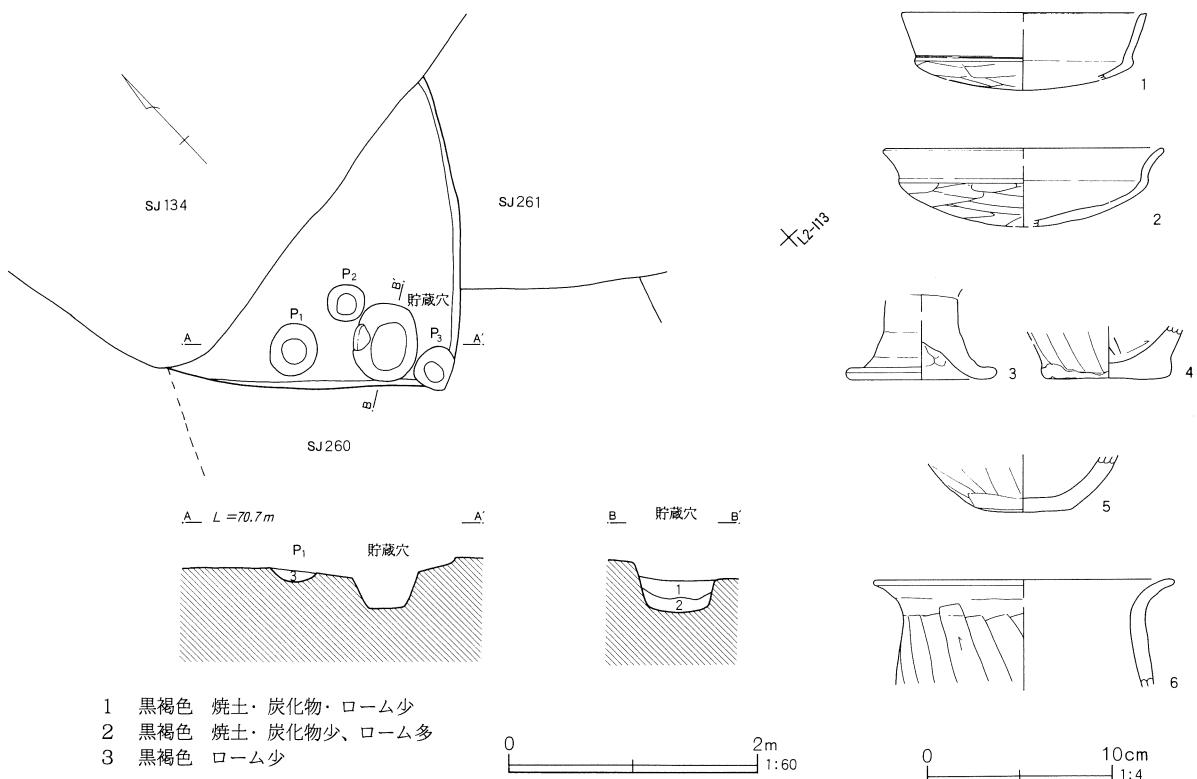
切りあう遺構のため、壁の掘り込みは浅く、立ち上

がりは明瞭でない。床面は削平されており、表面の凹凸が著しい。

ピットは貯蔵穴を囲むように3基検出されたが、すべてのピットが本住居跡に伴うという確証はない。P2は深さ16cmである。P3は深さ17cm、埋土はロームと焼土をわずかに含む黒褐色土である。

遺物は少量出土している。土師器壺・甕等があり、すべて破片である。

第143図 第276号住居跡・出土遺物

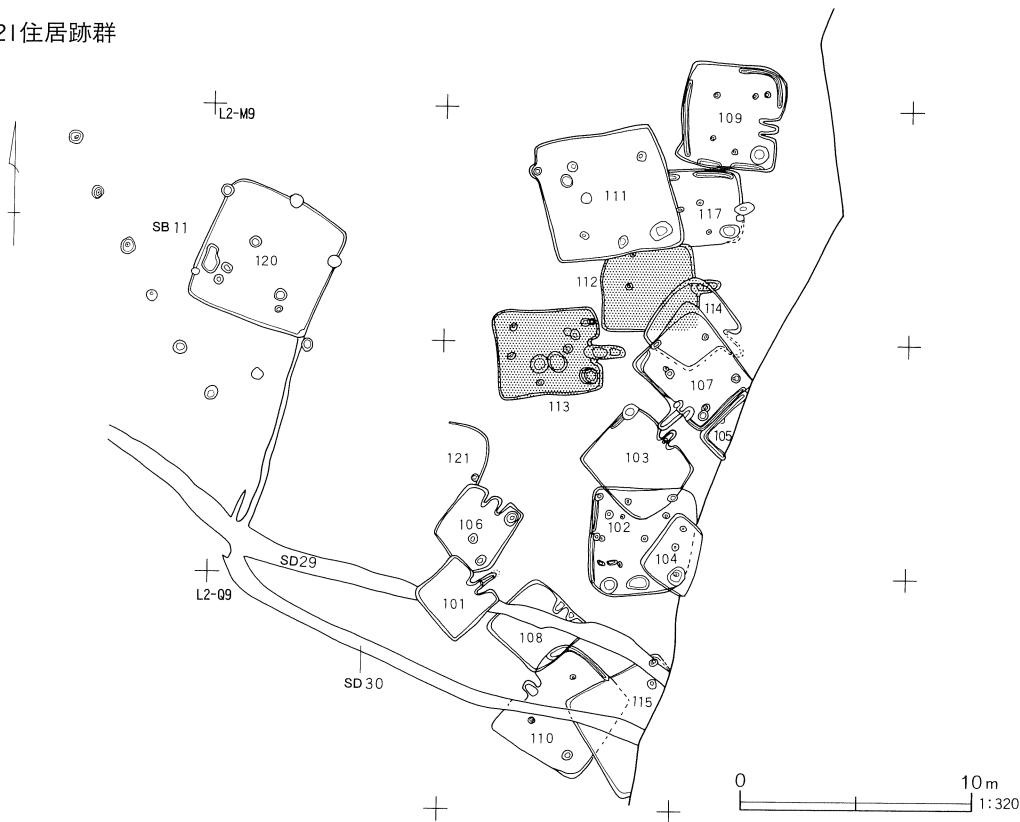


第276号住居跡遺物観察表（第143図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(12.9)	(3.6)		ADF 1	A	C	5	埋土	外面一部黒化
2	壺	(14.7)	(4.1)		A 1	A	C	15	埋土	器面風化顯著
3	高壺	(4.5)	8.0	AD 1	A	B	20	埋土	脚部破片	
4	甕	(2.8)	6.9	ADF 2	A	B	10	埋土		
5	甕	(2.9)	5.2	ADF 5	A	C	10	埋土		
6	甕	(15.8)	(5.7)	ADF 2	A	C	10	埋土		

4. 第21住居跡群

第144図 第21住居跡群



※ スクリーントーンは平安時代の住居跡

第101号住居跡（第145、146図 図版1上）

L2—P10・P11・Q10・Q11 グリッドに位置する。重複関係は中央を第29号溝跡によって切られており、第106号住居跡を接するように切っている。形状は方形を呈し、長辺×短辺は 2.6×2.55 m、深さは20cmである。カマドの傾きは N—46°—E である。

カマドは北東壁のわずかに東寄りで検出された。遺存状態は比較的良好である。燃焼部は箱形で、規模は 58×38 cmである。底面はほとんど平坦で、非常に良く焼けており、加熱による硬化面が径30cmほどの範囲で検出された。煙道部へは段をなして移行し、煙道部の規模は長さ25cm、幅8cmである。煙出し口は攪乱を受けている。袖部はローム地山の掘り残しを基部とし、砂質土によって構築されている。右袖には補強材として土師器の甕が逆さに埋め込まれている。

床面は踏みしめられており、明瞭であった。壁溝や貯蔵穴は検出されなかった。

掘形は全体ではなく、南コーナーを中心とした部分に限定されていた。また、カマド手前の床下からは、ピットが2基検出されている。

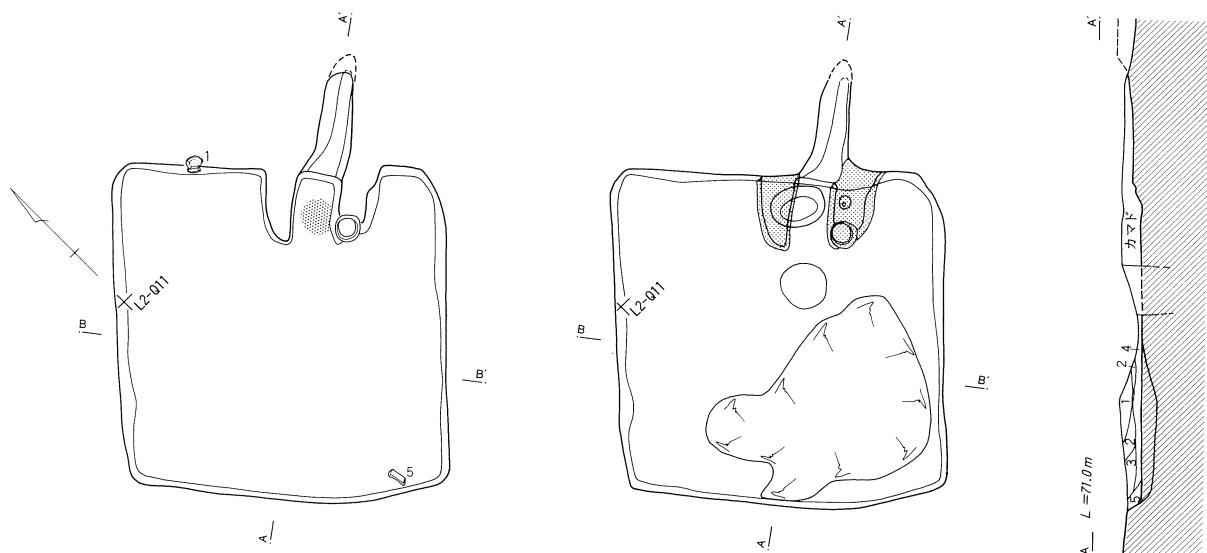
遺物の量は少ない。北東壁の落ち際から土師器壊が、南コーナーの床面から砥石が出土した。埋土中から出土した壊の破片（2・3）は、流れ込んだものと考えられる。

第102号住居跡（第147、148図 図版1中）

L2—P12・P13・Q12・Q13 グリッドに位置する。重複関係は、第104号住居跡よりも新しいが、第103号住居跡との切り合いはよくわからない。形状は方形を呈し、長辺×短辺は 4.48×4.65 m である。埋土の深さは18cmで、黒褐色土による自然埋没を示していると考えられる。長辺の傾きは N—180°—W である。

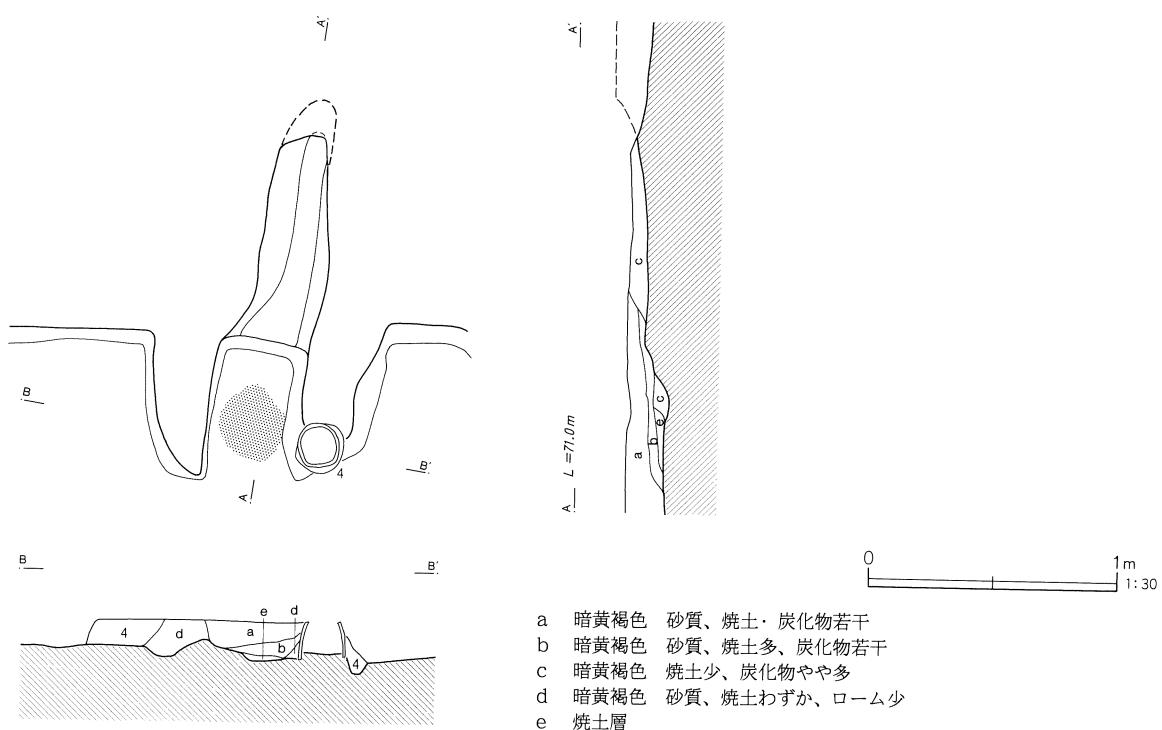
南壁中央付近に、皿状の掘り込みが検出された。規模は 62×105 cm、深さは約10cmである。埋土には粘土と

第145図 第101号住居跡・カマド



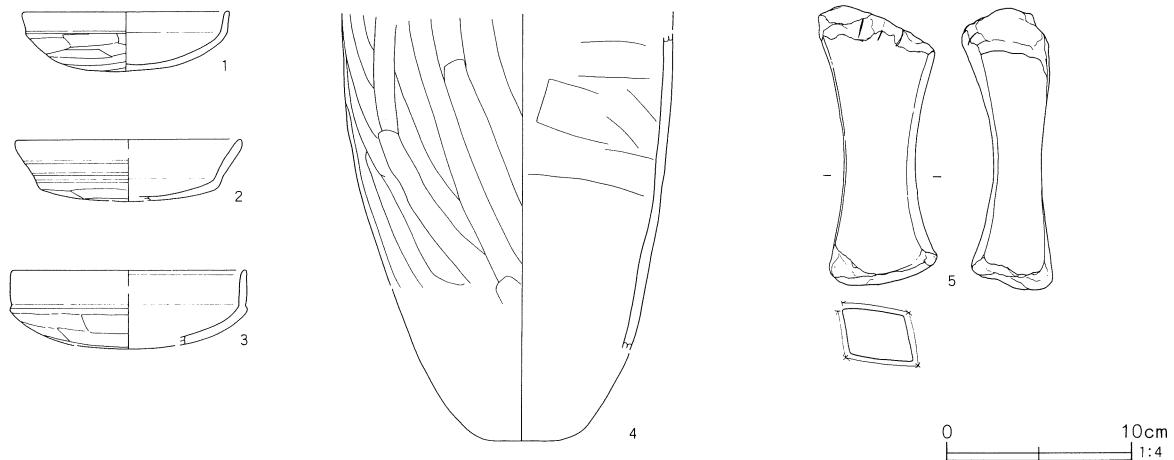
1 暗褐色 焼土・ローム・火山灰少
 2 暗褐色 焼土少・ロームやや多、火山灰わずか
 3 暗褐色 焼土・火山灰わずか
 4 暗黄褐色 焼土少・ローム若干
 5 暗黄褐色 焼土わずか・ローム若干

0 2m 1:60



a 暗黄褐色 砂質・焼土・炭化物若干
 b 暗黄褐色 砂質・焼土多、炭化物若干
 c 暗黄褐色 焼土少、炭化物やや多
 d 暗黄褐色 砂質・焼土わずか・ローム少
 e 焼土層

第146図 第101号住居跡出土遺物



第101号住居跡遺物観察表（第146図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	10.9	3.2		ADF 1	A	B	85	壁際	図版37-8
2	壺	(11.8)	(3.2)		ADF 1	A	B	25	埋土	
3	壺	(12.3)	(4.0)		AF 1	B	F	15	埋土	
4	甕		(16.8)		AD 2	A	B	45	カマド袖	補強材
5	砥石	長さ14.7cm、断面幅2.5×3.2cm、重さ384.2g							床直	研面4面 刃傷あり 凝灰岩

炭化物が多量に含まれており、底面は平らで、被熱している。カマドの燃焼部の痕跡と考えられる。

貯蔵穴はカマド痕跡の脇、南西コーナーに位置する。規模は58×65cmの円形で、深さは32cmである。

壁溝は東壁際にのみ検出された。幅は20~25cm、深さは約10cmである。

ピットは13基検出されたが、そのうち主柱穴と思われるものはP1・P2・P3・P4の4基である。柱穴は径20~30cmと小さいものの、深さは50~72cmと深い。P1—P2、P3—P4の間隔は1.85m、P1—P4間は2.1m、P2—P3間は2.05mであり、だいたい均等に配置されている。

掘形は南西コーナーを中心とし、北側は地山面を床面としている。貼り床は認められない。壁の遺存状態はわるく、立ち上りがほとんどない部分もある。

床面から浮いた位置で、炭化材がカマド痕跡と壁溝の位置から出土した。床面や壁面の状況等から、本住居跡は焼失家屋とは考えにくく、これらの炭化材が上屋材である可能性は低い。

出土遺物は破片が主で、量も少ない。北東コーナーの床面から、ミニチュア土器が出土している。埋土からは土師器壺・甕が出土している。

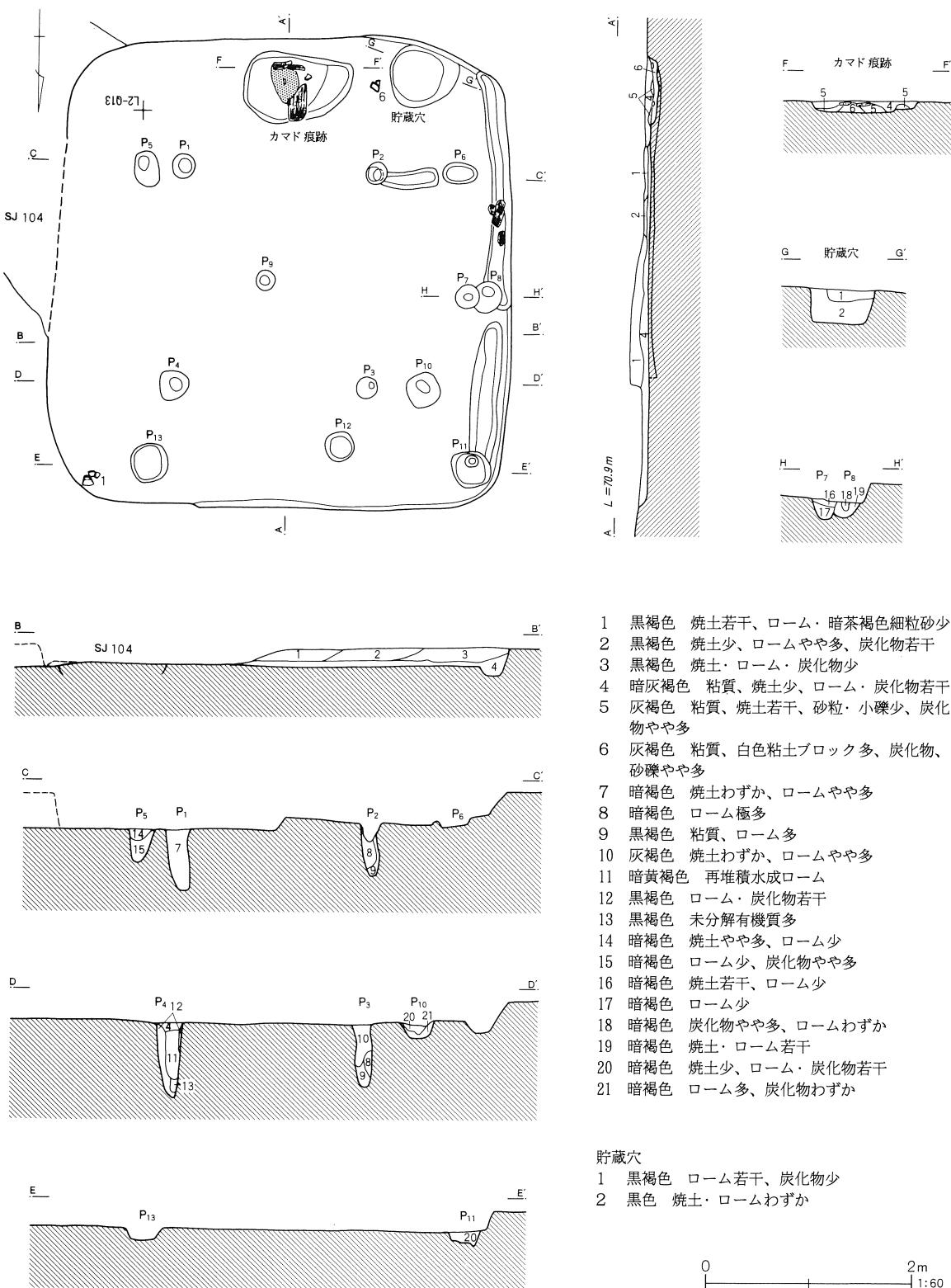
第103号住居跡（第149、150図 図版1下）

L2—O12・O13・P12・P13グリッドに位置する。重複関係はあまり明確にとらえられなかったが、第107号住居跡に切られ、第102号住居跡を切っているようである。形状は長方形を呈する。規模は長辺×短辺が4.03×3.4m、床面までの深さは8cmである。埋土は暗褐色の土を主体としており、比較的短期間での埋没が想定される。カマドの傾きはN—45°—Eである。

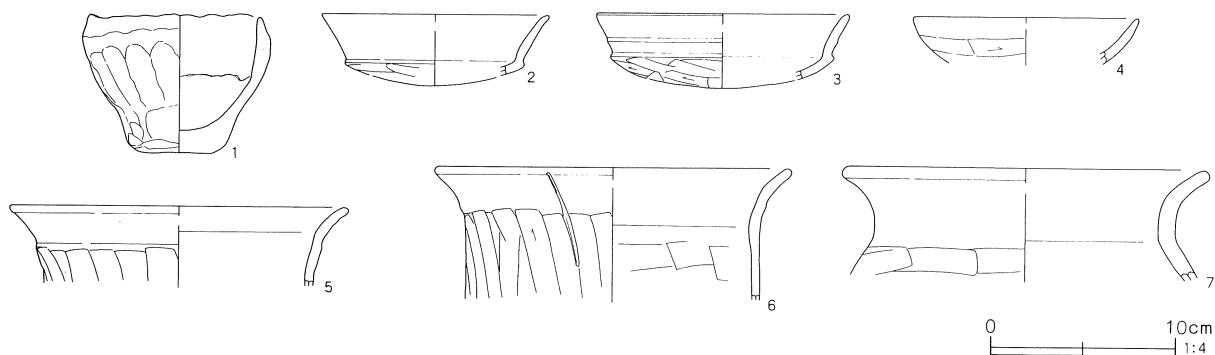
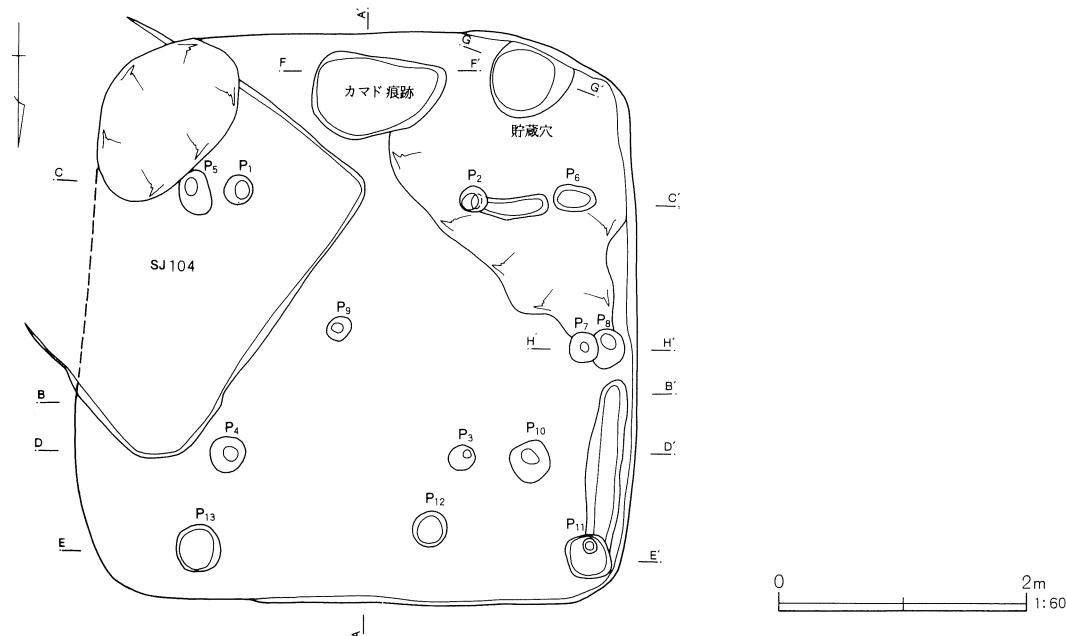
カマドは北東壁の中央にあり、燃焼部のみが検出された。箱形で、規模は49×34cmである。底面はほぼ平坦だが、右袖寄りにピット状の小さな落ち込みがある。燃焼部の中心は床面・袖部内壁ともに被熱している。袖部は砂質土によって構築され、地山土（ローム）の基部は存在しない。

貯蔵穴は北側コーナーに検出され、北側の立上りを

第147図 第102号住居跡(1)



第148図 第102号住居跡(2)・出土遺物



第102号住居跡遺物観察表（第148図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	ミニチュア	9.1 (11.9)	7.4 (3.2)	4.6	A D F 1	A	B	80	床直	外面指ナテ 図版55-1
2	壺	(13.2)	(3.5)		A D F 1	A	B	10	埋土	
3	壺	(11.8)	(2.5)		A D F 1	A	C	20	埋土	
4	壺	(17.6)	(5.2)		A D E F 5	A	B	10	埋土	
5	甕	(18.5)	(7.0)		A D E F 5	A	B	5	埋土	口縁部破片
6	甕	(18.9)	(5.7)		A D F 1	A	C	5	床直	
7	甕							5	埋土	口縁部破片

住居の壁と一にする。規模は63×52cm、深さは35cmである。バケツ状に掘り込まれており、底面は平坦となる。

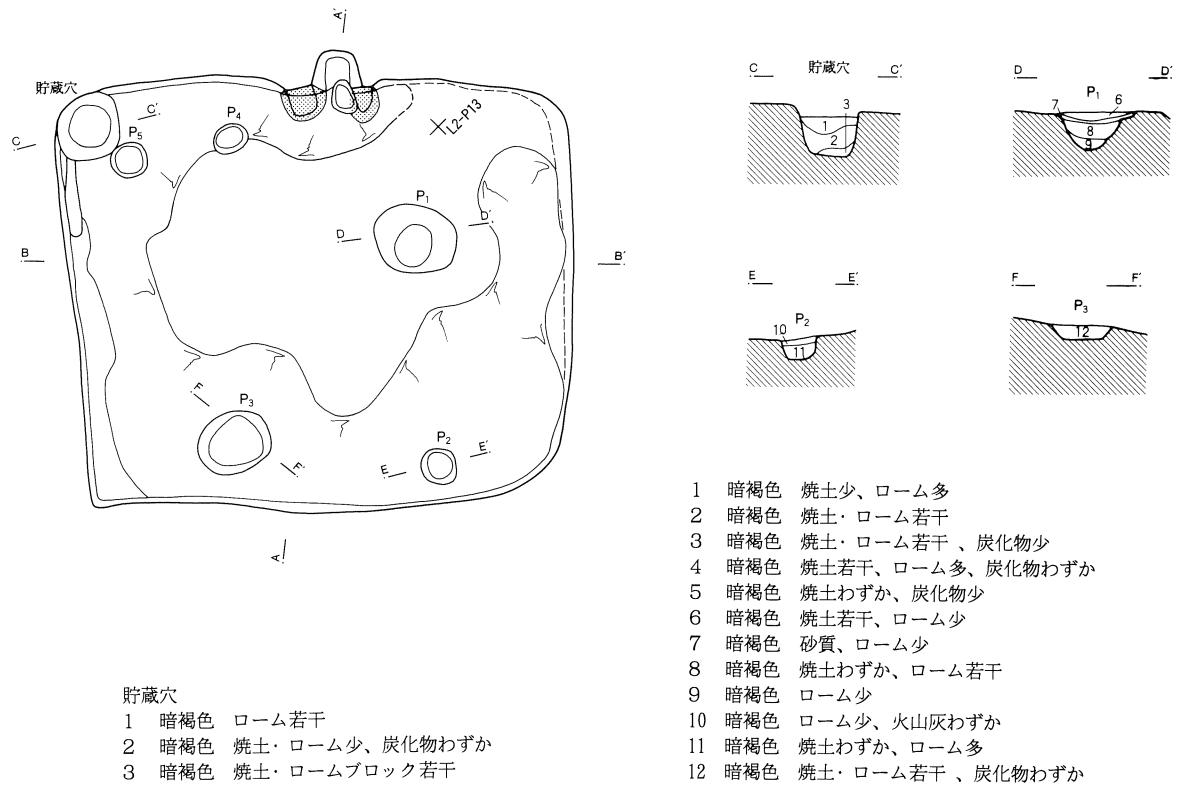
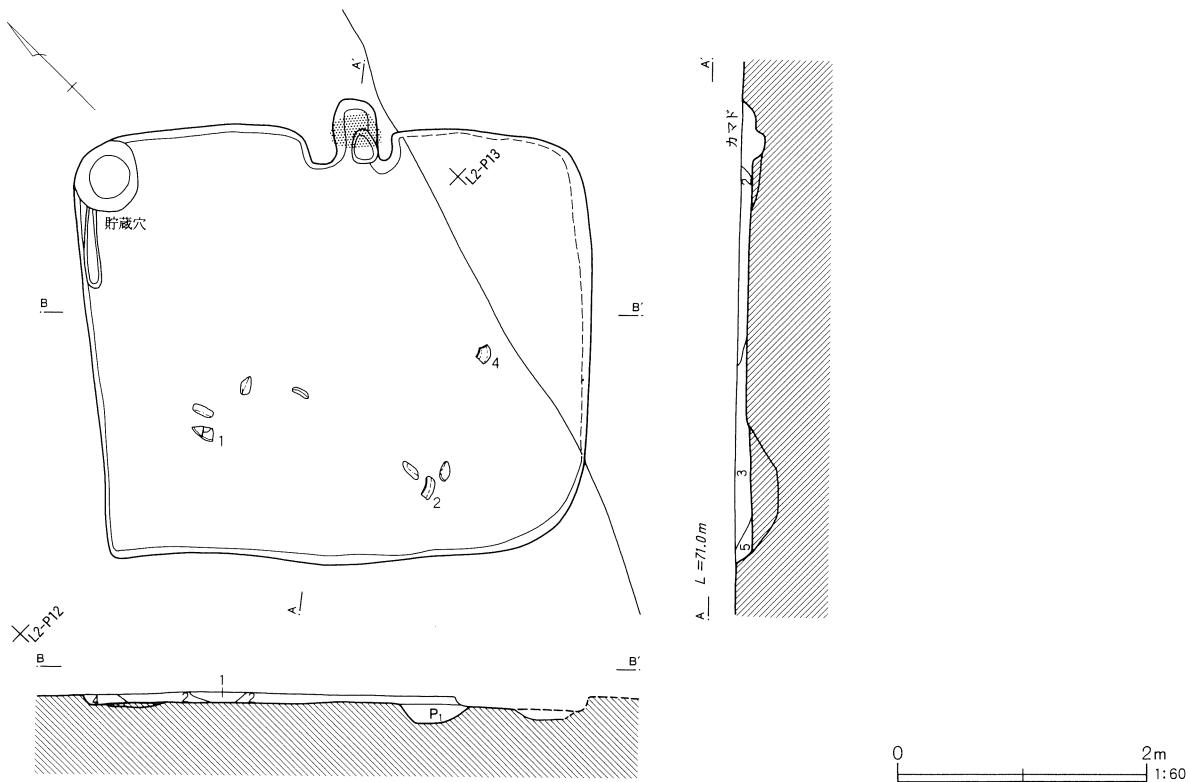
壁溝は深さ10cm前後と浅く、貯蔵穴に接してみられるのみである。

壁は遺存状態がわるく、確認された部分は緩やかに

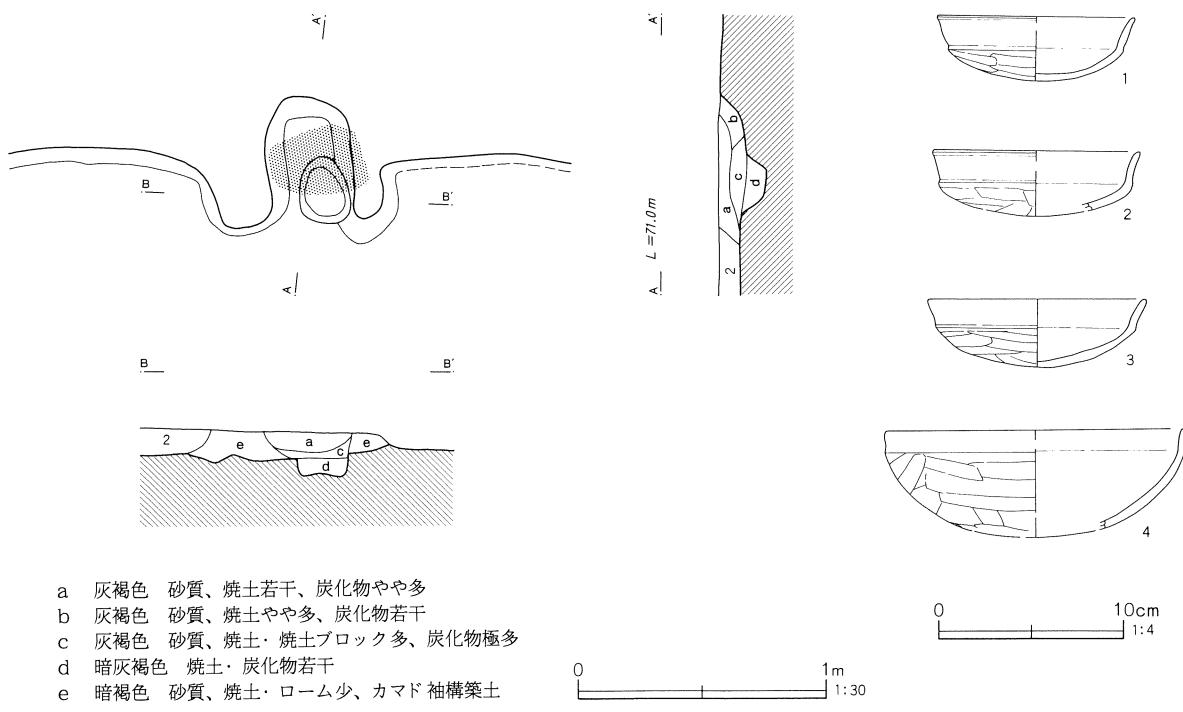
傾斜する。床面は平坦で、中央部分に貼り床が認められた。掘形は、ドーナツ状に掘りくぼめるものである。床下からはピットが5基検出された。

床面直上から数点の土師器壺・甕が出土した。埋土からの出土遺物は少ない。図示できなかったが、須恵器蓋と甕の破片が出土している。

第149図 第103号住居跡



第150図 第103号住居跡カマド・出土遺物



第103号住居跡遺物観察表（第150図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(10.3)	3.4		D 2	B	B	60	床直	
2	壺	(10.8)	(3.2)		F 1	A	C	35	床直	器面風化
3	壺	11.4	3.6		D F 1	A	B	60	埋土	器面風化
4	椀	(15.8)	(5.3)		D 1	A	B	40	床直	器面風化

第104号住居跡（第151図 図版2上）

L2-P12・P13・Q12・Q13グリッドに位置する。第102号住居跡に切られ、東側は旧女堀川流路によって削平されている。北西壁の長さは2.78m、削平されているため、埋土は深いところでも10cmしか残っていないなかった。埋没状況は不明である。

カマドは確認されなかった。貯蔵穴は南西壁寄りに検出された。楕円形を呈し、規模は74×80cm、深さは64cmである。掘り込みはバケツ状で、底面は平らである。

壁溝は幅約10cm、深さ2~3cmの浅いもので、西コーナーにのみ検出された。

ピットは、P1が深さ6cm、P2が深さ10cmと浅い。柱穴とは考えにくい。P1の埋土には焼土が多く含まれており、炉の可能性もあるが、底面はまったく火を

受けていなかった。

遺物は、貯蔵穴から高壺が1点出土している。脚部は埋土上層から、壺部は底面直上から出土し、接合したものである。埋土上層からは、この他に、土師器の破片と炭化材が出土した。図示できなかった遺物に、ハケメで調整された土師器甕の胴部破片がある。

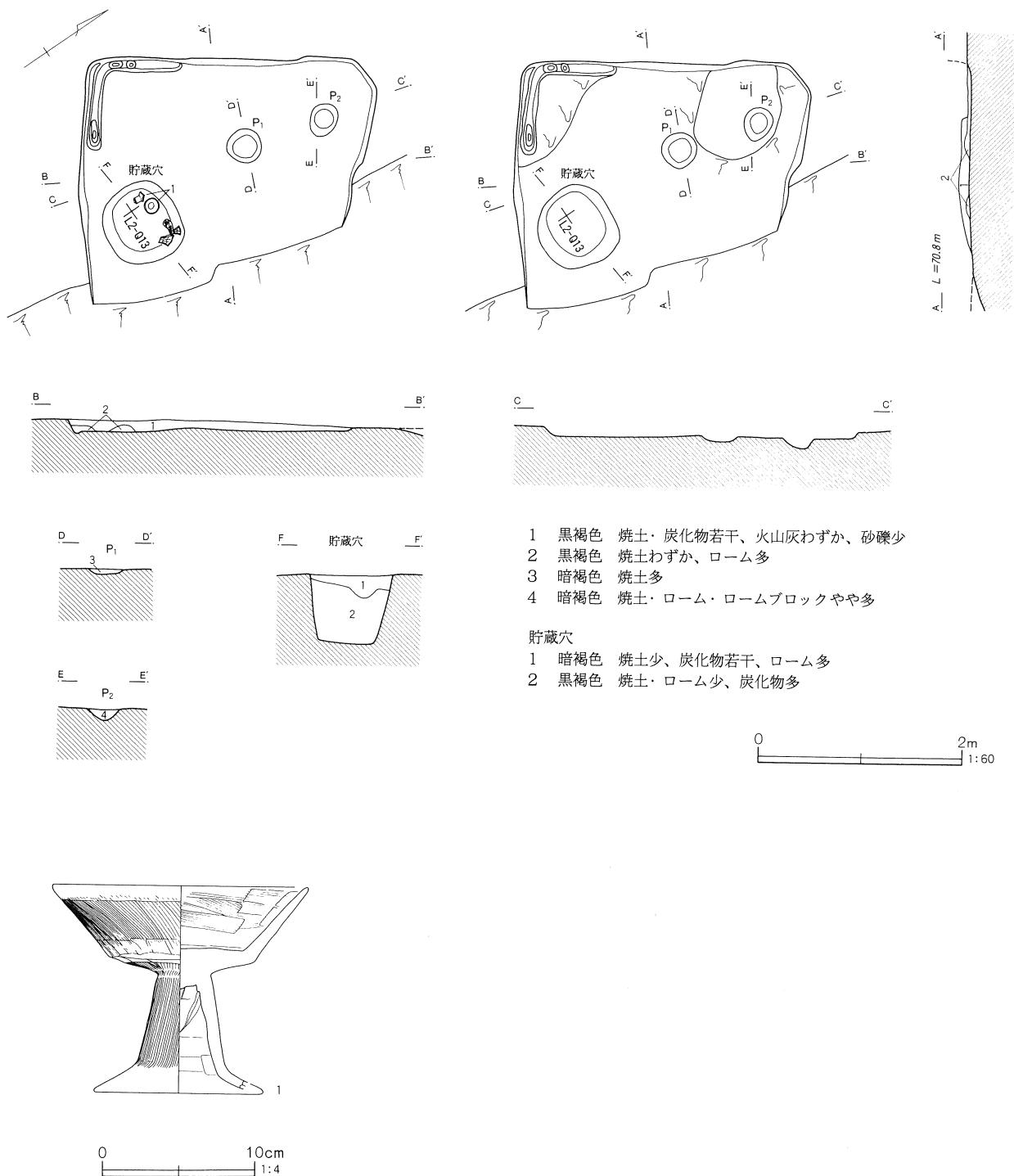
第105号住居跡（第152図）

L2-O13グリッドに位置する。大半が旧流路によって削平されており、西コーナー一部が検出されたのみである。さらに第107号住居跡に切られている。形状は不明で、深さはわずかに10cmが残る。

壁溝は確認された部分すべてに巡っている。幅約15cm、深さ3cm程と浅い。

遺物はほとんど出土しなかった。

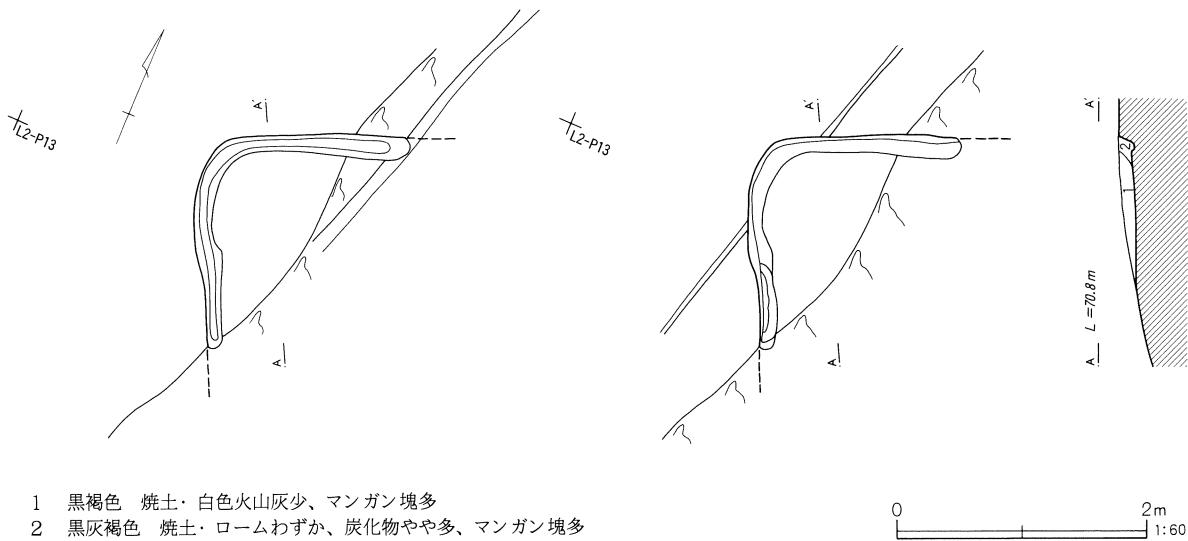
第151図 第104号住居跡・出土遺物



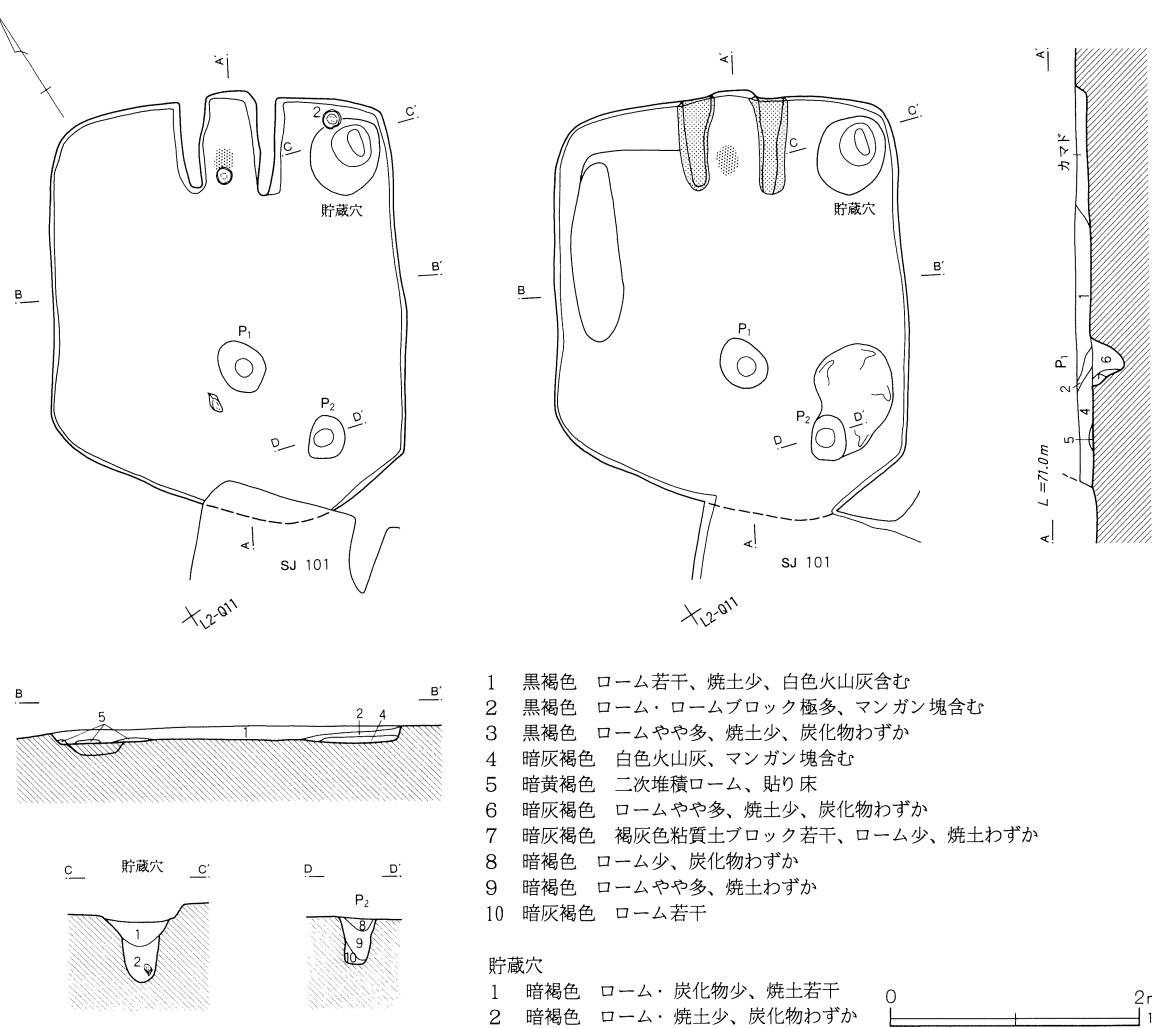
第104号住居跡遺物観察表（第151図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	高坏	16.4	(13.2)		A D F 2	A	B	80	貯藏穴	外面ハケメ→坏底部・口縁部ナデ

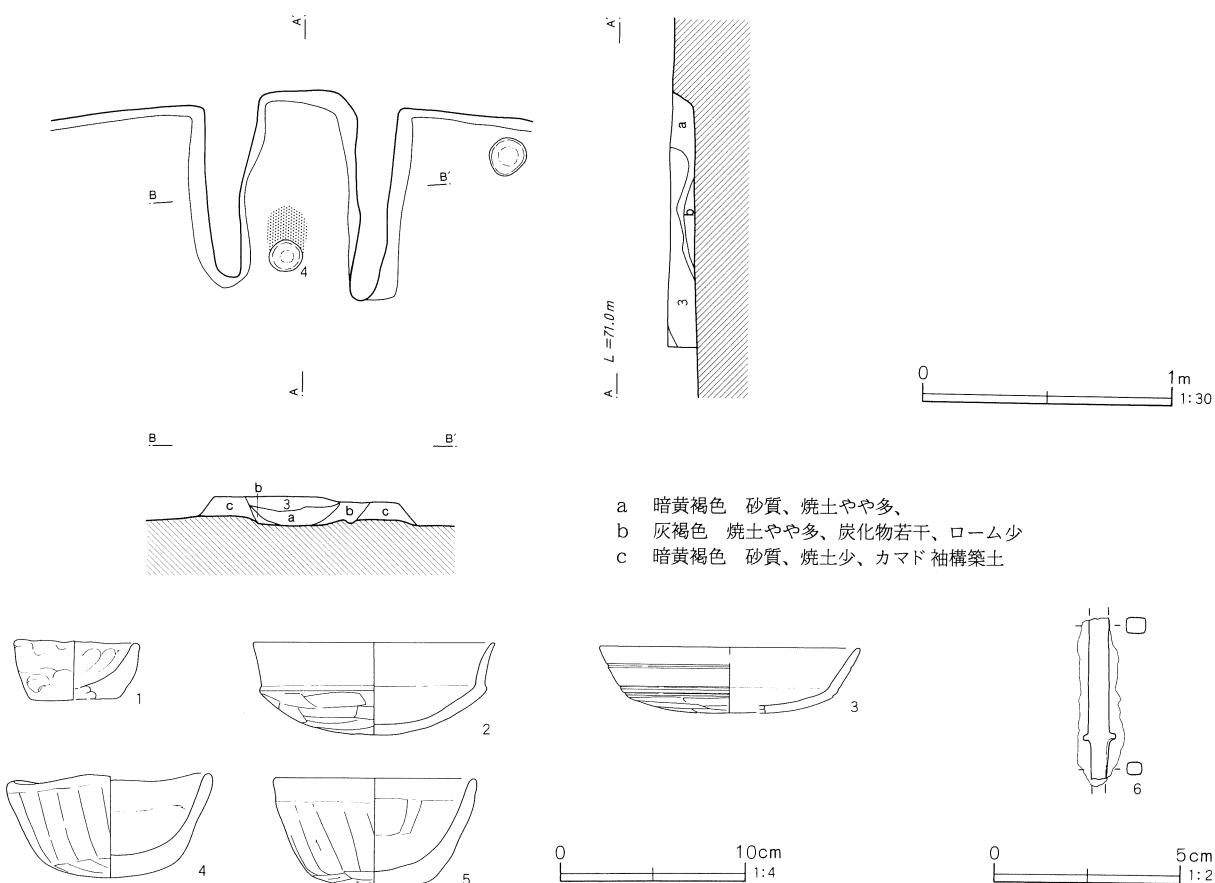
第152図 第105号住居跡



第153図 第106号住居跡



第154図 第106号住居跡カマド・出土遺物



第106号住居跡遺物観察表（第154図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	ミニチュア	6.3	3.2	4.6	ADF 2	A	B	70	埋土	手づくね 図版55-2
2	壺	12.7	4.9		AD 1	A	B	100	床直	器面風化 図版37-9
3	壺	(13.8)	(3.5)		ADF 1	A	C	40	埋土	器面風化
4	椀	10.4	5.6	6.1	ADF 2	A	B	70	カマド	歪みあり
5	椀	10.6	5.8	6.1	ADF 1	A	B	40	埋土	
6	鉄鑓	現長4.3cm、幅0.55cm、6.1g							埋土	長頸鑓 頸部破片

第106号住居跡（第153、154図 図版2中）

L2—P11 グリッドに位置する。第101号住居跡に切られているためか、南側の壁ラインは明確にできなかった。形状は方形で、規模は長辺×短辺3.05×2.78、埋土の深さは10cmである。カマドの傾きはN—33°—Eである。

カマドは北壁中央に構築されている。燃焼部のみ検出され、煙道部は削平されているものと考えられる。燃焼部の形態は箱形を呈し、規模は82×43cmである。掘り込みはほとんどなく、底面は平坦で、一部被熱で赤化する箇所が認められる。袖部は長く、砂質土によっ

て構築されている。右袖部内壁の被熱が顕著である。

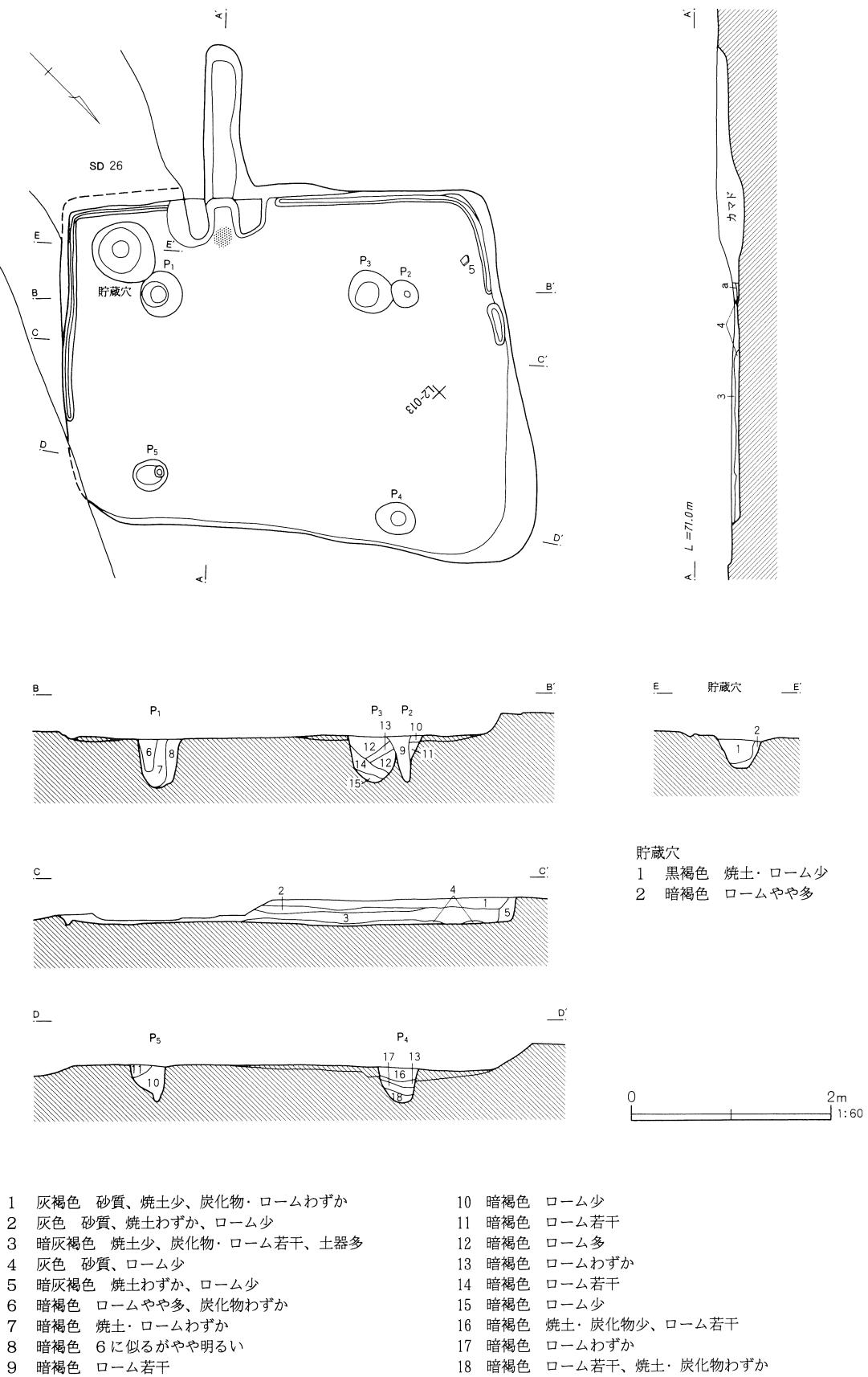
貯蔵穴は楕円形で、規模は62×54cm、深さは52cmである。深くなるにしたがって幅を狭めてピット状になる。

ピットは2基確認された。本住居跡に伴うが、ともに柱痕は確認されなかった。

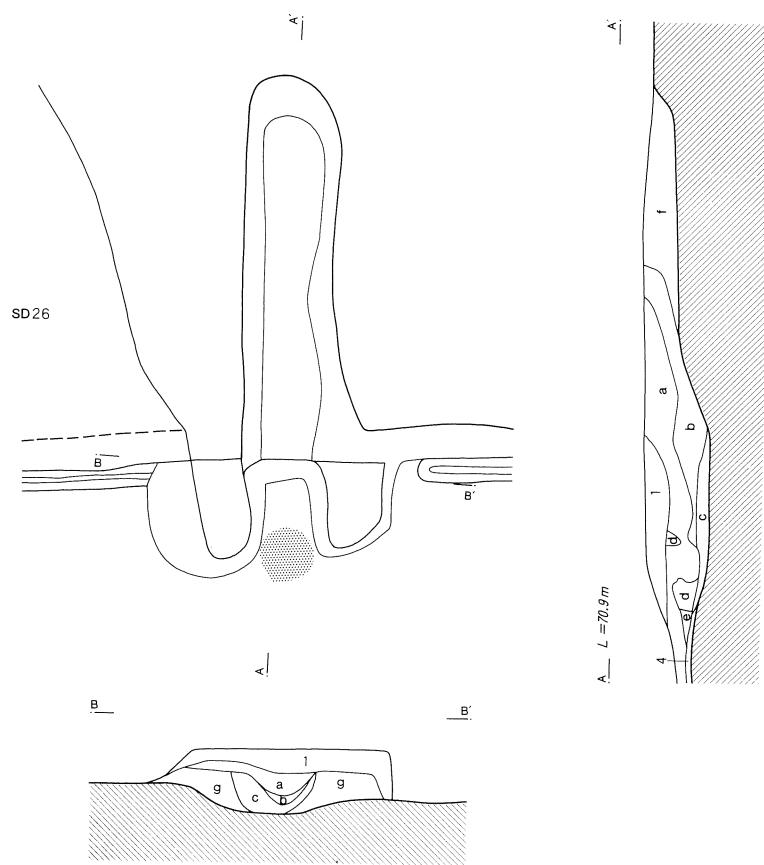
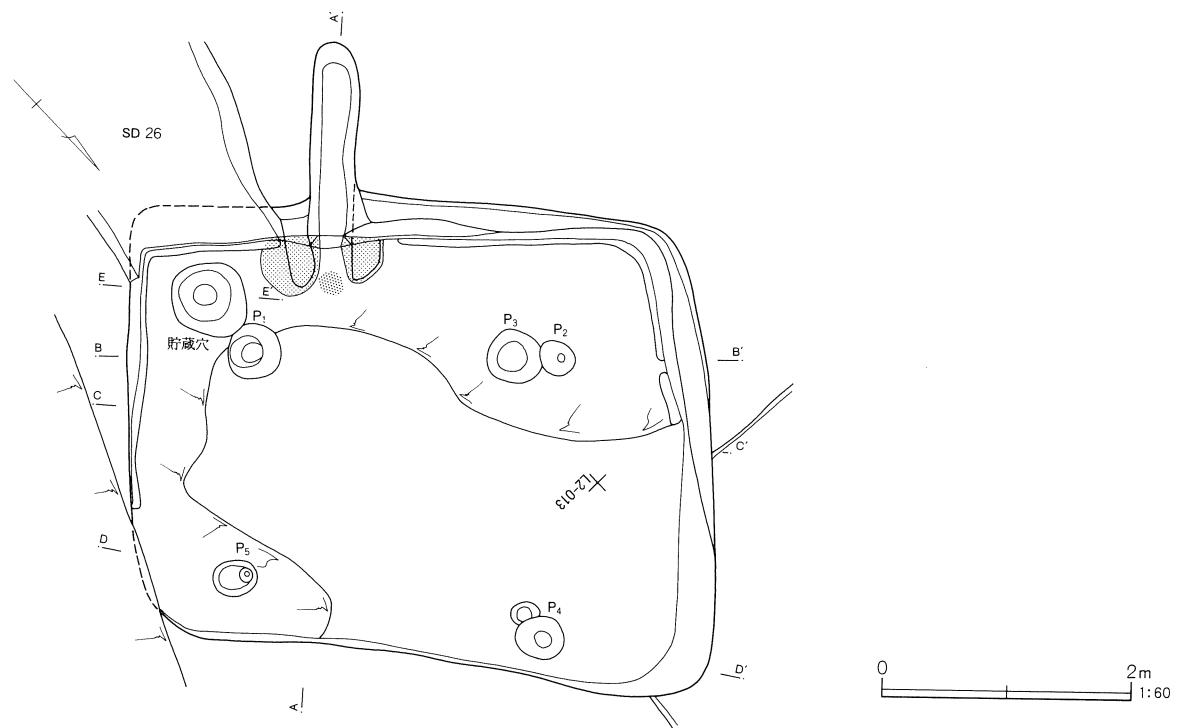
床面は平滑で、部分的に貼り床が認められた。

カマドの支脚にあたる部分には、土師器椀が正位置に設置されていた。貯蔵穴際から土師器壺が出土している。他の遺物はすべて埋土中から出土した。土器以外には、鉄鑓が1点出土している。

第155図 第107号住居跡(1)

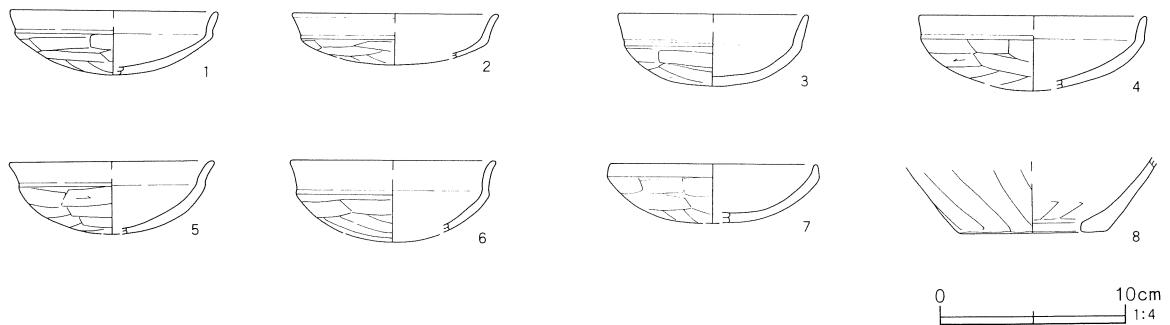


第156図 第107号住居跡(2)・カマド



- a 暗黄褐色 砂質、焼土やや多、炭化物・ローム少
- b 暗褐色 焼土少、砂・炭化物わずか
- c 暗褐色 砂質、焼土多、炭化物若干
- d 暗黄褐色 砂質、ローム若干
- e 暗褐色 均質な層、焼土わずか
- f 暗黄褐色 焼土若干、炭化物わずか
- g 暗褐色 砂質、焼土少、カマド
袖構築土

第157図 第107号住居跡出土遺物



第107号住居跡遺物観察表（第157図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(10.9)	(3.4)		ADF 1	A	B	50	埋土	
2	壺	(10.8)	(2.4)		D 1	A	C	20	埋土	器面風化顕著
3	壺	(9.9)	3.9		AD 1	A	B	30	床下	器面風化
4	壺	(12.0)	(3.9)		ADF 2	A	C	20	カマド	
5	壺	(10.8)	(3.9)		ADF 2	A	B	45	床直	
6	壺	(10.7)	(3.8)		D 1	A	C	20	埋土	内・外面黒化
7	壺	10.8	(3.1)		D 1	A	C	20	埋土	
8	甌		(3.9)	7.8	AD 2	A	B	5	埋土	底部破片 内面、外面一部黒化

第107号住居跡（第155～157図 図版2下）

L2-N12・N13・O12・O13 グリッドに位置する。重複関係は第105号住居跡と第26号溝跡に切られ、第103号・第104号住居跡を切っている。北側はこれらの切り合いのため、プランおよび施設を明瞭に確認できなかった。形状は長方形を呈すると考えられる。長辺×短辺は4.44×3.44m、深さは18cmである。カマドの傾きはN-135°-Wである。

カマドは南西壁のやや東寄りに構築されている。燃焼部は比較的小さく、規模は約40×30cmである。底は浅く掘り込まれている。煙道部は燃焼部から滑らかな段をもって通じ、煙出し口にむかってゆるやかに浅くなる。規模は約150×35cmである。袖部は砂質暗褐色土によって構築されている。燃焼部底面および煙道部側壁の一部には、被熱による赤化が認められる。

貯蔵穴は円形で、床面に近い部分は緩やかに浅く掘り込まれている。主体となる部分の規模は直径約40cm、深さは35cmである。

壁溝はカマドのある壁を中心として、南側にのみ検出された。幅約10cm、深さは5cmほどである。

ピットは5基検出された。そのうち主柱穴と思われ

るのがP1・P2・P4・P5の4基である。ピット間の距離は、P1-P3間が約2.1m、P3-P4間が約2.3m、P4-P5間が約2.5m、P1-P5間がもっとも短く約1.8mである。P2は、P3の埋土を切っており、柱の建て替えが想定される。P4とP5は柱痕が観察できなかった。

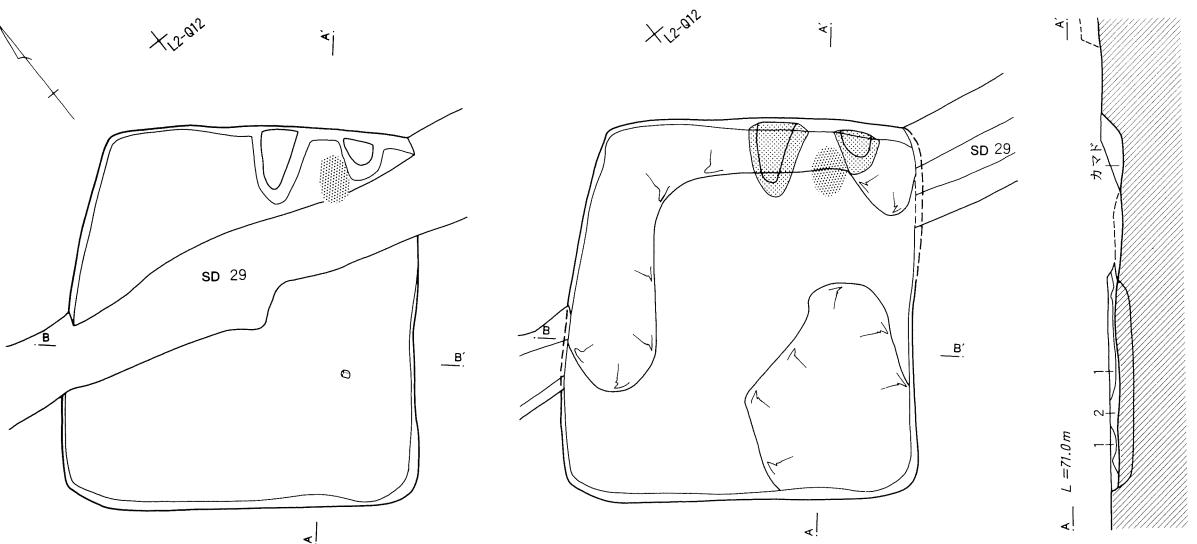
遺物は、埋土中や床下から土師器壺・甌の破片が出土している。図示したもの以外に、土師器甌や須恵器の破片がある。

第108号住居跡（第158、159図）

L2-Q11・Q12 グリッドに位置する。第29号溝跡に切られ、第110号住居跡を切っている。形状は方形を呈し、長辺×短辺は3.0×2.77m、深さは12cmである。カマドの傾きはN-38°-Eである。

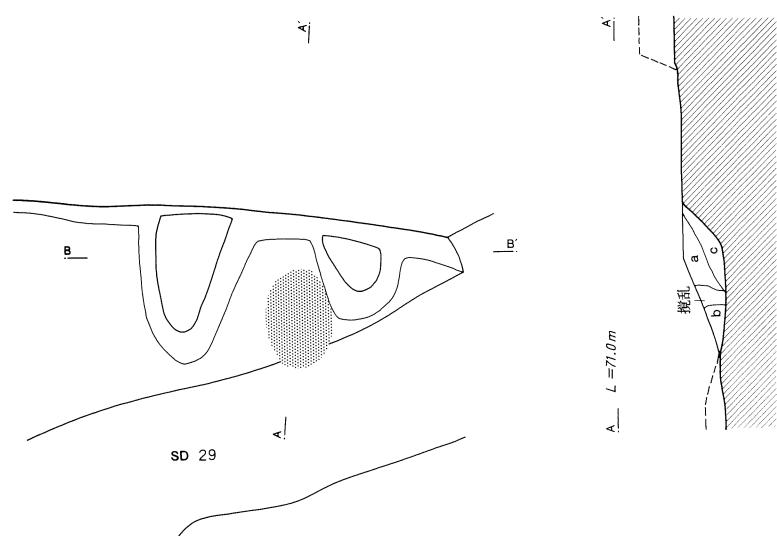
カマドは北東壁の東コーナー寄りに検出された。煙道部は削平されており、燃焼部のみが残っていたものである。燃焼部は台形を呈しており、底の掘り込みはほとんどなく平らである。袖部は主に砂質土で構築されている。被熱箇所は燃焼部底面の右側袖寄りの範囲で検出された。

第158図 第108号住居跡・カマド



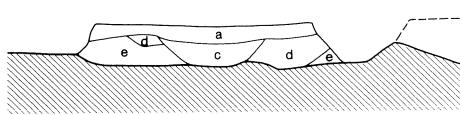
1 暗褐色 焼土やや多、ローム若干
2 黒褐色 焼土・炭化物わずか、ローム少

0 2m 1:60

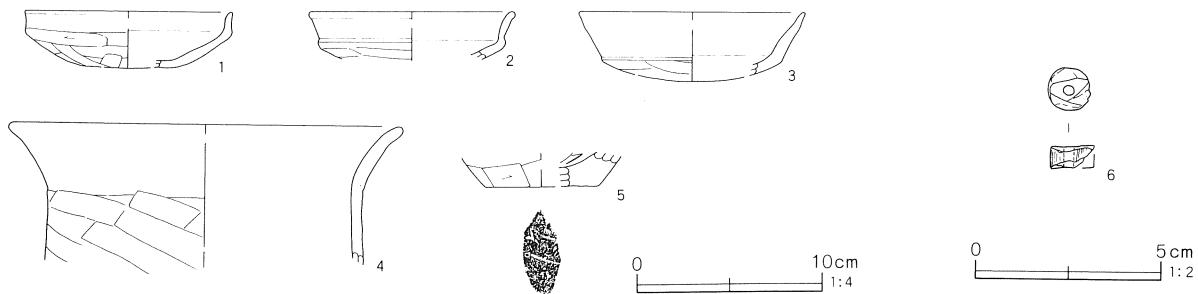


a 暗褐色 砂質、焼土若干
b 暗褐色 砂質、焼土極多、天井部崩落土
c 暗褐色 砂質、焼土やや多、炭化物少
d 暗灰褐色 砂質、焼土少
e 暗褐色 焼土極少、ローム多

0 1m 1:30



第159図 第108号住居跡出土遺物



第108号住居跡遺物観察表（第159図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(10.9)	(3.0)		DF 1	A	B	25	埋土	
2	壺	(10.8)	(2.6)		ADF 5	A	C	5	埋土	
3	壺	(11.9)	(3.4)		A 1	A	C	15	床下	器面風化顯著 内面黒化
4	甕	(20.7)	(7.3)		ADF 2	A	B	5	床下	
5	甕	(1.8)	(6.0)		ADF 5	A	B	5	床下	底部破片、木葉痕あり
6	白玉	径1.1cm、厚さ0.6cm、孔径0.3cm、重さ0.8g							床下	滑石製 一部破損

床面および壁の立上りは比較的しっかりとをしているが、カマド以外の施設は検出されなかった。

掘形は部分的に認められ、中央部は地山面をそのまま床面としている。

遺物は、埋土中と掘形埋土（床下）から出土している。土師器壺・甕の破片、および白玉が1点出土している。

第109号住居跡（第160～165図 図版3）

L2-L3・M3グリッドに位置する。重複する遺構は存在しない。平面プランはほぼ正方形を呈し、遺存状態が良好な住居跡である。長辺×短辺は4.22×4.1m、深さは27cmである。埋没状況は暗褐色土による自然堆積と推定される。カマドの傾きはN-96°-Eである。

カマドは東壁のやや南寄りに検出された。規模は92×42cmと縦長の箱形を呈している。底面の掘り込みはなく、ほぼ平坦である。袖部は長く、暗褐色土によって構築されている。被熱面は、支脚（土師器高壺壺部転用）手前の底面および内壁全面に認められた。

貯蔵穴はカマドの右側、南東コーナーに位置する。規模は直径82cmとほぼ正円形を呈する。掘り込みは底の平らなバケツ状になり、深さは74cmと深い。

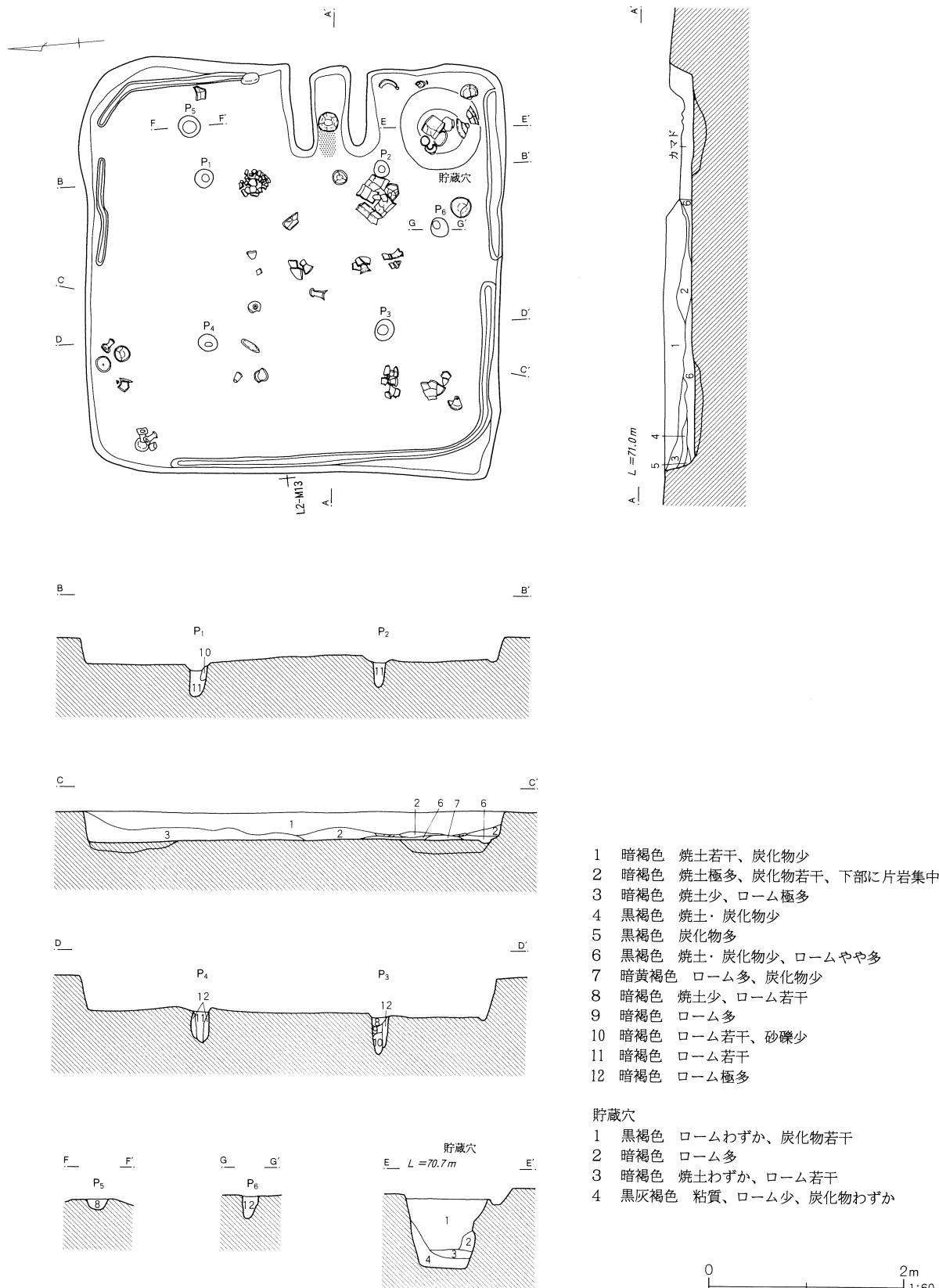
壁溝は北西コーナー付近など、一部を除いておおむね検出することができた。幅は10cm前後、深さは2～3cmである。浅いか掘り込みはしっかりとしており、検出は容易であった。

ピットは6基検出された。そのうち主柱穴と思われるものがP1・P2・P3・P4の4基である。柱穴は径20cm前後、深さはもっとも深いP3で42cmである。主柱穴間の距離は、P1-P2間が約1.8m、P2-P3間が約1.7m、P3-P4間が約1.8m、P1-P4間が約1.65mである。ほぼ均等に配置されていることがわかる。なお、P5とP6は浅く、柱穴とは断定できない。

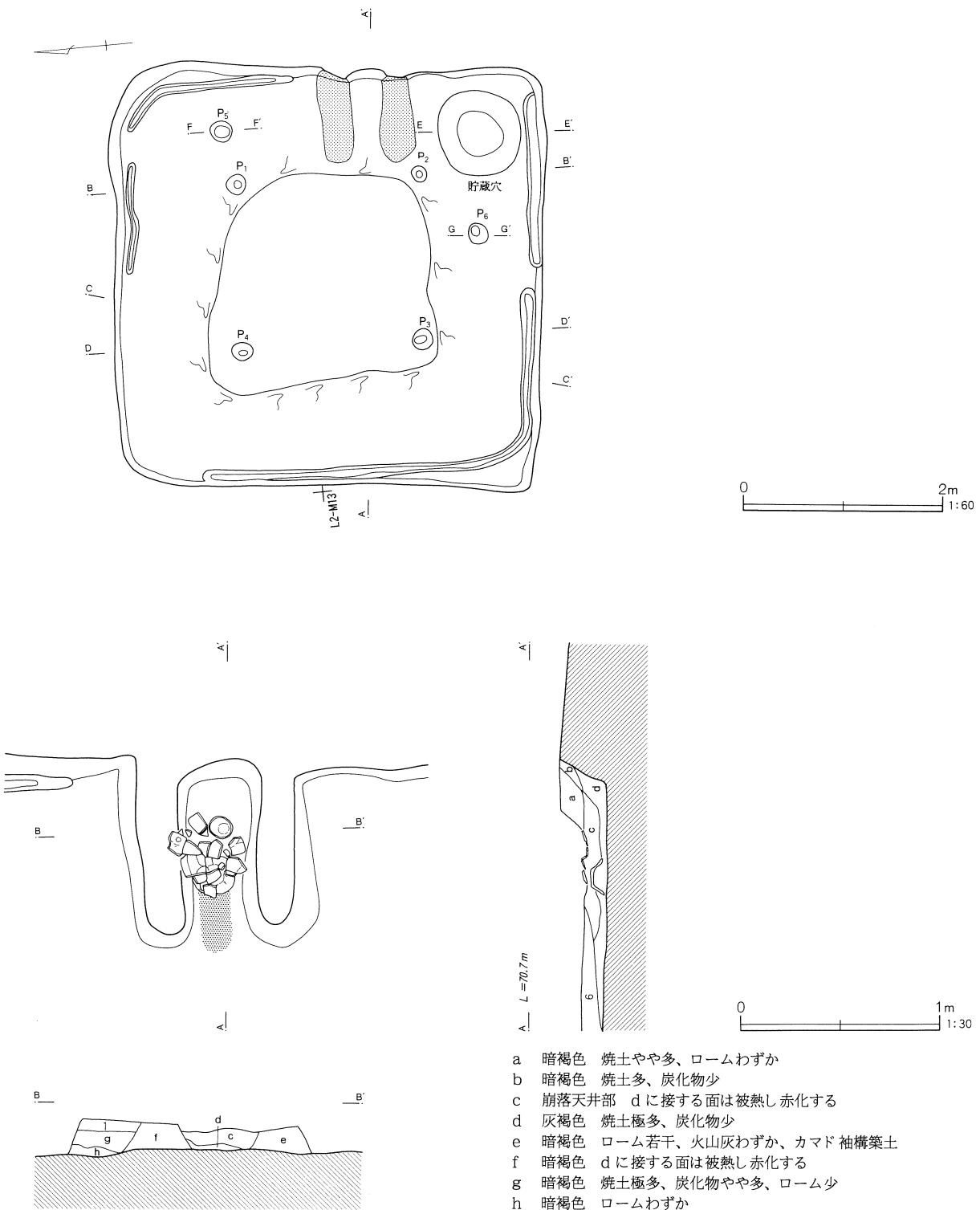
掘形は主柱穴内区を残して、周溝状に認められる。床面は中央は地山面をそのまま使用している。顯著な貼り床は認められなかったが、しっかりと平らに踏みしめられている。壁の立上りも角度を持ち、明瞭である。

埋土上面から床面直上にかけて、多くの遺物が出土した。土師器壺・椀・高壺・甕・壺・甕など器種も豊富である。特に高壺の多さが特筆される。カマドでは高壺壺部を伏せて支脚としており、その上から甕が1個体分つぶれた状態で出土した。貯蔵穴内の遺物も多く、壺・椀・高壺・台付椀・甕が出土している。

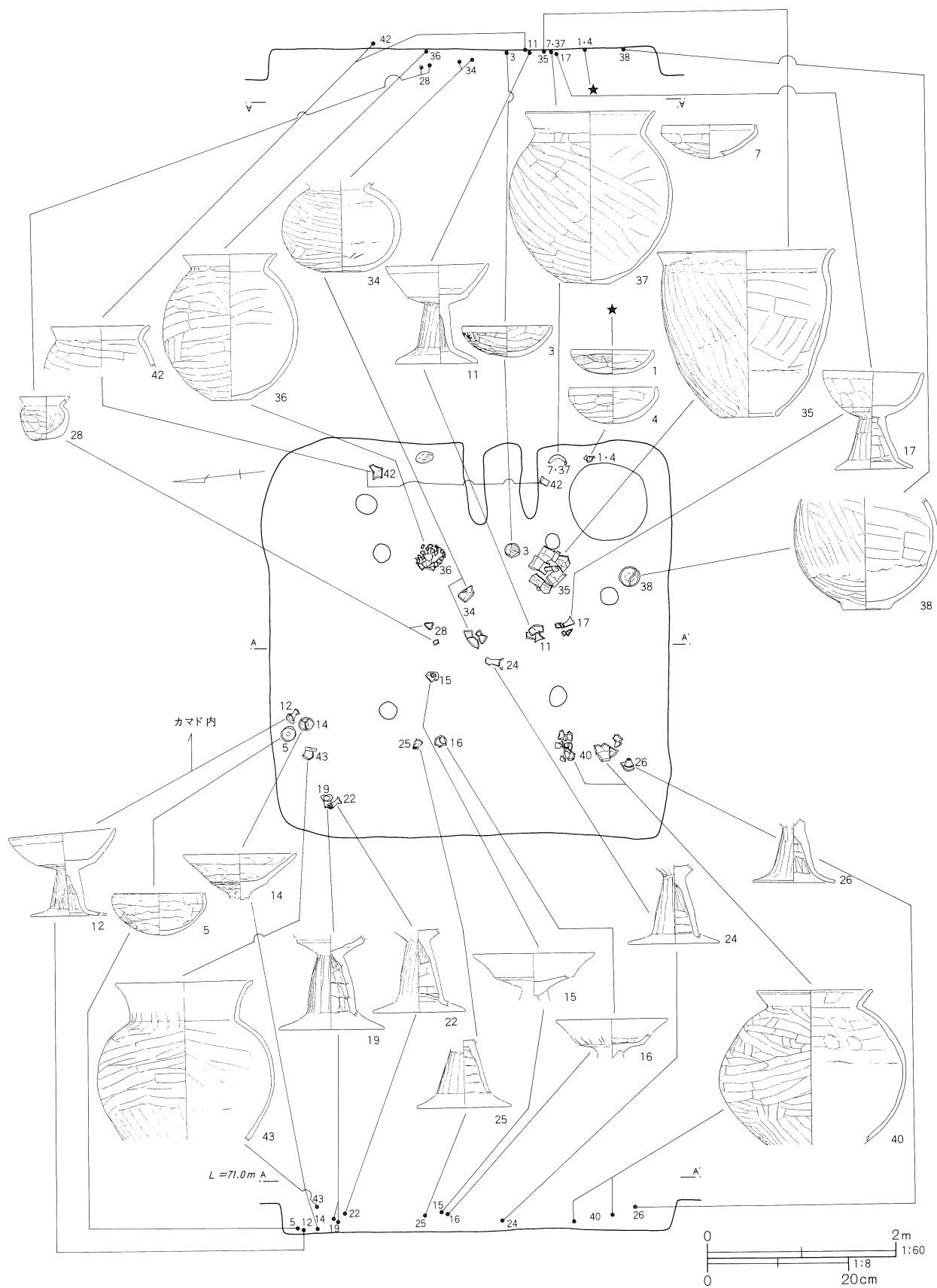
第160図 第109号住居跡(1)



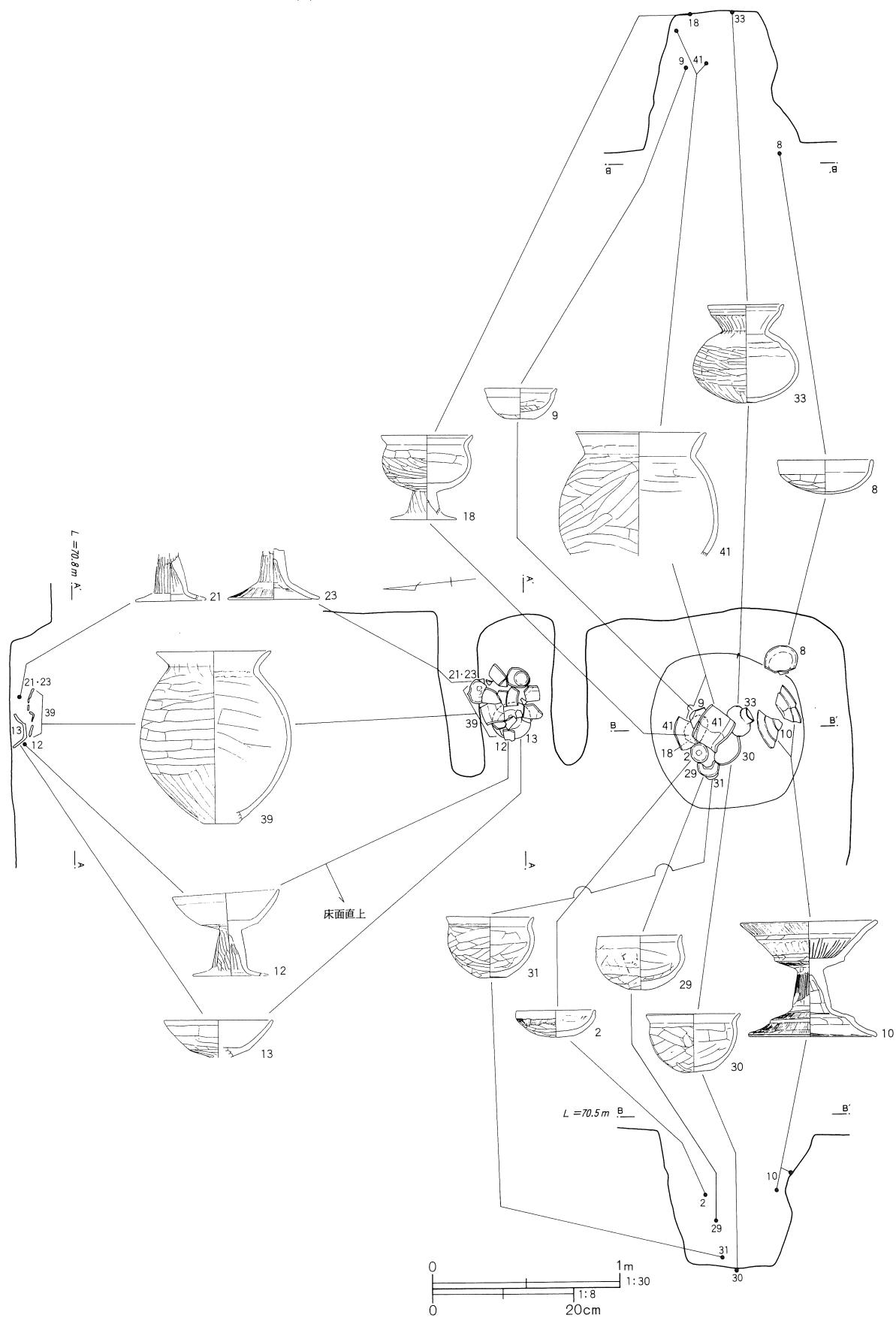
第161図 第109号住居跡(2)・カマド



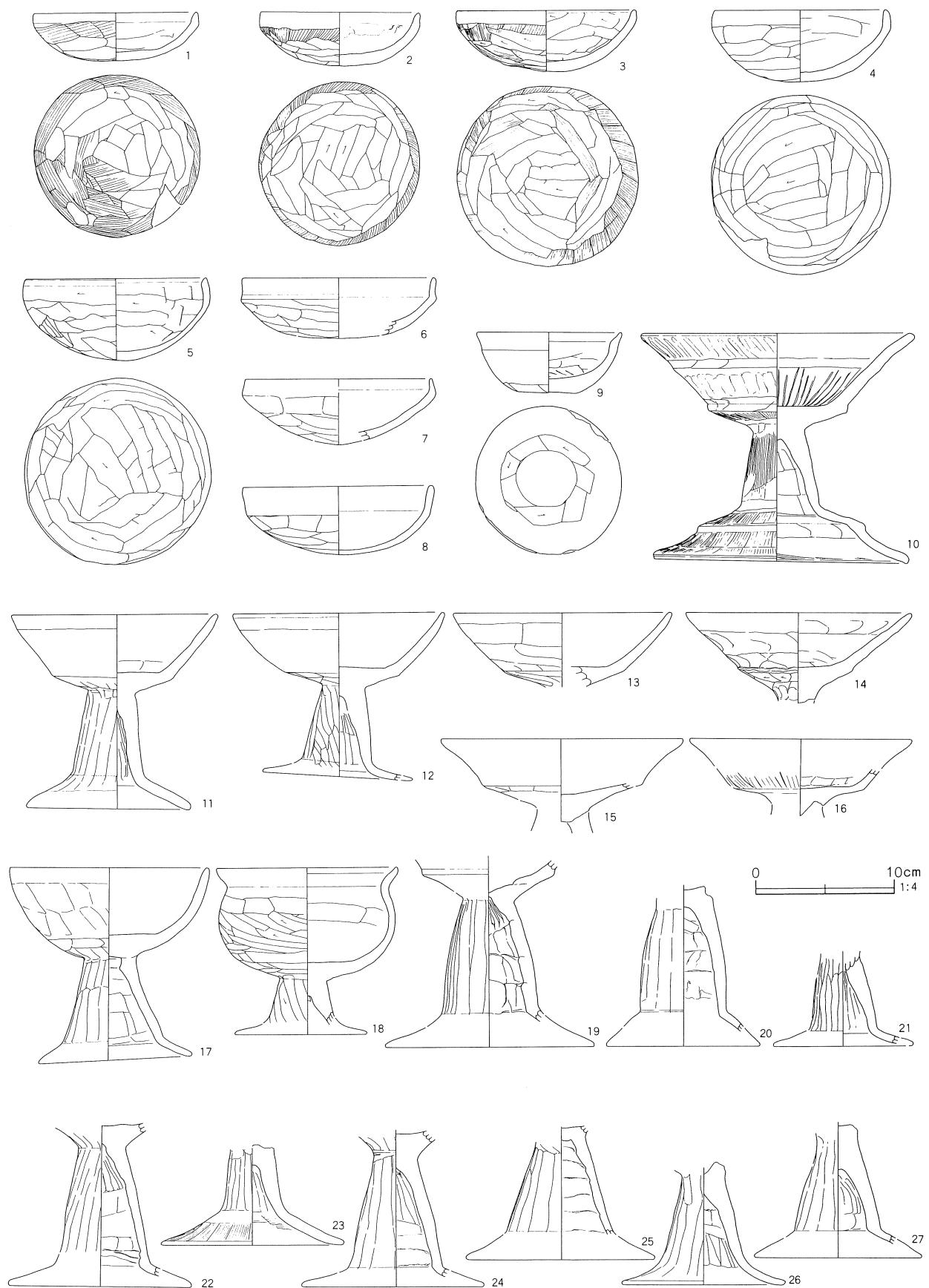
第162図 第109号住居跡遺物出土状況(1)



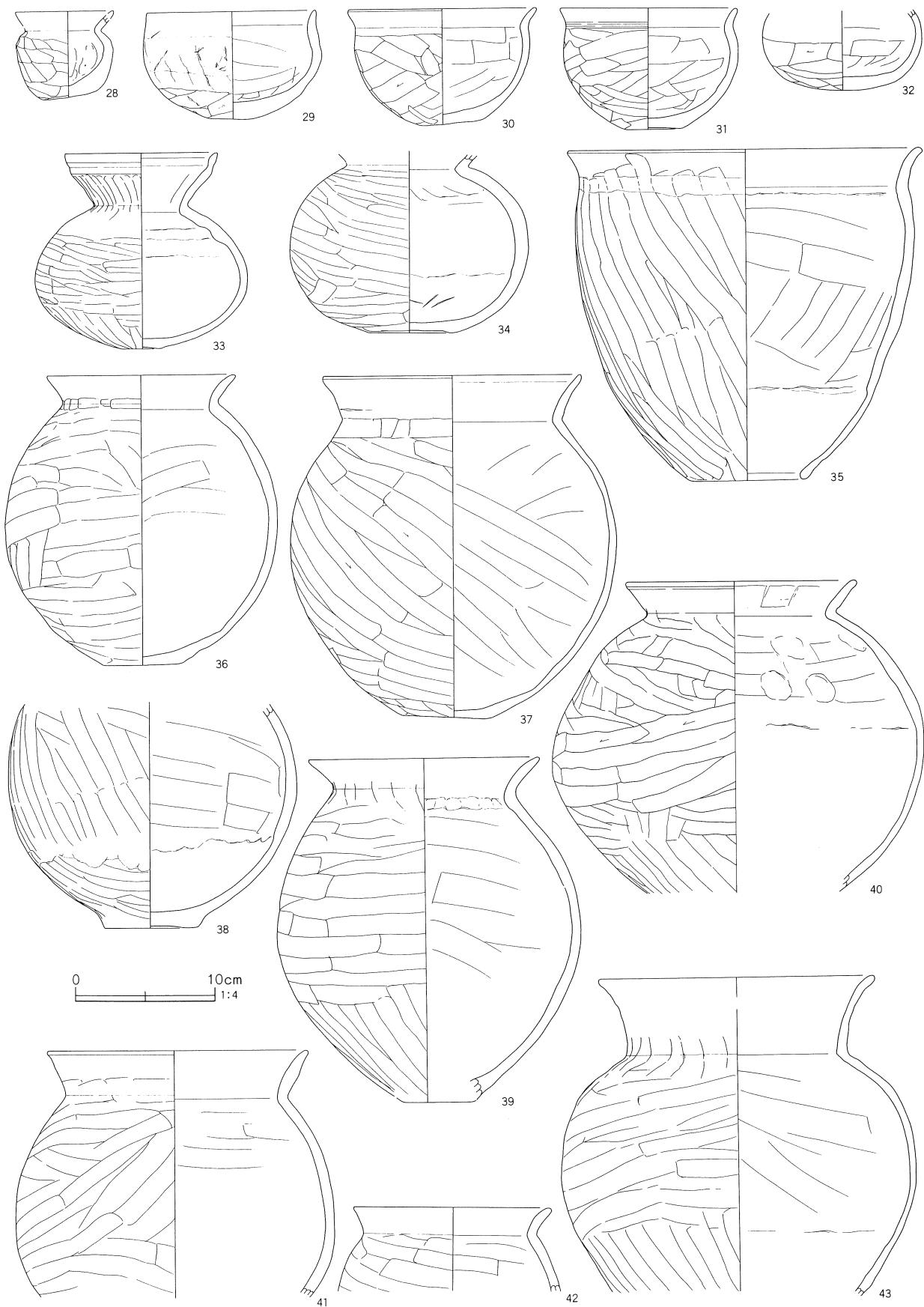
第163図 第109号住居跡遺物出土状況(2)



第164図 第109号住居跡出土遺物(1)



第165図 第109号住居跡出土遺物(2)



第109号住居跡遺物観察表（第164・165図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	11.5	3.5		ADF 2	A	B	95	床直	体部ハケメ+ヘラケズリ 図版37-10
2	壺	11.2	3.9		ADF 1	A	B	100	貯藏穴	体部ハケメ+ヘラケズリ 図版38-1
3	壺	12.7	4.4		ADF 1	A	B	100	床直	体部ハケメ+ヘラケズリ 図版38-2
4	椀	12.2	5.2		DF 1	A	B	85	床直	外面一部黒化 図版38-3
5	椀	12.7	5.8		ADF 1	A	B	100	床直	図版38-4
6	壺	13.5	(4.1)		AD 1	A	B	50	埋土	
7	壺	(13.2)	(4.4)		DF 1	A	C	20	床直	
8	壺	13.3	4.9		AD 1	A	B	90	床直	器面風化 内面一部黒化 図版38-5
9	椀	10.2	4.4	4.2	ADF 2	A	B	100	貯藏穴	平底 底部付近のみヘラケズリ 図版38-6
10	高壺	19.1	16.5	17.9	ADF 2	A	B	100	貯藏穴	外面ハケメ+ナデ 脚部内面黒化 図版59-2
11	高壺	14.6	14.0	11.5	ADF 1	A	B	95	床直	器面風化 図版59-3
12	高壺	15.0	(17.0)		ADF 2	A	B	60	床直	外面一部黒化
13	高壺	15.5	(5.4)		ADF 1	A	C	45	カマド	支脚転用 壺部100% 口縁内・外面一部黒化
14	高壺	16.0	(6.2)		ADF 2	A	B	60	床直	壺部100%
15	高壺		(2.8)		ADF 1	A	C	20	埋土	壺底部破片
16	高壺		(3.3)		ADF 2	A	B	20	埋土	壺底部破片
17	高壺	14.0	14.1	10.6	ADF 1	A	B	85	床直	器面風化 図版59-4
18	台付椀	12.8	(11.3)		ADF 1	A	B	90	貯藏穴	内・外面一部黒化 図版61-5
19	高壺		(11.5)		ADF 1	A	B	40	埋土	脚部
20	高壺		(10.3)		ADF 1	A	B	30	貯藏穴	脚部
21	高壺		(6.6)		ADF 1	A	B	30	カマド	脚部
22	高壺		(10.9)		ADF 1	A	C	35	埋土	脚部
23	高壺		(7.2)	12.6	ADF 1	A	B	40	カマド	脚部 外面一部黒化
24	高壺		(10.4)		AD 1	A	B	35	埋土	脚部
25	高壺		(7.8)		ADF 1	A	C	30	埋土	脚部 外面一部黒化
26	高壺		(8.7)	11.3	ADF 2	A	B	30	貯藏穴	脚部
27	高壺		(8.6)		AD 1	A	B	30	埋土	脚部 器面風化顯著
28	ミニチュア		(6.0)	3.8	ADF 2	A	B	70	埋土	
29	椀	11.9	7.7	2.9	ADF 1	A	B	100	貯藏穴	内面輪状黒斑あり 図版56-10
30	椀	13.1	8.3	4.2	DF 1	A	B	95	貯藏穴	胴部下半部黒化 図版57-1
31	椀	12.4	8.6	3.8	ADF 1	A	B	90	貯藏穴	底部外面黒化 図版61-4
32	小形壺		(5.7)		DF 2	A	B	40	カマド埋土	体部外面黒化
33	壺	10.6	13.9	2.3	ADF 1	A	B	95	貯藏穴	胴部上半ミガキ 脇部外面一部黒化 図版60-5
34	壺		12.6	5.8	ADF 1	A	B	80	埋土	外面一部黒化 図版60-6
35	甌	24.7	23.6	8.1	ADF 5	A	C	90	床直	内・外面一部黒化 図版69-2
36	甌	13.2	20.7	5.6	ADF 2	A	B	85	床直	外面一部黒化 図版67-5
37	甌	18.1	24.4	6.2	ADF 2	A	B	55	床直	外面一部黒化
38	甌		(15.8)	6.6	ADF 5	A	B	60	床直	外面一部黒化
39	甌	16.1	(24.3)		AD 5	A	B	70	カマド	内・外面一部黒化 図版67-6
40	甌	16.2	(22.0)		AD 2	A	B	60	埋土	外面一部、内部下半部黒化
41	甌	18.2	(17.6)		DF 5	A	B	40	貯藏穴	
42	小形甌	13.6	(6.0)		ADF 2	A	B	20	床直	
43	甌	(19.2)	(22.7)		ADF 5	A	C	25	埋土	外面一部黒化

第110号住居跡（第166、167図 図版4上）

L2—Q11・Q12・R11・R12 グリッドに位置する。

重複関係は、第108・115号住居跡および第30号溝跡に切られている。形状は方形を呈する。長辺×短辺は4.93×4.39、深さは16cmである。カマドの傾きはN—49°—Wである。

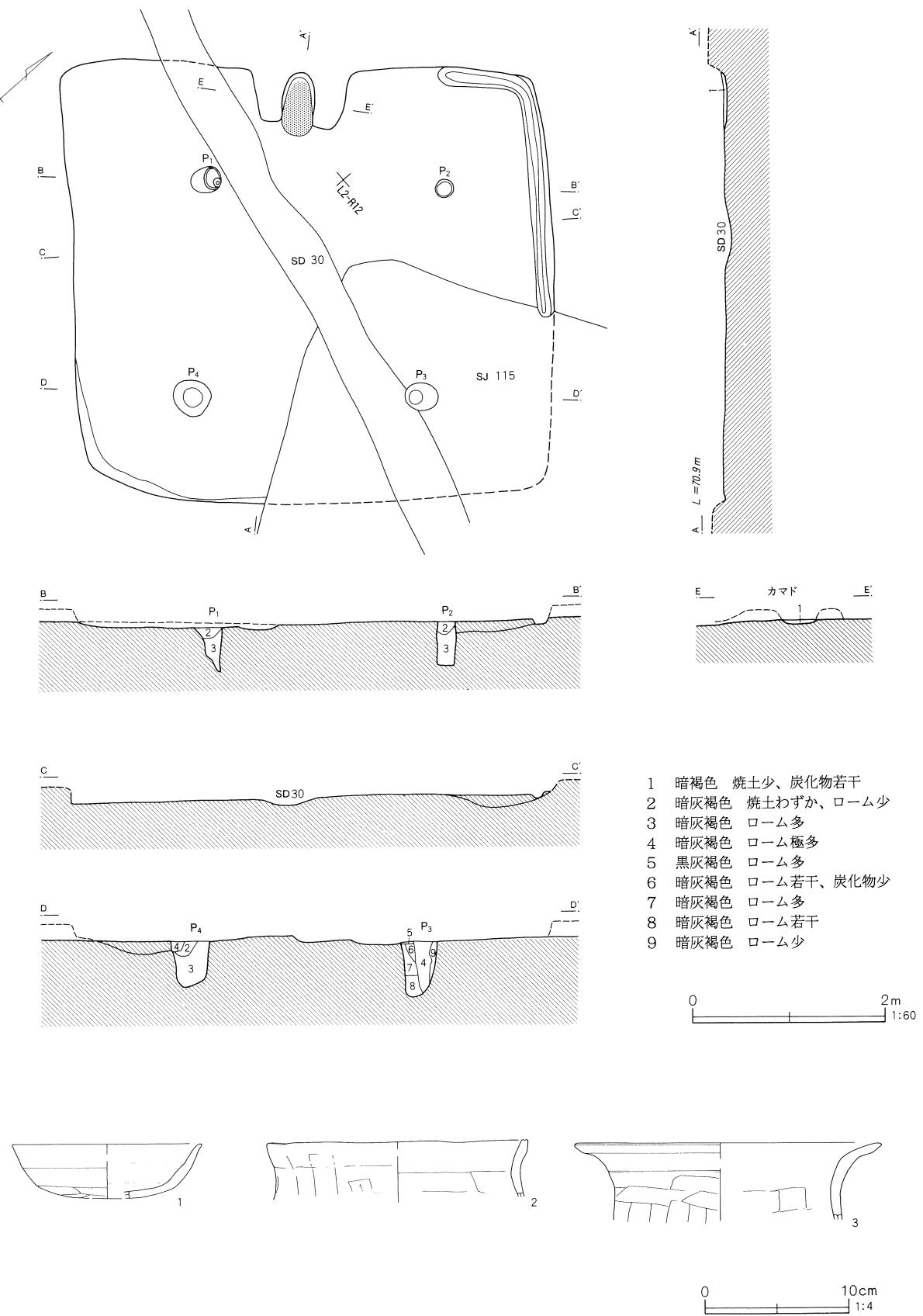
カマドは北西壁中央に構築されているが、残りは悪

い。燃焼部は楕円形で、規模は63×35cm、底面はわずかに掘りくぼめられ、被熱している。袖部は痕跡のみ残る。

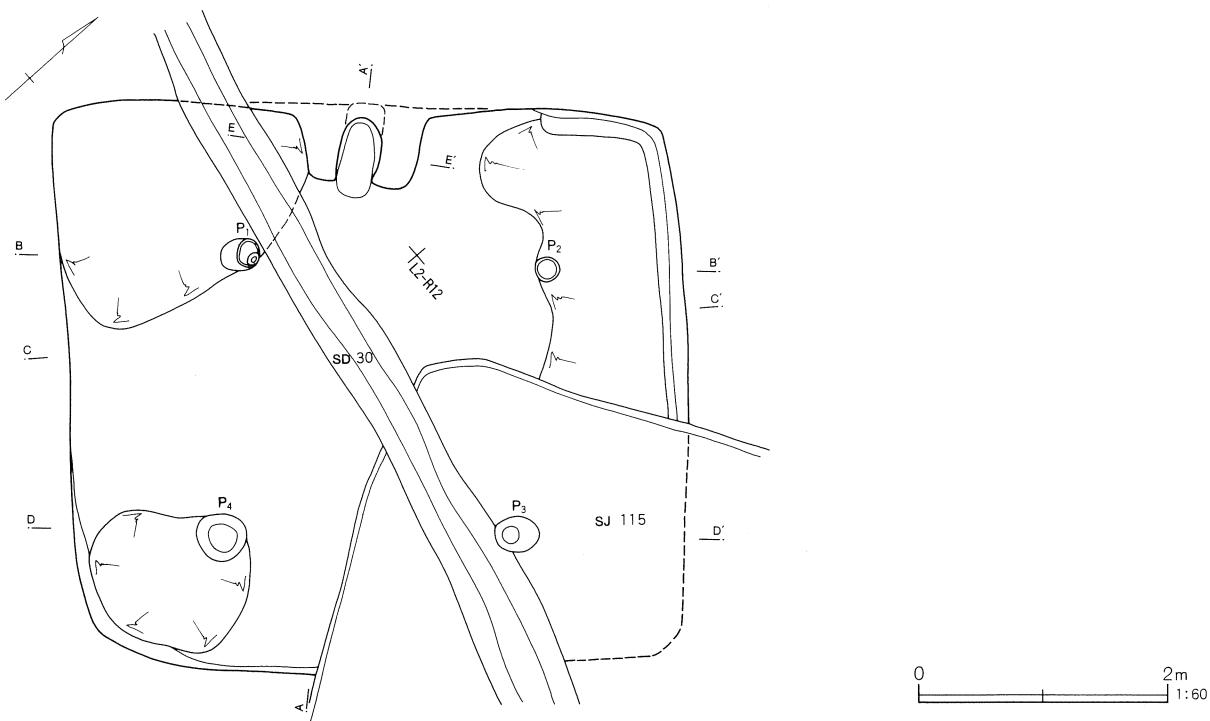
溝は北東コーナー部分にのみ検出された。幅15cm、深さ7cmである。

削平に大きく影響され、壁の立ち上がりは一部にしか見られず、床面がかろうじて判別できたに過ぎない。

第166図 第110号住居跡(1)・出土遺物



第167図 第110号住居跡(2)



第110号住居跡遺物観察表（第166図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(12.9)	(3.7)		ADF 1	B	B	25	埋土	
2	甕	(17.8)	(3.9)		DF 2	A	B	5	埋土	口縁破片 内面一部黒化
3	甕	(20.7)	(5.3)		AD 2	B	C	5	床下	

反面、4基の柱穴は掘り込みは明瞭であった。P3には柱痕も確認された。深さはP2で45cm、P3で55cmである。ピット間の距離はP1-P2間が約2.4m、P2-P3間が約2.1m、P3-P4間が約2.3m、P1-P4間が約2.2mとなり、バランスよく配置されている。

遺物は、埋土中と床下から、わずかな量の土師器壺・甕の破片が出土した。図示していないが須恵器甕の胴部破片も出土している。

第111号住居跡（第168～170図 図版4中、下）

L2-M11・M12・N11・N12グリッドに位置する。重複関係は、第112号住居跡に切られる。第117号住居跡との切り合いは不明である。形状は方形を呈する。長辺×短辺は5.44×5.32、深さは17cmである。長辺の傾きはN-168°-Eである。

確認から埋土除去作業の段階では、カマドは検出で

きなかったが、南壁際中央の床面直上で、焼土と炭化物が多量に含まれた堆積が確認された。貯蔵穴等の位置関係から、カマド燃焼部の痕跡と考えられる。

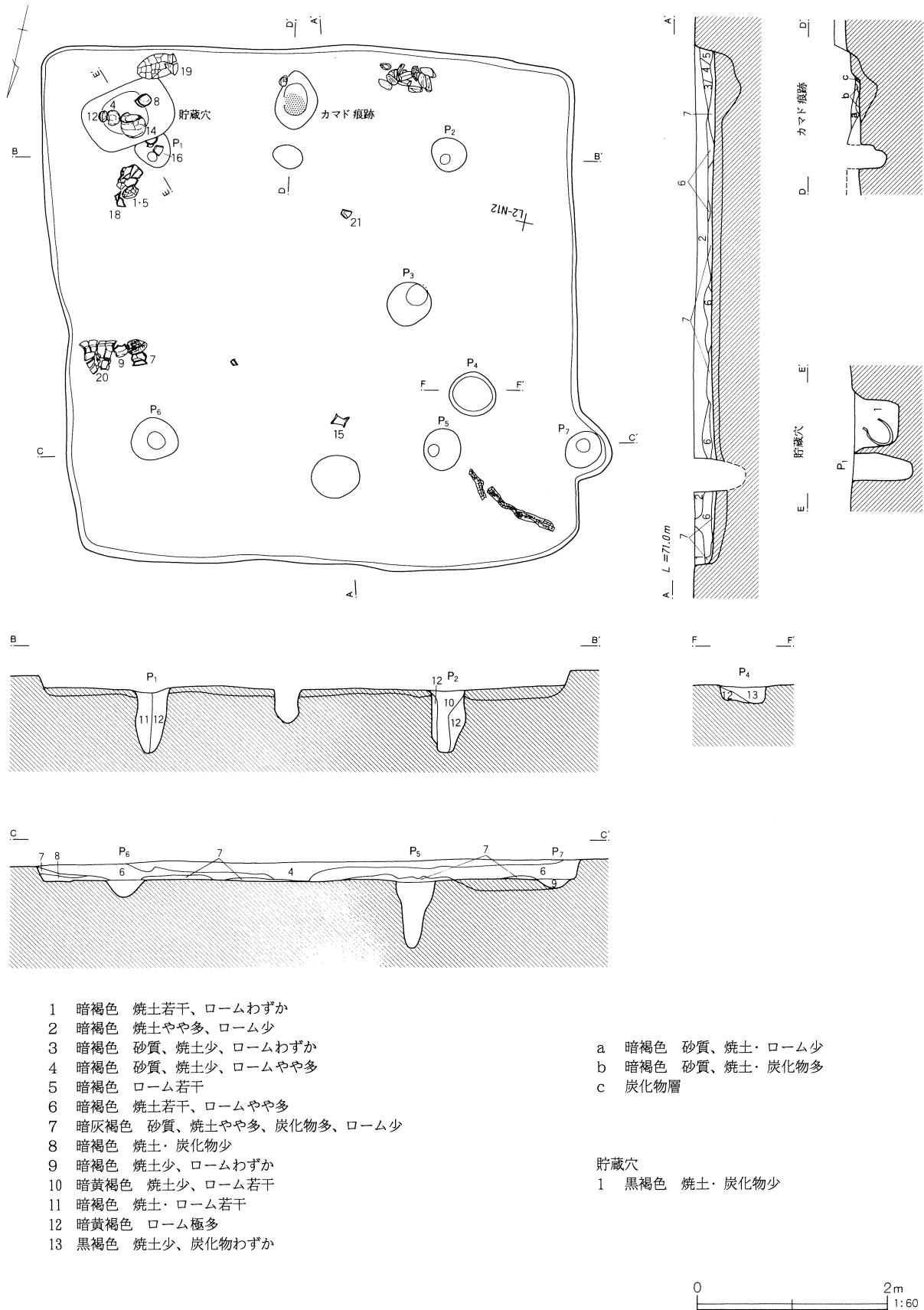
貯蔵穴は東南コーナ寄りに検出された。規模92×61cmの楕円形で、深さは45cmである。バケツ状に掘り込まれ、底は平となる。

ピットは7基検出された。そのうち主柱穴と思われるものがP1・P2・P5・P6の4基である。うちP1・P2・P5は深さ65cm前後で、柱痕も確認できる。P6は位置的に主柱穴と判断したが、深さは18cmと浅い。柱穴の間隔は2.9～3.1mの間におさまる。P7は壁を切るように検出されたが、埋土の状態から本住居跡に伴うものと判断した。

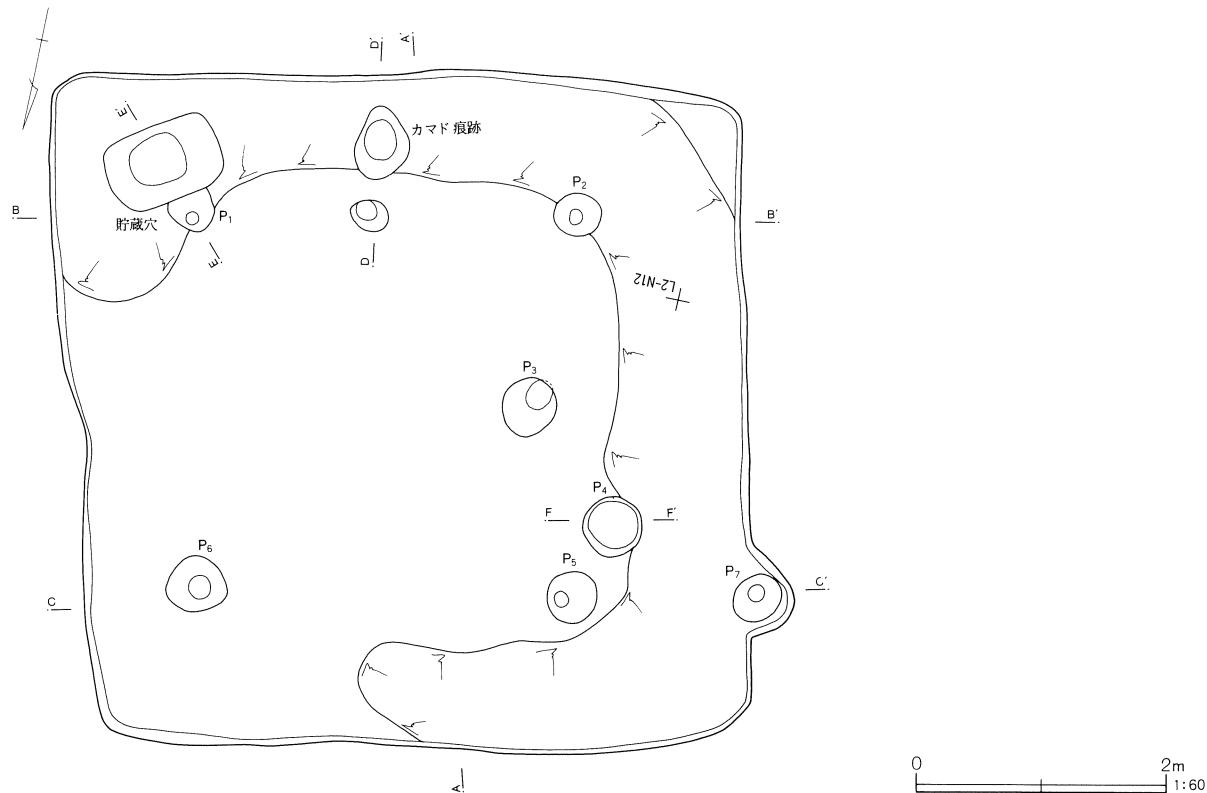
床面は平坦ではあるが、顯著な貼り床は認められなかった。

埋土中および貯蔵穴内から比較的多量の土器が出土

第168図 第111号住居跡(1)



第169図 第111号住居跡(2)



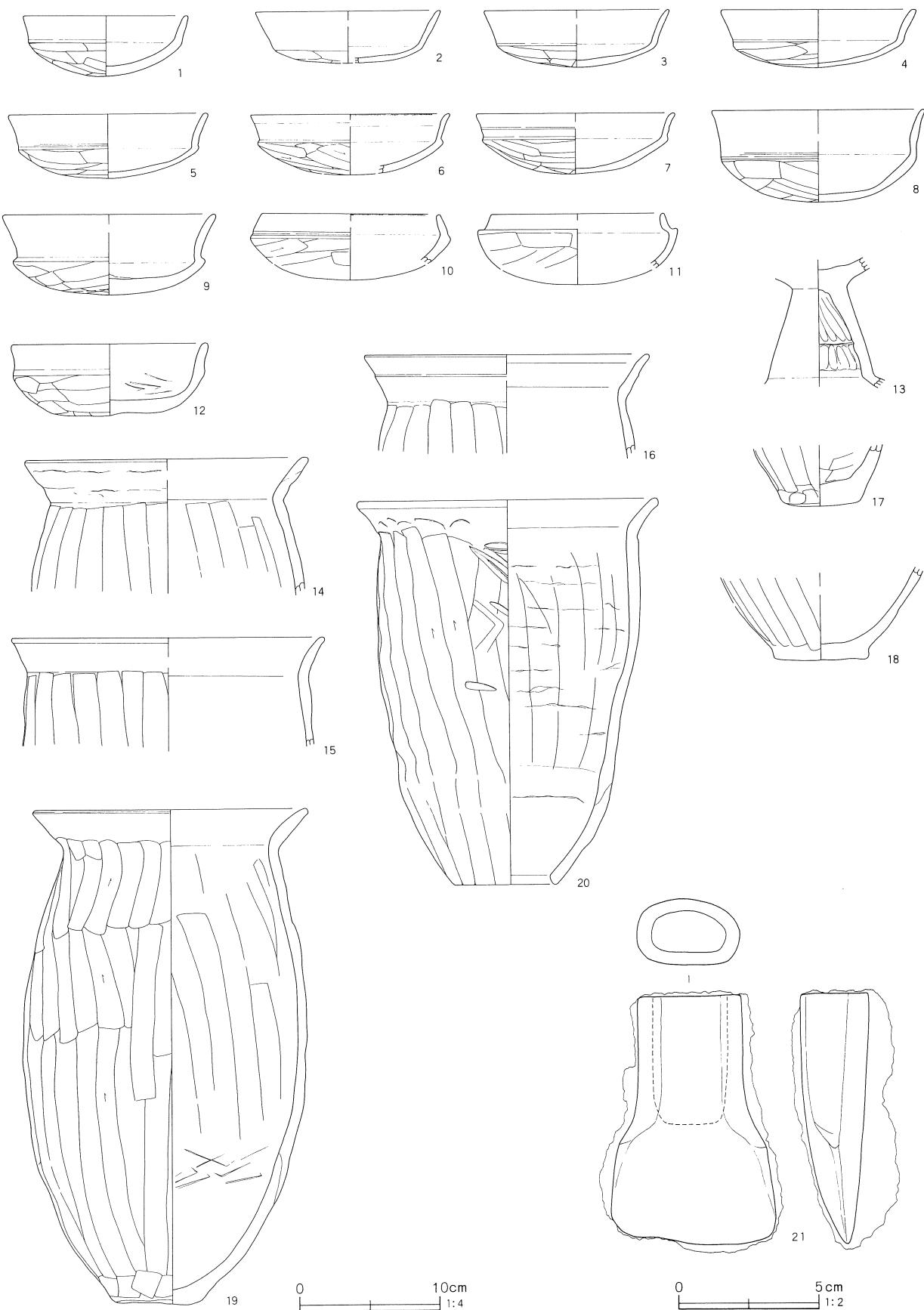
第111号住居跡遺物観察表 (第170図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	11.5	4.3		AD F 2	A	B	100	床直	図版38-7
2	壺	(13.0)	(3.7)		A 1	A	B	25	埋土	
3	壺	(12.9)	4.0		A 2	A	C	65	埋土	体部外面部分的に黒化
4	壺	13.7	4.1		F 1	A	C	75	貯蔵穴 器面風化顕著	
5	壺	14.0	4.5		A F 1	B	B	75	床直	
6	壺	(13.9)	(4.2)		A F 1	A	B	35	埋土	内面、外面一部黒化
7	壺	(13.8)	4.3		A 2	A	B	80	床直	
8	壺	(14.9)	6.5		AD 1	A	B	80	貯蔵穴	
9	壺	(14.8)	5.6		F 1	A	B	50	床直	器面風化顕著 外面一部黒化
10	壺	(12.5)	(3.5)		D 1	A	B	10	埋土	
11	壺	(12.0)	(3.9)		AD 1	A	B	15	埋土	
12	壺	13.6	5.1		A F 1	A	B	90	貯蔵穴	器面風化顕著 輪状の黒斑あり 図版38-8
13	高壺		(9.1)		D 1	A	B	40	埋土 脚部破片	
14	甕	(19.8)	(9.7)		D 1	A	B	10	貯蔵穴	
15	甕	(21.9)	(7.6)		D 1	A	B	5	床直	
16	甕	(19.9)	(7.4)		AD 1	A	B	5	P 1 埋土	
17	甕	(4.2)	5.6		D 1	A	F	10	貯蔵穴	内面、外面一部黒化
18	甕		(6.4)	6.7	D 2	A	F	15	床直	内面、外面一部黒化
19	甕	19.1	35.0	5.8	D F 5	A	B	100	床直	図版71-4
20	甕	20.9	27.1	7.3	D F 5	A	B	100	床直	内面輪積み痕明瞭 図版78-4
21	鉄斧	現長8.2cm、刃部幅5.8cm、袋部幅3.2×2.3cm、重さ246.7g					床直	袋状鉄斧		

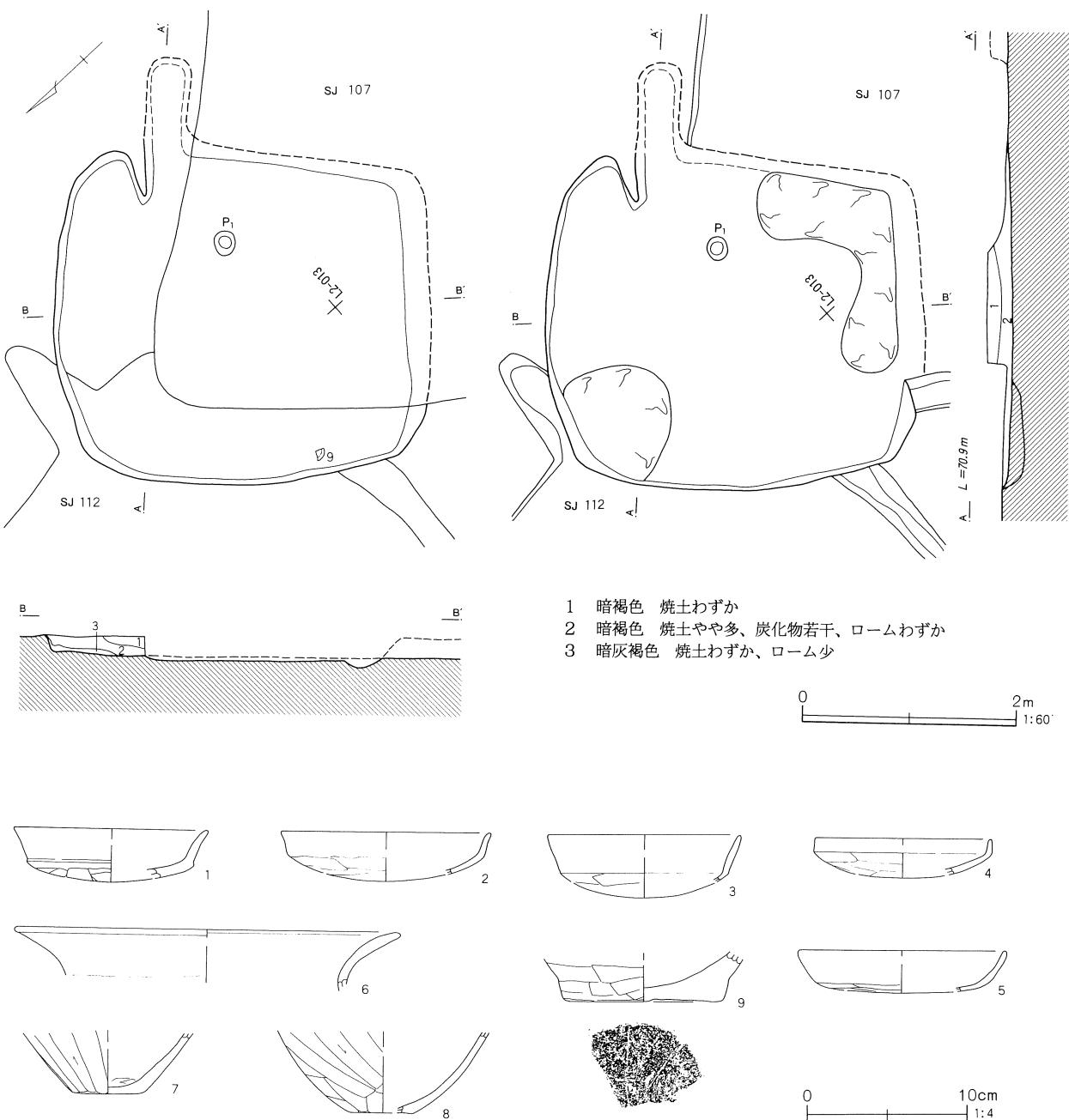
した。土師器壺・高壺・甕・甕などがある。土器以外ではほぼ完形の鉄斧がある。床面直上からの出土である。また、カマド痕跡東側の壁際から、自然石12点の

集積が検出された。石に使用痕は認められない。北西コーナーの床面からは、炭化材が出土している。

第170図 第111号住居跡出土遺物



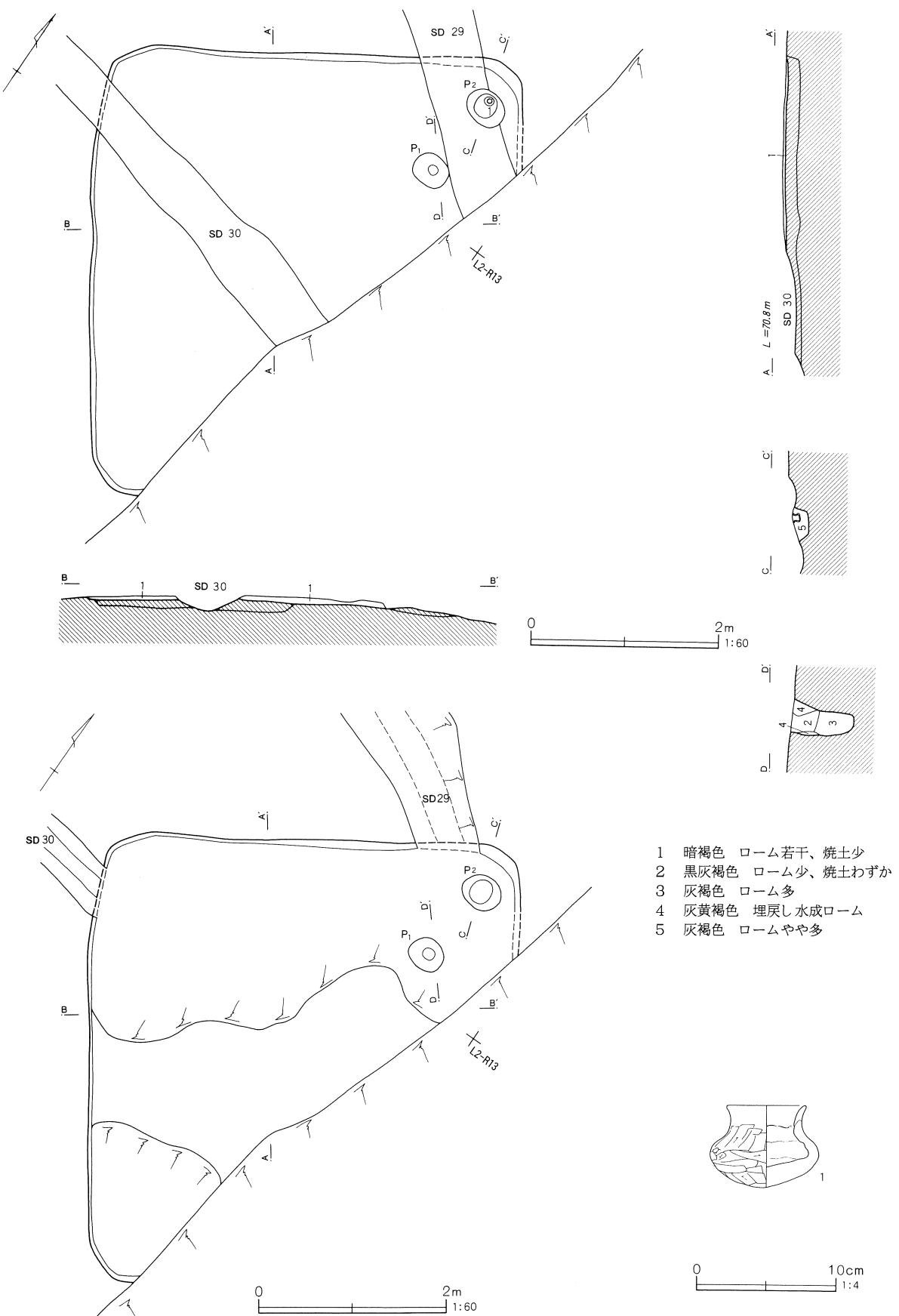
第171図 第114号住居跡・出土遺物



第114号住居跡遺物観察表（第171図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(12.0)	(3.0)		A 1	A	B	15	床下	
2	壺	(12.9)	(2.6)		AD 1	A	C	10	埋土	
3	壺	(11.8)	(2.9)		D 1	A	B	10	埋土	器面風化顯著
4	壺	(10.9)	(2.2)		A 1	A	C	15	埋土	
5	壺	(12.8)	(2.5)		A 1	A	B	15	埋土	
6	甕	(23.5)	(3.7)		AD F 1	A	C	5	埋土	口縁部破片
7	甕	(4.7)		4.5	AD F 1	A	C	5	埋土	底部破片
8	甕	(5.0)		(4.0)	DF 1	A	B	5	埋土	底部破片
9	甕			(3.2)	ADF 2	A	B	5	埋土	底部破片、木葉痕あり 外面一部黒化

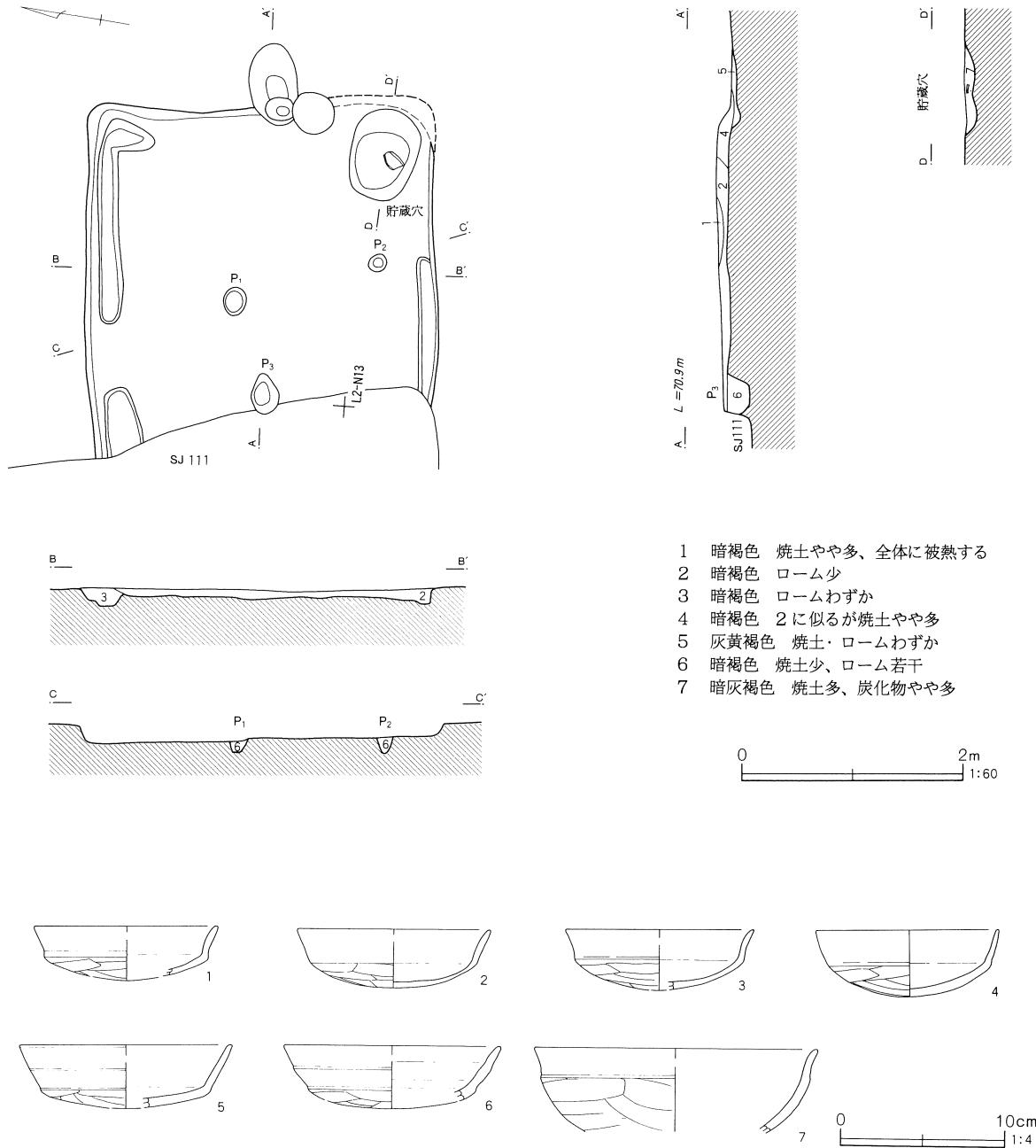
第172図 第115号住居跡・出土遺物



第115号住居跡遺物観察表（第172図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	ミニチュア	5.4	5.8		ADF 5	A	B	100	P2 埋土	図版55-3

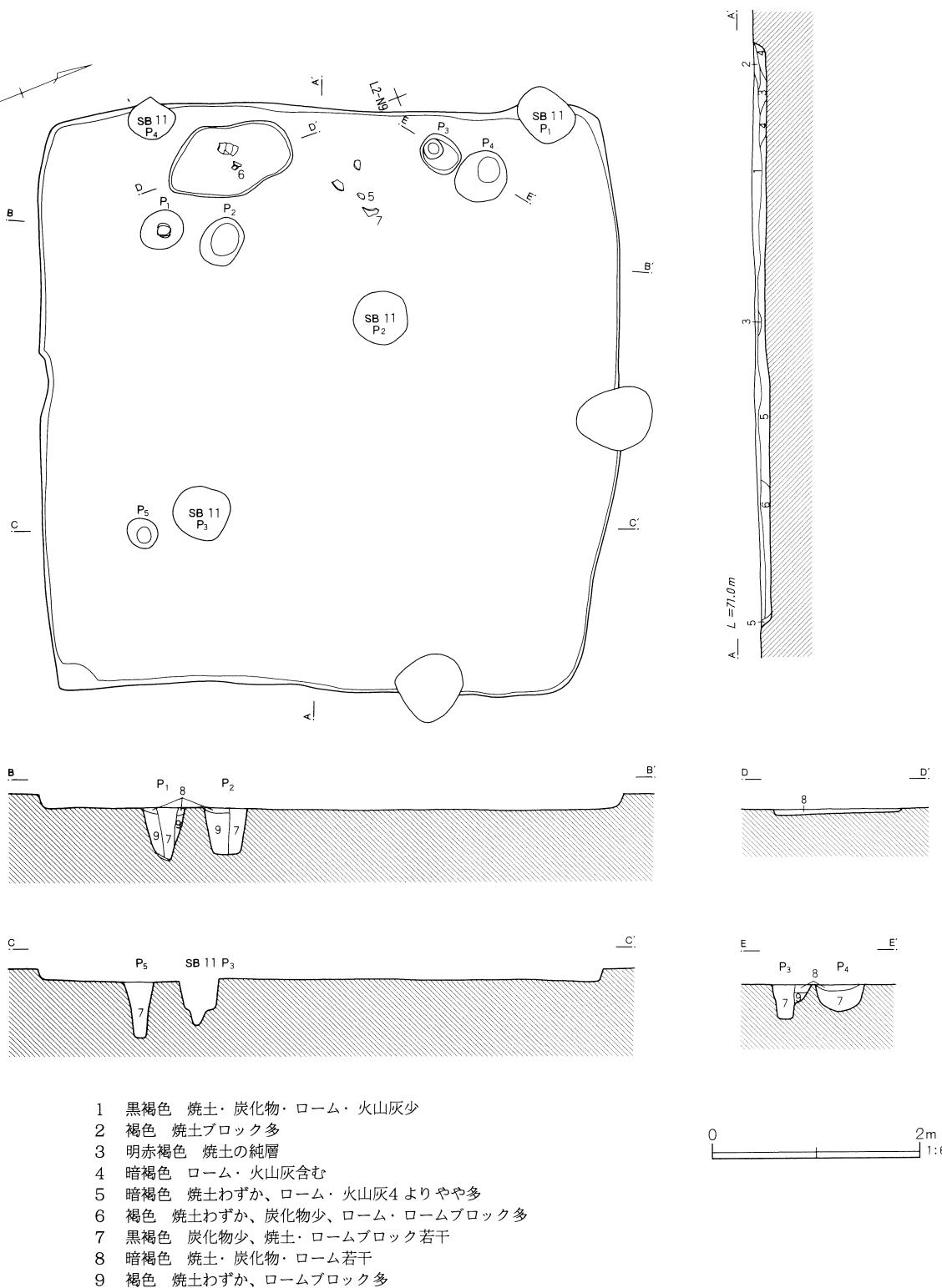
第173図 第117号住居跡・出土遺物



第117号住居跡遺物観察表（第173図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(10.8)	(3.0)		A F 1	A	B	25	埋土	器面風化顯著
2	壺	(11.4)	3.5		A 1	A	B	50	埋土	器面風化顯著
3	壺	(11.2)	(3.6)		A 1	A	C	45	埋土	器面風化顯著
4	壺	10.8	4.0		A 1	A	B	75	埋土	器面風化顯著
5	壺	12.5	(3.8)		AD 1	A	F	25	埋土	外面黒化
6	壺	(12.8)	(3.3)		ADF 1	A	C	10	埋土	
7	椀	(16.8)	(5.1)		DF 1	A	B	10	埋土	器面風化顯著

第174図 第120号住居跡



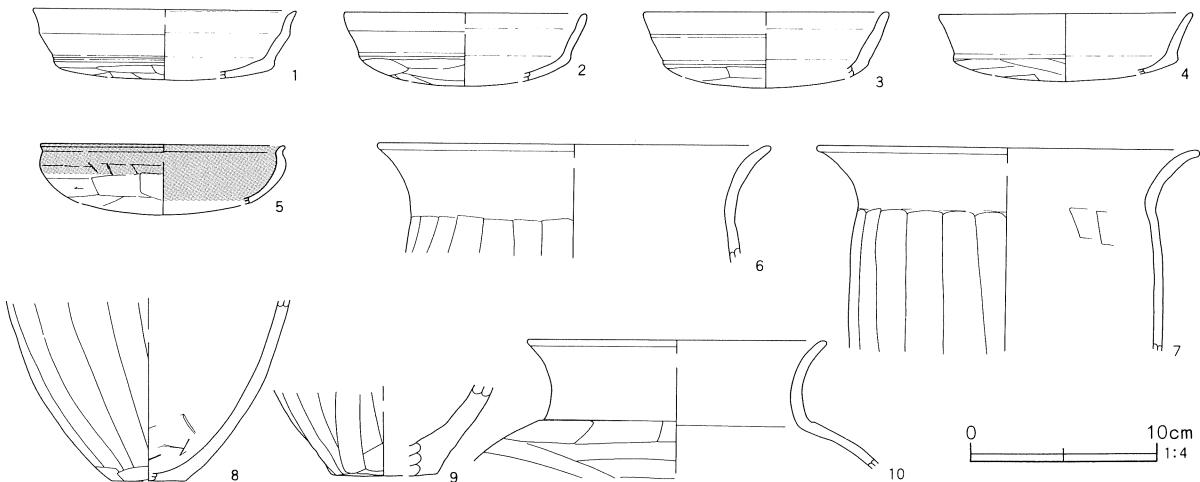
第114号住居跡 (第171図 図版5中)

L2-N12・N13・O12・O13グリッドに位置する。大半を第107・112住居跡に切られている。形状は方形で、長辺×短辺は3.28×2.92m、深さは23cmである。

カマドの傾きはN-133°-Eである。

カマドは切り合う遺構によって削平され、痕跡のみである。位置は東南壁の北よりである。燃焼部の掘り込みはなく、被熱面も検出されなかった。

第175図 第120号住居跡出土遺物



第120号住居跡遺物観察表（第175図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(13.9)	(3.6)		A F 1	A	C	30	埋土	外面一部黒化
2	壺	(12.8)	(3.6)		A F 1	A	B	25	埋土	
3	壺	(13.0)	(3.5)		A D F 1	A	C	10	埋土	
4	壺	13.4	(3.2)		A F 1	A	C	10	埋土	
5	壺	(12.9)	(3.1)		A D F 5	A	B	10	床直	比企型壺 内・外面上半赤彩、一部黒化
6	甕	(20.9)	(6.2)		A D F 5	A	B	5	床直	
7	甕	(20.2)	(10.7)		A D F 5	A	B	10	床直	器面風化顯著
8	甕	(9.8)	(4.0)		A D 2	A	B	5	埋土	
9	甕	(4.9)	(5.7)		A D F 5	A	B	5	埋土	
10	壺	(15.9)	(6.8)		A D 2	A	B	5	埋土	底部破片

他の施設はほとんど明らかでなく、1基検出されたピットも本住居跡に伴うものかどうかは不明である。出土遺物は少なく、すべて破片である。土師器壺・甕がみられる。

第115号住居跡（第172図）

L2-Q12・R12 グリッドに位置する。東側は旧流路によって失われ、全体はほぼ床面の高さまで削平されている。重複関係は第29・30号溝跡に切られており、第110号住居跡を切っているようである。形状は方形を呈する。長辺×短辺は4.66×4.34m、深さは6cmと浅い。長辺の傾きはN-34°-Wである。

北東コーナー付近で、ピットが2基確認された以外に、本住居跡の施設は検出されなかった。

遺物は、P2 の埋土中からミニチュア土器が出土した。埋土中の遺物はほとんどない。

第117号住居跡（第173図）

L2-M12・M13・N13 グリッドに位置する。西側が第111号住居跡と切り合うが、その付近の埋土は浅くなるため、切り合い関係を明確にとらえることができなかった。形状は方形を呈する。東壁の長さは推定3.15m、深さは8cmである。長辺の傾きはN-81°-Eである。

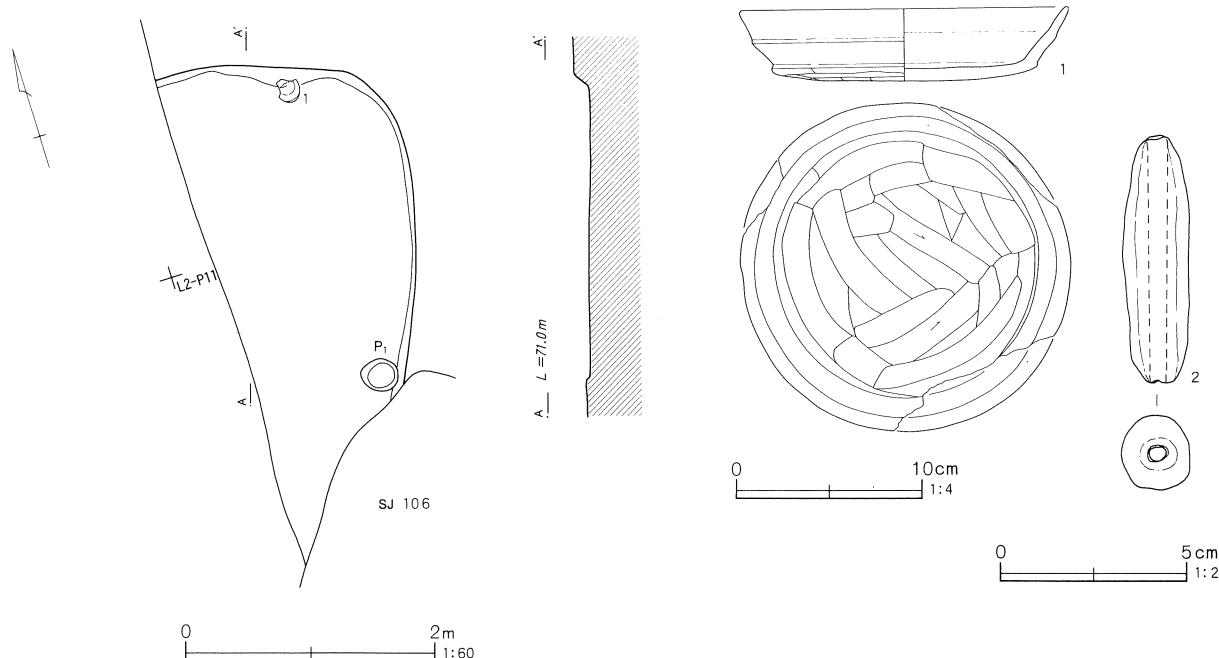
明確にカマドと判断できる遺構は検出されていない。しかし、東壁中央には浅い楕円形の落ち込みがあり、位置的にこれがカマドの痕跡かもしれない。ただし、焼土の集中や、被熱面は認められなかった。

貯蔵穴は東南コーナーに位置する。規模は81×60cmの楕円形である。深さは10cm前後と浅く、掘り込みも甘い。

壁溝は北および南壁に部分的に検出された。幅20cm弱、深さは5cm前後である。

ピットは3基検出されたが、柱穴かどうかは不明で

第176図 第121号住居跡・出土遺物



第121号住居跡遺物観察表（第176図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	17.4	3.9		F 1	A	B	80	壁溝？	外面体部黒化 図版39-1
2	土錘	長さ6.5cm、最大径1.7cm、孔径0.5cm、重さ21.8g							埋土	

ある。

遺物は、埋土中から土師器の破片が少量出土した。

壺が中心である。

第120号住居跡（第174、175図）

L2—M9・N8・N9グリッドに位置する。第11号掘立柱建物跡に切られるが、住居跡との重複関係はない。形状は方形を呈する。長辺×短辺は5.51×4.48m、深さは16cmである。長辺の傾きはN—69°—Wである。

西壁際南寄りに浅い掘り込みが検出された。不定型で規模は67×121cm、深さは5cmである。位置的に貯蔵穴とも考えられる。西壁際中央部、貯蔵穴らしき掘り込みとP3との間に、径約90cmの範囲で焼土と炭化物が集中して堆積していた。カマドの位置を示すものかもしれない。ただし、同様の堆積は、北東コーナーでも観察されている。これらを含め、東側壁際の埋土中には、焼土の堆積が多く認められた。

5基検出されたピットのうち、P1・P2・P5は柱穴

とみなしてよいが、対応すると予想された北側の列は、床面の精査にも関わらず、検出することができなかつた。

出土遺物はすべて破片で、土師器壺・甕・壺がある。赤彩された比企型壺（5）が1点出土している。

第121号住居跡（第176図）

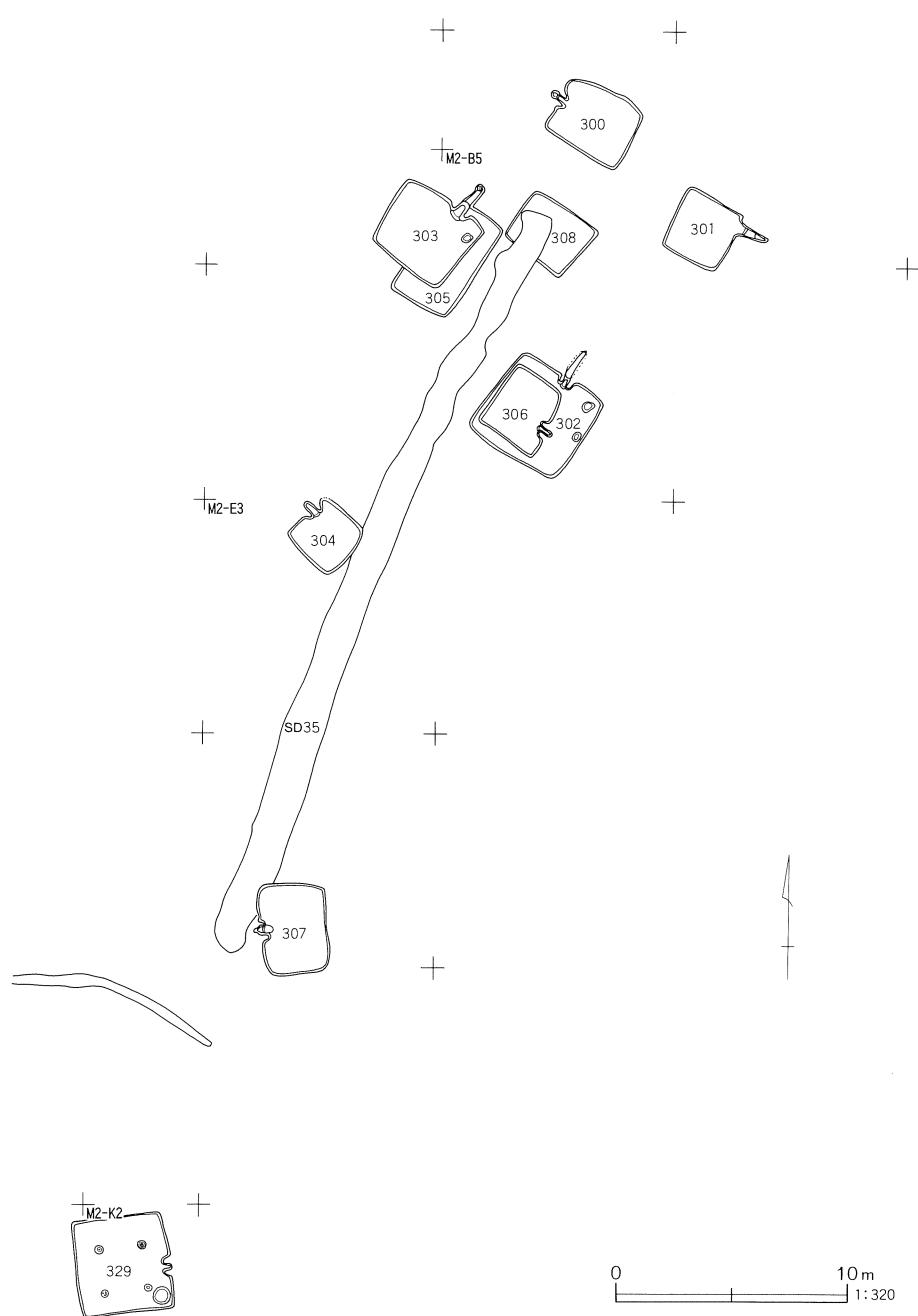
L2—O11・P11グリッドに位置する。大半をトレントと第106号住居跡に切られており、埋土もほとんど残っていなかった。形状は不明である。

図は掘形を掘り下げた段階のもので、底面は床面の高さを示していない。壁の立ち上がりも掘形のものであるが、壺の出土状況から壁溝があった可能性もある。本住居跡に伴うかどうかは不明だが、ピットが1基検出されている。直径25cm、深さは16cmである。

北壁際から土師器壺が出土した。埋土中からは土錘が1点出土している。

5. 第22住居跡群

第177図 第22住居跡群



第300号住居跡 (第178図 図版26上)

M2—A5・A6・B6 グリッドに位置する。重複する遺構はない。形状は長方形を呈する。長辺×短辺は 3.66×2.81 m、深さは16cmである。カマドの傾きは N— 67° —W である。

カマドは西壁中央に構築されている。燃焼部の掘り込みはない。全体の長さは80cm程で、煙道部は短い。

煙り出し口は径30×35cmで、しっかりととした掘り込みをもつ。袖部は地山土の掘り残しである。

床面は軟弱で、掘り込みも明瞭でない。

出土遺物の量は少なく、床面からの出土も乏しい。土師器壺が出土している。

第301号住居跡 (第179図 図版26中)

M2—B6・B7・C7 グリッドに位置する。重複する遺構はない。形状は方形を呈する。長辺×短辺は 2.88×2.73 m、深さは21cmである。カマドの傾きは N— 115° —E である。

カマドは東南壁の北に大きく寄った位置、コーナー近くに構築されている。燃焼部は箱形を呈し、規模は 60×50 cm である。

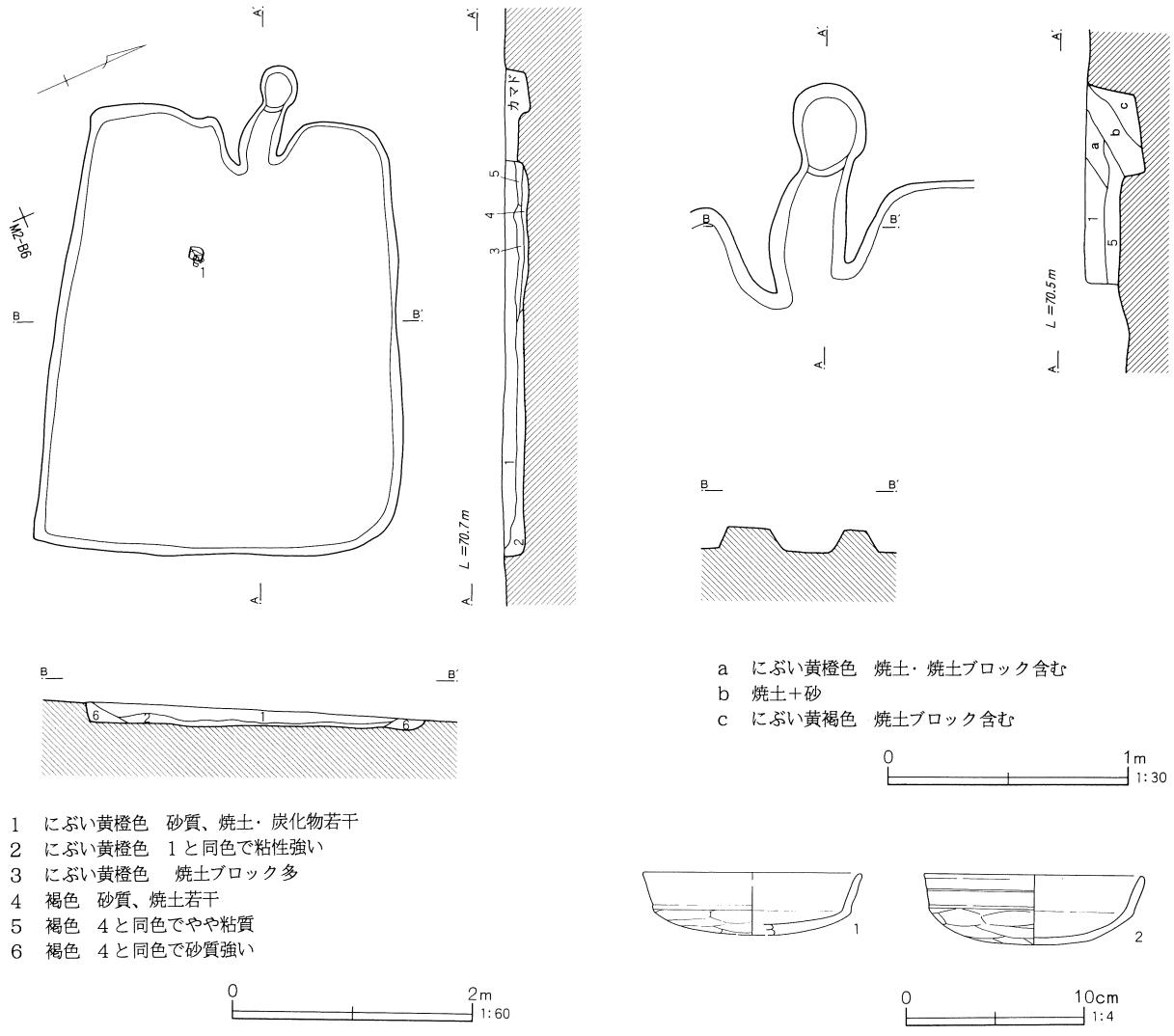
掘り込みはわずかに認められる。煙道部との

境はほとんどなく、煙道部は長さ約100cm、幅35cmで、底面は煙り出し口にかけてゆるやかに浅くなる。袖部は検出されなかった。

床面はよく踏みしめられており固い。

出土遺物の全体量は少なく、床面からの遺物もほとんどない。土師器壺が出土している。

第178図 第300号住居跡・カマド・出土遺物



第300号住居跡遺物観察表（第178図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(12.0)	(3.4)		A 1	A	C	30	床直	器面器面風化
2	壺	12.1	3.8		A 1	A	C	50	埋土	体部外面黒斑あり

第302号住居跡（第180、181図 図版26下）

M2-D5・D6 グリッドに位置する。第306号住居跡を切って構築されている。形状は方形を呈する。長辺×短辺は4.38×4.16m、深さは27cmである。カマドの傾きはN-37°-Eである。

カマドは北東壁中央に構築されている。燃焼部は箱形で、規模は62×51cmである。掘り込みは皿状で明瞭である。煙道部は長さ145cm、幅28cm、底面はほぼ平らだが煙り出し口へ向ってわずかだが深くなっている。

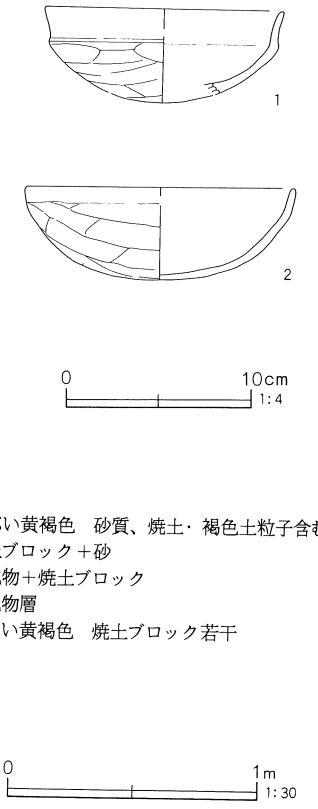
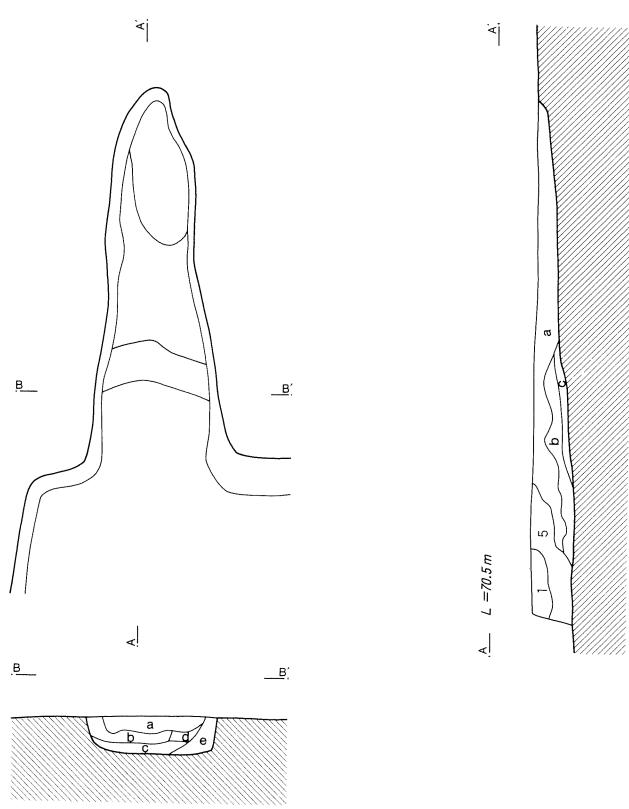
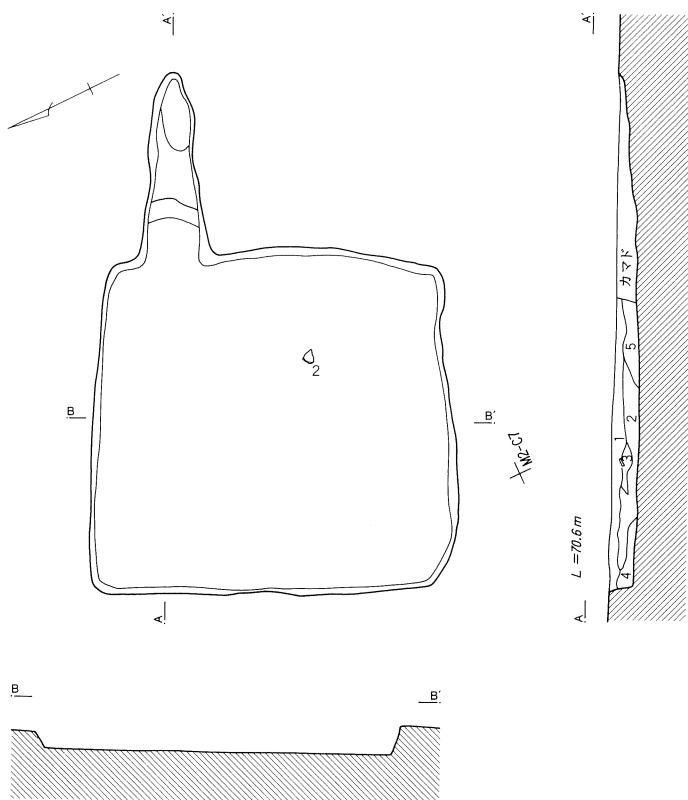
袖部は砂質土で構築されている。

貯蔵穴は北東コーナーに検出された。楕円形で規模は58×43cm、深さは30cmである。バケツ状に深く掘り込まれ、底面は平らである。

東南壁寄りにピットが1基検出された。柱穴ではないと考えられる。

埋土には焼土と炭化物の薄いレンズ状の堆積がいくつか認められた。埋没途中に火をたくなど、なんらかの人為的な行為が働いていたと推定される。床面は踏

第179図 第301号住居跡・カマド・出土遺物



第301号住居跡遺物観察表（第179図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(12.6)	(4.5)		A 1	A	B	25	埋土	器面風化顯著
2	椀	(14.1)	4.9		A 1	A	B	50	床直	器面風化顯著

みしめられており明瞭である。

出土遺物の量は多く、床面でも散らばった状態で出土している。主なものに土師器壺・甕・甌、須恵器壺がある。

第303号住居跡（第182、183図 図版27上）

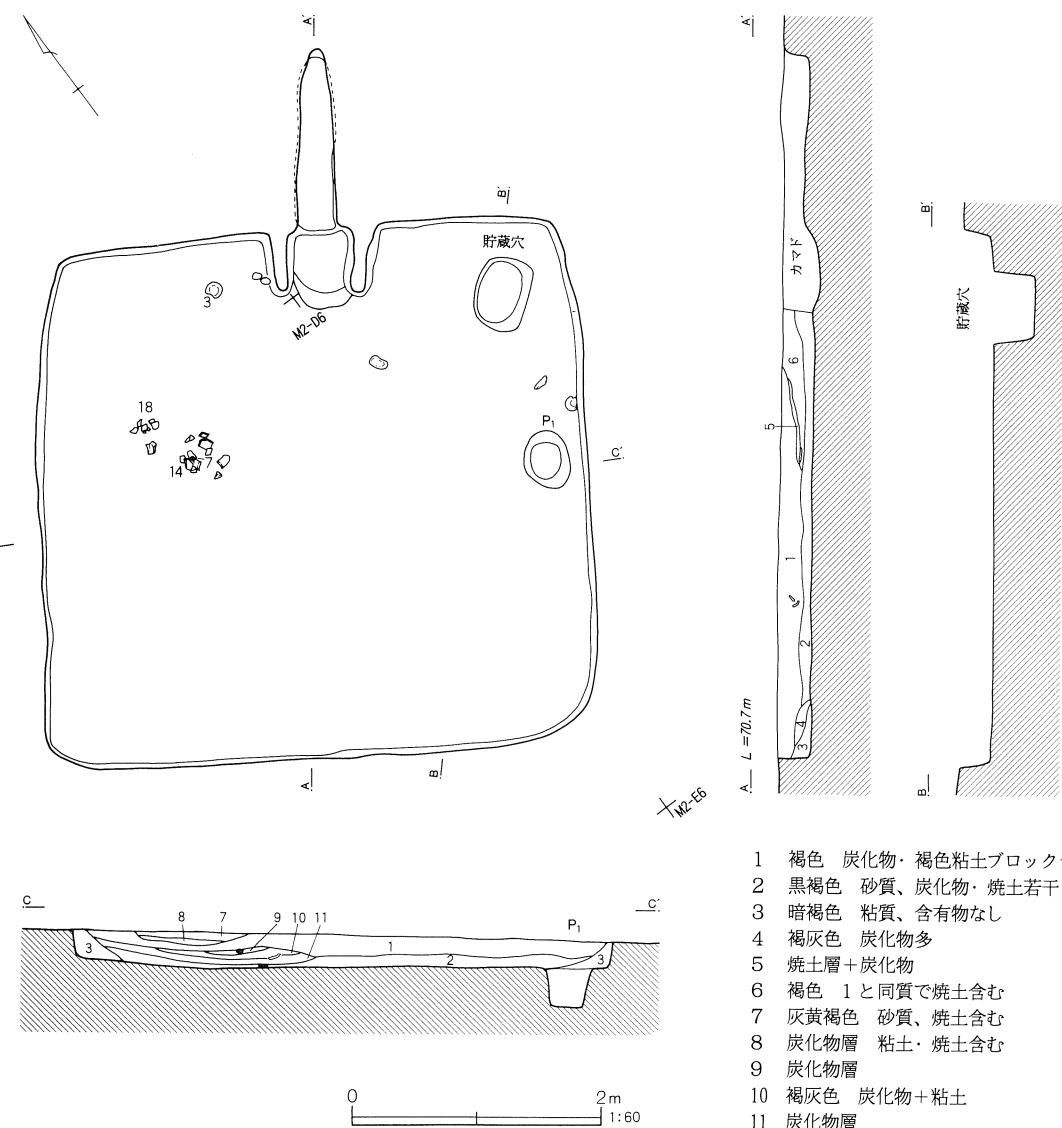
M2—B4・B5・C4・C5 グリッドに位置する。第305号住居跡を切って構築されている。形状は長方形を呈

する。長辺×短辺は3.82×3.44m、深さは31cmである。

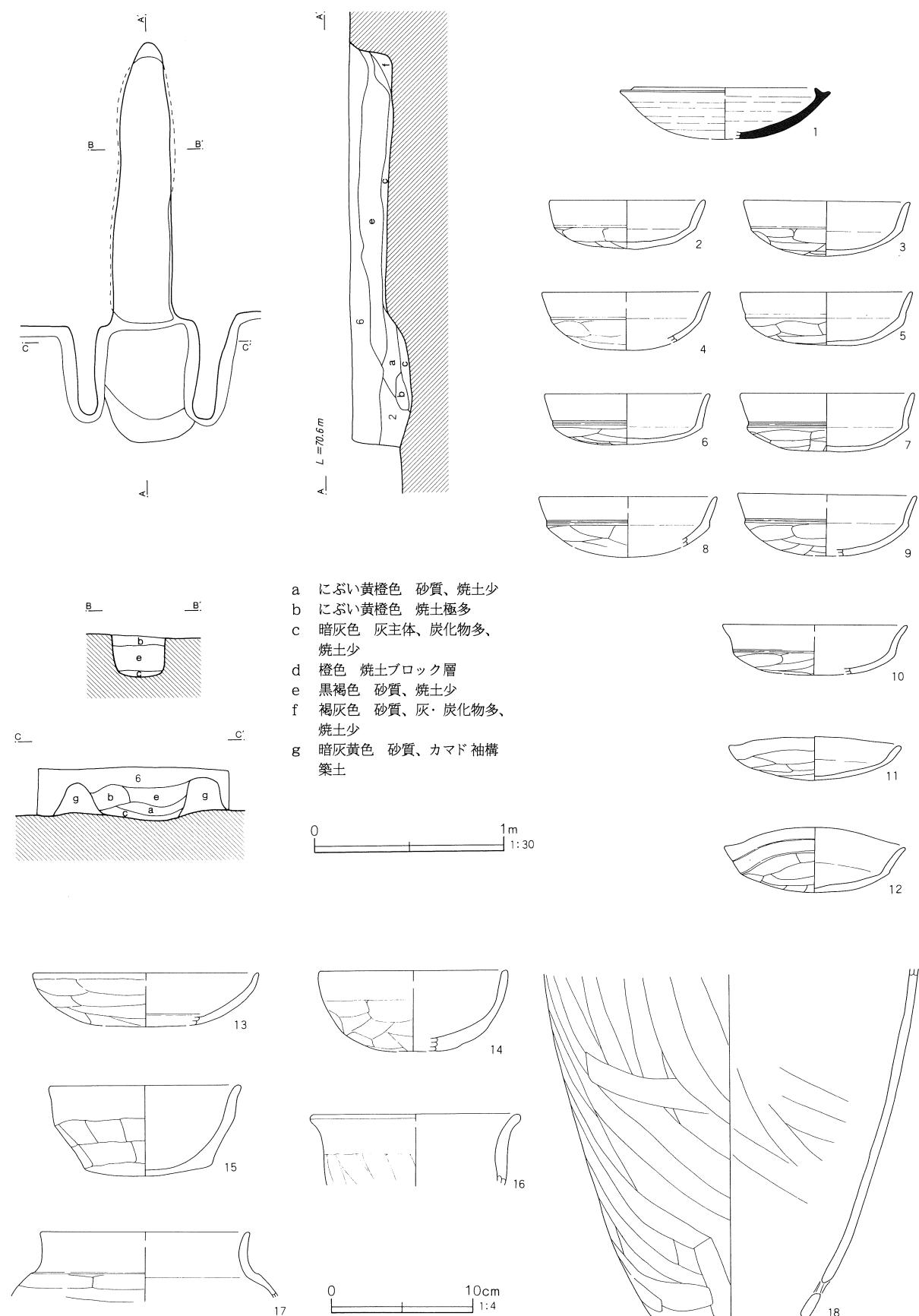
埋土は自然な堆積を経たものと考えられる。カマドの傾きは N—37°—E である。

カマドは北東壁東寄りに構築されている。燃焼部は楕円形で、規模は85×54cmである。底面はわずかに掘り込まれている。煙道部との境は浅いが明瞭な段を有する。煙道部は長さ100cm、幅35cmである。底面は煙り出し口に向って浅くなり、煙り出し口の底面は掘りく

第180図 第302号住居跡



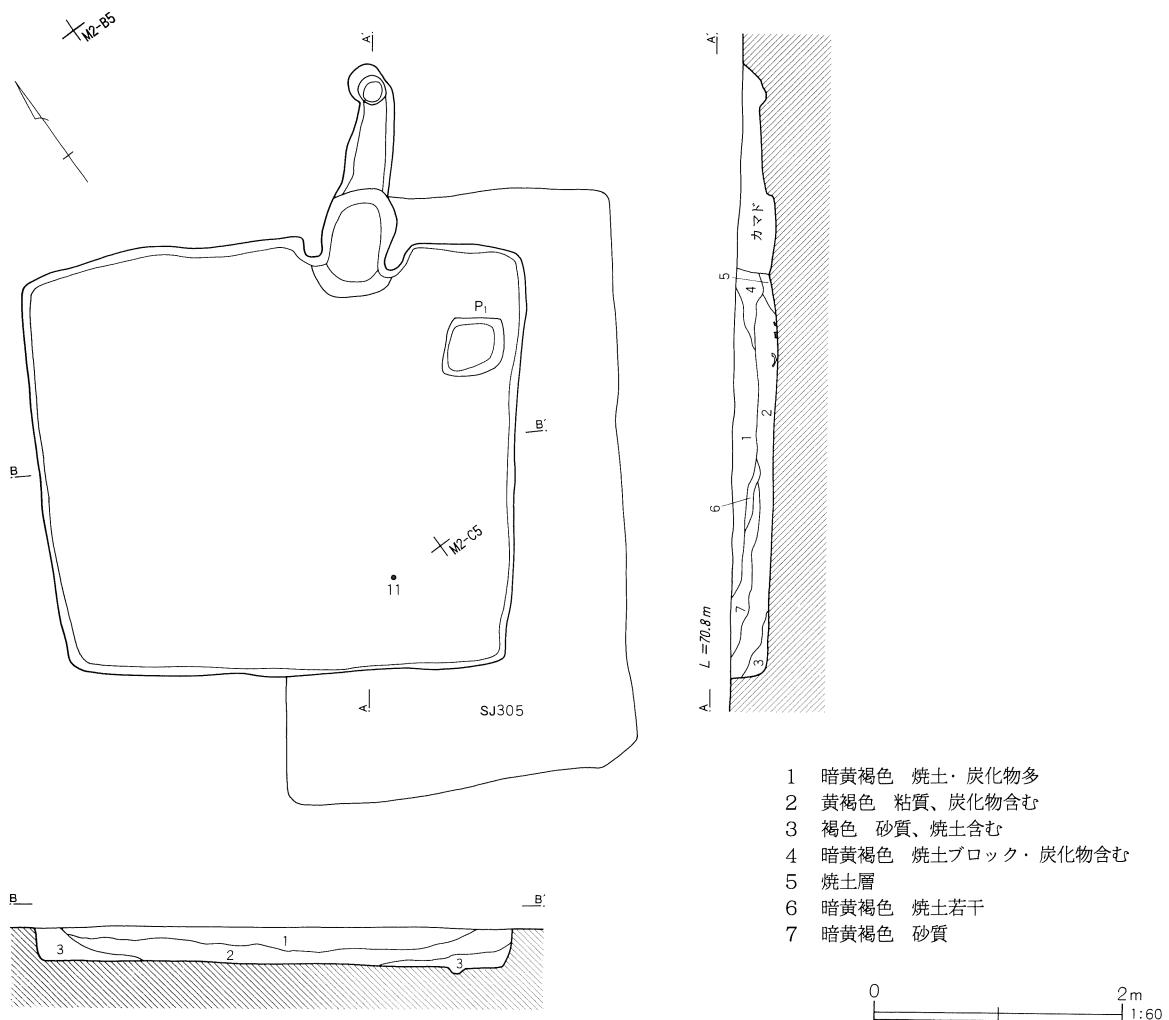
第181図 第302号住居跡カマド・出土遺物



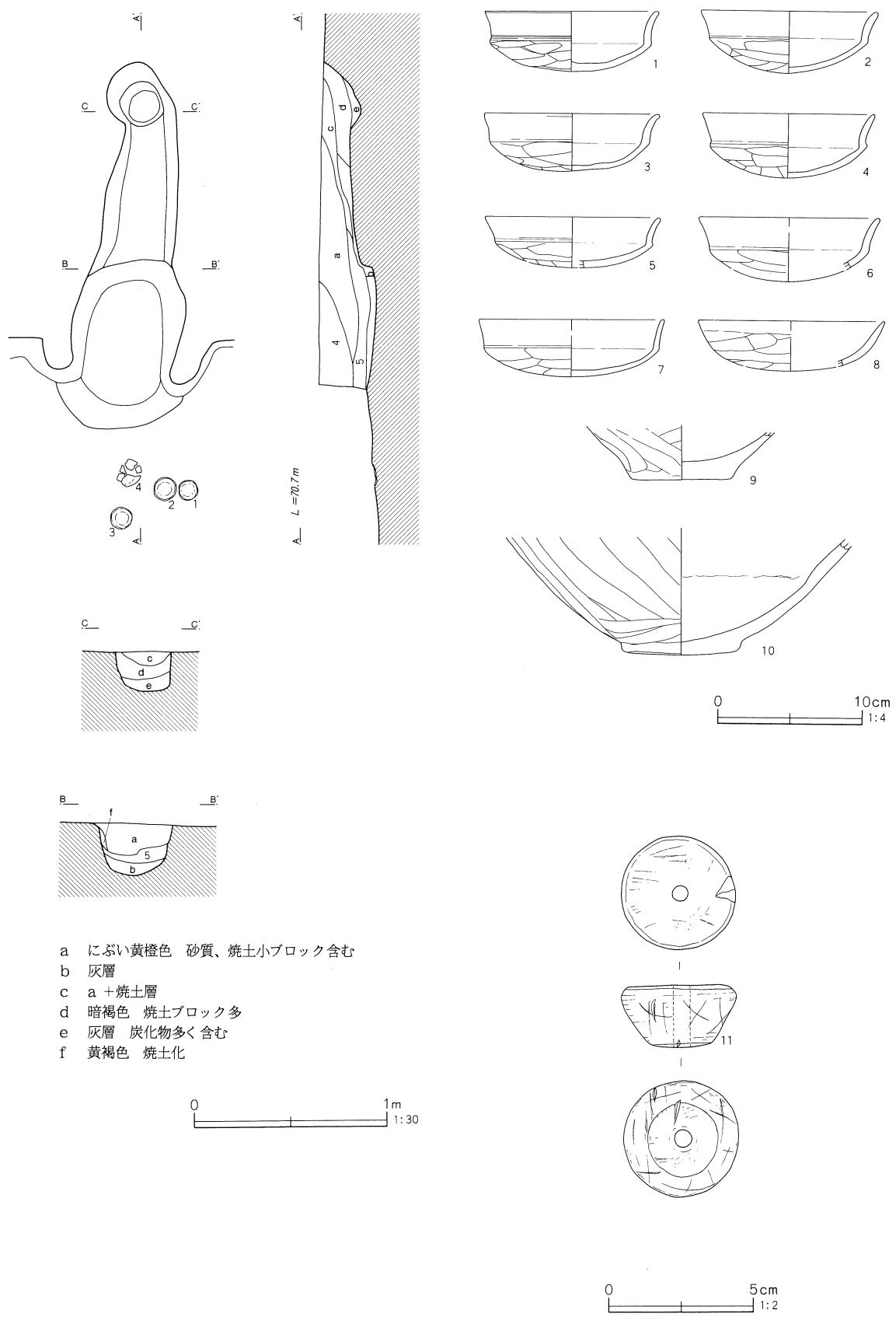
第302号住居跡遺物観察表（第181図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	環	(12.8)	(3.6)		D F 1	A	B	45	埋土	須恵器 器面風化顯著 在地産? 図版37-2
2	環	10.9	3.4		A F 1	A	C	70	埋土	器面風化顯著 図版49-1
3	環	11.5	3.9		A D 1	A	C	95	床直	器面風化 図版49-2
4	環	(11.7)	(3.5)		A 1	A	B	40	埋土	器面風化顯著
5	環	11.9	3.7		F 1	A	B	95	埋土	器面風化顯著 図版49-3
6	環	11.5	3.5		F 1	A	C	60	埋土	図版49-4
7	環	12.1	4.1		A 1	B	B	75	床直	器面風化顯著 外面一部黒化
8	環	12.4	(3.5)		A 1	A	B	40	埋土	外面一部黒化
9	環	(12.4)	(4.3)		A D F 2	A	B	30	埋土	
10	環	(12.8)	(3.4)		A 1	A	B	40	埋土	口縁外面一部黒化
11	環	12.0	3.1		A 1	A	B	100	埋土	器面風化顯著 歪み著しい 図版49-5
12	環	12.6	4.6		A 1	A	B	50	埋土	器面風化顯著 歪み著しい 図版49-6
13	環	(15.7)	(3.7)		D F 2	A	C	40	埋土	外面一部黒化 内面黒色処理
14	碗	(13.0)	(5.6)		A D 2	A	B	40	床直	
15	碗	13.3	6.4	9.0	A D F 5	A	B	90	埋土	外面底部黒化 図版57-5
16	小形甕	(14.3)	(5.0)		D F 5	A	B	5	埋土	
17	壺	(14.5)	(4.6)		F 1	A	C	5	埋土	
18	甕	(24.4)		11.0	D F 2	A	C	30	床直	外面、内面大半黒化 底部近くに一对の穿孔あり

第182図 第303号住居跡



第183図 第303号住居跡カマド・出土遺物



第303号住居跡遺物観察表（第183図）

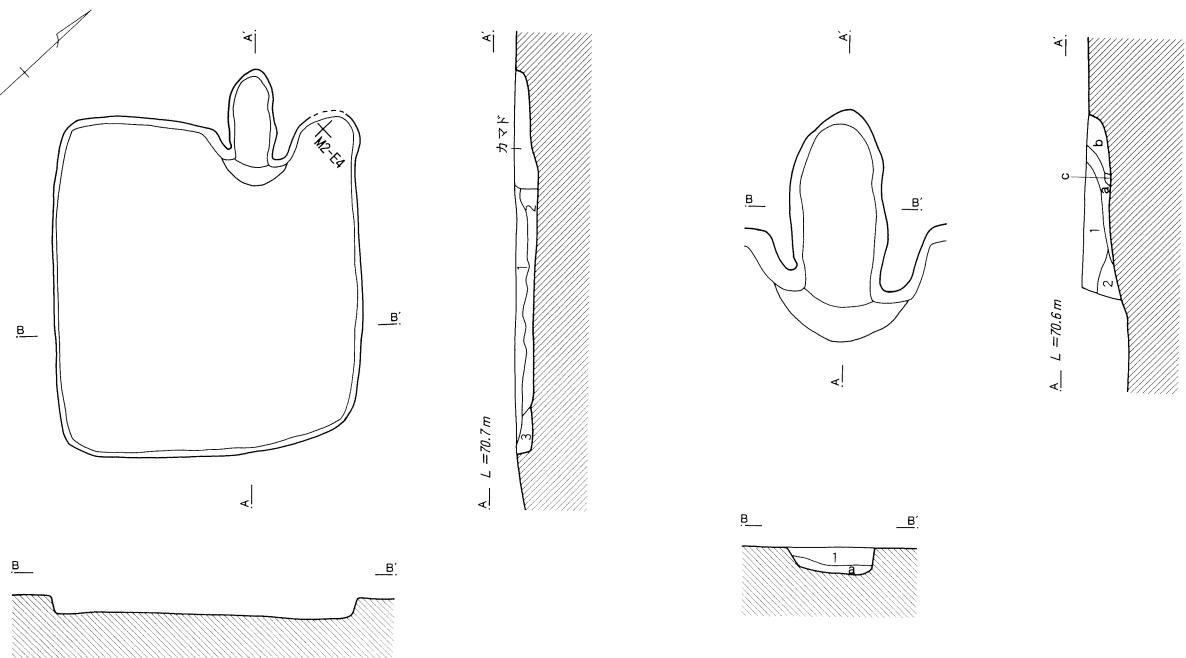
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	11.7	4.1		AD 1	A	C	95	カマド前	器面風化顕著 外面一部黒化 図版49-7
2	壺	11.9	4.3		AD F 1	A	B	100	カマド前	器面風化顕著 図版49-8
3	壺	11.8	4.0		AD 1	A	B	100	カマド前	器面風化 図版49-9
4	壺	11.6	4.4		A 1	A	B	80	カマド前	器面風化顕著
5	壺	11.8	(3.4)		A 1	A	C	75	埋土	器面風化顕著
6	壺	12.2	(3.5)		A F 1	A	B	15	埋土	器面風化顕著
7	壺	(12.5)	3.9		A F 1	A	B	30	埋土	器面風化顕著
8	壺	(12.6)	(3.1)		AD 1	A	B	45	埋土	口縁外面一部黒化 内面黒色処理
9	甕	(3.7)	6.8		AD 3	A	B	5	埋土	底部破片 内面黒化
10	壺	(8.0)	8.1		AD F 2	A	B	10	埋土	底部近く外面一部黒化
11	紡錘車	上径3.8cm、下径2.1cm、厚さ2.1cm、孔径0.6cm、重さ46.6g					床直	滑石製 線刻あり		

ぼめられている。煙り出し口は直径約25cmである。袖部は小さく、地山土の掘り残しである。

ピットは北東コーナー寄りに1基検出された。深さは21cmである。床面・掘り込みともに明瞭である。

カマド燃焼部手前の床面から、土師器壺が4点並んで出土した。埋土中からは土師器壺・甕の破片が出土している。また、東南コーナー寄りで、紡錘車が出土した。

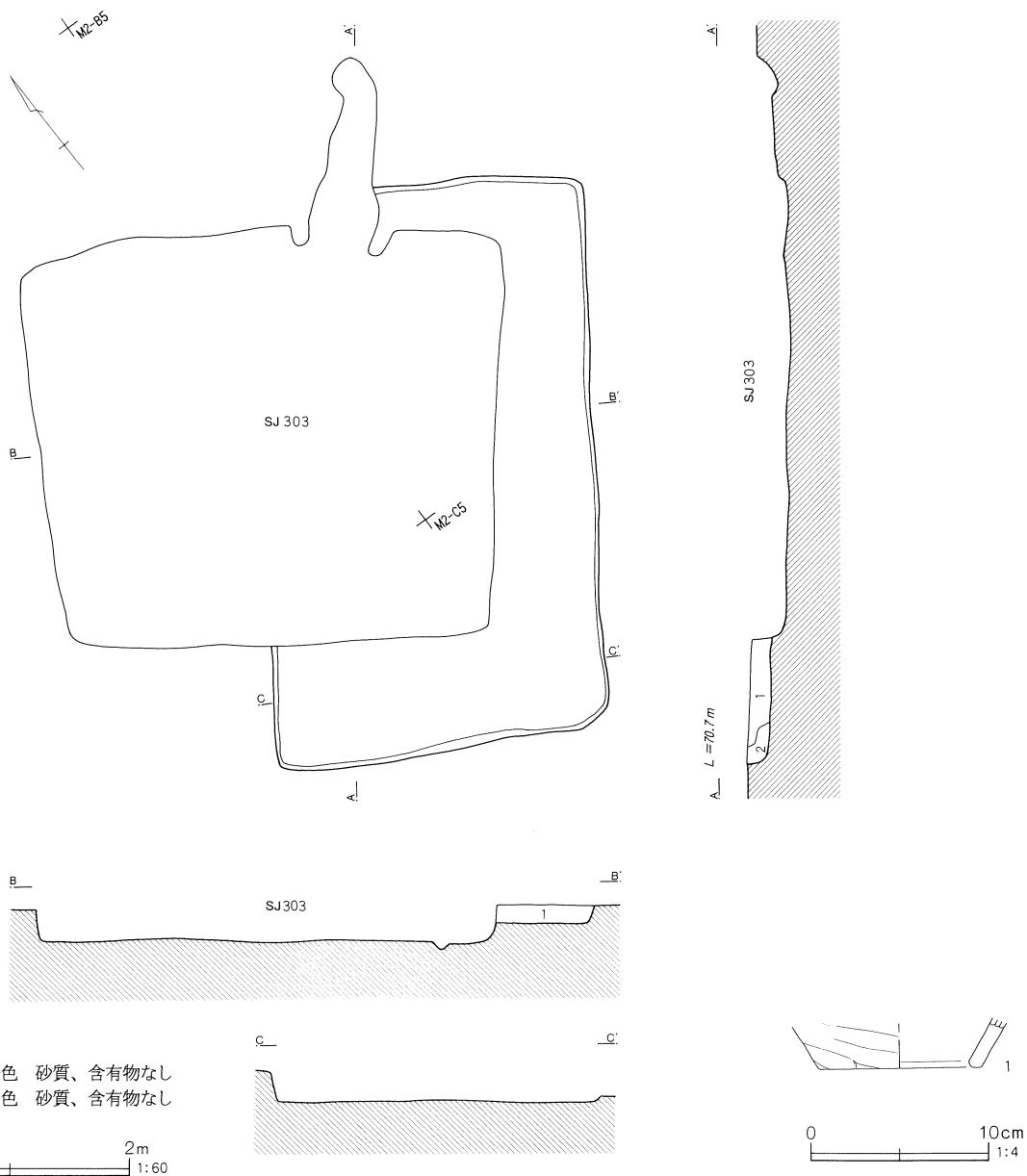
第184図 第304号住居跡・カマド



- 1 暗灰黄色 灰・炭化物含む
2 暗オリーブ褐色 砂質、炭化物含む
3 暗褐色 砂質、炭化物含む

- a 暗灰黄色 灰・炭化物含む
b 暗オリーブ褐色 砂質、炭化物含む
c 灰土ブロック

第185図 第305号住居跡・出土遺物



第305号住居跡遺物観察表（第185図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	甌		(2.7)	8.8	ADF5	A	B	5	埋土	底部破片 一部黒化

出土遺物の量はわずかで、図示できる遺物はない。

かった。

遺物は破片が少量出土した。図示できたのは土師器

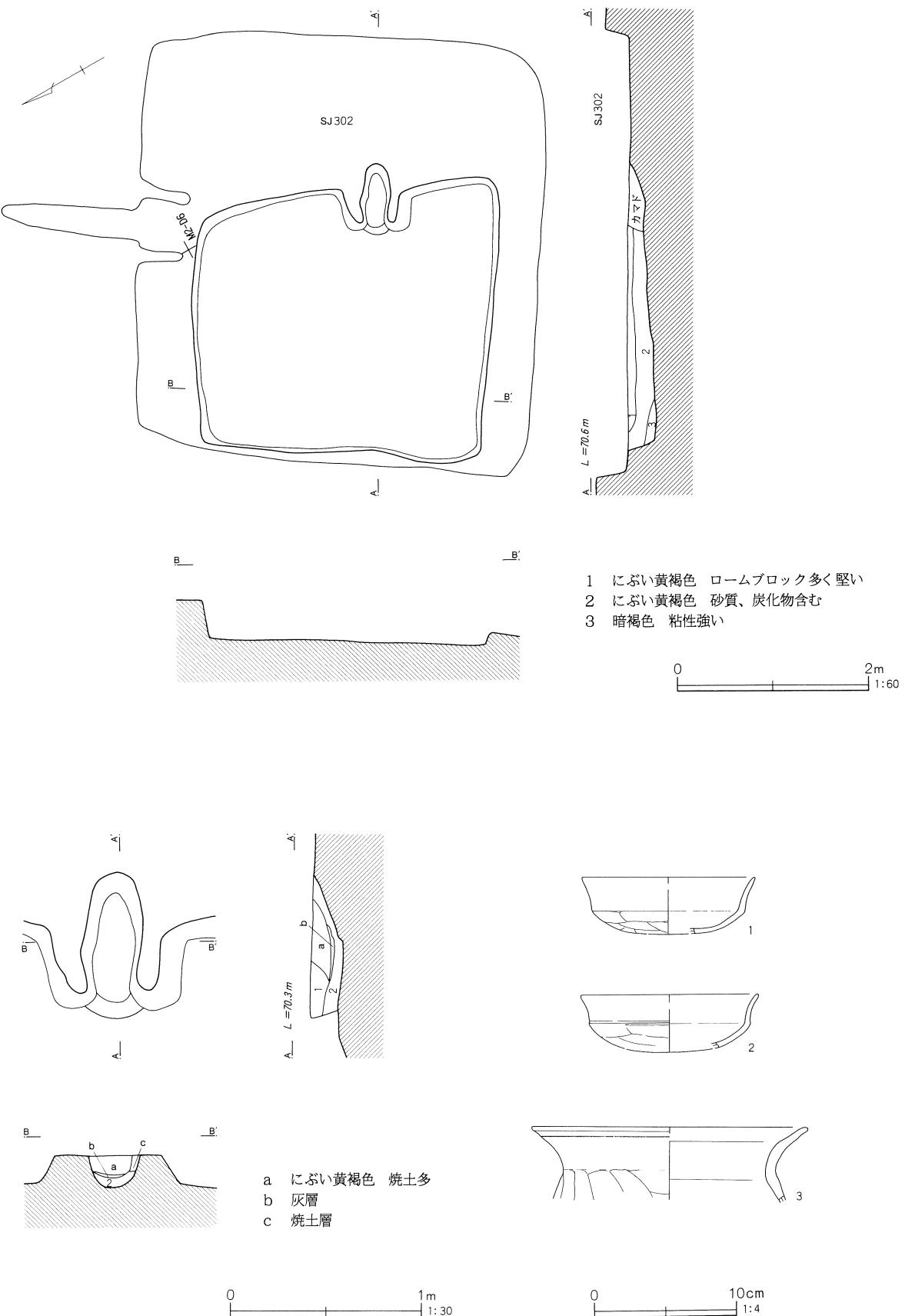
第305号住居跡（第185図 図版27下）

M2-B5・C4・C5 グリッドに位置する。第303号住居跡に切られている。形状は長方形を呈する。長辺×短辺は4.57×2.72m、深さは15cmである。長辺の傾きはN-36°-Eである。カマド等の施設は検出されな

第306号住居跡（第186図 図版27下）

M2-C5・D5・D6 グリッドに位置する。第302号住居跡の床面精査中に、プランが確認された住居跡であ

第186図 第306号住居跡・カマド・出土遺物



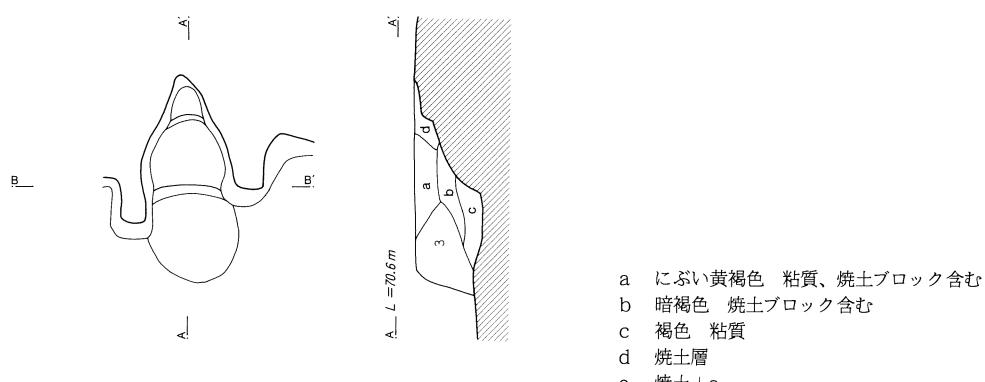
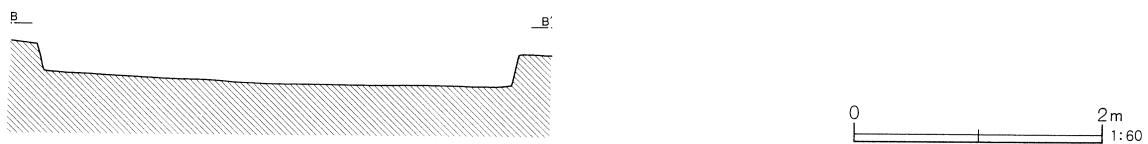
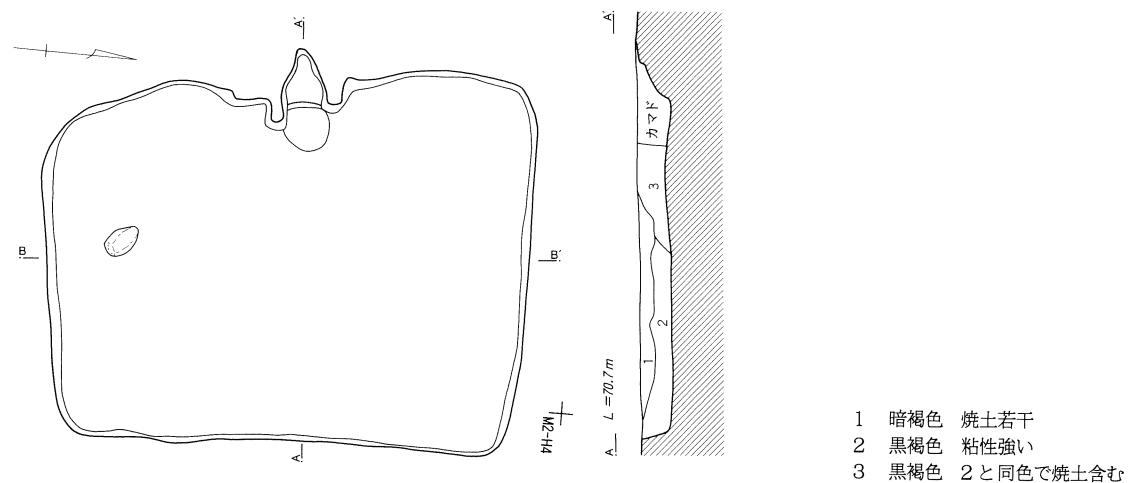
第306号住居跡遺物観察表（第186図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(11.8)	(3.9)		A 1	A	B	45	埋土	器面風化顯著
2	壺	(12.2)	(3.7)		A 1	A	C	20	埋土	器面風化顯著
3	甕	(18.8)	(5.2)		D F 2	A	C	5	埋土	

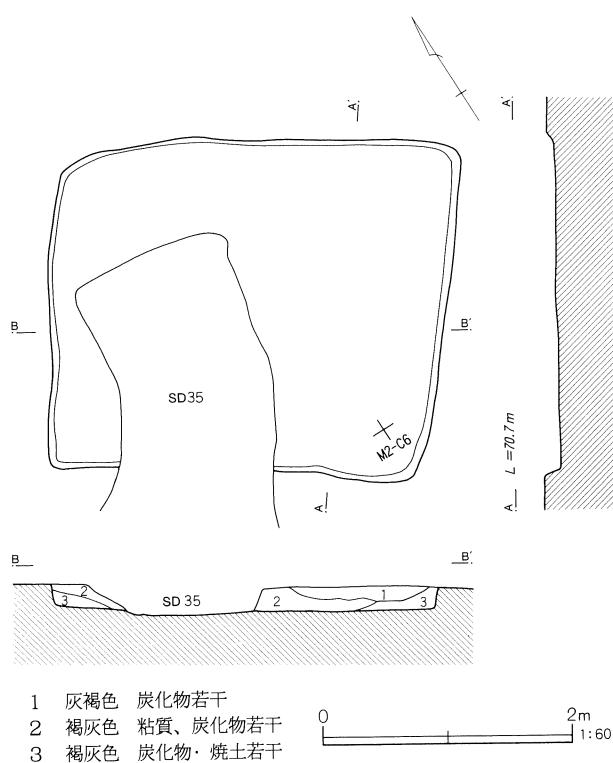
る。形状はゆがんだ方形を呈する。長辺×短辺は3.12×2.82m、深さは24cmである。埋土にはロームブロックが多く含まれており、埋め戻された可能性がある。カマドの傾きはN-120°-Eである。

カマドは南東壁ほぼ中央に構築されている。第302号住居跡構築時に削平を受け、検出されたのは燃焼部のみであった。規模は75×30cm、掘り込みはわずかである。袖部は地山土の掘り残しで構築されている。被

第187図 第307号住居跡・カマド



第188図 第308号住居跡



熱面は袖部内面に認められた。

床面は軟弱で、カマド方向に向かって浅くなっている。貯蔵穴やピット等、他の施設は検出されなかった。

遺物は埋土中から破片がわずかに出土した。土師器壊・甕がある。

第307号住居跡（第187図 図版28上）

M2—H3・H4 グリッドに位置する。第35号溝跡に切られている。形状は長方形を呈する。長辺×短辺は 3.82×2.88m、深さは25cmである。埋土はあまり分層されず、短期間の埋没が想定される。カマドの傾きは N—95°—W である。

カマドは西壁中央に構築されている。燃焼部は丸く、規模は38×35cmである。底面は浅い掘り込みをもつ。煙道部は底面が急激に立ち上がり、検出された長さはたいへん短い。袖部は地山の削り出しを基部として、その上は焼土を含む砂質土で構築されている。

その他の施設は検出されなかった。

出土遺物はわずかで、図示できるものはない。

第308号住居跡（第188図 図版28中）

M2—B5・B6・C5・C6 グリッドに位置する。第35号溝跡に切られている。形状は長方形を呈する。長辺×短辺は 3.14×2.64m、深さは19cmである。長辺の傾きは N—123°—E である。

床面はあまり明瞭でなく、カマドや貯蔵穴等の施設は検出されなかった。

遺物はほとんど出土しなかった。

第329号住居跡（第189、190図 図版30中）

M2—K1・M2—K2 グリッドに位置する。形状はほぼ正方形を呈する。長辺×短辺は 4.03×4.02m、深さは13cmである。カマドの傾きは N—80°—E である。

カマドは東壁のわずかに南に寄った位置に構築されている。燃焼部のみが検出され、煙道部は削平されたものと思われる。燃焼部は箱形で、規模は54×40cmである。底面に掘り込みはなく、ほとんど平らである。袖部は地山土を掘り残しているものである。被熱面は燃焼部底面にひろく認められた。

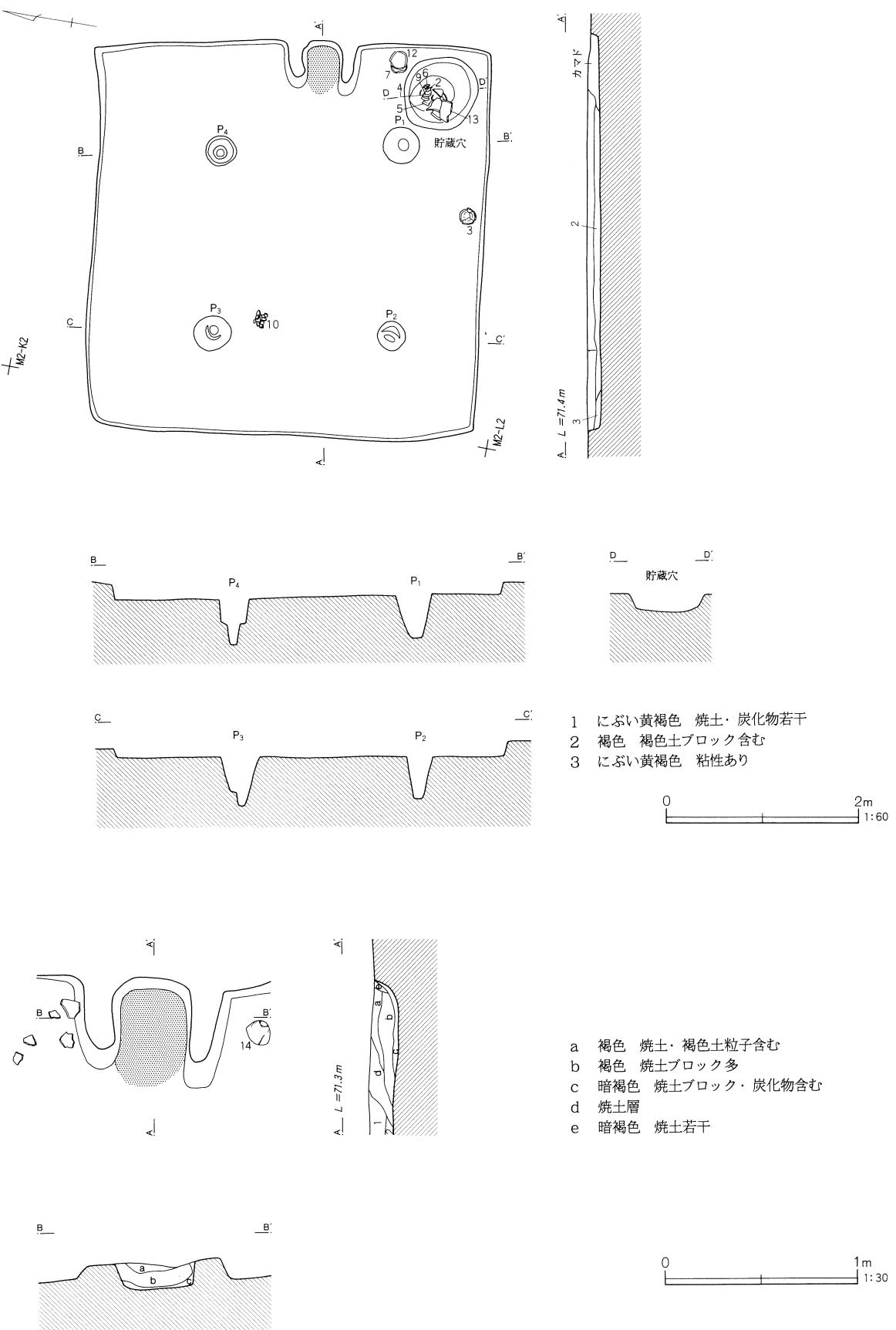
貯蔵穴は東南コーナーに位置している。形状は円形で、規模は82×73cm、深さは51cmである。底面はわずかにくぼんでいる。

ピットは4基検出された。柱穴とみなされる。各柱穴の間隔は、P1—P2、P1—P4 間で約1.9m、P2—P3、P3—P4 間で1.8mである。歪みもなく均等に配されている。なお、柱痕は確認されなかった。

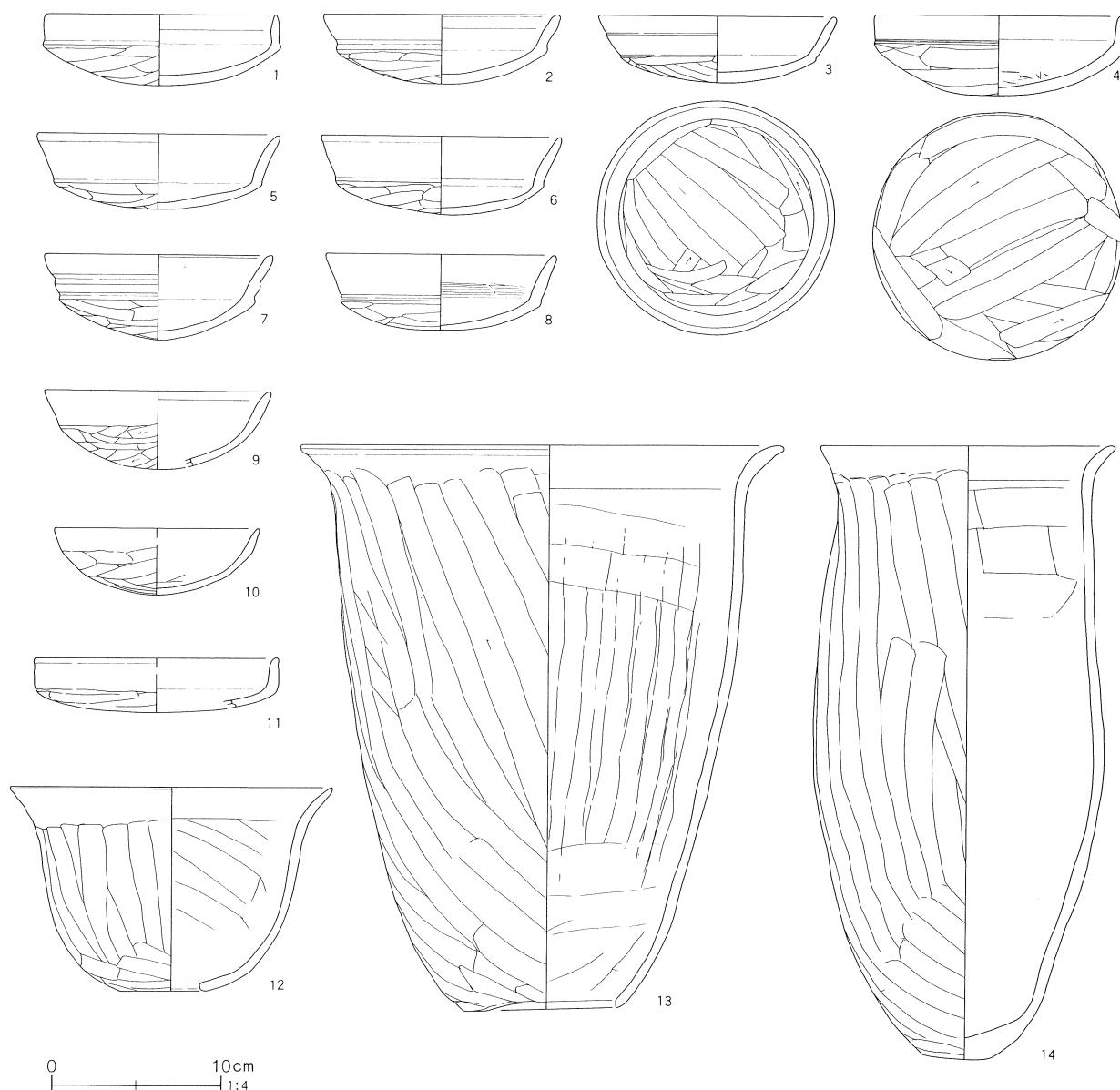
壁の立ち上がりはやや開くが、掘り込みは明瞭である。床面はよく踏みしめられており、しっかりと検出された。貼り床は認められなかった。

出土遺物の内容は豊富である。おもに貯蔵穴内やカマドの脇から状態のよい遺物が出土した。土師器壊・甕・甌がある。

第189図 第329号住居跡・カマド



第190図 第329号住居跡出土遺物

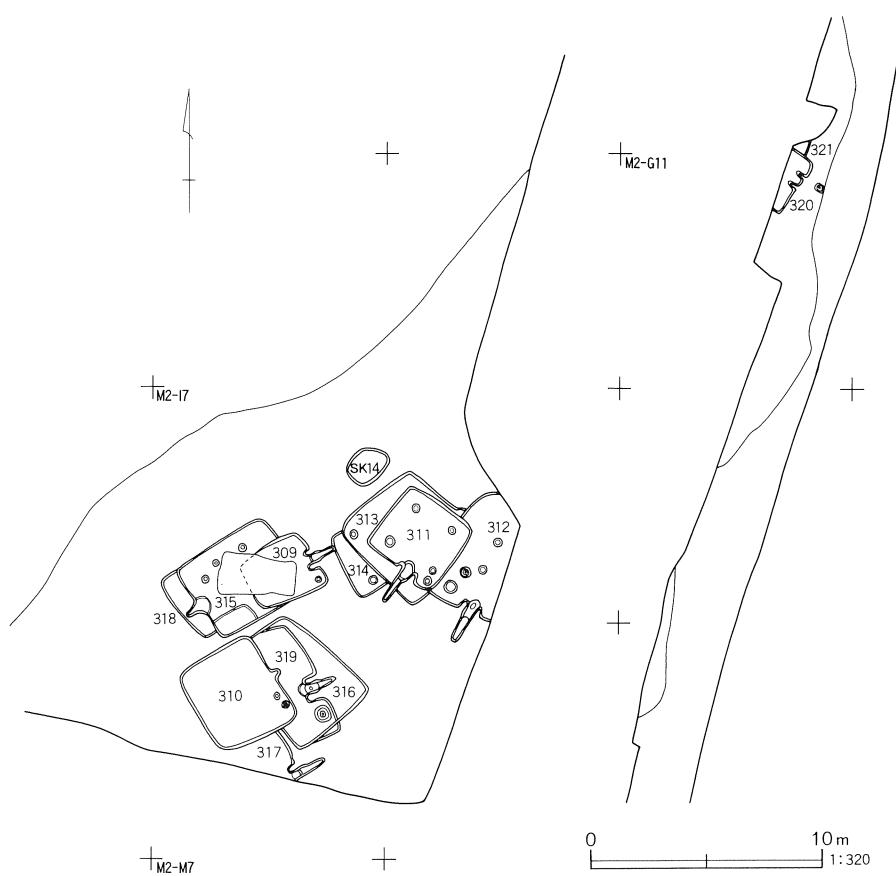


第329号住居跡遺物観察表（第190図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	13.4	4.2		ADF 2	A	B	75	カマド埋土	口縁一部黒化
2	壺	13.6	4.1		F 1	A	F	75	貯藏穴	内・外面黒化 図版50-8
3	壺	13.6	4.0		ADF 2	A	B	100	床直	図版50-9
4	壺	14.3	4.7		AF 2	A	B	100	貯藏穴	内・外面一部黒化 図版50-10
5	壺	14.0	4.4		ADF 2	A	B	100	貯藏穴	図版51-1
6	壺	13.8	4.6		F 5	A	B	80	貯藏穴	外面一部黒化 図版51-2
7	壺	13.2	5.0		ADF 1	A	F	100	壁際	内・外面黒化 図版51-3
8	壺	13.3	4.4		ADF 2	A	B	95	貯藏穴	図版51-4
9	壺	13.0	(4.4)		ADF 2	A	B	90	貯藏穴	外面一部黒化 図版51-5
10	壺	11.8	3.8		AD 2	A	B	50	床直	
11	壺	14.1	(2.9)		F 2	A	B	25	埋土	口縁一部黒化
12	小形甌	18.7	11.9	4.8	DF 2	A	B	75	壁際	外面一部黒化 図版57-7
13	甌	27.8	33.2	8.8	DF 5	A	B	100	貯藏穴	外面一部黒化 図版80-2
14	甌	16.9	36.0	4.1	DF 2	A	B	80	カマド脇	外面一部、内面口縁・底部一部黒化 図版77-3

6. 第23号住居跡群

第191図 第23住居跡群



第309号住居跡（第192、193図 図版28下）

M2—J7・J8 グリッドに位置する。第315号住居跡を切って構築されている。形状は長方形を呈する。長辺×短辺は 3.04×2.66 m、深さは17cmである。カマドの傾きはN—64°—Eである。

カマドは北東壁中央に構築されている。燃焼部の底部は手前は平らだが、煙道部寄りは一段掘り込まれている。その掘り込みから煙道部の底面は徐々に浅くなり、煙り出し口へ至る。全体の長さは150cmである。袖部は地山土を掘り残して構築している。被熱面は燃焼部底面と袖部内壁に認められた。

貯蔵穴は東南コーナーに位置している。円形を呈し、規模は直径30cm、深さは17cmである。バケツ状に掘り込まれ、底面は平らである。攪乱に多く侵食され、壁の掘り込みや床面はあまり明瞭でない。

遺物は、おもに貯蔵穴上面から出土している。土師

器壊・鉢・壺がある。5の
鎌は古くても近世に属す
るものと考えられる。攪乱
に伴う流れ込みであろう。

第310号住居跡（第194、195
図 図版29上）

M2—K7・K8・L7 グ
リッドに位置する。第317・
319号住居跡を切ると考
えられる。形状は長方形を呈
する。長辺×短辺は $4.24 \times$
 3.70 m、深さは24cmであ
る。カマドの傾きはN
—57°—Eである。

カマドは北東壁中央に
構築されている。壁を半円
形に掘り込んで燃焼部と
している。規模は長さ40cm
である。底面はわずかに掘

り込まれている。煙道部は検出されなかった。袖部も
ないが、片方の基部にあたる部分に石が置かれていた。
あまり焼けた形跡がなく、内壁にわずかに被熱面が認
められる程度である。

ピットは北東壁カマド脇に2基並んで検出された。
深さはP1が22cm、P2が29cmである。柱痕はない。

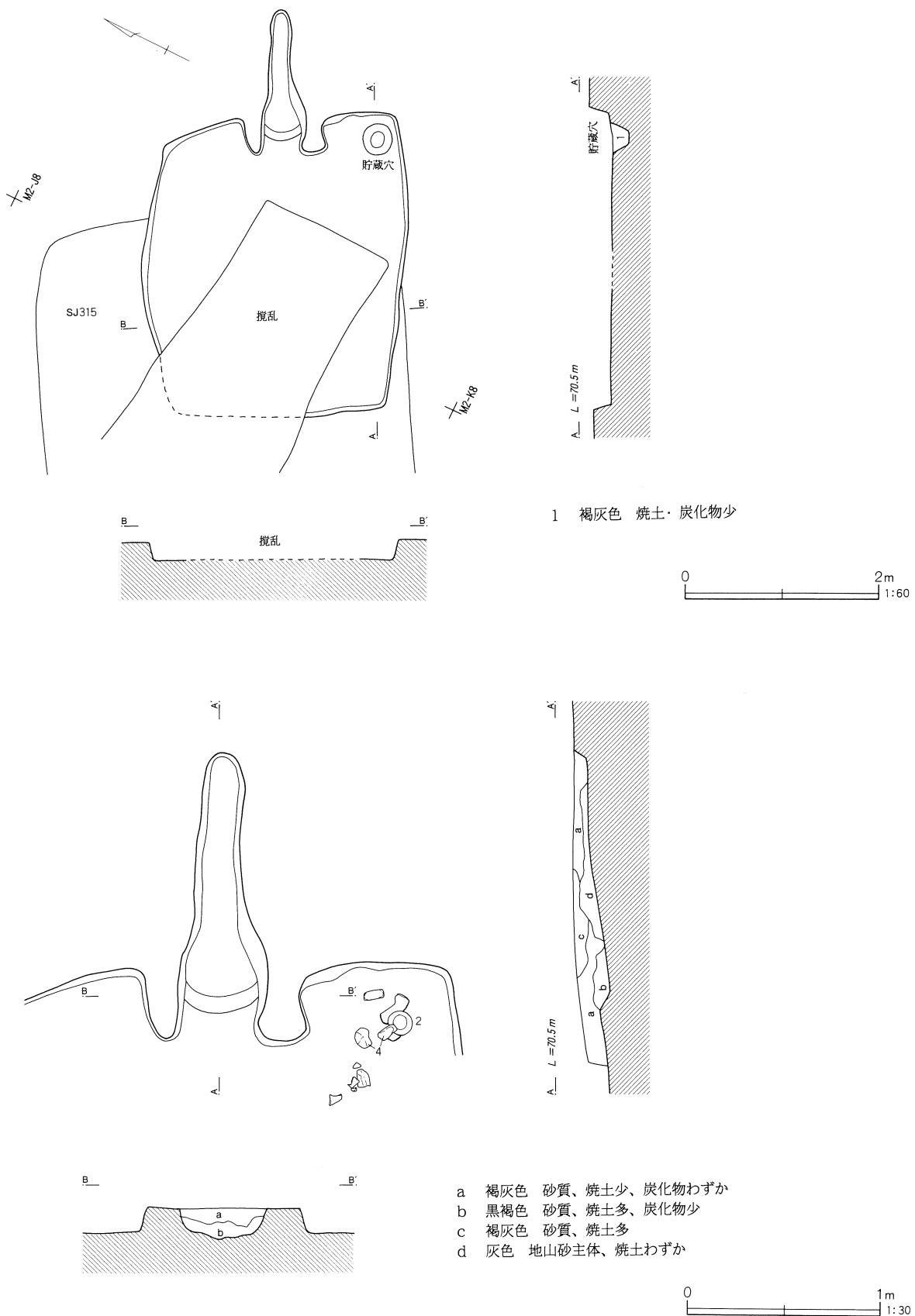
床面は中央に貼り床が認められ、全体にしっかりと
検出された。重複する部分の壁は不明瞭である。

埋土中およびカマド手前の床面から、若干の遺物が
出土している。土師器壊・椀・甕等がある。須恵器甕
類の胴部破片も出土したが図示できなかった。

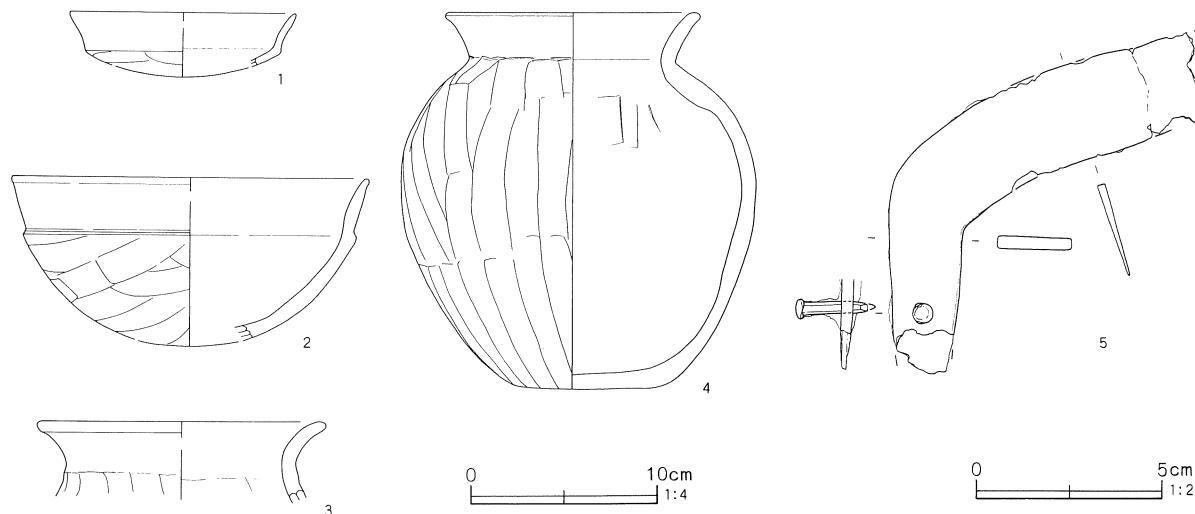
第311号住居跡（第196、197図 図版29中）

M2—I9・J8・J9 グリッドに位置する。第312・313
号住居跡を切って構築されている。形状は方形を呈す
る。長辺×短辺は 3.48×3.35 m、深さは25cmである。

第192図 第309号住居跡・カマド



第193図 第309号住居跡出土遺物



第309号住居跡遺物観察表（第193図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(12.0)	(2.9)		A 1	A	B	10	埋土	器面風化顯著 内面黒化
2	鉢	(18.9)	(8.6)		ADF 2	A	B	25	貯藏穴	
3	小形甕	(15.0)	(4.3)		ADF 2	A	B	5	埋土	口縁部破片
4	壺	13.3	20.1	7.7	ADF 2	A	B	55	貯藏穴	図版68-2
5	鎌	現長11.5cm、刃部幅2.6cm、背部厚0.2cm、重さ30.5g					0	10cm	攪乱	鉄製 目釘あり 混入品

第310号住居跡遺物観察表（第195図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(12.0)	(3.3)		AF 1	A	B	20	埋土	
2	壺	(12.9)	(2.9)		A 1	A	C	15	カマド	
3	壺	(12.2)	(3.7)		ADF 2	A	B	30	床直	
4	壺	14.7	3.7		A 1	A	B	55	埋土	
5	壺	11.2	4.1		AD 1	A	B	95	埋土	底部黒化 図版49-10
6	壺	(12.0)	(3.5)		AD 1	A	B	20	埋土	
7	壺	11.0	4.1		DF 2	A	B	85	埋土	図版55-6
8	椀	(11.4)	(5.9)		ADF 2	A	F	30	埋土	
9	椀	8.5	(7.2)	(6.4)	DF 2	A	B	35	埋土	口縁内面黒化
10	椀	15.3	9.3		ADF 2	A	B	90	カマド	底部外面黒化 図版57-6
11	小形甕		(3.8)	6.0	ADE 5	A	B	5	埋土	
12	甕		(4.1)	5.3	ADF 5	A	C	5	埋土	
13	甕	(15.9)	(5.7)		ADEF 5	A	B	5	埋土	
14	鉢	(21.9)	(4.9)		AD 2	A	B	5	埋土	内面黒色処理

カマドの傾きは N—146°—W である。

カマドは南西壁や東寄りに構築されている。燃焼部は箱形で、規模は95×54cmである。底面は大きく掘り込まれ、煙道部底面との比高差が著しい。およそ30cmである。煙道部底面は平らで煙り出し口へ至る。煙り出し口は直径20cm程のものであったと考えられる。袖部は地山土の掘り残してある。被熱面は袖部内面にわずかにみられ、全体にあまり焼けていない。支脚に

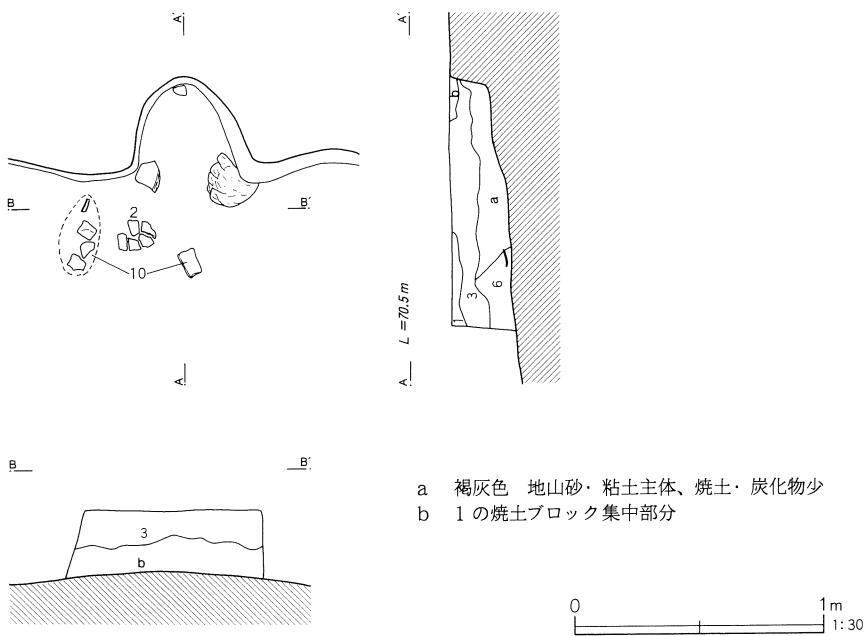
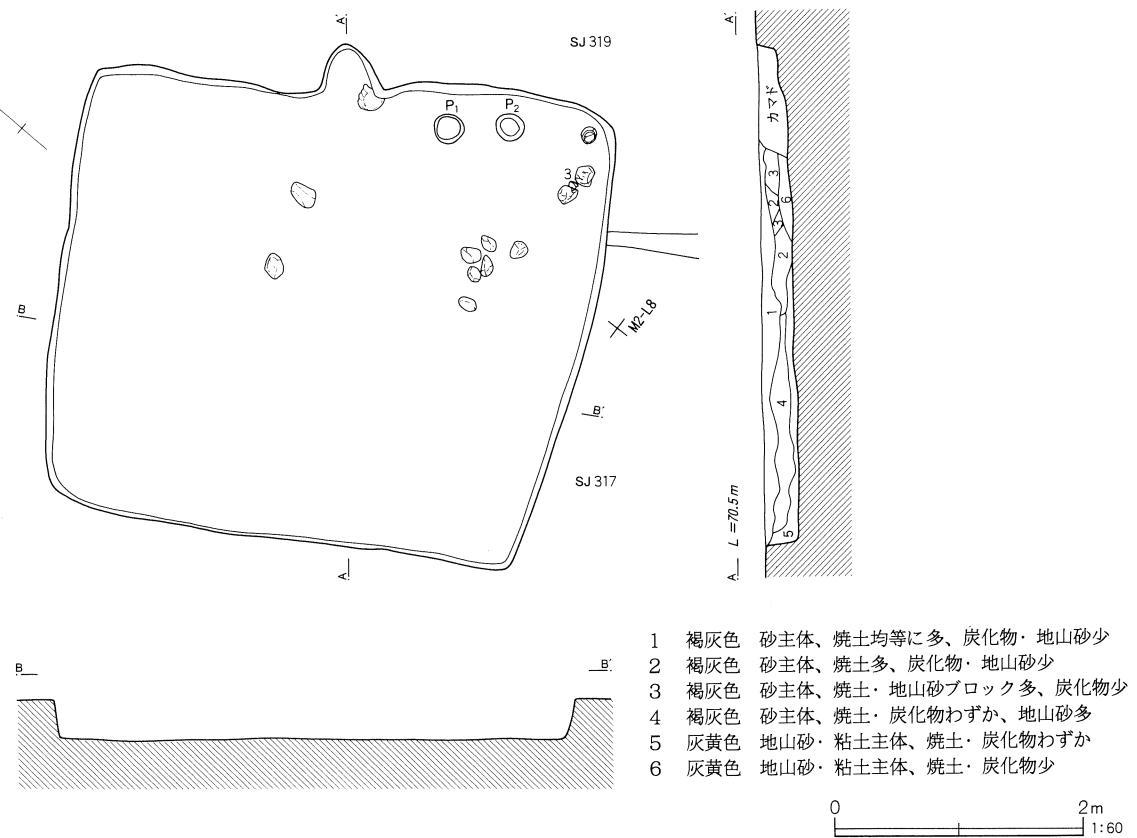
は自然石が使用されていた。

ピットは5基検出された。掘り込みははつきりせず、柱痕も認められなかったが、位置的にみて柱穴と判断した。全体の配置はあまりバランスがとれていない。

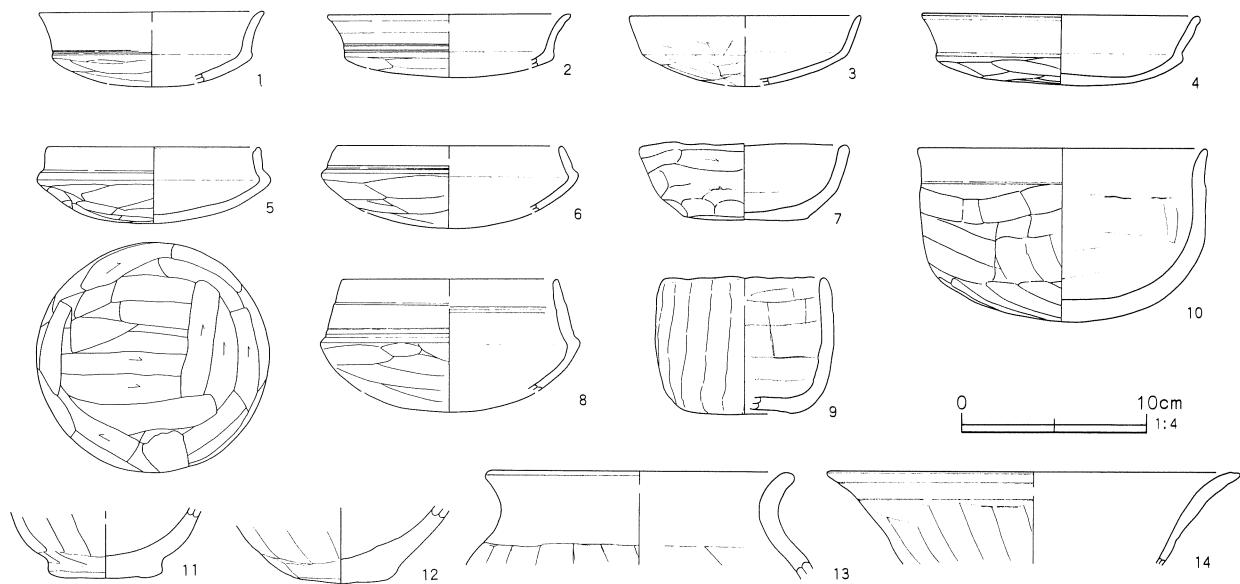
貼り床はカマド手前のみに認められた。

出土遺物の量は少ないが、南西コーナーの床面に土師器壺が3点並んで出土している。

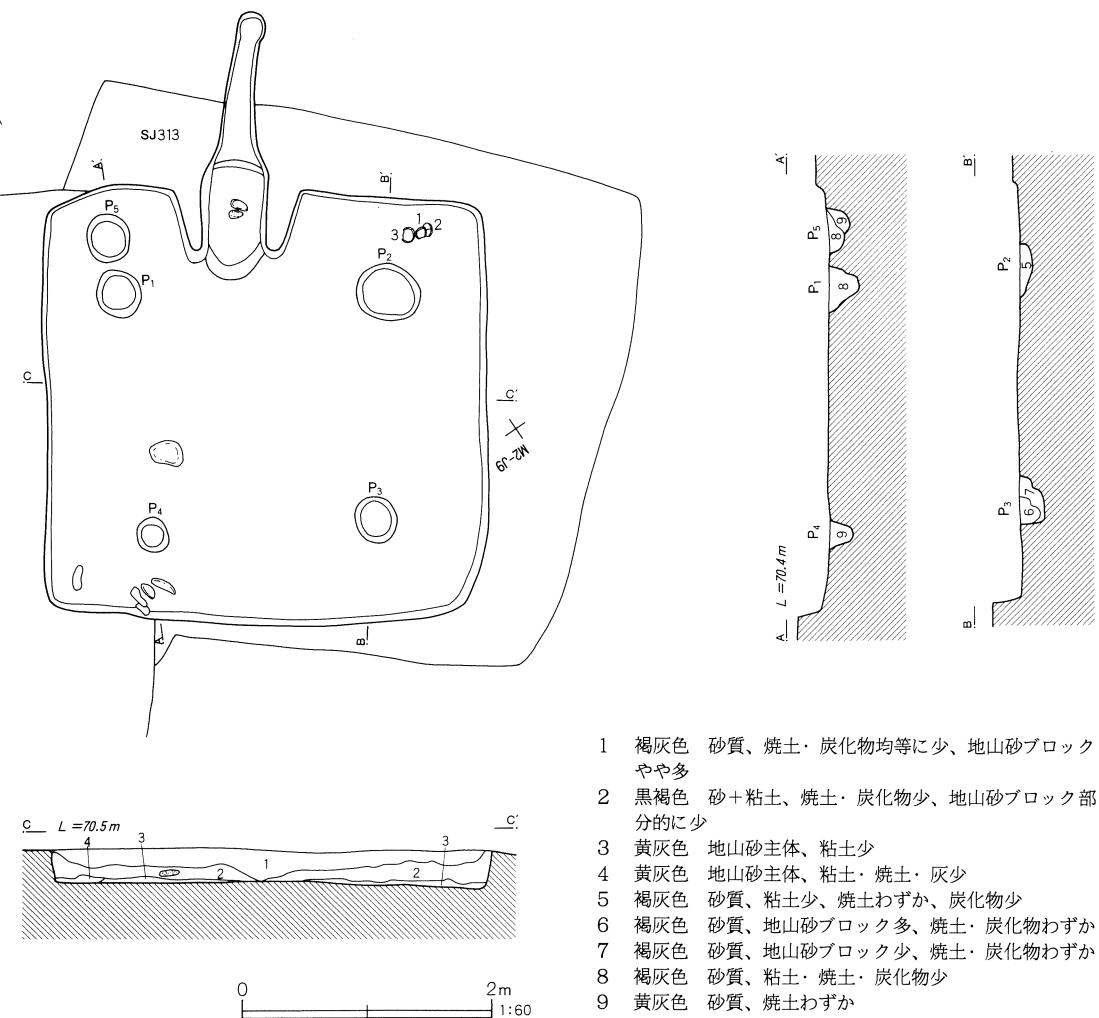
第194図 第310号住居跡・カマド



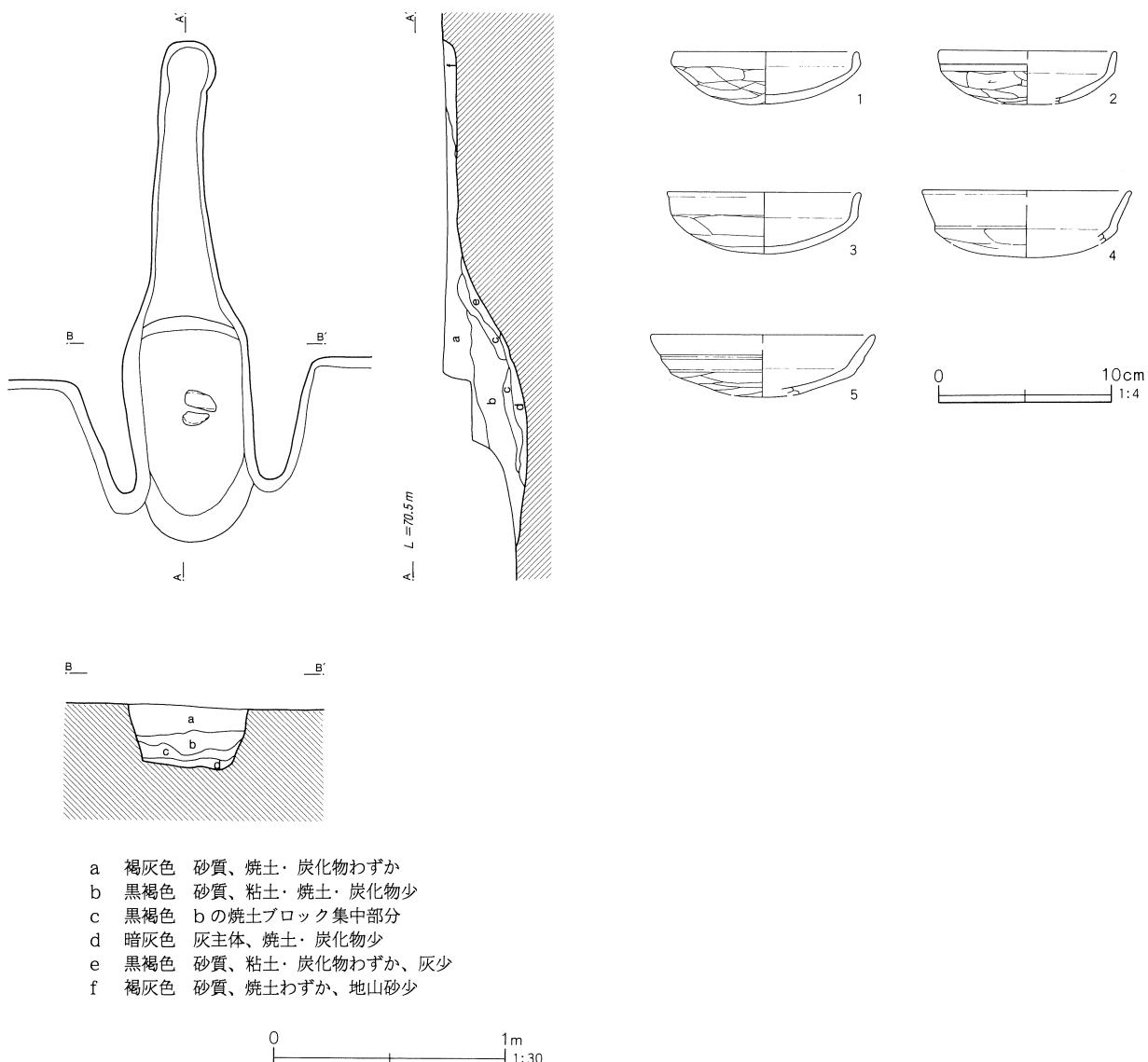
第195図 第310号住居跡出土遺物



第196図 第311号住居跡



第197図 第311号住居跡カマド・出土遺物



第311号住居跡遺物観察表（第197図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	10.3	3.0		DF 1	A	B	90	床直	器面風化顯著 図版50-1
2	壺	10.0	(3.0)		ADF 1	A	B	45	床直	
3	壺	10.9	3.5		DF 1	A	B	90	床直	器面風化顯著 図版50-2
4	壺	11.8	(3.0)		A 1	A	B	10	埋土	混入 器面風化顯著
5	壺	12.6	(3.4)		D 1	A	B	20	埋土	混入

第312号住居跡（第198、199図 図版29中、下）

M2—I9・J9・J10・K9グリッドに位置する。第313号住居跡を切り、第311号住居跡に切られている。形状は不明である。深さは19cmである。カマドの傾きはN—157°—Wである。

東側は調査区域外にあたり、西側は新しい住居跡により切られている。カマドは南壁に構築される。燃焼部は楕円形で、規模は80×45cmである。床面は浅く皿状に掘り込まれている。煙道部へは浅い段を介し、煙道部の底面は煙り出し口近くで浅くなる。煙道部の長

さは135cm、幅は35cmである。袖部は地山土を掘り残した基部に、砂質土で構築されている。先端部には補強材として土師器甕が逆さに置かれていた。被熱面は燃焼部底面と袖部内壁に顕著にみられ、右袖外壁にも認められた。

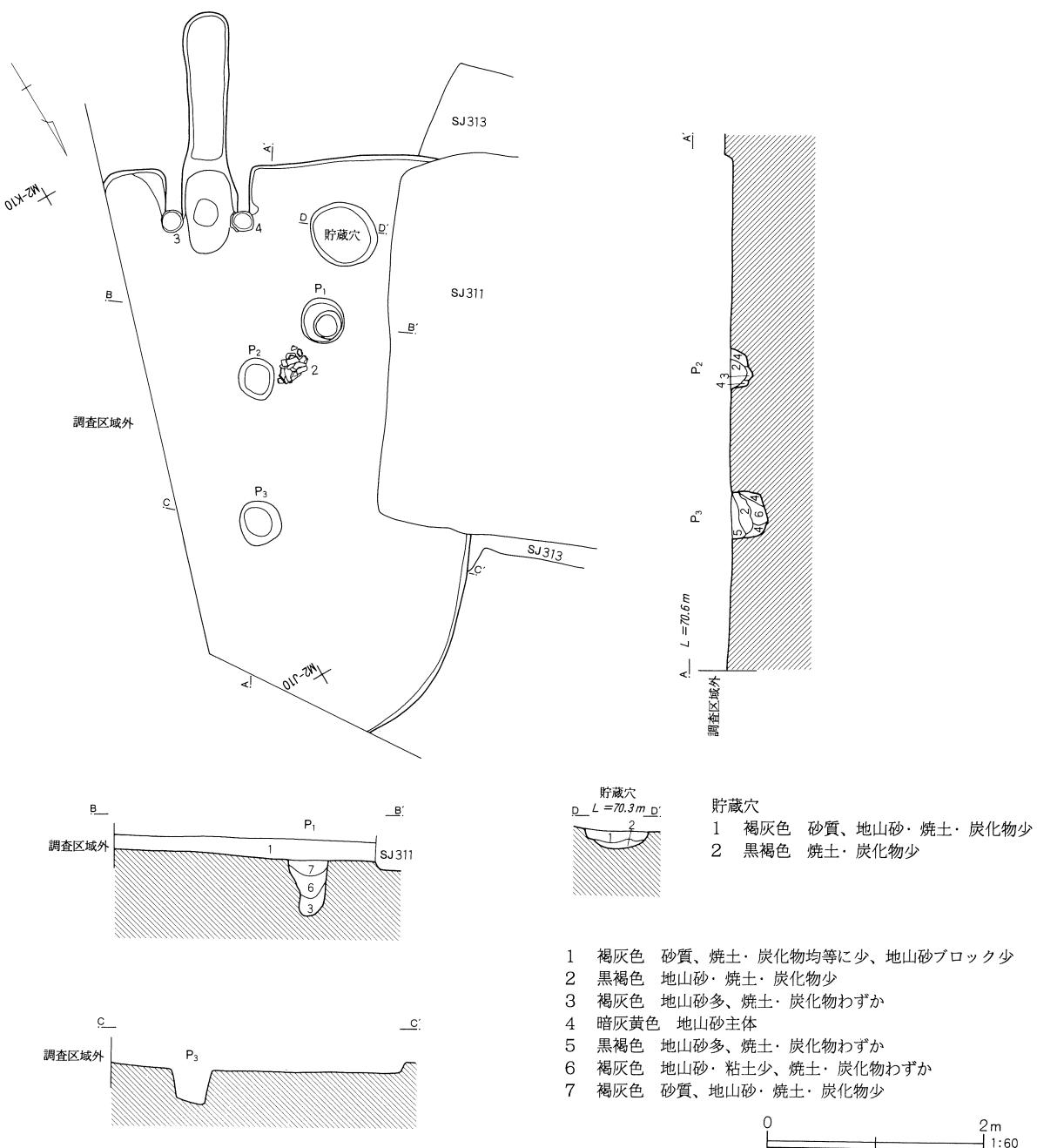
貯蔵穴はカマドの東側に検出された。形状は楕円形で、規模は55×63cm、深さは16cmである。掘り込みはゆるやかで、底面はくぼむ。

ピットは3基検出された。柱痕はみられないが、P1とP3は柱穴の可能性がある。

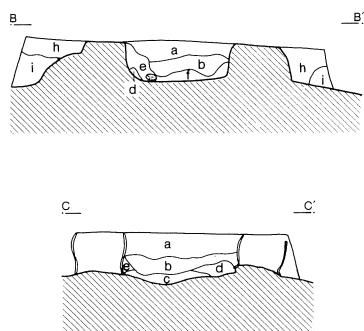
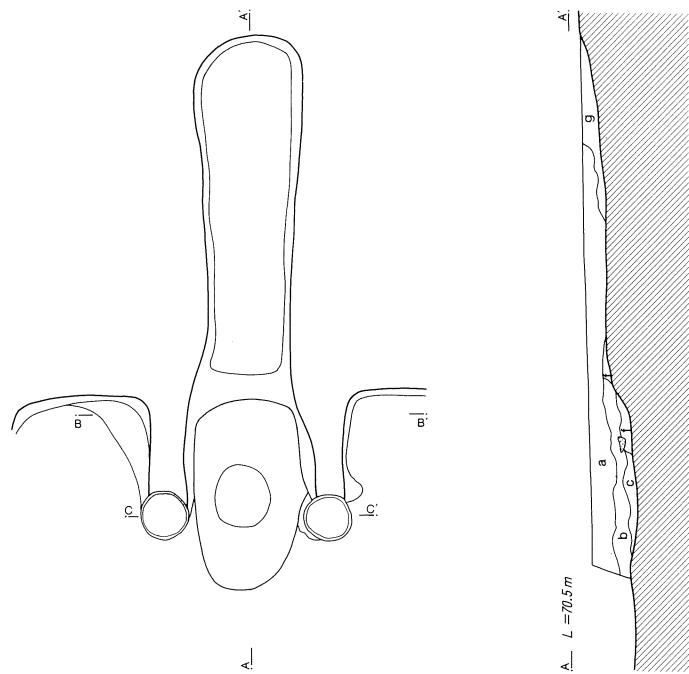
床面はよく踏みしめられており、はっきりと確認された。

遺物は、土師器甕がカマド袖部の補強材として2点、P1・P2間の床面につぶれて1点出土した。埋土中の出土量は少なく、土師器甕が1点図示できたに過ぎない。

第198図 第312号住居跡

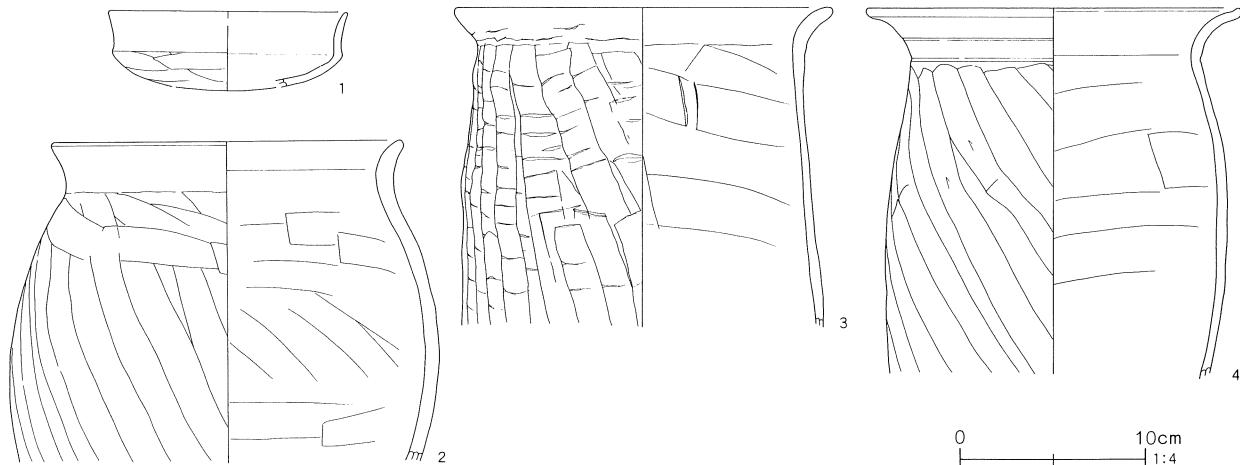


第199図 第312号住居跡カマド・出土遺物



- a 褐灰色 砂質、焼土・焼土ブロック部分的に集中、炭化物少
- b 灰色 灰主体、焼土・砂多、炭化物わずか
- c にぶい赤褐色 焼土主体、地山砂少
- d 灰黄褐色 砂質、焼土多、炭化物少
- e 褐灰色 砂質、焼土・炭化物わずか、地山砂多
- f 褐灰色 砂質、焼土・炭化物少、地山砂多
- g 褐灰色 砂質、焼土・炭化物わずか、地山砂少
- h 褐灰色 砂質、焼土わずか
- i 灰黄褐色 砂質、焼土・炭化物わずか

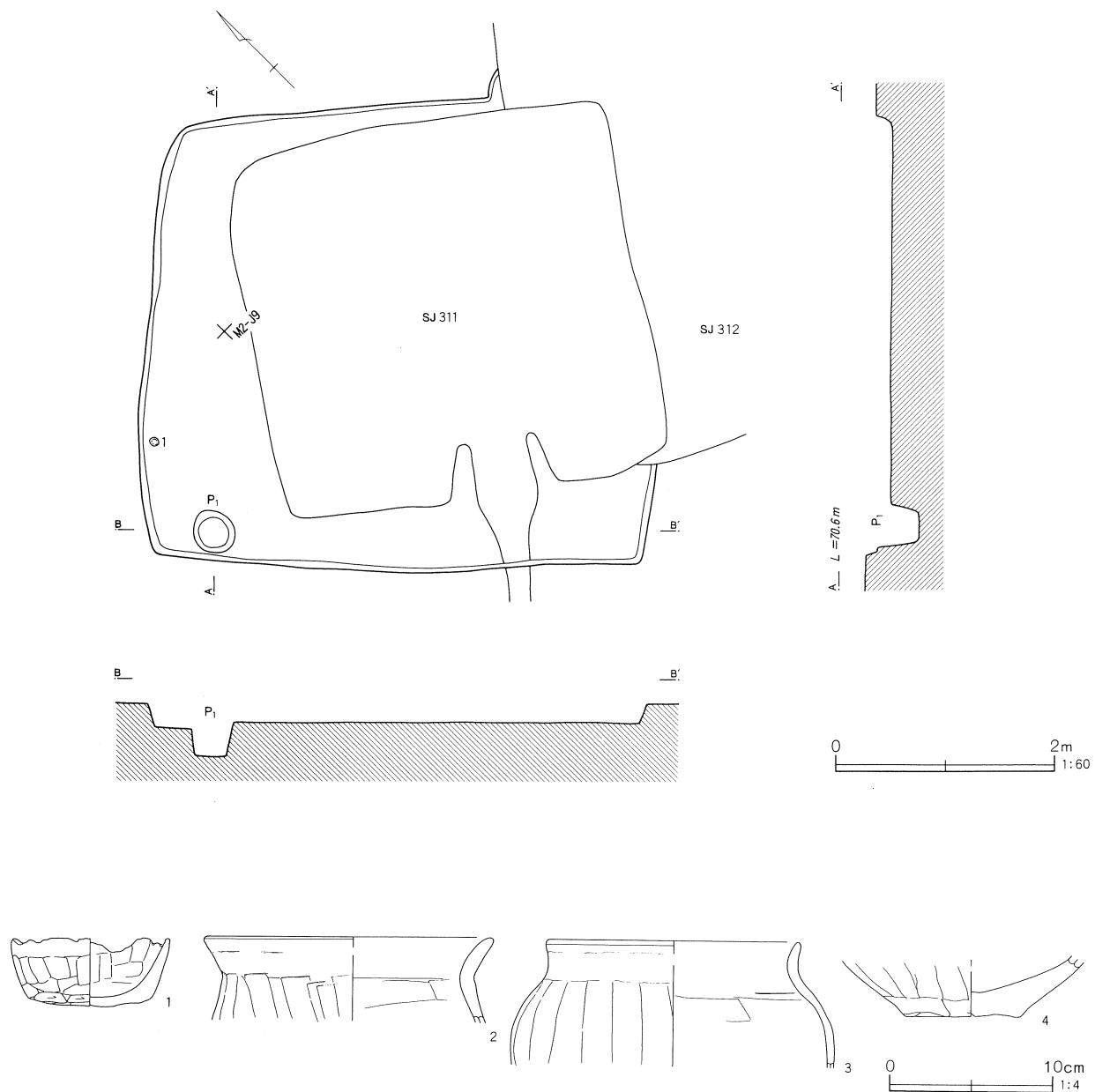
0 1m 1:30



第312号住居跡遺物観察表（第199図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	12.5	(4.0)		ADF 1	A	B	15	埋土	器面風化顯著
2	甕	18.4	(17.0)		ADF 5	A	B	40	床直	
3	甕	19.6	(17.0)		ADF 2	A	B	55	カマド袖	補強材 ヘラケズリノッキング顯著
4	甕	19.7	(19.8)		ADF 2	A	B	50	カマド袖	補強材

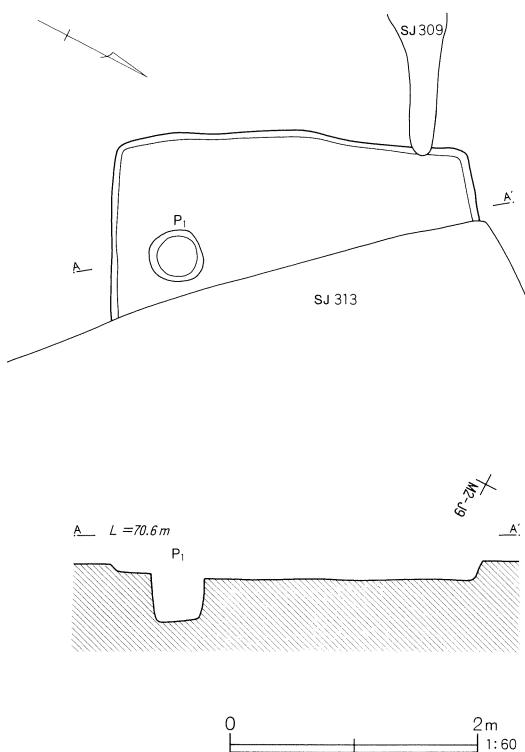
第200図 第313号住居跡・出土遺物



第313号住居跡遺物観察表（第200図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	ミニチュア	9.5	4.1	7.5	AD 2	A	B	100	床直	底部一部黒化 図版55-7
2	甕	(17.2)	(5.2)		AD 2	A	B	5	埋土	
3	甕	(15.1)	(7.6)		ADF 2	A	C	10	埋土	
4	甕		(3.7)	7.2	AD 5	A	B	5	埋土	

第201図 第314号住居跡



第313号住居跡（第200図）

M2—I8・I9・J9 グリッドに位置する。重複関係は、第311・312号住居跡に切られ、第314号住居跡を切っている。形状は方形を呈する。長辺×短辺4.58×4.15m、深さは18cmである。短辺の傾きはN—46°—Eである。

カマドや貯蔵穴等の施設は検出されなかった。ただし、第312号住居跡と接するところの壁に掘り込みが認められ、これがカマドの一部である可能性もある。

出土遺物の量は少なく、埋土中から土師器壺・甕の破片が出土している。

第314号住居跡（第201図）

M2—J8・J9 グリッドに位置する。第309・313号住居跡に切られている。西壁の長さは2.9m、深さは13cmである。

検出された範囲は一部であり、ピットも本住居跡に伴うという確証はない。

遺物はほとんど出土しなかった。

第315号住居跡（第202図）

M2—J7・J8・K7 グリッドに位置する。重複関係は第309号住居跡に切られ、第318号住居跡を切っている。形状は長方形を呈する。長辺×短辺は4.45×3.71m、深さは15cmである。カマドの傾きはN—126°—Wである。

カマドは南東壁中央に構築されている。燃焼部は丸く大きく掘り込まれている。煙道部は長さ50cmと短く、底面は燃焼部底面を引きついで、煙り出し口に向って浅くなる。袖部は検出されなかった。

南コーナーの掘り込みは掘形の可能性がある。

ピットは3基検出されたが、いずれも直径30cm、深さ15~18cmで、ほぼ同じ規模のものである。

北コーナーの床面直上から土師器壺が2点重なって出土した。埋土からの遺物量は少ない。

第316号住居跡（第203、204図）

M2—J8・K7・K8・L8 グリッドに位置する。重複関係は第310号住居跡に切られ、第319号住居跡を切っている。形状は長方形を呈する。長辺×短辺は5.15×4.01m、深さは26cmである。

カマド等の施設は検出されなかった。

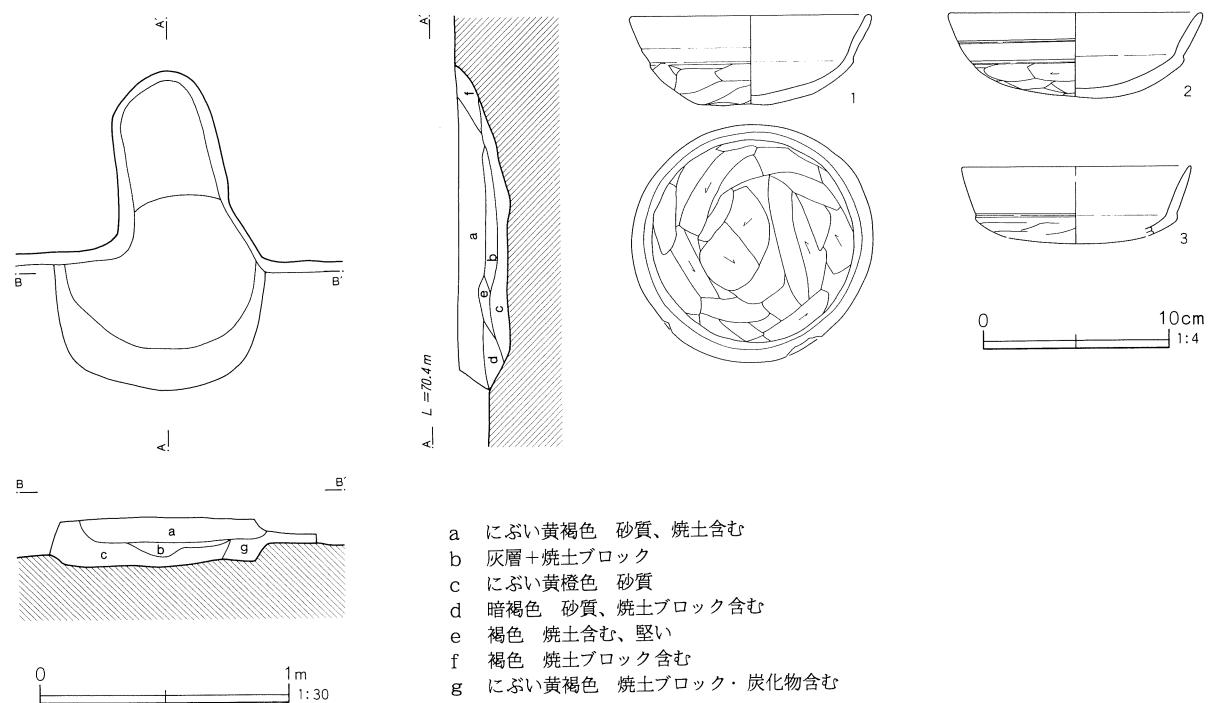
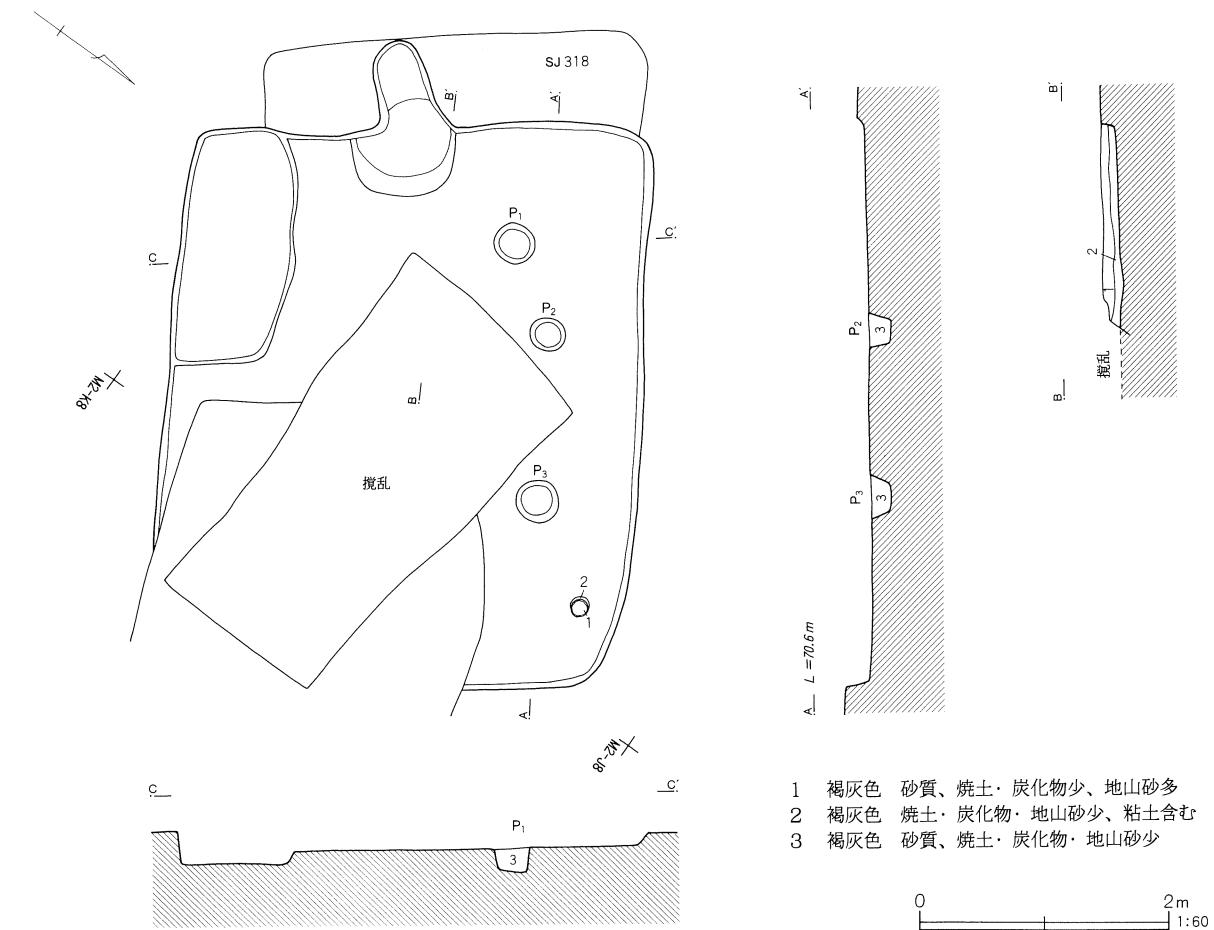
出土遺物の量は多いが、重複する住居跡のものが混在している可能性がある。主なものに土師器壺・皿・甕・甌、ミニチュア土器、須恵器壺、紡錘車がある。

第317号住居跡（第205図）

M2—K7・K8・L7・L8 グリッドに位置する。南側大半が調査区域外にかかり、北壁は第310号住居跡に切られている。床面までの深さは29cmである。カマドの傾きはN—61°—Eである。

カマドは北東壁に構築されている。燃焼部は幅狭の楕円形で、規模は53×42cmである。底面はやや深めに掘り込まれている。煙道部との境はなだらかである。煙道部はやや削平され、崩れている感があるが、規模は長さ105cm、幅およそ25cmである。底面は煙り出し口に向けて急激に浅くなる。袖部は地山土を掘り残して

第202図 第315号住居跡・カマド・出土遺物



第315号住居跡遺物観察表（第202図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	12.6	4.8		ADF 2	A	C	100	床直	外面一部黒化 図版50-3
2	壺	13.3	4.6		ADF 1	A	C	90	床直	黒斑あり 図版50-4
3	壺	12.0	(3.7)		AD 1	A	B	10	埋土	器面風化顕著

構築されている。一部は調査区域外にかかる。被熱面は袖部内壁に認められた。

カマド以外の施設は検出されなかった。

遺物は、埋土中から土師器壺・甕が出土している。

第318号住居跡（第206図）

M2—J7・K7 グリッドに位置する。第315号住居跡に切られている。南西壁の長さは3.04m、深さは6cmである。埋土の残りはほとんどなく、床面近くまで削平されていた。詳細は不明である。

遺物は、まったく出土しなかった。

第319号住居跡（第207図）

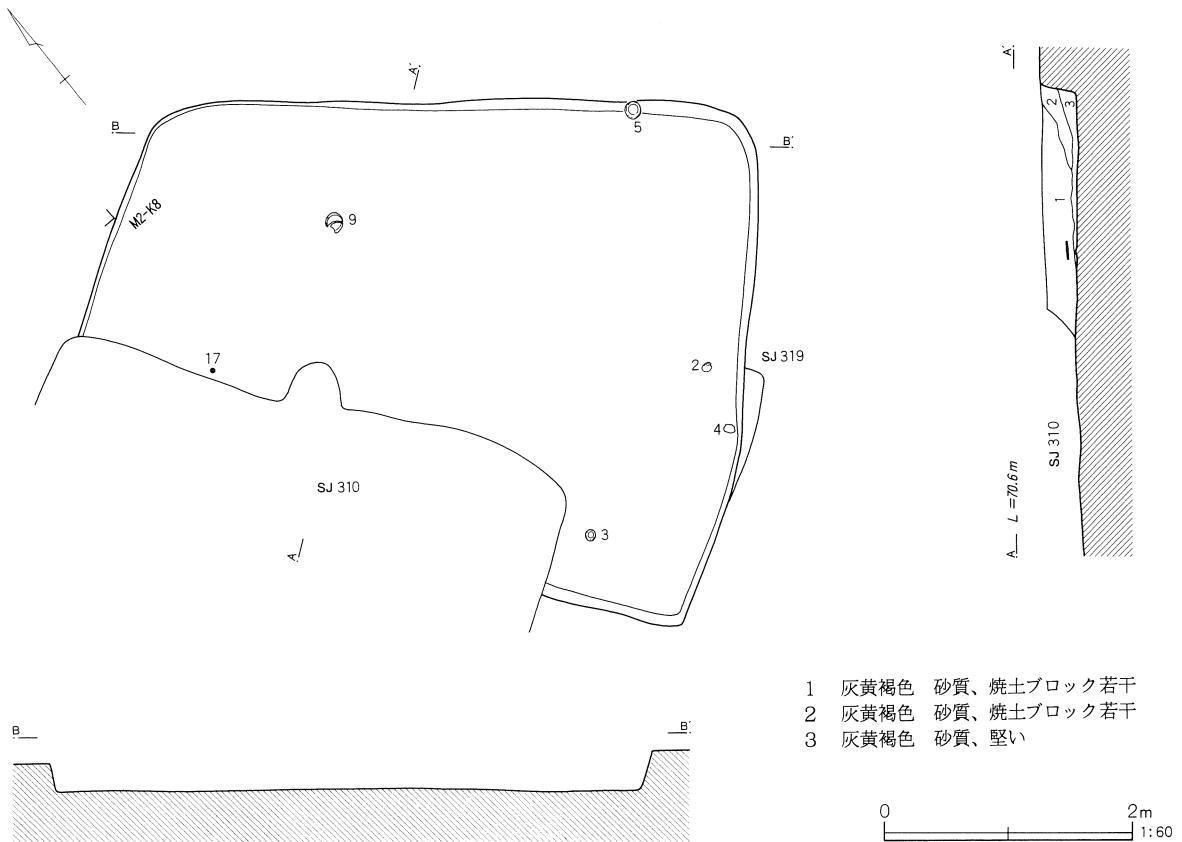
M2—J8・K7・K8・L8 グリッドに位置する。

第310・316号住居跡によって削平を受けている。形状は不明である。北東壁の長さは5.26m、深さは26cmである。カマドの傾きはN—63°—Eである。

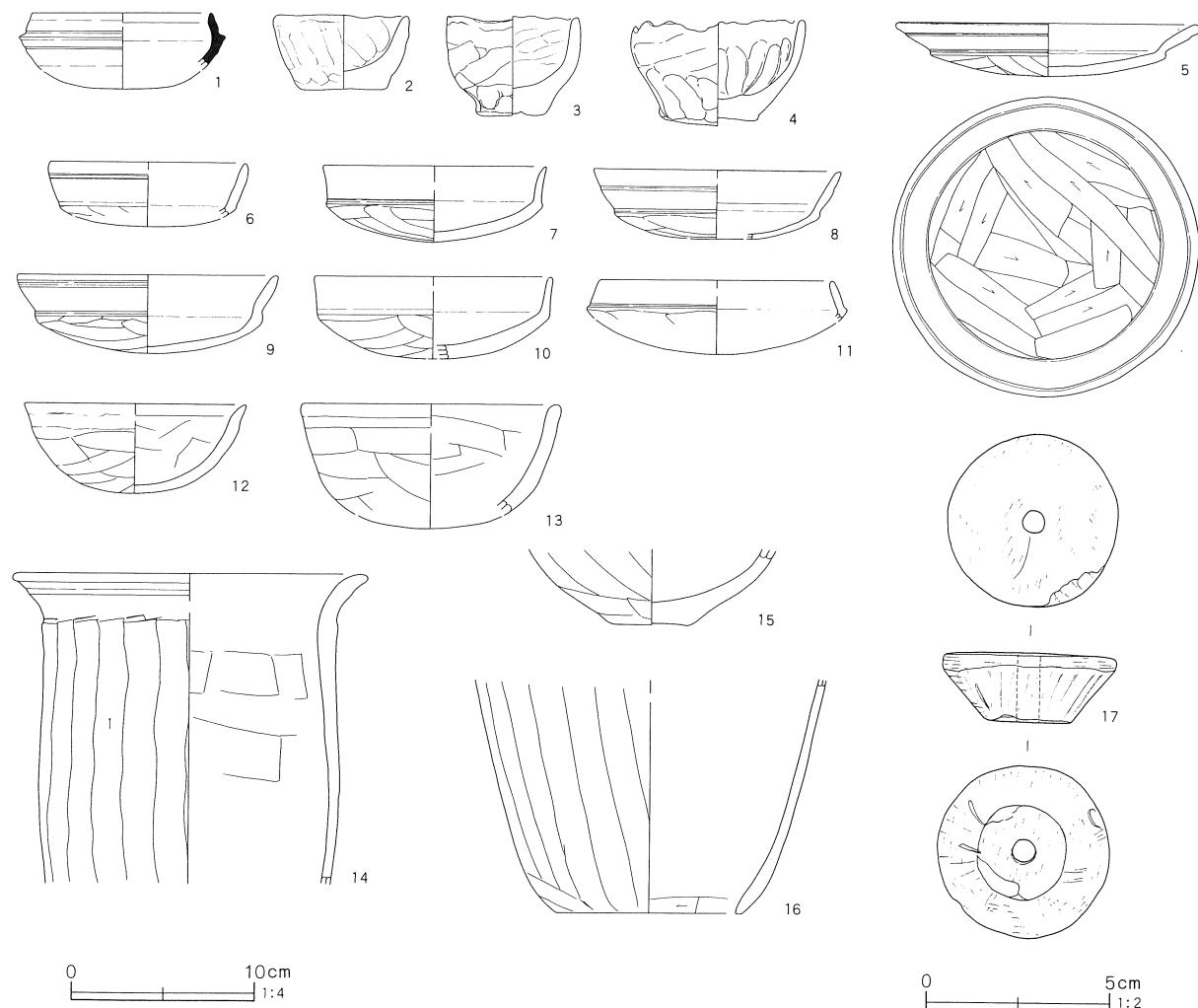
カマドは北東壁やや南寄りに構築されている。燃焼部は楕円形を呈し、規模は92×50cm、掘り込みは明瞭である。底面はくぼみ、なだらかに煙道部へと移行している。煙道部は削平を受けているが、検出された長さは約70cm、幅は29cmである。底面は煙り出し口に向って急に浅くなる。地山土を掘り残して袖部を構築している。被熱面は袖部内壁に若干認められた。支脚には土師器の高壺脚部を転用している。

貯蔵穴は東南コーナーに検出された。形状は楕円形で、規模は70×83cmである。バケツ状に掘り込まれ、深さは54cmである。底面は幅狭となりテラス状に段を

第203図 第316号住居跡



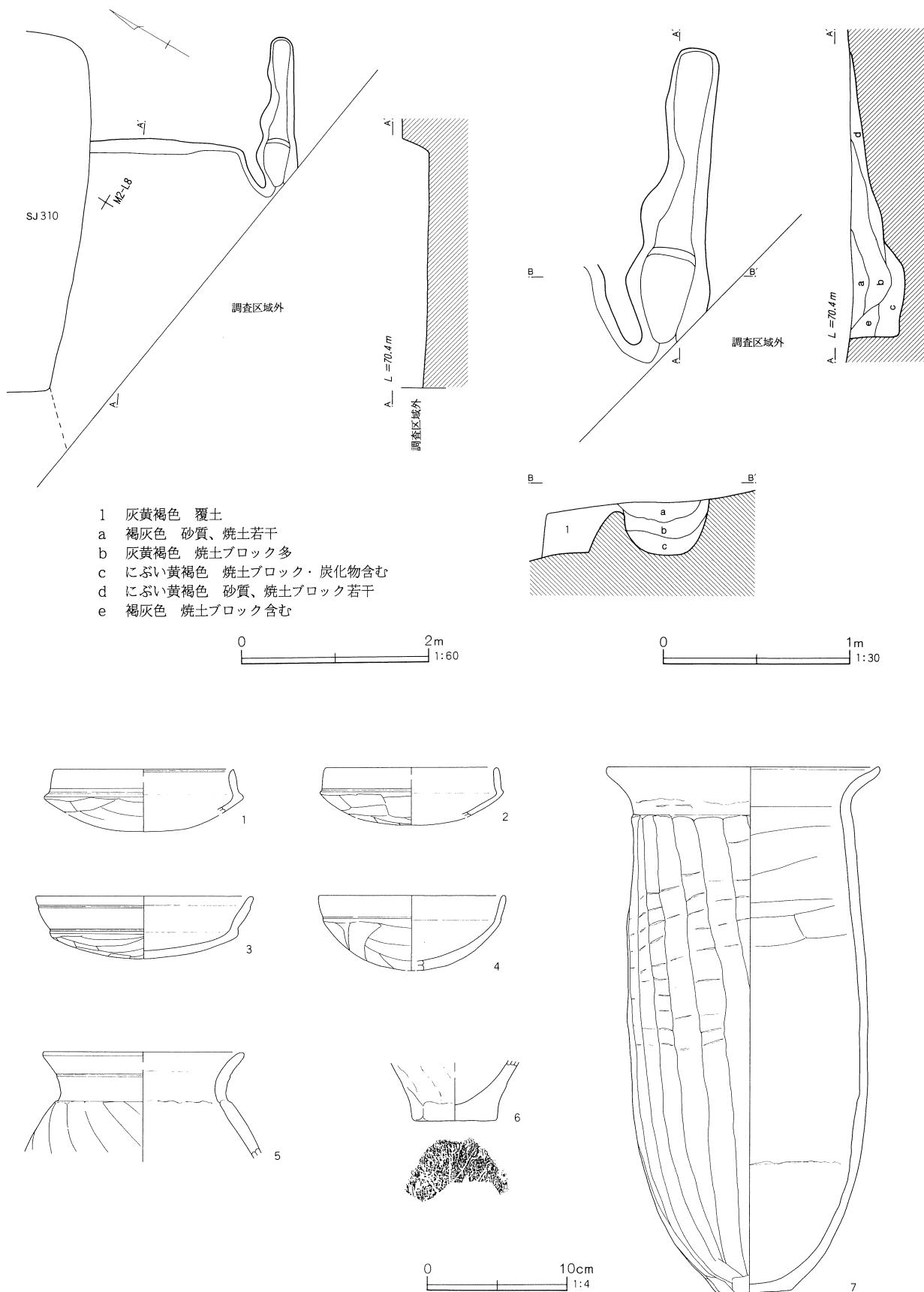
第204図 第316号住居跡出土遺物



第316号住居跡遺物観察表（第204図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(9.7)	(3.0)		ADF 5	A	H	25	埋土	須恵器 末野産
2	ミニチュア	7.1	4.1	4.6	ADF 2	A	B	85	床直	手づくね 図版55-8
3	ミニチュア	7.0	5.4	3.6	ADF 1	A	C	100	床直	手づくね 図版55-9
4	ミニチュア	9.0	5.7	5.1	AD 2	A	B	85	壁際	手づくね 図版55-10
5	皿	15.9	2.9		ADF 2	A	B	100	壁際	図版50-5
6	壺	(10.5)	(2.9)		AD 1	A	C	10	埋土	
7	壺	(12.0)	4.1		AF 1	A	B	40	埋土	
8	壺	(13.3)	(3.7)		AD 2	A	C	55	埋土	器面風化顯著
9	壺	13.9	4.3		ADF 2	A	B	85	床直	図版50-6
10	壺	(12.8)	(4.5)		D 1	A	C	25	埋土	器面風化顯著
11	壺	(12.5)	(2.1)		D 1	A	F	10	埋土	内、外面一部黒化
12	椀	(11.9)	4.8		AD 2	A	C	45	埋土	外面底部一部黒化
13	椀	(13.9)	(5.9)		AD 2	A	B	15	埋土	
14	甕	(18.6)	(16.8)		ADF 5	A	B	10	埋土	
15	甕		(4.1)	(4.5)	ADF 5	A	B	10	埋土	外面一部黒化
16	甕		(12.6)	10.0	ADF 1	A	B	10	埋土	
17	紡錘車	上径4.6cm、下径2.3cm、厚さ1.9cm、孔径0.6cm、重さ49.1g				床直	滑石製			

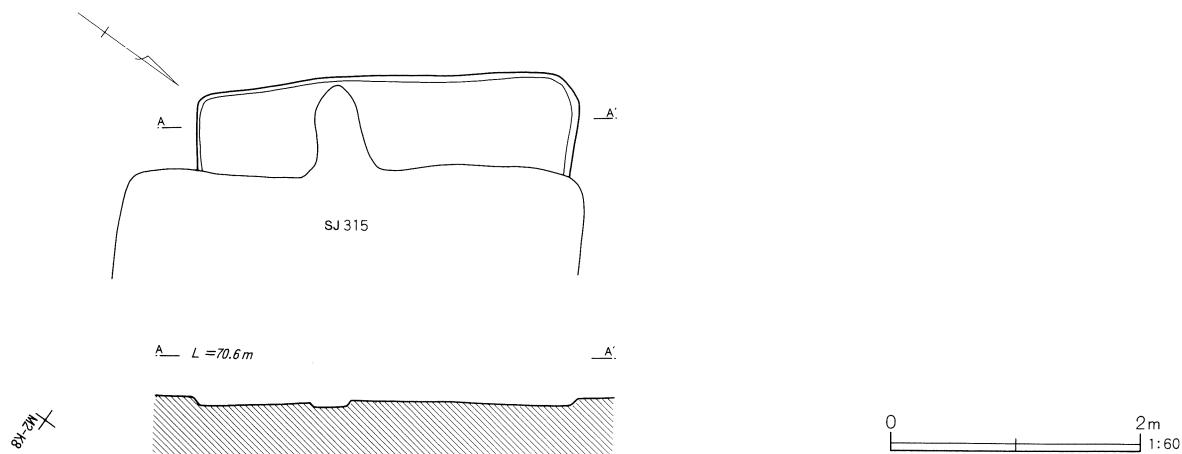
第205図 第317号住居跡・カマド・出土遺物



第317号住居跡遺物観察表（第205図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	12.6	(3.1)		A 1	A	C	30	埋土	
2	壺	12.1	(3.6)		D F 1	A	B	10	埋土	
3	壺	15.2	4.5		A D F 1	A	B	70	埋土	図版50-7
4	壺	13.0	(5.3)		A D F 1	A	B	35	埋土	外面一部黒化
5	甕	14.1	(7.5)		A D 2	A	B	10	埋土	
6	ミニチュア?		(4.3)	5.8	A D 2	A	C	5	埋土	底部破片 木葉痕あり
7	甕	19.1	37.4	5.3	A D F 5	A	B	90	埋土	口縁内面、外面下半黒化 図版77-2

第206図 第318号住居跡



第319号住居跡遺物観察表（第207図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	12.7	(3.1)		A D 2	A	B	10	埋土	
2	高壺		16.2	14.8	A D F 5	A	B	45	カマド	脚部 外面一部黒化 表面粘土付着 図版60-1
3	甕	18.7	(14.6)		D F 1	A	B	25	埋土	
4	壺	15.0	(6.7)		A D F 2	A	B	10	埋土	

もつ。

埋土には、土師器壺・甕の破片など、わずかな遺物が含まれていた。重複する住居跡の遺物と混在している可能性がある。

第320号住居跡（第208図 図版30上）

M2-F12・G12 グリッドに位置する。第321号住居跡を切っている。西側の大半は調査区域外にかかり、形状は不明である。東南壁の長さは2.7m、床面までの深さは29cmである。カマドの傾きはN-111°-Eである。

カマドは東南壁やや北寄りに構築されている。燃焼部は楕円形で、規模は68×48cmである。底面の掘り込

みはほとんどない。煙道部は削平されており、煙り出し口の掘形が検出されている。径30×23cm、深さ23cmである。袖部は地山を掘り残して構築されている。被熱面は燃焼部底面および袖部内壁に顕著に認められた。

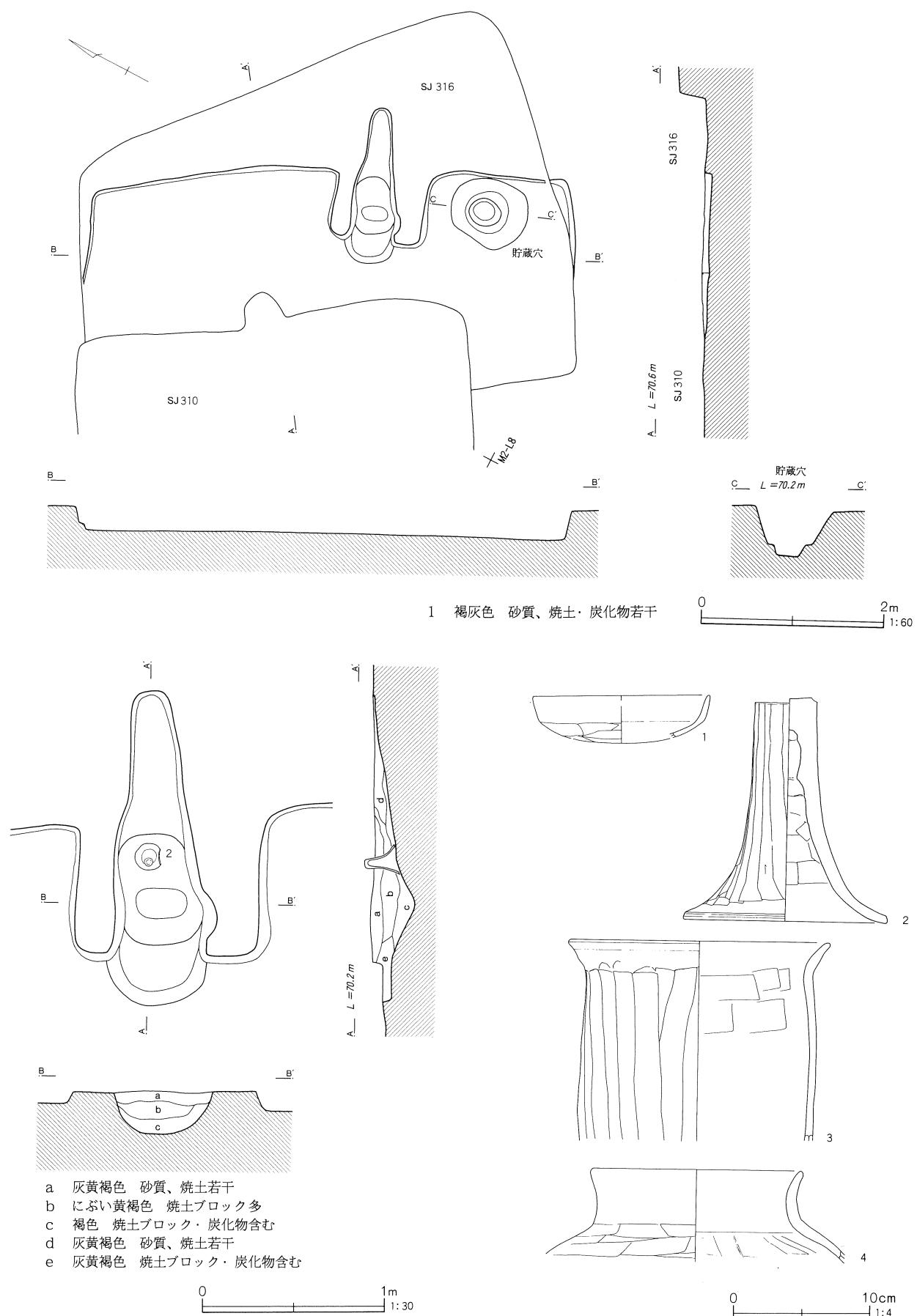
床面はしっかり明瞭に検出され、カマド手前には貼り床がみられる。

主な出土遺物には須恵器蓋、土師器壺がある。埋土中から出土した遺物は少ない。

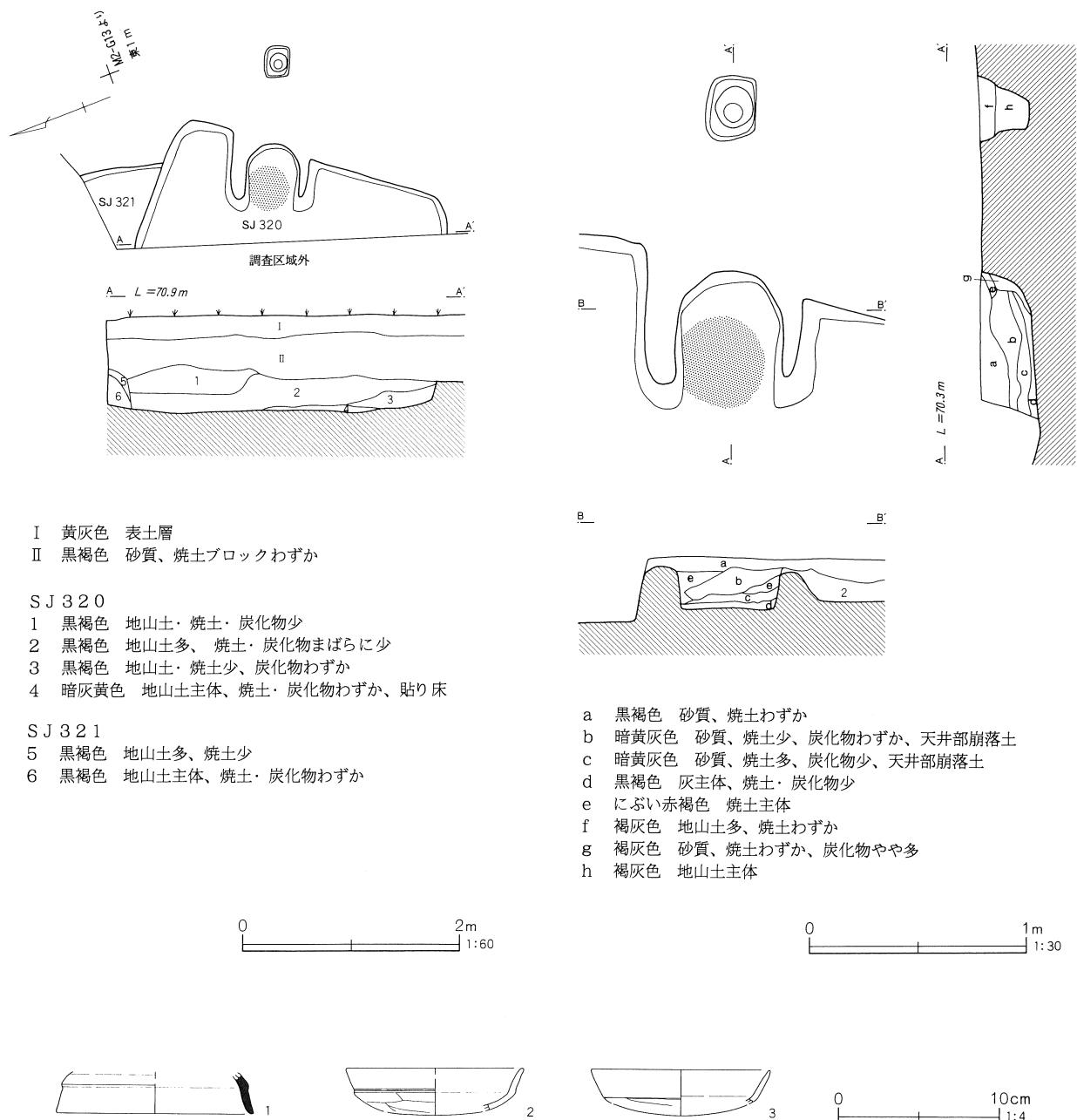
第321号住居跡（第208図）

M2-F12 グリッドに位置する。検出範囲がきわめて少なく、大部分が調査区域外にあるものと考えられ

第207図 第319号住居跡・カマド・出土遺物



第208図 第320・321号住居跡・出土遺物



第320号住居跡遺物観察表（第208図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	蓋	(11.8)	(2.5)		D F 1	A	I	5	埋土	須恵器 口縁部破片 産地不明
2	壺	(10.6)	(2.6)		A 1	A	B	5	埋土	

第321号住居跡遺物観察表（第208図）

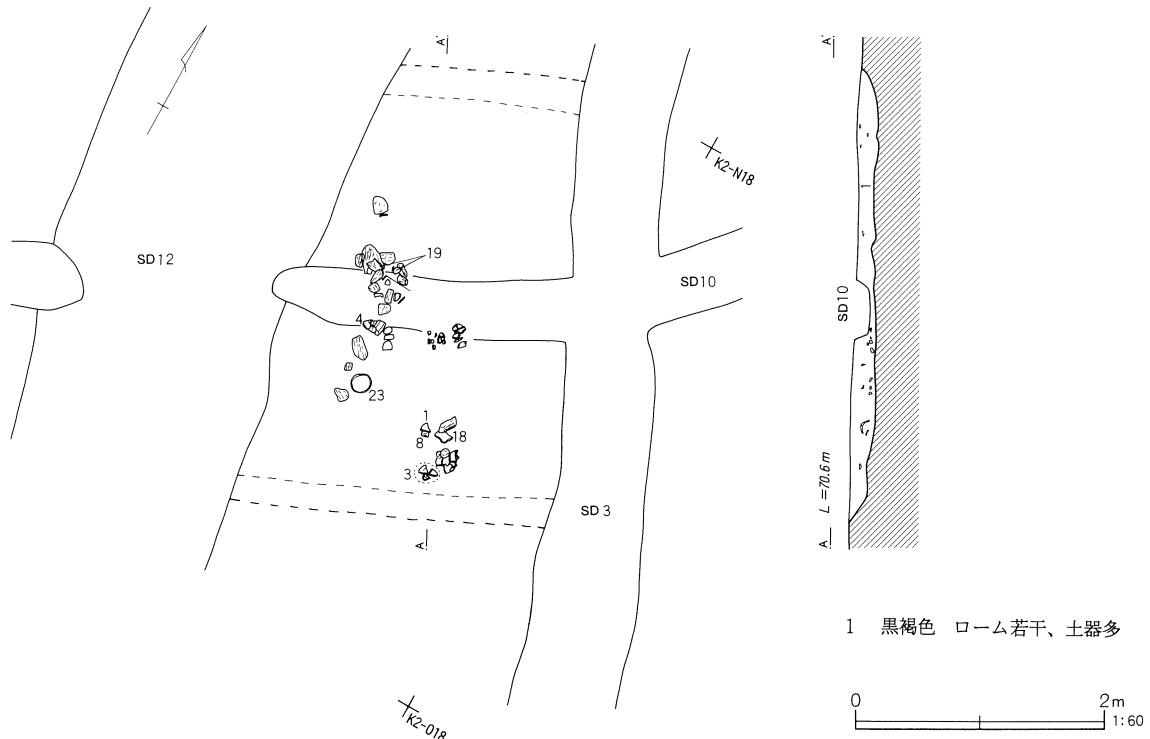
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
3	壺	10.7	(2.1)		A 1	A	B	5	埋土	口縁部破片 器面風化顯著

る。第320号住居跡に切られている。床面までの深さは30cmで、第320号住居跡と同レベルにある。

出土遺物はたいへん少なく、わずかに土師器壺が1点図示できたに過ぎない。

7. 竪穴状遺構

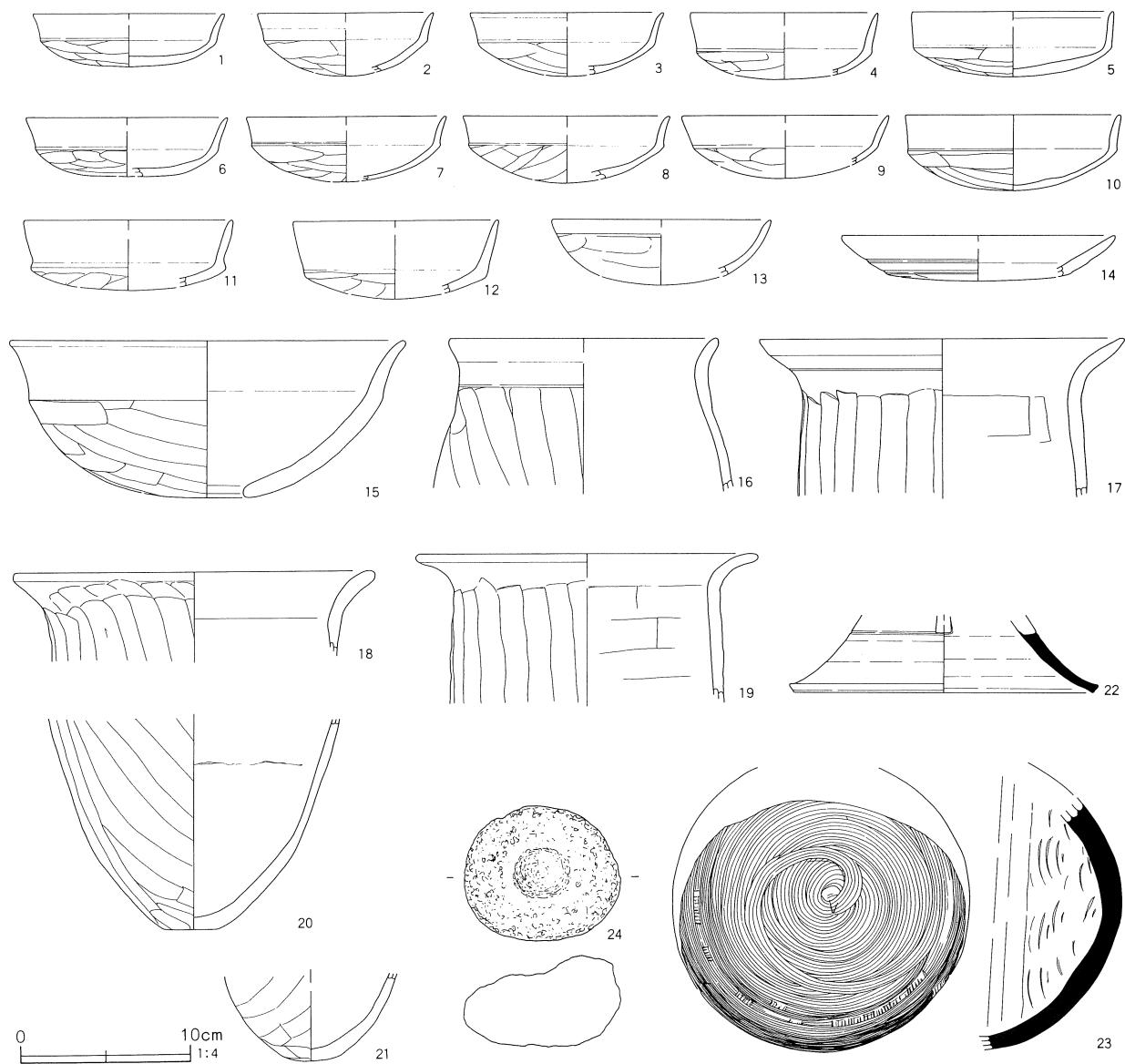
第209図 第1号竪穴状遺構



第1号竪穴状遺構遺物観察表（第210図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(11.0)	(3.1)		D F 1	A	B	55	埋土	
2	壺	(10.1)	(3.5)		D F 1	A	B	45	埋土	
3	壺	(11.1)	(3.6)		A D F 1	A	B	25	埋土	
4	壺	(10.8)	(3.6)		A 1	A	B	20	埋土	器面風化顯著
5	壺	(11.6)	3.8		D F 1	A	B	30	埋土	
6	壺	(11.6)	(3.4)		A D F 1	A	B	25	埋土	
7	壺	(11.5)	(3.8)		A 1	A	B	25	埋土	
8	壺	(11.9)	(3.7)		D F 1	A	B	20	埋土	
9	壺	(11.9)	(2.9)		A F 1	A	B	30	埋土	器面風化顯著
10	壺	12.4	4.5		A F 1	A	B	70	埋土	器面風化顯著 図版51-6
11	壺	(12.0)	(3.9)		A 1	A	B	10	埋土	器面風化顯著
12	壺	(11.9)	(4.2)		D F 1	A	C	25	埋土	体部外面一部黒化
13	壺	(12.6)	(3.2)		A D 1	A	B	15	埋土	器面風化顯著
14	皿	(15.8)	(2.4)		A D F 2	A	C	20	埋土	
15	甌	22.8	9.2	4.6	A F 1	A	B	50	埋土	器面風化顯著 図版51-7
16	甌	15.4	(8.9)		A D F 5	A	B	10	埋土	
17	甌	21.0	(9.3)		A D F 1	A	B	15	埋土	
18	甌	20.6	(5.0)		D F 1	A	C	5	埋土	
19	甌	19.4	(8.7)		A D E F 5	A	B	10	埋土	口縁内面一部黒化
20	甌	(12.4)	3.1		D F 2	A	B	10	埋土	
21	甌	(5.1)	3.0		D F 1	A	F	5	埋土	
22	高壺	(4.5)	17.4		D F 1	A	J	5	埋土	須恵器 脚部破片 透入 在地産？
23	壺	(14.6)			D F 2	A	J	30	埋土	須恵器 群馬産
24	凹み石	径7.8×9.1cm、重さ197.6g							埋土	多孔質安山岩（軽石）

第210図 第1号竪穴状遺構出土遺物



第1号竪穴状遺構（第209、210図）

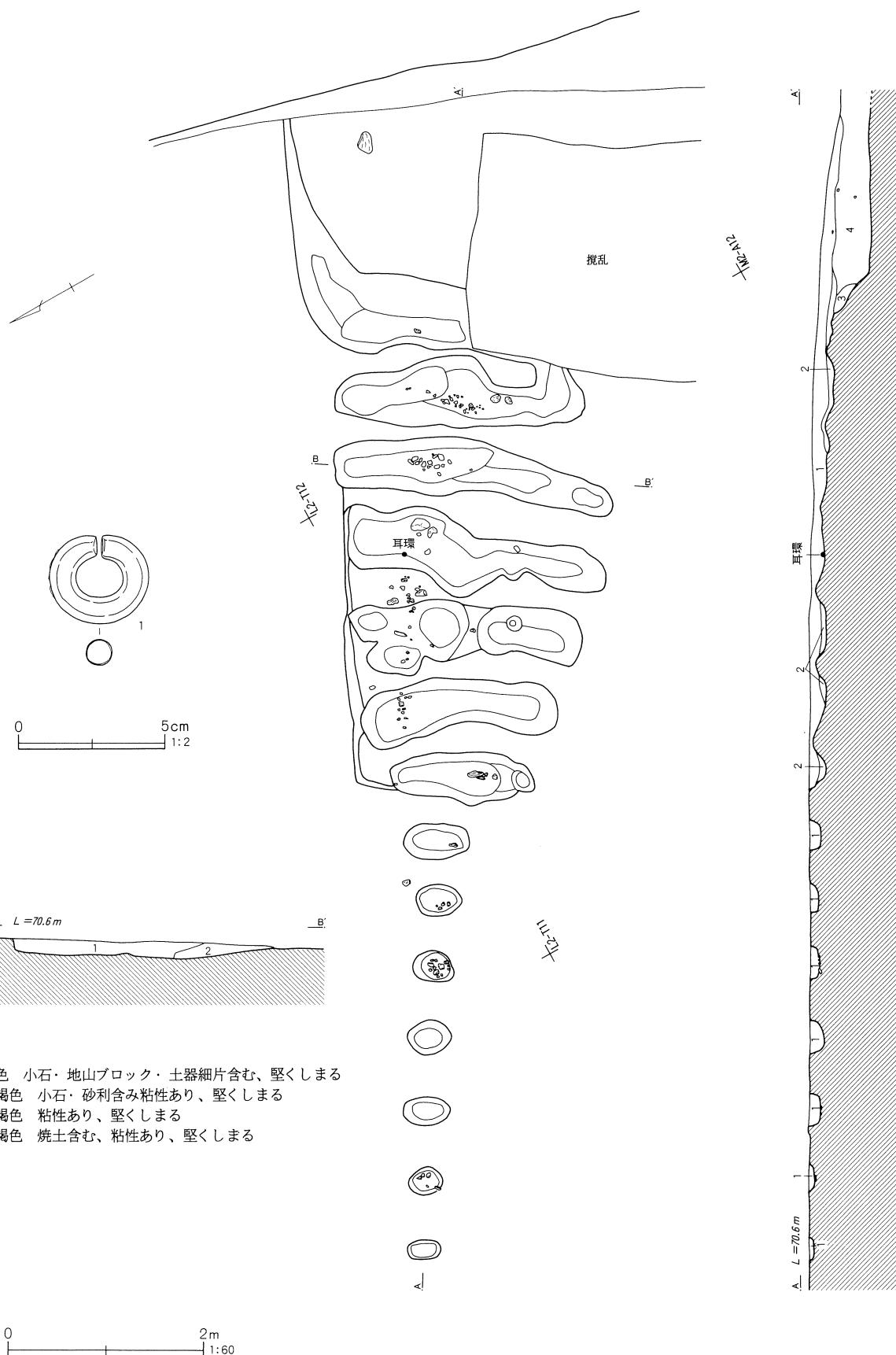
K2—N17 グリッドに位置する。深さは17cmである。確認面に多くの土器片が散らばっており、当初は住居跡（第330号）として調査にとりかかった。

壁の立ち上がりは、地山との境が判然とせず、底面も凹凸をもち、軟弱であった。埋土は均質で、焼土や炭化物の混入物も認められなかった。その立地も、居住域を区画していると考えられる溝（第3号溝跡）の外側に位置している。これらのことから、住居跡ではないと判断し、第1号竪穴状遺構として報告することとした。

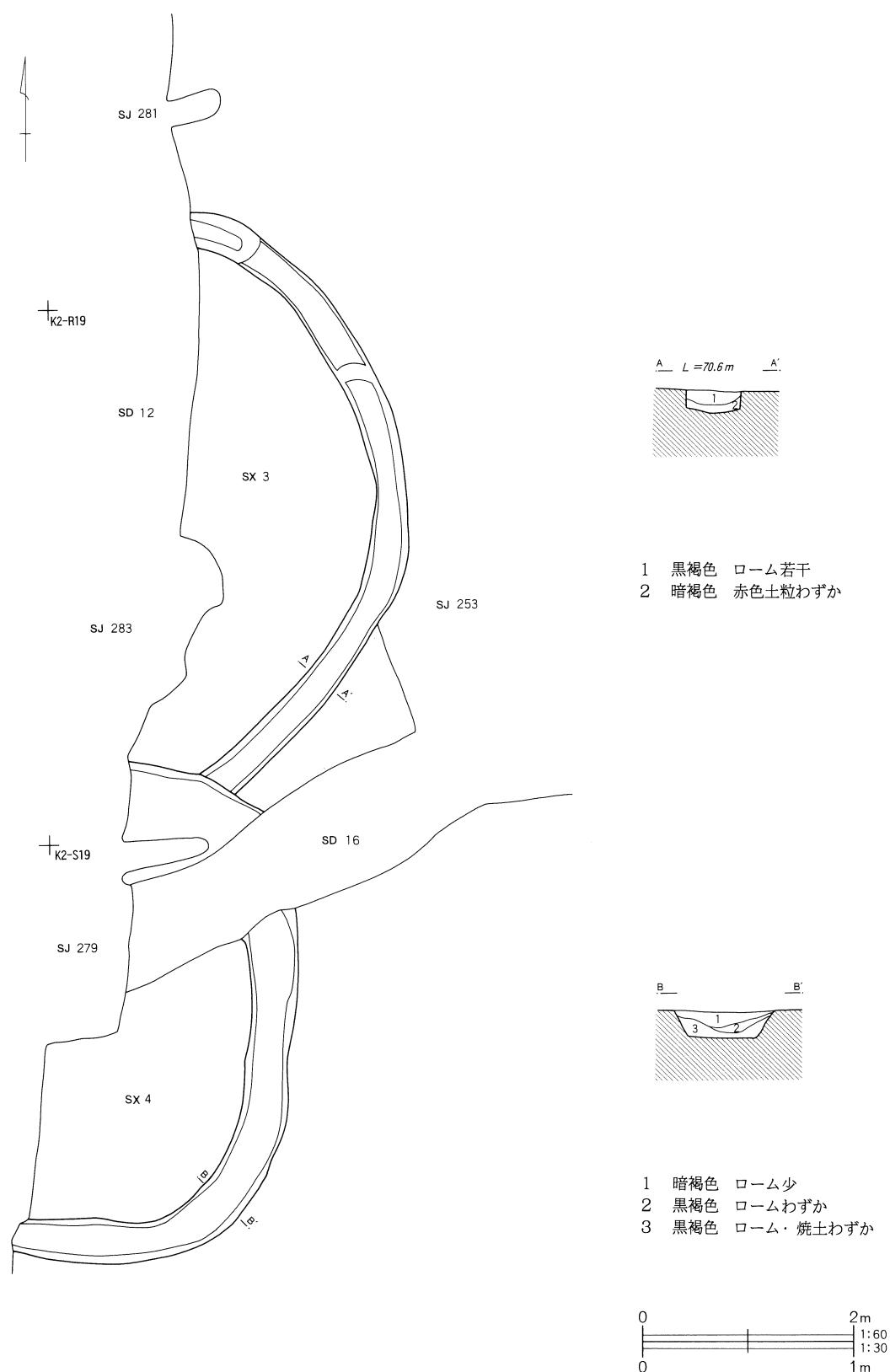
推定される掘り込みの範囲は南北に約3.5m、深さは17cm程である。第3号溝跡と第12号溝跡とに挟まれた位置にある。いわゆる「土器だまり」であり、土器捨て場の性格をもつ遺構と推定される。第10号溝跡よりも古いと考えられるが、他の溝跡との切り合いは不明であり、溝跡に付属する施設である可能性もある。

出土遺物の量は多く、土師器壺・甕、須恵器高壺・壺等がある。土器以外には、軽石の凹み石が出土している。

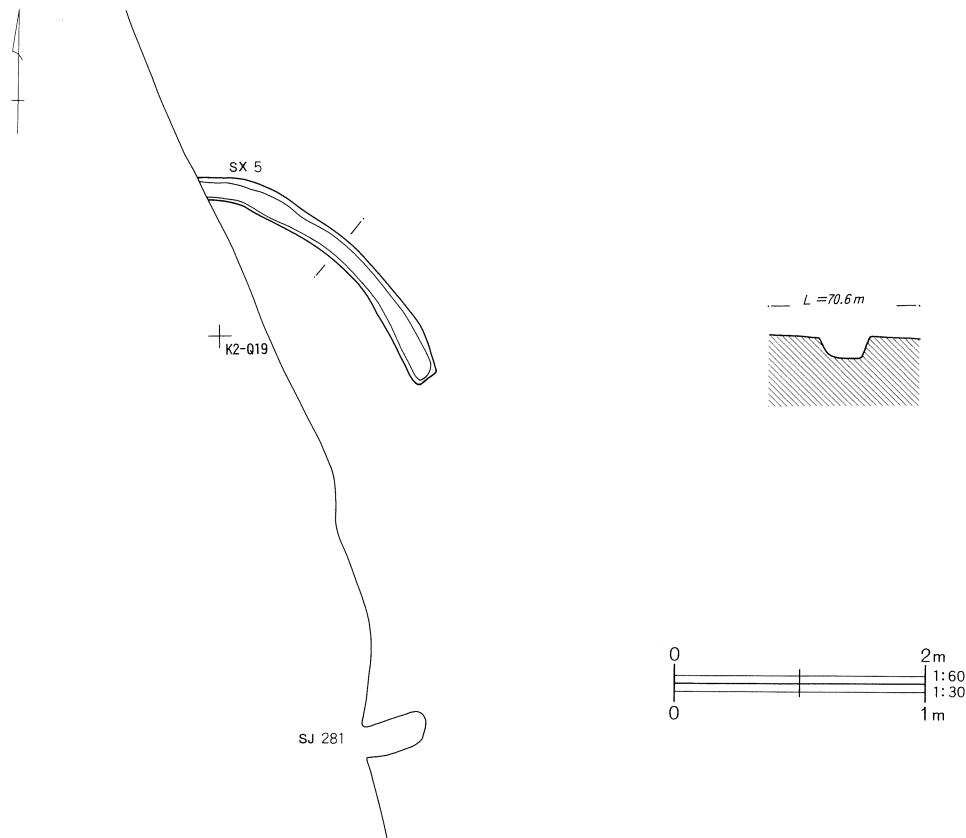
第211図 第1号道路跡



第212図 第3・4号円形周溝状遺構



第213図 第5号円形周溝状遺構



8. 道路状遺構

第1号道路跡（第211図 図版31中、下）

L2—S10～S12・T10～T12 グリッドに位置する。検出された部分の長さはおよそ120mで、傾きはN—58°—Wである。南東側、発掘区域外にかかる部分は掘り込みが深く、大きい。そこから北西方向にかけて、波板状の掘形が連続する。掘形は14基検出されたが、北西方向に向うにしたがって浅く、小さくなっていく。これは削平を受けたものと考えられる。波板状掘形の埋土には砂利が含まれており、たいへん堅くしまって

いる。人為的に埋め戻され、つき固められたものと考えられる。

攪乱内および周辺から若干の土師器が出土したが、埋土中の遺物は小破片であり、図示できない。わずかに掘形底面から耳環が1点出土した。

耳環は中空の銅地金に銀の薄様を貼った造りのものである。大きさは3.0×3.3cm、断面の直径は約0.8cm、重さは31.3gである。

9. 円形周溝状遺構

第3号円形周溝状遺構（第212図）

K2—R19 グリッドに位置する。重複する遺構のうち、第12号溝跡・第281・253号住居跡に切られている。第4号円形周溝状遺構と接するが、本遺構の方が古いようである。

周溝内側の直径は5.4m、深さは11cmである。掘り込みは明瞭である。底面はほぼ平らであるが、部分的に浅くなっている。

出土遺物はない。

第4号円形周溝状遺構（第212図）

K2—R19・S19 グリッドに位置する。第279号住居跡および第16号溝跡に切られている。

形状はやや隅丸方形である。周溝内側の直径はおよそ3.6m、深さは12cmである。

遺物は出土しなかった。

第5号円形周溝状遺構（第213図）

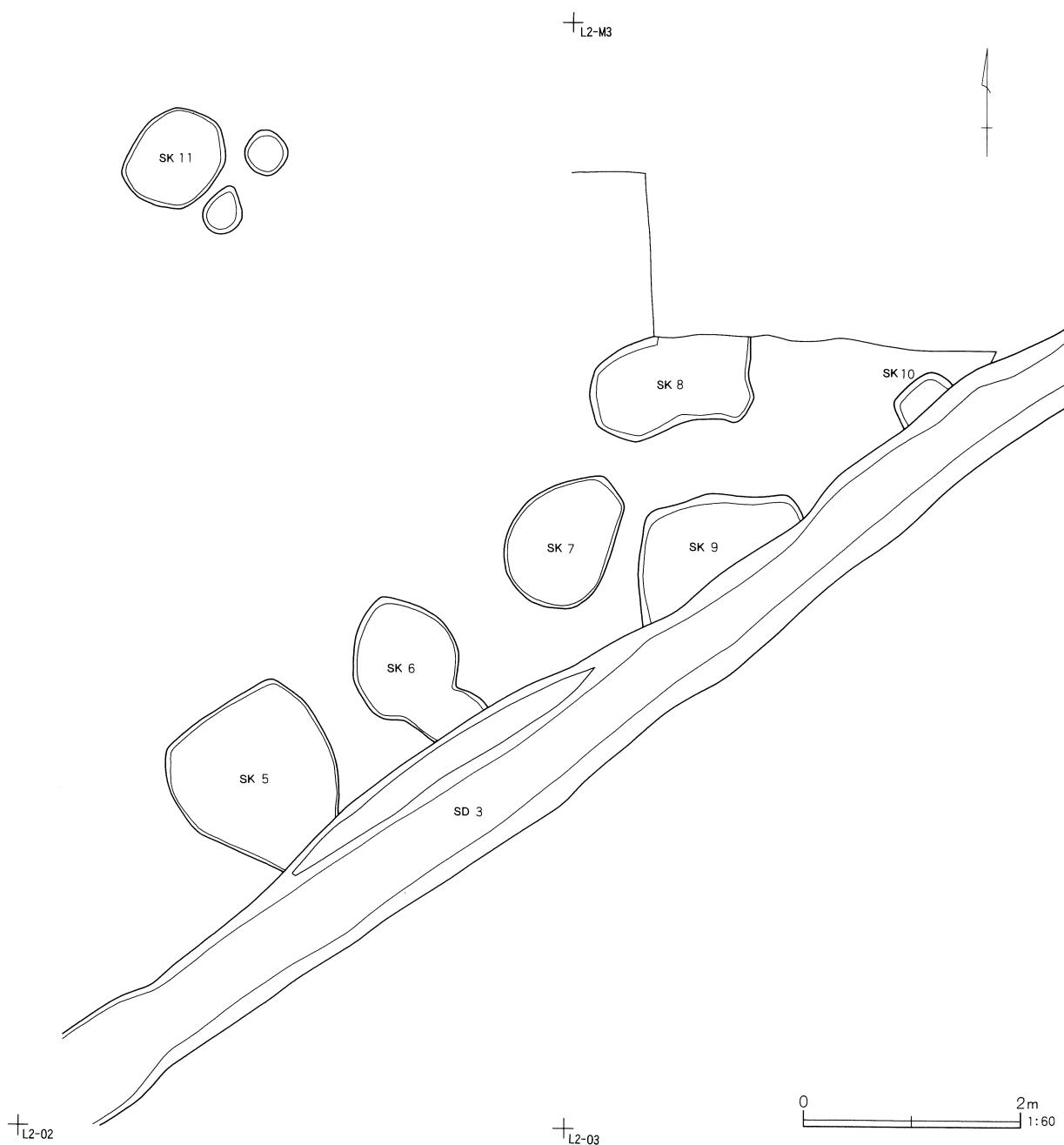
K2—P18・P19・Q19 グリッドに位置する。第12号溝跡に切られている。

円形で周溝内側直径は4.82m、深さは8cmである。掘り込みは明瞭で、底面は平らである。

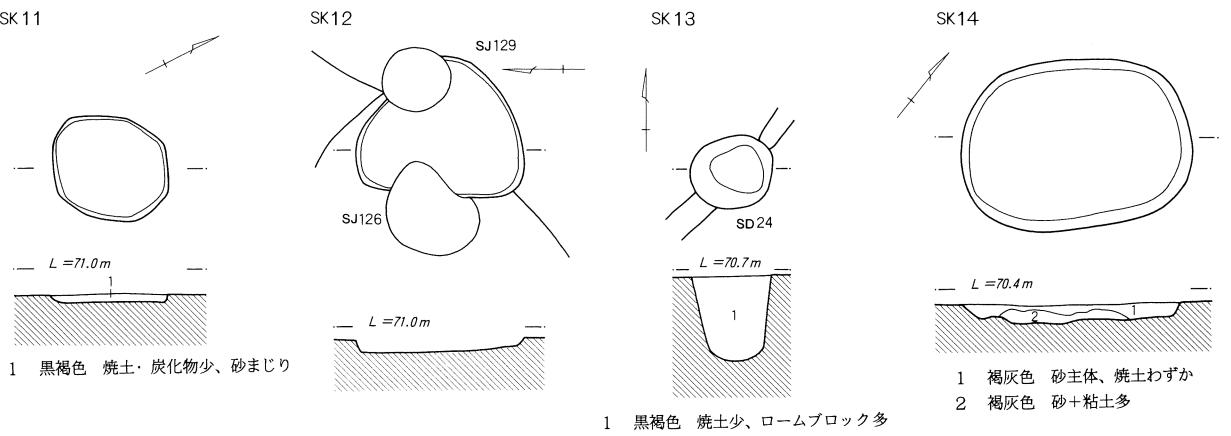
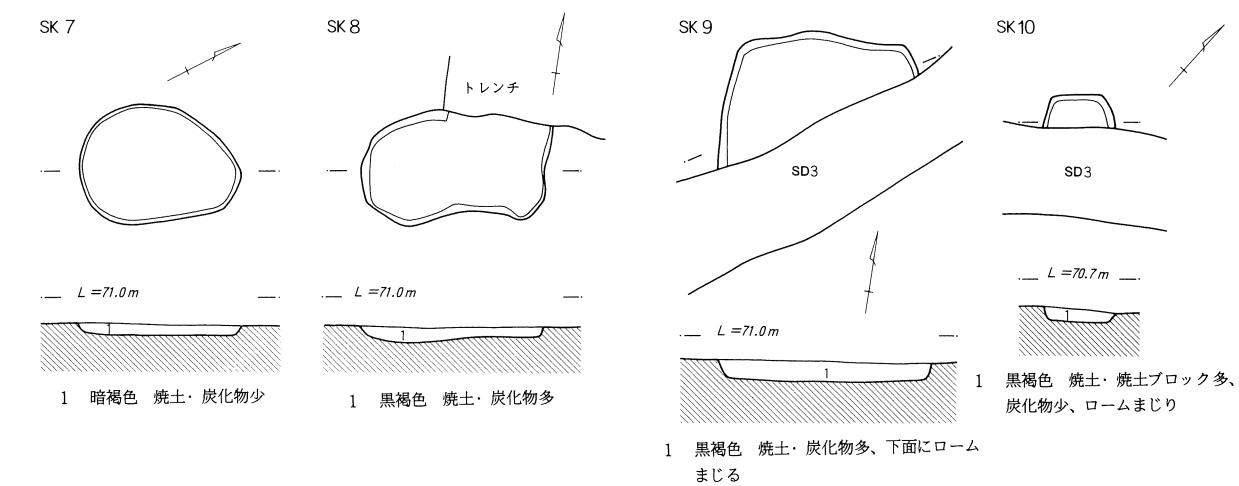
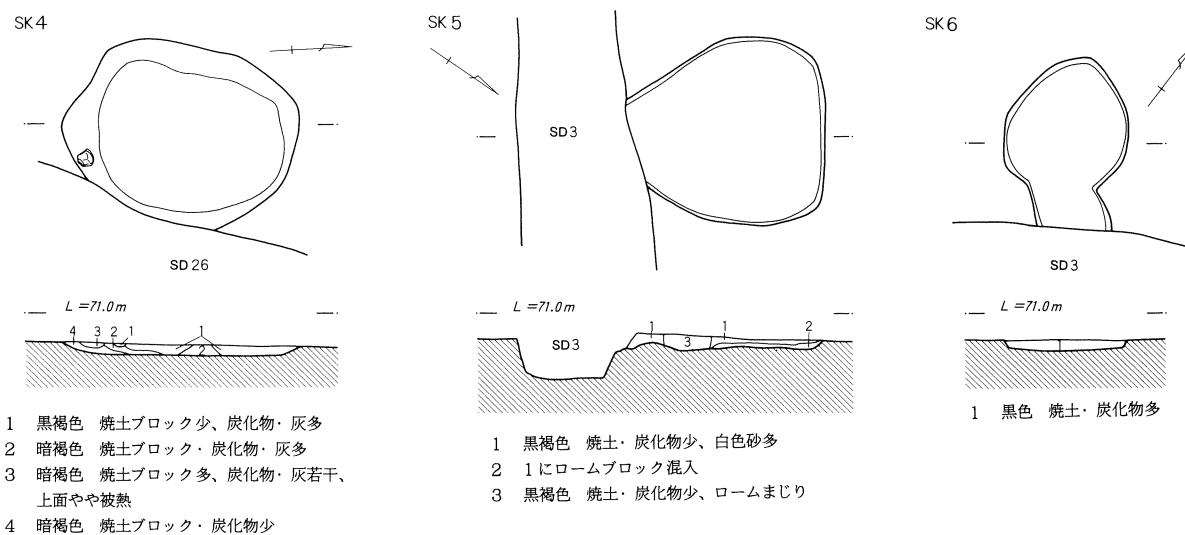
出土遺物はない。

10. 土壙

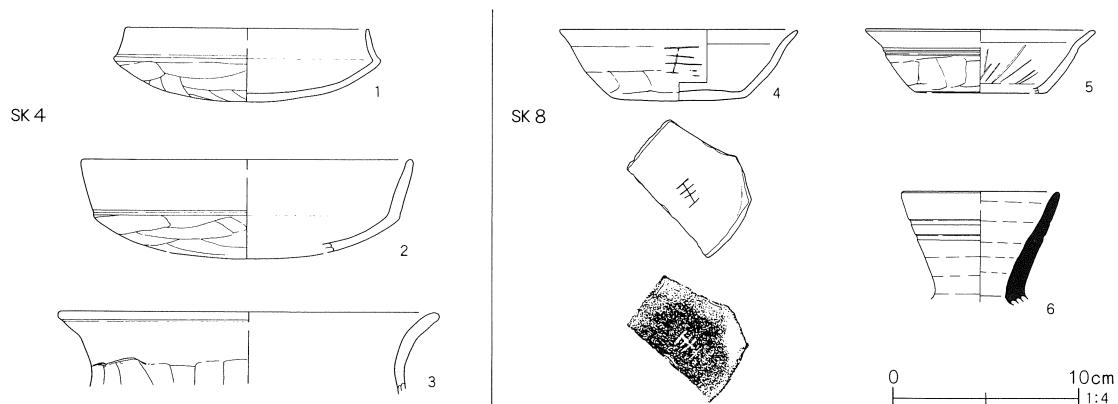
第214図 土壙群（第5～11号土壙）



第215図 第4号土壤～第14号土壤



第216図 第4・8号土壌出土遺物



第4号土壌遺物観察表（第216図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	坏	(12.8)	3.9		ADF 1	A	B	60	埋土	
2	坏	(17.5)	(5.0)		D 1	A	B	20	埋土	
3	甕	(19.8)	(4.4)		A 2	A	B	5	埋土	

第8号土壌遺物観察表（第216図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
4	坏	12.7	3.8		DF 1	A	B	50	埋土	外面・底部内面に「四十」を表す線刻あり
5	坏	(12.2)	(3.3)		DF 1	A	B	25	埋土	暗文
6	提瓶？	(8.3)	(6.0)		D 1	A	E	5	埋土	須恵器 口縁部破片 産地不明

第4号土壌（第215、216図）

L2-P12・Q12グリッドに位置する。第26号溝跡に切られている。形状は楕円形を呈する。長径×短径は1.89×1.43m、深さは8cmである。埋土に焼土や炭化物、および灰が多く含まれている。掘り込みは浅く、底面は平らである。

遺物は土師器の破片が数点出土した。図示できたものに、土師器坏・甕がある。

第5号土壌（第214、215図）

L2-N2グリッドに位置する。第3号溝跡に切られている。形状は楕円形を呈する。北東-南西幅は1.46m、深さは8cmである。埋土には、焼土と炭化物が少量含まれている。掘り込みは浅く、底面は凹凸がある。

遺物は土師器の破片が数点と、須恵器大甕の胴部破片が出土した。図示できる遺物はない。

第6号土壌（第214、215図）

L2-N2グリッドに位置し、第3号溝跡に切られている。形状は不定形である。東西幅は0.99m、深さは9cmである。埋土は一層である。掘り込みは浅いが、壁はやや立ち上がる。底面は平らである。

遺物はまったく出土しなかった。

第7号土壌（第214、215図）

L2-M2・M3・N2・N3グリッドに位置する。形状は楕円形を呈する。長辺×短辺は1.3×0.93m、深さは9cmである。埋土は一層である。掘り込みは浅く、壁は立ち上がり気味である。底面は平らである。

出土遺物はない。

第9号土壌（第214、215図）

L2-M3・L2-N3グリッドに位置し、第3号溝跡に切られている。形状は不明だが、方形を呈するものと思われる。東西幅は1.45m、深さは16cmである。埋土

は一層である。掘り込みは浅く、底面は平らである。
出土した遺物はない

第10号土壙（第214、215図）

L2—M3 グリッドに位置し、第3号溝跡に切られている。形状は不明である。北東—南西幅は0.65m、深さは10cmである。埋土は一層である。掘り込みは浅く、底面は平らである。

遺物は、土師器甕の破片が数点出土したに過ぎない。小片のため図示できなかった。

第11号土壙（第214、215図）

L2—M2 グリッドに位置する。形状は楕円形を呈する。長径×短径は0.93×0.81m、深さは6cmである。埋土は一層である。掘り込みは浅く、底面は平らである。

遺物はまったく出土しなかった。

第12号土壙（第215図）

L2—L11・L12 グリッドに位置する。第126・129号住居跡を切っている。形状は不整楕円形である。長辺×

11. 土器集中区

土器集中区（第217、218図）

L2—K3 グリッドに位置する。第3号溝跡と、第19号溝跡に挟まれた部分にあたる（第219図参照）。
遺構確認作業の際に、確認面のおよそ径50×70cmほどの範囲に土器の破片が散らばっていたのが検出された。その面においては埋土に違いはみられなかったため、平面プランを押さえることができなかった。地山面まで掘り下げたが、土器堆積の下には掘り込みは存在せず、北側に接して小さなピットが検出され

短辺は1.33×1.04m、深さは9cmである。掘り込みは浅く、底面はわずかに凹む。

出土遺物はないが、重複関係から、住居跡の示す時期よりも新しいものと考えられる。

遺物は、土師器の破片が若干出土している。いずれも細片で図示できるものはない。

第13号土壙（第215図）

L2—K13 グリッドに位置する。第24号溝跡を切っている。形状は円形を呈する。長径×短径は0.63×0.57m、深さは66cmである。埋土は一層である。ピット状の土壙で、バケツ状に掘り込まれ、底面は凹む。

遺物は土師器の破片が若干量出土している。細片であり、図示できる遺物はない。

第14号土壙（第215図）

M2—I8—I9 グリッドに位置する。形状は楕円形を呈する。長径×短径は1.85×1.34m、深さは14cmである。掘り込みは浅く、底面は凹凸がある。

遺物は土師器が数点出土したに過ぎない。いずれも細片である。

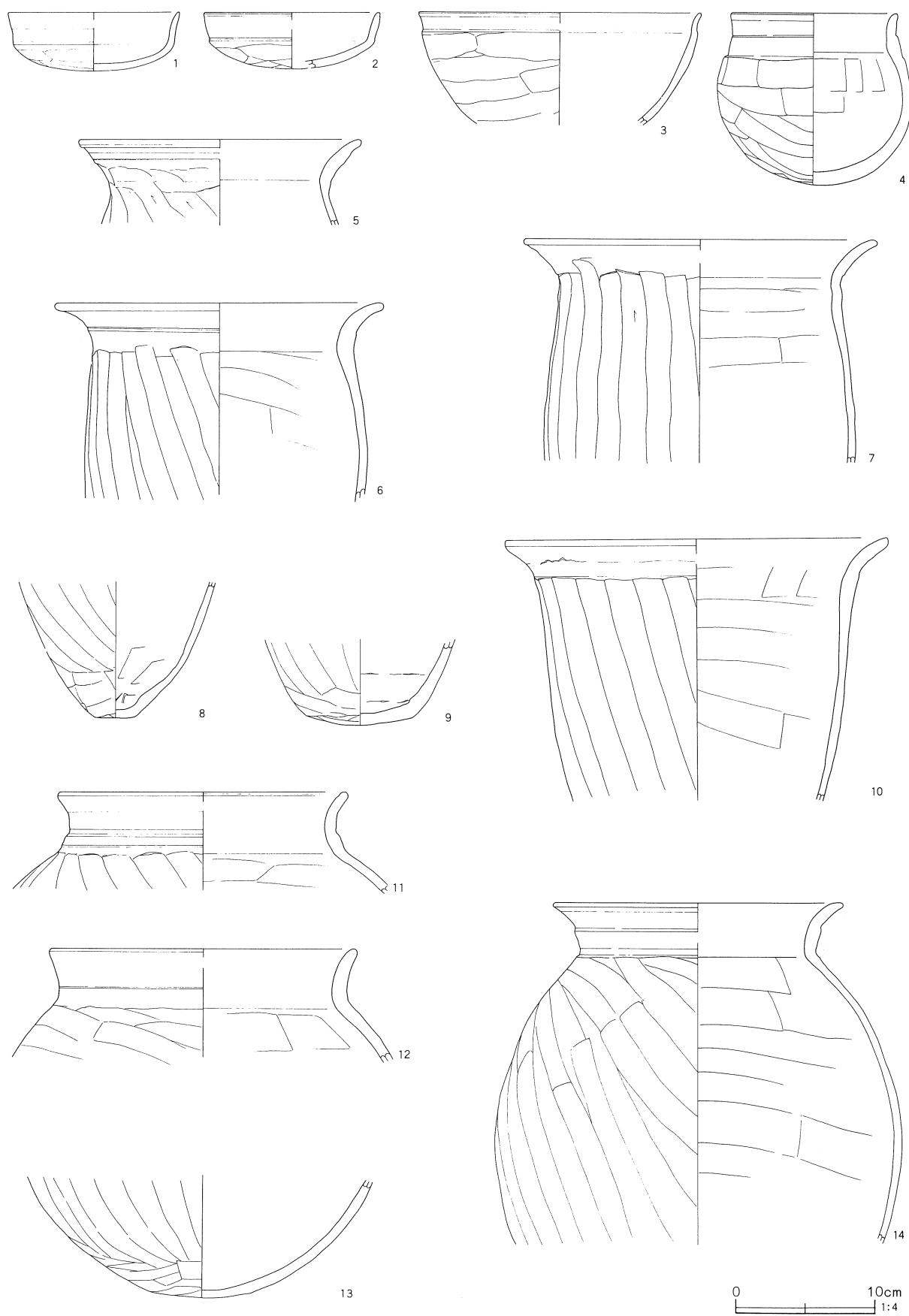
たにとどまった。

遺物の総量はコンテナ3箱分に達したが、すべて破片である。接合率は良好でない。土師器が主体であり、須恵器はわずか数点しか出土していない。

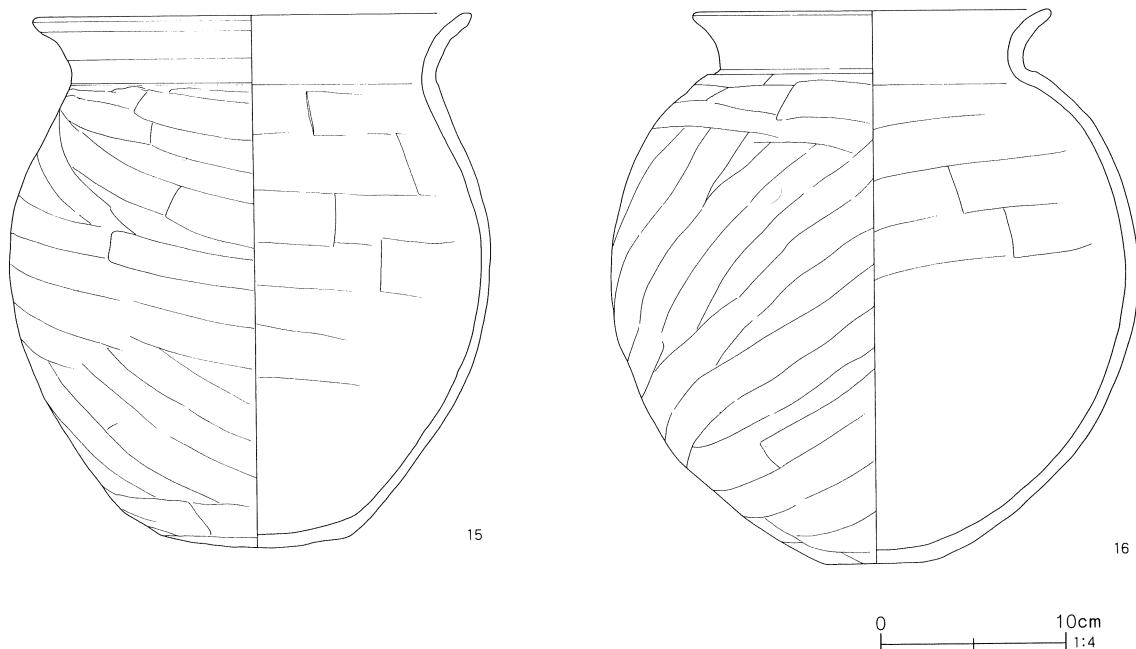
これらの所見から、本遺構は、これらの遺物は廃棄されたものと考えられる。

主な出土遺物には土師器壺・鉢・甕等がある。図示できなかったが、支脚の破片も出土している。

第217図 土器集中区出土遺物(1)



第218図 土器集中区出土遺物(2)



土器集中区遺物観察表 (第217・218図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(12.0)	4.2		A 1	A	B	30		器面風化顯著
2	壺	(12.2)	(3.9)		AD F 2	A	B	25		
3	鉢	(19.8)	(7.9)		AD 5	A	B	10		器面風化顯著
4	小形甕	11.6	12.2		AD F 1	A	B	80		外面黒斑あり 図版63-4
5	甕	(19.8)	(6.1)		AD F 2	A	B	5		内面一部黒化
6	甕	22.8	(14.1)		AD 2	A	B	40		
7	甕	(24.6)	(15.8)		AD F 2	A	C	10		内面、外面一部黒化
8	甕	(9.5)		2.8	D 2	A	C	10		内面黒化
9	甕	(6.0)		7.5	AD F 5	A	B	5		
10	甕	(26.8)	(18.6)		AD 2	A	B	40		外面黒斑あり
11	甕	(20.2)	(7.2)		DF 5	A	B	5		
12	甕	(21.4)	(8.0)		AD F 5	A	B	5		
13	甕	(8.4)		7.2	DF 1	A	B	10		外面一部黒化
14	甕	(20.4)	(23.9)		AD F 2	A	B	15		
15	甕	(22.8)	28.3	9.8	AD F 5	A	C	60		器面風化顯著
16	甕	18.8	29.4	6.1	DEF 5	A	C	40		底部外面一部黒化

12. ピット

ピットは第21・22住居跡群の周辺に、多数検出された。柱痕など、その用途を窺い知ることのできるデータを備えたものはない。

遺物が出土したピットは68基を数える。このうち、良好な遺物が出土したもの5基紹介しておく。位置関係は第219図を参照されたい。

L1—L19 Pit 1 (第220図)

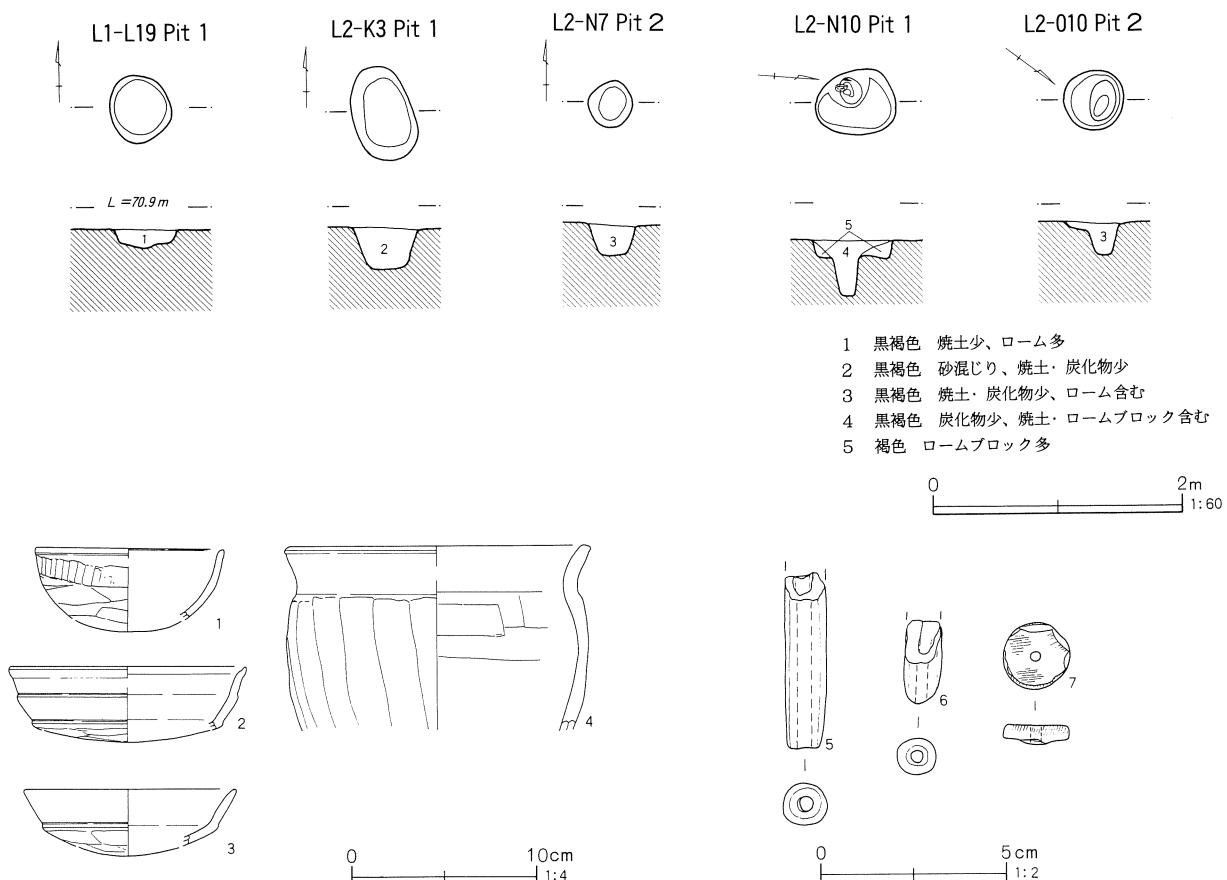
直径約50cmの円形を呈する。深さは15cmで、底面はわずかにくぼんでいる。

埋土から滑石製の白玉が出土した。伴出遺物に土師器壺の口縁部破片が1点あるが、細片のため図示できなかった。

第219図 ピット群



第220図 ピット・出土遺物



ピット遺物観察表（第220図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	椀	(9.9)	(3.7)		D F 1	A	B	10	埋土	L2-K3 P1 ヘラケズリ一部ノッキング
2	壺	(12.5)	(3.3)		A D F 1	B	B	10	埋土	L2-N7 P2
3	壺	11.2	(3.5)		D F 2	B	B	15	埋土	L2-O10 P2 器面風化顯著
4	小形甕	(15.8)	(9.8)		A D E F 5	A	B	10	埋土	L2-N10 P1
5	土錘	現長4.5cm、最大径1.1cm、孔径0.3cm、重さ6.2g							埋土	L2-N7 P2 欠損品
6	土錘	現長2.2cm、最大径1.0cm、孔径0.3cm、重さ1.8g							埋土	L2-N7 P2 欠損品
7	白玉	径1.8cm、厚さ1.8cm、孔径0.3cm、重さ2.5g							埋土	L1-L19 P1 滑石製

L2-K3 Pit 1 (第220図)

形状は楕円形を呈し、規模は75×47cm、深さは32cmである。掘り込みはバケツ状になり、底面は平らである。

図示した椀を含め、土師器の破片が數十点出土した。

L2-N10 Pit 1 (第220図)

形状は卵形を呈し、規模は64×50cmである。中央西よりに、直径20cm弱、深さ30cmの掘り込みがある。

埋土から土師器が3点出土した。うち1点は甕口縁部破片である。

L2-N7 Pit 2 (第220図)

円形で、直径約35cm、深さは25cmである。掘り込みはバケツ状になり、底面は平らである。

埋土から土師器壺の破片が2点と、土錘が2点出土している。

L2-O10 Pit 2 (第220図)

直径約50cmの円形を呈する。2重の掘り込みをもち、深さは25cmである。

埋土から土師器の破片が数点出土している。

V 平安時代以降の遺構と遺物

概要

この章で報告する遺構は、竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡4棟、土壙1基、井戸跡1基である。これらの遺構は、第3図の全測図において、スクリーントーンで示しておいた。住居跡に関しては、それぞれ含まれる住居跡群の遺構配置図においても、同様に表示している。

竪穴住居跡のうち、平安時代に属すると考えられるのは、第112・113・118・282号住居跡である。

第112・118号住居跡は、出土した土師器から、8世紀末頃と考えられる。

第113号住居跡は出土須恵器や土師器から、9世紀後半と推定される。

第282号住居跡は、出土遺物からはその所属時期が把握できなかったが、その形態は、先に報告された第169号住居跡（I-P248）と同様に特異なものである。工房跡的な性格をもつ遺構と推定され、時期も同じく、平安時代以後に属するものと考えられる。

1. 竪穴住居跡

第112号住居跡（第221、222図 図版5上）

L2-N12・N13グリッドに位置し、第21住居跡群に含まれる。第107号住居跡と第111号住居跡に挟まれた位置に検出された。当初は両住居跡より古いと判断して発掘したため、平面プランをすべて明らかにできなかった。第111号住居跡の埋土の状況から、ほとんど接する位置に構築されたと考えられる。

形状は方形を呈する。長辺×短辺は4.1×3.7m、深さは16cmである。埋土は、明瞭な区別のつかない暗褐色土であり、短い時間での埋没が想定される。カマドの傾きはN-90°-Eである。

カマドは東壁中央に設けられている。燃焼部は徐々に掘り込まれており、底は狭まる。煙道部との境には浅い段をもち、煙り出し口にかけてはゆるやかな立ち上がりをみせる。顕著な被熱面は認めらず、袖部は確

今回報告分の掘立柱建物跡は、遺物がほとんど出土していないため、帰属する時期を確定できるものはない。第11・12・15・16号掘立柱建物跡は、すべてが重複する住居跡を切って構築されている。第15・16号掘立柱建物跡は、主軸を同じくして近接しており、同時期に建てられていたものと推定される。

土壙は、第8号土壙が平安時代に属するものと考えられる。出土した土師器坏は9世紀前半の年代が与えられよう。

井戸跡（第1号井戸跡）の埋土からは、少量の遺物が出土した。その中には周囲の遺構から流れ込んだものと考えられる土師器や須恵器の破片とともに、常滑や片口鉢の破片が存在している。これらの遺物は13世紀後半～14世紀前半のものと考えられ、この井戸跡の帰属時期を示すものと推定される。

なお、これらの遺構以外にも、多数検出されたピットのなかに、掘立柱建物跡と共に埋土をもつものが散見されている。

認されなかった。

ピットは2基検出されたが、規模が小さく、位置的にいっても柱穴と断定する根拠に欠ける。

他の施設は検出されなかった。

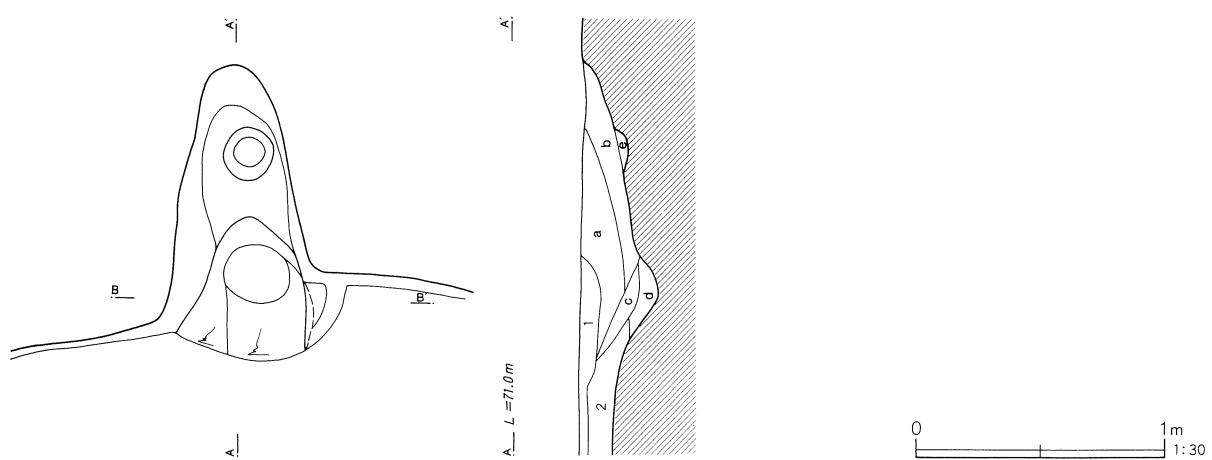
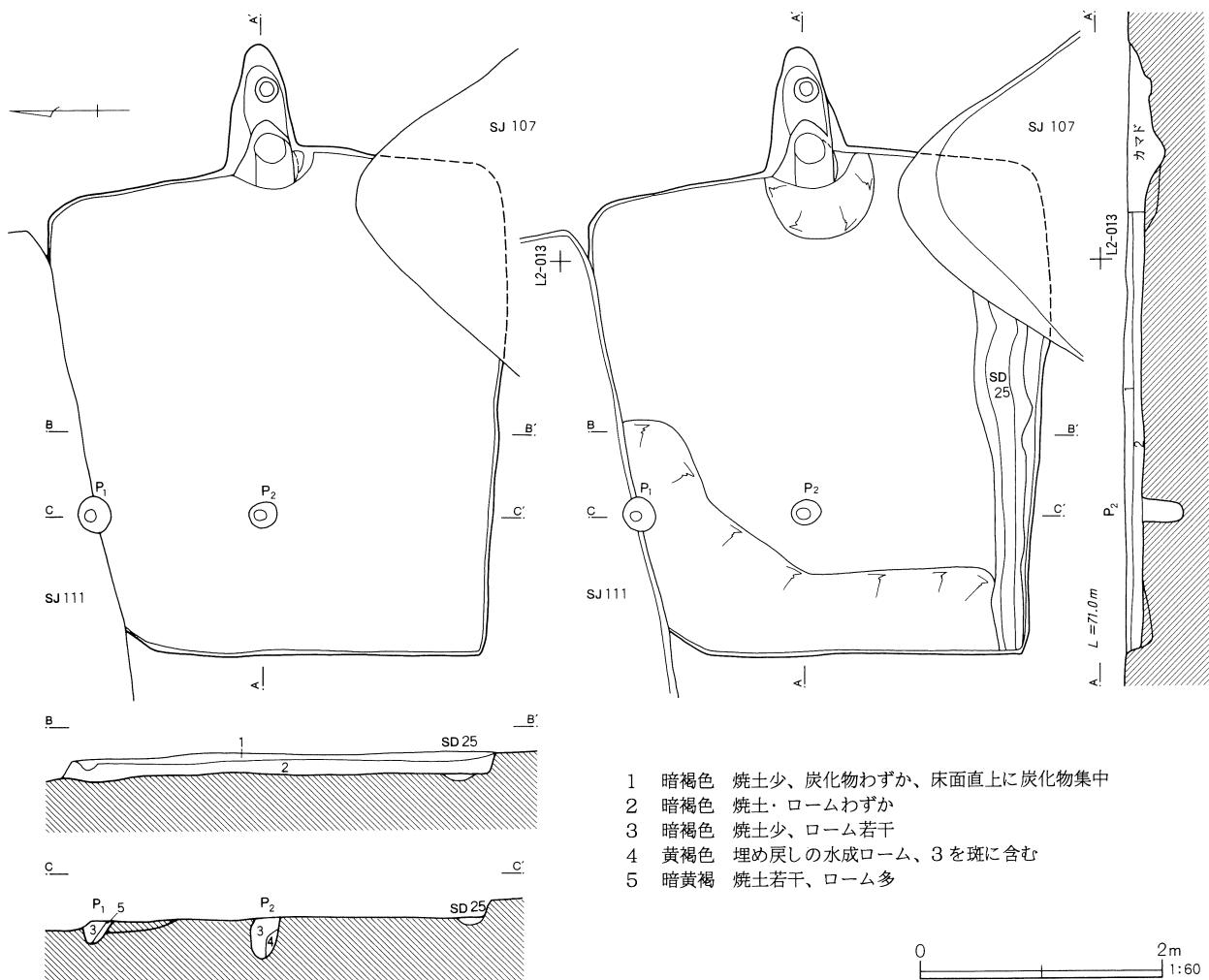
遺物は、埋土中から少量出土している。土師器坏と甕を図示したが、このほかに須恵器甕の胴部破片も出土している。床面直上から出土した遺物はない。

第113号住居跡（第223、224図）

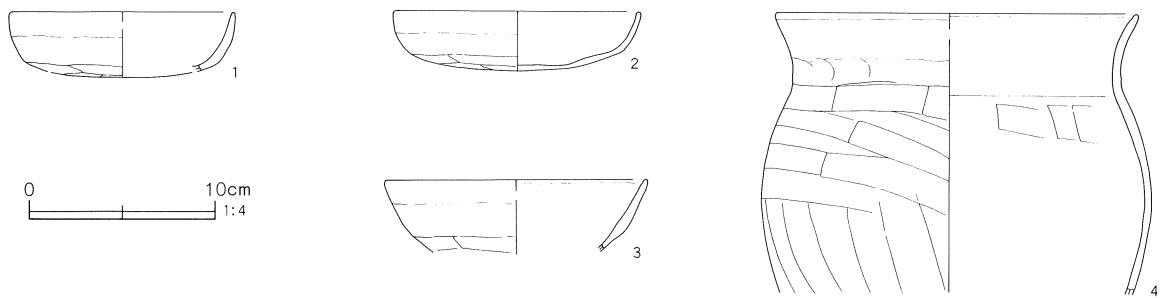
L2-N11・N12・O11・O12グリッドに位置し、第21住居跡群に含まれる。重複する遺構はない。形状は長方形を呈する。長辺×短辺は4.22×3.62m、深さは8cmである。カマドの傾きはN-85°-Eである。

カマドは東壁中央に構築されている。燃焼部は不整橢円形を呈し、規模は98×57（最大）cmである。掘り

第221図 第112号住居跡・カマド



第222図 第112号住居跡出土遺物



第112号住居跡遺物観察表（第222図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	11.8	(3.2)		DF 2	A	C	15	カマド埋土	
2	壺	13.0	3.2		DF 1	A	C	35	埋土	口縁一部黒化
3	壺	13.8	(3.8)		DF 1	A	B	25	埋土	
4	甕	19.0	(14.9)		AD 1	A	B	20	カマド埋土	器面風化顯著

込みは大きく、深さは16cmである。ゆるやかな段をもつて煙道部へと移行する。煙道部は幅38cm、長さ58cmにわたって検出された。煙り出し口へ向って徐々に浅くなる。底面の被熱はほとんど観察されなかった。袖部はロームを含んだ土で構築されている。

貯蔵穴はカマド右隣の東南コーナーに位置する。形態は直径およそ80cmの円形で、西側に三日月状の段を有する。深さは25cmで底は丸く掘り込まれている。

床面には全体的に凹凸が多く、床下土壙が2基確認された。土壙はともに直径70cm程度の円形を呈し、2基接して住居跡のほぼ中央に位置している。底面は平らで、深さは10~15cmである。

ピットは床面精査の段階で6基、掘形調査の際にさらに2基検出された。いずれも柱痕は認められない。

主な出土遺物は、須恵器壺・皿・高台付椀、土師器

壺・甕等である。貯蔵穴からは完形に近い須恵器壺と土師器壺が1点ずつ出土した。

第118号住居跡（第225図）

L2-L11グリッドに位置し、第20住居跡群に含まれる。重複する住居跡、第126・127・128号住居跡すべてを切って構築されている。形状は正方形に近い方形を呈する。長辺×短辺は2.21×2.1m、深さは8cmである。カマドの傾きはN-48°-Eである。

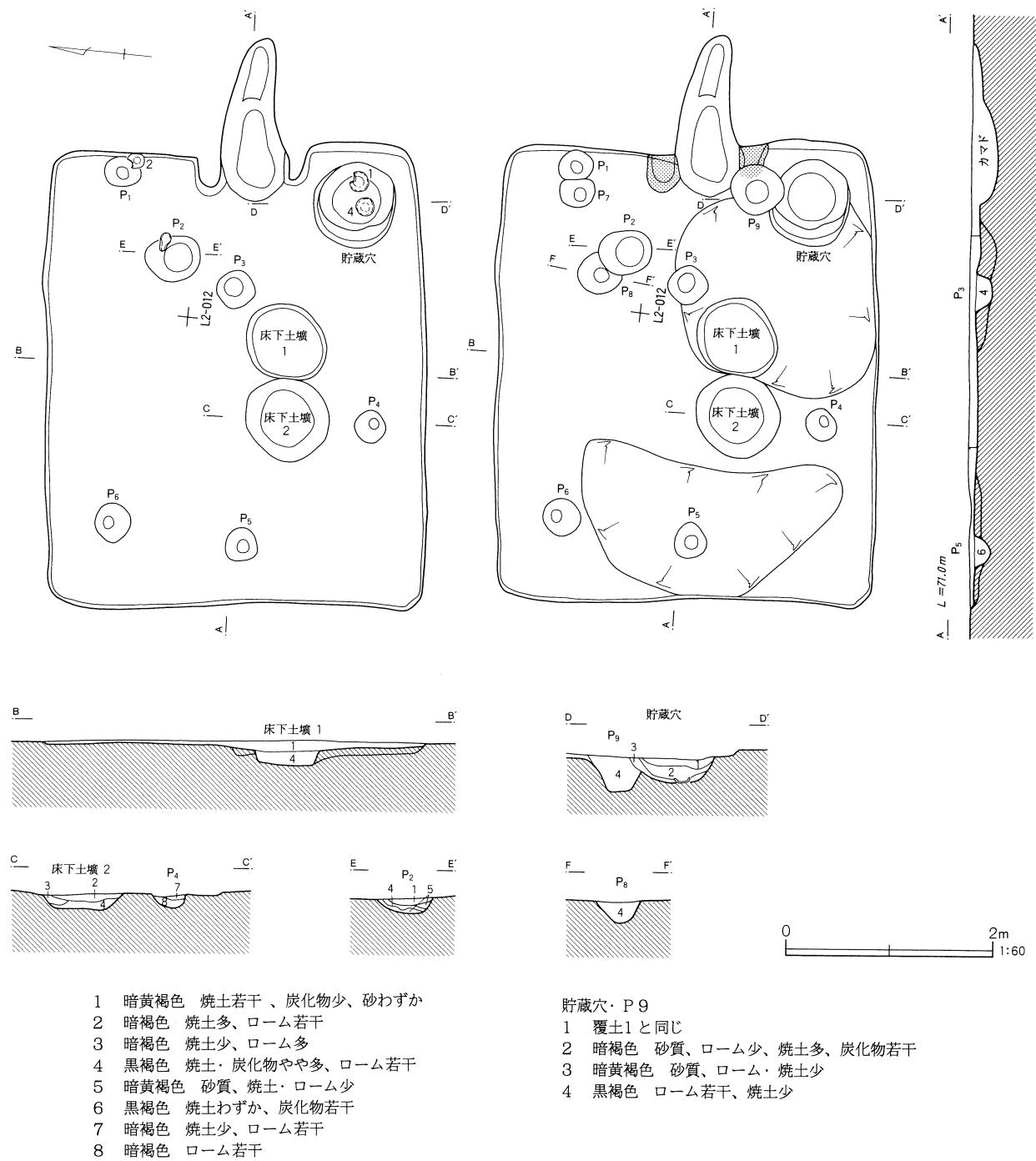
カマドは北東壁の中央に位置し、住居跡の規模からすると大きなカマドである。燃焼部は丸く、皿状に掘り込まれている。煙道部は山形に突き出ており、燃焼部底面との境は明瞭でなく、ゆるやかに移行する。袖部は検出されなかった。

規模が35×40cmの方形のピットが1基検出された

第113号住居跡遺物観察表（第224図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	12.5	3.4	5.6	DF 5	A	J	90	貯蔵穴	須恵器 末野産 図版37-4
2	高台椀	15.4	7.0	7.3	D 5	A	J	85	壁際	須恵器 末野産 図版56-7
3	皿	15.9	2.5	6.4	AF 2	A	B	50	床下	須恵器 酸化炎焼成 底部回転糸切り離し 末野産
4	壺	12.4	3.3		AF 2	A	B	100	貯蔵穴	図版38-9
5	壺	(10.8)	(2.9)		D 1	A	F	20	貯蔵穴	指オサエ 1段
6	壺	(11.8)	(2.9)		DF 1	A	C	25	貯蔵穴	指オサエ 1段
7	壺	(10.8)	(3.4)		AF 1	A	B	35	床下	指オサエ 2段
8	壺	(12.7)	(3.1)		AF 1	A	C	45	床下	指オサエ 1段
9	椀	(13.7)	(4.4)		DF 1	A	C	25	貯蔵穴	指オサエ 2段
10	甕	(17.8)	(6.0)		AD 1	B	C	5	埋土	コの字状口縁、口唇部肥厚
11	甕	(17.7)	(5.2)		DF 1	A	C	5	貯蔵穴	コの字状口縁

第223図 第113号住居跡



が、本住居跡に伴うかは不明である。深さは15cmと浅い。

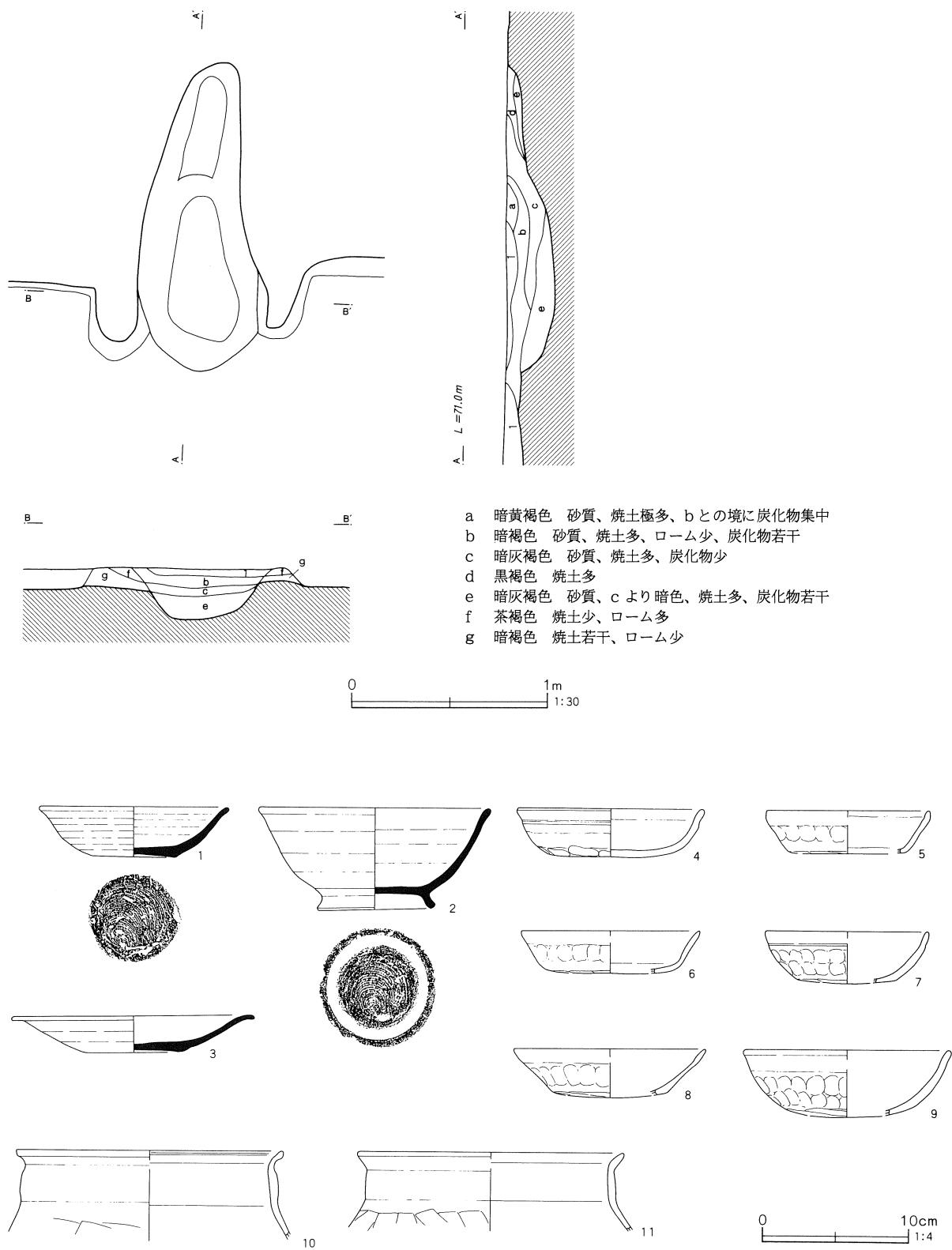
その他の施設は検出されなかった。

遺物は、埋土中から少量の土師器が出土した。図示できたものに土師器壊（床直出土）と甕がある。

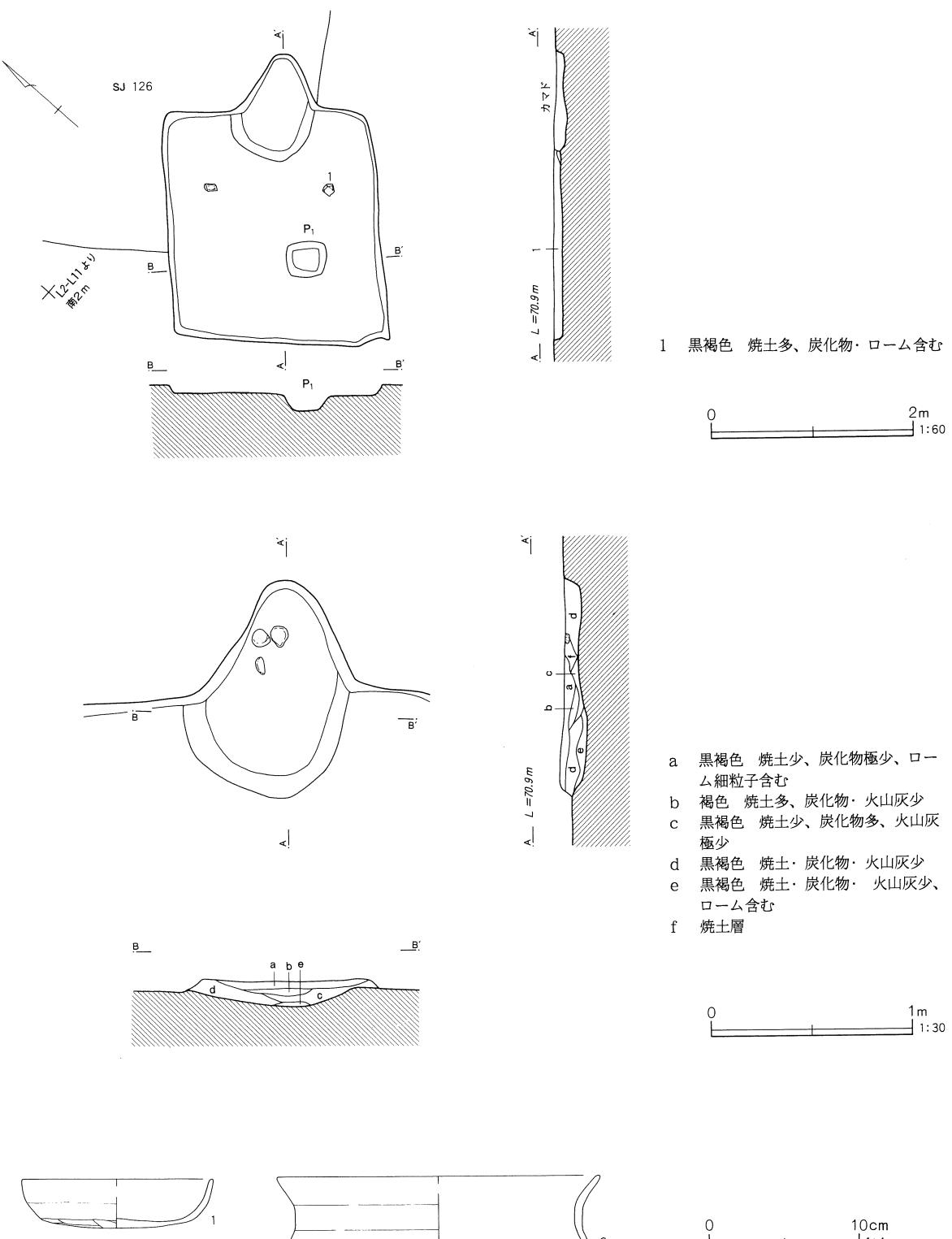
第282号住居跡（第226図 図版23上）

L2—A17・A18 グリッドに位置し、第19住居跡群に含まれる。重複するすべての遺構、第285・286・287・288・295号住居跡を切っている。形状は方形を呈する。長辺×短辺は3.05×2.94m、深さは25cmである。埋土は黒褐色の一層で、短期間に埋没した結果であろう。長辺の傾きは N—51°—E である。

第224図 第113号住居跡カマド・出土遺物



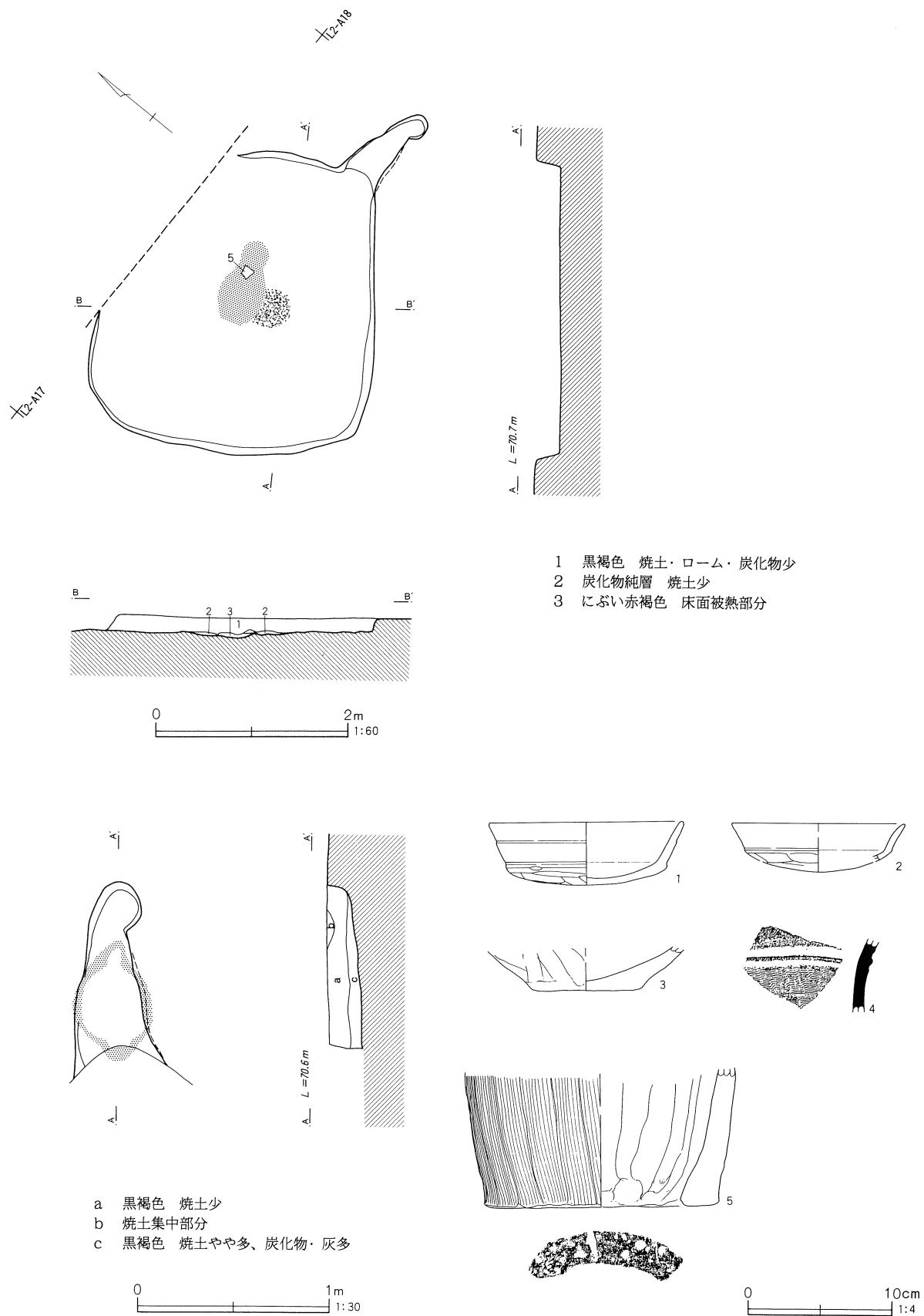
第225図 第118号住居跡・カマド・出土遺物



第118号住居跡遺物観察表（第225図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	(12.3)	3.2		A F 1	A	C	60	床直	底部ヘラケズリ
2	甕	(20.8)	(4.6)		A D F 1	A	C	5	埋土	口縁部破片

第226図 第282号住居跡・カマド・出土遺物



第282号住居跡遺物観察表（第226図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	壺	13.2	(4.3)		F 1	A	B	55	埋土	
2	壺	11.8	(2.6)		F 1	A	C	5	埋土	
3	甕	(7.4)	(3.0)		A D E F 5	A	C	5	埋土	底部破片
4	甕		(5.1)		A D 2	A	F	5	埋土	須恵器 口縁部破片 末野産
5	埴輪	(9.5)	(16.2)		A D E F 1	A	C	5	焼土面	円筒埴輪底部破片

カマドは東コーナーに構築されている隅カマドである。燃焼部ははつきりしないが、コーナー壁に被熱面がみられ、付近の埋土には炭化物の堆積が認められた。煙道部は長さ83cmで、底面は煙り出し口に向ってゆるやかに浅くなる。確認面および断面で観察された焼土層(b層)は、天井部の被熱面と推定される。煙り出し

口は直径12cm程と考えられる。

中央部の床面には発達した被熱面と炭化物の堆積が検出された。

出土遺物には土師器壺・甕、須恵器甕口縁部、円筒埴輪底部の破片がある。いずれも重複する住居跡からの混入か、周辺からの流れ込みと考えられる。

2. 掘立柱建物跡

第11号掘立柱建物跡（第227、228図）

L2—M7～M9・N8・N9・O8・O9グリッドに位置する。第21住居跡群のはずれにあたる。重複関係は第120号住居跡を切っている。桁行×梁行は12.4×4.8m、桁行の傾きはN—28°—Wである。

埋土で柱痕が確認できたのはP2のみである。北側には鉄塔敷地があり、全貌を明らかにすることはできなかった。検出された限りでは、5間×2間の掘立柱建物跡と推定されるが、桁行はさらに北方向に延びる可能性がある。

桁行の柱間は、東側はP1—P2が2.5m、P2—P3が2.6m、P3—P4が2.45mである。西側はP7—P8・P8—P9が2.5m、P9—P10が2.4m、P10—P11が2.65m、P11—P12が2.35mである。梁行の柱間はP4—P6が2.5m、P6—P12が2.3mである。

掘形は直径45～60cm、深さは深いもので55cm、浅いもので25cmである。P5は掘形の規模がやや小さく、直径40cm、深さ32cmである。束柱と推定される。

遺物はほとんど出土しなかった。

第12号掘立柱建物跡（第229図 図版30下）

L2—C13・C14・D13グリッドに位置し、第19住居跡群の南寄りにある。重複関係は第137号住居跡を

切って構築されている。桁行×梁行は2.9×3.0mである。桁行の傾きはN—90°—Wで、ほぼ東西方向に一致する。

2間×1間の掘立柱建物跡である。P1～P6のうち、埋土が調査できたものすべてに柱痕が確認された。桁行の柱間は、P1—P2が1.35m、P2—P3が1.5m、P4—P5が1.4m、P5—P6が1.5mである。梁行の柱間はP1—P4が2.85m、P3—P6が3.0mである。

掘形は直径55～70cm、深さは60～80cmである。断面形はU字状もしくはくずれたV字状となり、柱を押し込んで固定していたものもある。

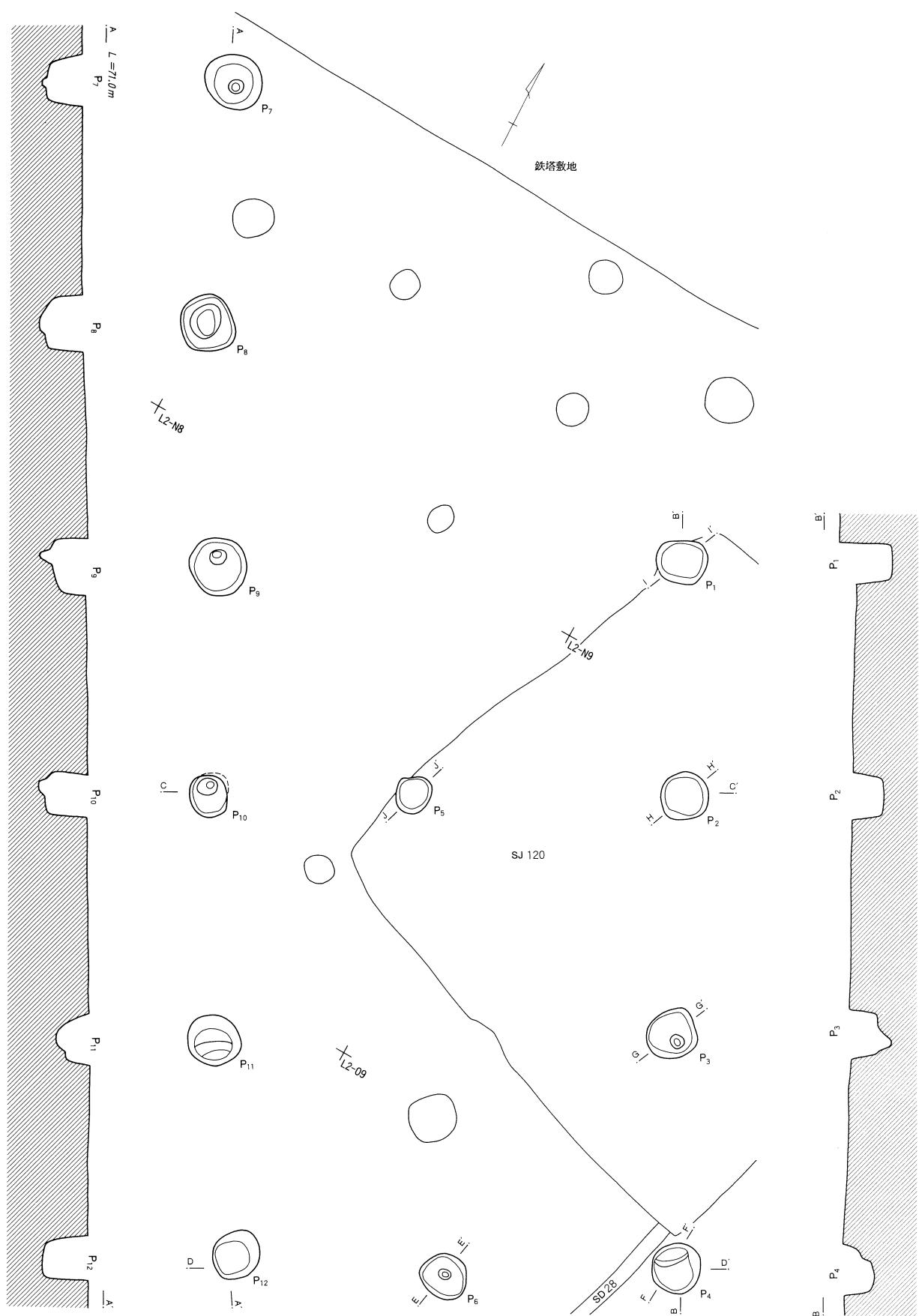
P7とP8は本掘立柱建物跡と関連する確証はないが、埋土は共通しており、時期的に差はないものと考えられる。深さはP7が42cm、P8が35cm、埋土はともに黒褐色土(2層)である。柱痕はみられない。

遺物は出土しなかった。

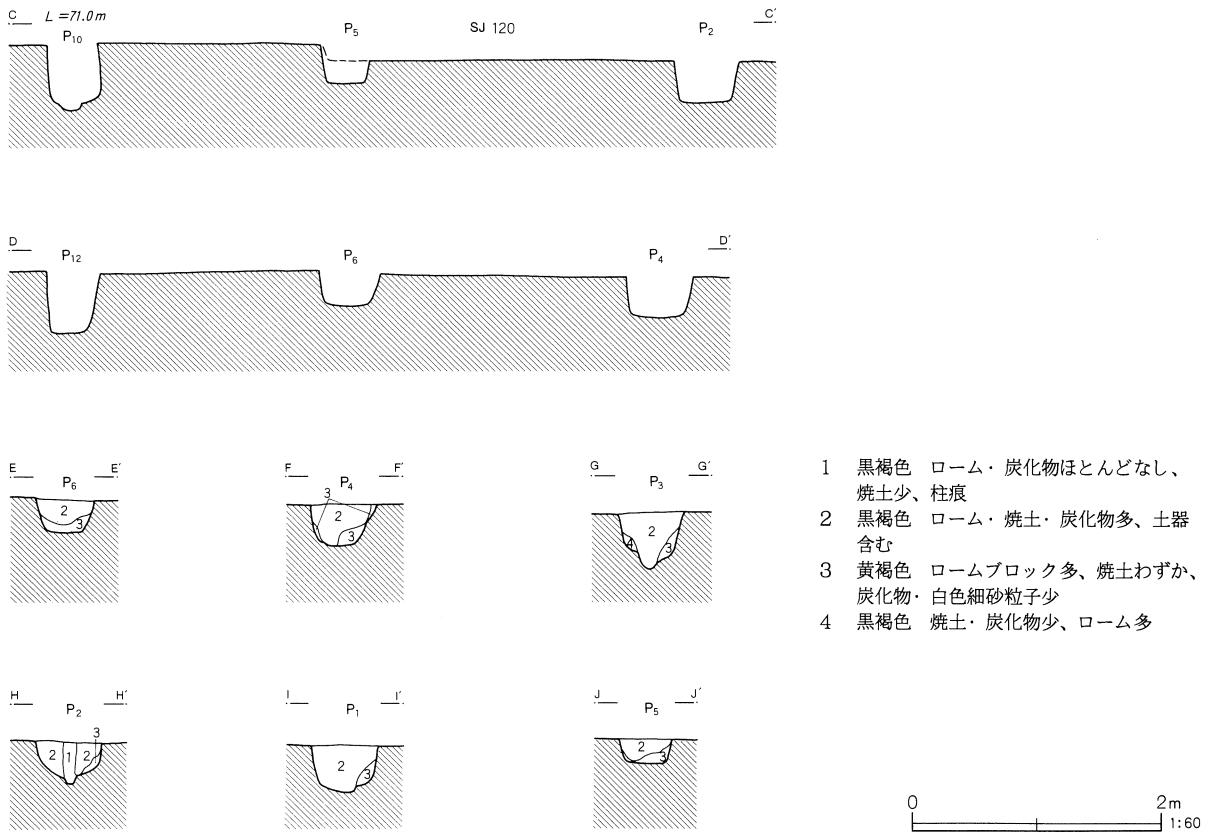
第15号掘立柱建物跡（第230図 図版31上）

L2—A15・A16・B16グリッドに位置する。第19住居跡群の中央部を占める。重複関係は、第144号・第299号住居跡を切っている。桁行×梁行は3.5×2.25mで、主桁行の傾きはN—42°—Wである。埋土は黒褐色土の一層で混入物はほとんどない。柱痕は確認されな

第227図 第II号掘立柱建物跡(1)



第228図 第11号掘立柱建物跡(2)



かった。

3間×1間の掘立柱建物跡と推定されるが、桁行は北側の方が長く、対照ではない。桁行の柱間は、北側はP1-P2が1.4m、P2-P3が1.5m、P3-P4が1.6mである。南側はP7-P8が1.2m、P8-P9が1.45m、P9-P10が1.35mである。梁行はP1-P7で2.25m、P4-P10で2.05mである。梁行から外側に張り出すように2つのピットが位置している。P5の張り出しが、梁行から50cmで、深さは36cmである。P6の張り出しが、梁行から30cmで、深さは切り合う住居跡の床面から21cmである。

掘形の深さは一定せず、その配置も不揃いである。出土遺物はない。

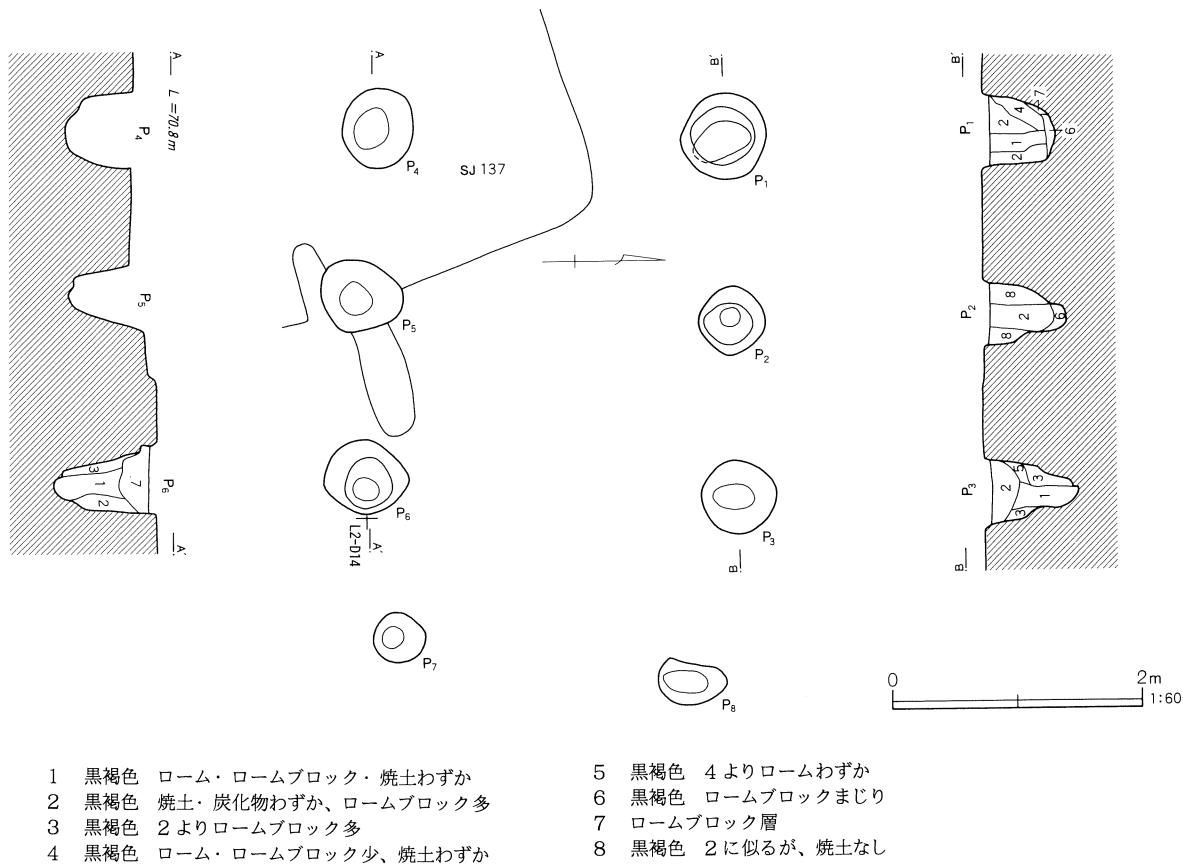
第16号掘立柱建物跡（第230図 図版31上）

L2-A16・A17・B16・B17グリッドに位置し、第15号掘立柱建物跡の南に近接する。桁行×梁行は3.45×2.0mで、桁行の傾きはN-42°-Wである。重複関係は第141・299・323号住居跡を切っている。埋土は第15号掘立柱建物跡と同じである。

1間×3間の掘立柱建物跡と推定され、桁行の軸は第15号掘立柱建物跡と等しい。桁行の柱間は、北側はP1-P2が1.4m、P2-P3が1.2m、P3-P4が0.85mである。南側はP5-P6が0.9m、P6-P7が1.25m、P7-P8が0.95mである。梁行の柱間はP1-P5が2.0m、P4-P8が1.95mである。柱間寸法や掘形は不揃いである。

遺物は出土しなかった。

第229図 第12号掘立柱建物跡



3. 土壌

第8号土壌（第215、216図）

L2—M3 グリッドに位置する。一部をトレンチに削平されている。不整形を呈する。東西幅は1.46m、深さは11cmである。埋土は一層である。掘り込みは浅く、

底面はやや凹む。

主な出土遺物には、線刻のある土師器壺や須恵器瓶類の口縁部がある。

4. 井戸跡

第1号井戸跡（第231図 図版32上）

K2—S16 グリッドに位置する。円形を呈し、確認面の直径は2.1m、深さは3.2mである。埋土には大きな崩落の痕跡はなく、比較的自然な埋没状況を示している。確認面には多量の礫が分布していた。礫は5層の上面まで含まれていたが、その重なりはまばらである。

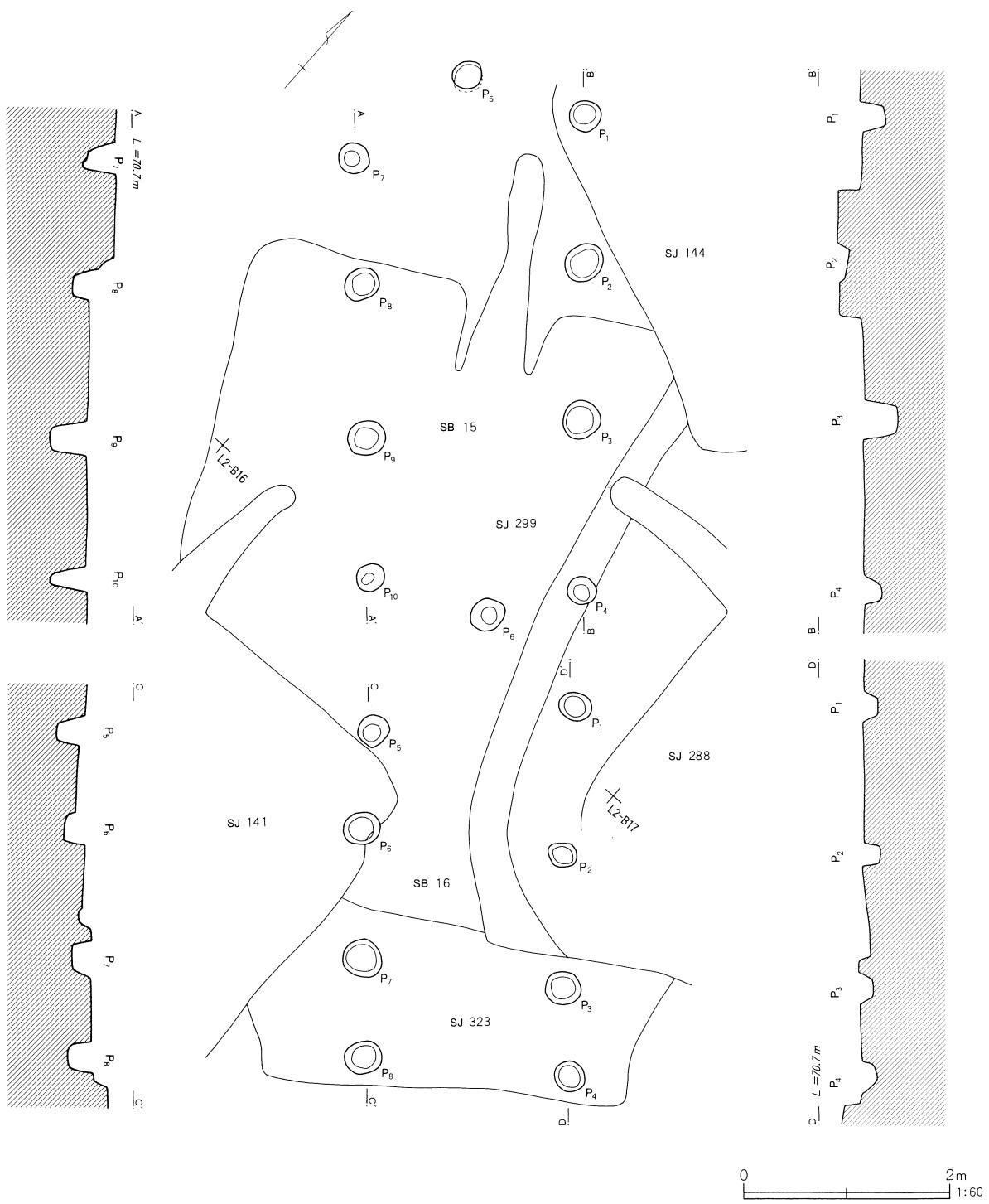
湧水のため、中位から下は重機で掘り上げた。掘り込みは上半がすり鉢状であるが、中位から底面にかけては急な斜面となり、落ち込んでいる。底面の直径は

およそ50cmである。底面近くの埋土（8層）には、自然の木の枝や種子が多く含まれていた。

埋土中からは、土師器、須恵器の破片が少量出土した。図示していないが、土師器や須恵器は鬼高峰期に属し、周辺の遺構と同時期のものである。これらの遺物はすべて上層の埋土から出土しており、流れ込みと考えられる。

井戸跡に伴う遺物としては、上～中層から出土した常滑と片口鉢の破片、および木製品があげられる。木

第230図 第15・16号掘立柱建物跡

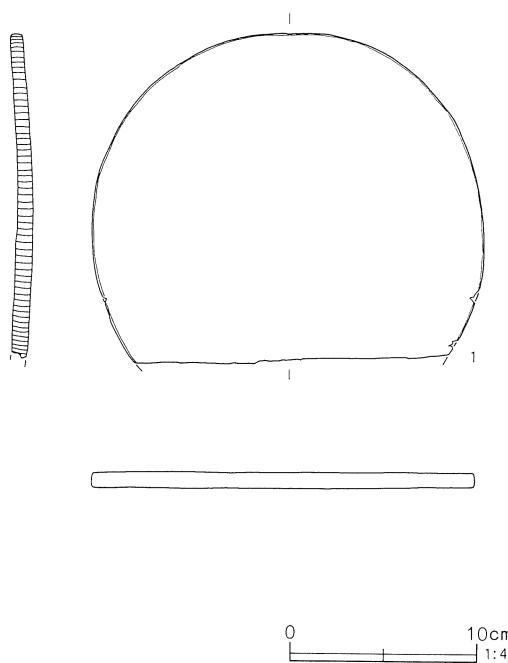
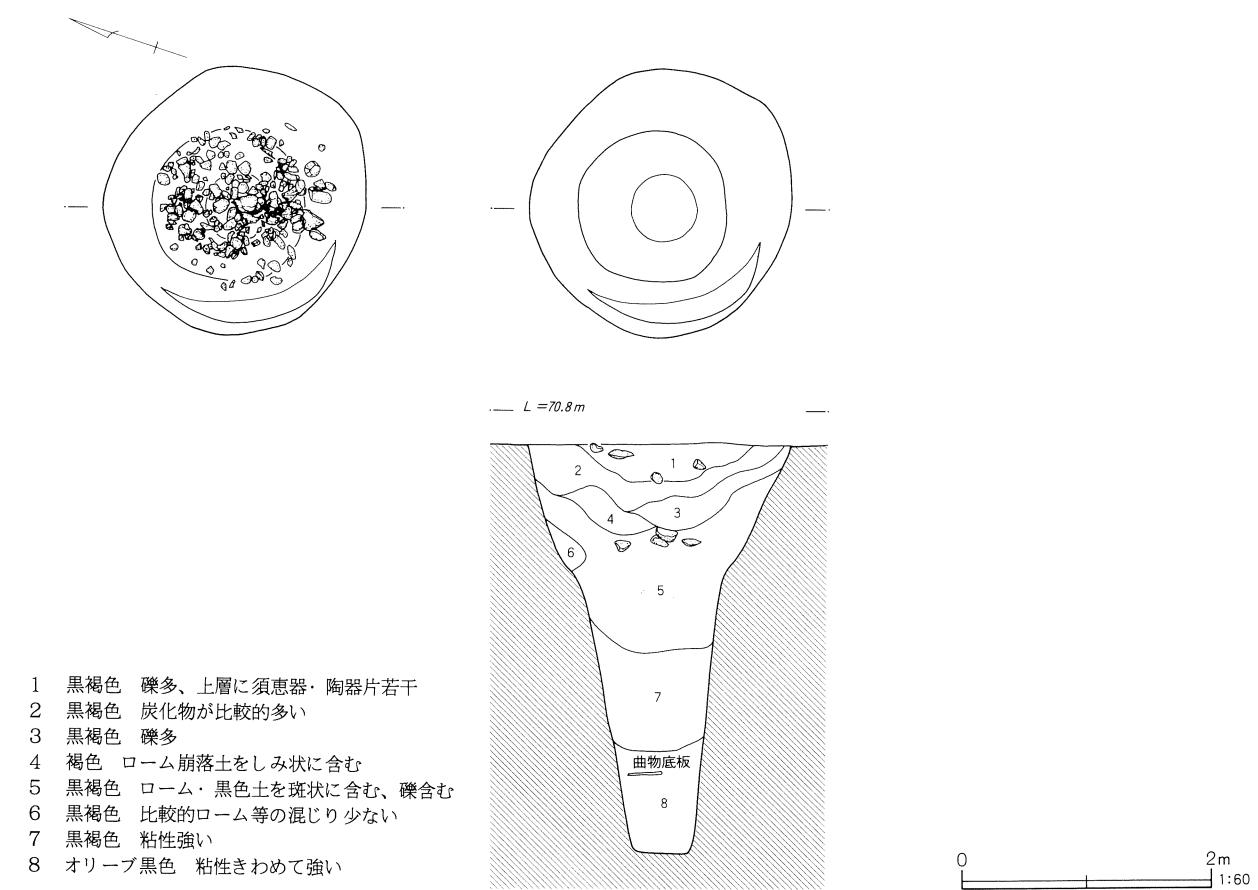


製品は底面から60cm程浮いた高さから、出土したもので、曲げ物の底板と考えられる。

底板は一部破損しているが、直径21cm、厚さは端部で0.7cm、中央で0.8cmである。片側表面には、黒漆の

薄い被膜が部分的に残っている。材の樹種は同定できなかったが、針葉樹であることが確認されている（附編1参照）。

第231図 第1号井戸跡・出土遺物



報告書抄録

ふりがな	いまいかわごえだいせき							
書名	今井川越田遺跡III							
副書名	本庄今井工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告							
卷次	III							
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第191集							
編著者名	瀧瀬芳之							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-01 埼玉県大里郡大里村大字箕輪884				TEL 0493-39-3955			
発行年月日	西暦1997年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
いまいかわごえだいせき 今井川越田遺跡	さいたまけんほんじょうし 埼玉県本庄市大字今井字川越田 ごじゅうよんばんちいちほか 5 4 番地1他	53	177	36°12'58"	139°9'44"	19930401～ 19950331	15,000	工業団地建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
今井川越田遺跡	集落跡	古墳時代後期	竪穴住居跡	112軒	土師器		古墳時代後期の大規模な集落遺跡。道路跡は6世紀代と考えられ、県内では最も古く位置づけられる。河川跡からは祭祀場と考えられる完形土器の集積が検出された。	
			竪穴状遺構	1基	須恵器			
			道路跡	1条	ミニチュア土器			
			土壙	10基	土製品 土錐			
			溝跡	13条	石製品 白玉			
			河川跡	1条	管玉			
					紡錘車			
					木製品 網台目盛板			
					壁板			
					建築材			
					曲物底板			
					金属製品 耳環			
					鉄鎌			
					弓金具			
					鉄斧			
					刀子			
					その他 琥珀玉			

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第191集

本庄市

今井川越田遺跡Ⅲ

本庄今井工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告

—Ⅲ—

〈第1分冊〉

平成9年9月1日 印刷

平成9年9月30日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01 埼玉県大里郡大里村大字箕輪884

電話 0493 (39) 3955

印刷／朝日印刷工業株式会社